
魔法使い達の夢

想 詩拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使い達の夢

【Nコード】

N0483R

【作者名】

想 詩拓

【あらすじ】

魔法バトルもの。魔導文明が栄える世界で人々を脅かす“大災厄”を撲滅するため、一人の魔導士が仲間とともに“大いなる魔法”を目指す物語。

01 『御到着』

誰なのだろう、砂漠のど真ん中という過酷な場所にわざわざ街を作ったのは。

そして、その街にはるばる砂漠を越えて移住してきた物好きは。

砂漠には水がほとんど無い。そして食べ物が無い。

昼間には何に遮られる事もなく全てを焼き尽くさんとばかりに太陽光線が降り注ぎ、夜には一切の熱が何に捕まえられる事も無く空へと放たれ、残されるのは皮肉にも見る余裕が無いきれいな星空、そして昼間の暑さが懐かしくなる寒さのみ。

砂漠では人であろうと、そうで無かろうと強い者しか生きていけない。

その為か、ファトルエルと名付けられたその街には強い者しか集まらなくなった。

そしていつしか、この街は闘う者たちの聖地となり、“決闘の街”と呼ばれるようになった。

「「ようこそファトルエルへ」と、2人の門番が見事に声を揃えて敬礼をする。

敬礼された二人組の男の内の一人は「御苦労さん」と、一言言って、街の中に入っていき、もう一人の男はただだと大粒の汗を流しながら重そうに大きな荷物を持って、その後が続いていく。

荷物を持っていない方は、中年風だが灰色の髪と目、筋肉質な身体を持つ大柄な男で、渋い魅力溢れる男盛り。

もう一人は若者で、栗色の髪とエメラルドグリーン目の背格好は普通、年齢より若く見られるタイプの人間なのか、成人して間もないという感が拭えない青年だった。

青年は敬礼している門番を横目でちらりと見て思った。

(今の門番、絶対俺の事ファルのお付きだと思ったな……)

そんな事を考えながら、青年、リク⇨エールは前を汗一つ掻かずに歩いている男、ファルガール⇨カーンをジロリとにらんだ。

それに気が付いたのか、不意にファルガールが立ち止まり、ちらりと横目でリクの方を振り返る。

その際に睨んだ彼の目と合ってしまった、彼は咄嗟にそっぽを向いてごまかした。

だがやはり遅かったらしい。

「お前も荷物を持って、とでも言いたそうな目だな」

「いえいえ、これも偉大なるファルガール⇨カーン様のお与えくださったヒジョーにありがた〜い苦難ですからねえ」

そうあからさますぎるくらい皮肉めいた口調で答えると、リクは荷物をやや乱暴に砂の上に置いた。そして思いきり伸びをすると周囲を見回した。

ファトルエルの街は丸く高い石の壁に守られている。その壁のおかげで、街の中には影が出来、割と快適な空間になっていた。

その街を十字に大通りが走り、その真ん中にひときわ大きな石造りの建物がある。

「何だ、あれ？」

「有名なファトルエルの大決闘場だ。滅多な事じゃ使えねえ、由緒正しいモンだ。この街にやあと四つ、小さな決闘場がある。定期的にやってる大会はそっちを使うんだ」

「へえ、で、何でファルがそんなこと知ってるんだ？」

「昔に一度来た事がある」

そう答えると、大通りの店で何かを買っていたファルガールは、また歩き出した。

そして歩きながら肩こしに振り返り、慌てて大きな荷物を抱え込んでいるのを見てにやにやしながら言った。

「ほれ、さつさとついてこねえと置いてくぞ」

「ち・く・しょ〜」

大通りを挟む家並みは大切な街の壁や大決闘場と違い、砂を無理矢理固めたような粗末なレンガで出来ている。しかし大通りには大都市並みに人びとの賑わいがあった。

「なあ、ファル。何でこの建物はこんなレンガで出来てんだ？」

「建材をここまで運んで来れねえからな」

確かに、食物やその他の細かい物ならともかく、木材や石材などの重く、大きな建材は砂漠のまん中まで運んでくるのは難しいだろう。

その答えに納得したリクに、また新たな疑問がうまれる。

「じゃ、あの壁とか大決闘場はどうやって作ったんだ？」

「さあな」

「さあな？」

リクは不満そうに眉を潜めた。

「知らねえモンはしょうがねえだろ。それに知らねエのは俺だけじゃねえよ。これは、世界でも有名な謎なんだぜ。誰が、どうやって、何の為に作ったのかってな」と、リクの様子を肩ごしに認めたファルガールは口を尖らせて言い添えた。

「どーせ、何か魔法を使っただら？」

「そう仮定したとして、今同じ事をできる魔導士はいねえらしい」

「昔はいたんじゃないか？」

「いたという証拠が無えんだよ。リク君、世の中には何でも物証しねえと収まらねえ人種があるのだよ」

おどけた調子で答えると、ファルガールは大通りから脇に出ている小路に入っていく。入る前に彼はもう一度リクの方に振り向いて言った。

「余計なモンを見ずにしっかり俺に付いてこいよ。ここからの道は迷宮みてえなモンだからな」

果たして彼の言った事は本当だった。少し歩いているうちにどこを歩いているのかわからなくなる。

何しろ右へ左へ、くねくねと節操なく曲がる道、はっきりした十字路は一つもない。

そしてその道を構成するのはみんな同じような味気ないレンガの家ばかりで、特徴的なものと言えるものがない。

「ファル、何でこんな道を迷いなく歩けるんだ？」

ファルガールは答える代わりに右手にもった地図をひらひらさせてみせた。さつき、大通りの店で買ったものだろう。リクは、ひよっとしてあの店とこの街の設計者はグルなのではないかと疑った。

そして二人はある建物の前に立った。その建物は壁のレンガにこう書かれていた。

『旅宿・バトラー』

「ここに泊まるのか？」

「ああ、昔に来た時もここに泊まったんだ」と、ファルガールは懐かしそうに建物を見上げた。

「……ここ、この街で一番安いんだろ」と、彼は横目でファルガールを見る。

「いやあ、懐かしいねえ、他の宿より数段安い料金表」

ファルガールはしみじみと言った。

中に入ると、いつお迎えが来ても不自然な点が一つも浮き上がってきそうにない、皺だらけの老婆が二人を迎えた。

老婆は二人の顔を確認すると、その目を一杯に見開いた。

「あ、あんたは……」そしてファルガールを指差した。

「ファルガールカーン!?」

「えっ!?」「本当!?」「ファルガールカーン!?」

その声に呼応して、二、三人の皆それなりに歳をくった従業員たちが姿を表し、ファルガールの姿を確認すると。一瞬にしてその顔

は憎悪に染まった。

それに対し、ファルガールは脳天気にも右手を上げて、明るく挨拶した。

「よっ、元気か？ 働く者達よ！」

「なぐにが、働く者よ、じゃっ！」と、老婆はいきなり手にしていたほうきの柄でファルガールに殴り掛かった。

が、ファルガールがそれをひよいと避けると、それはファルガールの真後ろに立っていた、事の展開に驚いているリクの脳天に当たる。持っている荷物のおかげで受ける事も避ける事も出来なかった。

「くおお……！」

リクは両手に抱えていた荷物を取り落とし、頭を押さえてうずくまった。

「ファルツ！ てめー、避けねーで受けやがれ！」

「いやいや、武器は受けた場合に備えて、何か仕込んでる可能性があるからな。今は避けるのが正解だ」

しれつと答えるファルガールだったが、周りは目を丸くしてもう一人の宿泊希望者に注目した。

「ファルガール、あんたの息子かい？」と、老婆が尋ねる。

「弟子だよ。俺にこんなでけえ息子がいてたまるか」

ファルガールが訂正すると、リクに集まる視線は次第に哀れみを含んだものになっていく。

「ファルガールの弟子……ここまでさぞ苦労したんだろうねエ」

皆のファルガールに対する異常な反応にリクはただただ戸惑うばかりだった。

「ファル……あんだここで何かやったのか？」

「別に……」

「何もやってないと言うつもりじゃないだろうねっ!？」

老婆に口を挟まれ、ファルガールはとぼけるように天井を仰ぎ、頬を指先でぼりぼりと搔く。

「相当な事やったんだな……」

「その通りっ!」

ぼつりと漏らしたリクに老婆が過敏に反応し、リクはびくりと体をこわばらせた。

「十五年前、この建物はこのファルガールに崩壊させられてしまったんだよ!」

「しかもどさくさにまぎれて宿代は払わなかった!」

「おかげで私達はこの厳しい砂漠で苦難をしいられ……」

ここから従業員達による聞くも哀れな苦労話が続く。

「あんた宿代が一番安いつて言っておきながら結局その安い宿賃も払わなかったのか……」と、リクは呆れ果てた目つきでファルガールを見た。

「いや、建物の修復で忙しそうだったから邪魔しちゃ悪いと思ってよ」

だつたら魔法でも使つて手伝つてやればよかつたのに、とリクは言い返そうと思つたが、止めた。

なんだか無駄なような気がしたし、下手をすればまた従業員の哀れな苦勞話を聞かなければならなくなる。

「なあ、オウナ、オキナはどこに行つた？」

「ああ、じいさんならいつものトコだよ」

老婆、オウナは答えると、いつの間に用意したのかファルガールに鍵を突き出した。

「部屋は二階の奥だよ。知つてると思うけど……」

「雨が降つたら荷物持つて避難しろ、だろ？」

「何だそれ？」

訳の分からない会話にリクが首をかしげた。

「ここのレンガは水に弱えんだ。ちよつとした雨で全壊しちゃう」「ま、滅多に降らないけどね。さ、上がった、上がった。いつまでもそんなところにいられると次のお客さんを迎えられないじゃないか」

オウナが言い添えて促す。

ファルガールは何か言いたそうに口をモゴモゴさせていたが、リクは彼が何を言わんとしてしているかよく分かつた。

（こんな穴場にもなつてねーよーなところに客は来ないよなー、普通）

しかし、彼もやはり口には出せなかった。

部屋に着くと、リクはやっとこさ荷物を下ろし、頭からベッドに飛び込んだ。

その瞬間に彼は「痛っ！」と、短い悲鳴を上げた。そして額を押さえながら起き上がる。

「な、何だこのベッド!？」

リクは布団の角をもって少しめくる。

このベッドはレンガを積んで薄いシーツを敷いた形ばかりのものだった。

こんなものに頭から突っ込んでいったと考えると、リクの額は余計に痛くなった。

「野宿続きだったから楽しみにしてたのに……」

ファルガールは額を押さえながら残念そうにしているリクを見て、にやにやと笑みを浮かべながら、リクが置いた荷物を探り、いくつかの小物を懐にしまった。

そしてもう一つ、古ぼけた風呂敷のようなものを出して床に敷いた。

それには複雑な魔法陣が描かれている。

「お前も“引き返しの陣”敷いとけよ。いつ迷って帰れなくなるか

わからねえからな」

ファルガールはリクが彼の言う事に従ってその通りにするのを見届けると、ドアのノブに手を掛けた。

「じゃ、行くか」

「え、もう出るのか？」

ずっと荷物を持っていたリクは、もう少しここで休憩して行きかけたが、ファルガールがさっさと部屋を出て行ってしまったので慌ててそれを追い掛けた。

02 『オキナ』

粗末なレンガで建てられた建物達、その中に入っているのは魔導文明の生んだ利器。

そんなギャップがファトルエル街の大きな特徴。

日進月歩の外の世界に隔絶され、ひらすら異色を走るこの街にはそんな大きな特徴をいくつも見る事ができる。

その代表たるものが決闘。

お互いに顔きあい、何かを決するが為にひたすら闘う。

愛する人の為、家族の為、名声の為、ただ単に暴れるが為。

人によって理由は様々だが、本物のファトルエルの民は闘って生きて行く。

「汝、《砂の戒め》によりて縛られよ！」

砂が舞い上がり、その男の足首に、手首に絡み付いた。

その男の相手はすかさず次の魔法の詠唱に移る。

「燃え立ち上がれ……」

動けない男の足下に赤く小さな円ができる。

「《火柱》！！」

唱え終わると、その円は赤い輝きを一瞬放ち、次の瞬間、円の中

にあつたものは全て空高く燃え上がった炎に包み込まれる。

「うああああ！」

砂に捕まつて、魔法を避ける事も出来なかつたその男は炎のうちから断末魔の叫びを上げた。

十秒ほどその炎は燃え続け、それが収まった時にはその男は黒焦げになっていた。

観客の中から、賞賛の声、感嘆の声が上がる。

そのどちらも発していないものはその惨澹たる光景に目を背けていた。

否、そのどちらでもない者もいた。リクとファルガールもそのうちの二人である。

「あれ……ホントに殺したのか？」

「ああ、生きちゃいねえだろうな」と、答えるファルガールは涼しい目で人の形をした黒焦げを見ている。

「この街じゃこうやってみんなの前で決闘した場合、殺しても罪にやならねえんだ」

ファルガールが説明している間に、どこからかこの街の門番と同じ格好をした者たちが大きな袋を持って現れ、手慣れた手付きで、死体を袋に詰めて持って行く。

「あいつらってどういう団体なんだ？」

「カンファータのファトルエル常駐兵だろうな。ファトルエルはこうやってほとんど干渉を受けずにいるが、一応あの王国の領土内なんだな。今回の大……と」

ファルガールが慌てて口を嚙む。
しかし、リクはそれを聞き逃さなかった。

「今回の大……？」

だが、ファルガールはあっさりとし、話題を変えた。

「それよりリク。俺はちとヤボ用がある。だからしばらく一人でこの街の見物でもしてくれ。日が暮れたらこの酒場で落ち合おう」と、先程、その玄関先で決闘をやっていた酒場を指差す。

「え？ 何でだよ、一緒に行きやいいじゃねーか」

「ま、お前もたまにや一人で遊びてえんじゃねえかって、俺の温かい気配りだよ」

リクは瞬間的に嘘だと感じた。基本的にファルガールという人物は気配りというものには縁がないからだ。

だからといって、リクを放って自分だけいい思いをしようとする事もない。

そして、ファルガールは十五年前、ここに来た事があるという。そういった事から考えて、リクは一つの答えに行き着いた。

(何か、隠してるんだな)

思考に耽るリクに小さな袋が手渡された。

「……何だこれ？」

中身を覗いてみると、それは金だった。しかも相当な額の。

「……何だ……これ？」

「俺による温か〜い気配り第二弾、小遣いだ。全部使っていいぞ」

頭の中に衝撃が走った。

常人には手に負えないクリーチャーや、賞金首などを退治して、路銀には事欠いた事はなかったが、ファルガールが金をリクに渡した事は一度もない。

リクの中で疑惑が一層大きくなった。

「じゃ、楽しんでこいよ」と、ファルガールは言い添えて、ぽかんとつつ立っているリクをおいて、雑踏の中へと姿を消す。

その瞬間、彼もファルガールを追って足を踏み出した。

(逃がしてたまるか……！)

オキナにおけるいつものところ、とは大決闘場だった。

小さくなってしまった背中を丸め、観客席に座って、目の掛からないように後ろで縛った白髪を風になびかせ、時々眼鏡を掛け直しながら静かに本を読んでいる。

大決闘場は滅多な事では使われないが、一応開放はされており、風情ある石造りの建物は、静かな憩いの場として最適な場所だった。

突然読んでいる本に影が差す。

顔をしかめながらオキナが振り向くと、そこには薄く笑みを浮かべたファルガールが立っていた。

「やれやれ、あんたって男は飽きるという事を知らねえんだな」
「ファルガール」カーン!?」

驚きの声と共にオキナは本を取り落として立ち上がった。そしてその驚きは喜びにとって変わり、オキナはその小さな体を目一杯伸ばして、巨漢のファルガールの肩を抱く。

「十五年振り…か、元気にしてたかね？」

「ああ。あんたも元気そうで何よりだ」

ファルガールが答えると、オキナは取り落とした本を拾う。

「しかし、何しにここに帰ってきたんだね？ まさか今さら大会に出るわけじゃなからう」

「当たり前だ。あんな大会に二度出るほど俺は血に飢えちゃいねえよ。……ちよつとあんたの話を聞きたくてな」

「私の話？」

聞き返して、オキナは手に持った本を軽く持ち上げてみせる。

「私の話といえばこれしかないぞ」

ファルガールは頷いた。

「それでいいんだ」

それを聞いてオキナは目を丸くした。

「いったいどういった風の吹き回しだね？ 十五年前はあまり理解しようともせず、ただ激励していた」

「心はコロコロ変わるから心つてところでどうだ？」

「ハハハ、そんなのはどうでもいい。私の話を聞いてくれる人が現れたんだからね」と、オキナは嬉々として、自分の隣にファルガールを座らせる。

「しかし何の為にだね？ 君は何かをする時は必ず目標を持っているが」

それはかなり核心を突いた指摘だったらしい。ファルガールは、大決闘場のバトルフィールドを見つめたまましばらく答えなかった。

「……“ラスファクト”の為に。あなたには申し訳ねえが」

「研究所の命令でか？」

ファルガールは首を横に降った。

「いいや。研究所は十二年前に辞めた」

「辞めた？ 何故？」

「嫌気が差してたところにハマやつちまってな」

ラスファクトと聞いて、いささか興奮していたオキナは遠い目をして答えるファルガールをみて、落ち着きを取り戻した。

「研究所の為ではないというなら何故ラスファクトを？」

「“大いなる魔法”と闘う為だ」

「何！？」

オキナが驚くのは至極当然の事である。“大いなる魔法”は神の使う魔法だと言われている。それと闘うという事は神に鋒先を向けるも同然の事なのだ。

しかも、ファルガールはこの手の冗談を言う男ではないのだから

なおさらだった。

「敵と闘う為には敵の事を知る必要があるんだ。あんた十五年前に言ったはずだぜ。“ラスファクト”は星の産物なんだ、そして“大いなる魔法”も同じく星の産物なんだってな」
「ファルガール……」

彼の目を覗き込んだ時、オキナは悟った。自分がその強い意志を放つファルガールの瞳には逆らえそうもない事を。

「……分かった。君に話すには少し今までの研究を整理する必要がある。明日の夜まで時間をくれないかね」

03 『コーダのサンリ便』

大抵の動物は楽な道があればそこを進む。

他の動物だと楽な道とそうでない道の落差はほとんどないが、人間の場合はそれが顕著にあらわれる。

文明が進むにつれてその差は大きくなる。

人間には敢えて苦の道を選ぶ者もいるが、それに対する楽な道を選んだ人間達の反応は二つだ。

賞賛するか、妬み、馬鹿にするか。

楽な道を選ぶ者は賢い。その場を凌ぐものとしては。苦の道を選ぶ者は馬鹿だ。その場を凌ぐものとしては。

しかし後に偉いといわれるのは大抵後者だ。

たまにでいい。人は敢えて苦しい道を選ぶべきだ。

「ハア……」と、リクはため息をつきながら大通りを歩いていた。

ファルガールの隠し事を見抜こうと後を追った彼であるが、あれから一度もファルガールの姿を捕らえる事は出来なかった。

何か策をもって捲かれた訳でもないのに、一瞬もせずに彼は目標を見失ってしまったのである。これで自分を情けなく思わなくてど

うしよう。

彼の気分とは裏腹に、ファトルエルの大通りは賑やかだった。親子に兄弟、恋人、友達。様々な人間が往来する中、魔法で操られ、広い背中に大きな木箱を背負い、運搬サソリがそのけそこのけと通って行く。

よくも好き好んでこんな砂漠のど真ん中に来られたものだ、とりくは思う。

最寄りだと言われる砂漠東端の街、ウエシトを出て一週間。

重い荷物を持ち、昼は灼熱、夜は極寒、快晴時々砂荒らしの厳しい環境を、彼は死ぬ思いでぐり抜けてきた。

ファルガールは、こういった自然をぐり抜けてやっと辿り着くからこそ、ファトルエルには強い者しか住めないのだ、と言っていた。

しかしこの人間達全てが、砂漠の試練を乗り越えてきたツワモノ達なのだろうか。ふとりくは疑問に思う。傍らをすれ違った幼児をちらりと見る。

（人は見かけに寄らねーとは言うが、まさかこの子は違うよなあ）

子供だけではない。見かけで判断すると大半の人間が、この砂漠を渡れるような屈強な者には見えない。

実は見かけで言うと、リクもやはり屈強そうに見えないが、この時彼の思考の中にはその点は浮かんでこなかった。

（けど、能ある鷹は爪隠すって言うからなあ）

不意にその疑問は氷解した。

彼の前方で、先ほど彼を後ろから追い抜いて行った運搬サソリが

止まっている。

その横腹には別に積んでいた木製の小さな階段が取り付けられ、それを踏んで、木箱から人間が降りてきている。

そして全ての人間が降りきった後、御者席に座っていた運搬サソリの主が、降りて、餌をやるだの、水をやるだのやっている。

傍まで行った後、そこに立っている看板を見る。

(『コーダのサソリ便乗り場』……サソリ便……?)

サソリを見上げる。さつき木箱だと思った部分には窓が付いており、その中には客が座る為であろう長椅子、その屋根には客の荷物をのせる為の荷台が設置されていた。

サソリの脇にはバケツに入った水と布を使って殻を磨いている男がいた。白髪に褐色の肌、全身をゆったりと薄い布地の服が包んでいる、砂漠に適応した格好が印象的だ。歳はリクより少し上か。

おそらくこの男がコーダなのだろう。

ぼかんとそれを眺めていると、男がリクに話し掛けてきた。

「ちよいと兄さん、次の便のレンス行きに乗るつもりなら少し街を歩くなりして待っててくれやさか？ 運搬サソリは生き物だから休ませないといけないんす」

「レンス行き？ レンスまでサソリに乗って行くのか？」

レンスはウエシトの反対側、つまり砂漠の西端にある街だ。ウエシト〜ファトルエル間よりずっと長い距離がある。

「ああ、兄さんサソリ便は初めてなんすか……って、じゃあ、一体どうやって砂漠越えてきたんす？」

「歩いてだけど？」と、コーダが驚いたのを意外に感じながらリク

は答えた。

それを聞いた途端、コーダは笑い出した。

「はっはっは！ 兄さん冗談が上手いスね」

「いや嘘じゃねーよ」

「はっはっは、今はサソリ便があるのにわざわざ歩いてくる奴はいないスよ」

リクが否定しても、コーダは信じた様子は微塵も見せない。

「……今はみんなこのサソリに乗ってやってくるのか？」

「そうスよん。二日で着くし、ずっと安全でやんす。もつとも王様なんかは腕のいい魔導士を抱えて、一気にテレポートして来るらしいスけど」

(……それじゃ何か？ 俺が生と死の狭間を彷徨ってた時にこいつらは快適な砂漠ドライブを楽しみながら快適に安全にやってきたってか？)

つまり、彼はファルガールに騙されたという事だ。

一瞬、リクは目の前が暗くなった。

もしバレたとしても、ファルガールははぐらかすか何かして、彼は結局砂漠を歩く羽目になったと思うが。

その間に、コーダは全ての仕事をやり終え、御者席に着いていた。

「ようし、兄さん乗るなら乗りやんせ。出発まではまだちよいと時間はあるやスけどね」

「もう？ サソリを休ませるって言ってた割には短くねーか？」

リクの問いにコーダは、自分の運搬サソリを愛おしむように見下ろして答えた。

「ああ、俺も可哀想には思いやすけどね、今が稼ぎ時なんス」
「稼ぎ時？ 祭りでもあんのか？」

リクが聞き返すとコーダは呆れたようにため息をついた。

「……兄さんあんたホントに何も知らないんスね」
「連れが何も教えてくれなかったんだよ」と、リクがぶっきらぼうに答える。

「ファトルエルの決闘大会スよ！ 明後日に開かれる、五年に一度腕に覚えのある奴等がこの街に集まって、何でも有りのサバイバル形式で闘い抜く大会なんス。それで残り二人になったら、あの大決闘場を使って決勝戦をするんスよん」
「それって誰でも参加できるのか？」

リクは、手を広げて得意げに説明するコーダに尋ねた。
コーダはリクをまじまじと見て、苦笑する。

「ああ。でも止めといた方がいいスよん。死んでも文句は言えやせんからね。余程自信のある奴じゃない限り参加はしないツス」
「そっか。いろいろありがとな」

リクがお礼を言うと、コーダは人の良さそうな顔に笑みを浮かべて、答えた。

「いやいや、その代わりといっちゃ何スけど、この街を出る時は俺

のサソリに乗りやんせ」

「連れ次第だけど一応頼んでみるよ」

リクもあの砂漠の中を再び通って行くのはあまり望ましい事ではない。

が、リクの望みは、大抵叶わない。

それどころか、一番望まない形こそ一番実現しやすい。知ってか知らずか……否、知ってやっているに決まっている、とリクは確信している。

コーダと別れた後、さてどうしようか、と考えた。

日暮れに会うという約束だったが、まだずいぶん日は高い。

リクはあまり一人になった事はなく、また一人になっても留守番かお使いだった。

こんな風に自由な状態で一人、というのは初めての事なので、何をすればいいのかわからない。

「……つたく、先に言っといってくればやりたい事考えられたのに……」

ぶつぶつ呟きながら歩いているうちに、リクはもらった金の事を思い出した。

随分重さのあるそれを目の高さに持ち上げて呟いた。

「全部使っていいと言ってたよな……」

04 『再会・マーシア』

酒はいろいろな目的で飲まれる。

本当の感情を引き出してくれるからだ。

人の本音はしばしば他人を傷つける。

だから人は普段本音を表に出さない。

だが人間もやはり動物、真の自分を表に出したい事もある。

嬉しい時には祝い酒、悲しい時には忘れ酒、酒を飲めば無礼講。

酒は人に自分を受け入れさせる。

棘のある本音を柔らかい膜で包み込んで。

しかし気を付けた方がいい。

その膜は時に人の心を荒れさせてしまうから。

「いらっしゃい」

慣れた挨拶で薄暗い店のカウンターの中で店主がその客を迎える。

「準備中……じゃねえよな？」と、その客、ファルガールは店内を見回して言った。

そう思うのは仕方がないほど、店内には誰もいなかった。

奥はカウンターになっており、人二人通れる奥への通路の両脇に

二つずつ、やはり砂のレンガでできた丸テーブルが置かれていた。それぞれ四つずつ周りに座る為の空樽が置いてある。座っている者は誰もいなかった。

「さつき、店先で決闘があつたんですよ。知ってます？」

「ああ、見てたよ」と、答えながらファルガールはカウンターの席に座る。

「その前の前哨戦を店内でやられましてね。今まで店閉めて片付けてたんですよ。やっと再開出来たところですよ」

「そりゃ災難だったな。だが、決闘のとばっちり覚悟の上だろうか？」

店主はこっくりと頷いて、尋ねた。

「何にします？」

「カルにしよう」

その注文に店主は眉を潜めた。

カルという酒はあるにはあるが、ただ安く、ただ強いだけで、あまり旨いとは言えないし、同じ値段でもっと旨い酒はたくさんある。しかもカルはあまり知られていない酒なので、注文する者は滅多にいない。もっぱらカクテルの一材料として他の酒と混ぜて強くするのに使われる。

しかし注文を受けた以上、出さないわけにはいかない。

一応、確認をしてそれからボトルをとって、グラスに注ぐ。

「どござ」

ファルガールはそれを受け取ると、目の高さに持ち上げて窓から入って来る淡い光にかざす。その酒を通した世界はセピア色だ。

それを少しの間眺めると、一口、口に含む。

その時、唐突に、だが静かに扉が開いた。

そして女性が入ってくる。高い背に複雑に編んだ黒い髪、紫色の瞳と薔薇のように赤い唇が妖艶な印象を与える美女だ。

「いらつしゃい」

ファルガールの時と同じ店主の挨拶。

ファルガールはそこからカウンターに歩いてきたが、彼女はそうしなかった。他の席に付いたわけではない。

そこから動かなかつたのだ。

反射的に振り向いたファルガールと目が合った瞬間から。

その美女、マーシア「ミスターシャは微笑みをその顔に浮かべ、ゆっくりとカウンターに歩いてくる。」

「隣、いいかしら？」

「……ああ」

マーシアは、やはりゆっくりとした動きでファルガールの隣に座ると、店主にフレスニーを注文した。

そしてカウンターに体重を掛け、ファルガールの顔を覗き込む。

「久しぶりね、ファルガール。最後に手紙をくれてから十年。あなたは一体どこで何をしていたのかしら？」

「十年？」

問われたファルガールはしばし指折り数える。

「ああ、もうそんなになるのか」

そして、彼はカルを一気に飲み干した。
それを見た店主は目を丸くして驚いた。

何しろカルの強さと来たらどんなに酒の強い人間でもそうそう一口以上は飲めるものではない。

以前も自分のうわばみ振りを見せる為にカルを一気飲みしようとした無謀な客がいたが、結局その場で卒倒してしまった。

しかしファルガールは平気な顔で、「おかわり」と、グラスを突き出してくる。

「お酒の好み、変わったのね」

ファルガールが少し視線を動かし、二人の視線が重なる。

ファルガールはしばらく彼女の瞳を見つめていたが、店主に酒を差し出されるとすぐに視線を外した。

そして二人はかちんとグラスを合わせた。

「お前も変わったみてえだな」

「あら、どんな風に？」

「そうだな」と、ファルガールは思考を巡らし、表現する言葉を探す。

「まず、色気が少し抜けたな。それに前からお転婆だったわけじゃねえが、やけに落ちて着いてやがる。年を取ったからか？」

「そうかしら、どっちにしても女性に色気が無くなったとか、年をとったなんて失礼ね」と、マーシアが口をへの字に曲げて見せる。

そんな彼女に、ファルガールは笑い声を上げた。

「違いねえ。でも色気だけの女つてのは好かねえよ。カルクの野郎はどうしてる？」

「学校の中はいろいろ変わったけど、あの人だけよ。変わってない

のは
「……だろうな」

ファルガールはグラスを持ち上げ、それに透かしてマーシアを見た。

セピア色の世界の彼女は、彼に十三年前を思い起こさせる。

**

十三年前のある日。

それよりさらに二年前、つまり今から十五年前にファトルエルの大会で優勝したファルガールはその実力を買われて、魔導研究所の施設の一つである魔導士養成学校の教師をしていた。

しかし教育方針は各教師にはまかされない。学校の決めた方針に従って修行カリキュラムをこなさねばならない。

その修行カリキュラムの狙いを生徒に伝える事、生徒ごとに成績をつける事が教師の仕事だった。

だが、その修行カリキュラムは全員全く同じカリキュラムである。ファルガールは個人によって適した修行スタイルがあるというのが持論だったので、もちろん学校側とは即、折り合いが悪くなった。

ファルガールは学校側の指示を全て無視し、自分の持っている生徒達一人一人に別々の修行カリキュラムを考えてやって、生徒を指導していった。

ファルガールの生徒達はどんどん強くなっていった。それが教師・ファルガールの命綱である事実だった。このままだと、学校側は考えを直さなくてはならない。

ファルガールの指導方法は、実は前から考えだされていた事なのだが、生徒一人一人、別々の修行カリキュラムを考えるのは非常に手間のかかる事である。

その上、彼の提案に従って、教育方針を変えると、刃向かってきたファルガールに全面降伏するという、学校側の面子に関わる事になるので、学校側は先ずファルガール潰しに本格的に乗り出した。修行場に罠を仕掛け、生徒に傷を追わせたのだ。

学校は生徒の怪我を理由に、ここぞとばかりにファルガールを責め立てた。

そしてファルガールは教師の職を追われる事になった。

学校長室のドアを閉めて出てきたファルガールにマーシアが駆け寄った。

が、ファルガールはそんな彼女に何も言おうとせず、ただすれ違おうとした。

マーシアはすれ違い様に振り返って言った。

「辞めるの？」

「ああ。何でも責任てヤツを取らなきゃならねえらしい」

その言葉は鋭い棘が突き出し、これ以上ないまでに侮蔑が込められていた。

「でもあれは罠だって分かり切ってるじゃない」

「罠だった、なんて連中が言うはずねえだろ。安全確認を怠った俺の責任だよ。それにこれ以上続けるなんてこっちから願い下げだ」

それだけ言うと、ファルガールはまた歩き始めた。もうここには一分一秒でもいたくない、とでも言うように。

そしてまたピタリと足をとめた。

「どうしたの？」

マーシアに尋ねられたが、ファルガールはしばらく間を置き、彼女に背を向けたまま答えはじめた。

「マーシア、俺はな、子供の頃からファトルエルで優勝するのが夢だった」

「……？」

何が言いたいのかわからず、マーシアは黙って首をかしげる。

「夢を叶えるつてのは残酷なモンだよな。それからする事が無くなつちまった。で、取り敢えず、やってきた教師の話に乗った訳だ。俺はしばらく子供に魔導を教えていた。それで、そいつらがどんどん強くなるのが目に見えて、魔導を教えるのが楽しくなってきた。それで、もう一個、夢を持つようになった」

「へえ、何かしら？」

マーシアはそれを話している間に、言葉には棘が無くなり、ファルガールの雰囲気若干柔らかくなってきていることを見のがさなかった。

「俺の育てた魔導士がファトルエルの大会で優勝する事だ。だから俺は、魔導の理論について勉強し直して、どう育てたらいいかと考えるようになった。で、御存じの通りの今の俺の持論に行き着いた訳だが、ここじゃどうもそれは出来ねエらしい」

ファルガールの言葉に再び棘が出てきた。

「だから俺はここを出ていく。他で、生徒を見つけて、俺のやり方で育てて、ファトルエルで優勝させる。……そうだな、一、三年は生徒探しに使うとして、育てるのに十年は欲しいな。そう、十三年後の大会あたりには一度挑戦してみる」

マーシアはそれ以上、何も聞いたり、言ったりしなかった。一緒に歩いていく内に、二人の距離が離れ、やがて彼女は足をとめて、ファルガールの背中を見送った。

学校の入り口のところには待ち伏せていたようにカルク「ジーマンが立っていた。

「どうしても行くのか？」

ぶつきらぼうに、そして率直に訪ねる。
ファルガールは一瞬立ち止まって答えた。

「ああ。俺はお前みたいに器用じゃねえからな。ここの水には合わねえよ」

実はカルクもファルガールのとっていた一人一人、個別に指導方針を考えるやり方をとっていた。

ただし、彼の場合、その事を隠し、見えるところでは非効率である事は分かっていたが、学校側の考えたカリキュラムをこなしていたので、学校側に睨まれる事はなかった。

「少しの間我慢をしてくれれば、学校側と掛け合ってこれを正式な

方針にしてみせる」

「無理だな。俺やお前、マーシアはともかく、他の面倒臭がりな納得しねえよ」

「それは一人の教師に十人も生徒がついているからだ。マンツーマンでやれば、むしろ今までより遥かに楽になる。これならみんな納得するだろう。だから……」と、カルクは言いかけたが、止めた。

ファルガールの様子は全く変わらない。つまり、その気は全くない、ということだ。

「すまねえな。そうなっても俺の気持ちは変わらねえよ。元々所にジツとしてるタイプじゃねえんだ」

そして彼は清々しい顔で魔導研究所の建物を見上げた。

「しかしここでは二年もった、我ながらよくいられたと思うぜ」

「ファルガール……」

「じゃ、見送りありがとよ。マーシアにはよろしく言っておいてくれ。たまにだが、手紙書くってな」

そしてファルガールは魔導研究所に背を向け、二度と振り返る事もなく去った。

からり、というグラスの中の氷の音が、ファルガールを現実に戻

す。彼はグラスのカルをぐいつ、と飲み干し、呟いた。

「相変わらず不味い酒だ」

店主がぴくりと表情を変える。

だが、ファルガールは他のどんな鮮やかな酒の色よりカルのセピア色が一番好きだった。

05 『口の利けない少女』

ある世界では深刻なデフレが進行している。
生き残りを賭けた価格争いの産物だ。

店によって値段が違うのは常識だ。

何故値段が違うのか。

質を落として薄利多売、質を高めてそのままの価格で。

経営方針、仕入れの方法など、様々な要素が入って来る。

そして、広い世界にはこんなところもあってもおかしくない。

ファルガールがマーシアと再会しているその頃、もらった金を使
ってやるうとファトルエルの街のある店に入ったリクは言葉を失
っていた。

その視線は店のおちこちに巡らされていたが、その先はどれも品
物の値段だった。

高い。余りにも高い。

リクは今までファルガールと旅をしてきて数々のぼったくり商店
を見てきた経験がある。

中にはひどい店があり、普通の二倍の値で売っており、本当にこ
れで騙されて買うやつがいるのか、と思わず疑ったものだ。

それらの全てが霞み、可愛く見える。

普通の値段の、どう見積もっても五倍だ。

「おやじ、これ桁間違えてねーか？」

「全然」と、素っ気無く答えたこの店の店主はカウンターの奥で、やる気無さそうに本を読んでいる。

「ちよつと値下げする気、ない？」

「無い」

即答。しかも本から目を放していない。

「じゃあ、他の店行って買っぞ。いいんだな？」

「……………」

今度は答えさええない。リクは頭に来て、本当にその店を飛び出して行った。と、思ったら、すぐにまた入ってきた。

彼は真直ぐカウンターへ早足で歩み寄ると、そこに腕を立て、身を取り出して店主に言った。

「おい、あんた商人だろ。商売根性ってモンはねーのか!？」

「全然」

またも素っ気無い即答。

しかし答えた後、店主は読んでいる本にしおりを挟み、ため息を尽きながらリクの方を見た。

「あんた、この町は初めてなんだな」

「ん？ ああ」

「サービスだ。他の店探して無駄足踏まないように、この町での商人のルールを覚えておいてやる」

「商人のルール？」

「大きく二つだ」と、店主は二本指を立てた腕をぐいっとリクの方に突き出した。「一つ、値は絶対に下げない。一つ、他の店と同じ品物を置かない。」

「そりやまたどうして？」

質問を重ねるリクに、店主は大きなため息をついた。

さっきまで本から目を放さず、応対していた程の面倒臭がりだ。

このサービスだって、実はさつさと品を売ってリクを追っ払いたい一心でやった事、それが裏目に出たのだから、このため息はとてつもない負の感情が込められていた。

「値段が高いからだ。他の店が同じ物売るようになって、競争になつたら、商売にならないくらい安くなる。値段は高いがこれが最低の値段なんだよ。」

「じゃ、なんで値段を高くしなきゃいけないんだ？」

「たくさんの人間の手を渡ってるからだよ。最低でも最寄りの町で仕入れる奴、砂漠の途中まで運ぶ奴、それを受け継いでここまで運んでくる奴、この街で売る奴。全部で四人いるんだ。しかもこの町人は元々少ない。売り上げで生活しようと思つたらここまで高くしなくちゃならないんだ。」

「なる程なあ……。」

ようやく全てに納得し終えた様子を見せるリクに店主は疲れからのため息を付いた。

そこにリクが追い討ちを駆けるように話し掛けた。

「でもこの話って、高く売る為の方便じゃないよな？」

店主がとうとうキレた。

「なんで俺がそんなすぐバレそうなウソをつかなきゃならんのだっ
！ 疑うなら他の店で調べて出直してきやがれ！ それが嫌なら品
物買って、とつとと失せる！」

店主の剣幕に押されたリクは、慌てて店を飛び出した。

**

「……短気な店員だな。さすがファトルエル。店一つとってもマト
モじゃねーや」と、大通りに出たリクは店を振り返ってぼやいた。
そして空を仰ぐ。

（まだ明るいな……。まあいい、大通りをぶらぶらしてりや時間も
経つだろうし、早めに着いちまっても何か食いながら待とう。腹減
ったし）

くどいようだが、大通りは人通りが多い。歩きながら周りを観察
してみるとなかなか面白い。

品物を値切ろうと声を張り上げて粘っている人間、母親相手にね
だっている子供、さつき見たものとは違う、観客のいない、レベル
の低い決闘。

決闘大会に備えてだろうか、やたら大きな剣を買い込んで持ち上
げられず、引きずっている戦士風の男。

決闘に負けたのかサソリにさされたのか、担架に乗せられて診療
所に運び込まれる者。

（ただでさえ物価高いんだから、あの人後でとんでもない額を請求

されるんだろつな)

彼が請求書を見た途端に、實際怪我をした時とは比べ物にならないほどの叫び声をあげる事は想像に難くない。

血の気の多い街らしく、もう一つ担架に乗せられた男がこちらに向かつてくる。

ただしこちらは少し様子が違った。

担架の上の男は縛り付けられており、唯一動く首をもげそうなくらい大きく激しく振り動かしながら絶叫している。

「止めるお……！ 治療するのは止めてくれえ……！ 死んでもいいから、な？ 頼むよお……！ 今苦しいんだよお……！ この街で借金したらお終いなんだあ……！」

だが、そんな事はお構い無しに、担架は診療所に運ばれて行く。

彼の懇願する声は中に入っても聞こえてきた。

その哀れみを誘う声を聞いてリクは死んでもこの街で怪我はすまい、と決意した。

カップルの姿も頻繁に見かけた。

先ず見かけたのはこの街のタダでさえ高い物価の中で、更に高そうな物を男に貢がせている女。

今まで買ったであろう、その荷物は両手では抱えきれないくらいに多くなっている。

肉体的、精神的、そして何よりも経済的にげっそりしている男に向かつて女は言う。

「このくらいで何よ！ 私は大通りの店を全部制覇したいのよ！」

(この大通りの店を全部……!?)

リクは彼等の向かう方向を振り返ってみたが、ここからではまだゴールは見えない。

今、あの男の目にはこの大通りが果てしなき道のように思えている事だろう。

また、人に囲まれて見物されているカップルもいた。

カップルで揃って大道芸でもやっているのかと思いきや、カップルでの決闘だった。

しかも女はローリングソバットやかかと落とし等、華麗な技を男に決め、拍手喝采を浴びている。

(どーもさつきから女が強いカップルしか見ねーな。男の強いカップルはいないのか?)

男は本質的にあまり買い物を好まない為か、男の強いカップルは商店街の大通りには出てこない。

そのかわり、互角、というか男と女が対等の立場にあるカップルならいた。

だが、リクはその類いのカップルは一瞬見かけるとほとんど観察せずに、他に目を移した。何となく腹立たしい上、喧嘩が大っぴらに行われるオープンな街の雰囲気も反映してか、公衆の面前で抱き合ったり、キスしたりしているバカップルもよく見かけるからだ。

まだカップルではない者達もいた。つまり、出会いを求めている者達である。

愛想笑いを浮かべながら同族の臭いがする女性に近付き、声を掛ける。

彼女達はわざとらしくもじもじしながら友達とどうしようか答えの決まっている話し合いをする。

リクはまだ異性というものをあまり特別に意識した事がないため、彼等の気持ちをあまり理解できない。

また、あまり乗り気でない女性に声を掛ける男もいた。相手は、なるほど、小柄で真直ぐ腰まで伸びる黒髪に、それとは対照的な雪のように白い肌を持つ、同族の臭いがしなくても話し掛けたくなっても仕様がなない可憐な美少女だ。

何度もしつこく声を掛けているようだが、少女は無表情のまま何も答えようとしない。それでもめげずに男は話し掛けた。

どつという訳か、彼女はいやがる素振りも見せず、かといって、その男に着いて行こうと考えている雰囲気は微塵もない。

(断るにしろ、ついてくにしろ黙ってるのはあまり得策じゃねーな。そのまま無視し続けるとあの男、そのうちキレルぞ)

リクの懸念は割とすぐに当たった。

男は形相を変え、壁際に立っている少女の顔のすぐ横に乱暴に手をついて、悪態をつきはじめた。

そして、彼女の顎に手を掛けようとした瞬間、彼は蹴り飛ばされた。

「口説くのは押しが肝心つてのはよく聞くが、てめーは押し過ぎなんだよ。たまには退くのも大事なんだぞ」

蹴り飛ばしたリクが呆気無く気を失ってしまった男にびしっと指をさして言う。

くるりと女の子を振り返ると、女の子は突然現れたリクを見ていたらしく、振り返った瞬間にその深い藍色の目と合った。

その目を見た時、リクは何故か、この娘はあまり幸せそうではないな、と感じた。

「大丈夫、だよな？」

「……………」

女の子は答えない。だがこくりとうなずく。

「あんたビビってなかったから、多分放つといっても大丈夫だろうと思っただけど、つい手が出ちまった」

「……………」

「それとな、あんた美人なんだから、あんまり一人でうるついでるのは感心しねーな。ここにや、女に飢えた野郎がうようよいやがるからな」

「……………」

「お、俺は違うよ。確かに女は男よりも好きだが、口説きたくなる程じゃねーし」

「……………」

リクは首をかしげた。ここまで喋ってれば、何か返事くらい返ってきそうなものだが。それに、さっきの口説かれていた時だって、ずっと黙っていた。

そして彼は不意に思い当たった。

「……………あんた、ひよっとして喋れねーのか？」

女の子はこくりと頷いた。イエスと言いたいのか。

「なる程。連れはいるのか？」

また頷いた。イエス。

「場所は分かるか？」

こくり、イエス。

「じゃ、そいつのどこまで送ってやるよ。一人じゃ何かと不便だろ」

こくん、と今度も頷いたが、イエスの時の頷き方と微妙に違う。

ありがとうとでも言いたいのか。言葉にはしないし、表情にほとんど感情は出てこないが、根は素直らしい。

そして彼女は方角を指差して歩き出した。

06 『少女を知る者』

人間関係というものは不思議なものだ。

その絆を繋げていくと巡り巡って元の人間に戻る事がある。

人は和にして環、即ち円となりて縁と為す。

これは人の言葉だが、言葉とは盲く出来ているものだ。

人々の絆は網のように広がり、境を渡り、海をも渡る。

ふと隣にいる人も、どこかで自分と繋がっているのかも知れない

道中、黙って歩くのも野暮なのでリクは彼女にいろいろな質問をした。

「連れてるのは男なのか？」

ふるふる、と首をふる。ノー。

「女か。美人か？」

こくり、イエス。男が美人と言うのは、人に寄ってバラバラだが、女が美人と認めるならば、それはハッキリと美人なのに違いない。

「背は？ 俺より高いか？」

こくり、イエス。リクの身長は平均的で、百七十と少し。それよ

り高いのだから、連れと言う女は、このファトルエルではともかく、女としては相当背の高い部類に入る。

ちなみにファルガールは百八十を軽く超える巨漢だ。

背が高い美女。人間として一番目立つ容貌である。

それならば、彼女が知っているところからその女が動いたところを出くわしても簡単に見つかるに違いない。

実のところ、彼女の連れが入れ違いになったらどうしようかと危惧していたが、そんな心配もなさそうだ。

その安堵と同時に、彼は殺気を感じた。

「この野郎！　フィリーから離れんかい！」

その叫び声と同時に、飛んでくる飛び蹴りを間一髪で受け止める。

「な、何だ、てめーは!？」

それは、見た目は眼鏡をかけている真面目そうな男だった。しかし使う言葉は、彼の風貌からは想像できないくらい片寄った方言だ。

「女にテレテレしとる割には、よう俺の蹴りを受け止められたのう」

「お、女にテレテレえ？」

どうやらリクはさっき彼自身が蹴り飛ばしたナンパ男と同じように思われたらしい。

あれと同じにされたのだから、これは実に不名誉かつ腹立たしい事だった。

「ぶざけんじゃねーよ。俺はこの娘を連れの元まで送ってやってる

途中なんだっつーの！」

「よう言っわ。フィリーがブスやったら送ったらんかったんやろうが！それがテレテレしとるっちゅーねん！」

更に言い返す眼鏡男の言葉の中の一語にリクはぴくりと反応を示した。

「フィリー？」

そう言えばさっき飛び蹴りをかます時にもそう叫んでいた。

「この娘、フィリーってのか？」

「せや！ 本名フィラレス＝ルクマース、通称フィリーや！ 何ぞ文句あるんかい！」

「いや、全然」

リクは今まで名前を聞きたくても聞けなかったのが、思わぬところで判明したのでいまままでナンパ男扱いされた怒りは収まり、落ち着きを取り戻した。

「ともかく！ フィリーから離れエ！」と、今度は拳を繰り出してきたが、リクはそれを軽やかに躲すと、何ごともなかったかのように尋ねる。

「お前、ひよっとして、この娘の連れも知ってるんじゃねーか？」

「知らないでか、名はマーシア＝ミスターシャ！ “冷炎の魔女” ゆうてエライ有名なんやねんで」

「マーシア＝ミスターシャ、“冷炎の魔女”ね」と、復唱して確認すると、もう一つ尋ねた。

「ところで何であんたはこの娘の名前とか連れとか知ってたんだ？」

「おんなし魔導学校の生徒やからや！」

「同じ魔導学校？ それじゃ二人とも魔導士か」

「せや」と、男はえっへん、と胸を反らせて見せる。

リクは魔導学校に実際行った事はない。

しかし、その存在はファルガルから聞いて知っている。魔導士が選ばれ、育ち、その魔導をもって世界の為に働くところ。

生徒、教員、研究員に魔導技術者、それらの魔導士の質は世界最高峰といわれ、そして研究所で開発される魔導技術は常に世界の最先端に行く、世界の担い手。

入ろうと思つて入れるところではない。つまりは魔法に関するエリート達の巣窟である。

「で、あんたの名前は？」

「カーエス＝ルジュリスや。今回の大会の優勝者の名前やで。よう覚えとき」

「大会？ …… ああ、ファトルエルの決闘大会のことか」

さつきコーダから得た情報を思い出す。

「お前は大会に出るのか、へえ……で、優勝つてか？ これまた随分な自信だな」

その驚きには別の人物が答えた。

「自信は大切だ。少しでも自分に疑いを持てば全力は尽くせない」

いつの間にかカーエスの背後に別の人物が来ていた。

その人物は、威厳と言うものに満ちあふれ、見ただけで、カーエスやフィラレスが所属していると言う魔導士養成学校の教師だと分

かる。

その男の持つ雰囲気はリクに、てこを使っても動かす事が出来ない、固く、重い巨大な岩石を連想させた。

「カルク先生！」と、カーエスがその男の名を呼ぶ。

「少年、私の弟子が失礼した。どうか許してやってほしい」と、カルク、と呼ばれた男が頭を下げる。

「ああ、全然、謝ってもらおうほどの事じゃねーし」

口には出さなかったが、リクはむしろ少年と呼ばれた事の方が気になった。

「ありがとう。私はカルク＝ジーマン。カーエスに魔導を教えている者だ」と、カルクは彼に手を差し出した。

それに応えて、彼も手を出し、握手する。

「俺はリク＝エール。一応、魔導士だ」

「魔導士？ それは誰かに教えてもらっていたのか？」

魔導というものは独学で何とかなるものではない。

元祖の魔導士が魔導を発見して以来、それは人々に伝えられ、伝えられた者がさらにそれを磨き、その成果を次の世代に伝える。

こうした伝道と切磋琢磨の積み重ねによって現在の魔導理論がある。

だから我流でも魔導の基本は最低誰かに教えてもらわなければならぬ。

「ああ、一応師匠がいる。ファルガール＝カーンって奴なんだけだな」と、リクが答えると、固い表情をしていたカルクの顔色が変わった。

「ファルガール」カーン……！？ この街にいるのか！？」
「ファルの事知ってんのか？」

リクは今までファルガールと旅をしていても、オウナ達を除くと全く彼を知る人物と会わなかったなので、まさか知っているととは思わなかった。

「ああ。十五年前の決闘大会を見ていた人間はみんな彼の事を知っているよ。何しろ優勝して最強の証をもらった男だ」

「最強の証？」と、リクが聞き返すと、カルクが静かに頷いて続けた。

「それは代々ファトルエルの大会の優勝者に渡されるものだ。しかし私は彼こそ、その証が相応しいと思っている」

へえ、とリクは感嘆の声を漏らす。

今まで自分の中で何度となくファルガールにいろいろな評価を下してきたが、こうして第三者からファルガールの評価を聞くのは初めての事である。

しかも、その評価はかなり良かったので、彼はとても嬉しく思った。

しかしその喜びの中で、少し引っ掛かるものを感じる。

最強の証についてである。彼はそれをどこかで聞いた事があった。

(はて、どこだっけな……？)

しばらく考えてみたが思い出せない。気がつく、三人が急に黙り込んでしまったリクを注視していた。

「どうかしたのか？」

カルクに尋ねられて、リクは連れていたフィラレスのことを思い出した。会話に夢中ですっかり忘れていた。

ファルガールを知っていた事もあり、フィラレスとも知り合いらしい。この二人になら任せても大丈夫だろう。

「なあ、俺は今、この娘をマーシアって人のところに送ろうとしてるところなんだけど、実はファルと待ち合わせをしてるんだ。良かったらあんたらが送ってくれねーかな？ フィリーも知ってる人の方がいいだろうし」

「とーぜんや。まかしとき」と、カーエスが、フィラレスに一步近寄ったが、それをカルクが引き止めた。

「いやダメだ、カーエス。我々には行かねばならないところがある」
「へ？ じゃ、フィリーどないしますの？」

間の抜けた返事を返すカーエスに、カルクは答えず、その代わりにリクに向き直って言った。

「リク、と言ったな。悪いが君がフィラレスを送り届けてやってくれないか。それにおそらく、フィラレスを送っていつでもファルガールを待たせる事はないはずだ」

「ん？ あ、ああ。構わねーけど」

リクは一応返事したものの、カルクの言葉の後半部分が理解できない。

「ありがとう。じゃあ、頼む。行くぞ、カーエス」

「え、あ…はい」

カーエスは戸惑ったまま踵をかえしたカルクの後についてゆく。

リクとフィラレスはこの後しばらく二人を見送っていたが、カーエスは幾度となくこちらを振り返った。

そしてリクはフィラレスを見て言った。

「じゃ、行くか」

フィラレスはこくりと頷き、二人はまた歩き出した。

「しかし、あのカーエスって奴、賑やかだったなあ。別れたとたんに静かになっちまう。あのカルクって教師もファルの事知ってたらしいけど、どんな関係なんだろうな。考えてみりゃ、俺ファルの昔の事全然知らねーよな。今度聞いてみるか」

リクは何か喋らなければと思い、取り敢えず考え付いた事を次々と口に出す。しかしだんだん疲れてくる。

相手も何か反応してくれば、そこから連想出来て次の話題が浮かぶところが、全く無い為、話題をひねり出すのが大変になる。

ネタが尽きかけ、話が途切れかけたところでフィラレスが突然足を止めた。

「どうかしたのか？」

答えの代わりに彼女はすっと通りにある自分達が目の前に来ている建物を指差した。

「ああ、そこにいるのか」

こくり。イエス。

その建物をじっくり見てリクは、本日この街の店の値札を見て以

来の衝撃を感じた。

「っ、連れがいるとっろって、っかあっ！？」

07 『恋人同士の定義』

恋人同士たる定義とは一体何なのだろうか。
好き合う事だろうか。付き合う事だろうか。

恋人とは自分が恋しく想う人の事。

だから恋人同士とはお互いに想い合う関係。

自分の胸の内は自分にしか分からない。

だから二人以外には分からない関係。

そしてその二人でも時々分からなくなる関係。

分からなくても大丈夫。確認はできないが、絆は確実に存在はするのだから。

恋人達よ、自信を持って。

私達は恋人同士なのだ、どこかにある私達の絆は不安などには壊せはしないと。

あれからファルガールとマーシアの二人は特に会話するでもなく黙って酒を酌み交わしていた。

その音を許さない雰囲気に参加したのは店主である。

元々この酒場は酒を飲んで盛り上がるような酒場ではないが、ここまで静かなのは初めての事だ。

「ファルガール」と、マーシアが沈黙を破る。

たった一言だったが、その場の雰囲気は一気に柔らかくなった。

「何だ？」

「あなたがここにいてるって事は、やっぱり弟子を育てて決闘大会に出すって事かしら？」

「時期を見計らってきた事は認める。だが出る、出ねえはアイツの自由だ」

答えて、ファルガールは一口カルに口を付ける。

その様子を眺めながら、マーシアは更に質問を重ねた。

「もし出るとして優勝は出来そう？」

「もし出るなら間違いなく今回の大会の優勝者だ。苦戦する奴もいるかもしれないが、俺でさえ、あいつに勝てるかどうかは怪しいね」

即答。しかも一部の謙遜もなし。ファルガールは完全に言い切った。

変わってないな、とマーシアは微笑んだ。

昔からファルガールは自分に自信を持っている男だった。

時には過剰なくらいだったが、それでも自分を信じて最後には目的を成し遂げるのだ。

そのような自信があるからこそ、十三年前自分の信じたやり方を貫き、自分の信じたやり方以外の方法はとらなかった。

が、同時にマーシアは驚いた。

あのファルガールが勝てるかどうか怪しい、と言ったのだ。

いつだって自分は勝つに決まっている、と言っていたのがマーシアの知るファルガールだった。

「マーシアこそ、この街に何をしにきたんだ？　今さら大会に出るわけじゃねえだろうが」

ファトルエルの決闘大会に年齢制限は無い。

しかしこの大会に出場するのは四捨五入して二十歳から三十歳までの間に入る人間、というのが相場だ。

マーシアも一応この中の年齢に入るには入るが、この年代の出場者のほとんどは何回も出場しているベテラン達である。

ベテランと言うと聞こえはいいが、何回挑戦しても優勝できない連中なのだ。今さらそんな連中に混じろうとは思わない。

「私も……一人の魔導士を育てたの」

「そいつを大会に出場させるのか？」

彼女は静かに首を振った。

「あの子自身が出たいって言ったのよ。ちょっと信じられなかったけれど。カルクの育てた弟子も出るって言うし」

「で、弟子弟子って言うてるって事は、カルクの言ってたやり方を学校側が受け入れたって事だな」

ファルガールの指摘にマーシアは口元を押さえ、答えるのを少し躊躇った。

少し間が開いた後、口元を押さえていた手を下ろしフレスニーを一口飲んで、口を湿らせると話し出した。

「ええ、彼の提案はあなたが出てからすぐに承諾されたの。それで生徒を選抜して、他の生徒の処遇を手配が行われて、二年と掛からずに学校の規模は縮小されて、それぞれの生徒に担当の教師がつくようになった。カルクはいつも言ってるわ。あなたがもう少し我慢

していてくれればって」

「へっ、俺がいりゃ、まとまる話もまとまらなかったんだ。いなく
て正解だよ」と、言うファルガールの口元に浮かべられた笑みはシ
ニカルな感じがした。だが、昔のように棘は感じられない。もう、
どうでもいいといった感じだ。

マーシアはセピア色のカルを飲み干すファルガールを見つめ、ふ
と不安にかられ、尋ねようと話し掛けた。

「ねえ、ファルガール」

しかしその時外から聞こえてきた声で、二人の注意がそちらに移
ってしまった。

「っ、連れがいるところって、ここかあっ!？」

二人でしばらく店のドアを見つめていると、がちやりと音がして
リクとフィラレスが入ってくる。

そして、ファルガール達が自分達を見つめているのに気付いて、
顔を合わせる。そしてファルガールに言った。

「俺はファルにもらった金を使ってやろうと買い物に行き、ナンパ
男に絡まれている女の子を助けてやった。たまたま、だ。

それで女の子が口が利けないと知り、一人じゃ不便だろうと連れ
の元まで送ってやる事にした。男として当然の事、だ。

で、女の子の案内に従ってきてみりゃこの酒場だ。しかも入って
きてみりゃ、俺の連れとフィリーの連れが親密そうに酒かつくらっ
てる、と。

「いやあ、これ以上の驚きはそうそう味わえねーだろうな」

「若い内は刺激を受けとくもんだぜ。免疫がねえと年寄りになった時にビックリして本当に心臓止まっちゃうからな」と、ファルガーはグラスを片手にニツと笑ってみせる。

「でもあなたどうしてフィリーの名前を知ってるの?」と、その隣のマーシアは不思議そうな面持ちで尋ねた。

フィラレスは口が利けないのだから、自分で名乗れるはずがない。その質問にリクは悪戯っぽい笑顔を見せる。

「あんたの名前も知ってるよ。“冷炎の魔女”マーシア」ミスターシャ先生。背の高い美人って事もね」

「まあ、ありがとう。でも誰が?」

「背の高い美人はフィリー。名前の方は……ええと、……眼鏡掛けてて、妙な方言を口走って、俺に飛び蹴りかましてきて、……名前は……」

苦悩し、頭を抱えてしゃがみ込むリクに、マーシアが助け舟を出した。

「カーエス＝ルジュリスの事かしら?」

「そう、そいつだ!」と、リクはがばつ、と立ち上がった。

「あとあなたに言つとこーと思つた事があるんだが」

「何かしら?」

マーシアが聞き返すと、リクはその鼻先にびしつと人さし指を突き付けた。

「今度から口の利けねーような娘を一人にさせるんじゃねーぞ。道にでも迷ったらどうなつてたか」

リクが言い切ってから、しばらくマーシアは目を丸くして突き付けられた指先を見つめていたが、やがて、小さく笑って、「ごめんなさい。今度から気を付けるわ」と、謝った。

リクは偉そうに腰に手を当てる、うむ、と頷く。

「それとファル！」と、今度は勢い良くファルガールを指差す。
「今度は俺か」

リクはつかつかとファルガールの前に移動するとぼそつと言った。

「ファトルエルの決闘大会のこと聞いたぞ。別れ際に言いかけただろ」

「お前を蹴飛ばしかけたやつか？」

「んにゃ、その師匠から」

そして、少し間をおいて付け足す。

「……あとその前にサソリ便の御者からおーまかに」

サソリ便、という言葉にファルガールは反応し、酒を傾ける手を止める。

「……バレたか」

そんなファルガールに勝ち誇った笑みを浮かべ、リクは腰に手を当て胸を張る。

「弁明を聞いてやるわ」

「……まあ、修行の一環だ。俺だけサソリ便に乗って行かなかった

だけマシだと思え」

「荷物を全部持たされたぞ」

「ありがたき苦難だろ」

ああ攻めても、こう返される。リクにできるのは顔を歪ませる事ぐらいで、ファルガールに謝らせるところまでいったためしはなかった。

今度は自分が言葉に詰まる羽目になったリクを見てマーシアはくすつ、と笑った。

「あ、そう言えば、そのか……か……」

「カーネルだろ、一回で覚えるよ」

「カーエスよ」

偉そうに言ったファルガールの横からマーシアが訂正する。

するとファルガールが飲みかけていたカルをぶつ、と吹き出した。

「くくく……」

「で、そのカーエスがどうしたんだよ」と、いい気味だとばかりに笑いを漏らすリクに、赤くなった顔で店主に用意してもらった布巾で飛び散ったカルを拭き取りながらファルガールが話を急かす。

「くく……ああ、その師匠つてのがな、ファルを知ってたらしくてさ。十五年前の決闘大会で優勝したんだってファルのこと偉く誉めてたぞ」

今度はそれを聞いたマーシアが笑った。

「どうしたんだ？」

「その人、カルクージーマンって言ってね、ファルガールが十五年前のファトルエルの決闘大会で決勝を闘った人なのよ」

「強いのか？」

今度の質問にはファルガールが答えた。

「ああ、強いね。並みの魔導士じゃ先ずアイツに傷一つ付けられねえよ」

「へえ、じゃあライバルって訳か。あ、もう一つさっきから聞いた事があつたんだ」
「何だ？」

リクは自分を見るファルガールとマーシアを交互に見て、言った。

「ファルとマーシアの関係は？ まさか行きずりじゃねーだろ」

その質問にファルガールとマーシアが顔を合わせた。

そしてそのまましばらく沈黙が続き、揃ってリクに向き直るとマーシアが答えた。

「恋人同士よ」

「こいびとどーし？」

マーシアのその答えはリクの想像を絶するものであり、一瞬戸惑う。

しばらく間が開き、遅ればせながら理解すると、さっきとは比べ物にならない衝撃が彼を襲った。

「なっ、何イイツ！？」

「うるせえよ、リク」

リクの驚嘆にそばにいたファルガールが耳を塞ぐ。

「だ、だってよ、俺と会ってから十年くれーになるけど、一度もそんな心配見せなかつたんだぜ!？」

「当たり前だ。お前と会ってからはさつき偶然会うまで、手紙一枚書かなかつたからな」

「世間じゃ、そーいう関係の事を元恋人ってんだ」

「まだまだ若いな、お前は。連絡取り合わねえまでも、心が繋がってりゃいい恋人同士もあるってこつた」

リクの突っ込みにちちち、とファルガールは指を振る。

そこでリクは少し黙り込んで考えると反論に出た。

「ファル、それは違うぜ。まあ、心が繋がってれば十年間連絡がなくても恋人同士でいられるでしょう。」

でも恋人同士ってのはお互いに愛しあってて、逢いたがるもんだろ? 忙しくかったりやむを得ねー事情があるなら別だけど、ファルの場合、俺といろんなトコ旅して来たんだ。そのついでに逢いに行く余裕は十分あつたじゃねーか。

そりゃ、野宿も多かつたけど、街に寄つたりして手紙を書けない状況でもなかつた。でも、そんな事はしなかつた。それでも恋人同士って言えるのか?」

リクにしては珍しく真面目に筋道立てた反論だった。

ファルガールは、表情は変えなかつたが、いつもは即時に切り返すところを、黙ってしまっている。リクの目を見ながら、言葉を探しているようだ。

マーシアは黙ってファルガールの答えを待っている。

そしてファルガールが口を開いた。

「……お前そこまで俺とマーシアの仲を否定したいのか?」

「え？」

それはリクにとって意外な一言だった。慌てて自分の言った事を思い返す。

「うーん、そーなるな」

驚くだけで良い話なのに、本気で理論立てて捲し立ててファルガールとマーシアの仲を否定してしまった。

若いと言われたからだろうか、いやそれは違っだろう。

そう言われるのは今に始まった事ではない。

「そうだな」と、ファルガールはやはりしゃがみ込んで考え込むリクに話し掛ける。

そしてリクと自分が目の合うのを確認して続ける。

「逢いたいとは思ってた。だが同時に思ってた事もある」

「何だ？」

リクが聞き返すと、ファルガールはいつものように口元に悪戯っぽい笑みを浮かべて一言答えた。

「気が向いたら教えてやるよ」

そして残りのカルを飲み干してファルガールは立ち上がり、手でポンとリクの頭を叩いた。

「そろそろ帰るぞ、リク」

「勘定は？」と、リクが尋ねると、ファルガールは入り口に向かう

足を一度止めた。

「お前がやつとけ」

「自分でやれよ」

「酔っ払いに勘定させるとええことになるぞ」

「まっすぐ歩いてる奴は酔っ払いとは認めねー」

リクが言ったとたんに、ファルガールはふらふらとわざとらしく千鳥足で歩いてみせる。

「じゃあ、勘定頼むぜ」

「ち・く・しょく」と、リクは舌打ちすると、店主に全部で幾らか聞き、その値段に眉根を寄せつつ、その金額を支払った。

そして、彼は財布に使っている袋を大事にしまうと急いでファルガールの後を追って入り口まで駆け足で行くとそこで振り返り、マーシアとフィリーに小さく手を振った。

「じゃ、またな。マーシア、フィリー。」

二人が去った後、マーシアとフィラレスの二人だけになり、場がシーンとなった。

マーシアは今飲みかけている一杯を飲み干すと、まだ入り口の方を見ているフィラレスに尋ねた。

「今日、何かいい事あった？」

フィラレスはこくりと頷いた。

＊＊

ファトルエルの日没は早い。街を囲む高い壁がある為である。リクはまだほんのりと明るい空を見上げながらファルガールの後を付いて行っていた。

「酒で火照った身体にや丁度いい気温だな」

「酒飲んでねー俺には寒いんだよ。それに腹減ってるし。早く宿に戻って飯食いてー」

ぶつぶつ言いながら、彼は視線を地面に落とした。

彼の歩いている脇にファルガールに足跡がある。それはくねくねと曲がっていた。

ファルガールを見ると、なかなか危なっかしい足取りだ。

「まだやってんのかよ、もういいからまっすぐ歩け」

彼がいつても、ファルガールはまっすぐ歩こうとしなかった。それどころかますますふらふらになっている。

「？」と、リクは眉をしかめる。そして後ろを振り返ってみた。

ファルガールの足跡は店を出た後からだんだんと真直ぐから程遠くなっている。

これは彼がまっすぐ歩けと言う前からのことであるから、わざわざ反発してわざわざやっていることではない、ということだ。

「ファル……まさか本気で酔ってるのか？」

答える代わりに、ファルガールはどてっと、前のめりに倒れた。

「ファルツ！」

リクは急いでファルガールに駆け寄った。

仰向けにして、上体を起こす。ファルガールはまだ意識があった。

「一体どれだけ飲んだらこうなるんだ？」

リクが尋ねると、ファルガールはにやっと笑って、両手を持ち上げ、全ての指を開く。

「十杯！？」

リクは驚いた。いつもは不味い、不味いと言いながらちびちびと一杯飲むだけだったからだ。

ファルガールはもう一度にやっと笑うと、そのまま頭を垂れて、寝息を立てはじめた。

「……そんなに恋人に逢えたのが嬉しかったのかね……？」

リクはやれやれとため息を付くと、しゃがんでファルガールの腕を肩に掛け、背負うと、気合一発、ファルガールを持ち上げて立ち上がる。

「おっと……！」と、その途端に体勢を崩して少しふらついた。

巨漢に上にその体積のほとんどが筋肉だ。軽かるうはずはない。

リクは慌てて体勢を直すと、少し跳ねて、ファルガールの位置を直す。

その際に自分の肩越しにファルガールの寝顔が見えた。

「……逢いたいのと同時に思ったことねェ……」

その時、リクは不意に思い出した。

- - - - -これ何？

- - - - -最強の証だ

- - - - -さいきょう？ 一番強いって事？

- - - - -ああ、そうだ。信じるか？ ……信じられるわけ

ねえよな。

(そうか、あの時のペンダントだ。見られたのはあれっきりだけど……)

そして、あのようなファルガールを見たのも、あれで最後だった。
リクはもう一度夜空を見上げた。

「最強の証、か……」

08 『目的を忘れるな』

砂漠の夜は非常に寒い。丸坊主のこの地形では昼間の熱を保てないからだ。

しかし、門を守る門番達の格好は昼間と変わらない。

だがその服装の果たす役割は昼と夜で全く違う。

昼間は日光の光を遮断してくれるものとして、夜間は体温を保ってくれるものとして。

しかし、その服のおかげで死なずに済んでいるのは確かだが、昼は暑く、夜は寒いのは変わらない。

変わらない物がもう一つ。

訓練されたように一糸乱れぬ敬礼と、見事に声を揃えた歓待の言葉だ。

「ファトルエルによっこそー！」

王族だろうと犯罪者だろうと、この挨拶は変わらない。

この挨拶は不変で、平等なのだ。

この夜、新しく、ファトルエルにやってきたのは三人の男だった。一人が初老の男、一人は中年風の男、最後の一人は若者だ。

「ここで最強になれば世界最強、か。馬鹿馬鹿しい幻想だ。しかしまだその幻想に取り付かれている奴がいる」

中年の男、ハークーンⅡネフラが立ち止まり、月に照らされる大決闘場を見上げ、口元に小さく嘲りを含めた笑みを浮かべて言う。

「だが、世界の中でも屈指の強さを持つ奴らが揃っているのは事実だ」と、その横を最年少のジルヴァルトⅡベルセイクが追い抜いて通り抜けてゆく。

「あまり期待するなよ、ジルヴァルト。本当に大した奴は、ここに集まっている数百人のうち数名しかいねえ。しかしその数名も、俺達の足下にも及ばねえよ」

ジルヴァルトは、立ち止まって振り返り、ハークーンをちらりと見遣る。

「大した数名、と言うのは十五年前のあんたのことだろう？　しかし優勝できなかった。決勝にすら出られなかったらしいな。悪いが、あまり信用できん」

そう言ってまた歩き出したジルヴァルトをハークーンが睨み付ける。

「二人とも、そのへんにしておけ」

そんな二人の間にもう一人、初老の男・イナスⅡカラフが割り込んだ。

「休む前に、もう一度確認をしておこう。

我々の目的は、ファトルエルの“ラスファクト”の回収。

そして、情報が入っている“滅びの魔力”の持ち主の搜索と確保だ。

前者はハークーン、後者はジルヴァルトと私が担当する。
……それからジルヴァルト」

説明が終わると、イナスは改めてジルヴァルトを見据えた。
彼はジルヴァルトが自分の方を向くのを待って言った。

「お前にきつく言うておく。絶対に目的を忘れるな。今度忘れたら、お前もただでは済むまい」

ジルヴァルトは、いわゆる問題児だった。

実力は彼等の誰よりもある。

しかし、一度一つの物事に執着すると、全てを放棄してその物事に取り組むため、しばしば、彼は仕事をすっぽかした前歴がある。

「聞いているのか？ ジルヴァルト」

イナスは返事をしない彼にじれて言った。

ジルヴァルトはイナスを振り返り、彼をじろりと見る。

その視線にイナスは少したじろいだ。

それで満足したのか、ジルヴァルトは再び身を翻して彼に背を向ける。

「……仕事より面白いものが出て来ないことを祈るんだな」

09 『猛暑の試練』

闘いは場所を選ばない。

火の中だろうが、水の中だろうが、どれだけ過酷なところでも闘いは行われる。

戦士たる者、どのような環境にでもより適応する為の知識の蓄えは怠ってはならない。

それを行ったとしても、決して満足してはならない。

厳しい環境は慣れない者達の身体を容赦なく攻め立てるのだから。

「んっ、…っん」

夜が明けると同時にリクは目覚めた。

隣のベッドを見ると、いつも野宿で使っている寝袋に包まってフルガルが眠っていた。どうやら、夜中に起き出して自分で寝袋を出したらしい。

「……その手があったか」

彼は舌打ちすると、軽く身体を伸ばした。ばきばきと夜中に固まった関節が鳴る。固いベッドの賜物だろう。

リクが階下に降りて行くと、一階では従業員全員が既に起き、掃

除をしていた。

「おはようさん」

その声を掛けてきたのは掃除の指揮をとっていたオウナだ。

「……随分早いんだな」

「そうでもないよ。ファトルエルの朝は遅いからね」

高い壁のおかげで、ファトルエルの夜は早い。逆も然り、太陽はある程度高く上らないと顔を出せない。

「ファルガールは？」

「まだ寝てるよ。昨日の酒がまだ残ってるらしい。寝かせてやってくれ」

「いつそ永遠に起きないと平和なんだけどね」と、オウナはなかなか過激な事を言う。

そこまで憎たらしく思っておきながら、何故彼を泊めているのだろう。

そんな事を考えながら清掃作業を何となく眺めていると、オウナが振り返った。

リクはぎくりと身を強張らせた。彼女は、いきなり振り替えられてあまり平然としていられる顔ではない。

「なんだい、お腹空いたのかい？ 朝食なら出来てるよ。食堂に行ってお食べ」

リクにしてみれば全く的外れな指摘だったが、言われてみると確かに腹は減っていたので彼は取り敢えず食堂に入った。

食堂は既に掃除が終わったらしく、どことなくさっぱりしていた。縦に二つ並んだ六人座りのテーブル、その上に敷かれた白いクロスもこぎれいな印象を与える一因となっている。

食堂は無人にはなかった。

奥の一席に、ボロボロになったノートを読みながら茶を啜っている老人がいる。

老人はリクが入ってきたのに気が付いたのかノートから目を放して顔を上げた。

「君がファルガールの弟子かな？」

リクは頷いた。

すると老人は、自分の向いの席に座るようにリクを促した。

彼はそれに従い、台所と通じているカウンターで朝食のトレイを受け取るとその席に座る。

「はじめまして、私はオキナ。一応この宿の持ち主だ」

「へえ、あの婆さんじゃなかったのか」

「オウナは私の妻だよ。宿の経営は彼女に任せている」

リクは、この宿に着いた時にファルガールがオキナの居場所を聞いた事を思い出した。

そしてその時オウナはいつものところだ、と答えた。

ここまで考えたところでリクはある一つの事に気が付いた。すぐに尋ねてみる。

「……昨日、ファルガールが会いに行かなかったか？」

オキナは頷いて簡潔に答えた。

「ああ、来た」

「何の用だったんだ？」

オキナはすぐに答えなかった。しばらくリクの目を見ながら茶を啜る。

「……君は大会に出るのかな？」

「そのつもりだけど？」

「なら急いだ方がよい。昼から大会前日式典が始まってしまつ」

式典と聞いてリクは眉を歪ませた。

「そんなもんに出なくちゃいけねーのか？」

「出る義務はないが、その前にエントリーは締め切られてしまつのだよ」

それを聞いたリクは、窓の外を見てまだ壁からさほど高くなつていない太陽を見た。

「でも正午だろ？ そんなに慌てる必要ねーんじゃねーか？」

オキナは首をゆっくりりと、小さく振った。

「これでも遅いくらいだよ。」

いいかね？ 今度の大会は世界中から自惚れた者から自他共に認める者までそれぞれ腕の立つ者全てが集って行われるものなのだよ。エントリーは今日の午前だけ受け付ける。それだけの人数がこの

時間に集中するんだ。

「これが何を意味するか分かるかね？」

つまりとても混雑するという事だ。

「もし並んでる間に時間切れになったら？」

「既に列に並んでいる分は全部受け付けてもらえるがね、それまでに並んでいなかった者はお引き取り願われているよ。だが間に合うにしても、炎天下の中ずっと並んでいるのは非常に辛いだろうね」

それはもつともだと思ったりリクは、急いで残っている朝食を平らげるとオキナに一言お礼を言ってお店を出て行った。

暫くして、食堂に入ってきたのはファルガールである。

「おはよう、ファルガール。気分はどうだね？ 昨日は酷い有り様だったようだが」

「何とか……大丈夫だ」

ファルガールは額を押さえながら、先程リクが座っていた席にどつかりと腰を下ろす。

オキナは重そうに腰をあげるとカウンターに行き、自分のものは別の湯飲みに入った茶を受け取ると元の席に帰ってファルガールに勧めた。

ファルガールはゆっくりとした動作でオキナに感謝の意を示すと茶を一口啜る。

それを見届けると、オキナは再び自分のノートに目を落とした。

「なかなか素直な男だね」

「リクの事か？」

オキナは一瞬、ファルガールと目を合わせ、頷いてみせる。

「頭も悪くない。君が私に会いに来たところまで勘付いていたよ」

それを聞いたファルガールは茶をもう一口飲むと満足そうな笑みを見せた。

「そんなくねえは気付いてもらわねえとな。ちゃんと誤魔化してくれ
たか？」

「嘘のつけない私に箝口せよと無茶を言う。しかし私の下手な誤魔
化しでもちゃんと追求するのを止められた。……素直な男だ」

遠回しに不平を言い、口を尖らせるオキナにファルガールが吹き
出して笑った。

「かかか、だからアイツはからかいがあるんだよ」

「しかし何故彼に黙るのかね？ 見る限りでは君たちは隠し事をす
るような溝のある関係ではなからうに」

ファルガールはなかなか答えなかった。残りの茶を飲み干すと彼
は湯飲みをテーブルに置く。

「……リクは俺が認める一流の魔導士だ。一人で生きていける知識
も技術も持つてる。アイツに足りねえものはあと一つ。このファト
ルエルでそれを身に付けさせる」

「足りないもの？ それは今回の大会と何か関係あるのかね？」

オキナに聞き返され、ファルガールは頷いて続けた。

「アイツが大会に参加すると決めた事で第一段階はクリアだ」

こちらは、大通りへと歩をすすめるリクである。

オキナに素直だと表された彼でも、かの老人に、自分の疑問を誤魔化された事に気付くのさほど時間は掛からなかった。と、言うより、はじめから誤魔化されてなどいなかった。話が変わってからそれを蒸し返す隙が出来なかったのだ。

気が付いたら早く宿を出なければ、という事になってしまったのである。

宿を出てしばらく道なりに歩いていたが、あるところで道の分岐点に差し掛かった。

リクは懐から昨日ファルガールが買った地図を取り出すと、それを開く。

現在位置を探していると、後ろから何かかやってくる音がした。リクが振り向くとそこから出てきたのは何と運搬サソリだった。昨日は動いていても遠くだったり、近くでも止まっていたりだったが、こうして自分の方に歩いてくるとなると、その巨大さはまさに圧巻である。

ましてここはそれが五匹並んで通っても余裕のある大通りではなく一匹でギリギリいっぱいの小路なのだからなおさらだった。

リクがどう避けようか迷っていると、運搬サソリは目の前で止まり、頭上から聞き覚えのある声が降ってきた。

「お、昨日の兄さんじゃないツスカ。こんなところで何やってるん
ス？」

「……コードダ？」

コードダは昨日レンスに向けて出発したはずだ。

いくら徒歩より何倍も早い運搬サソリとて、あれから往復して今
この街に彼がいられるわけがない。

そんなリクの疑問を理解したのかコードダはにしと笑って説明し
た。

「昨日は客が全然来なくて、結局レンスには行かなかったんスよ。

よく考えてみりゃ、これから祭が始まるうってのに帰ろうなんて人
はいやせんからね」

「なるほど」

「ところで兄さんはどこに行く気だったんスカ？ そんなところで
地図広げて」

「大通りだよ。でもこのへんの道はややくしくて……」

「なら連れてきやすから乗りやんせ」と、コードダはサソリの背に乗
っている客室のドアを開けた。

ところがリクは乗るのを躊躇している。

その理由を察したコードダはもう一言付け足した。

「お金はいりやせんよ」

それは凶星だったらしく、それを聞いた途端にいそいそと客室に
乗り込む。

出発してから、リクは客室から御者席のコードダに話し掛けた。

「本当にタダでよかったのか？」

「……意外と貧乏性スね。ところで、大会には参加するんスか？」

狭い道なので前から目が放せないらしく、彼はリクに背を向けたまま答え、問い返した。

「ああ、今からエントリーしに行くところだったんだよ」

「で、目標は？」

「決まってるだろ。優勝だよ」と、リクは座っている客室内の長椅子にふんぞり返って答えた。

「おっ、強気でやすね」と、コーダは肩こしにリクに目をやる。その言葉に、リクは少し気取って言った。

「自信は大切だ。少しでも自分を疑えば実力は発揮できない」

「……誰の受け売りスか？ それ」

「うっ……」

そうこうしているうちにサソリは大通りに入って行く。

リクは窓の外の景色に目を見張らせた。

「昨日と全然違う……」

「そりゃそうスよ。日常と違うのが祭りってもんス」

コーダは冷静な答えを返すが、その景観には圧巻させられるものがある。

第一に、大通りを歩く人ばかりである。人数は昨日より少し少なめだが、その中身は全然違う。

重武装をする者、力強い魔力を持つ者、とにかくそれだけで世界中の軍隊を相手どれる、恐ろしいまでの武力を持った集団だった。

その他にも、出場する戦士達を一目見よつとする野次馬、それらを相手に賭け事も持ちかける人間、戦士達に武器を売ろうとする商人。

第二には、大通りに出されている店という店が全て閉まっているということだ。

おかげであれだけいた買い物目的の観光客の姿は野次馬のなかには見られない。

第三には、雰囲気が上がられる。

第一、第二で説明した通り、商店街としての活気は無くなり、ここにいる人間の大半を屈強なる戦士達が占め、それらのほとんどが緊張をしていた。

昨日、ファトルエルの大通りの盛況振りを目の当たりにしたリクにとって、この雰囲気はより露骨に感じられた。

コーダは運搬サソリを戦士達の並ぶ列の最後尾で止めた。

「着きやしたよ」

「ああ、サンキュ」と、リクは一言お礼を言って、客室から大通りに降り立った。

「じゃ、頑張つて」

そして運搬サソリは去った。

しばらくその背中を見送った後、改めて周りを見渡すと、視線が自分に集中している。

やはりひとり運搬サソリにのって登場したのはかなり目立つ行為だったらしい。

列に並んでからも「金持ちの息子の道楽」だの「自惚れ」だの、あまり好意的でない評価が耳に付いたが、誤解を解くのも面倒臭い、

好きなだけ言っているとはかりに堂々としていた。

オキナに教えてもらったおかげで間に合い、コーダに送ってもらったおかげで思ったより早く着く事が出来たのは事実だが、それでも行列の長さはリクをげんなりさせるのには十分だった。

既に行列の並ぶところに影はなく、また、正午を過ぎるまで、影が伸びてきてくれる望みはない。

灼熱の太陽は容赦なく参加希望者達を照りつけ、彼等の体温を上げて行く。

彼が行列の真ん中まで来たあたりから行列は若干早く進みはじめた。

倒れてリタイヤする者が現れはじめたからである。

リクはオキナの忠告を聞いていた為、水を持って来ていたり、直接日光に当たらないような服を着たりするなどの対策は整える事が出来ていた。

それだけでなくも彼はこの七日間、重い荷物をもって砂漠を越えてきた男である。半日以上、この状態が続こうが、倒れはしない。

これはファトルエルの決闘大会における第一の試練なのではないか、とリクは思った。

「次の方」と、呼ばれ、とうとうリクの番がやって来た。

窓口の係は参加料としてリクの全財産のほとんどを受け取ると、リクに書類を差し出し、彼はその書類にサインをした。

そしてそれを提出した手に、係は腕輪を付けた。

その手際は彼に手を引く暇を与えないくらい見事なものだった。

「これは“証の腕輪”です」

「証の腕輪？」

リクが聞き返すと、係は頷いて、一部の冊子をリクに渡した。

「詳しい事はこちらの規定書をお読みください。それから正午より第一決闘場において大会前日式典が行われます。強制はされませんが、できるだけ御参加ください。では次の方」

行列から抜け出し、大急ぎで影のあるところまで行くと、彼は早速、大会規約の小冊子を開いた。

〈大会規約〉

1、この大会のルールはサバイバル方式のバトルロイヤルです。残り二人になるまで、このファトルエルを舞台に闘っていただきます。

2、みなさんにしていただいている腕輪は“証の腕輪”です。これをはめている事により大会のサバイバルルールの中で「生き残っている」という事になります。腕輪が壊れれば、「負けた」と言う事になり、大会は失格になってしまいます。

3、この“証の腕輪”は特製のもので、衝撃などによっては絶対に壊れません。本人の腕から外すと、腕輪は砂になり、壊れたという事になります。

4、残り二人になるまでの期限は無制限です。

5、腕輪の生き残り状況はこちらが把握しており、残り二人になりますと、こちらから鐘について知らせます。その時点で生き残った二人は明朝日の出の時刻より、決闘場にて決勝戦を執り行いますので、腕輪をしたまま、決闘場の入り口までお越しく下さい。

6、なお、基本的に大会のルール以外の質問は受け付けませんが、「あと何人生き残っているか」に関しては、本日受付を行った窓口で聞いていただければお答えできる方針になっております。お気軽にお越しく下さい。

7、大会中は正当防衛を除き、故意に参加者以外の人間に危害を加えてはいけません。これを破っても腕輪は砂に還ってしまいます。

8、闘いの際は決闘場を除き、どこを使用しても構いません。

9、以上でルールは全てです。ここに書かれている以外の事は何をやっても一切私どもは感知いたしません。

では、御検討をお祈りいたします。

カンファータ王国・ファトルエル決闘大会実行委員会

「ふうん、中々面白いルールだな」と、リクは一言感想を漏らし、冊子を閉じた。

ここでリクが迷ったのは大会前日式典とやらに行くか否かである。彼の偏見として式典などと堅苦しい名が付くものは意味がないか、ろくでもないものかのどちらかである。

しかしこれは一応大会に参加するものが集まるようだし、上手く行けばいい情報を仕入れる事ができるかもしれない。

(宿に帰っても、暇なだけだしなあ)

そこで彼はファルガールが何かを隠している事を思い出した。この暇を利用して、オキナに尋ねる事も出来る。だが、そんな事は夕飯の時にでもいい事だ。

結論として彼は式典に参加する事を決めた。
せめてろくでもない事ではない事を祈って。

10 『大会前日式典』

式典の類の行事は皆に敬遠される。

それは催す側とて同じ事。

それは誰もが好きになれず、されど廃れる事はない。

もしそれが無ければどうなのだろうか。

始まる事を告げる場はなく。

終わる事を告げる場もない。

みんなで祝う心を分かち合う場もない。

人は、それに耐える事ができるだろうか。

街の中心にある大決闘場は滅多に使われる事が無い。

普段行われる行事や、ファトルエルでの普段の試合はその他に四つある決闘場を使って行われる。

その四つの決闘場は大通りによって四つに分けられた各区画に一つずつ存在する。

大決闘場から十字に伸びる四つの大通りはそれが正確に指す方角から、必要に応じて「北通り」、「南通り」と呼び分けられる。

区画も同じで、例えば北通りと東通りの間にある区画は「北東区」と呼ばれる。南通りと西通りに区切られた区画ならば「南西区」、と呼ばれるわけだ。

この日、大会前日式典が行われるのは「第一決闘場」だが、この決闘場は北東区にある決闘場で、以下時計周りに第二、第三と名付

けられている。

第一決闘場は円形の大決闘場とは違い、正六角形をしたスタジアムである。

そして大、と付けられていないだけあって、大決闘場より若干小さい。

だがそれでも十分に大きかった。

都合上、闘いが行われる場所であるバトルフィールドを中心に観客席がそれを囲っているどんぶり型なのは仕方が無いが、バトルフィールドが一つの大きな砂丘であるのがなかなか面白い。

その特徴から、この第一決闘場は“砂丘の決闘場”とも呼ばれている。と言うより、むしろ分かりやすいそっちの方が主流だった。

「ふう、何とか席を見つけられたなあ……」

リクはため息を漏らしながら椅子とは呼べない、階段状の客席に腰を掛ける。

到着した時には既に客席はほとんど埋まってしまっていた。

彼はそれを不思議に思わなかった。

ここに来る時、同じ方向に向かう何人も人の群れを見ていたからである。

そして並ぶのが若干遅れてしまった分、こちらの方に向かうのも遅れを取ってしまったはずだった。

それで座るのは半分諦めていたが、それでも探せばあるものだ。

探さなかった者達は皆後ろの方で立っている。

水を飲んで一息付くと、周りの観客が騒ぎはじめた。

彼等の視線を追うと、そこにはカルクを先頭に、マーシア、カーエス、フィラレス、そして隣にはまだ面識のない二十代中盤あたりの若い男がいる。

「魔導研究所勢だ！」

「カルクⅡジーマンだ！」

「あれが“冷炎の魔女”マーシアⅡミスターシャか！」

「後ろにいるのってクリンⅡ克蘭じゃないか!？」

周りの声を聞くと、大体このような内容だった。

「へえ、あいつら有名なんだな」

「え？ 兄さん、魔導研究所の人たちと知り合いなんスか？」

「ああ、昨日ちよつと、な……?」

リクは答えはしたが、最後の方はある疑問が頭を掠め、疑問符が付く形となってしまうた。

隣を見ると、コーダが座っていた。

目が合うと、彼はニツと彼に笑いかけた。

「本日二度目ツスね」

そんな彼に対し、リクは何かしら疑いの含まれた目を向ける。

「……偶然なのか？ 故意なのか？」

「やだなあ、兄さん。偶然に決まってるじゃないスか」と、コーダはそれをあつさりと笑い飛ばした。

「ま、いいか。それより今朝は送ってくれてありがとな」

「礼なんていいツスよ。ついだったし」

そしてコーダは彼の鞆の中から小さな箱を二つ出し、片方をリクに差出した。

リクは自分の目の前に出されたそれに目を落とす。

「……なんだこれ？」

「弁当スよ。お昼まだでしょ？ 貰いものスから、遠慮はしないで食いやんせ」

リクはなかなかその弁当には手を付けなかった。

今朝の事もあり、タダなら何でも遠慮はしない、と思われるのが嫌なのもある。

それに彼はファトルエル物の価の高さを知っている。この弁当にしたってかなり値が張るものだろう。

あまり大きな親切はかえって受け入れ難いものだ。

しかし、隣でコーダが弁当を食べはじめると、彼は急に抗い難い空腹感を覚えた。目の前に何もなかったら、ここまで感じる事もないだろうに。

しかし実際目の前にあるものは仕方がない。そして遠慮をするなと言っているのだからここで食べても何ら問題はないわけだ。

大切なのは感謝だ。

「いただきます」

弁当は質素だったが、素晴らしく美味だった。

(でもコーダって、なんで会って二日目の俺にこんなに親切なんだ?)と、疑問が彼の頭を掠めた時、周りがまたざわめき立つ。

今度の注目は二つに別れていた。

それは両方とも決闘場の向こう側に見える席で、左手の一方は多少粗野な感じで、見るからに強そうな四人の男。

右手のもう一方はきちんとした格好で、胸当てや、籠手などで軽装している三人の騎士風の男達だった。

先程の魔導研究所といい、その二つの男達といい、この混雑の中

でどの団体も一瞬でどこにいるか分かってしまつほど圧倒的な存在感を持つていた。

「三大勢力が出揃いやしたね」

「三大勢力？」

リクが聞き返すと、コーダは頷いて、今囁んでいる食べ物を飲み込んだ。

「そこにいる魔導研究所勢、左手にいるのがファトルエル勢、それから、右側にいる三人が、カンファータの魔導騎士団の三つの勢力の事ッス

それぞれの勢力には優勝候補といわれる人間が必ず一人、二人いやス。他の連中も毎回この大会の上位に食い込む実力者ぞろいなんスよ」

「今年の優勝候補はどいつだ？」

リクが尋ねると、コーダは、ふむ、と考えながら弁当を一口食べ、一つずつ、匙で指して話した。

「魔導研究所からは“双龍”のクリン＝クラン。一番後ろにいた人ッス。あまり知られてないんスけど何か特殊な魔法が使えるって話ス。

ファトルエル勢はデュラス＝アーサー、右から二番目の一番人相の悪い奴スね。アイツはこのファトルエルのリーグの中でもダントツに強いやつで、“クリーチャー”って渾名されてやス。朝やってた賭けのオッズが一番低いス。いわゆる本命ッスね。

それからカンファータの魔導騎士団、“真の豪傑”シノン＝タークス！ 真ん中にいる奴スけど、五年前のファトルエルの大会の優勝者なんスよん」

「へえ……」

「いつも優勝者はどれかの団体の優勝候補が勝ちやス。それ以外の奴はみんな大穴なんス。でも、たま〜に三大勢力以外、全く無名の奴が勝つ事があるんスよ。一番最近なのが、十五年前。あそこにいる、当時ガチガチの本命だった、“完璧”のカルク〓ジーマンを破って優勝したのが……かのファルガール〓カーンなんスよ！」

次第に熱が入り、最後には効果を狙った間まで入れて語りきったコーダに、リクはすっかり感心した目で彼を見た。

「よく知ってるなあ……」

「俺なんてまだまだツスよ」と、コーダは照れくさそうに笑って言った。

突然会場の中にシンバルの音が鳴り響いた。

同時に観客席の周りにスタンバイしていたブラスバンドがシンバルのリズムに合わせて演奏を始める。

そして決闘場に入る為の対峙する二つの大きな扉の内、一つが重々しく開いた。

そこから出て来たのはきれいに二列縦隊に並んだ兵士達だった。先程見た魔導騎士団とは違って、全身鎧を着込んで完全武装している。

入って来た兵士達は外側の壁に沿うように歩き、自分の配置に付くと、中心である砂丘の頂に向けて剣を構える。

それがだんだんと内側に向かって進行し、扉から砂丘に頂上に向かう道を残して全てが剣を掲げる兵士達に埋め尽くされた。

今度出て来たのは、黒いローブに身を包む魔導士達の集団だった。その後ろからまた鎧兜に身を包んだ兵士達が現れ、最終的に、砂丘の中心を残し、一番内側には魔導士達、その外側全てを兵士達が

困むという格好になった。

そして、今まで演奏されていた行進曲がキリのいいところまでいって終わり、次に荘厳な音楽が演奏された。

それに合わせるように、砂丘の魔導士達がぶつぶつと呪文を唱え、祈りはじめる。

すると、砂丘の頂に丸い魔法陣のようなものが浮かび上がり、光が走って、砂丘に豪華な舞台を形作って行く。

観客全員がそれに刮目し、息を飲む。

最後に円形の台が出来る、まばゆい光が舞台を包み込んだ。

あまりの眩しさに一瞬目を瞑り、かろうじて再び目を開くと、そこには立派な衣装に身を包んだ、王に似つかわしくないがっしりとした体格の男がそこにいた。

カンファータ国王、ハルイラ＝カンファータ十八世である。

一連の魔導ショーに観客達は沸き上がった。

しばらく間が開いた後、シンバルの音が鳴り響き、観客達は再び口を閉じた。

その静寂を待って、カンファータ国王は話しはじめた。

「屈強なる戦士達よ！　そして闘いを見守らんとする者達よ！　このような砂漠の真ん中までよく来てくれた！」

そしてその右腕を高々と掲げた。その手には一つのペンダントがぶら下げられていた。何やら意味の有りそうな紋章を象ったものだ。それを見たりくは確信した。

（やっぱりあの時のペンダントだ……！）

「闘う者達よ！　これは最強の者である証だ！　明日より始まる闘

いは、これを巡って行われる！ 残り二人まで勝ち残り、決勝戦を勝ち抜いた時！ その者は最強であると認められ、このペンダントは授与される事となる！」

観客も大会参加者もそのペンダントに視線を集中させていた。しかし、やはり参加者はその目つきが全く違う。

「最強を決める闘いなのだ！ 私を含め、観客達全てが世界最高峰の闘いを望んでいる！」

例え、誰か予想もせぬ者がこれを取る事になろうとも、見る者にとってだけではなく、闘うそなた達自身にとって、良き闘いとなる事を祈る！」

カンファータ王がこう締めくくると、決闘場はわっ、と他の声の存在を許さぬ程の歓声に包まれた。

「なかなか名演説だったなあ、コーダ」

リクも拍手をしながら隣のコーダに話し掛けると返事が返ってこない。

この歓声の中なので聞こえないのかと隣を見ると、そこにはもう誰も座っていないかった。

「……………コーダ？」

**

この決闘場の歓声の中で、三人だけまるで別世界にいるように無反応でいる者達がいた。

ジルヴァルト、イナス、ハークーンの三人である。

「“双龍”、“クリーチャー”、“真の豪傑”、世界最高峰の闘いね」と、ハークーンはその口元にニヒルな笑みを浮かべた。

そして自分とイナスに挟まれて真ん中に座っているジルヴァルトをちらりと見る。

「良き闘いになるといいな」

それに対し、ジルヴァルトはやはり、無反応だった。それどころか、全く無視してイナスに尋ねる。

「……“滅びの魔力”の持ち主とやらは見つかったのか？」

尋ねられたイナスは、ため息をつきながら右目に付けていたモノクルの形をした“魔導眼鏡”を外した。

「ふむう、やはり表の魔力を見るだけじゃ分からんな。……まあ、それでわかるなら街の外からでも見つけてやるんだが」

「じゃ、どうするんだ？」と、ハークーンはジルヴァルトに無視された為か、やや不機嫌そうな声で聞いた。

「表の魔力を見て分からんという事は、何かで魔力を押さえているという事だ。魔封用の道具を身に付けているか、身体にそういう魔法陣を彫つてあるのかどちらかな」

「まさか一人一人捕まえて調べるつもりじゃないだろうな？」

眉を潜めて尋ねるジルヴァルトに、イナスは小さく溜め息をつく。

「余りにも不効率だが、そのつもりで望むしかない。だが、あつちもただの魔力じゃない。この大会中ずつと抑えていられる可能性は高くはないと思う」

「漏れ出す、という事か？」

ジルヴァルトの問いに、イナスは頷いて答えた。

「そうならばこちらのもの。この街のどこにいようと必ず見つけだしてやる。それにちよつとした策も練つてあるんだ」

「果たして上手く行くかね」

茶々を入れるハークーンをイナスが睨み付け、その鼻先に人さし指を突き付ける。

「お前の方はどうなんだ？　まだろくに情報も集まつてないんだろ
う？」

ハークーンの狙うのは“ラスファクト”だったが、ジルヴァルトとイナスが狙う“滅びの魔力”と同じく、ファトルエルにあるのは分かつているが、それ以外の事は何も分かつていない状況だった。

しかも、“滅びの魔力”はその特徴なども大分分かつているので、イナスが口にしたような目算も立てられるが、“ラスファクト”の場合、その形状も性質も、そもそも存在さえ不確かだ。

それからすると状況からいえばハークーンの方が進行状況は良くないと言える。

しかしハークーンは、素直にそうだと認めなかった。

「心配はいらん。情報は確かにまだ掴めていないが、情報源は確保出来てる」

「ほつ？」

イナスが白髪の混じった片眉を上げて興味を示すと、ハークーンは得意そうに説明した。

「このファトルエルにはいろいろ謎が多い。確かに少々環境は厳しいが、それでも謎を解きたい奴等は山ほどいる」

遠回しな言い方だったが、イナスはハークーンの言わんとしていることを悟って応じる。

「なるほど、それでファトルエルに住んでいる学者を当たってみるわけだな」

「ああそつだ。もう学者は見つかってる。それでダメでも横のつながりで学者は芋蔓式に見つかる」

「見つけても教えてくれるとは限らないだろう?」

「その点に関しては大丈夫だ。確実に知っている事全てを教えてもらおう」

そのジルヴァルトの問いに答えたハークーンの顔は狂暴性に満ちた笑みが浮かんでいた。

11 『初遭遇』

誰だって熊に遭うのは嫌だ。それを狙う狩人でもない限り。熊に遭った事のない人間ならなおさらだ。

始めて遭った時、どうしていいのか分からない。倒せばいいのか、逃げればいいのか。自分にあれが倒せるのか、どう倒せばいいのか。

強くなり、その時どうすればいいのかを知る権利を与えられるのは、その初めてを生き延びた者だけだ。

「うっんっ……!!」

式典が終わり、決闘場を出ようとする人々の流れから脱出したりクは座りっぱなしでこわばってしまった身体を思いきり伸ばした。限界まで吸い込んだ息を一気に吐き出すと、リクはあたりを見渡す。

途中でいなくなってしまったコーダを探す為だ。

こつも世話になっておいて、ろくに礼も言わずに別れるのはあまり好ましい事ではない。幸い彼はあのサソリで来ているはずだから、この人込みの中でも十分目立つはずだ。

しかし、運搬サソリの姿はどこにも見えない。

(さすがにこの人ごみ中じゃ、アレは乗れねーか……)

そこでリクは、この人ごみがなくなるまで決闘場の傍で待って

いる事にした。

その人ごみの中からは様々な話が聞こえて来た。

三人の優勝候補の中で誰が勝つか、デュラス「アーサー」とシノン「タークス」の闘いが楽しみだ、クリン「クラン」の闘いは誰も見た事がない等、主に優勝候補達が絡む話題がほとんどだった。

だが中にはマニアックな人間もいて、カルクの弟子であるカーエスの名前を挙げたり、三大勢力以外の有力な参加者の話をしたり、驚いた事にファルガールを街で見かけた、という者までいた。

ほとんど何も知らない彼にとっては思わぬ情報収集となった。

幸い有意義なものとなって時は過ぎ、周りの人数は人ごみと呼べるものでは無くなっていき、サソリが十分通れるくらいになっても、コーダは結局現れなかった。

（そもそもアイツ何しにきたんだ？）

魔導研究所勢が出て来てから現れて、式典が始まってから終わる瞬間までの間にいなくなった。つまり、式典は途中で抜けた事になる。

しかも、式典のメインであるカンファータ王のスピーチが一番最後だ。後は全部入場演出だった。と言う事はコーダは式典を見に来るのが目的ではなかったと言う事になる。

来ている間にした事と言えば、リクに弁当を与え、そして各勢力について説明した事くらいである。

（まさか何か目的があって俺に近付いてるわけじゃねーだろーしな
ー）

何であれ、今ここに、その疑問を氷解させるものは何もない。
リクはため息をついた。

ファルガールの事といい、マーシアの事といい、そしてコーダの事といい、どうも最近気になる事はたくさんあり、なかなかその答えが得られない。

これはなかなかストレスがたまる。

ふと見ると、三人連れの男達が決闘場から出て来ていた。

一人は初老の男、もう一人はファルガールと同じくらいの年齢だろうか、そして最後の一人はリクと同じくらいだろう。

三人とも一様の服を着ていた。少しでも太陽の光を跳ね返そうと、周りが明るいろの服ばかりのなかでそれは黒く、胸に何か紋章のような者を刺繍してある。

服装だけではなく、その三人はどこか雰囲気違っていた。

大会の参加者達の緊張した感じでも、それを見に来た者達のためしそうなそれでもない。

どちらかと言うと、エントリーの受付係のような仕事でそこにいるといった感じだろうか。しかし実際大会の運営に当たっているカンプアータの人間ではないようだ。

と、若い方の男に戦士の一人がぶつかつた。

その戦士は血気盛んな様子で、男に何か捲し立てていたが、不意にグラリとバランスを崩し、その場に倒れてしまった。

「え………？」

その情景の不自然さにリクは思わず声を漏らし、目を見開いた。

（まさか………今で殺したのか………？）

二人の男はその場で少し立ち止まり、ぼそぼそ話し合つと、また歩き始めた。

その背後で男の死体が燃え上がる。

(……魔法？ …… あいつらは……魔導士？)

なおも彼等から目をはなせないでいると、不意に若い方がこちらを向き、リクと目が合った。

リクはぎくりとした。これは不味い。一部始終見ていたのがばれてしまったかもしれない。

逃げようと思った。

しかしもし気付かれてなければ、不自然な行動をとって改めて知らせてやる必要はない。

何があったか問いつめて、倒してしまおうとも考えた。

これも却下された。敵の攻撃手段が分からない、これは非常に危険だ。

(それよりも……それよりも、どうして俺は……)

あいつの眼から目が離せないんだ……!?

向こうが無気味な笑いを浮かべるのが見えた。

リクの背筋に悪寒が走る。

……教エテヤロウカ？

「え……?」

……知リタイノダロウ？

(……頭の中に声が入り込んでくる！？ いや……？ そっじゃなくって……)

彼は、目で話し掛けてきているのだ。

……ドウヤツテアイツヲ殺シタノカ……

(ヤバい、絶対にヤバい)

リクの頭の中では何度も危険信号が駆け巡っていた。

早く彼から目を放さなければ。

早く目を瞑らなければ。

早く手で目を塞がなければ。

……デハ、教エテヤル……

は……やく何とか……しな……けれ……ば

ぞっ、ぞっ、ぞっ……

不思議な事に耳のそばで靴が砂を踏む音が聞こえた。

リクは自分が地面で倒れ伏している事に気付くのにさほど時間がかからなかった。

少し手の指を動かしてみる。痛みはほとんどない。足も少し。

(……大丈夫だ)

不意に気を失って倒れただけらしい。

しかし彼は立ち上がるうとしなかった。頭上から声が聞こえてきたからだ。

「驚いたな……この男、まだ生きてやがる」

「無意識で魔力の障壁を張ったんだろう。ある程度強い魔導士なら誰でもできる。どうだ、イナス：“滅びの魔力”は持っていそうか？」

(イナス：“滅びの魔力”……?)

じやりっと靴音がして、衣擦れの音が聞こえる。

そして不意にリクの右手が持ち上げられた。どうやらさっきの物音はしゃがんだ時のものらしい。

右手は握手するように握られると、すぐにポイツと放り出された。

「いや、この男じゃないな。ジルヴァルト、どうする？」

(ジルヴァルト……ジルヴァルト……)

声から年齢を判断すれば、はじめに話し掛けたのが中年の男、次がジルヴァルト、リクの同年代の男で、残る一人がイナス、初老の男だろう。

「殺すのか？」

「放っておく。一度どうしようもない敗北を味わえば、強くなるかもしれない」

(何を言ってるんだ、こいつ……?)と、リクはジルヴァルトの言動が理解できず、密かに眉を潜めたが、命が助かったと言う安堵の中ではそれも一瞬の事だった。

「……まあいい、それより今日中にハークーンの用事を終わらせよう。行くぞ」

ハークーンとは中年男の名前だろう。

ぞっ、ぞっ、ぞっ……

どんどん遠ざかって行く足音がとうとう聞こえなくなった時、リクはゆっくりと頭を上げ、ゆっくりと体を起こし、立ち上がった。

「イナス……“滅びの魔力”……ハークーン……、そしてジルヴァルト……」

リクは彼等が去った方向を見つめ、両脇の握りこぶしをぎゅっと握りしめた。

12 『その業ある限り』

人は「悪い行為」を「罪」と呼ぶ。

しかし、「悪い」の定義は人によって様々である。

それ故に、人々はすれ違い、密かに傷付き、知らずに傷付ける。罪の傷は治ることを許されず、償える罪は存在しない。そして晴れた空に浮かぶ雲のように時々心を曇らせる。

それは小さな拍子に雨雲となり、時に嵐となり得るかもしれない。そうなっても諦めてはいけない。

頭上の空がいくら暗くても、必ずどこかに晴れ間はあるのだから。そして激しい嵐であればあるほどそれを抜けた時の青空は明るく美しいのだから。

夕方になって、リクが宿に戻った時、ファルガールはベッドに横になって本を読んでいた。彼はリクが彼に一言の声も掛けず、ばふっと自分のベッドに倒れ込むのを横目でちらりと見て言った。

「浮かねえ顔してるじゃねえか」

「ファル……」

リクはうつ伏せに寝たまま話し掛けた。

「俺って優勝できると思うか？」

「あん？ 行列に並んでるいかつい木偶の坊見てビビったのか？」

「いや……俺とそう変わらない奴に睨まれただけで殺されかけた」

それを聞いてもファルガールは全く表情を変えなかった。その代わりに本を閉じ、立ち上がる。

その気配を感じ取ったリクは少し体を起こし、ファルガールの姿をちらりと見た。彼は荷物をもって扉のノブに手をかけていた。

「どこか行くのか？」

「外だ。しばらく戻らねえ。そうだな、大会の終わる頃には戻ってる」

リクが顔色を変えてがばっと起き上がった。

「ちよつと待てよ、そんなの聞いてねーぞ！」

「当たりめえだろ。話してねえんだから」と、ファルガールがあっけらかんと答えたものである。

もちろんそんな屁理屈でリクが納得するはずはない。

「どこに、何しに行くんだよ！」

「あのなあ」と、ファルガールがうるさそうに、眉根を寄せた。「何で俺が黙ってたのか分からねえのか？ お前に知られたくねえからだよ」

ファルガールはノブをまわし、扉をあけた。しかしすぐには潜らずに、呆然とファルガールを見ているリクを振り返って優しく話しかけた。

「リク」

「……何だよ」

「お前は絶対に優勝する。相手がどんな奴だろうとな、逃げずに立

ち向かえば絶対に勝てる。……リク、お前の夢は何だ？」

突然意外な事を聞かれて、リクは戸惑った。

「俺の……夢……？」

ファルガールは答えを待たずに続けた。

「少なくともこんなチンケな大会で優勝する事じゃねえだろうが。逆に言うんだ。こんな大会を優勝出来んようならお前の夢は絶対に叶わねえよ」

そして一呼吸間をあけると、ファルガールは念を押しして諭すように言った。

「いいな。夢を失いたくなきゃ、絶対に負けるなよ」

そしてファルガールは扉の向こうに一步踏み出したが、また立ち止まってリクを振り返った。

「そうだ、忘れてたな」

「何？」

「ほれ、昨日酒場で気が向いた時に教えてやるって言ったろう？」

「ん？ ああ、アレか」

ファルガールとマーシアの中に疑問を抱くリクに対して、ファルガールが答えた事だろう。逢いたいとは思ってたけど、同時に思ってた事もある、というのが、その時のファルガールの答えだった。

同時に思っていた事は結局その時は答えなかったが、教える気になっただろうか。

「ああ。俺は逢いたいと思ってたんだ、マーシアと。手紙だけでも書こうかとも思った。でもな、俺はいつもその一步手前でそれを止めてたんだ」

「何でだよ？」

「逢いたいと思うと同時に、逢っちゃいけない、とも思っていたからだ」

それだけ言うと、ファルガールは今度こそ扉の向こうに姿を消した。

後に残されたリクは、「なんだ、それ……？」と、眉をしかめるばかりだった。

大きな三日月の光が決闘場を照らしていた。この街で唯一の石造りの建物はその光を反射させ、栄えある最強の戦士を決める舞台を神秘的に見せていた。

誰もいない決闘場の観客席の片隅にファルガールが座っていた。傍らにはカルスの瓶を置き、セピア色の液体を入れたグラスを片手に持っている。

カルのセピア色は見る度に、過去を思い出させる。十五年前、ここでカルク＝ジーマンと闘った事、マーシアと出会った事、魔導学校を出てからマーシアに宛てた手紙の事、そして、自分を百八十度変えたある事件の事。

(十年前か……)

その頃、ファルガールは自分の弟子を見つける為、世界を放浪して歩いてきた。人の住んでいるところならどこにだって行った。

彼は自分を貫く為ならどんな苦勞も厭わない男だった。

そして十年前、ある村に寄った。

ここでも彼は自分が教える対象を見つけられないでいた。一週間程滞在したのち、彼は翌日この村を発つ事に決めた。

しかし、悲劇はその夜に起こった。その村を大災厄が襲ったのだ。竜巻は全ての建物を破壊し尽くし、全てを村から巻き上げた。

雷はところ構わず乱れ落ち、打たれたものは皆燃え上がった。

風がその炎を広げた。

そして、どこからともなく現れたクリーチャーの群れが人々を襲い、殺戮を行った。

ファルガールは大災厄と闘った。

竜巻きに巻き込まれそうになった者を突き飛ばして助けた。

雷に打たれそうになった者は、魔法を使って防いでやった。

炎も魔法で消し止めた。

クリーチャーも自らの持つ、あらゆる戦闘力を駆使して片っ端から倒して行った。

だが、自分が目を放している間に助けた人々は死んでゆく。

ファルガールはめげずに、一人でも多く助けようとかんばった。

決闘場でカルクと闘ったその時よりも遥かに多くの力を使って、力が尽きても気力だけで大災厄と闘った。

嵐が過ぎ、夜が開けた

生き残っているのは彼一人だけだった。

ファトルエルの大会の優勝し、最強の魔導士だった彼は、大災厄にまるで歯が立たず、自分以外誰も助けられなかった。

彼が、一夜の闘いに疲れ果て、膝を付いて地面に倒れ込もうとした時、幽かなうめき声が聞こえた。

彼は慌てて立ち上がり、そこに行くとき子供が一人倒れていた。

その子供の名がリク＝エールである事を知ったのは彼が目覚めてからの事だった。

それから彼は変わった。自分に対する自信は一切持たなくなった。慢心と言う言葉は彼の辞書からは消え失せた。これも何かの縁と、弟子にしたリクと共に一から修行をやり直した。今までの彼は大災厄の中で死んでしまった。

最強だと驕っていた自分。

誰が相手であろうと絶対に勝つのは自分だと信じていた自分。

それがなければ一人でも助けられたかもしれない。

その業ある限り、彼は自分に幸を求めない。

その業ある限り、彼が飲むのは美酒ではなく、過去色をした苦い酒だ。

その業ある限り、彼は愛する人に逢ってはならないのだ。

13 『苦勞人』

苦勞は報われるとは限らない。

むしろ、報われない事の方が多い。

その苦勞は無駄となり、人はそれを恐れ、苦勞を厭う。

報われなければ、その苦勞は無駄なのだろうか。

それは違う。

苦勞する事そのものは決してその人のマイナスにはならない。

苦勞人よ、誇るがいい。

自分を信じ、その為に苦勞を全うする事が出来たのだから。

ふう、とファルガールはため息をつき、カルの瓶の蓋を閉めた。

昨日は不覚を取ったが、今日はそういう訳には行かない。

「待たせたようだね、ファルガール」と、そこに現れたのはオキナだった。

「いいや、丁度良かった。今、月見酒に飽きたところだ」と、瓶を振ってみせる。

「月見酒か……」オキナは、ファルガールの隣に腰掛けると、星空に鎮座する三日月を仰いだ。「果たして旨かったのかな？」

「いや、大して」

ファルガールの答えに、オキナは微笑んで頷く。

「だろうね。一人で飲む酒の旨かろうはずはない」

そして一冊の新しいノートをファルガールに渡した。

「このファトルエルでは水は不足しない。地下に泉が湧いているからだ。それは君も知っているね？」

ファルガールは頷いた。

「で、地質学的に見ると、ここに水が湧くのは可笑しいとされてるんだろ。この街の周りを調べても全く水脈がねえんだから」

「私の記憶が正しければ、あれは十七年前だ。大陸の最南端にあるヴァクス山で噴火が起きた。しかしヴァクス山はくしゃみをしただけだったかのようにたった一度の爆発で静まり返ってしまった。

不思議な事に、それ以来ヴァクス山は休火山になってしまったのだよ。それから噴火が静まった後、山の麓で一つの赤く光り輝く大きな石が見付かった。その街の学者達はすぐにこの石が降って来た事と、その事実の因果関係に気付いた。

その麓でヴァクス山を火山たらしめていたのではないか、とね。その後の調べで、ヴァクス山は休火山どころか、ただの山になってしまったと判明した。元々、ヴァクス山は火山ではなく、その赤い石によって火山になっていたのだよ。

その石は『星の産物』という意味で“ラスファクト”と名付けられ、その発見に世界は大騒ぎになって、直ちに候補を挙げて各地で調査の手が入れられ、そのうちのいくつかで“ラスファクト”と思われる物体が発見された。

ファトルエルの地下オアシスもこの時挙げられ、今も私を含めるいくらかの学者達の調査されている。

思えば十五年前、神秘に溢れるこの星の産物に惹かれつつも、後込みしていた私の背中を押したのはファトルエルの大会に参加しに来ていた君だった」

二人の脳裏に共通して蘇るのは十五年前のこの場所だった。

あの日もこのような月の夜だった。

やはりこの場所に来てぼうっと、月を眺めていたオキナは自分の背後に人がいる事に気がついた。

「君はうちの宿の客だったね。確かファルガール君と言ったか。君は大会に参加するのだろうか？　こんな夜遅くに起きてても大丈夫なのかな？」

「下見をしようと思ってよ。俺が決勝を闘う事になる舞台をな」

そう答えたファルガールの自身に満ちた表情は月夜に生えて映った。

「大した自信だね」

「あんたは自信がなさそうだな」

返されて、オキナは静かに俯いた。そして黙り込む。

「オウナが心配してたぜ。ここに来る時は元気だったのに、暫くしてからずっと落ち込んでるって。何か凄えモン探しに来たんだろ？」

「ああ、星が造ったものだよ」

眉をしかめるファルガールに、オキナは“ラスファクト”の事を語って聞かせた。

「先程君はああ言ったが、自信はあるんだよ。必ず“ラスファクト”を見つけたしてみせる」

そう語るオキナはうつむけていた顔を上げた。

「だったら何でそんな辛気くせえ顔してんだ？」

「不安なんだよ」

「不安？」

「ああ、“大いなる魔法”の大災厄は知っているだろう？」

ファルガールは頷いた。

「私は“ラスファクト”と同じく、大災厄も星の産物だと考えている。“ラスファクト”を下手に扱うと大災厄を呼び込んでしまう可能性が大きい」

事実、最初に“ラスファクト”が発見されたヴァクス山も大災厄に見舞われ、その他“ラスファクト”が見つかった地方でも同じ事が起こり、その後“ラスファクト”は姿を消してしまっている。

「じゃあ、何で探すのを止めねえんだ？」

「ふふふ、学者の性というやつだよ。どうしても一度“ラスファクト”というやつを拝んでみたいんだ。他の人間も探している。どの道見つからないままには終わるまい」

ファルガールは呆れたようにため息をついた。人間、自分と違う人種の事はなかなか理解できないものである。

少しの間した後、ファルガールがポンと手をついた。

「どうかしたのかな？」

「要するにその“ラスファクト”ってのを下手に扱わなきゃ大災厄は起こらねえんだよな？」

「ああ」

「で、あんたは見つけた後、周りのやつが下手に扱っちゃうのを恐れてる？」

「ああ」

答えを聞いた後、ファルガールは満足そうに頷いて見せた。

「よし、決まりだ」

「……ああ？」

何がいいたいのかわからなさそうにしているオキナをファルガールがビシッと指差した。

「“ラスファクト”は絶対にあんたが最初に見つける。で、他の奴から守り通すんだ。あんたは一度拝んだら十分なんだろう？」

それはオキナの不安を一気に晴らす明解な解答だった。

**

「見つけたのは三ヶ月前だった。それから私は君にいわれた通り、他の学者の目から反らす努力をし続けた。どう扱えばいいのか、研究しながらね。その結論が出たのは昨日、君が現れる直前だった。それに他の学者の目を騙すのもそろそろ限界を感じていたんだ。私がかか知っている事にみんな勘付きはじめている。」

そこに君が現れ、あの話を持ちかけたわけだ。全てのタイミングから考えて、これは運命的としか言い様がない。昨日私は悟ったんだよ。私の研究は、まさにこの為だったんだ、とね」

オキナはゆっくりと立ち上がった。

「案内しよう。“ラスファクト”への道の入り口へ」

こうして二人は連れ立って大決闘場の内部に入ってしまった。

大決闘場の内部は何層にも重なる回廊で構成されている。その回廊は螺旋状に大決闘場の観客席を巻き、進んでいけばいつの間にか一番上につく仕組みだった。

その螺旋回廊には全く人氣がなく、窓から差し込む月光の他は二人が持つカンテラの光しか光源が見当たらない。

「この町のどこにあるんだ？ 入り口とやらは」

「厳密にいうとどこにでもある。この町の水源は疑いの余地もなく

“ラスファクト”だ。よって井戸の底の水流を辿っていけば必ず“ラスファクト”に行き着く」

それを聞いたファルガールの表情は不満に溢れている。

「答えになってねえぞ」

「悪かった。で、入り口なのだが、それはここにあるんだ」

ファルガールの不満顔が更に露骨になった。

「本当の話だ。“ラスファクト”への道の入り口はこの大決闘場の地下にある」

「どういう事だ？」

この大決闘場に地下はないはずである。少なくとも一般に知られている限りでは。だが、誰も建てた覚えがない建物だ。

だから絶対に無いと言い切れる人間はこの星の上には存在しない。

「私はこの太古より存続しているこの建物は“ラスファクト”と何の関係も無いとはどうしても思えなかつたのだよ。太古からの建物は他にもあるが、私はあるならここだと確信していた」

「それでここを徹底的に調べたわけだ」

「ああ、十五年も掛けてな。ある日は石の一つ一つを丹念に調べた。ある日は建物の構造に着目して考え込んだ。また、ある日はこの大決闘場について記述されている古文書を読みあさった」

「……よくやるぜ」

ファルガールはその学者根性に呆れてため息をつく。否、学者根性だけで実際あるかどうかも分からないものにそこまで時間と手間を掛けられるものではない。

もし無ければ、あっても他の人間に見つけられれば、自分が注ぎ込んだ全ては無駄になってしまふのだから。

呆れと尊敬が混ざったファルガールの視線を受け、オキナはニッと笑った。

「しかし、その苦勞が大きいほど報われた時には嬉しいものなのだよ。そしてこれが」と、いきなり壁を埋め尽くす石の一つに手の平

を当てた。

「エマタ・ケア」と、呪文のようなものを唱えると、その石は輝き出し、その真下に魔法陣らしきものが浮かび上がる。

「私の苦をもつてしてもおつりが来る報いだ」

ファルガールはよく見つけたものだと感じた。この石の位置、入り口を開く手段、呪文、どれをとっても並大抵の事で見つけられるものでは無い。

「その魔法陣に乗れば下まで行き着く。道順は全部ノートに記しておいた。そしてこれもノートに書いてある事だが、一応口頭でも伝えておこう」

「何だ？」

「ラスファクト」に魔力を触れさせるな。“ラスファクト”は魔力に対して防衛本能を持っている。それに魔力を触れさせると……」

「大災厄って訳か」

オキナは重々しく頷いた。

「ラスファクト」が関連したと思われる大災厄の記録を掻き集めて、まとめてみた。大災厄が起こったのは共通して、魔力を使用する検査を行った瞬間だったそうだ。ファルガール、君はこれが何を表していると思う？」

思っても見なかった質問にファルガールは即答できなかった。しばらく考えてみても答えは浮かび上がってこない。

「大事なポイントは“ラスファクト”に魔力に対する防衛本能が宿っているという事だ」

オキナがヒントを出してやると、ファルガールは何か弾けたように顔を上げた。

「つまり、魔力なら“ラスファクト”を壊す事ができる？」

オキナは頷いて続けた。

「“ラスファクト”を壊しても意味は無いと思うがね、考えようによつては同じ星の産物である“大いなる魔法”に対抗するにはやはり魔力しか無い、という事になる」

それを聞いたファルガールの表情が一瞬固まる。

“大いなる魔法”と闘うといつても、彼自身あまり現実性を感じていなかった。

あの何もかも奪い尽くす大災厄を相手に何をもって制すればいいのか分からなかったからである。

ところが今、この老人の手によってそれが臙げに見えて来た気がする。

勿論、自分の魔力など問題にならないほど途方も無く大きな魔力を必要とするだろう。

しかしそれが分かっただけでも、ファルガールがここに来た意味というものがあつた。

そして“ラスファクト”をこの目で見て感じる事が出来たら、また一つ、何か分かるかもしれない。

「オキナ」

「何かな？」

オキナが目を向けると、何とファルガールは突然頭を下げた。

「ありがとう。あなたの十五年は絶対に無駄には終わらせねえ」

ファルガールは決して頻繁に人に頭を下げるタイプでは無いので、オキナはそれを見た時、戸惑いを感じた。

しかし彼に“ラスファクト”の事を教えてくれるように頼んだ時の決意を思うと、この真摯な態度はすぐにオキナに受け入れられた。

「こちらこそありがとう。さあ、行ってくるがいい。君の途方も無い夢を果たす為に」

「ああ！」

ファルガールは力強く頷くと、魔法陣の上に乗った。たちまち魔法陣から光が溢れ、彼の身体を包み込む。それは足下から消えて行き、そしてファルガールは消えてしまった。

それを見届けるとオキナは天井を仰ぎ、大きく息を吐き出した。それからオキナは家に帰って休もうと家路についた。

何しろあのノートをまとめていたおかげで昨日は徹夜だったのである。こうして伝えたい事を全て伝え、ファルガールを送り出した今、疲労と睡魔が一気に襲い掛かって来た。

大決闘場を出たところで三人の男に前を塞がれた。

「あんたがDr・オキナ」バトレアスか？」

真ん中には大柄でファルガールと同じくらいの年齢であろう男、気のせいかどこかで見た事がある気がする。

その両側には初老の男と、リクと同じくらいの年齢の男が付き添っている。

「いかにもそうだが私に何か用かね？」

「あんたに少し聞きたい事があるんだ」

その男の顔は笑みを浮かべていた。

しかし、ファルガールやリクのそれとは明らかに質の違うものだった。

14 『二つの涙』

涙は純粹なようで実にいろいろな面を持っている。痛みに、恐怖に、苦しみに、悲しみに、悔しさに。そして、感動に、喜びに。

小さな頃は涙を見せることは何でもなかった。大きくなって自分の涙を見られることに恥を感じるようになった。

幼い頃は涙を見ても、分からなかった。大人になって理解した。

涙は、心から湧き出てくるものなのだ。

彼は闇の中にいた。接地感はなく、浮遊感もない。そして何も聞こえない。何も見えない。手を顔の前に持ってきてみる。それでも何も見えない。そのまま髪を触ってみる、やっと自分を確かめる事ができる。

……マタ、懲リスニキタノカ……？

その闇の中に突然見開かれた眼が語る。

……折角、生力シテヤツタノニ……

(うるさい！ こっちが頼んだ訳じゃねー！)

彼は必死に言い返した。だが、とても冷静な状態とはいえない。極度の恐怖と緊張で、彼は今言った事を言ったそばから、忘れてしまっている。

……オヤオヤ、迷惑ダツタノカ？ ソレハ済マナイコトヲシタ。

(いや、ただあんたが、後悔する事になるだけの話だ)

眼の形が微妙に変わり、小さく揺れた。どうやら笑っているらしい。

……ククク、心配御無用ダ……

その眼がカッと見開いた。

……今度ハチャント殺シテヤルサ……

その瞬間、放たれた眼光に彼は飲み込まれていく。そして後には何も残らなかった。

「ぶあつ……！」と、リクは跳ね上がるように飛び起きた。そしてしばらく、息を止めていたかのように大急ぎで呼吸をする。呼吸を整えると、寝汗でべったりくっついた服を引っ張る。

「あんまりいい夢は見れなかったみてーだな。」

彼は窓から表を見た。すっかり暗くなっている。

最後に見たのは夕方の薄暗い頃だっただろうか。ファルガールが部屋から出て行くのを見送ってそのまま寝てしまっていたらしい。あまり時間は遅くないようだった。

彼はもう一度寝ようとベッドに横になる。が、ちっとも睡魔がやってきてくれない。

（やっぱり寝んの早過ぎたかな）と、ここでリクはある事に気が付いた。（そーいや、ファルのいねー夜つてのは久しぶりだな）

しばらくぼんやりと天井を見ていたが、一向に眠れる気がしてこない。リクはベッドから下り、汗に濡れた服を着替えて、部屋を出た。

ドアを潜ろうとしたところでリクは突然に声を上げる。

「うわあっ！」

ドアを出たところでいきなりマーシアが立っていたのだ。

普通こういう鉢合わせは、双方驚くものだが、マーシアは何故か少しも驚いた様子を見せなかった。

「そんなに驚く事ないじゃない」
「……あんたの分も驚いてやった、と言う事にしといてくれ。ところでファルならいねーぞ。夕方にどっかに消えちまった」
「そう、どこに行くのか聞いた？」

リクは首を振った。

「いや、聞いてねーぞって言ったら……」

「『黙ってたのはお前に知られたくないからだ』、かしら？」と、
マーシアはリクの言葉に割り込んで言った。

口調は違うが、一言一句外さなかったマーシアに、彼はほう、と
いたく感心した様子を見せた。

マーシアは微笑みを浮かべてさらに続けた。

「なら、あなたでいいわ。代わりに私と飲んで頂戴」

そして二人は昨日の酒場にいた。

他に客はいない。がらんとした店内を見回して、リクはこの店は
本当にやっていけているのかどうか余計な心配をした。

「フレスニー」

「水と何か軽く食べられるモンをくれ」

それぞれ注文が済むと、二人はテーブルの一つに向かい合って座

った。

座るまではよかったが、何を話していいのか分からない。

確かにファルガールとマーシアは恋人同士らしいが、リクとマーシアは昨日会ったばかりの関係だ。

頼んだものが運ばれてくるまで、彼等の間は気まずい沈黙に支配された。

「お待たせしました」と、そこに助け舟のごとく注文したものがテーブルに運ばれて来た。

マーシアは赤紫色をした液体の満たされたグラスを手に取ると、リクに見えるように持ち上げて微笑みかけた。

「さあ、まずは乾杯しましょう」

リクはそれに呼応して、水の入ったグラスを持ち上げて、マーシアのグラスと合わせた。

そしてそれぞれ一口飲む。

グラスを置くと、リクは頼んだ軽食である油で揚げた芋を摘んで口の中に入れた。

「き、昨日は何か悪かったな。ファルとあなたの仲を変に否定しちゃって」

リクがつつかえながらも何とか切り出して謝ると、マーシアは、くすつと笑った。

「気にしないで、言われても仕方のないところは確かにあったもの」

「昨日、ファルがあんたに逢いたいと思っても同時に思っていたことがあるって言ってたろ？」

「ええ、気が向いたら教えてやるって言うていたわね。で、教えてもらったのかしら？」

リクは頷いた。

「今日、ファルが出ていく時にな」

「何て？」

「逢いたいとは思ってた、でも同時に逢っちゃいけないーとも思ってたんだとさ」

リクはマーシアの反応を待った。しかし彼女は静かにプレスニーを飲んだだけだった。しかし、グラスを口から離れた後、先程まで口元に浮かべていた微笑みが消えていた。

マーシアなら分かると思ったのだが、この様子じゃあまり分かっていないらしい。

少し残念に思っていると、今度はマーシアから質問をして来た。

「ねえ、あなたといたこの十年でファルガールは何か変わった？」

「ん……？ いや、大して変わってねーと思うけど。でも何でそんなことを聞くんだ？」

聞き返すと、マーシアはその答えとして彼女が昨日ファルガールに感じた違和感を語った。

それを聞いたリクは、納得すると共に、思い当たる事があった。

「自信がなくなった……か。やっぱりあの時のことかな」

「……聞かせて」

リクは頷いて話しはじめた。

ファルガールがやってきて暫くした時、自分の村が大災厄に襲わ

れた事を、クリーチャーに、自分の目の前で両親を殺された事を。
マーシアはリクのいつもの明るさのない淡々とした口調に、リクには気の毒な事を聞いてしまった、と後悔したが、それでも聞きた
い気持ちは揺るがなかった。

「気が付くと俺は何もない野原に寝ていた」

**

嵐が過ぎ去った後の日は、必ず雲一つない快晴になると言われる
が、そればかりは大災厄の場合にも例に漏れなかった。

昨日はあれだけ火を煽り、多くの人々を焼き殺した風が、何もか
も離れたかのように、やさしく幼きリクの顔を撫でていく。

彼はしばらく寝たまま動こうとしなかったが、やがて自分のそば
に誰かが座っているのに気が付いた。

体を起こすと、その男が話し掛けてきた。

「目が覚めたか」

「おじさんも生き残れたの？」

リクの問いに、その男は憔悴し切った顔に苦笑を浮かべて頷く。

「ああ、なんとか、な」

「他の人は？」

男は黙って首を振った。

「生き残れたのは俺とお前だけだ」

二人はしばらく黙っていた。

その間にリクは、この男が数日前に村にやってきた魔導士だといふ事を思い出した。

「おじさん、あの嵐に負けちゃったの？」

男は黙って、こくりと頷いた。

だがそうやって首を下げたまま頭を挙げようとしない。

「おじさん、どうしたの？」

「ああ、自分が情けなくってな……。小僧、これを見てみる」と、男は、首からペンダントを外してリクに渡した。何やら訳の分からない紋章を象ったものだ。それは子供のリクにはずっしりと重かった。

「これ何？」

「最強の証だ」

「さいきょう？ 一番強いって事？」

そのペンダントを目の前に掲げながら、尋ねるリクに、男は怒りの混じった声で答える。

「ああ、そうだ。信じるか？ ……信じられるわけねえよな。……

でも俺は信じてたんだよ。昨日まで俺が一番強く、一番正しい、何でもできるって、本気で思ってたんだ。

ところが昨日はあのザマだ。嵐の中で誰一人助けられなかった…あの嵐の中じゃ、俺は無力だった。俺の正しさなど誰の助けにもならなかった。俺は……俺は何もできなかった……！」

男は拳を地面にぶつけた。そして、そのままわなわたと震える。リクがその男の顔を覗くと、その目から涙が溢れていた。大人の男が泣くのを見たことがなく、大人の男は泣かないものなのだと思っていた彼にとつてその涙は衝撃的なものだった。そんな彼にリクは立ち上がって言った。

「僕ね、前はよく虐められて泣いてたんだ。でもね、父さんに言われたんだ。泣くほど悔しいのか、だったら強くなって、泣かないで済むようになってみるって。僕、毎日練習して街で一番ケン力強くなったんだ。あれからほとんど、泣いた事なんてなかったよ。だからさ、おじさんも悔しくて泣くんだったら、あの嵐より強くなればいいよ。そしたら泣く事なんて無くなるよ」

男は突然顔を上げた。

「大いなる魔法」より強くなる？ そんな事が出来ると思うか？
「父さんは何でも目標をもって、努力すれば必ず出来るようになるって言ってたよ」

男は、血で赤黒く固まっている袖で涙を拭い、リクの方に向き直った。

「……手伝ってくれるか？」
リクは無邪気に頷いた。「うん、いいよ。」
「俺はファルガールカーンだ。お前は？」
「僕はリクだよ」

「よく思い出してみりゃ、俺も大それた事言ったもんだよな。とにかく、ファルが泣くのを見たのはあれが最初で最後だった」

「そんな事が……」

このリクの話でマーシアは全て理解した。

何故ファルガールが変わってしまったのか、何故自分に逢いたいと思っても、逢ってはならないと、自分を制し続けて来たのか。

自信を潰された者はその後三種類に別れる。

止めてしまう者、執着する者、そしてやり直す者。

前者二つはよくある話、そしてファルガールが一番難しい最後を選び、その上、自らの幸せを戒めた。

自分の恋人と逢うという幸せを。

マーシアの心情は複雑だ。

自分と逢うという行為が幸せにとられたというのは嬉しい。

だが、昨日は偶然逢ってしまったが、これからは一層自分を警戒する事になるだろう、そうなるともう二度と逢えないかもしれない。

「余程それがこたえたのね……。ただ自信を無くしただけじゃ、そこまでストイックになりきれない。自分が助けられれば在るはずだった幸せを思うと、彼は幸せになるわけにはいかない……」

そしてファルガールは夢を果たすまで自分に逢おうとしないだろう。

今度の夢は果たせないかもしれない。

果たしても、彼は気に病み、まだ自分と逢おうとしないかもしれない。

ない。

もう、ファルガールは自分の元に戻ってこない……？

いつの間にか、マーシアの目からは涙が止まらなくなっていた。

それからマーシアは止め処なく流れる涙で出た水分を補うかのよう
にフレスニーを次々とあおっていく。

リクはあまり飲み過ぎないように注意しようと思ったが、この状
況でそれは野暮だと思い直した。

リクから見ると、マーシアはいつもその口元に笑みを浮かべ、掴
み所のない女性だと思っていたが、目の前にいる女性はそれとは全
く違う女性だ。

そして、こちらが本当のマーシアなのだろう。

思い出のファルガール、そして目の前のマーシア。

リクはこの日二つの涙を見た。

そして長年、一緒にいたファルガールの本心を垣間見、“冷炎の
魔女”の本当の姿を目の当たりにした。

リクは飲まずにはいられなかった。

酒はファルガールのいつも飲むカルにした。

飲んで、思い知った。

ファルガールが飲んでいた酒の苦さと、強さを。

15 『二人を見守るのは』

傍観。その事に関係せず、ただ黙って見ている事。
見守る事は傍観する事なのだろうか。

確かに見守る者はその事には関わらない。

口を出さない。

手も出さない。

しかし、ただ見ているだけだろうか。

見守る者はその人々を想いながら見るのだ。

事がうまく運ばなければ、彼は悲しみに暮れるだろう。

事が成就すれば、彼は密かに祝うだろう。

彼は確かに口は出さない、そして手も出さない。

しかしそれはその者達の事を想えばこそ、出さないものなのだ。
その者達の真の幸せが彼の願いなのだから。

リクは真夜中の大通りを歩いていた。

一人ではない。もう一人、マーシアを背負っている。

彼女はあの後、マーシアは泣くままに痛飲し、そのまま眠ってしまった。

リクはしばらくそのままにしていたが、その内に酒場の閉店時間が来てしまい、追い出される事になった。

しかしマーシアが起きる様子がないので、店主に魔導研究所の人

間が泊まっている宿を教えてもらい、今に至る。

時々身体がふらりと傾く。リクはその度に足を踏ん張って倒れるのを防いだ。

それはマーシアが重い訳ではなかった。

事実、昨日遥かに重いファルガールを担いでもここまでふらふらではなかった。

彼の足元を危なくさせているのは、今日飲んだ一杯のカルである。これが異常にきつく、たった一杯飲んだだけで彼の顔は真っ赤になり、頭がガンガンしている。

(明日から大会なのに……)

そうして心配できるところを見ると、幸いにも思考力は大して落ちていないようだ。

昨日と違うのは酒だけではなかった。

背負っている人間が美しい女性だと言う事である。

背中からの柔らかい感触、耳もとに掛けられる寝息。性に関する云々はファルガールからすでに教えてもらって知っているが、まだ女性というものに目覚めていないリクにはこういったものに全く免疫がない。

加えて酒も入っているので、彼の心臓の鼓動と、顔の赤さは尋常なものではなかった。

昨日昼間に見た、担架を運んでいた連中に見つかったら、有無をいわされずに連行されるに違いない。

「ファルガール」

不意に耳もとで声がしたので、彼はもう少しで飛び上がりそうに

なつた。

(……何だ寝言か)

「ファルガール……お願い、戻って来て……逢いたい……貴方に逢いたい……」

肩にぼたぼたと水滴が落ちるのを感じた。

肩越しに見ると、マーシアの目からまた涙がぼろぼろとこぼれていた。

恋をすると、逢えなくなるだけでこんなに辛くなるものなのだろうか。

(いや、ただ逢えなくなつたんじゃねー、十年も逢えなかつたんだもん)

ファルガールはリクにこんな姿は見せなかつた。

彼は昨日を除いて酒をいつも一杯で止めていたが、それはあれ以上飲むところなるのが分かつていたからかもしれない。

(俺も恋をしたらこうなるのかな)

そろそろ教えてもらつた宿が見えるはずだ、と顔をあげると、リクは宿の入り口のところ誰かが立っているのに気が付いた。

その少女、フィラレスは腰まで届く長い真直ぐな黒髪を夜風になびかせてジツとこちらを見つめている。

「フィリー」

声を掛けるとフィラレスはリクの方に駆け寄って来て、心配そうな目でマーシアを見る。

「ああ、マーシアか？ 心配すんな、只の飲み過ぎだ。それよりベッドまで運ぶから部屋まで案内してくれ」

フィラレスはこくりと頷くと、リクの先に立って宿の中に導いた。

魔導研究所勢の泊まっている宿『ルーフトー・レスト』は大通りに面しているだけあって、リクの泊まっている旅宿とは格が違った。先ず建材のレンガがより丁寧で見栄えのよい仕上がりになっており、強度が増したのか、構造がいいのか、何とその建物は三階建てというつくりである。

内部は壁紙や絨毯が敷き詰められ、その絢爛さたるや目を見張らずにはいられない。

この分だと食事もさぞ豪華で、中の設備も充実していて、値は目玉が飛び出さんばかりに高いのだろう。

(何よりもベッドが本物だしなあ)

フィラレスに案内してもらい、マーシアをベッドに横たえながらリクは思った。

豪華な食事よりも、立派な建物よりも、部屋に涼しい冷気を満たしている“冷しの札”よりも、それがうらやましい貧乏性、リクである。

昨日の事なのに、羽毛製の本物のベッドを見てみると、昨日ぶつけた額が痛くなった気がした。

「これでよし。フィリー、俺はこれで帰るから後頼むな」

フィラレスはこくりと頷き、もう一度こくと頷いた。

彼女に見送られて部屋を出ると、そこにはカルクが立っていた。

「リク君、少し話がある。付き合ってくれないか」

＊＊

リクはカルクが使っている部屋に通された。

やはり女性にはいろいろと物入りなのか、マーシアとフィラレスの部屋にくらべると随分と荷物が少ない。

そして、マーシアとフィラレスが相部屋であるように、彼の部屋にももう一人の宿泊人がいる。

「あゝっ！ おんどりや昨日のナンパ野郎やないか！ 何でここに
おんねん！」

リクを迎えたカーエスのはっきり歓迎されていない怒鳴り声である。

「私が誘ったからだ」と、リクの背後にいたカルクが簡潔に答えると、カーエスは思いきり嫌そうに顔を歪めた。

「ええっ！？ 何ですか？」
「少し彼と話す事がある。済まないが、お前は少し席を外しておいてくれ」

敬愛する師匠と、軟派な男が話をし、しかも自分は除け物。これでカーエスは納得できるはずはなかった。

しかし、これは師の指示である、従わない訳には行くまい。が、

そこで終わるほど、カーエスは往生際の良い人間ではなかった。ドアを閉めた瞬間、どこから取り出したのかコップを取り出し、ドアに当てる。そしてそれに耳を付けた。

(さくて、どないな話なんやろ?)

「君は大会には出ないのか？」

「エントリーはした」

「私の育てたカーエスは強いぞ、勝てるか？」

ドアの向こうではカーエスが顔を綻ばせていた。

さて、リクがどう答えるのかと、耳を澄ませる。

しかし、間を置いてリクの口から出た言葉はその問いに対する答えではなかった。

「……話って何だ？」

「分かるだろう？ マーシアと君の師匠の事だ」

その答えにリクは少し顔を曇らせた。

相談された訳でもなく、まして当事者のどちらもない状況で、部外者二人で話すというのはどうも気が進まない。

それを察したカルクは静かだがはっきり聞き取れるような声で言った。

「あの様子じゃ、また泣いたのだろう？」

「また？」

俯けていた顔を上げ、聞き返す。

しかし、カルクの言葉に見事に引つ掛かってしまった自分に気が付き、また俯いた。

それでもカルクは答えた。

「十三年前、魔導研究所を出てからもファルガールはマーシアに月一回手紙を書いていた。毎月、同じ日に手紙が届いた。マーシアはその日が近付くと心を踊らせて待っていたんだ。

しかし十年前それは突然ぶつとりと途絶えた。それから毎月手紙が届いたその日はマーシアが落胆し、涙に暮れる日に変わった。

五年前、フィラレスが彼女の元に来てからは、それは止まった。師が弟子に弱いところを見せる訳には行かないからだろう。

だが泣いて悲しみを外に出す事が無くなっても悲しみは毎月同じ日に湧き、“冷炎の魔女”の仮面の下で溜まり続けていったんだ。

そしてファルガールから連絡が途絶えて十年が経ち、今回の大会の日がやって来た。

表にこそ出さないようにしていたが、マーシアは手紙が届く時のように心を踊らせていた。十三年前、弟子を探してこの大会に出場させるという言葉は今も信じていたからだ。そして昨日マーシアはファルガールと逢う事が出来た。

……今まで溜まっていた悲しみと、とうとうファルガールに逢う事が出来た喜びがぶつかりあって彼女はこれまでにないくらい情緒不安定になっている。

今日もファルガールに逢いにそちらの宿に行っただと思うが……どうやらそれは叶わなかったらしいな」

そういつてカルクは、ちらりと部屋の側面の壁に目を向けた。

その壁の向こうはマーシアとフィラレスの部屋だ。

「また、ファルガールはどこかに消えてしまったんだろう？ アイツはやると言っただら最後までやる奴だ。マーシアに手紙を送る事だ

って、奴ならマーシアの元に帰ってくるまで続けるはずだ。

それをやらない、と言う事は、ファルガールはまた何かを始めた。その一環として、マーシアに手紙をかかない事を始めてしまったんだと私は思っている」

そこまで話すとカルクは突然、リクの肩を掴んで聞いた。

「……リク君、ファルガールに何があったんだ？ ファルガールはどうして、マーシアに手紙を書かない事を始めてしまったんだ！？」

その様子に、リクは驚いて一瞬、戸惑ってしまった。

カルクの印象はてこでも動かない岩石のようだ。

しかし、今自分の肩を掴み、自分を見つめるその目の迫力は彼が常に漂わせる威厳とは全く異質なものだ。

“冷炎の魔女”と言われるマーシアも今日、彼の前に感情をさらけだした。

その目の迫力に耐えきれず、リクは今日マーシアと話した事をカルクに話した。

それは言葉で話すのは難しく、ところどころでどう話しているのかわからなくなった事もあったが、カルクは辛抱強く話を聞いた。

話し終わった後、長い話に気を使ってか、カルクはリクに水を用意し、自身も一杯飲みながらベッドに腰掛ける。

そして神妙な顔で俯き、「そんな事があったのか……」と、一言漏らし、顔を上げてリクに礼を言った。

「ありがとう。良く話してくれた」

「聞いてどうするつもりだったんだ？」

リクが訪ねると、カルクは再び顔を俯けて答えた。

「どうもしない」

「どうして？」

「君が最初話をするのを渋ったように頼まれてもいないのに部外者の私がこの問題に首を突っ込むのはいい事ではない」

「部外者？ それは違うだろ」

そう言って、リクは意味深長な視線をカルクに送る。

カルクは顔を上げ、しばらく正面からその視線を受けていたが、やがて目をぎゅっと瞑って深呼吸をし、立ち上がって部屋の窓まで歩いて行き、彼に背中を向ける。

「その目には嘘を付けそうにないな」

背中を向いていてもリクはカルクからずっと目を離さなかった。

「……君の思っている通りだ。私はマーシア＝ミスターシャを愛している」

その待っていた言葉を聞いた瞬間、リクの脳裏に昨日のマーシアの涙が蘇る。

思い出したように、彼の心の中にざわめきが起こるのを感じ、気が付くと彼はカルクの背中に向かって声を張り上げていた。

「だったら何故、マーシアと付き合いおうとしねーんだ？ 頭のいいあんたの事だ。ファルの事なら気にしなくていい事は分かっているはずだ！

十年以上も恋人を放ったらかしにしたんだ、誰も責めたりしねーよ。いや責められるとしても、愛してるならどうして十年以上も一人にさせたんだよ！ そうすれば一人の女があんなに辛い目に遭わ

ずはすんだんだ！」

リクの言葉にカルクは再びこちらを向いた。その表情は、これまでにないくらい穏やかなものだった

「リク、私はファルガールも好きだ。周りが許そうとも私が私を許さないだろう。そしてそれが真にマーシアの為になるならば、自らの責めを甘んじて受けてでもマーシアをファルガールから奪っただろう。しかしそれではマーシアは本当の幸せは掴めない」

「そんなの分からねーじゃねーか。でもあんたが一人にさせた事でマーシアは今確実に辛い思いしてるんだぞ！」

「辛い思いは、後で掴む幸福に一層の輝きを与えてくれる。ずっと続く幸せは、その中にいる者にとっては普通の事でしかない。それが生温い偽りの幸せなら不幸にさえ感じるものなんだ」

そして声を荒げて息を荒くするリクにカルクは微笑みを浮かべて言った。

「……君は優しいな。ほとんど他人事なのに、君は真剣にこの事を考え、理解しようとしている。ほとんど初対面のマーシアや私を本気で心配してくれている」

「……っ！」

リクはその微笑みから逃げるように、踵を返し、背を向けて部屋を出ていった。

16 『闘いの幕開け』

昔、奇襲を掛けようと計画した一人の武将がいた。
こちらは多勢に無勢、相手はこちらの戦力をみて油断しているはずだからと。

その夜計画は実行に移された。
しかし結局それは遂げられぬままに終わった。
奇襲に人員を割り、手薄になった陣を攻め込まれた。

その武将は後に語る。
相手の油断を悟った時、一番の油断が生まれるのだと。

一人の男が斧を手に持ち、立っていた。彼の目の前には寝心地のよさそうなベッドがあり、何故か寝袋に身を包んで一人の青年が時々小さくうなされながら寝息を立てている。

栗色の髪を持つその青年の寝顔は、まだ少しあどけなさが残っていた。

（悪く思つなよ……）と、男は心の中で言った。

しかし、すぐに首を振って考え直す。

（いや、昨夜日付けが変わった瞬間から大会は始まっているんだ。呑気に寝ているこいつが悪いんだ！）

そして男は、青年の首を狙い、斧を振りかぶる。

(死ねっ……！)

斧を振り下ろしはじめた瞬間、そのエメラルドグリーンの瞳がカッと見開く。

それと同時に、反射的に身体を起こし、間一髪のところまで、斬撃を躲した。

次の瞬間、ガキン、と金属音が鳴り、二重の悲鳴が上がった。

「「うわあっ！」「」

青年は寝汗にまみれた顔で急いで息をし、男は見かけだけのレンガ製のベッドに斧を打ち付けた衝撃に手を痺れさせている。

(くそ、またか……)

青年、リクは心の中で悪態をつき、汗でべたべたになった服を身体から剥がしながら、寝ぼけ眼でベッドから降りた。

「ぐっ……」

どうも床の感触が柔らかい。そればかりか、妙な鳴き声まで出す始末だ。

(……?)

疑問符を浮かべながら足元を見ると、リクの足に腹部と頸部を踏み付けられ、泡を吹いて失神しかけている男がいた。

(……誰だこいつ?)

取り敢えずその男から降りて考える。男を観察して行く内に、不自然な方向に折れ曲がっている左手首についている腕輪に気がついた。

三秒、考え、リクは状況を理解した。

その時、失神しかけていた男が目を開き、自分を覗き込んでいるリクに気がつく。

すぐさまその男は立ち上がり、なんとか無事だった右手でリクを指差した。

「汚いぞ貴様！ そのような固いベッドに寝ているとは！ しかし！ 寝ぼけて予測不能な動きをしていたが為にこのような不覚もとったが目覚めてしまえばこちらのもの！

行くぞ、負いし傷に《治癒》のほどこ……」

「やかましい」と、男が自分の左手首を治す為に《治癒》の魔法を詠唱している最中に、リクがその左手首に蹴りを入れた。

「……ぐああ！」

たまらず男は悶絶する。

男は左手首を抑え、なんとか声を絞り出して言った。

「き、汚いぞ貴様ア……」

「人の寝首搔こーとした奴の台詞があっ！」と、リクは突っ込みも兼ねた見事なアップパーカットを決める。

完全に気を失った男を目の前にし、リクはどうしたものかと考えた。

そして荷物の中から大会規約書を取り出して開く。それを一読すると、男の手首から腕輪をもぎ取る。すると腕輪はみるみる形を崩し、最後には砂になってしまった。

こうしてリク＝エールはあまり記念したくない、大会初の勝利をおさめたのだった。

＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

階下に降りて食堂に入ると、オウナがテーブルに布を掛けていた。

「おはようさん、寝覚めはどうかね？」

「良いとは言えねーよ。それよか何だ、あの斧持った奴は？」と、リクが寝首を搔かれかけた一件を話す。

「あたしは通した訳じゃないよ。大方どつかの窓から忍び込んだんだろ。この町の窓は四角い穴が開いてるだけだからねえ。今朝食を持ってくるから」

こうしてオキナに差し出された朝食は随分とポリユームがある。リクが不思議そうな顔をオウナに向けると、オウナは答えた。

「昨日あんたが食べなかつた夕食だよ。これから大会でたくさん食べなきゃならないんだからちようど良いと思ってね」

「そっか、いただきます」

昨日、酒場で頼んで食べた軽食きり食べてなかつたリクは、その朝食はぺろりと平らげ、食器を台所に戻すと、外に出る準備をしようとして部屋に戻ろうとした。

すると、オウナが呼び止めた。

「お待ち」

「何？」

オウナは黙って何やらたくさん物が入った袋を突き出した。

「何だ？ これ」と、リクが袋の中身を覗いて見ると相当な量の食料が入っていた。

「いいかい？ 参加者は大会中、どの店もどの宿も利用出来ない事になってるんだ。だからあんたはどっかで負けない限り決勝戦まで外で野宿する事になる。そのつもりで準備してお行き」

「店と宿が使えない？ 何で？」

リクの質問にオウナは首を横に振る。

「あたしは知らないよ。それより、外でウチの爺さん見つけたら帰ってくるように言ってくれないかい？」

「オキナ？ 昨日帰ってねーのか？」

オウナは頷いた。

ファルガールも昨日から帰っていない。

(つまり二人は一緒に行動しているという事か)

一昨日からの話の筋からすると、そう考えるのが普通だ。と、なるとリクがオキナを見つげられる可能性は低い。

一緒に行動しているファルガールがここに来てから何故か自分から離れて行動したがつている素振りを見せているからだ。

あつちから帰ってこない限り、運命の手助けでもなければ見つげられないだろう。

「……もし見つけたら言っとくよ」

「頼んだよ」

リクは礼をいうと、部屋に戻って荷物をまとめた。野宿すると言っても、全て持って行く訳には行かないから、ギリギリまで荷物を小さくし、山登りなどの時に使う、リュックサックのように背負える小さな鞆に入れる。

そして何を思ったのかいきなり窓から飛び出した。

リクの身のこなしはなかなか見事なもので、二階の高さから飛び下りてもほとんど音を立てずに着地出来た。

立ち上がった彼が睨むのは玄関先だ。そこには四人の男達が待ち伏せていた。

男達はリクに気付くと驚愕し、目を見開いた。

「なっ!？」

「出迎え御苦労」

リクは低い声で一言言うと、四人の中に突っ込んだ。

当然男達も応戦したが、実力の差は目に見えて明らかだった。

何しろ自分を取り囲む数人の複雑な攻撃を全て紙一重でかわし、その勢いを攻撃に持って行く。その反動を次の相手の攻撃を避けるのに使い、またその勢いを攻撃用に転換する。

それは流れだった。一切の淀みのない、全てを読み切った流れ。

この時点で既にリクの勝利は決まっていた。

17 『便利屋コーダ』

気に入るのに理由はいらぬ。

一度気に入ってしまえば、それが持つ長所も短所も受け入れられる。

その為になら何でもしよう。

人と人との関係はいつも気に入り、気に入られる関係でありたい。

暫くした後、リクは苦痛に顔を歪ませて倒れている男達の中に佇んでいた。

その倒れている人数は七人である。

戦闘が始まった後、暫くして裏口に張っていたものと思われる別の三人がここに駆け付けて来たのだ。この男達は結託している集団で、はじめからそういう手はずだったらしい。

「もう終わりか？ 根性無しめ」

リクはそう吐き捨てると、面倒臭そうに男達の腕輪を外していった。

するとぱちぱちぱち、と拍手の音がする。

「お見事、兄さん」

「コーダ！」と、リクは闘うまでには確実にいなかったのについての間にそこにはいたコーダに駆け寄った。「お前昨日どこに行っちゃったんだよ？ いきなしなくなるから探してたんだぞ」

「ははは、すいやせん、ちょっと所用がありやして……。ところで

兄さんさつき魔法を使つてやせんでしたね？ あれだけ人数いたのに」

「極力魔力は使わねーことにしてるんだ。魔力に頼らねー闘いをしていけば魔力のありがたみが分かるんだって」

そしてその時彼の頭の中に浮かんでいたのは、魔力を封印されて、猛獣の横行する草原に放り込まれた時の恐怖だ。

一週間ほど経ち、封印を解いてもらつて、もう一週間経つと、彼はもう魔法無しで猛獣達と張り合えるようになり、魔力を使うと、危ない局面も楽にしのげるようになった。

「へえ、ファルガール」カーンの教えスか？ それ」

「えっ？」

思い掛けないコーダの指摘に、リクはハツとした。

「昨日それを知つた時には驚きやしたよ」

コーダにちょっとした針のような視線で見られ、リクは苦笑する。

「別に隠してた訳じゃねーけど、何となくな」

ファルガールが十五年前の大会の優勝者だと知つた時から、特にそうだった。

自分の師匠が優勝経験者だ、なんて自慢しているようで、今いち喋りたくない。

それにそれを知つた強豪達がこぞつて自分に挑戦してくるのは避けたい。

「ま、それで正解スよ。そこに転がってる人たちも兄さんがファル

ガール「カーンの弟子だと知ってて襲って来たんス」

「どこで知ったんだ？ そんな事」

「参加者達は他の参加者の情報を得る為に便利屋つてのを雇う事もあるんス。その便利屋は雇い主の闘いたい人間の居場所を探したり、もしくはその人との決闘を申し込んだりするんスよん」

へえ、とリクが納得したところで、コーダは切り出した。

「ところで兄さん、俺を便利屋として雇う気無いですか？」

「そうしたいのはやまやまだけど、金がなあ」

困惑しているリクに、コーダは笑いかけて言い添えた。「お金は優勝して、賞金がとれたらで結構ス」

しかしリクはなかなか頷かなかった。

すぐに食い付くかと、期待していたコーダは拍子抜けしたように首を傾げた。

「……これでも不満スか？」

「いや、違う。その反対だ。条件が良すぎるんだよ。お前はどうして俺にそんなに親切にしてくれるんだ？ こう言うのは冷たいかもしれないねーけど、俺はお前に親切にされるいわれってモンがねーんだぞ」

リクの答えに、コーダは怪訝な表情をつくって尋ねた。

「兄さん、ひよっとして俺を疑ってやス？」

「違う。ここまで訳も無く、親切にされるとかえって気まずいんだよ」

二人の間に沈黙の時間がしばらく流れた。

沈黙を破ったのはコーダだ。

「気に入ったんすよ」

「え？」

あまりにあっさりとした答えに、リクは一瞬理解ができず、つい聞き返してしまった。

コーダはにっこりとリクに笑いかけてもう一度言い直してやる。

「兄さんの事が気に入ったんす。兄さんの為に何かしてやりたくなつたんすよ」

「俺は別に気に入られるような、ごたいそんな人間じゃねーぞ」

リクは、訝しげに眉をしかめる。

そんな彼に、コーダは手を小さく振って答えた。

「気に入るのに理由なんていらないうすよ」

「……まさか俺がファルの弟子だからじゃねーだろうな」

「それ全然見当違い！もしそうなら昨日までこの事知らなかったんすから、昨日の弁当は兄さんにあげてはいやせんでしたよ」

なるほど、とリクが感心しながら、それでも返事をしかねていと、何を思ったのか、コーダは突然リクに向かって膝をついた。

「頼みやス！俺を雇って下さい！」

その行動にリクはかなり面喰らった。

再び、沈黙が彼等を包む。

今度はコーダがそれを破る事は無かった。彼の視線はずっと、リクのエメラルドグリーン色の瞳に向けられている。

その目に彼はとうとう折れた。

「……分かった。そのかわりお前の為に俺が出来る事があれば、言ってくれよ」

「合点！」

コーダは満面の笑顔で、リクに敬礼した。

「早速だけどさつき参加者は店も宿も使えねーって聞いたんだけど、アレはどうしてなんだ？　こんなの規約書には書いてなかったぞ」

「書いてやすよ」

「え？」

「ちよつと借りやすよ」

そういつて彼はリクの服のポケットに入っていた規約書を抜き取った。

そしてその冊子を開くと、ぱらぱらとページをめくり、ある一行を指差した。

それは『大会規約』と書かれたすぐ左、第一の項のすぐ右だ。

0、大会中の参加者は店、宿などの施設を利用してはいけません。

「ぜ、ゼロ……！？」

リクはさつき、斧を持った男を倒した時に一度これに目を通していたが、あまりに自然すぎて気が付かなかった。

「この項だけは当日になってからしか出てこないように細工されてるんす」

「でも何でこんなややこしい事するんだ？」

「そこがこの大会のルールで一番上手く出来ているところなんす。もし、規約書にちゃんとそういう事が書いてあると、参加者達は闘いに備えて食料を買い求めるでしょう。すると、持久戦に出て、なかなか決勝の二人が決まらなかつたりするんすよ。それを防ぐ為の工夫なんす。」

多分今日は、食料を用意しておかなかった人間が溢れるでしょう。そんな時、兄さんならどうしやスカ？」

「……大会を早く終わらせる？」と、いきなり質問されて、戸惑つたりリクは自信なさげに答える。

「惜しい。そう考えて短期決戦を狙う人間も確かにいやス。だが、そうするとペースも分からず、決勝に残る事が出来ても、おそらくもう力は残っていないでしょう。」

問題は食料をどう手に入れるかなんす。ここは店が使えなきやもう何もありません。井戸に行けば水はありやすけど。そんな状況で、食料を手に入れるにはどうすればいいか、なんす」

再び、話を振られ、リクはうん、と考え込んだ。

「そうか、分かった！」

そしてぱつと顔を輝かせるとポンと手を打って答えた。

「持つてる奴から奪えばいい！」

「ピンポン！ここ数日は食料争いが主な鍵になるでしょう。だから襲われなくなければ食料をあまり目立たせない方がいいッス」

「他の街に買いに行く事は出来るんじゃねーのか？」

「それは可能ッス。けど、往復で最低十日はかかるでしょう？過去にそこまで長引いた大会はないんす。買いに行ってる間に鐘が鳴りやすね。それは街の防壁の外には決して聞こえやせん」

「運搬サソリがあるだろ？」

コーダは黙って首を横に振った。そして一言だけ言う。

「大会規約その0」

「あ、『店、宿などの施設を利用してはいけない』」

リクが暗唱すると、コーダは生徒の出来に満足した教師のように頷いた。

「そういう事ッス。……で、これ」と、コーダは懐から、小さな鐘を取り出してリクに渡した。「“呼び鐘”ッス。これを鳴らすと……」

リクは実際に振ってみる。カンカンカン、と音がすると、それに答えるようにコーダの腰からチリチリチリ、と鈴のような音がした。そこに目をやるとヒモに付けられた鈴がリクの持つ鐘に向かってピンとヒモを引っ張っていた。

「こんな風に反応するんす。一応有効範囲は制限されてますが、フアトルエルの中のにいれば大丈夫ッス。不必要な時は鳴らないように綿を詰めやんせ」

「了解」

「じゃ、俺は早速情報収集に行つて来やス。取り敢えず頑張つて」
「おう」

そしてコーダは何処ともなく走り去って行った。

18 『流砂の怪物』

いかな英雄とて月で化け物退治は出来ない。
よって厳しい環境に適応した動物ほど恐いものはいない。

彼等は暑さや寒さに動じる事はない。

飢餓にいちいち運動能力を落とす事もない。

更に悪い事に厳しい環境にいる動物の大抵は獰猛だ。

食う時に確実に殺さなければならず、食べられないように、
確実に身を守らなければならない。

相手が、自分より遥かに大きな者が相手でも。

さて、時間は少し遡る。

ところは第二決闘場、通称“流砂の決闘場”。規模は第一決闘場
とさほど変わりはないが、形状は四角形、そして第一決闘場の場合、
バトルフィールドは砂丘になっていたが、こちらの場合は通称が表
すように流砂になっている。

別に、カンファータ王国が流砂を発生させる魔導装置を仕掛けて
いる訳ではない。建物の形状が為せる技なのか、とにかくはじめか
らそこに流砂はあった。

大会中は決勝戦を除き、大決闘場は使用出来ない。

しかし、その他に四つある各決闘場は解放されている。

先ず、二人で決闘の申し込みをし、合意の上で二人して決闘場に
赴いて、各決闘場にカンファータ王国から係員が配備されているブ
ースで簡単な手続きをするだけでOKだ。

こちらのほうが高い確率で名勝負が見られるので決闘大会を見に来た観光客達、そしてファトルエルに住人達はこの決闘場に集まる。ただし四つの決闘場のうち、どの決闘場で名勝負が見られるのかは運次第である。

今も、観客席はびっしり埋まり、大いに湧いていた。
この試合は殊更にそうである。

“完璧”カルク＝ジーマンの弟子・カーエス＝ルジュリス

VS

今大会の本命“クリーチャー”デュラス＝アーサー

三大勢力の魔導士同士の対決に観衆は時には息を飲み、激しい攻防に歓声上がる。

試合は一段落したのか、四隅に小さく存在する、砂の流れていない足場に立ち、向かい合ってお互い睨み合っている。

（今までののは小手調べ……こつから本気で来るんやろな）と、カーエスは向こう側の隅に立ち、ニヤニヤと印象の悪い笑みを浮かべながらこちらを見ているデュラスをジロリと睨んだ。

その目は明らかに敵意が込められている。

（絶対に勝つたる……！）

彼のこの意気込み振りには少しばかり理由がある。

それを説明するにはもう少し時間を戻さなければならぬ。

それは朝、空が完全に白みきつた頃だった。

ファルガールの弟子・リクの例に漏れず、カルクの弟子であるカーエスにも集団で奇襲を加えようという集団が大通りの宿『ルーフ・トー・レスト』の表口と裏口を固めて待ち構えていた。

しかしリクの宿とは違い、優勝候補の一角“双龍”のクリン・クランがいる。

それだけでも十分なのに、十五年前の準優勝者“完璧”のカルク・ジーマン、“冷炎の魔女”と呼ばれるマーシア・ミスターシヤマでいる。

もう一人の参加者であるフィラレス・ルクマースを襲おうという事もあったが、どうも少女を襲うのは気が引けるし、マーシアの弟子よりカルクの弟子を倒した方が名が上がる。

そういう訳でこの宿の新人で狙うのはただ一人、カーエス・ルジュリスだ。

事前に便利屋を忍び込ませ、出て行くのがカーエス以外なら、さり気なく道を開け、カーエスが出て行く番になると、合図をくれる事になっている。

「なあ、カーエス・ルジュリスが誰かと一緒に出て来たらどうするんだ？」

「……どうする？」

この辺の会話に彼等の無計画さが見て取れる。
しかし、運は彼等に味方したようだ。

「おい、アイツが出てくるぞ、一人でだ」

合図を受け取った男が他の者に告げた。
すると四人いきり立ち、各々武器を手に身構える。
そして扉が開くと同時に突っ込んだ。

「防ぐな、返せ《弾きの壁》」

その言葉と共に、男達の武器が四人の目標・カーエスの手前で止まった。

一瞬後、「うわあああっ！」と、その男達全員が四方八方に吹っ飛ばされる。

彼、カーエスはそうして宿の中からスッキリした玄関先に姿を表し、みつともなく気絶している連中を眺め、情けなさそうに深いため息を付いた。

「阿呆なヤツらやなあ。初っ端でみんなで手組んで弱いモン潰しに行く……典型的な悪役雑魚やないかい。弱きを助け、悪を挫く正義の主人公にならんかい、正義の主人公に」

説教じみた独り言を漏らした彼は倒した男達の“腕輪”を集めて砂に還したあと、あたりを見回した。

「他に俺狙つとる奴はおらんかいな」

しかし、宿がわりと広さのない道に面していたので、辺りがどうも見渡しにくい。

と、その時、何者かが頭上から彼めがけて飛びかかってきた。それに気付いたカーエスは、少し自分の立ち位置をかえると、地面に向かって手をかざす。

「この場に在るもの縛るは《更なる重力》！」

するとその地面に黒く小さな魔法陣が現れた。
その真上に居たその男の落下速度がにわかになくなる。

「う、うわあああ！」

突然の重力変化に男は体勢を崩し、背中から地面に落ち、そのままびくびくと痙攣して動かなくなった。

カーエスは全員の腕輪をとり終わると、開いたままの扉に向かって笑いかけた。

「先生、片付きましたで」

「ああ、なかなかいい手際だった」と、扉の中からカルクが出てくる。「これだけ大勢の人間を相手に、動じないで対処できるのは実践的な実力がついている証拠だ。特に最後のは見事だった」

師の褒め言葉にカーエスは嬉しそうに頷いた。

そしてゴホンと一つせき払いをすると、改まった表情で切り出す。

「ところで先生」

「何だ？」

「昨日、アイツと何話してはったんですか？」

そう尋ねてはいるものの、実はカーエスは会話を全部聞いていた。そして、その時の師から発せられる言葉の数々は、カーエスからすると別人の様に感情の起伏が激しかった。

特に最後に彼がリクに掛けた言葉。あれは彼が聞いたカルクの発言の中で一番暖かいものだった。

これはカーエスのカルクに対する一つの試みだった。

「私と彼の関係は知っているだろう？」

「ええ、先生のライバルやった奴の弟子でしょう？」

「だったら話題は一つ。ファルガールの話だよ」

試みの結果はあまり思わしくなかった。

ごまかされるとは。

この七、八年、魔導学校の一師一弟子制の導入により、カルクに選ばれて以来、彼はずっとカルクと一緒にいた。

だから全部とは言わないまでも、カルクの事はよく知っている。

彼は正直者であるが故に嘘がつけず、どうしても言いたくない時は、外れずも近くはない遠回しな言い方でごまかし、話題を変えて逃げる事もだ。

誤魔化されるのは初めての事ではないが、それをされてカーエスにとってあまり好ましく思えず、彼に何とも言えない嫌な感情が沸き起こるのはこれが初めてだった。

彼は頭を振って、その感情を奥に引込めると、気を取り直す。

カーエスが歩き出そうとすると、その正面から、誰かが歩いてくるのが見えた。

その姿に彼等は見覚えがあった。

誰もが目を見張るほど長身だが、それ以上に驚かれるのはひよろりと長く伸びた手足だ。そのシルエットは夕日か朝日に照らされ、長く伸びた影のようだ。

「くつくつく……なかなか見事なモンだったぜ。カルク・ジーマンのお弟子さんよ」

「デュラス・アーサーか。何の用だ？」と、カルクはデュラスの人を小馬鹿にした態度にも動じない。カーエスはと言うと、正直に不快を表情に表していたが。

デュラスはそれを聞いて、口元に浮かべていた嘲笑を更に露骨なものにした。

「何の用だ、とは御挨拶だねエ、決まってるじゃねエか。あんたの自慢の弟子に挑戦してきたんだよ」

「カーエスに？」

「何か都合の悪い事でもあるのかなあ？」

彼等にはデュラスが何を言わんとしているかは良く分かった。

ファルガールとカルクの名勝負は、今や伝説となっている。

そして十五年経った今も、決闘大会が始まれば先ず思い出すのがその決勝戦の事なのだ。

ファトルエルで無敵を誇り、今大会本命で、もっと集中的に注目されてもおかしくない自分を霞ませるのは尾ひれに腹びれのついたその伝説であると思っっているらしい。

しかも腹立たしい事には、十五年前のファルガールやカルクの方が今の自分より強いと思われている事なのだ。

何とか自分の方が強い事を証明してみせたいが、流石に今のカルクとやって勝つても仕様がないし、どう足掻いても十五年前のカルクとは戦えない。

だから取り敢えず下のカーエスでも軽くひねって、カルクに恥を掻かせてやろうと考えたのだ。

「あらへん。やるならとつととやらかそうやないか」

カーエスが今からでも飛びかかりたいくらいの気持ちを抑えて答えると、デュラスは思いきり見下しているその目をカーエスの目に近付けた。

「そうかア？ カーエスちゃんよ。良く考えるよ？ 俺がお前に勝つたら、カルクに大きく恥を掻かせる事になるんだぞ〜？」

「それよりもっと心配な事がある」と、カルクが静かに横から言った。

「あん？」

「君が大会開始後すぐに負けて、ファトルエルの人達に恥を掻かせはしないだろうかとな」

「な、何イっ!？」

デュラスが初めて怒りを見せた。

そしてその怒りはすぐに行動にあらわれる。

つくった拳の中に光が満ちたかと思うと、その光の玉をカルクに投げ付けたのだ。

しかしカルクは眉一つ動かさず、手の平を飛んでくる光の玉に向けて、それを受け止めて握りつぶした。

「助かったな、デュラス!!アーサー。もし私が加減して擦り傷一つでも負っていたら君のその腕輪は砂に還っていただろう」

大会中は正当防衛を除き、故意に参加者以外の人間に危害を加えてはいけない。これを破ると腕輪は砂に還ってしまう。大会規約その7だ。

カルクは完璧な防御をしたため、傷を負わなかった。その為にデュラスはカルクに危害を加えた事にはならなかったのだ。

「く、く……」と、デュラスは顔を真っ赤にして声を漏らした。そして叫ぶ。

「ぶっ殺してやる！ あんたの自慢の弟子を！ 跡形もなく消し去ってやる！ その次はてめエだ！ カルク!!ジーマン!!」

そんな訳で、彼等はこの場に立っている。

デュラスは現在落ち着いてはいるが、先程の怒りは沈めてはいまい。

ただ怒りのままに行動するとどうなるか、良く知っているだけに怒りを表に出せないだけだ。

(……来る！)

カーエスの感じた通り、デュラスが動いた。

右に巻いている流砂の縁の流れに逆らわずに走ってくる。

「我は得たり《地潜り》の力」

魔法を詠唱が済むと、こちらに走ってくるデュラスの姿が地中に消える。

流砂の流れを利用して自分に近付くつもりだろう、と考えたカーエスは足場から跳躍し、さっきまでデュラスがいたところのすぐ後ろに着地した。

ここにいる彼をデュラスが攻撃するには砂の流れに逆らう必要がある。

しかし予想は甘かった。

「な……！？」

彼は突然、自分の真下に何かの気配を感じた。
反射的に彼は詠唱を始める。

「我が足に宿れ《飛躍》の力！」

そして足を屈伸してジャンプする。

その後続くように、カーエスの真下の地面が盛り上がり、中からデュラスが、アツパーカットのように腕を突き上げて現れた。

しかしカーエスはそのシルエットを見た瞬間、違和感を感じた。

《飛躍》で得たジャンプ力によって最寄りの足場まで移動すると、改めてデュラスを観察した。

だがそこにいたのは人間ではなかった。全身が甲殻に覆われ、手が大きく鋭いハサミ状になっている。

突然、観客席のところどころの客が沸いたように歓声を上げた。

「《適応》だ！ “クリーチャー” デュラスの《適応》だ〜！」

ファトルエルの住人達はそれはどう言う事なのかを知っていた。

《適応》、これは読んで字のごとく、周りの環境に自分の身体を適応した形態へと変化させる魔法だ。

デュラスはその魔法を使って、自らの身体を流砂の環境に適応させ、砂の流れに逆らう事もやってのけられるようになり、砂漠で闘うにもっとも適したハサミと、甲殻を手に入れたのである。

この魔法こそが彼が“クリーチャー”と呼ばれる所以、そして、彼が厳しい環境のファトルエルで最強を誇る理由なのだ。

流砂が渦巻く第二決闘場にて、観客達を沸かせる一戦、カーエスⅡルジュリスVSデュラスⅡアーサー。

自らの身体をその環境の闘いに適した姿に変化させる魔法《適応》を使用してからというもの、形勢は完全にデュラスの方に向いていた。

正方形の決闘上の四隅を除いた全ての部分を占める流砂でなかなか身動きのとりづらいカーエスを相手に、デュラスは自由自在に動き、しかも地中に潜ったり、飛び出したり、まさに四方八方から攻撃を加えて行く。

その凄まじい攻勢にカーエスはただただ、避けたり防いだりするのみだ。

「どうしたア、カルクの弟子イ！ そんな事じゃ、お師匠様の名が磨るぜ！」と、今度はカーエスの背後からデュラスのハサミが襲う。その攻撃に対しカーエスは気付くと同時、ほぼ反射的に自分に対する物理攻撃を弾き返す《弾きの壁》の詠唱を始めた。

「弾くな、返……」

「甘あい！ 我見たり、汝が《魔力の乱れ》！」

文字どおり、魔力の流れを乱されたカーエスは魔導を中止せざるを得なかった。

このように魔法には魔導を妨害する魔法もある。ただし、その魔法のタイミングは極めて難しく、失敗した時はかえって隙が大きくなる危険性もある。

ただでさえ隙の出来る自分の攻撃中に、躊躇せずその魔法を使うのは、デュラスがいかに魔導士として優れているかを如実に物語っていた。

こうして《弾きの壁》を返されたカーエスは一撃を見舞われる、次の一瞬を観客達のほとんどが想像した。

しかしその予想は当たる事はなかった。

カーエスは腰を低く身構えると、自分の顔面に飛んでくるハサミをひよいと避け、その次に飛んでくる当て身を受け流すべく、身体を左半身にして、ハサミを両手で掴み、それを捻りながら勢いを利用して引っ張る。

するとふわりとデュラスの身体が浮き、流砂の中心に放り投げられたではないか。

しかしここは足場の悪い流砂の中だ。カーエスも勢いあまってバランスを崩しその場に倒れてしまった。

事はそれで終わらなかつた。

投げられたデュラスは何が起こったかは分からなかつた。分かるうとしなかつた。その代わりに必要な情報のみを手に入れた。

自分の位置と自分の状態。そして、敵の位置と、敵の状態。

彼は今の攻撃を凌ぎ切つたと安心しているに違いない。まだ落下するまでには時間はある、ただ黙って落ちてやる道理はない。

そう考えた彼はその両手、もとい両ハサミの先に魔力を凝縮し光弾を作り出す。

そして「喰らえっ！」と、それを倒れたカーエスに向かって投げつけ、その後、着地すると同時に地中へ潜り込んで行った。

しかしカーエスは油断などしてはいなかつた。

それを仕掛けた張本人であるカーエスは、自分の状況をデュラスよりも遥かに多く掴んでいる。

そして彼の師・カルク「ジーマンから教えてもらった原則を冷静に実行していた。

(どれだけ相手が不利な体勢になろうと絶対に攻撃を防ぎ切つたと
思つな)

そして自分に向かってくる光弾を目の端で捕らえると、手の平を

魔力でコーティングし、受け止めて握りつぶした。

「ふむ」

「今のは良く防ぎましたよねえ」と、盛り上がる観客の中で闘いを見守り、今の攻防に声を漏らしたカルクに応えたのは一見優男風の優勝候補・“双龍”のクリン・クランだ。

「彼、随分と押されているみたいですけど大丈夫ですかね」

「押されてなどいない。現にカーエスは傷一つ負っていないだろう」

「しかし攻撃の一つ一つが、もう少しでカーエス君にダメージを与えようとしてるんですよ？ あっ、また！」

観客席がどよめき、その一瞬後に観客が歓声を挙げる。

クリン・クランが、今も攻撃を紙一重で防いだカーエスを指差した。

「ほら、あれで一撃でも当たったら、終わりですよ？ 連発で攻撃入れられて……」

「ギリギリだろうと、余裕だろうと、防いだなら何もなかったのと一緒にだ」

「でも反撃させてもらえないみたいじゃないですか」

確かにカーエスはガードした後、すぐさま反撃に転じる姿勢は見せているようだが、もう少しのところでもた敵の攻撃が来て反撃を中止して防御している。

「いくらうまく防御出来ても攻撃しないと勝てないですよ」

クリン・クランの問いにカルクは黙って首を横に振った。

「カーエスは少しずつだが攻撃している」

「え？」

「攻撃といっても、目に見える攻撃ではないがな、その効果も少しずつ出て来たようだ」

意味ありげなカルクの言葉に、クリン・クランは闘う二人を注視した。

しかし見られるのは変わらず、デュラスが連続で攻撃し、カーエスがギリギリのところまで防御するその姿だけだ。

相変わらず、ギリギリで。

「デュラスの攻撃が単調になってる！？ まさか彼、狙ってやってくるんですか？」

平然とカルクは頷いた。

「当たりそうでも当たらないのは当たる可能性が多分にあるという事だ。高確率のものに賭けているのに何回やっても残った可能性の結果になる。これは焦りを誘って異常に精神的に疲労する事に繋がる。更にあれだけ息もつかせず攻撃をしているんだ。肉体的にも大分疲労しているだろう。肉体と精神、二方面からの疲労は自ずと思考を奪い、攻撃も単調なものになってくる」

人間を天井から吊るす時、一番効果的な高さはつま先を目一杯伸ばして五ミリくらいの高さが良いのだそうだ。

足が付きそうでも付けない高さ。

その高さに吊るされた人間は楽になろうと必死で足を伸ばし、しかしいつこうに楽にならず、焦り、精神的に疲労してついには発狂してしまう事もあるらしい。

デュラスも同じだった。

一撃、たった一撃決まれば、カーエスは捕まり、幾らでも殴る事ができるだろう。

何度も何度も攻撃して、後少しのところでも攻撃が尽きてしまっ。

相当焦りを感じているに違いない。

「攻撃が短調になれば、攻撃が確実に読めるようになる。そうなれば後は流れをひっくり返せばいい」

(何なんだ、コイツ……?)

三十回目の連続攻撃を終え、デュラスは再び土の中に潜っていた。感覚も流砂の環境に適応し、彼は砂の上がどうなっているかを鮮明に感じる事が出来ている。

今回も出来る限り攻撃を加えたが、後少しのところでも攻撃が敵に届かない。

ここまで敵に粘られるのは初めての体験だった。

カーエスが闘うのを見るのは朝の雑魚戦を除くとこれが初めてで、実力がどの位のものか推測する材料すらない。

ただ、師匠があまりに強いとその弟子、という立場は有名になりやすくとも、どうしても師匠より影が薄くなってしまいがちだ。

そして、彼は“決闘の街”と呼ばれるファトルエルで最強無敵を誇るのだから、デュラスがカーエスを自分の下に見るのは仕方のない話だ。

さらに実のところ、この慣れていない者と慣れていない者との差が露骨に出る流砂の第二決闘場というステージは、《適応》の使い手、デュラスのもっとも得意とする場だった。

格下相手にここまで有利な条件が揃っているのに、攻めきれない。デュラスにしてみると不可解な事この上ない状況だった。

(くそっ……！ 次だ。次で捕まえて流砂の底に埋めてやる！)

そうしてデュラスは、カーエスの次の最寄りの足場に飛び移る行動を予測し、底に向かって砂の中を水中にいるかのように泳いで移動する。

目的地の真下に来て、カーエスが今まさに真上の地点に飛び移ろうとしているのを確認するとその顎目指して上昇を開始した。

しかし、彼はその行動が数回前の攻撃と全く同じ行動である事に気が付かなかった。

砂から出た彼の目の前には、彼の狙い通り、今まさに足場に着地せんとする無防備なカーエスの姿があった。

彼はしてやったり、とその顔に笑みを浮かべその鋭利なハサミをカーエスに向かって突き出した。

(もらった！)と、彼は勝利を確信した。

が、彼のハサミはカーエスに届く事はなかった。その直前に急にピタリと止まったのである。

その瞬間、彼は自分がどんな愚かしい事をしてしまったのか、どうして自分のハサミがカーエスに届かないのか、そしてそれがカーエスの狙いであった事を、全て悟った。

気が付くと彼はカーエスの張った《弾きの壁》に弾かれて地面に転がっていた。

見上げるとそこには、この隙にすかさず次の魔法の詠唱に入っているカーエスの姿があった。

「大地に根付くもの、大空へと《打ち上げ》ん！」

デュラスの巨体が逆バンジーよろしく勢い良く飛び上がる。

彼の視界がいきなり大空のみになり、暫くして下を見るとファトルエル全体を見渡せた。

彼の身体が細長い放物線を描き、落下を開始する。

すると突然自分の身体が重くなったように感じると共に、落下速度が不自然に高まった。

(やられた……《更なる重力》だ)

《弾きの壁》と共に朝の戦闘でカーエスが使った、一定範囲内にいる者全てに重力付加が与えられ、その落下速度を大きくしたり、身体の動きを鈍くしたりする魔法だ。

あの時は『ルーフトー・レスト』の屋上から飛び下りて来た男に使ったが、今回は《打ち上げ》と言う魔法を併用してその十倍近い高さには彼の身体を飛び上がらせていた。

地面が物凄いスピードで迫ってくる。

彼は衝撃に備えて体勢を変え、心の準備をしたが、やはりその衝撃は柔らげ難く、地面と衝突した瞬間、肺の中の空気を全て吐き出し、背中を強かに打ち付け、その大きな振動が全身に響く。

同時に《適応》による変身が解けた。

何とか呼吸を整え、痛みで下まつげに張り付いている目蓋を押し上げると、仰向けになって倒れているデュラスをカーエスが覗き込んでいた。

カーエスは勝ち誇った言葉を吐き駆けるでも無し、自分にとどめを刺すでも無し、ただ、彼の様子を伺っている。

そんなカーエスに、デュラスは痛みに顔を引きつらせながら腕輪をした左手を突き出した。

「俺の…負けだ…お前の師匠の心配が現実になっちまったな」
「…せやな」と、カーエスは初めてデュラスに笑いかける。だが、その笑みには嘲りは一切含まれていない。ただ、デュラスがかるうじて言った冗談に笑っただけだ。

そしてカーエスは差し出された左手から腕輪を抜き取り、砂に還した。

この瞬間に決着は付き、その大会一番乗りの大番狂わせに第二決闘場からはファトルエル中に届くような大きな歓声が挙がった。

19 『惨劇と不安』

人を殺さない人は殺人者に対し恐怖を覚える。

しかし人を殺さない人は、人を殺せないのではない、人を殺した事がないだけだ。

殺すという行為はその人から全ての時を奪う事だ。

過去も、現在も、そして未来も。

そんな行為は口には出せてもなかなか遂げられるものではない。

しかし人々は知っている。

一度、殺人を犯せば、もう、一線を越える事など簡単にできるよ
うになる事を。

その者が口にする死は、全て現実となりうる事を。

その者が放つ殺気はいつでも具現化しかねない事を。

だから人々は実際、自分より弱くとも、殺人者に戦慄し、恐怖するのだ。

大本命であるデュラスを倒し、意気揚々と決闘場の通路を歩いていたカーエスを待っていたのはカルクだった。

「カルク先生！」と、カーエスは満面に笑顔を浮かべてカルクに駆け寄った。

「どないでしたか？ 俺の闘い」

カルクは満足そうな微笑みを浮かべ、ゆっくりと頷いた。

「ああ、よくここまで強くなってくれたな。お前の師として誇りに思う。だが油断はするな。デュラスを倒した事によってお前の評価はグンと上がった。それによって強豪達はこぞってお前に挑戦してくるだろう」

「はい」

「私は用があつて、これ以降お前には付き合つてやれないが、たとえ相手がクリン・クランであつても、負けるんじゃないぞ」

「はい！ みんないてこまします！」

「その意気だ。出来る限り身体を休めるのを忘れるな」

カルクと別れた後、観客席に行こうとしたカーエスはふと参加者控え室に忘れ物をした事を思い出した。そして突き当たりに選手控え室のある廊下に行き着くと、その正面から、誰かが歩いてくるのが見えた。

参加者かと思つて身構え、改めてみると、それは既に体力がかなり落ちていそうな初老の男だった。

彼は腕輪のない腕を見せると、カーエスに歩み寄ってきた。

「さっきの試合を見ていたよ。なかなか見事だった」

「あ、ども」

カーエスが応えると、その男は口元に笑みを浮かべて右手を差し出した。

「私はイナス・カラフだ。よろしく」

何がよろしくなのかがよく分からなかったが、カーエスも右手を出してイナスと握手した。するとイナスは納得が行かないような顔をして手を放した。

「ところで、君は腕や首などに魔力封じの装身具をつけたり、刺青をしたりしている人は見かけなかったか？」

その質問に、意外だと思ったのだろうか、カーエスは少しばかり当惑を見せた。

「い、いや？ 見かけなかったけど……。おっさん何でそんな奴探してんの？」

「私の肉親でね。変な事を聞いて済まなかったな」

「いや、こん位の事で謝らんでも」

謝られた事にかえって戸惑いながら言うと、イナスは柔らかい笑みを見せた。

「良かった、さっきは聞いただけで物凄く怒られてしまっただけ。危うく殺されそうになったよ」

「そらそやるな。大会の参加者は大抵血の多い奴やし、ましてや決闘前でぴりぴりきとるんや、ホンマに殺されんかっただけラッキーチューこつちゃ」

「全くだ。しかし、」

「え？」

いきなりイナスの様子が変わった。

「あつちはいして幸運ではなかったようだ」

その声は、さっきまでの声とは全く違い、冷たい迫力を持っていた。

そのあまりの様子の変わり方に、呆然としているカーエスに、イ

ナスは元の様子に戻り、ペこりと御辞儀をすると、立ち尽くす彼の脇をすり抜けて行ってしまった。

カーエスはイナスが見えなくなるまで見送ると、彼は急いで控え室に走り込んだ。

そこには惨劇が広がっていた。

ある者は首を吹っ飛ばされ、ある者は腹に大穴を開けられ、ある者は黒焦げになり、ある者は全身骨が無くなったかのようにグニヤグニヤになって潰れていた。

石で出来た室内はおびただしい大量の血によって赤く染め挙げられ、その臭いが部屋中に立ち籠める。

これをあの体力がかなり落ちていそうな男がやった事なのだろうか。

にわかには信じ難いが、彼の最後の一言の響きはそれを十分に信じさせるものがあった。

「何モンや……？ アイツ」

そしてイナスの探す、腕や首に魔力封じの装身具をつけた人間、カーエスはそれに該当する人間を一人だけ知っていた。

（フィリー……！）

ファトルエルの短い昼が終わろうとしていた。まだ高い外壁の向こうに日が沈んだ訳ではないが、街で日の当たっているところはほ

とんどない。

この時点で彼は何度か戦闘をこなしていた。しかし初めの方は来る敵、来る敵呆れるほど弱い者達ばかりだった。

昔は屈強な戦士達がまともに砂漠を越えて来たのであろうが、サソリ便のような便利な交通手段が現れた為、参加者の質は大分落ちてしまったのではないだろうか。

しかし、腐っても闘いの聖地である。

本気で闘いを極めようとしている者達も少なからずいるようで、その証拠に午後に入ってから時間が経つに連れ、戦闘を挑まれる頻度は少なくなっていくが、それに反比例して相手が強くなって行く。

特に最後に闘った男などは、もう少しで魔法を使うところだった。オウナがリクに持たせた食料は一週間分。

ということは、この大会は最大で一週間続くと言う意味だ。

この調子で反比例が続けば一週間後、どれだけ強い人間が自分の前に立ちほだかるのかと思うと、ゾツとするものがあった。

(本当の幸せか……)

ファトルエルの街の中を歩きながら、そんな事を考えていた。ファルガールにカルク、そしてマーシア。

カルクは、今、マーシアが感じている辛い思いは、後で感じる幸せをより一層輝かせてくれると言う。

だが、その幸せとやらは、いつくるのだろうか。

ファルガールは、リクと出会って以来、「大いなる魔法」から大切な人を守るようになる事」を目標にしてきた。しかしそれを、この一生の内に果たせるのだろうか。果たさない限り、ファルガールはおそらくマーシアを求める事はないだろう。

つまり……

(このままだったら、マーシアは輝きを感じられるところか、小さな幸せ一つ手に入れられない……)

そう、このままだったら何も変わらない。

ファルガールが、マーシアが、そしてカルクが本当の幸せを掴む為には何かを変えなければならない。

それには、三人が一所に集まっているこの大会がチャンスだ。

(ファルは会っちゃいけないーって思ってたマーシアと偶然会ってしまった、どう思ったんだろうな)

……君は優しいな。ほとんど他人事なのに、君は真剣に、この事を考え、理解しようとしている。ほとんど初対面のマーシアや、私を本気で心配してくれている。

不意にカルクの言葉を思い出した時、リクはピタリと歩みを止めた。

(……何で俺はこんな事考えてんだ?)

「おい、ナンパ野郎!」

聞き覚えのある声に、リクの思考は中断された。声のする方を振り返ると、そこに屋根からカーエスが飛び下りてきた。

「あ、えーとカーエ……じゃない方言野郎」

「わざわざムカつく方に言い直すな！」
「そっちがナンパ野郎なんて言うからだろ」

カーエスの突っ込みにリクが言い返すと、カーエスはさらに言い返すかわりに両手を勢い良く振り上げ、大きな声を挙げた。

「だーっ！ そんなことどーでもええんや！ それよりフリーヤ
！ あんたフリー見かけんかったか！？」
「み、見てねーよ」

あまりのカーエスの勢いに、リクは戸惑いながら答えた。そして尋ねる。

「何かあったのか？」

カーエスは説明しようとして口を開けた。しかし、止めて、「何でもあらへんわい！」と、来た方向に走り去って行ってしまった。

(どー見ても何でもなくねーだろ)

訳が分からなかったが、とにかくフィラレスを探して、カーエスと合流させれば事が済むらしい。彼がどこに行っただのか分からなかったが、取り敢えずフィラレスを探して、合流する事に決めた。

そして歩き出し、何となく道なりに歩いているといきなり大通りに出てしまった。

しかし大通りの様子がなんだか変だ。

そしてその原因に気付いたリクはとっさにさっきの路地に駆け込み、建物の影から様子を伺う。

リクがその原因である人間、光を反射しない漆黒の髪を後ろで小さく束ねている同年代の男に見覚えがあったのだ。

と、いうより、忘れられない、と言った方が正しい。

(ジルヴァルト……！)

そう、大会前日式典の後、一睨みでリクを殺しかけたジルヴァルト⇨ベルセイクだ。

そしてまた彼はジルヴァルトと対峙しているもう一人の男も知っていた。

前回の優勝者“真の豪傑”シノン⇨タークス。

まだ初日だというのに、カーエスVSデュラス戦に続く大決闘が始まるうとしていた。

20 『恐怖、そして逃走』

圧倒的な強者を前に、逃げるのは恥じる事ではない。
生きれば何かの道はある。

しかし逃げられない状況で逃げようとするのは、あまりの愚行だ。
大切なのは生き延びる事。

その為にする事は、敵から逃げる事ではない。
死から逃げる事だ。

シノン⇨タークス VS ジルヴァルト⇨ベルセイク
その闘いは周りから見ると、ただのフリーの参加者と前回の優勝者という優勝候補のつまらない対戦のはずだった。

しかしそれを観る者達の表情は、みるみる内に戦慄と驚愕に凍り付いて行く事となる。

対戦は先ずシノンの先制攻撃から始まった。

睨み合っていた体勢からシノンの凜々しい顔が引き締まり、魔法の詠唱が始まる。

「《電光石火》によりて我は瞬く早さを得ん！」

唱え終わると、剣を構えたシノンの身体が閃光を放った。かと思うと、シノンの姿はそこからは消え、ジルヴァルトの背後に走り抜けていた。

ジルヴァルトは、両腕で急所をガードし、その腕に浅い切り傷を

負う。

《電光石火》はスピードを得られるが、攻撃力が伴わない。傷を負っても大した事はあるまい。

だが、先手をとり、相手の気を反らすにはもってこいの魔法だった。

「猛者たる条件は《強力》、魔力よ、理力の源となりて我を猛者と成せ！」

振り向き様唱えた魔法で、筋力を増幅させる魔力の膜を自分の身体の上に纏うと、シノンは躊躇なく、次の魔法を唱えた。

「《電光石火》によりて我は瞬く早さを得ん！」

確かに《電光石火》は攻撃力を伴わない。しかし《強力》によってその攻撃力は補われ、再び同じようにガードしたジルヴァルトの腕に先程とは比べ物にならない深い裂傷が刻まれる。

しかしシノンはそこで流れを止める事などしなかった。

剣を地面に突き刺すと、魔法で得た筋力をもって力づくで振り抜く。

砂が舞い、ジルヴァルトの目を覆った。

更に間を置かず、次の攻撃に入る。

「我得るは《一時の怪力》、我唱えるは五度の《電光石火》、我が描くは五芒星！」

“七星剣”！

閃光が文字どおり五芒星の形に走り、ジルヴァルトの全身に《一時の怪力》によって高められた攻撃力によって五つの大きな裂傷が

走り、血が噴き出す。

五芒星を描き切ったところでシノンはジルヴァルトの懐に潜り込み、下から剣を振り上げる。これで六撃目だ。

それを振り切ると同時に、シノンは《飛躍》の魔法を使い、上空に飛び上がる。

そして自分の真下に《更なる重力》を使い、自分の落下スピードを上げる。

真下のジルヴァルトを見据え、シノンは最後の一撃の剣を振りかぶった。

「終わりだ、ジルヴァルト!! ベルセイク!」

しかし、七撃目がジルヴァルトに届く事はなかった。

彼は傷だらけの右腕をゆらりと上げ、人さし指と中指のたった二本の指先でその剣を止めてしまったのだ。

「なっ……馬鹿な……!?!」

「茶番は終わりだ」

一言呟くと、ジルヴァルトはそのままの姿勢を保ちつつ静かに詠唱を始めた。

「我傷負いし、汝傷付けし。我が傷はやがて癒え、汝が罪、遙か昔に定められし教典によりて裁かれ、汝の身に返るであろう」

そして、ジルヴァルトはシノンの腹部に掌を当て、静かにその魔法の名を告げる。

「《報復の裁き》」

次の瞬間、驚くべき事に、ジルヴァルトの身体についていた傷が全て癒え、かわりにシノンが全く同じ場所、同じ傷を負った。

「ぐっ……ああ！」

手を離し、支えを失ったシノンは鮮血を噴き出しながら、前のめに倒れる。

そのシノンに、後ろで控えていたカンファータの魔導騎士団の残りの二人のうち、何故か顔に鉄仮面を付けた一人が駆け寄った。

「シノン様！」

「貴様、よくもシノン様を！」

もう一人は戦斧を構えて《強力》で攻撃力を強化し、《一時の怪力》で更に攻撃力を増幅しながらジルヴァルトに突っ込む。

そして攻撃に入る前に、もう一度《一時の怪力》を唱えた。

「食らえエ！」

しかし、ジルヴァルトはその斬撃を軽やかに躲すと、その男を睨み付けた。

その男と一瞬目があつたと思うと、突然その男は全身の力が抜け、その場に崩れ落ちるようにして倒れた。

残る一人、仮面を付けた魔導騎士はもう一人がやられたのを知ると、シノンの傍に立ち上がり、ジルヴァルトを睨み付けた。

倒れた男を見下ろしていたジルヴァルトがその視線に気付いて顔を上げる。

「……お前も俺とやる気か？」

「……同胞がこれだけやられたのだ。黙っている訳には行かない」と、持っている針を大きくしたような、完全に刺す為だけのスピアを構えて答えた。

「止めておけ。お前は俺には勝てん」

「ほう……大体想像はつくが根拠を聞こうか」

仮面魔導騎士は臨戦体勢を崩さずに尋ねる。

「大会に出場しているライバルであるにもかかわらず、お前達が様を付けて呼び、敬愛するシノン・タークスを倒したのが一つだ」

「敬愛しているからといって私がシノン様より弱い訳にはならない」

すかさず仮面魔導騎士は答えた。ジルヴァルトがすぐに反論してこないのを見て、仮面の中ではよくそ笑む。

しかし、一息置いてジルヴァルトは発言を続けた。

「もう一つある」

「ほう?」

「お前が自分の性別に負い目を感じ、そのような仮面を付けている事だ」

言うが早いか、ジルヴァルトは掌を仮面魔導騎士に向け、衝撃波を放った。

その衝撃波が鉄仮面を襲い、仮面魔導騎士は背中から仰向けに倒れる。そのショックで仮面は後ろの方へと飛んでしまった。

その仮面の下にある顔は、金髪の髪に碧眼、どこか気品を漂わせるきりつとした面持ちを持つ美しい女性だった。

「自分を偽るような甘い人間が、そこに転がっている前回の優勝者より強いとは思えん」

ジルヴァルトはそれだけ言うと、彼女に背中を向けて歩み去って行く。

そのジルヴァルトの圧倒的な強さに、リクはただただ戦慄を覚えるのみであった。

始め、シノンが押していたのを見ていたが、彼にはどうしてもジルヴァルトが負けるようには思えなかった。

あれだけの傷を負わされていながらも眉一つ動かさなかったのだ。ただ、何かをジツと待っていた。それがあの《報復の裁き》だともでは分からなかったが。

そして二人目を倒した時、あれは自分がやられたのと同じものに違いない。客観的に見るのは二度目だが、一度やられた後である所為か、あの時より感じる悪寒が倍増していた。

その後、仮面を付けた魔導騎士とジルヴァルトが何やら会話をし、突然衝撃波を放った時、その魔導騎士は死んだと思った。

しかし実際は仮面が剥げただけで、その中身が女性である事、そしてジルヴァルトがその女性を殺さなかった事が二重の驚きだった。殺す人間と殺さない人間。

ジルヴァルトの中はと言う法則が成り立っているのだろうか。ただ、気紛れだとはどうしても思えない。

ジルヴァルトがその場から去ろうとリクの方に向きを変えた。その瞬間、リクは今来た方向に逃げ出した。

21 『逃げずに、最後まで』

危険を避けて、逃げるのは賢明だ。

例えそれが今見ている夢を失う事になっても、生きていれば、また別の夢が見られる。

ただ、後になってそれを悔いる事は許されない。いくら悔いても失なわれた夢は戻らない。

胸に手を当てて考えてみるがいい。

その夢を失う事、命を失う事。

どちらがより辛いのか。

夢をとるなら、やるがいい。

逃げずに、最後まで。

もっと早く、もっと遠くへ。

リクは決して立ち止まらなかった。

立ち止まった瞬間に死ぬとさえ思った。

とにかく、とにかく彼は全速力で逃げた。

途中どこをどう通ったかは忘れてしまった。

最後には周りの景色は見えなくなっていた。

目を閉じると無惨に全身から鮮血を噴き出しているシノンの姿が脳裏に掠める。そして、もしジルヴァルトと闘ったら、と思うとそのシノンの姿は自分に置き換わった。

やればかならずそうなる。

それは確信だった。

「おわっ……っ！？」走っている内に何か足をとられ、頭から砂の上に身体を投げ出された。「……何だ？」

擦った額をさすりながら、眉を潜めて自分の足を引っ掛けたものを確認しようとするが、いつの間にかあたりは暗くなっており、目を凝らしてもそれが何なのか分からない。

そこでリクは、荷物から松明を取り出すと、その先に火をつけた。松明に灯った光はある程度の範囲を明るく照らし出す。

その瞬間、リクは目を丸くした。

「な、何だこりゃ!？」

砂の地面、道の両側に並ぶ建物のあるところに大穴があいており、その大穴の奥で一人ずつ命には別状ないが、しばらくは動けないくらいの怪我を負った男達が呻いていた。どうやら彼らもこの大会の参加者らしい。

その穴は跡、というより痕、と言った方がしっくりくるくらいで、リクは地面に穿たれた穴の一つに足をとられてしまったのだろう。確信は出来ないが、見る限りかなり大掛かりな魔法によって形成されたものようだ。

「……一体全体どうやってたらこんな事になるんだ？」

男達に聞いてみたかったが、彼等は皆気を失っているようだ。

首をかしている、リクにふわりとした風が吹いてきた。その風に乗ってきたのだろう、彼の耳に微かな笛の音が聞こえてきた。

(誰だ……?)

笛の音がする方向に小走りで行ってみる。さっきは風にのってやっと偶然聞こえてきた笛の音がだんだんはつきり聞こえるようになり、その先にぼんやり光るものがあるのが見えてきた。

その光源にあたる場所には、ゆらゆらと宙を舞う何本もの光の帯をまとって横笛を吹く少女が立っている。その情景は美しく、リクはそれを見た時、一瞬目を奪われた。

「フリー……」

リクがすっかり漏らした言葉にその少女、フィラレスが反応したのか、笛の音に乱れが起きた。その瞬間、美しかった光の帯達が無然、リクに向かって猛然と伸びてくる。

「え……？」と、リクは目を丸くした。

だが、その一瞬の間に、光の帯達は先を争うようにこちらに向かい、目前に迫ってきた。

もう一瞬遅ければどうなっていた事か。とにかくリクはそれをかろうじてかわした。

ところがかわしたはずの光の帯達はリクのいた地点の地面を擦ると、空に昇りながら方向を変え、現在いる方に下りてくる。

(ま、本気がよ……！？)

それは明らかにリクに対する攻撃だった。

はじめに自分のいた場所をちらりと見ると、地面が抉れていた。さっき見た闘いの痕と同じだ。あれをまともに喰っていたら、リクはひよつとすると命がなかったかもしれない。

フィラレスとは数回会った程度だが、リクにはこんなに強く、そしてこんなにも容赦の無い闘いをするタイプには思えなかったので、

彼は内心信じられない気持ちで一杯だった。

だが、リクを攻撃してきているのは疑い用のない事実で、立ち向かうか逃げるかしなくてはリクがやられる状況だった。

だが立ち向かうにも、この無数の光の帯に追い掛けられている状況では、フィラレスに近付くのもままならない。

（大体この膨大な魔力は何なんだよ！？ 明らかにファルよりずっと多いじゃねーか。）

そんな余計な事を考えていたからだろう、彼は四方を光の帯に囲まれてしまった。

「我が足に宿れ《飛躍》の力！」と、唱えると、彼の足がぼんやり光る。そして彼は自分を狙う光の帯達を精一杯引き付けると、唯一開けている空中に跳んだ。

「てめーら同士でぶつかって相殺しちまえっ！」

リクの目論見通り彼の足下で光の帯同士の衝突が起こった。しかし、打ち消されるのかと思いきや、一本に寄り合わさって、跳んだリクに向かって再び追撃を始めた。それを確認したリクは顔を引きつらせた。

「ウ、ウソだろお……」

彼は家屋の屋根に降りると猛然と走りはじめた。狙いはただ一つ、本陣のフィラレスだ。

だがいくら屋根の上にも逃げても、後ろを追いかけてくる光の帯とは別の光の帯が、横から前からその攻撃の手を伸ばしてくる。

リクは何度も危ない目にあっただが、その度に《飛躍》を使って、向こう側の家屋の屋根だの、あるいは地面だのに避難して、フィラ

レスに向かつて突進し続けた。その甲斐あつてか、着実に二人の距離は縮まって行く。

ようやく、光の帯の影に隠れていたフィラレスがちらちら見えるところまで近付けた。

しかし近付いたとして、フィラレスが纏っている光は、光の帯の元というだけではなく、かなり分厚い魔力の障壁である事は間違いない。それを破って攻撃するのは至難の技だ。

思案の過程で、ちらりとフィラレスを見ると、不意に彼女を目が あつた。

その目を見てリクは眉を潜めた。何かが可笑しい。

その目は闘っている者の目ではなかった。そして、彼に訴えている。

一刻も早く逃げてくれ、と。

(……………まさか……………!?)

リクは突如理解した。

フィラレスが、リクを攻撃したのではない。リクの方に意識が行ったから、それに呼応して光の帯達がリクに殺到したのだ。

個人の持つ魔力には性質と言う要素が含まれる。

それは性格と同じように十人十色であり、魔導士によって得意な魔法、苦手な魔法が出てくるのはその為だ。

フィラレスの場合、一度魔導を行いはじめると魔力は彼女の感情の向かう方向に過敏に反応して動く性質を持つらしい。

あれだけ大きな魔力なのだから、そんな厄介な性質を持っていてもおかしくはない。

彼女はリクがさつき見つけた男達と闘う為にあの魔力を使い、それを鎮めている時にリクに気が行ってしまったのだらう。

問題はフィラレスの魔力であるあの光の帯達は、彼女の意志で操られているのではなく、感情で操られているという事だ。

(さてどうする……?)

リクはなおも光の帯の攻撃を避けながら考えた。

気絶させれば意識と一緒に感情も閉ざされるわけだから、この光の帯達も消えるだろうが、さっきから問題になっている、フィラレスを覆う障壁だ。

あれを破るとなると、無事で済ませるための手加減など出来る余裕はない。

あの魔力の量、威力、自分の戦闘力、考慮の要素を一つずつ増やす度に勝算は激減していく。

(フィリーの言う通りに逃げるしかないか……)

そう結論し、リクは一步後ずさった。そしてふと、フィラレスの方を見ると、彼女と思わず目が合ってしまった。

その瞳に、リクはどきりとした。

それはとても寂しげな眼差しだった。

彼女はこの獰猛なる魔力で人を傷付けたくないと思う反面、一人取り残されることに心細さも感じているのだ。普段、周りにはマーシアもカーエスもいたのだろうが、彼女は基本的に孤独だったのかもしれない。

そんな瞳をしている彼女をおいていくのは、リクには酷く躊躇われた。

その躊躇いはリクの脳裏に一つの疑問を生む。

(また……逃げるのか、俺は?)

その疑問を皮切りに堰を切ったように、次々と自分への問いがリクの心を満たしていく。

(こんなに逃げてばかりでいいのか? ジルヴァルト相手に逃げ、ファイリー相手に逃げる。カーエスに会っても逃げることになるんじゃないのか? なら俺は誰が相手なら逃げずに済む? はつきりと俺より弱い相手か? 俺は格下としか闘えないのか?)

……俺は、そんなことでこの大会に優勝するつもりだったのか……?

その疑問に至って、リクは自分の犯した過ちに気が付いた。それを咎めるがごとく、彼の頭にファルガールの言葉が響く。

相手がどんな奴だろうとな、逃げずに立ち向かえば絶対に勝てる。いいな、夢を失いたくなきゃ、絶対に負けるなよ。

(俺は……夢を失うところだった……。いや、もう失っちゃったのかもな、アイツから逃げちまったし……)。

今から立ち向かっても間に合うか……? いや、間に合わないにしても、ここで諦める道理は無いっ!)

できるだけやってみよう。

逃げずに、最後まで。

リクは正面を見据えた。そこには既に光の帯が彼に向かって猛ス

ピードで一直線に伸びていた。

それをギリギリまで引き付けると、絶妙のタイミングを持って呪文を詠唱する。

「我が足に宿れ《飛躍》の力！」

その魔法の効力でリクは空高く飛び上がり、屋根の上に降り立つと、屋根に手をかざした。「《身代》よ、我が形となり、影となれ！」

すると、屋根のレンガが砂となり、リクにそっくりな人形を形作った。

さらにリクは屋根に向かって拳を振り上げると、「我が右手は《鋼鉄の拳》！」と、唱え、自らの拳を鉄に変えて屋根を思いきり殴りつけた。

屋根には穴が開き、リクはそのままその建物の二階部分に着地すると、上を見た。

「どつだ!？」

すぐ後に、その屋根は崩壊した。勢いあまって《身代》で作ったリクの人形に突っ込んだ光の帯もあつたらしいが、入ってきた角度から見て、光の帯は人形には目もくれずにリクを目指してきた。

《身代》で作った偽者で騙せるかもしれないと考えてやってみたが、どうもごまかしは聞かないらしい。

作戦の失敗にリクは舌打ちをすると、倒壊して自分に向かって落ちてくる屋根と光の帯を避ける為に再び《飛躍》を使って窓から外に飛び出した。

しかし、攻撃を避け続けるのも限界がきたらしい。

窓から通りに出たりクを光の帯達四方から取り囲み、すでに退路は断たれて無くなっていた。

22 『滅びに意思を伝えよう』

あなたの乗った馬は暴れだし、ある人たちを傷付けた。

ある人たちはあなたを責めた。そしてあなたも自分を責めた。

しかしある一部の人たちは逆にあなたを慰めた。

あなたの所為ではない、これはあなたの意思ではないのだから、と。

ある時、また別の馬に乗っていた時、また馬が暴れ出した。

馬の暴走の彼方にはある男が立っていた。

あなたは手綱を手放し、逃げてくれと叫んだ。

しかしその男は決して逃げず、あなたに向かってこう言った。

お前が本当に人を傷付けたくないのならば、馬を操る事を諦めてはいけない。

ここで馬を止める事が出来るようになれば、お前はもう二度と人を傷つける事はないだろう。

そしてあなたは再び手綱を手にとった。

フィラレスはその一部始終を見ていた。

何度も危ない局面を《飛躍》等で避け、民家の中に避難したと思うと、窓から飛び出た。

そして次の危機には、フィラレスは思わず目を覆いそうになった。窓から飛び出して来たリクを、光の帯が前後、上下、左右ありとあらゆる方向から襲い掛かる。

もう逃げるところはない。

ところがリクは、光の帯達の隙間を通してフィラレスの目と目が合うと、何とも自信のありげな笑みを見せた。

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

唱え終わると、光が一瞬ほとばしり、リクを目指して走っていたはずの光の帯達は一瞬にして四散する。

この魔法《瞬く鎧》は初心者を超したばかりの魔導士ならば誰でも使えるくらい簡易な呪文でありながら、全ての物理攻撃、そして相当上のレベルの魔導攻撃をも防ぎ、弾き返してしまうくらい強力な防御魔法である。

しかし読んで字のごとく、その強力無比な障壁はほんの一瞬しか、そこに留まる事が出来ず、また、魔法の効果が発生するタイミングが非常に安定しにくい魔法なので、唱えるタイミングが非常では済まないほど難しい。だから、この魔法を本当の意味で使える魔導士はごくごく限られているのだ。

少なくとも、リクの年齢でこれを完璧なタイミングで使えるのは異常だ。

次には別の光の帯がリクに向かって飛ぶ。

リクはそれを正面に見据えると、まるで今から弓を引くかのよう
に手を反らした胸の前にもって来た。

「我は放たん、」

リクの構えた手に炎が起こり、弓矢の形になった。彼はそれを、
本物を扱うかのように力強く引き絞る。

「射られし者を炎に包む《炎の矢》を！」

唱え終わると同時に、リクは一杯に引き絞った炎の矢を放った。放たれた矢は赤く燃え盛る尾を引きながら、リクに向かう光の帯に向かつてまっすぐ飛んで行く。

衝突すると同時に小規模の爆発が起こった。

その爆風に逆らい、リクはその爆煙の中に突っ込んだ。

その光景も、フィラレスはずっと見ていた。あの状況で助かったのは全く信じられない事だ。マーシアやカルクでさえもあの四方八方の攻撃は防ぎきれたかどうか分からない。

しかし彼はそれをやってのけた。

あれだけの事をこなせるのだから、彼は逃げる事ができるはずだ。

しかし、何故彼は自分に向かつてくるのだろうか……？

一旦、フィラレスの“滅びの魔力”を前に、撤退する様子を見せた彼ではあるが、その後、彼はまた地道に彼女の近付きつつある。

この場から逃げれば、全ては終わるといふのに、何故か彼は全く逃げようとする素振りは全く見せない。

フィラレスにとってこれはあまり歓迎できる事態ではなかった。

逃げて姿が消えてくれれば、意識を集中してこの光の帯達の暴走をおさめる事ができるのだが、彼はそうさせてくれない。

彼はそれが分からないほど魔導の知識に疎いようには見えない。

彼が見た目ほど魔導には詳しくないのか。

それとも、かれはこの状態のフィラレスでも倒せる自信があると
言っのか。

後者であってほしい、とフィラレスは思った。

「我は放たん、射られしものを炎に包む《炎の矢》を！」

「我は投げん、その刃に風巻く《風の戦輪》を！」

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて！」

(くそつたれ、キリがねえ！)

光の帯の攻撃を迎え撃ち、攻撃をかいくぐりながら、彼は密かに舌打ちをした。

リクはあの危ない局面を乗り切り、割と余裕で他のものを避けているように見えたが、実際はそんなに楽なものではなかった。

大体あの危ない局面を乗り切った時も冷や汗もので、あまりの緊張に顔が引きつりかけたくらいなのだ。

魔力の節約を止め、少しは楽に光の帯の攻撃を避けられるようになったにしても、これをとめる手段など一つも思い付かないでいた。ただ一つ、フィラレスに言いたい事があった。

だから彼は、彼女に向かって少しずつ前進しているのだ。

「我は突かん、槍穂に裁きを宿す《雷の槍》にて！」

バチバチと放電を起こしている長い槍の形をした紫色の光で突き、目の前の光の帯を片付けた先に、フィラレスはいた。

フィラレスは目の前に現れたリクを複数の感情を込めた目で見ていた。

何故逃げないのかという疑問。

早く逃げてほしいという願望。

そして、もう誰も傷付けたくないという意思。

それらの感情を全て受け止め、リクは口を開いた。

「フィリー、悪いが俺は気が変わった。ここからは逃げるつもりはない」

そして振り向きざまに自分の後ろに来ていた光の帯を《風の戦輪》で斬り付けて防ぐ。そして向き直ると、続けた。

「かといって、お前を倒してコレを止める自信はない」

今度はフィリーから目を放さずに、右側より迫る光の帯を《氷の鎚》で叩き潰す。

「つまり俺が助かるには、お前自身がコレを止めるしかない訳だ」

左手、そして頭上からリクを狙う光の帯を《炎の矢》、《雷の槍》で防ぐ。

「出来ないとは言わせない。腐ってもお前の魔力だ」

三方向からきた光の帯を《瞬く鎧》で弾き返す。

「いいか、お前が本当に人を傷付けたくないと思うなら、しっかりと自分の魔力をコントロールする事を諦めるな」

彼の言葉にフィラレスは当惑の表情を見せるばかりだ。

何故、彼は逃げてくれないのだ。

逃げてくれれば事は済むのに。

自分はこんなに彼を傷付けたくないと思っているのに。

リクはその当惑に答えるように付け足した。

「皆が皆、俺みたいに逃げられるのならいいけど、世の中のほとんどの人間はコレを前にしてはあまり長い事は持たない。腰を抜かして動けない事だってある。足を怪我して走れない事だってある。」

お前はそんな連中にも逃げてくれと言い続ける気か？ 魔力のコントロールもろくにしようともせずだ。

そりゃこの魔力が強すぎるのも分かる。性質が悪いのもな。はっきり言つて、ファルだってコントロールしきれるか分からねー。

でもこれだけは言えるぞ。ファルがこんな状況になったら笛から口を放して皆が傷付くのを黙って見てる訳ねーよ。きっと一人でも助けようと夢中で笛を吹く。自分は絶対に出来るって信じながらな。ファイリー、人がいても魔力を鎮められるようになってみせる。そうすればお前はもう、大好きな人を傷付けなくて済むんだ！」

魔力をコントロールする事を諦めない……？

絶対に出来ると自分を信じる……？

そうすれば、自分はもう誰も傷付けなくて済む……？

ファイラレスはまだ自分から目を放さず、激しい光の帯達の攻撃を凌いでいるリクにくくりと頷いて、右手にもったままだった笛を構えた。

笛の音色が安らかな音楽を奏ではじめた。

まるで泣き止まない乳児をあやす子守唄のような、静かで、眠りに誘う優しい曲調。

しかしいきなり集中して吹くのは難しかった。

早く事を収めなければ、リクがいつかやられてしまうのではないか、という緊張から手が震え、息が震えて、音が乱れる。

音の乱れは中途半端な魔力の制御を生み、その所為でリクを攻撃

する光の帯達の動きが不自然に、変則的になって来た。

リクはできるだけ彼女を見つめていたが、だんだんと目を放す時間が多くなって来ている。そしてその事が、フィラレスの集中を乱す原因となり、悪循環が続く。

と、その時、とうとうリクの守りが崩された。

突然フィラレスの正面に生まれた光の帯が、その目の前にいるリクを襲った。

さすがのリクもこれには反応しきれず、とっさに最低限の障壁を張り、攻撃を受けて後方に吹き飛ばされる。

倒れたリクに一齐に光の帯達が群がるように迫る。

フィラレスはこの瞬間、もう駄目だ、と思った。

しかし連想的にリクの言葉が脳裏に蘇る。

諦めるな、と言う言葉が。

落ち着かない心の中でフィラレスは考えた。

どうすれば、どうすればこの獰猛な魔力を制御できる……？

以前に一度、マーシアを“滅びの魔力”で大怪我させた事があった。

ある事件で、フィラレスは魔力研究所のその身をおく事になるのだが、その時にフィラレスの教育係に指名されたのがマーシアだった。

魔力研究所にてつくられた魔封アクセサリーをつけたままだが、マーシアの見ている前で何度かこの魔力を発動させる事があった。その中の一回で、フィラレスは魔力の暴走にマーシアを巻き込んでしまったのだ。

事が収まった後、フィラレスは血まみれになって倒れたマーシア

に駆け寄って何度も謝った。自分のような危険な存在はやはり消えてしまった方がいいとさえ思った。

しかし、マーシアは、そんな彼女にっこりと、苦痛に少しも顔を引きつらせる事もなく微笑んで言った。

「滅びの魔力」はあなた自身の魔力よ。確かに他の魔力とくらべると、誤解をしやすい魔力だけど、ちゃんとあなたの意志を伝えれば、魔力もそれに応えてくれるわ」

意思を伝える。

滅びと名付けられたこの魔力に、自分の意思を……。

吹き飛ばされたリクに群がる魔力は依然彼に迫り続けていた。

リクはかるうじて起き上がると、急いで呪文を唱え《瞬く鎧》を発動させる。

しかし弾け飛んだ光の帯達の影に、また別の光の帯の群れが彼に迫って来ていた。

(ヤバい、波状攻撃になってやがる)

第二波の攻撃は第一波よりは数が少ない。しかし、《瞬く鎧》はもうタイミングが合わないし、かといって《炎の矢》や《風の戦輪》で迎え撃つには数が多すぎる。《飛躍》なら何とか使えそうだが、先ず立ち上がらなければならぬ。しかしそれは最初の一撃のダメージが効いているために出来なかった。

魔力で出来る限り厚い障壁を張って、この場を耐えきるしかない。

いよいよ光の帯達が目前に迫り、リクは衝撃に備えた体勢をとつた。

それが当たる直前、彼は全身に力を入れる。

(来やがれ、耐えてやる……！)

しかしその攻撃が当たる事はなかった。

彼に当たる一寸前でその動きを止めたのである。

そして光の帯達による破壊の衝撃音のかわりにこの場を支配したのは、フィラレスの吹く笛の音だった。

止まりなさい。私の獰猛なる魔力達。

鎮まりなさい。私は誰かが傷付くことは望まない。

収まりなさい。ここには破壊していいものは何も無いのだから。

その一念は笛の音に乗り、音波として響く。その響きに応えてか、先ず彼女が纏っていた光の衣が無数の光の破片となって消えた。それは、それと繋がっている光の帯達に伝わりはじめ、光の帯はどんどん光の破片となって砕け散ってゆく。

そしてリクに迫っていた光の帯達も散り、光の粒子となって彼に降り掛かった。

リクは衝撃に備えた体勢のまま呆然とした。その視線の先には息を乱して、膝をつくフィラレスの姿があった。

彼女に駆け寄ろうと彼は立ち上がったが、そもそも立ち上がれず、《飛躍》で脱出出来ない身体である。身体が痛み、彼はよろめいて倒れた。

だがもう一度、今度はゆっくり立ち上がり、ふらふらとフィラレスに近付いて行く。そして息も荒く、肩を大きく揺らしてうずくまっているフィラレスに、「大丈夫か？」と、声を掛けた。

その声にフィラレスはこくりと頷き、憔悴感を感じさせる息をつ

く。そしてフィラレスが何か問いた気な表情をリクに向けた。一度光の帯の攻撃を喰った彼の身を案じているのだろう。

その意味を理解したリクは「ああ、俺は大丈夫だ」と、ニカッと笑ってみせると、彼女は安堵と達成感を含め、まぶしいくらいの微笑みを返して見せた。

23 『一日目の夜』

夜にあるものは闇。

身動きのしづらい闇は疲れた者達を休息させる。

動く者達の休息は静寂を呼び、その静寂は夜を好む者達によつては破られない。

夜を好む者達は音なく動き、昼を好み、夜を休む者達の物語をも動かして行く。

そうして夜には、全ての物語が密かに動いて行く。

この修羅場の中で男女が仲良く、夕食をとっている。そしてそれを覗く者が一人いた。

イナスⅡカラフである。

あれからずっと大会の中の戦場を駆け回り、“滅びの魔力”を持っている人間を探していたが、暗くなつて夕食をとろうとしたところで、突然轟音が鳴り地響きが起こつた。

彼はすぐさま、たまたま近くに在つた物見台に登り、《遠視》を使ってその轟音と地響きの源を探した。

それは一組の男女で、派手に闘っているように見えたが、少し見続けていると男の方はただ逃げ回っているようだ。そして彼はその男に見覚えがあつた。

(確か昨日ジルヴァルトが生かした小僧だな)

女は大して動きもせず、彼女から出ている光の触手を操つてただひたすら男を攻撃しているようだ。しかしなんとという派手さだろう。あれだけの光の触手は出すだけでも相当な魔力が必要だろうに。

その内に、男の方が触手に囲まれ絶体絶命となった。見ている限り、この男もまあよく逃げたものだと思う。

勝負が決まったかと思いきや、光の触手が全て粉々に砕け散り、結果相手の男は生き残ってしまった。

そして女は、魔力の制御に力を使い果たしたらしく、ガクリと膝をつき、その彼女にとどめを刺そうとしたのか、男は怪我で傷んだ身体を引きずって彼女に近付き……

そして今、彼等は仲良く食事をとっている。

イナスは始め、この展開が全く理解できなかった。

しかし少し考えて解った。つまりこの二人は知り合いだった。しかし何らかの間違いで戦闘が始まってしまい、彼女は発動させた魔力を制御して沈めるのに手こずってしまった。そしてそれがなんとか上手くいった。

最後に上手くいったのは、彼にとって何ら問題ではなかった。彼にとって最も興味深い事は、あの女が魔力の制御に手こずった、という事実である。

(そしてあの娘の光の触手の量、あれは膨大な魔力を消費しているだろう)

彼は更に食事をしている女の手、足、首を見た。そのどれにも、奇妙な紋様をした、輪がつけられている。

(あれは魔導研究所の最新の魔封アクセサリー……)

それらの情報を全て統合して考えた時、イナスはにやり、と笑みを浮かべた。

「見つけた……“滅びの魔力”……!!」

二人で食事を取り、フィラレスを寝かせた後、リクは綿を詰めて荷物の中に入れていた“呼び鐘”を鳴らしてコーダを呼んだ。

さすが便利屋と言うべきか、それから十五分と待たせずにコーダがリクの前に現れた。

リクは取り敢えず現在の大会の状況を聞いた。

するとコーダは、この一日で参加者の数は五分の一に減った事から報告を始めた。

「まあ、この五分の四のほとんどは自分の力を過信した身の程知らずなんすけど、何とこの中に優勝候補だった奴の内二人が入ってるんすよん。誰だと思いやス？」

「……シノン⇨タークスは知ってる。もう一人は？」

「この大会の大本命、デュラス⇨アーサーッス」

「へえ、大本命が一日目で負けるモンなのか？」

「時々ありやスけどそれは、一日目から優勝候補同士が当たったからスよ」

「と、いう事は大物じゃない奴がやった、という事だ」

「ええ、一応三大勢力の一つには属している奴っスけどね。カーエス⇨ルジュリスって奴ス。確か兄さん御存じでやしたね？」

「ああ。へえ、アイツがねえ」

リクは素直に感嘆の声を漏らした。一昨日と昨日。そして今日の昼、シノンとジルヴァルトの一戦を見る前に一度ずつ会っているが、そんなに強そうな感じはしなかった。

一体どんな闘いだっただろう、と考えている内に、コードは報告の続きを始めた。

「ところがシノン・タークスは吃驚でやスよ。どこにも属してないフリーの魔導士にやられちまったってんでやんスから。ああ、そういや知ってたんでやしたね。人から聞いたんスか？」

「いや、見た。……シノン・タークスはその後どうなったんだ？」「亡くなりやした。急所からは外れてやしたが、あまりに傷が深く、治療班が駆け付けた時には手後れだったようで……」

「そうか……」

リクはため息をつく、コードに懺悔でもするように全てを話した。

自分がシノンの相手の魔導士・ジルヴァルトを知っている事。大会前に一度彼に殺されかけている事、ジルヴァルトの闘いを見た後に逃げ出してしまった事。

そして、リクは“呼び鐘”を取り出してコードに差し出した。

「お前は俺を気に入っているから便利屋をやってくれているんだっただな。あいにく俺はこんなに弱い男だ、お前に気に入られる器じゃなかった」

リクは、自分のあの逃亡は折角自分に期待してくれたコードに大して申し訳のない裏切りだと思っていた。そしてコードのリクに対する期待の証であるこの鐘をコードに返す事にしたのだ。

コードはその手を鐘に伸ばしたかと思うと、リクのチャイムを持つ手を掴み、掌を返して、その上に改めて鐘を乗せて握らせた。

そして強い調子で言った。

「それは違いやスよ！」

「え？」

「俺は兄さんに完璧を求めていやせん。時には負けたっていいんす。逃げたっていいんす。それに、まだその腕輪をしてるって事は、まだ完全に負けを認めた訳じゃないって事ツスよね？」

「あ、ああ」

「なら、俺が兄さんの便利屋を止める理由は何もないス。最後に勝てばいいんすよ」

最後に勝てば良い。

そのコードの言葉は、リクが改めて決意を持った裏に持っていた、逃亡に対する罪悪感を全て吹き飛ばした。

(そうか……、俺はまだ間に合うんだな)

「ああ、そうだよな」

リクは力強く頷くと、コードに笑いかけて見せる。

するとコードも、笑い返し、ぐっと、親指を立てた握り拳をリクに突き出してみせた。

「よし、それでこそ俺の気に入った兄さんス。俺に出来る事なら何でもやらせてもらいやスよ」

「じゃ、早速頼む。人探しと、情報収集だ」

「なんスか？」

聞き返されたリクは、ちらりと眠っているフィラレスに目をやって言った。

「情報収集は、そこに寝ているフィラレス＝ルクマースについてだ」

「さっきから気になってたんすけど何かあったんスか？」

リクは少しでも情報収集しやすいようにと、事細かにフィラレスの魔力について説明した。

「……と言う訳だ。大会とはあまり関係ないが、また暴走したら今度も無事でいられる保証はねーからな」

「勝ったのに腕輪を取らなかつたんスか？」

不思議そうに聞いてくるコーダに、リクは頷いて答えた。

「お互い納得して闘った訳じゃねーからな。……でもいつかはやらなきゃな」

「……そもそもこの娘、何の為に大会出て来てるんス？ 人を傷付けたくないならこんなとこに来なきゃ良いのに」

言われてみれば確かにそうだ。人を傷つけるのがいやなら、ここにこなければ平穏な環境にいられたはずである。

しかしフィラレスは、それが分からないほど頭の悪い人間にも思えない。

「さあな。何か事情があるんだろ。」

後は人探したが、フィラレスの事を聞きたいので、“冷炎の魔女” マーシア⇨ミスターシャ、もしくはカルク⇨ジーマン。

次に残った優勝候補のクリン⇨クラン、もしくはカーエス⇨ルジユリス。

それにシノン⇨タークスを殺したジルヴァルト。その仲間らしいイナスとハークーンって奴も一応探してくれ。何か変な事を企んでるらしいからな。

このリストで一つでも片付いたら、その都度俺に報告しに来てくれ」

「それだけっスか？」

リクの言った人物名をメモに書き込んだコードに聞き返されて、リクは思い出したように手を打った。

「そうだ、カンファータ勢の中で唯一生き残ってる女がいるだろ？名前は知らねーけど、そいつも探しといてくれ」

「その名前も知らない人になんか用があるんスか？」と、奇妙なりクエストにコードが眉を潜める。

「ちよいと自分に釘を刺しておこうと思ってな。もう二度と敵に背中を見せないように」

頷きながらそう言うリクには少し自嘲も混じった意味深長な笑みが浮かんでいた。

24 『フィラレスのほのかな期待』

自分の存在が疎ましく思った時、人はどうするのだろうか？

自分が周囲の人間にとって、何の役にも立たないと悟った時、人はどうするのだろうか？

自分を誰も必要としないと考えた時、人はどうするのだろうか？

そして自分が周囲の人間にとって非常に危険であると判断した時、人はどうするのだろうか？

次の朝、カーエスは憤りを感じざるを得ない状況に立たされていた。た。

昨日イナス・カラフと出会ってから、彼が探していたフィラレスと、その奔走の途中でばったり会ったリク・エールが同じところで寝ており、どう見ても一夜を共にしたとしか思えない状況を作っていたからだ。

フィラレスは毛布の中、リクは座ったまま近くの塀にもたれて寝ており、一線を越えた気配はなかったが、それでも男女が一夜を共に過ごすというのは小事では済む話ではない。

無論、昨日のリクとカーエスの立場が逆だったとしてもフィラレスは共に夜を過ごしたろうが、昨日は日が暮れるまで、今日は夜が明けてからすぐ探しに走っていたカーエスの頭はそこまで冷静にものは考えられなかった。

「おんどれは何やっとなねくんっ！」と、小さな寝息を立てて眠っているリクに飛び蹴りを入れようとしますが、その足は当たる直前にリクの手の平に収まった。

「……何すんだよ」

半分寝ぼけ眼でリクが口を尖らせる。

「ナニも、カニもあるかい！ こりゃどういう事やねん！」と、毛布に包まって寝息を立てているフィラレスを指差す。

「ああ、これか？」と、リクはかいつまんで事情を説明した。

「だから、そうやかましくしねーで、もう少しフィリーを寝かせてやれ」

「ホンツ……マに何もなかったんやな？」

「本っ……当に何もなかったんだよ！」と、少し意地になって言い返したが、その後、リクはニヤツと笑った。

「そうか、そういう事か」

「何を一人で納得しとんねん」と、カーエスがリクの様子に眉をかめる。

「いや、お前が何でそんなに怒ってんのかって事だよ」

その意味深長な言葉と、にやけた目つきでカーエスは彼が何を言わんとしているかを理解した。

「な、何を……！？」言い返そうとすると、不意にリクがその視線を、彼の背後に移した。

カーエスが後ろを向くと、フィラレスが目を覚まし、体を起こしていた。不意に目が合い、彼は元々赤かった顔がもつと赤くなる。

何故カーエスがここにいるのか解らない為か、彼女は少し首をかしげてみせた。それを全く別の意味にとったのか、カーエスは意味

のない動作をくり返し、必死で弁明らしきものを行った。

「ちゃ、ちゃうんや……！ フィリー……あの……そのやな……リク！
おんどれも何とか言わんかい！」

一言目から言葉に窮したカーエスがその後ろで笑いが漏れるのを必死で堪えているリクに向き直って詰め寄る。

「い、いや、お前……ぶつく……ははははは！」と、何とか言ってみようとして口を開いた途端に、今まで口でせき止められていた笑いが一気に漏れだし、リクは大笑いした。

ひとしきり笑って、やっと収まってきたリクはようやく話を切り出した。

「お、お前、確か……」

収まってきたとはいえ、少し油断したらまた笑い出しそうで、彼の口調はかなり変わったものになった。

「ふい、フィラレスを、さ、探してるんじゃ、な、なかったっけ？
ぶつ……ははははは！」言い終わると、堰を切ったようにまた笑い出す。

リクとは対照的にカーエスは本来の目的を思い出した。

「あ、せやっ！ フィラレス、ちょい話があるんや」

そして、笑い転げているリクの方を見る。

それに気付いたリクは、「あ、ああ、わ、分かっている、分かっている。くくく……お、お邪魔虫は……た、退散するよ。ぷぷ……い、い、つま、でも、一緒に、くくく、いるわけには……いかないしな」と、何とか答え、荷物をまとめて肩に担いだ。

その頃には、笑いが収まっており、リクはフィラレスに手を上げて、「じゃ、またな。何とか頑張れよ」と、笑いかけた。フィラレスも、こくりと頷いて答える。

リクが去った後、カーエスはフィラレスに向き直った。

フィラレスも、カーエスの方を向いたが、さっきまでのひょうきんな雰囲気は吹き飛んだ真剣な表情だったので、何事かと目を少し大きく見開いた。

「フィリー、ええか、よう聞けよ。お前の“滅びの魔力”を狙うた奴がこの大会に入り込んで。で、そいつらは無茶苦茶強い。俺でも多分勝たれへん。」

でもカルク先生とか、お前のマーシア先生なら何とかしてくれる。だから今から探さなアカん。でも、二手に別れるんやない。俺と一緒に、や。もし見つかったしもうた時、俺が足止めしたる。お前はその間に逃げて今度は一人で先生探すんや」

だがフィラレスは何の反応も示さなかった。頷かなければ、不安を見せる様子もない。ただ黙って、カーエスの話を聞いている。

「フィリー？」

彼女があまりにも無反応なので、呼び掛けてみる。

すると、フィラレスは一步カーエスに歩み寄った。その予想もしない行動にどきまぎした次の瞬間、彼の鳩尾には彼女の拳が突き刺さっていた。

避ける暇もなかった。

「うっ…フィリー…？ な、何を…!？」

彼は苦悶しながら、彼女の瞳を覗き見る。その瞳には今までには見たことのないくらい強い意思が宿っていた。

昨夜、リクは彼女と共に食事をとった後、焚き火をしたところについてまでもいるのはまずいので、場所を変え、疲れ切っているフィラレスを眠らせた。

彼女は多少遠慮の色を見せたものの、リクに促されるままに、毛布に包まって横になる。いつも魔力の制御には精神力を使い果たすが、昨夜は特に疲れてしまった。

だが、彼女は眠る事は出来なかった。目を瞑っても、その目蓋の裏に映るのは昨日の事件。たまたまりくであったからよかったものの、他の人間だったら、いや、リクでもあの時の状況次第では殺してしまつたかも知れない。

たまたま事が上手く運び、リクの無事を喜んで、彼に笑顔を見せたフィラレスではあつたが、その反面、強く罪を感じていた。

無差別に人を傷付ける自分の魔力、そしてそれは決して自分を傷付けない。だが、その度に彼女は心に深く傷を重ねて行く。その傷は自分が傷付く事でしか癒されない。

今思うと、かなり軽率な考えでこの大会の参加を決めてしまったが、その結果リクをはじめとした人たちを傷つけてしまった。

今日、自分の魔力で吹き飛ばしてしまった男達、そして光の帯に吹き飛ばされてリクが絶体絶命の危機に陥った時の事を思い出し、彼女は毛布に包まれたその体を丸め、抱き締めた。

その時、リクが声を掛けて来た。

「ん？ 寒いのか？」と、フィラレスは不意にリクに話し掛けられた。暗いので、ジェスチャーによる返答が利かない。

戸惑っていると、「砂漠の夜は寒いからな」と、シルエツトしか見えないリクが立ち上がり、フィラレスに歩み寄って、自分が包まっていた毛布を掛けてくれた。

呆然とリクを見つめていると、それに気付いた彼が「傷は魔法で治した。心配はいらねーよ。ほれ、早く寝ねーと明日が辛いぞ」と、元気なことを証明するかのように腕を大きく激しく動かしてみせた。傷付けた自分に対するリクの親切は、心の傷に塩を塗るようなものだった。

自分など放って、罵声でも浴びせてくれればどれだけ楽だった事だろう。

だが、フィラレスはこの大会にほのかな期待を抱いていた。

この大会の参加者の中になれば、ひよっとして、あの光の帯達の攻撃をかいくぐり、光の衣を打ち砕いて、自分を傷付け、殺す事が出来る者がいるかも知れない、と。

24 『フィラレスのほのかな期待』 (後書き)

すみません……。たったいま19『惨劇と不安』を飛ばして投稿していたことに気が付きました。

25 『不躰な懺悔』

誓う事それ自体に意義は無い。

自分の中だけで決意をすると、いつしかその決意は薄れてしまう。その決意を他人に告白する。

告白するのは別に誰にでもいい。

実体のない神にでも、紙に書くだけでもいい。

その決意を自分の表に出してしまう事が重要なのだ。

もしその決意が果たされなかった場合には、自分は責められ、信用を無くしてしまう状態にする。

すると、その決意は薄れる事が無くなり、その決意を裏切ると、その人は一生それを引きずる事になる。

それが誓いである。

リクの前に、昨日いろいろ頼んだコーダが姿を現わしたのはフィラレス達と別れたすぐ後だった。タイミングからしてリクがフィラレスから離れるのを待っていたらしい。

「おはよッス、兄さん。良く眠れやしたか？」

「気分は上々だ。それより誰が見つかったのか？」

リクが訪ねると、コーダは得意そうに胸を反り返して答えた。

「ええ、例の女魔導騎士っス。結構近くにいやスけど、どうしやス？」

「会つに決まつてんだろ。場所と名前を教えてください」

ここは第一決闘場内にある医務室だ。まだ生き残っている参加者は利用出来ないが、すでに腕輪をとられた参加者達を治療する為の施設である。

魔法によつて傷だけは塞がれたシノン「タークスの遺体を前に、ジェシカ」ランスリアは落ち込んでいた。

彼女が敬愛し、そして想いを抱き続けて来たシノンの死を目の当たりにしただけではない。その仇に、自分のコンプレックスを正確に指摘され、相手にもされなかった。

あの時、飛ばされた、鉄仮面の付いた兜は脱いだまま、彼女が座る椅子の脇に転がされている。

「シノン様、私はどうすれば良いのでしょうか？ あなたの仇は打たなければならぬと思います。しかし、私はその男に相手にもされず、あまつさえ、軽く弄ばれる始末……」。

初めは何かが間違えば、あなたにも勝てるかと自惚れ、この大会に参加しました。しかし、正直に言つて今、私にはあの男に到底勝てる自信がありません」

そうひとり呟いてジェシカは手袋型の鉄の籠手に嵌まつた右手を握りしめた。

「自信が無いのなら止めておけばいいだろーが。何も悩む必要はねーと思うけど？」

いきなり背後から声を掛けられ、ジェシカは反射的に壁に立て掛けたあつた槍を手にとり、目にも止まらぬ早さで振り向く。そこにいるのは栗色の髪、そして綺麗なエメラルドグリーンをした、青年と呼ぶにはもう少し若い感じのする男である。

「誰だ、貴様は!?!」

「フリーの参加者でリク=エルって者だ。あんたに謝りたい事があつて来た」

妙な物言いに、ジェシカは槍を握る手の力を緩め、眉をしかめる。

「謝りたい事?」

リクは頷いて肯定の意を表す。

「ああ、俺はシノン=タークスが殺される現場に居合わせた。だが、俺はその後、ジルヴァルト=ベルセイクに恐れをなして逃げてしまった」

「それが私に謝りたい事か? ならば謝罪は必要無い。勝てない敵から逃げるのは賢明な選択だ」

槍を下ろしてそう言うジェシカに、リクはゆっくりと首を振った。

「それは違う」

「何?」

「俺はジルヴァルトに勝てるはずなんだ。あの時逃げずに立ち向かえば、少しは結果が変わってシノンは助かったかも知れない」

「何を根拠にそのような事を言う?」

あのジルヴァルトを目の当たりにして、なおかつ、勝てるかも知れないでも、勝てないかも知れないでもなく、勝てるはずだと言っ。

この思考は正気では考えられない。少なくともジェシカにとっては。

「これは自分で言ってるんじゃない、他人からも言われている事だからだ。逃げずに立ち向かえば絶対に負けねーってな」

「信用ならんな。話はそれだけか？ ならばさっさと出て行って私を一人にしてくれ」と、ジェシカは槍を壁に立て掛け、リクに背中を向けた。だが、自分の背中に投げられた次の言葉に、ジェシカはピタリと動きを止める。

「なら証明してみせる。俺と闘え、ジェシカ」ランスリア」

次の瞬間、先程壁に立て掛けられたばかりの槍はリクの鼻先に突き付けられていた。その槍は確かに前の瞬間まで彼に背中を向けていたジェシカの手握られている。

そして一秒経ち、豊かな金髪を編み上げた大きな三つ編みがそのジェシカの早さに唯一ついでこれず、今ごろといった感じで、パサリと彼女の背中を叩いた。

リクは全く身じろぎしなかった。しかし、動けなかったのではなく、彼女には刺す気が全くなかった事を見抜いての事だ。ジェシカもそれに気付かないほど盲目ではなかった。

静かに睨むジェシカに、リクは無表情のまま、もう一度告げた。

「俺と闘え。そして俺がお前を相手に楽勝したら俺に謝らせる、それでいいな？」

「私を相手に楽勝？」

「苦戦してもジルヴァルトより強い証明にはならねーだろ？」

不敵な言葉にジェシカはその目を一層鋭く細めた。

「いいだろう。だが後悔しても知らんぞ」

リクとジェシカの対戦はこの第一決闘場で行われる事になった。準備を終え、控え室を出て来たリクをコーダが迎えた。

「に、兄さん、なんスか？ その格好？」

肘まである袖の裾はびらびらで、その中から下の長そでが突き出している。その長そでには手の甲から肘までを覆う籠手。頭には大きな長いバンダナを巻き、胸には軽金属で出来た胸当てをしている。そして締まるところは締まってずり下がる心配はないが、やたら長く大きいズボンを履いている。

一言で表すと、道着といったところか。色は緑と白を基調としたもので、リクの瞳の色などと相まってとても良く似合っていた。

「ああ、ちょっと気合い入れようと思ってな。どうだ、似合うか？」
「うん、かっこいいッスよ」

しばらく頷きながら、それを眺めていたコーダが恐れ多そうに尋ねた。

「兄さん、あの、ちょっと聞きたいんスけど、どうしてあの女と闘

う事が自分に釘を刺す事になるんす？」

「俺もまさか闘う事になっちまうとは思わなかったんだよなア」

「へ？」と、意外な答えに、コーダが目を丸くする。

「元々アイツに謝って、それでジルヴァルトを絶対に倒すぞって、いってやるつもりだったんだ。ところがなかなかあっちが謝らせてくれねーもんだから、どーにかしようと思ってる内に闘う事になっちまった」と、リクは苦笑する。

少しの間、呆れた様子を見せていたコーダは話の流れを根本的な方向に修正する。

「で、どうして闘ってまで謝ろうって思ったんすか？」

「自分に釘を刺す為って言ったろ？」

「どうしてあの女と闘ってまで謝る事が自分に釘を刺す事になるんす？」

「俺もまさか闘う事になっちまうとは思わなかったんだよなア」

言ってしまったって、話が堂々回りになってしまっている事に自分で気が付いたリクは咳をひとつして謝った。

「スマン、話が変わってたな」

「それはいいんすけど。で、あの女に謝って自分に釘を刺すってどいう意味なんす？」

「イマイチ自分だけの決意じゃ弱えかな、と思ってさ」
「？」

「自分の敬愛する男を殺されて、悲しみに暮れているアイツに逃げた事を謝って、もう逃げねー、絶対アイツを倒してやるって言っちゃったら、もうさすがに引っ込みが付かなくなって逃げたり出来なくなるんじゃないかって思ったんだ」

「へえ……」と、コーダはリクの考えに感心した様子を見せる。「

それで、勝つたら謝れるんスよね？ 勝算はあるんスか？」

「勝つたら、じゃない。楽勝したら、だ」と、リクは訂正した。「勝つくらいは何とかかなりそうだが楽勝となると、ちよっとキツいな」

表面は自信なさげな言葉ではあるが、結局は自信たっぷりな不敵な発言だ。そしてコーダはリクの雰囲気に向かい対する緊張を感じなかった。だがそれとはまた違った緊張感は見受けられる。何か新しい事を始める時の心踊る緊張感と言うのか。

この時、コーダは自分が気に入った男がこの大会の優勝に思ったより遥かに近い事を感じた。

一方こちらは、ジェシカⅡランスリアの控え室である。

ジェシカは、鉄仮面を除くいつもの装備を身に付けると、部屋を出た。そこには待ち人が三人いた。

正確に言うと、待っていたのは一人で、後の二人はその護衛である。

護衛されるほどの人物、そしてジェシカに関連する人物、それは最も高位にある人間の一人。それはカンファータ国王・ハルイラⅡカンファータ十八世だった。

それに気付くと、ジェシカは反射的に片膝を付いた。

「ジェシカ、これから闘うと聞いたが、まさかあの男ではあるまいな？」

「いえ、今回は。しかし関係の無い話ではありません」

「…………？ それはどう言う事だ？」

ジェシカは可能な限り詳しく事情を伝えた。

「ですから、私はあのリクと言う男の鼻柱を折ってやり、改めてあの男に挑む所存です」

それを聞いたハルイラは、深いため息を付いた。

「ジェシカ、私は正直に言って、お前にこれ以上闘って欲しくない。軽々しくこのような大会に出したお陰で私は二人も有能な魔導騎士を犠牲にしてしまった。

シノンでさえ、あっさりやられてしまったと聞く。お前もシノンに五分だと認められたとはいえ、私はお前がジルヴァルト＝ベルセイクに勝てるとは思えん」

「私もそう思いました」

ジェシカが思ったよりあっさりと認めたのでハルイラは、少し驚いた様子で問うた。

「ならば、何故お前は闘い続けようとするのだ？ お前は勝てない闘いを挑むような者ではなかったと思うが」

その質問に、ジェシカは初めて垂れたままであった頭を上げ、ハルイラの目を見て答えた。

「今から闘う相手は私に向かって楽勝してみせると言い切りました。そしてその前に、あの男は自分がジルヴァルトに勝てるはずだ、とも。

妙な事に私はあの男が嘘を言っているようにも、思い上がっているようにも思えませんでした。その目は自分を信じきっておりまし

た。普通人は少しは自分を疑うものですが、あの男にはそれがなかったのです。

我が君、どうか私にこの闘いを止めると命令しないで下さい。私は、確率は絶望的に低いのですが、この闘いで私は我が師・シノン「タークスを越え、そしてあの男に勝利する為の何かを得られるやもしれないのです！」

「ジェシカ……」

その真剣な眼差しにハルイラは思わず一步退いた。そしてジェシカに頭を上げさせた事を少し後悔した。もしこの眼を見なければ、彼はジェシカに拒絶不可能な命令を出す事が出来た。しかし、それは今や不可能になってしまった。

「……良からう、私はお前が大会の参加者である限りお前の行動には干渉はしない。だが、奴とやる前に一度でも負けて腕輪を剥奪されたらそれまでだ。それ以上闘う事は許さん」

「有り難うございます。では相手を待たせるのは礼儀に反する事なので、これで失礼いたします」と、ジェシカは一礼すると、槍を掴んで通路を走り去った。

26 『一撃で決める!』

あなたは十分に強い。

しかしあなたは弱い。

何故なのかあなたは考えた事がありますか？

あなたは自分が弱いと思っている。

あなたは自分を疑っている。

あなたは自分が出来ないと思っている。

そしてあなたは自分で自分を限っている。

だから、あなたは弱い。

しかしあなたは強いのです。自分が思っているよりもずっと。

だから自分を信じなさい。

自分なら出来ると思きなさい。

自分の作った見せ掛けの壁を撃ち破りなさい。

しかし、だからといって出来ない事を出来ると思じないで下さい。自分の本当の限界を知り、その限界の分だけ自分を信じる事が大切なのです。

無所属参加のリクニールと、カンファータ魔導騎士団NO.2のジェシカニランスリアの対戦の賭け率は予想通りジェシカがやや有利と見るものだったが、意外に拮抗していた。

それもこれも前日にノーマークだったカーエスニルジュリスが本命のデュラスニアーサーを、そしてフリー参加の魔導士が前回優勝者のシノンニタークスを打ち破り、大穴勝ちが続いているからに

他ならない。

この大会はもう誰が優勝してもおかしくない。観客たちはそう思い始めているのだ。

リクは観客たちが見守る中バトルフィールド内に入場すると、大会前日式典が行われた砂丘の頂上に向かう。

ふと顔を上げて見上げると、そこには既にジェシカが待っていた。

「待たせてすまねーな」

「謝罪には及ばない。私が早めに来ていただけの話だ」と、丘の頂上からジェシカはリクを見下ろして言った。

リクが丘の頂に到着し、二人は、しばしの間、お互いの眼を見つめあつた。

「俺がどうやって勝つか言つたっけ？ ジェシカ」ランスリア

「確か貴様は私に対して楽勝する、などとふざけた事を言っていたな。リク」エール」と、ジェシカが答えると、リクは顎に手をやり少し考え込むような仕種をみせた。

「どうかしたのか？」

「いや楽勝するったって、結構基準がいい加減だろ？ だから楽勝の条件を決めておこうと思つてな」

その言葉にジェシカの雰囲気が変わる。静かな水面に木の葉が落ちて波紋が広がる時のように、何かが微かに動き、そして広がる。

「……で？」

「おう、楽勝だと決める条件はな……先ず、ノーダメージ。これは当然だな。時間も制限しとこうか？」と、リクはニカツと笑ってポ

ンと手品のように掌に大きなボールを出現させてみせる。「これを魔法で上空にぶっ飛ばす。これが地面につくまでだ。大体三分つてトコだな」

「よし、分かった」

「まあ待て、最後の一つが肝心なんだ」と、リクはジェシカが身を翻して距離をとろうとするのを制した。

彼女は後ろを向いたまま、肩ごしにリクを睨みつける。リクはそれに怯む事はなく、さっきまでの笑顔を忘れさせるような真剣な面持ちで最後の条件を告げた。

「……一撃で決める！」

ジェシカはリクに向き直った。

「今、何と言った？」

「一撃で勝負を決める！……ジルヴァルトがシノンを倒した時も一撃だった。だからアイツより強いと証明するにも、一撃で決める必要がある」

言い切ったリクに、ジェシカはしばらくリクを睨み付けると、今度こそ身を翻してリクと少し距離をとる。

「……分かった。もしそれが出来なければ、私はお前を認めない」
「よし。じゃ始めるか」と、リクはボールを丘の頂上に置くと魔法を詠唱し始めた。

「大地に根付くもの、大空へと《打ち上げ》ん！」

唱え終わると同時にボールは上空の見えないところまで一気に飛び上がった。

その瞬間、リクから少し離れていたジェシカは、何か呪文を唱え、そしていきなり姿を消す。

リクは反射的に《瞬く鎧》を張る。

すると、その障壁に突き出されたジェシカの槍がぶつかり、《電光石火》で姿が見えなくなっていたジェシカの姿が現れる。

「あつぶねー……」

引き攣った笑みを浮かべるリクに、ジェシカは不適な笑いを浮かべてみせる。

「成程、ノーダメージ宣言は単なる口から出任せではなさそうだし、これは避けられるか!? 《電光石火》によりて我は瞬く速さを得ん！」

再び《電光石火》を唱えたジェシカはリクの目の前から消える。

この魔法は、敵との距離を一気に縮める際によく用いられる魔法だが、その逆もまた可能である。

リクは周りを見回すがジェシカの姿はない。

この砂丘を模したバトルフィールドでは大きな死角が生まれるのが大きな特徴である。

ジェシカは《電光石火》で一瞬にしてその砂丘の死角に回りこんだのだ。

ここからどうする気だ、と考えている内にリクは急にゾクツと背筋に寒気を感じた。

「我が足に宿れ《飛躍》の力！」

リクが魔法で飛び上がった直後、彼の立っていた丘の頂上の一

が吹き飛んだ。

吹き飛んだ向こうには槍を突き出したジェシカがいた。おそらく補助系の魔法で極限にまで高めた一撃だったのだろう。

(それにしてもこの威力にや驚いたな……)

リクがジェシカの放った一撃に驚いている頃、ジェシカもその驚きは隠せないでいた。

(まさか、これがかわされるとは……)

《強力》に《一時の怪力》を二回唱え、さらに槍が砂丘に当たる瞬間に《衝撃の増幅》という文字どおりの魔法を使用し、まさに極限まで突きの威力を上げた大技“極星突”。

敵の視界から離れ、死角に回り込み、万全な状態で放ったはずだったが、まさかかわされるとは思いもよらなかった。

(こうしている場合ではないな)と、思い直したジェシカは、空中に飛んでいるリクを見据えた。そして槍を構え、リクに向ける。

「我が手にありし物《射出》せん！」

その魔法によって、彼女の槍はまるで手持ちのミサイルのように彼女の手を離れ、真直ぐにリクの元へ向かう。

リクは空中にいる為に体勢を変えられない。それを見越しての手だ。

リクには舞い上がる砂のお陰でジェシカの姿が見えなかった。

するとその砂埃の中から突然槍が飛んで来たものである。

槍を使って攻撃する事は、ジェシカ自身が槍を持って突かなければならない、という先入観を持っていたリクは、その攻撃に意表を突かれた。しかし反応する時間がない訳ではない。

「我は突かん、槍穂に裁きを宿す《雷の槍》にて！」

バチバチと紫電を放つ槍状の光がリクの手に収まり、リクはそれを使って飛んでくる槍を受け流す。

彼の身体を通り過ぎた時点で、いきなり槍が動きを止めた。

「え？」

リクが目丸くする間に槍が反転、再びリクに槍穂が向き、またしても向かってくる。その時リクは、槍とジェシカが立っているであろう場所を結ぶ、一筋の光の線が走っている事に気が付いた。そしてリクはこれが何なのかを知っていた。

(《操りの糸》だ……！)

その魔力で具現化した糸をつけたものを自在に操るとい魔法である。

リクが今度は《氷の鎚》を使ってそれを叩き落とし、その《操りの糸》を《風の戦輪》で断ち切る。

槍はそれこそ糸を失った凧のごとくあらぬ方向へ飛んで行く。

その着地点にいきなりジェシカが《電光石火》で姿を表し、その槍をはっしと掴んだ。

そしてそのまま構える。すると、その槍が光を発し始め、まだ着地までには至っていないリクめがけて思いきり突き出す。

“流星突”！

太い光線状の魔力が槍先からリクを目指して伸びた。それは《瞬く鎧》によって難なく防がれたかと思いきや、ジェシカが《衝撃の増幅》を詠唱し、その障壁にいきなりヒビがはいる。

次の瞬間、障壁は砕かれ、“流星突”の魔力の槍穂がリクを襲う。この時、誰もが絶体絶命かと思われたが、身体に当たる寸前、リクの足が地に付き、体勢を変えて、かろうじてそれを避ける。

一連の攻防が終わり、リクは砂丘の上に降り立ち、麓にいるジェシカを見下ろした。ジェシカもリクを見上げ、二人の目が会う。するとリクは笑って得意そうに胸を反らした。

そしてリクは胸を張り、腰に手をあてて、わざとらしい高笑いを上げ、ふざけた口調で言った。

「はっはっは！ 残念だったな、ジェシカ君！ 今まではキミの動きを見極める為に敢えて攻撃を避けて来た」

そしてリクは丘の上空を指差した。その先には打ち上げたボールが落ちて来ているのが微かに見える。

「だが、察するところ残り一分だ！ 私もそろそろ行かせていただくっ！」

言うが早いかリクはジェシカめがけて突進した。

「飛べ、《火の投げ矢》！」

丘を駆け下りながら、リクは短く魔法を詠唱した。するとその両手に、小さな炎が三つずつ、合計六つの小さな炎が起こり、リクは

それをジェシカ向かって投げる。

ジェシカはそれを槍の一振りですべて薙ぎ払ってしまった。リクは相変わらず自分に向かって猛然と突進して来ている。

（愚かな……！）

槍遣いにとって、自分に正面から突っ込んで来てくれる人間ほどやり易い敵はない。

ジェシカは、槍を構え、魔法を詠唱し始めた。

「猛者たる条件は《強力》、魔力よ、理力の源となりて我を猛者と成せ！」

ジェシカの全身に力がみなぎる。

「我得るは《一時の怪力》！」

ジェシカもリクを迎え撃たんと走り始める。そしてもう一度唱える。

「我得るは《一時の怪力》！」

槍をぎりぎり引き、目指す目標を見据える。

更に槍に魔力が満ちて光り始めた。

「喰らえ、我が槍技の一つの極み、“彗星突”！」

技の名を告げると同時にジェシカが槍を突き、さっきの《流星突》とは比べものにならないくらい太い光線が槍先から発射される。

リクはまともにその光線に貫かれた。その後ろで砂丘にも大きな

穴が開き、崩れ落ちる。

その瞬間、ジェシカは少し残念そうな顔をした。

(やはり私は何も得られなかったか……)

が、その表情はみるみる驚愕に満ちて行く。

光線に胸を貫かれて死んだはずのリク。エールが起き上がり、何ともなかったかのように再び丘を駆け降り始めたのだ。

(……何だ!? どうなっている!? ……いや、今は考えるのはよそう、とにかく迎え撃つ!)

疑問を胸に抱きながらも、ジェシカは止めを刺そうとリクに向かって一直線に突っ込んだ。

そして、リクのまだ穴の開いていない腹部に槍を突き刺す。

この時、ジェシカは初めて事情が読めた。「これは……!?」

「ピンポン、俺の《身代》だ。ちなみに《火の投げ矢》の時に入れ代わった。あとは《地潜り》で地中に隠れて、あんたも得意な《操りの糸》でこの《身代》を操ってたんだよ」

その声は背後からした。

ジェシカが後ろを振り向くと、その足元に上半身砂から身を出し、《炎の矢》を構えているリクがいた。

「チェックメイトだ」

そして彼は矢を放ち、彼自身が定めた楽勝の条件を全て満たして勝利した。

27 『ジェシカに欠けていたもの』

見る夢は大きい方が良い。

夢など見ずに現実を見るべきだ。

二つの意見はどちらも正しい。

それ故に決着をつく事を知らない。

しかし夢見て成功した人、現実を見て堅い人生を歩む人。

それぞれに共通するのは、自分が見るものに対する姿勢だ。

大きな夢を見ても見るだけでは絶対に叶わない。

現実を見ても見るだけでは空しく墮落するだけ。

見るものは違っていても、姿勢がなければ結局は同じ事だ。

大切なものは姿勢。

いつ、どこで、何があるかと、常に真直ぐそれを見据え、それに向かって前に歩く姿勢。

人はそれを“志”と呼ぶ。

「うん……うん」と、ジェシカ＝ランスリアは狭いベッドの中で呻き声を上げて目覚めた。ガバツと身体を起こすと、ベッドの脇にリクが座っているのに気がついた。

「よっ、気が付いたか？」と、リクは明るく挨拶する。

「リク＝エール？」

ジェシカが目を丸くしていると、リクはいきなり顔を近づけて、ジェシカの顔をチエックする。

「ん、体調に問題はねーな。《炎の矢》で火傷した部分はすぐに俺が魔法で直しといた。肌に残ったら困るもんなー」

言われて、ジェシカは自分の身体を見下ろした。確かに自分には傷一つ残っていない。まるで眠りから覚めただけだったようだ。同時に彼女は自分の服が着替えさせられている事に気付く。

「言っとくけど、着替えさせたのは俺じゃねーぞ。後から来たカンファータの医療班だからな」

リクが先回りして言うと、その言葉を気にも止めず、ジェシカは上半身だけを起こしていた状態から、背中からベッドに倒れ込んだ。そしておもむろに左手を持ち上げ、腕輪のない手首を見つめる。

「そうか……負けた、のか」

「そして俺が楽勝した、と」と、何の慰めも混ぜず、リクが頷く。

何の遠慮もないその言葉にジェシカは苦笑いを浮かべ、そして天井に向けて大きくため息をついた。

「……結局私は何も掴めなかったか」

「掴む？ 何を？」

一体何を言い出すのか、とリクは眉をしかめた。

「お前は弱かった。実際シルヴァルトに闘わずして背を向けている」

「ん？」

「しかしお前は私に対し、自信を持って楽勝する、とまで言い、そしてそれを見事なまでに実践してみせた」

「ふむ」

「しかし魔力や体力、技術がこの短期間で一気に強くなるはずはない。だとすると後は心だ。私は今まで心で人間がここまで強くなるとは考えた事もなかった」

「ほう？」

「そして私があのだジルヴァルトに対抗できるようになるにはお前と同じく、心を強くする事だと思ったのだ。しかしそのやり方が分からない。既にそれを掴んだお前と闘えば、何か得られるやもしれんと思ったのだ」

「心を強くするねえ……」

納得したように腕を組みリクだが、顔は若干紅潮している。何だかんだで結局誉められたのが原因だ。

そんなリクに対し、ジェシカはもう一度起き上がり、改めて向かい合って座った。そして真剣な眼差しでリクを見つめる。

「どうか教えてくれないか？ どうしてお前は、そこまで強くなれたのだ？」

「どうやってっただって……特別な事やった訳じゃねーしな」

リクは、困った顔をして後頭部を掻いた。

「しかし何かきっかけはあったのだろうか？」

再度問われ、リクはしばらく腕組をしたまま考え込んだ。
そして重々しく口を開く。

「あるにはあった。でもそれだけじゃ足らなかったな。あの保証があったから、俺も吹っ切れる事が出来た」

「保証？」

「相手がどんな奴だろうと逃げずに立ち向かえば絶対に勝てるってさ」

その答えにジェシカは閉口した。

「闘う前にもそんなことを言っていたな……しかし馬鹿な。そのよ
うな曖昧な保証を真に受けてそうなったのか？」

「真に受けてはひでーな。一応あんたで言えば、あのシノンみてー
な奴の言葉だぞ」と、ジェシカの率直な感想を受けてリクは苦笑す
る。

「でも要因はもう一つある。実は俺には夢があつてな、その夢を叶
える為にはこんな大会で逃げ回ってちや駄目だったんだ」

「夢？ 何だ、それは？」

「あまりにも馬鹿馬鹿しすぎて、他人にや教えられねーよ」

リクは誤魔化すように表情に笑みを浮かべるが、その眼は真剣そ
のものだ。そして彼はこの世界最高峰のファトルエルの決闘大会を
「こんな大会」とまで言った。

話の流れからしてジェシカにもそのリクの夢とやらが途方もない
ものだとは容易に想像がつく。

大体魔導士は夢見がちな生き物だ。しかし、夢は見て目標にする
だけで、大概あるところで満足してしまう。

しかしリクは、その途方もない夢を叶えられる現実として、その
エメラルドグリーンの瞳に捕らえている。

そしてジェシカは何となく悟った。

目指すものが違ったのだ。そしてそれに向かう姿勢も違っていた。心と夢、そして志。ジェシカはどれも今まで強さと関連付けて考えた事など無かった。力と技術、知恵。それが強さの全てだと思っていた。

その点では総合的に、師・シノンに追い付いているとさえ思った。しかし彼に勝てる確率は万が一だと彼女は感じていた。それが何故なのか、彼女はずっと考えて来た。

その後、大会前に行き着いた結論が、自分が女でシノンは男だからだ、という事だ。

結果、彼女は自分の性別に劣等感を感じ始め、自分が女である事を隠し始めた。

それが間違っていると、ジルヴァルトに知らされ、ジェシカは再び悩みに落ち、リクにその答えの糸口を見出した。

その選択は正しいものだった。

なんだかスッキリした表情で顔をあげるとジェシカは、リクに向かって頭を下げた。

「恐れ入りました、リク＝エル様。今までの無礼、どうか御容赦下さい」

「え？ な、な……？」

いきなりの態度の豹変に、リクは思わずたじろぐ。

はじめはあのような無骨な口調で、彼女の外見も凛々しいものに見えたものだが、このような丁寧な敬語で話されると、外見までしおらしく見えてきた。

これが本当にさっきまでと同じ女性とはにわかには信じ難い。

「ま、まあそんなことはどーでもいいけど、その敬語どうにかなら

ねーか？ くすぐつたくてしょうがねエ」

「とんでもない。あなたは敬愛されて然るべき人間、今に大勢の人間が貴方の足元に跪き、頭を垂れる事になるでしょう。じきに慣れますとも。ところで、こんなところで私などと話していてよろしかったのですか？」

その質問に、リクが呆れた。

「おいおい、忘れちゃったのかよ。元々おれたちが闘ったのは何の為だ？ 俺が勝ったら俺がジルヴァルトより強い事を認めて、謝らせてくれるって言ったろーが」

「謝罪など必要ありません。そして私は認めます」

「いや、これには段取りがあつてだな……とにかく！」と、リクは勢い良く頭を下げた。「済まなかった。俺はもう逃げたりしねエ。真正面からアイツとぶつかって倒す」

そしてジェシカの眼を見て言った。

「シノン＝タークス、それからお前に誓わせてもらつ。……こうでもして他人に宣言しとかねーとまた逃げちまいそうだったんだよ」
「リク様、では貴方に任せます。私の代わりに、あのジルヴァルトを倒して下さい。お願いします」

「承知！」

そしてリクは椅子から立ち上がり出口に向かった。

「じゃ、ゆっくり養生しろよ」

＊＊

「そこな少年、少し待て」

医務室を出た直後、リクは背後から声を掛けられた。

リクが振り向くと、そこには大会前日式典で見た時よりもっと質素な衣裳ではあったが、むしろ余計にがっしりとした体格が見られ、より威厳を感じられるハルイラ「カンファータ十八世が立っていた。

「カンファータ国王……！」

「私の肩書きはあまり気にするな。君に少し聞きたい事があるのだ」
「ほう、一国の王が俺に聞きたい事があると」

リクはハルイラの言葉を素直に受け取り、本当にいつもの調子で話した。

しかしハルイラはそれをとがめたりせず、むしろ面白そうに笑みを浮かべた。

「君は十五年前に優勝したファルガール」カーンと何か関係があるのか？」

聞かれて、リクは少し考えた後、気が付いたように自分の来ている衣服を見下ろす。

「……やっぱりバレたか。だから着る時ちょっと迷ったんだよな」
「ふむ、その服装を見れば十五年前もここにいた人間ならすぐにピンと来る」と、ハルイラはゆっくりとした動作でリクの道着の袖を摘んで言った。

「聞きたい事はそれだけかい、王様？」

「ああ、もう一つ」

ハルイラはリクの袖から手を離すと、一步下がって続けた。

「君に感謝を」

そしていきなり国王ともあろうものがリクに頭を下げる。

「は？」と、リクが面喰らっていると、ハルイラは頭を上げた。

「君はジェシカを殺さずに倒してくれた。あれがいなければ、今後の魔導騎士団は成り立たん。そしてジェシカは最近思い悩み、伸び悩んでいたのだが、さっきの会話を聞いてそれも解決した事が分かった。」

ジェシカはシノンの立派な後継者に成長するだろう。これは大変意義のある事だ。君に一方ならぬ恩を感じる。今後、何かに困るような事があれば、何でも言って欲しい。出来る限り叶えよう」
「気にすんなって、ジェシカの件だって狙ってやった訳じゃねーんだから。ま、どうしようもなくなったら頼る事にするよ」

ハルイラと別れた直後に会ったのはコーダだった。
その顔は何故か驚愕に満ちている。

「よう、コーダ。どうかしたのか？」

「兄さん、さっきの人、もしかして……」

「ハルイラ」カンファータ十八世、俗に言う、カンファータ国王だな」

「俗に言わなくても王様でしょう？ 兄さんめちゃくちゃ普通だったツスね」

確かにあの口調は、いまコーダと接しているのと、まるで変わりのない、普段通りの態度だった。

「そりゃ、始めはビックリしたけど、ま、良く見たら同じ人間だし、本人も肩書きは気にするなって言ってたからな」

「……それで本当に気にしないなんて……」

そのリクを見つめるコーダの眼には、呆れが半分混じっていた。だが思い直すとコーダは顔を上げて続けた。

「そうそう、偶然なんスけど頼まれてた人探し、観客席でもう一人見付けたんスよ」

「誰だ？」

「魔導研究所のクリン」克蘭。どーしやス？」

「当然、闘う！ すまねーけど、受付に行ってエントリーして来てくれ」

リクが頼むと、コーダが得意そうな顔で答えた。

「そー言うと思って、もうクリン」克蘭の了承を得てエントリーしときやしたよん」

28 『兄弟子』

師は弟子を自分を超える存在にする為に、弟子を育てる。
弟子は師を超えんが為に精進する。

弟子は師を超え、自分を超えさせる為に弟子を育てる。
前のものを超える事をくり返す事。
それが技術の進化。

しかし進化の中でも変えてはいけないところもある。
技術の基礎となり、進化への精神の支えとなるもの。
それが「伝統」である。

ジェシカによって、崩されていたはずの砂丘のバトルフィールドは既にカンファータのファトルエル常駐兵によって元のように整備されていた。

その丘の頂上に、リクと、オリーブ色の髪に茶色の目。全体的に細めで、外見、雰囲気、何もかもが柔らかな感じの青年が向かい合って立っている。

今残っている最後の優勝候補、“双龍”と呼ばれる魔導士・クリン
「クランだ。」

「魔導研究所の連中とは結構縁があるんだけど、あんたとは初対面だな」

リクがそう話し掛けると、クリン「クランは、くすっと小さく笑った。」

何となく自分を馬鹿にされたようでリクは少しムツとした顔をす
る。

「何か可笑しい事でも言ったか？」

「いや、こちらの事だ。気にしないで」そして彼はこれから闘う敵
に向けるものとは思えない柔和な笑顔をリクに見せて続けた。「た
だ、縁なんてものは自分の知る範囲内ではとても把握しきれないも
のだよ」

その謎めいた態度と物言いに、リクは眉をしかめた。

実際、このクリン・クランは現在の時点では謎だらけの魔導士だ。
目立った功績の記録がある訳でもないのに、“双龍”と呼ばれ、優
勝候補になっている。

そしてその彼の闘いを見たものはほとんどいないという話だ。

この場に立つ前に、コーダに情報を頼んだが、何と、クリン・ク
ランはこのファトルエルの決闘大会で一度も闘った様子がない、だ
から新しい情報は全くないというのである。

（蓋を開けてのお楽しみって事か……あちらさんはどうやら攻撃を
仕掛ける気はねーみたいだし、ここは先手必勝と行くか！）

リクはクリン・クランに向かって猛然とダツシュし、《電光石火
》と同じという訳には行かないが、とにかく一気に距離を詰め、跳
躍した。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて！」

振り上げた両手に重量感たっぷりの大きなハンマー状に白く具現
化した魔力が握られ、リクはそれを力一杯振り下ろす。

クリン・クランは、緊張感のない表情で、それを見上げていると

思うと、おもむろに手を上げて、その魔法を詠唱した。

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する」

向けられた掌の先に出現した魔力の障壁によってリクの《氷の鎧》は弾かれ、立ち消える。

着地し、すぐに後ろに飛んでクリンⅡクランから距離をとったり、リクの顔は何故か大きな疑惑に満ちていた。

リクが距離をとった隙にクリンⅡクランは攻撃に入った。

リクに向かつて左半身に構えると、少し背を反らし、両手を胸の前に盛ってくる。まるで、今から弓を引くかのよう。

「我は放たん、射られし者を炎に包む《炎の矢》を」

クリンⅡクランの構えた手に炎が起り、弓矢の形になり、矢が放たれる。それはリクのそれより大きい。

槍と行った方が近いくらいの大きな矢状の炎がリクを襲うが、それはリクの《瞬く鎧》によって防がれた。

今までからすると大したピンチではなかったのだが、それを防いだリクの顔は焦燥と疑惑、そして驚愕に支配されている。

その表情を見て、クリンⅡクランは満足げに笑った。

「ははは、やっぱり驚いたみたいだね。無理もないよ。君と、君の師匠しか知らないはずの魔法を赤の他人に使われたんだからね」

「てめー、それをどこで覚えやがった……!?!」

リクが笑顔のクリンⅡクランとは対照的な表情で睨み付ける。

「簡単な話さ。ファルガールⅡカーンに教えてもらったんだよ」

「え?」

「君の師匠が、昔、魔導研究所の学校で魔法を教えていた事は知っているだろ？ 僕はその時、ファルガール先生に教えてもらった生徒の一人だったのさ。つまりは君の兄弟子に当たる人間なんだよ」

そこまで説明した時、リクはクリンⅡクランが闘いを始める前に言っていた、縁と言うものは自分の知る範囲では把握しきれない、という言葉思い出した。そして今その意味を知った。

そしてクリンⅡクランはリクの服装と先程のジェシカⅡランスリア戦を見て、リクがファルガールの弟子である事を知ったのだろう。何しろ、この服装はファルガールが魔導士としてその場にいる時にはいつもしていた格好なのだ。

「君の便利屋を名乗る男から、闘いの申し出を受けて、僕は嬉しかったよ。先生は僕が成長する前に魔導学校を去ってしまった。僕らを途中で見放した事に恨みは感じてない。理由もそれとなく聞いているからね。」

ただ、僕はあれから死ぬほど訓練をして、ようやく魔導士として自信が持てるまでになった。そして僕は一弟子として、僕は先生を超えなくてはならない。でも、超えるべき人はいなくなってしまった」

クリンⅡクランにさつきまでの笑みが消え、真剣な表情が見えるようになった。普段が柔和なだけに、彼の真剣な表情は、とてつもない威圧感を感じる。

「……さつきのジェシカⅡランスリアとの闘いを見て、君は、先生の魔導を完全に受け継ぎ、先生と同等以上の力を持っていると思っただ。君と闘えて嬉しいよ。僕がファルガールⅡカーンという男を超えたと言う事を、君との闘いを制する事によって証明できる」

説明し終わると同時に、クリン＝クランは、魔法の詠唱を始めた。

「ここに吹きしは霜を運び、汝を《凍結させる風》！」

クリン＝クランの背後から、強力な風が起こり、リクに向かって吹き付ける。思わず、その風をまともに受けてしまった彼の全身に霜がびっしりと張り付いた。

動きづらくなったりリクに、クリン＝クランは攻撃の手を緩めない。

「燃え立ち上がれ、《火柱》！」

自分の足元に大きく、赤い円が描かれるのを見てリクは必死の思いで、《飛躍》を唱え、後ろに飛び退こうとする。

しかし、《凍結させる風》のお陰で動きが鈍らされていた事もあり、間一髪で間に合わず、円の外に出る直前に《火柱》に巻き込まれ、それに弾き飛ばされた。

「うわああー！」

リクは悲鳴を上げて丘を転がり落ちる。

丘の麓で、起き上がって自分の身体を見回し、リクはほっとした。弾き飛ばされた時の打撲に軽い火傷がついているだけだ。

そしてリクは丘の上に見えるクリン＝クランを見上げた。

（何でアイツの魔法はあんなに強力なんだ？）

《凍結させる風》も《火柱》も一般によく知られる魔法であるが、今リクが味わったのは明らかに同じく知られているその魔法の規模、そして威力とは段違いだった。

確かに術者の魔導制御力（魔力の制御能力を表す数値）によって魔法の効果が違ってくるのは常識だ。しかしその誤差も、小さくて基準値の半分、大きくて二倍までが限界だ。それより小さければ魔法は失敗するし、大きくなる事はありません。

しかし今のはどう見ても普通の三倍以上だ。ここまでくると他に特別な事をやっているとは思えない。

そんな事を考えていると、丘の上から、クリン＝クランが麓にいるリクを覗き込んでいった。

「どうした？ 君の力はこんなものかい!？」

「やかましい！ ちょっとビックリしたが、こっからが本番だ!」

反射的に怒鳴り返すと、リクはクリン＝クランに向かって丘を駆け上がり出した。

今度はクリン＝クランもリクに向かって、丘を駆け降りてくる。

「威勢だけじゃ僕は倒せないよ！ 裁きよ、天より降りて《罪討つ落雷》となれ!」

「甘い、甘い！ 我は裁かれし者にあらず。現れよ！ 裁かれるべきもの《避雷樹》!」

天から、リクに向かって雷が落ちて来たかと思うと、突然、進路を変え、リクの脇に生えた、小さな苗に当たる。それを見たクリン＝クランはにやりと笑った。

「やるね。ではこれではどうかな?」と、クリン＝クランは、掌に赤い光の玉を一つ作り出す。「この玉は内に炎を秘めし《爆発の玉》。その炎、我が敵に当たりし時、解き放たれん!」

そしてそれをリクに投げ付けた。
リクは自分に向かってくる《爆発の玉》を避けようとせず、一
直線に向かって行く。

「言っておくけど《瞬く鎧》で防ぐのは無理だよ！」

「毎度毎度、同じ魔法に頼ってられるか！ 我は捕らえん、水流に
て紡がれる《水の縄》にて！」

リクの手から、水が放射された。しかしそれは放物線を描く事な
く、真直ぐに、《爆発の玉》へ向かって行く。

そして《爆発の玉》に届いたかと思われた直後、《水の縄》は《
爆発の玉》に絡み付く。その瞬間、リクは《水の綱》を持った手を
引き爆発の玉の軌道を変える。

「よいつ……しよおっ！」

そして掛け声とともに、リクは遠心力を利用し、水の縄で《爆発
の玉》を投げ返した。ついでに後ろから《炎の矢》を追突させ、《
爆発の玉》を加速させてやる。

返された上、突然速度を変えた《爆発の玉》はまともにクリン＝
クランにぶつかり、大爆発を起こした。

「やったか……！？」

爆音とともに起こった煙が丘の上を覆い隠したお陰で、リクはク
リン＝クランがどうなったのかを、知る事が出来ない。

不意に煙の中から飛び出してくる事も考え、リクは戦闘体勢を解
かないまま、しばらくその煙が収まるのを待った。

しかし待つ事もなく、その煙は晴れた。晴れた、と言うより吹き

飛ばされた、と言っべきか。とにかく煙はそのうちから起こった風によって四散してしまった。

その中から現れた人影を見てリクは顔を曇らせた。

「彼は僕らの期待通りだね、クリン」

「同感だよ。むしろそれ以上じゃないかな、クラン」

人影は煙の外に出て、完全にその姿を現わした。

リクの表情が疑惑から驚愕へと変わって行く。

なぜなら、そこにいたクリン＝クランは一人ではなかったからだ。

一つ一つの力が弱くても、それを合わせて強い一つの力となるならそれは一つの力。

その力を使い、力を尽くして闘う事は決して卑怯ではない。

それを罵る人はあろう。

しかし、裏を返せばそれは、合わせた力が強いと認められたという事だ。

そう思えば周りの罵声も称賛の嵐。

君達は堂々と、その一つの力を誇ればいい。

「さすがはファルガール先生の後継者」

「なかなかやるね」

この会話をし、リクに目をやっているのは二人のクリン＝クランだった。少なくともリクにはそう見えた。

彼の前に立つ二人は同じオリーブ色の髪に茶色の目。全体的に細めで、外見、雰囲気、何もかもが柔和な感じの青年。全てがそっくりだったのである。もはやどちらが本物かというのは問題ではない気さえする。

しかし少し考えると、ある程度状況を理解できた。そして、それによって辻褃の合う事もあった。

「てめーら、元々二人だったのか……！」

リクがそう言うと、二人のクリン＝クランは揃って同じ反応をし

た。

「「おつ」「

「よく分かったねえ」

「普通は《現し身》とか疑うものなのに」

《現し身》は自分そっくりの幻を生み出し、敵を攪乱する魔法だ。並みの腕だと、本人と対称か、もしくは同じ動きしか出来ないが、使い手のレベルが高いと全く別の動きをさせたり、会話したり出来るようになる。

「それも考えたけど、それじゃ、さっきまでの異常に魔法が強かった説明がつかねーんだ。けど、最初から二人で、“二重詠唱”を使った、と考えるなら全部納得が行く」

“二重詠唱”。それは魔導の技術の一種だ。二人の人間が魔力をシンクロさせ、同時に魔法を詠唱する。すると、一人で唱えた時の効果の二倍では留まらず、三倍、四倍もの効果を期待する事ができる。

しかしこれはよほど息が合っていないときちんとした相乗効果が得られなくなる上、むしろお互いの魔力が阻害しあって効果は激減する事にもなるのであまり使われる事はない。

「へえ、結構知識もあるみたいだね」

「うん、その通りだよ」

交互に台詞を言う、同じ顔の二人。外見、内面、全てにおいて彼等二人はそっくり同じ人間らしい。

「ちなみにどっちがクリンで、どっちがクランなんだ？」

リクの質問に両方が笑った。

「見分けなくてもいいよ、と言うより見分ける方法はないね」

「どっちをどっちの名前で呼んでも間違いないから」

「たまたま二人で生まれたから二つ名前があるだけで、」

「僕らは二人で一つの個体なんだよ」

「そろそろ行かせてもらおうか。クリン、克蘭の本気を見せてあげよう」「」

交互に発現して説明し、最後に二人で声をそろえると、クリンと克蘭は別々のタイミングでリクに向かって走り出す。

リクも腰を落として戦闘体勢を作る。

まずはクリンが魔法の詠唱を始めた。

「突き上げれ！ 怒りに震える《大地の拳》！」

リクのすぐ前の地面が盛り上がり、アッパーカットのように、拳の形をした砂の固まりが、反射的に背を反らして避けたリクの顎先を掠める。

しかしその次の瞬間、腕のように長く盛り上がった砂の柱の向こうから《雷の槍》が貫かれて来た。

始めから《大地の拳》は死角を作る為の罠だったのだ。

意表を突かれたリクはそれをまともに肩に受けてしまった。刺された傷口から全身に電気が走る。

「うああっ………！」

悶絶するリクを、クリン、克蘭は挟み込むように左右に回る。

そして同時に唱えた。

「冷氣よ、ここに集いて、我が敵を《貫く氷柱》となれ！」

「大氣がその身に熱を宿せば、そこは全てが燃ゆる《熱地獄》！」

二つの魔法に挟まれたリクは、《貫く氷柱》にその身を引き裂かれ、更に、《熱地獄》によってその傷を焼かれる。彼はほとんど断末魔ともとれる悲鳴を上げた。

そんな彼に容赦をする事なく、二人は彼の正面に並んで立ち、対称の構えを取った。そして二人は声を揃えてその魔法を詠み上げる。

「我が魔力よ集まれ、敵を見据えよ、そして喰らわせる！ 瞬く力を敵にぶつける《ぶちかまし》！」

途方もなく大きな魔力が二人の掌の前に集まった。二人が全く同じタイミングで、魔力を少し押し出すような動作を取ると、魔力の塊はリクに向かって突進した。

「くっ……！ 《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

避ける事は叶わなかったがリクは必死で、《瞬く鎧》を張り《ぶちかまし》に対抗しようとした。しかし、それはいとも簡単に破られ、大して勢いも殺されずにリクを吹き飛ばした。

リクは丘の麓まで一気に吹き飛ばされ、バトルフィールドを囲う、高く堅い塀に打ち付けられた。

「が……はっ……！」

その衝撃でリクは一瞬息ができなくなり、思わず膝をつく。

(先ず波状攻撃、当たったら挟み撃ち、締めは“二重詠唱”か……効いたぜ)

そんなリクを、クリンとクランは見下ろして尋ねた。

「僕達を卑怯者だと思っかい？」

「……？」

二人が何を言いたいのかわからないリクは、何とか顔だけを二人に向け、眉をしかめてみせる。

そんなリクを見て二人はにっこりと微笑んだ。

「いいんだよ、僕らを二対一で闘う卑怯者だと嘲笑っても」

「僕ら一人一人は大した事のない魔導士だよ」

「でも僕らは二人で一つの魔導が使える」

「そしてそれは今見せたように、とてつもなく強力なんだ」

「『だつたらお前らは二人でいち魔導士としてやってきやいいじやねえか』」

「僕らの力に偶然気がついた時のファルガル先生の言葉だよ」

「そして僕らは今、世界最高峰のファトルエルの決闘大会の大会の優勝候補としてここにいるんだ」

「僕らは二人でいち魔導士」

「嘲笑われようが卑怯呼ばわりされようが、僕らはこの“双魔導”を誇り続けるよ」

リクがゆっくりと立ち上がった。二人の目を見据えながら、足を引きずって、丘を上がりはじめる。

クリンとクランは揃って目を見開いた。

「まだ闘う気力があるのかい？」

「信じられないな、僕らの連続攻撃をまともに受けておいて」

「……畳み掛けよう」

「そうだね。彼を甘く見てはいけないな」

丘を自分達に向かって、のろのろ歩いてくるリクに二人は身構える。

「突き上げれ！ 怒りに振る……」

「我は捕らえん、水流にて紡がれる《水の縄》にて！」

リクの左手から、水色に輝く綱状の魔力が伸びる。《水の縄》はそのまま魔法を唱えようとするクリンの口を覆う。

先程も《爆発の玉》を絡めとって相手に返す為に使われた《水の縄》は攻撃力がない割にいろいろ使い道のある便利な魔法だ。

リクは綱を力強く引っ張り、《飛躍》を使って一気に丘の上まで飛んだ。

そして双児の魔導士が上がってくるのを待った。

丘の上に姿を現したクリンとクランにリクは血だらけ砂だらけの顔に笑みを浮かべて言った。

「『相手がどんな奴だろうとな、逃げずに立ち向かえば絶対に勝てる』……あんたらの尊敬してるファルガール先生の言葉だ」

満身創痕の人間が、その傷を付けた無傷の相手に言う台詞ではない。

しかしあまりにもその姿が堂々としており、二人は冗談として取る事はなかった。ファルガールの言葉だった事もあるだろう。

「言っね」

「じゃ、僕らの最強の魔法に立ち向かってもらおうじゃないか」

そういうと彼等は独特の構えを取り始めた。クリンは立ち上がった手を天にかざし、クランはしゃがんで手を地面に当てている。

リクはさっきのように《水の縄》をしかけたりする気はなかった。ここまで動きの鈍った身体では今襲い掛かったとして、二人が魔法を止めて迎え撃つには間に合わない。あっさりと返り討ちにされるだろう。

彼等に勝つための一撃を与えるには、後の先をとる一か八かの力ウンター作戦。相手の魔法は大規模であればあるほど良い。ただ、未知な魔法なだけあって、危険度はこれ以上ないくらいに高い。

しかしこれしかないのだ。

「天より降るがいい、氷柱に連なりし氷の牙」

「地より湧くがいい、溶岩が波打ちし炎の舌」

「我が喚びしは全てをその牙で砕き、その舌で溶かしし《双龍の顎》！」

すると、リクのいる上空から、鍾乳洞の天井のように氷柱が林立する天井である。そしてリクの周りの地面より溶岩が湧き出して来た。

リクは後ろの飛び退こうと後ろを見たが、既にそこには溶岩が回っている。

(逃げ道はなし。障壁で何とかできるほどちやちい魔法でもねーだろっし、どうすりゃいいんだ?)

立ち向かうしかなかった。

しかも負ける訳には行かない。先ほどジェシカに、必ずジルヴァルトを倒すと誓ったばかりだ。そしてここで負ければ彼の夢も終わ

ってしまっ。

元々、これは必要な戦闘ではなかった。

さっきジェシカと誓った後、彼はコーダに居場所を調べてもらって、まっすぐジルヴァルトにだけ立ち向かえば良かった話なのだ。

大会優勝候補等と闘って、無駄に魔力を消費する事はなかったのである。

しかしリクはこの戦いは必要なものだと考えていた。

ジルヴァルトは既に優勝候補を一人倒し、周りに実力を証明した。リクもジェシカを楽勝で下し、同じ事を証明した。

だが、彼が倒したジェシカには前評判というものがついていない。あの闘いで強さの証明は飽くまでもジェシカのみを対象にしたものである。

初対面の時あっさり倒されてしまった彼の前に立ちただかる為には、優勝候補を倒し、同じ実績を上げて、ジェシカ以外のジルヴァルトをはじめとする周りの者にも自分の強さを示しておくほうがいいと思ったのだ。

言わばこの闘いはジルヴァルトと同じ立場、同じ土俵に上がる為のステップなのだ。

(顎…か)

既にリクの目の前は天井の氷、足元の溶岩で一杯になっている。

その魔法が自分の襲うのをまるで傍観者のようにリクは思案顔で見つめていた。

そしてキツと前方を睨むと、おもむろに前方に跳んだ。

「ここなら……どーだアッ!」

リクが跳んだ前方には氷柱の天井、そして溶岩の海が広がっている。彼はその奥に向かって、手を胸の前に持つてくる。

「我は放たん、射られし者を炎に包む《炎の矢》を！」

紅蓮の光を放つ魔力の矢が《双龍の顎》の喉に当たる部分を直撃する。

そして穴を開けた。その先には溶岩も氷柱もない。

リクは必死に身を縮めて、その穴を通り抜けた。

ごろりと一回転した後に、彼は後ろを振り返る。

すると逃れられないはずの自分達の魔法から突然飛び出して来たリクを見ていたクリンとクランと目があった。

「ば、」

「馬鹿な……!?!」

その四つの目は驚愕に満ちて見開かれている。

(やった、思った通りだ！)

リクはこの魔法が本当に一つの顎、つまり口を形成しているのであれば、口に入れたものが必ず通る場所である喉の部分が一番手薄なのではないかと考えた。

そして形成されているのは頭だけ、食道もなければ胃もない。つまりはそこがこの《双龍の顎》の唯一の突破口だったのである。

ここから勝負がつくにはさほど時間は掛からなかった。

規模の大きな魔法を使い、さらにその魔法を信じきって心身共に隙の出来ていた彼らをリクは《水の縄》で自由を奪い、《雷の槍》

と《氷の鎚》で一気に畳み掛けた。

こうして最後の優勝候補、“双龍”クリンクランがリクエールの前に敗れ去り、ファトルエルの決闘大会は大会二日目にして優勝候補が全て倒れてしまうという、始まって以来の異常な展開となったのである。

30 『探し求めた末に』

彼女には確信があった。

ここにこそ自分を倒し、そして殺し、ほとんど災厄とも呼べる自分の力をこの世から無くす事のできる者が存在すると。

だから、彼女の歩みは死への歩みでもあった。

不思議なものだ。歩くという日常の中で無意識にやっている行為が、死が絡んでくるとなるとこれほど重みがあり、感傷的に感じられる。

足音は耳に確実に響き、周りの景色の中には今までの過去の自分が見える。

今まで伏せてばかりいた顔も、今は上がっている。

視線はしっかりと前に向けられている。

人は、死を覚悟する事でこんなにも強く前向きになれるのか。

そして彼女は、探し求めた者を見付けた。

フィラレスとルクマースが第四決闘場の前に姿を現したのは、リクとエールとクリンとクランの勝負がついた昼前の事だ。

その可憐な容貌と、それからは予想もつかない、次々と優勝候補者が倒されているこの大会の状況の中でまだ生き残っているという事実、周りの者は皆フィラレスに視線を集めた。

朝にカーエスを殴り倒してからというものの、フィラレスは各決闘場を回っていた。

というのもカーエスに聞いた、彼女自身の“滅びの魔力”を狙い、そしてあのカルクやマーシアくらいでないかと倒せないほどの強者を、それ以外の何の情報も無しに探すとするれば大抵の大会参加者が利用する決闘場を回る他なかったからだ。

果たしてその行動は正しかった。

彼女がまっすぐ見据えたその目の視界に、不吉とされている古代文字の紋章“ジュー・ラ”を胸に刺繍した黒いローブを着た初老の男と若者の二人の男が写った。

彼女は一目見てすぐ分かった。明らかに彼らは周りの者とは雰囲気が違う。参加者でも観戦しに来た者でもない。他に、何か目的を持っている男達だ。

その男達は、彼女の姿を認めた途端に彼女の元に歩み寄り、正面に立ちはだかった

「こんにちは、麗しきお嬢さん。私はイナス＝カラフだ。よろしく頼む」

「……」

初老の男、イナスが挨拶とともに差し出して来た。

フィラレスは無言のまま、握手に応じる。

互いの手が握られた瞬間、イナスの顔色が変わった。

「……っ！」

急いで手を放し、飛び退く。その顔にはびっしりと脂汗が滲んでいる。

「……間違い無い様だな」と、それを見た若者、ジルヴァルトは静かに呟いた。

ふとフィラレスは、ジルヴァルトの左腕に腕輪がはめられているのを見付けた。

そしてジルヴァルトと目が合うのを見計らって、すっと自分の腕輪のはまった腕を持ち上げる。

そしてその手で、彼らの背後にある第四決闘場を指差した。

「俺と闘いたいのか？」

フィラレスはこくりと頷く。

ジルヴァルトはしばらく自分に向けられたままのフィラレスの瞳をジッと見て言った。

「……死ぬ気らしいな。大きすぎる力を持った苦しみ故か……。い
いだろう、期待に添えるかどうかは分かんが……。とにかく闘おう」

クリンⅡクラン戦終了後、傷の治療を終えたリクは、決闘場の外に出て昼食をとった。その間、コーダは情報収集に出ている。まだ昼食には少し早い時間だったが、二試合も連続でやったお陰で胃のほうはすっかり空になってしまっていた。

一試合目だって楽勝とはいえ、一撃で勝負を決める為にいるいろんなタイミングを測ったり、時間を気にしたりと精神的な疲労はかなりのあった。二試合目は言うに及ばず、心身共に疲れる試合だった。

(やっぱり腹減っていると飯がうめーな)

食事の内容は干し肉に干しぶどう、地下の井戸から汲んで来た水と粗末なものだったが彼はそれでも満足だった。

昼食を半分ほど終えたところで、彼は何となく周りが気になった。

(気のせいか……?)

そして顔を上げて周りを見渡す。明らかに気のせい等ではなかった。

ここを通るほとんどの人間が自分を見ている。

それに気付くと同時に、自分を見ている人達の顔が次第に笑いに満ちてくる。

「やっぱりリク⇨エールだ!」「あのクリン⇨クランを倒したリク⇨エールか!」「何!? リク⇨エールだと!」「見るよ、あの格好! 間違いないって! 弟子だけあってファルガール⇨カーンにそっくりだ!」

そんな声とともに、だんだんと野次馬が集まってくる。

「マジ!? リク⇨エール!?!」「どこだ、どこだ?」「おい、見えねえだろ、どけよ」

気にせず昼食の続きを、と思ったが、やはり気になって仕方がない。

終いにはサインをしてもらう為の色紙の販売まで始めるちゃっかりした商人が出始めた。

それを見たリクは、やはり決闘場の中で食べようと食べ物をするまうと、決闘場の中に引き返した。

そこで偶然出くわしたのはクリン⇨クランである。クリン⇨クラ

ンはその様子を見ていたのか、リクの顔を見る前からからからと笑っていた。

「あははは、君も有名になったもんだね」

「冗談じゃねーよ。人目が気になって何も出来なくなるじゃねーか」と、リクが口を尖らせて反論する。

そして彼はふと気がついた。

「また一人に戻ったのか？ それとも片方はどっかに行ってるのか？」

「前者だよ。普段は一人のほうが便利なんだよ。元々二人とも同じ考えを持って、同じ事をしたがるからね。いろんな料金も一人分だし。まあ、闘いで本気を出す以外は忙しくてもう一つ身体の欲しい時なんかには分裂するけどね」

「便利だなー」と、リクが素直かつ簡潔な感想を漏らすと、彼はにっこり笑った。

「でしょ？」

「これからどーすんだ？」

「んー、一人でいてもつまらないからね、取り敢えずカルク先生と合流するかな」

何気なく聞いた質問の答えに、リクは目を見開いた。

「カルクの居場所知ってるのか！？」

「確か今日はカーエス君の闘いを見に第三決闘場に行ってるはずだよ」

その後二人は連れ立って第三決闘場まで行った。

観客席に入ってカルクを探す。たくさん人がいたので大分苦労しそうだったが、入り口の傍の席に座っていたので意外とすぐに見付

かった。

リクが傍に行こうと誘うと、クリン⇨クランは断った。

「大事な話があるんだろう？ 邪魔はいないほうがいい。僕は昼食をとってくる。折角負けたんだから、ここは大っぴらに店を利用させてもらうよ」

そう言って一旦建物内に入った。

大会規定により、参加者全ては大会中全ての店等の施設を利用する事が出来ない。よってリクは粗末な保存食を食べていた訳だが、負けて参加者では無くなったクリン⇨クランはわざわざ不味い保存食を食べる事はないのだ。

決闘場の外にある観客狙いの出店を目指して歩くクリン⇨クランは偶然カーエス⇨ルジュリスとはちあった。

「やあカーエス君、調子はどうだい？」

「上々ですわ」

そう答えるも、心無しかカーエスは元気がないように見えた。しかし次の瞬間、カーエスは驚いたように突然声を挙げて尋ねた。

「あれ？ クリン⇨クラン先生負けてもうたんですか！？」

その視線は腕輪のないクリン⇨クランの左手首に向けられている。クリン⇨クランは苦笑して頷いた。

「ああ、ついさっきね」

「誰に！？」

詰め寄るカーエスにクリン⇨クランは苦笑して答える。

「君なら知ってるんじゃないかな？ リク＝エール君だよ」
「え？」

その名を聞いてカーエスは気が遠くなったような気がした。

この大会に参加した当初、クリン＝クランは彼の優勝における最大の壁だった。どう闘うのかは分からなかったのだが、とにかく魔導研究所の教師である。身分からすると、カルクやマーシアの実力をも凌いでいても不思議はないのだ。

それをあのリク＝エールが倒したと言う。

今までカーエスにとって彼は単なるむかつくナンパ野郎だった。良く分からないが、マーシアやカルク、フィラレスに取り入り、相当深い話をしている。フィラレスにいたっては、何もなかったようだが、一夜を共に過ごす事までしている。

だが強さでいったら絶対に分の方が勝っていると思っていた。何だかんだ言って自分の方が絶対強い。そんな優越感を持っていたのだ。

優勝候補の一人のデュラス＝アーサーを倒した時、その優越感は更に膨らみ、形のあるものとなった。

しかし今、彼から話を聞いた事でその優越感はずつと端微塵に吹き飛んでしまった。

「リク…エール……」

カーエスは、その名を口にするとぎゅっと口を結んだ。

「えっ！？ あのフィリーの力が“滅びの魔力”なのか！？」と、声を上げたのはリクである。

カルクは、朝に気絶から目覚め、『ルーフトール・レスト』前でカルクを見つけた。カーエスによってフィラレスの力が何者かに狙われている事は知っていた。

そして、今リクからフィラレスの魔力が何なのかを聞かれ、“滅びの魔力”だ、と一言答えたのだ。ただし、リクが“滅びの魔力”の名を知っている事は知らなかった。反応を示したリクに聞き返した。

「知っているのか？」

「ジルヴァルト」ベルセイクっていう大会の参加者と、あとイナフってジジイと、あとあんたくらいの年齢のハークーンって奴の三人組が狙ってるんだ」

「どうして君がそんな事を知っている？」

リクは、少し躊躇ってから全てを話した。そして自分が次に闘うつもりであるのがジルヴァルトである事も。

そして代わりにカルクはカーエスが報告して来た事全てをリクに話して聞かせた。

「なるほど、だからアイツはあんなに目の色変えてフィラレスを捜しまわっていたのか。で、フィラレスもここに来てるのか？」

「いや、君と別れたすぐ後に姿を消してしまっただけ。カーエスの話ではフィラレスは何をするか分からないそうだが、少なくともいい事はあるまい」

しばらくの沈黙が二人の間を通り過ぎ、リクが静かに尋ねた。

「……“滅びの魔力”って何なんだ？」

「私もよくは知らない。君はフィラレスのアクセサリーには気が付いたか？」

リクはこくりと頷いた。

「あれは魔導研究所特製の今一番効力を持っている魔力を封じるアクセサリーだ。あれをつけていても“滅びの魔力”はフィラレスの意識の間をみて漏れだしてくる。」

あれを全て外すと、もういつ暴走するか分からない。暴走した瞬間、この砂漠一帯が全て吹き飛ぶだろう。全てを滅ぼし得る魔力。

だからうちの研究員達はあの魔力に滅びの名を与えた」

「フィラレスの意識の間をみて漏れ出すって？」

「普段フィラレスはアクセサリーの力と自分の意思であの獰猛な魔力を押さえ込んでいる。ただ、敵に襲われたりして何かの本能が働いてしまった場合、その意思の箍が外れて魔力が漏れ出すんだ。あとは君が見た通り。収めるのに非常に苦労する事になる」

昔は魔封アクセサリーがもつと力の弱いものだったからもつと大変だった。フィラレスが何か一言口を利く度に魔力が漏れ出して来た。その為にフィラレスは一言たりとも口が利けなくなってしまった。

今はもう技術が進歩して口を利いても大丈夫になったはずだが、彼女は自分の力が恐ろしいのだろう。あれからずっと口を開こうとしない」

「持ち主をも恐怖させる力、か……。フリーがこの大会で何をしようとしているのかはよく分からないが、早く見付けた方がよさそうだ」

そういってリクは“呼び鐘”を取り出して綿を抜こうとした。

そこに、横から第三者の声が入って来た。

「リク!! エール!」

いきなり大声で自分の名を呼ばれ、驚いて振り返ったリクが見たのはカーエスだった。

「何だ、カーエスか丁度よか…」と、フィラレスかジルヴァルトを探すのを一緒に手伝って貰おうと声を掛けようとしたが、その言葉は次のカーエスの声に途中で遮られた。

「リク!! エール! 俺と今すぐ勝負せえ!」

「な、何だ…いきなり?」

突拍子のないカーエスの挑戦にリクは少し押されながらろっじて聞き返す。

「今は決闘大会やる…? 勝負すんのにこれ以上の理由が要るか?」と、カーエスはギロリと睨んだ。

「でも今フィリーがそれどころじゃねーんだ。後にしねーか?」

「今、や」

有無を言わせないカーエスの雰囲気にはどこか鬼気迫ったものが感じられる。

ちらりとカルクを振り返る。

その視線に気付いたカルクは頷いて言った。

「闘ってくるがいい。今はフィラレスの事はおいておこつ」

31 『魔導の眼』

その者、澄みし碧眼の持ち主。その瞳に掛かれば全ての魔導を見切ること易し。

その者にとつて魔力の流れは水の流れ、火の揺らめきと同じ事。魔導を用いてそれを再現したならば、その魔法はいとも易く現れる。

だが、その眼は魔性なり。

主の魔力を枯れ果てるまで喰い続け、尽きれば命をも削りはじめる。

魔力持たずして、その眼を持ちし者不幸なるかな、その命儂し。

優れた魔導の技と共にその眼を持つ幸運なる者、この世にいと稀なり。

「スタンリー」ベイツ」 “魔導眼

”の研究』より」

伏兵的なルーキーであるリク「エールとカーエス」ルジュリスが闘うと聞いて、決闘場の中にはもう空いている席がないくらいに混雑していた。

両方とも、優勝候補を倒した者同士、そして何よりも、十五年前伝説的な名勝負を繰り広げたファルガール「カーンとカルク」ジーマンの弟子同士の対決だ。

今までで一番話題性に富む決闘だった。

「どちらが勝つと思います？」と、尋ねながら偶然空いていたカル

クの隣の席に座ったのは昼食を終えたクリン・クランだ。

「カーエス、と言いたところだがそれではひいき目になるな。どちらが勝つにしろ、楽には終わるまい」

「そうですか？ 私はリク君が絶対勝つと思いますよ」

「ほう、その根拠は？」

「僕が彼に負けたからです」

一瞬間が空き、カルクは決闘場からクリン・クランに視線を移して尋ねた。

「本気を出してもか？」

「《双龍の顎》まで使いました。そして、それでもまだ彼は実力を発揮してはいなかった」

その言葉の後半部分に、カルクは目を見開く。

「実力を発揮しなかった？ どういう事だ？」

「レベル5以上の魔法を使わなかったんです。どんなに窮地に陥ってもね」

魔法は威力や効果の大きさに応じて1から7までのレベルに分類されている。無論レベルが大きい魔法ほど扱うのが難しく、威力、効果は大きい。また、レベルに反比例して使える魔導士の数も減っていく。

しかし、この大会では思い上がった雑魚以外はみなレベル7の魔法をいくつか使えるくらいの魔導士はざらにいるはず、そしてファルガールが太鼓判を押すリクがレベル7の魔法を使えないわけがない。

（それを優勝候補のクリン・クラン相手にも使わなかった？ ある

いは使えないのか？ ファルガールよ、お前は弟子をどのように育てたのだ……？)

第三決闘場のバトルフィールドはオアシスである。

浅く窪んだバトルフィールドの真ん中には澄んだ水がたまっており、その周りにはリクが砂漠に入って久しく見なかった木が生えている。

二人はバトルフィールドの真ん中で膝まで水につけて向かい合っていた。

カーエスはさっきリクに話し掛けて来た時と変わらない、鬼気迫る表情でリクを睨み付けている。

リクはそれを黙って困惑したような表情で見つめていた。

(何考えてるんだコイツ……？)

態度からして、カーエスは間違いなくフィラレスに対し好意を寄せている。勿論深い意味で、だ。

そのフィラレスの緊迫した今の状況をカーエスは知らない訳がない。それを差し置いてでも彼はリクと一刻も早く闘おうとしているのである。しかしリクにはどうしてもカーエスがそんなに好戦的な性格とは思えなかった。

リクはカーエスにそれとは別の違和感を覚えていた。それはカーエスが眼鏡を掛けていないからだど気付くのにそう時間は掛からなかった。

「なあ、眼鏡はどうしたんだ？」
「いらん、元々目は悪くないんや」

素っ気無くそう答える。カーエスはいつも通りの方言だった。しかしいつものひょうきんさはなく、それ故かえって凄みさえ感じる。

「来えへんのか？ なら……」と、カーエスは身を深く沈め、「こちから行くでっ！」と続けて、手を水にかざした。

「留まりし水よ、流れを持ちて突然なる《鉄砲水》となれ！」

カーエスの足元の水が盛り上がったかと思うと、突然リクに向かう激流と化した。

リクは《飛躍》を唱えてそれを避けるが、それを見てカーエスにはやりと笑った。

「風を集めて凝らせし《風玉》よ、触れし者全てを吹き飛ばせ！」

まるで周りの空気が集まるように風がカーエスに向かって吹き、その手の中に見た目にも風が凝縮したと分かる玉を形作った。

そしてそれを空中で体勢を変えられないリクに向けて放出する。

「《瞬く鎧》によりて、この……」

「我見たり、汝が《魔導の乱れ》！」

必死で張ろうとした障壁をも、カーエスは魔法で封じてしまう。

そして《風玉》は避ける事も防ぐ事もされずにリクに直撃した。

当たった瞬間、精々人頭大だった《風玉》が一つの竜巻きのようになつてリクを文字どおり吹き飛ばした。

「棘持ちし鳶は伸びて絡みて《茨の網》に……」

リクの後方にあつた二本の木から茨のように鋭い棘を持つ蔦が伸びて、それから成る網を編み上げた。

そこに《風玉》で吹き飛ばされたリクが捕まった。

吹き飛ばされた事で生み出された勢いは容赦なくリクを棘に押し付ける。

「……っ！」

激痛に、リクは思わず目を瞑り、声にならぬ悲鳴をあげる。

カーエスはそんなリクの姿がまるで目に入っていないかのように、間髪入れず次の魔法の詠唱に入った。

「燃え立ち上がれ、《火柱》！」

リクの足元に赤い円が描かれ、直後に火柱と成って燃え上がる。

背中に燃えやすい植物があるだけあって、その炎の勢いは凄まじい者だった。

背中を傷付けられ、その上に焼かれ、リクはその場に膝を付いた。かろうじて、顔を上げると、リクは信じられない光景を目にした。

オアシスの水がカーエスの元に退いていつている。そして退いて面積が減った分、高さが増している。

「水よ、波立て！ 波よ、立ち上がりてより大きな《津波》となれ！ 《津波》よ、汝が巻き込みしもの全てを洗い流せ！」

大きな津波がリクを襲う。当然リクは逃れる手立てもなくその波に飲み込まれ、何がなんだか分からなくなった。その一瞬の後、後頭部を何かで打ち、波が退いてリクは膝を付く。

見るとカーエスがなんだか遠くに感じられる。何となく後ろを見ると後ろはすぐ壁だった。さっき頭を打ったのはこれだったらしい。

「め、滅茶苦茶強いじゃないですか、カーエス君。デュラスの時はあんなに地味だったのに」と、下のバトルフィールドで繰り広げられる光景にクリンクランは感嘆の息を付く。

「デュラス戦は完勝だったから、余力はまだ残っていた」

カルクの言葉に、クリンクランはごくりと息を飲んだ。

「彼もまた優勝候補相手に本領を發揮していなかったと言う事が……」

バトルフィールドの恥まで飛ばされたリクは、痛む身体を何とか動かして立ち上がった。

そして、まだ真ん中の泉の中に陣取っているカーエスを見据える。カーエスもまた彼空目を放しておらず、二人の視線が交錯する。

(目が覚めたぜ……あの野郎、普段ホニヤララしてやがるつてのに)

魔法はただ強いものをたくさん使えばいいというものではない。

いくらレベル7の魔法をたくさん使えるからといっても、レベル1の魔法しか使えない魔導士に負ける事は多分にあり得る事なのだ。その点についてはレベル4以下の魔法だけでジェシカやクリンクランを下しているリク自身がよい例である。

魔法は戦略、直前に使った魔法の影響、環境、詠唱速度を考えたタイミング、全てのものを考慮に入れて使わなければならない。

カーエスの場合、それら全てがきちんと出来ていた。

最初の《鉄砲水》はリクを空中に逃がし、次の《風玉》を確実に当てる為の伏線。その《風玉》で吹き飛ばしたリクにダメージを与える《茨の網》を唱える絶妙のタイミング。燃えやすい植物系の《茨の網》を利用し、威力を相乗させた《火柱》。小技を重ねて体勢が崩れたところを狙ったレベル7の大技《津波》。

そしてほとんどの魔法がこのオアシスのバトルフィールドを構成する水、木、風、そして熱気を利用したものだ。

だが、ここで驚くべき事は彼の《瞬く鎧》を封じた《魔導の乱れ》を唱えるタイミングも完璧だった事だ。

以前、《瞬く鎧》は使うタイミングが難しいと述べたが、それは防ぐタイミングも同様の事で、その場合更にタイミングは難しくなる。魔力の動きが目に見えていない限り、これを防ぐのは少し無理があるはずだった。

(こうして考えててもしよーがねー。今度はこっちから仕掛けていくか)

リクはあちこち痛む身体を無理矢理動かして身体をほぐすと、カーエスと視線を合わせたまま彼に向かってゆっくりと歩きはじめた。ざっざっざ、という彼の砂を踏む音が、全員が息を飲んで見守っているお陰ですっかり静かになってしまった決闘場に響く。

そしてリクは泉の傍に着き、泉に一步足を踏み出そうとした瞬間、カーエスが動いた。

「留まりし水よ、流れを持ちて突然なる……」

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎧》にて！」

リクは、その手に現れた白い光を放つ鎧の形をした魔力を泉の水面に叩き付けた。

すると泉はリクの詠唱した通り、広がる波紋の後からどんどん凍り付き、半分水に漬かっているカーエスの足めがけてどんどん進行していく。そして、同時に彼が足元の水を利用して詠唱しようとした《鉄砲水》をも抑える形となった。

このままでは足元が凍って身動きがとれなくなってしまうので、彼はギリギリのところまでジャンプして既に凍っているところに着地しようとした。

そこを狙ってリクは《炎の矢》を放つ。

「我は放たん、射られし者を炎に包む《炎の矢》を！」

うなりを上げて赤く光を放つ魔力の矢がカーエスに向かって一直線に飛ぶ。

「我は放たん、射られし者を炎に包む《炎の矢》を！」

胸の前に構えた手に弓矢を象る炎が現れ、それを引き絞って放つ。その矢はリクのものよりいびつで規模も小さかったが、リクの放つたものを打ち消し、爆風のみにするにはそれで十分だった。

リクは内心驚きつつも攻撃の手を休めない。

「我は投げん、その刃に風巻く《風の戦輪》を！」

「我は投げん、その刃に風巻く《風の戦輪》を！」

これもさっきの《炎の矢》と同じく、規模は少し小さいがリクの《風の戦輪》とぶつかりあって相殺する。

更にリクは続けた。

「我は突かん、槍穂に裁きを宿す《雷の槍》にて！」

「我は突かん、槍穂に裁きを宿す《雷の槍》にて！」

これも相打ちだ。

二人の距離はどんどん縮まり、ついに短距離戦となる。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて！」

最後は二人の声が重なって、同時に魔法が発動した。

しかし短距離の魔導のぶつかり合いだった所為か、やはり若干威力の小さかったカーエスが氷の上を勢いで後方に滑って行く。

そして中距離での向かい合いとなった。

「……まさか今日だけで俺とファルだけしか知らねー八ズの魔法に二度もお目に掛かれるとは思わなかったぜ。お前はクリン＝クランからでも習ったのか？ それ」

リクの問いかけに、カーエスはリクを睨み付けたまま答えた。

「阿呆抜かすなっ！ 俺が何でカルク先生以外からもの習わなあかんねん！」

「それじゃ、カルクが？」

「それも違う。強いて言うなら、あんたから習った。いや、見習うたんやな」

謎めいたカーエスの言動にリクは当惑した。

(俺が…魔法を…教えた？)

そしてその当惑を満足げに見つめるカーエスの瞳に青白い光が点っているのに気が付いた。たしか、前に見た彼の目の色は黒だったはずである。しかし今は明るい碧眼で、その色は澄んでおり、何で

も見透かされそうな印象さえ受ける。

(眼鏡で色を誤魔化していた?)

しかしその理由は分からない。そもそも、何故彼は目が悪く無いのに眼鏡を掛けていたのだろうか。

その時不意に、いつか魔導士として知識を深めるにあたってファルガールがリクに読ませた本に書かれていた事を思い出した。

その者、澄みし碧眼の持ち主。その瞳に掛ければ全ての魔導を見切ること易し。

「まさか……！」

「アレは“魔導眼”!？」

「ほう、よく気が付いたな」と、クリン・クランの驚きをよそにカルクは素っ気無く感心してみせた。

「信じられない……。まさか“魔導眼”を持つてる魔導士が本当にいたなんて……」

「私も最初は同じ気持ちだった」

“魔導眼”。その目は遺伝とは何ら関係なく、稀に発現する目の事だ。明るく澄んだ青色をしており、魔力を肉眼で認識できるといふ特性を持つ。

つまり、人が魔法を使う時に魔力がどう動くかもはっきりと目に見る事が出来るのだ。この能力を駆使すれば、同じように魔力を動かして魔法をコピーする事もできるという訳だ。

「カーエス君がいつも掛けていた眼鏡は“魔導眼”を他人から隠す

為だったんですね」

「それもある。相手には実力を低く見られていた方がいいからな」

「それもある、とは？」と、そのカルクの物言いにひっかかりを感じたクリン「クランは反射的に聞き返した。

「“魔導眼”はああやって能力を使っている間、ずっとカーエスの魔力を削っていつている。それはほんの微量だが、毎日毎日魔力を削り取って行く。カーエスは以前、それが続いた時にとうとう魔力が尽きて死にかけた事があった。それ以来、普段は魔法研究所の作ってくれた眼鏡で“魔導眼”の能力を封じている」

「へえ、それは初耳です。便利そうだから私も欲しいと思っていたのに……。良い事づくめのものってなかなか無いもんですね」

クリン「クランの言葉にカルクは一つ頷いて付け加えた。

「魔導士としての資質を持たずに“魔導眼”を持って生まれた子は魔力の代わりに体力、精神力、全ての力を奪われて死んでしまう。

だから、“魔導眼”が発現する確率の数字は意外と大きいが、実際に持つてる人間を見かける事は無い。

しかしカーエスの場合、眼鏡を掛けてしつかり魔力を温存しておけば、こうした一時的な闘いには何ら支障は生まれません」

“魔導眼”を持つ者が魔導士としての素養をも兼ね備えているとは限らない。只でさえまともな魔導士になれる素質を持つている者はほんの一握りだと言うのに、それに加えて“魔導眼”を持つ人間はひとつまみといった確率である。

両方を兼ね備え、しかも魔導士としての素質、センスに恵まれた人間が現れる確率は限り無くゼロに近いといえる。

その僅かな確率が形になった魔導士、それがカーエス「ルジュリスなのだ。

32 『譲れないもの』

誰しも譲れないものはある。

そしてそれを守ろうとする事自体が理不尽である事も。

しかし理不尽である事は間違っているとは限らない。

理不尽であるからといって守らなければ、後悔があなたを悩ませる。

どんな事でも心のままに動けば後悔は決して生まれません。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎧》にて！」

「ここに敷かれしは《炎の陣》、冷気は決して入るべからず！」

リクが振り下ろした《氷の鎧》は、カーエスが対抗して張った、炎の障壁に呆気無く消散させられる。

そして生まれた隙を突いてカーエスは攻撃に入った。

「《驚掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせ！」

カーエスの障壁になっていた炎がそのまま人の手のように広がり、リクに襲い掛かる。

リクはそれをギリギリまで待ち、《瞬く鎧》を詠唱する。

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

「我見たり、汝が《魔導の乱れ》！」

カーエスはそれを防ごうと《魔導の乱れ》を唱えるが、リクはそれを振り切つて魔法を完成させた。《瞬く鎧》が発動し、《鷲掴む炎》がリクを包んだ後、消散してもリクは全くの無傷で済んでいる。《魔導の乱れ》は魔導の失敗を誘うために行われるただの妨害行為である。だから唱えられる側がしつかりと魔力を導けば魔法を打ち消される事はないのだ。ただし、《魔導の乱れ》を振り切るには魔導士として相当の技量が必要となる。

一息の間もなく二人は同時に次の魔法の詠唱に入る。

「我は放つ、射られしものを炎に包む《炎の矢》を！」

「留まりし水よ、流れを持ちて突然なる《鉄砲水》となれ！」

二人の放つた魔法はほぼ同時に発動し、彼らの真ん中でぶつかりあつた。しかし《鉄砲水》は少し勢いを殺されただけで造作もなく《炎の矢》を飲み込み、リクにその手を伸ばす。

今度は《瞬く鎧》を唱える暇もなく、リクは鉄砲水に吹き飛ばされる。

「棘持ちし鳶は伸びて絡みて《茨の網》に！」

その詠唱を聞いてリクは背中にひやりと冷たいものを感じた。先ほど《風玉》で吹き飛ばされ、同じ魔法を使われたときの背中のはまだ血も乾いていないし、一時もその痛みを忘れた瞬間はない。

リクは必死で後ろを向き、無我夢中で魔法を詠唱した。

「飛べ、《火の投げ矢》！」

そして放たれた《火の投げ矢》は今茨が伸びて絡み合っている最中の《茨の網》に命中し、リクがそこに到着する寸前に燃やし尽く

した。

リクはほっとしてそこを通り過ぎ、泉の外に着地する。

（“魔導眼”……こいつは思ったよりずっと厄介だぜ）

リクは始め“魔導眼”のメリットは魔力を肉眼で認識し、見た事を模倣する事によってコピーしたり、《魔導の乱れ》のような妨害魔法を詠唱するタイミングがはかりやすかったりするだけかと思っていた。

しかしそれだけでは戦闘において、あまりアグレッシブなメリットとは決して言えない。

魔法を模倣されても自分の魔法だからよく知っているし、模倣だけにオリジナルのこちらの同じ魔法より少し威力は劣る。妨害魔法だって先程リクが実践したように魔導の技量があり、しっかりと警戒していれば問題はない。

そう思って気楽に構えていたが、今の攻防で“魔導眼”の真のメリットというものを、身を持って知った。

それが魔法の先読みだ。

魔法は先ず、魔力を動かす。そして大概の場合、途中から魔導を助けるために呪文を詠唱する。そして魔力の動きによって自然界におけるその現象が発動する条件が満たされ、初めてその現象、すなわち魔法が具現化するのである。

普通、次に相手が使う魔法が分かるのは呪文を詠唱し始めてからである。

しかしカーエスの“魔導眼”の場合、その前のはじめに魔力を動かす段階で何の魔法を使うか分かってしまう。

つまり普通の魔導士よりワンテンポ先に、その魔法に対抗する行動に入る事が出来るのだ。

例えば、《氷の鎚》を使われそうなのが分かり、その魔法に対し

て有利な炎の防御魔法《炎の陣》を唱えられる。例えば、相手が《炎の矢》を使うと分かれば、それに対して有利な水の攻撃魔法《鉄砲水》で応戦する。

結果《氷の鎚》は打ち消され、《炎の矢》は飲み込まれた。

(どんな奇抜な事をやらかそうと、奴には全部見通せるわけだ……)

「魔法の応酬か……魔導士らしい闘いですよね」

「派手な事は派手だな」

二人の闘いは炎が出たり、泉に氷が張ったり、木から茨が伸びたりして、見た目としては派手なものだった。観光目的でここにいる素人達もこの展開に喜ぶ様子が見える。

しかし闘いを見なれている玄人達にも、この闘いはどう転ぶか分からない、この大会の決勝戦にとっておきたいくらいの熱闘である。

「今のところカーエス君が“魔導眼”の先読みでかなり有利なようですね」

「彼ももう“魔導眼”のメリットに勘付いているはずだ。ここからどう動くかが勝負の鍵だ。しかし……」

カルクが解説の後に付け加えた逆接の接続詞にクリン・クランが眉を潜める。

「しかし？」

「少しカーエスの様子が変だ」

その言葉に、クリン・クランはカーエスの方に視線を戻す。しかしどこも身体の変調は見られない。

「どこが変なんです？」

「私はカーエスに相手をよく観察し、最も効率のいい戦法で闘えと
いつている」

「そうしてるから今有利になってるんでしょ？」

カルクは重々しく首を振った。

「それは違う。リク君のような不屈の根性タイプはああやって押し
続けるより、押させておいて、確実な機会を狙って一気に逆転する
方がいい。はじめの先制攻撃といい、彼の魔法を模倣して“魔導眼
”に気付かせたり……、お陰でカーエスはリク君に“魔導眼”攻略
の策を練る機会を与えてしまった。

今回、カーエスは何かにつけて自分の方が圧倒的に強いという事
をリク君に見せつけているようだ。本来彼はそういうタイプの人間
ではない」

「どっちかという日頃嘗められて、極める時は極めるタイプです
よね」

クリン「克蘭の言葉にカルクは頷いてみせ、そしてカーエスに
視線を移す。

「私には、カーエスが何かに追い詰められて焦っているように思え
る」

そんな事を話している彼らの横を駆け抜けていく者がいた。

白髪に褐色の肌、これでもかというくらい砂漠に適応した格好が
印象的だ。

それを見て顔を上げたのはクリン「克蘭だった。

「あれ？」

「知り合いか？」

「確かあの人、リク君の便利屋さんですよ。僕と彼が闘った時、申し込んで来たのがあの人です」

コーダは観客席の脇にある通路を一気に駆け降り、バトルフィールドを囲う壁までやって来た。

その真下にリクがいる。

「兄さん！」

その呼び声にリクが反応する。

「コーダ！？ どうかしたのか？」

「どうもこうもありやせんよ！ 探してたジルヴァルトが見付かったんす！」

「闘ってる最中にそんな事言われても……」

リクが困惑した顔を見せると、コーダは更に焦った顔で言い返した。

「普通なら終わるまで待つてやすよ！ ジルヴァルトも今、第四決闘場で闘つてやす！」

「だったらなおさらこれが終わるまで待つてもいいハズだろ？」

「相手が問題なんす！」

「でも、もうめばしい奴はいないはずだうわ……っ！」

言葉を中断してリクは横っ跳びに逃げた。その後にカーエスの放った《驚掴む炎》がコーダの下の壁を焦がす。

「決闘中によそ見するとはええ度胸やないか」

カーエスの据わった目を見ながらリクは言った。

「コーダ、とりあえずこういう状況だから、手短に話してくれ！」
「だからア！ ジルヴァルト〓ベルセイクと、兄さんが気に掛けてたフィラレス〓ルクマースが対戦してるんすよ！」
「なっ……！？」

リクが当惑を見せたところで、カーエスの《風玉》が当たり、リクは泉の周囲にぼつぼつと生えている木の一つまで飛ばされた。

「ちゃんと闘いには集中せなあかんで」
「馬鹿たれ、今の聞こえたる！？ フィリーが危ない。一旦闘いを止めて助けに行くぞ！」
「耳は目工ほど出来が良くないけどしっかり聞こえたわい！ それがどないした？」

その台詞にリクは意外そうな顔をした。

「どないしたって、……お前フィリーが心配なんじゃないのか？」
言ってしまったってリクは気付いた。カーエスはジルヴァルトとイナスが仲間である事を知らなかったことに。

「お前イナス〓カラフを知っているだろう！？」

その名を出され、カーエスはぴくりと眉を動かした。
リクは返事を待たずに続ける。

「ジルヴァルト!!ベルセイクはイナス!!カラフとグルだ! 奴もフリーを狙ってる!」

表情は変わらなかったものの、カーエスの顔が蒼白になった。

彼は抑えているつもりらしいが、彼の動揺は目に見えて明らかだ。

「……関係あらへん。そらフリーは心配や。でも今はあんたとの決着が先や」

意外なカーエスの反応に、リクは眉をしかめる。

「……? 言ってる意味が分からねーぞ?」

「分からんでええ」

「だったらせめて俺を通して行かせる気にはならねーか?」

「ならん」

リクが諭すように言うが、カーエスは頑として聞かない。リクからその蒼く済んだ“魔導眼”をそらさない。

「俺を倒してから一人で行くより、二人ですぐにいった方が助かる確率も高いだろ?」

「それが分かるらんほど阿呆やない。こうやって睨みあつとるんもフリーの為にならん事も分かつとる。……それでも、俺はアンタを今ここで倒さずにいられへんのか!」

その叫びとともに唱えた《驚拵む炎》がリクの背後の木を燃やした。しかし、リクは全く避ける必要がなかった。

「カーエス……」

一時の沈黙の後、静かにカーエスは話しはじめた。

「俺はフィリーと会って五年経つ、カルク先生とは八年近いわ。でも俺はどっちにも頼りにされた事はないし、あんなに真剣な話もした事ない。それはしゃあないわ。それほど頼りにならん男やさかいな」

（あんなに真剣に？ ……マーシアの話の事か？）

しかしリクはその疑問を口にせず、黙ってカーエスの話を聞いた。

「でも、それをアンタは会ったばかりでそれをやりよつた。俺には何があんたに負けてるのかよう分からん。何が違うのかよう分からん。」

「……このまま二人でフィリーを助けに行ったら、やっぱりあんたにエエとこ取られそうな氣イすんねん。でも、フィリーを助けるのはやっぱり俺でいたいねん。」

「……俺、アンタの言った通り、フィリーが好きみたいや。だから、アンタに邪魔されとうないんや。エエとこ持っていかれたくないんや。」

だからって、あんたがそんな事せえへん言われても俺の気持ちは変わらへん。これは多分あんたの意思とは関係ないねん。何だかんだで、結局あんたの出番が来る。アンタはそういう運の回りしとんのやろな。」

でも、ここで倒していけば確実にアンタの出番はない。だから、俺はアンタを倒してからフィリーを助けに行く。これが好きなフィリーに対しての裏切りになる事は分かつとる。アンタに理不尽な事言つとるのも分かつとる。」

「……俺かて、なんでこんな事考えとるんか分からんわ。我ながら下らん事考えよる。でも、どうしても……どうしても譲られへんの

「や」

終始、彼の表情は変わらなかったが、彼の感情は十分にリクに伝わって来た。彼が真剣である事も良く分かる。今の話を聞いて、今日のカーエスの様子が変だった事の全ての説明もついた。

つまりカーエスはリクに対し、劣等感を密かに抱き、嫉妬していたのだ。デュラスに勝つ事で強さに関して優越感を持つ事で、少しはバランスが保てていたが、リクがクリン・クランに勝ち、その優越感が無くなったところで、彼の劣等感だけが取り残されてしまった。

言動はそれこそ理不尽この上ない。しかし、人間の心なんてむき出しにすると大概理不尽なものだ。それが分かっているから人は自分の心を表に出そうとしない。

リクは、自分の気持ちを受け入れ、まっすぐリクにぶつけて来たカーエスには好感が持てた。

リクはゆっくりと立ち上がって身構えた。

「よし、分かった。この鬪いはちゃんと終わらせよう」

その口元にはうっすらと微笑みが浮かべられている。

「リク……」

「すぐに終われば問題ないんだろ？」

「まさか、わざと負ける気やないやろな」

カーエスの疑問に、リクは微笑みを不敵な笑みに変えて答えた。

「馬鹿たれ、俺がすぐに勝つんだよ」

二人は仕切り直しとして、既に氷が溶けてしまっている泉の真ん中で向かい合って立った。

相変わらず口元に笑みを浮かべたままリクはカーエスを見据えている。

カーエスはその自信の理由が分からなかった。まさか、自分の“魔導眼”を破る術でも思い付いたと言うのか。

(有り得へん……、俺の“魔導眼”を破る術なんて……！)

リクが動いた。カーエス目掛けて一直線に突っ込む。

カーエスはそれに反応して、ぐっと腰を落とす。

その澄んだ蒼い瞳を凝らし、リクを見据える。どんな魔法が来ても、すぐに対抗、圧倒できる魔法を詠唱する自信がある。

(さあ、どう来るつもりや……?)

しかし、リクの魔力は動く様子を見せなかった。

それを見たカーエスはなるほど、と感心する。確かに肉弾戦なら“魔導眼”の能力は一切関係してこない。

「しかし、甘いぞ！ 防ぐな、返せ！」カーエスは全ての物理攻撃を無効化する《弾きの壁》を唱え始めた。

しかしその瞬間、彼は驚愕に目を見開いた。

「我は捕らえん、水流にて紡がれる《水の縄》にて！」

リクの手から伸びた、水で構成された縄はあっという間に伸びた。物理攻撃ではないので既に完成して発動した《弾きの壁》を呆気無くすり抜け、カーエスの身体に巻き付く。

(し、しもたア……！)

これは単なるカーエスの判断ミスだった。

リクが全く魔力に動かさずに来るのを見て、物理攻撃ならばと《弾きの壁》で対応したのが不味かった。つまりこの瞬間からカーエスは魔法攻撃に対し全くの無防備になってしまったわけだ。

カーエスの“魔導眼”戦術は言わば「後の先」を極めた戦術である。相手の出方を読み、それよりも強い手で対抗する。普通はこれを行うと、防御行動が遅れてしまいがちだが、“魔導眼”の能力で普通より少しだけ早く相手の手を知ることが出来る。

互いの魔法を発動してしまった後なので、相手はもう手をかえる事が出来ず、カーエスに完璧に攻撃を防がれ、反撃される。

しかしリクは攻撃しながらも、魔法は使っていないかった。そしてカーエスは魔法を使ってそれに対応してしまった。そのためリクはいつでも魔法を唱えられる体勢だったし、カーエスはもう自分の手を変える事が出来ない状況だった。

カーエスは魔法ではなく、自らの体術をもって防御すべきだったのである。相手より先に魔法を使つてはならなかったのだ。

今回の戦闘では攻防全てを魔法で行ってきた二人であるが、それに慣れきつてしまい、つい今度の防御行動も魔法で行ってしまったのがカーエスの敗因であった。

リクは《水の縄》で縛られたカーエスを思いきり引つ張り寄せた。ぐん、と力強く引き寄せられ、自分に向かって猛スピードで迫るカーエスを見据え、リクはやはり不敵な笑顔を浮かべながら止めの魔法を唱えた。

「我は突かん、槍穂に裁きを宿す《雷の槍》にて！」

勢い良く肩口を突かれ、そこから体中に電流が走る。未体験の衝

撃にカーエスは思いきり悲鳴を挙げてしまった。

「う、うがああ……！」

肩を貫く《雷の槍》が消えると、カーエスは支えるものを失ったようにその場に崩れ落ちた。

リクはそんな彼の腕から“証の腕輪”を外す。すると腕輪は砂になつた。

勝利の余韻を感じる暇もなく、彼は立ち上がり出口を直指そうとしたその時、気を失っているはずのカーエスが口を開いた。

「……待てエ……」

「これ以上待てるか！ もう決着はついた、だ……ろ……？」

振り向くと、カーエスが立ち上がっていた。《雷の槍》の影響でしばらくはしびれがとれず、起きるのも困難なはずだ。否、気を持っているだけでも辛いはずである。

そんなカーエスの不屈の根性にリクが言葉を失っているとカーエスは続けた。

「ああ、勝負はついた。……あなたの勝ちや」

「じゃ、どうして立ち上がる？」

「……俺も、行く……」

息も絶え絶えのカーエスの発言に、リクは啞然とした。

「今、俺と闘ってやられたばかりだろ？」

「……傷は、あんたより、マシや……」

言われて、リクは背中の痛みを思い出す。

「……頼む、引き留めた、罪滅ぼしや……何ぞ、役に、立てるかも
知れへん……よって」

そういつてカーエスは澄んだ蒼い眼をリクに向けた。
リクは少し押し黙った後、カーエスに駆け寄って肩を貸した。

**

決闘場を出ると、コーダが運搬サソリを連れて現れた。

「兄さん、早く乗って！」

「ああ、ありがとな」

リクはカーエスを客室の中に放り込むと、自分も乗り込んだ。
そしてリクは客室の一番前に行ってコーダに話し掛ける。

「コーダ、出来るだけ飛ばしてくれ！」

「合点しやした！ 今日久しぶりに思いっきり行きやス！」

コーダは元気よくその顔は満面の笑顔で答えた。この顔にリクは
一瞬、不安を憶えた。

「《シツカーリド》、“全速走行モード”！」

コーダのこの掛け声に答えるように、運搬サソリ《シツカーリド》
《が閃光に包まれる。》

光が収まった時、リク達のいた客室が消え失せ、彼らはただ巨大なサソリの背中にいた。

「な、何だア……?」

何が起こったのか理解出来ないリクに、どこから取り出したゴ―グルを掛けて、前方の御者席に座ったコーダが振り向いた。

「しっかり捕まってるんスよん、でないと……」

コーダの言葉の途中で《シツカーリド》は走行を開始した。……のっけから今までリクが体験した事のないスピードで。

「うわおっ……!？」

「振り落とされやすから」

運搬サソリ《シツカーリド》はその後一瞬で、この場にいた人々全ての視界から完全に消え失せた。

そして残ったのはやけに悲痛な響きのある二人分の叫び声だった。

33 『本当は』

やるべき事と、やりたい事は全くの別物だ。

やりたい事を優先したい。

しかしやるべき事を行った方が絶対に良い。

人は皆そんなジレンマを持っている。

やるべき事をやれる人は偉いと言われる。

しかしそんな人でも本当はやりたい事があるはずなのだ。

自分のやっている事がやりたい事ではない事は分かっているはずなのだ。

人の悲しみはやるべき事とやりたい事が別である事。

やるべき事とやりたい事が同じである事。

それは人として最上の幸せである。

ここは第四決闘場、別名は“サバンナの決闘場”である。

地面はさらさらとした砂ではなく、乾きにひび割れた真つ平らな地面、あちこちにサボテンや、枯れ木、そしてむき出しの岩石のある正八角形のバトルフィールドだ。

その固くひび割れた地面には何かによってえぐれた後がいくつかに付いていた。

その地面の上には二人の人間。うち一人は少女で、身体に光を纏い、その光から何本もの輝く帯が伸びている。

フィラレス・ルクマースは生涯で初めて自らの意思で“滅びの魔

力”を発動させていた。

止めるのにあれだけ労力を要するというのに、この好戦的な魔力はあっさりと発動し、光の帯を彼女の意識のむくがままにその手を伸ばす。

その先には、静かにフィラレスを見据え続ける漆黒の髪と瞳を持つ青年、ジルヴァルトⅡベルセイクが立っている。

光の帯達の連続攻撃にジルヴァルトは全く身じろぎせず攻撃をかわし続けていた。しかしその動きは、ドタバタと危なっかしかったりクのそれとは違い、全く無作為であるはずの光の帯達の攻撃を全て読み切ったかのような余裕のある動きだった。

それを見てフィラレスは安心した。

これなら自分はこの人を傷つける心配はない。

周りに観客がいるのでフィラレスの意識がそっちに行く事もあった。

そして光の帯はそっちに向かうわけであるが、各決闘場には決闘のどばっちりを観客が受けたりしないように、観客席とバトルフィールドの境目に魔力の障壁が張られている。

この障壁はかなり優秀で、滅多な事では破れないらしく、フィラレスの光の帯がかなりの勢いでぶつかってもビクともしなかった。

フィラレスがジルヴァルトとの闘いに決闘場を選んだ理由である。

「風よ、不可視なる刃をもつて全てを切り裂く《真空波》となれ」

静かでゆっくりとした魔法の詠唱とは裏腹に、魔法は素早く発動した。彼に向かってくる光の帯達は全て真つ二つに切り裂かれ、フィラレスにその刃を届かせる。

しかしそれも彼女の纏う光の衣には全く通用しなかった。真つ二つに切り裂かれた光の帯達もそのまま二本の光の帯として相変わらずジルヴァルトを狙い続ける。

フィラレスはただそこに立ってジッとジルヴァルトを見つめ続けている。

ジルヴァルトはまたしばらく黙り込んで回避行動を続け、次の魔法を詠唱し始めた。

「実体を持たぬ《死霊の鎌》は、肉体は刈り取れず。されど実体なき心は刈り取り、代わりに恐怖を植え付けん」

ジルヴァルトの伸ばした手の先に魔法陣が浮かび上がり、そこから大鎌をたずさえた死霊の形をした魔力が具現化し、それを振り上げてフィラレスを襲う。精神攻撃魔法《死霊の鎌》だ。

しかし、鎌がフィラレスに届く前に衣から新たに光の帯が生え、死霊を吹き飛ばす。

肉体への攻撃も、精神への攻撃も効かない。

光の衣を破るくらい強力な魔法も無いわけではない。そしてジルヴァルトはそれを使える。しかし、光の帯の連続攻撃がそれを唱える隙を与えない。

（全てはあの魔力のため……それならば）

ジルヴァルトは次の行動を決めた後、しばらく黙って回避行動を取る。

タイミングを計っているのだ。

出来るだけ、攻撃が来ない時間を長くしたい。それでもギリギリの筈だ。

八角形のバトルフィールドのある一辺に一時待機し、出来るだけ多くの光の帯の注意をひく。そしてギリギリまで来た時、ジルヴァルトは《電光石火》を唱え、向かい合った辺まで一瞬で移動した。

これですばらくは光の帯は攻撃に来ない。

ジルヴァルトは躊躇わずに魔法の詠唱に入った。

「あれに見ゆるは全てを脅かす力、全てに轟く力、全てを害する力。《魔縛りの影》によりて我、その力を封じん。その影この場にあるかぎり、決して再び暴れ出す事無し」

唱え終わると同時にジルヴァルトの影が形を変えてフィラレスの元に伸びて行く。ただでさえ長い詠唱時間で光の帯達はジルヴァルトとの距離を詰めている。

この調子では届くかどうかはギリギリだ。光の帯達はその凶暴なる手をジルヴァルトに伸ばす。しかしジルヴァルトは一切の回避行動を取らない。

そしてついに目前に迫った時、光の帯達は突然、その光を薄れさせ、具現化されていた実体を無くしてジルヴァルトの身体を通り抜けて行く。

そしてついにそれらが消えた時、観客達にジルヴァルトの影がフィラレスに届いているのが確認出来た。

あれだけ派手に暴れていた光の帯達が一瞬にして消えてしまったのに対し、観客がおお、と感嘆の声をあげる。

「汝、《砂の戒め》によりて縛られよ」

息を付く暇も無く唱えたその魔法で、フィラレスの手足に砂が絡み付き、フィラレスが動きをとれなくなる。

フィラレスが“滅びの魔力”によって守られ攻撃するのならば、その魔力自体を封じ、そしてその状態から抜けられないようにした今、もう彼を攻撃するものは無い。そして、彼の攻撃を遮るものも無い。

この時点で、ジルヴァルトの勝利は決まった。

しかしジルヴァルトという男が、決闘大会のルールの上での勝利をもぎ取っただけで済ませる男ではない事はシノン戦後一日経った

今、良く知られていた。

そして彼がそのような男ならば、フィラレスも彼を相手には選ばなかった。

ジルヴァルトはゆっくりとフィラレスに歩み寄って静かに話し掛けた。

「どうやらお前の望み通りにしてやれそうだな。死をもって罪の苦しみから解放されるがいい」

そういつてジルヴァルトはフィラレスの方に手をかざして唱えた。

「汝は大地に愛されし。よって汝は《地への帰依》によりて母の大地に還るがいい」

フィラレス足元の地面に黄色い魔法陣が描かれる。するとその魔法陣の中は砂になり、フィラレスの身体はゆっくりと沈み始めた。

「時間を与えよう。未練を断ち切る努力でもするがいい」

そういつてジルヴァルトはくるりと背を向け、近くの壁に身をもたれかける。

未練、と言われてもフィラレスは何も思い付かなかった。

この力が発現して以来、死んだ方が人のためだと思いつつ、いつか死ぬ機会が来た時のために、なるべく未練は残さないように心掛けていた。

だんだんと低くなる視界。下を見れば自分がだんだんと地面に沈んで行くのが実感できる。そして、自分が死へと、自分が目指していたゴールへと歩んでいつている事も。

この歩みがスタートしたのは五年前、十二歳の時。

生まれた時にフィラレスが膨大ゆえに危険な魔力を持っている事は分かっていた。

フィラレスの一族には時々そういうものが現れる。一族の掟では、そういうものが現れた場合、暴走しない内に殺す事になっていた。しかし彼女の両親はそうしなかった。二人の間にはなかなか子室が得られず、やっと授かった一人の子供だったからだ。

後にそれを知った時、フィラレスは両親にこれ以上ないほどの感謝を感じた。

それが後悔に変わったのは五年前のときだった。

その夜、よそから村にやってきた四人の強盗が入ってきた。

時々フィラレスの様な子供が生まれる他は何の変哲もない一族で、両親のどちらも戦闘訓練を受けた事がないので抵抗のしようはなかった。

ただ、なされるがままに、強盗達に金目のものを漁らせるしかなかった。

そし金目の物をありったけさらったところで、強盗達はフィラレスに目をつけた。

彼女からその頃から評判の容貌だったので、娼婦館にでも売れば高く売れるという事だった。

強盗の一人がフィラレスに手を掛けたところで、フィラレス自身もそして彼女の両親も激しく抗った。

しかし両親は張り倒され、フィラレスは羽交い締めにされた。

いやだ、離ればなれになるのはイヤだ。

フィラレスは泣き叫んだ。

それと同時に、体から光がほとばしり、先ず自分を羽交い締めにしていた強盗が吹き飛んだ。

それを見た他の強盗が、驚愕の後、怒りを露にして、彼女に斬り付けようとしたが、その強盗も彼女の体から伸びた光の帯が腹を貫き、壁まで飛ばされた後に悶絶した。

逃げようとした残る二人も、あっという間にやられた。

そこまではまだよかった。

四つの命を奪ったとしても、十三歳で自我が目覚めているとは言え、まだ幼いフィラレスにはその重要性は理解できず、大好きな両親を殴った悪い人間をやっつけたぐらいにしか思っていなかった。誉めてもらおうと、父親を振り向いた時、その光の帯が父を襲い、天井に張り付けた。戸惑いながら母を見ると、今度は母に殺到し、その胸を貫いた。二人ともどう見ても即死だった。

たった一人、部屋に残ったフィラレスは腰が抜けたように床に座り込み、そして、悲鳴を上げた。

その悲鳴に呼応して、光の帯達は四方に広がり、両親と幸せに暮らした思い出がある家の壁を突き破って、街を襲いはじめた。

そして、たった一つの一家を襲った小さな災難は、“大いなる魔法”の災厄にも匹敵しようという、一つの街を巻き込んだ大きな災害に取って変わった。

フィラレスは何度も叫んだ。

もう止めて、お願いだからもう止まって、と。

そしてフィラレスは心の中でこう思った。

もし、自分が生まれてきた時に、両親が私を殺していれば、こうはならなかったのに。

大切な人を殺すような事にはならなかったのに、と。

事態の収集までには三日掛かった。話を聞き付けた魔導研究所が対抗策を用意した人材を派遣し、それによって、フィラレスの魔力はやっと収まった。

被害は奇跡的に軽く、あの時、フィラレスと同じ部屋にいた人間以外の死者は出なかった。しかし、建物の大半は倒壊し、けが人も少なくなかった。

生かしておくのはあまりにも危険だ、と町の物達は口々にフィラレスの処分を訴え、フィラレスもそれを受け入れる意志を示したが、研究所側はフィラレスの魔力は今後の魔導研究に大きな貢献を果たすと考え、その処分を見送る方針を決めた。

そしてフィラレスの持つ魔力にはその威力から“滅びの魔力”という名がつけられ、彼女の手足首、そして首に、研究所がその最新の魔導技術を尽くして作り上げた魔封アクセサリーをつけさせた。さらに少しでもコントロールを得る為に、と彼女には魔導学校の一人の教師に預けられた。

その教師こそ、マーシア「ミスター」シャだった。

その後もフィラレスの魔力は度々事件を起こした。その度に魔導研究所の会議の議題にフィラレスの処分が検討された。

そしてフィラレス自身もその度に自分の存在を恨めしく思い、心に傷を負う。

その度に人々はフィラレスから距離をとっていった。

しかしそうしない者達もいた。マーシア、カルク、カーエスのような者達だ。

彼らは正直、彼女の心の救いであつたが、自分の魔力の暴走に巻き込んでしまふのではないかと気に病んでもいた。

ここに來てから彼女を避けない人間がもう一人増えた。リク＝エールである。

彼は彼女の心配通りに“滅びの魔力”の暴走に巻き込まれた。彼は逃げられたのに逃げなかつた。

そして自分に本当に人を傷付けたくないと思うなら自分の魔力をコントロールする事を諦めるな、と言つた。人がいても魔力を制御できるようになつてみせると、その場に留まり続けてくれた。

結果的に言つと、彼はやはり傷付いてしまつたが、マーシアのように義務があるわけでもないのに、自分のためにあそこまでしてくれた者は初めてだつた。

それから彼女は自分を殺せる相手を見付け、今まさに殺されようとしているが、それはあの時のリク言葉を裏切る事になるのではないだろうか。

しかし、いくら魔力を制御できるようになつたからといって、自分は既に多くの人を傷付け、そして完全に自分の魔力の危険性が消えるわけではない。

やはり自分の存在ごとそっくり消えてしまふのが一番いい。

そうなるべきなのだ。

……そうなりたくはなかつたが……

……そうなりたくなかつた？

フィラレスは今自分で思った事に対して自問した。
そして何となく一人で納得した。

そう、本当は自分だつてもっと生きたかった。

自分の魔力の関係ないところで、楽しい出来事もたくさんあった。
数少くはあったが、自分の事を真剣に考えてくれる人々がいた。
出来れば、あの人達にもう一度だけ会いたい。

特に会ったばかりだが、あれだけ親切にしてくれたあの青年。

暖かい心を反映したような栗色の髪と、何かをまつすぐに見据えた綺麗なエメラルドグリーンの瞳を持つあの青年に。

それはもう手遅れだと言う事は分かっている。

しかし彼女の目頭は熱くなり、ぽろぽろと涙がこぼれてくる。

これが、未練と言うものなのか。

34 『引き止めてくれる呼び声』

僕はそこを離れなければと思った。

何故かは分からない。

とにかく離れなければと思い、荷造りをした。

翌朝その荷物を持って村を出た。

早朝なので畑を荒らすタヌキの他には誰も道にはいなかった。

そのタヌキを追っ払うと、その畑主に見付かった。

大きな荷物を背負っているので、村を出ようとしている事は明白だった。

ばれてしまった時、僕の心に罪悪感のようなものを感じた。

その畑主のおじいさんはお礼にと僕に朝食をごちそうしてくれた。

村を出ようとする僕に理由を聞いてきた。

僕は答えられなかった。

代わりに僕は聞き返した。

何故おじいさんはこの村にずっといるのですか？

おじいさんは答えてくれた。

この村の良いところやこの村で経験した思い出等を。

僕は時々笑って聞いた。

聞き終えた時、僕はこの村を出たくなくなっていた。

しかし、僕は行かなくてはならないような気がした。

おじいさんに別れを告げようとするとおじいさんはたった一言言
った。

この村に残るわけにはいかんかね？

僕はその一言で村を出る気無くしてしまった。

僕が村を出なければならなかったような気がした理由。
それはきつと村をもつと大切に思いたかったからなんだ。

「「ううあああああつっつ！」」

二重の叫び声がファトルエルの南西部の入り組んだ道に響いていた。

その音源は猛スピードで西通りに向かって北上中である、一匹の大きなサソリだった。しかしこの辺で良く見られる運搬サソリとは違うようだ。少し小さいし、赤っぽい。そして速い。

運搬サソリとの骨格の微妙な違いがそのスピードを実現させているのだらう。

運搬サソリはもともとこの厳しい自然の砂漠の交通手段として人間が改良したものだ。走りは安定し、揺れも少ない。さらに背中が平べったいので、たくさんの荷をのせるのはまさにぴったりの生き物だった。

しかしこの音源のサソリはそれとは全く違い、全体的に流線形で背中丸っこく姿勢が低い。

スピードを出すために全てを犠牲にしたかのように安定性に悪く、その背中の揺れは地震どころの話ではない。

背中に乗っている者たちにとってはまるでロデオのようだ。

このサソリに乗っている人数は三人。一人は唯一つある御者席に座り、少し尻を浮かして、自分に来る振動を上手くさばいている。

あとの二人は……悲惨だった。

栗色の髪をした青年は、必死で手がかりのないサソリの背中にしがみつき、もう一人の黒髪の眼鏡を掛けた青年はしがみつく力もな

いのか、栗色の髪の青年の腕にやっと引っ掛かってゆらゆら揺れている状態だ。

「うあああああつっ！」

「ちよつとつるさいスよ。操縦に集中出来ないじゃないスか！」

叫びをあげる二人に御者席の一人、コーダは迷惑そうに言った。それを聞いたリクは無我夢中といった感じで怒鳴り返す。

「ば、馬鹿たれえっ！ 俺たちを振り落とすつもりかあつ！」

「な〜に言ってるんス、おいらこれでもまだまだセーブしてヤスよん」

リクの抗議にコーダは肩ごしに振り向き、笑って答える。

そしてリクが呆れている横ではカーエスが悲痛な叫び声をあげていた。

「もうあか〜ん！ もうあか〜ん！ カンニンしたってお母ちゃ〜んっっ！」

右へ左へ曲がる道のお陰で重心は縦横無尽に散らかり、リクとカーエスを振り回す。そして、南西区から西通りに出るときの大きなカーブに掛かる。

するとサソリはいきなりサソリを横に向けた。そしてしばらく慣性の法則でカーエス走りさせたあと、カーブ出口辺りで思いきり加速する。

その途中でついにリクと、そこに捕まっていたカーエスが振り飛ばされた。

「でえええええっっ！？」

しかし空中を飛んでいる時に折よくサソリの尾が傍に来たので、リクは慌ててそれを掴んだ。その事によりカーエスも運良く助かった。

反り返った尾はまるで木のようにそびえ立ち、関節部分が多いので背よりもずつと捕まりやすく、リクはホッと一息を付いた。

コーダの操るサソリ《シツカーリド》はリクたちが思っていたよりずっと早く彼らを北西区にある第四決闘場に運んできた。

目指す場所が見えてきたところでコーダがもう一度後ろを振り返って言った。

「一気に飛んで中に入りやす！　しっかり捕まってるんすよっ！」
「ちょ、ちょつと待てええ！」

それを聞いたリクたちの顔面が蒼白になる。

しかしもはやコーダに声は届かない。リクたちは覚悟を決め、しっかりとしがみついでその時を待った。

しかし、その時は来なかった。

いきなり前方から大規模な炎が襲い掛かり、コーダはそれを避けるために《シツカーリド》を急停止させた。

その反動で尾に捕まっていたリク達は宙に放り出され、砂の地面に落ちる。

「な、何が起こったんだア……？」

リクが顔をあげると、そこにはどこか見覚えのある、白髪まじりの髪を持った、小柄な初老の男が立っていた。彼は何故か満足そうな笑みを浮かべて倒れたリク達を見下ろしている。

何者かを思い出そうとしていると、リクの下の地面がもぞもぞと

動く。

「は、はよ退けエ……っ!?」

上に乗っていたリクを押し退けて顔を上げたカーエスの言葉の語尾は疑問に釣り上がる。リクとは違い、カーエスはこの男としっかりとした面識があった。

「い、イナス〓カラフ……!? 何でここに？」

「イナス〓カラフ? ああ、そうか」

リクは大会前日式典後、ジルヴァルトに目を合わせる前に彼を見た事があった。だから見覚えがあったのだ。

「“滅びの魔力”の重要性には魔導研究所側も気付いているようだからな、どうせ邪魔が入ると分かっていた。カルク〓ジーマンかマーシア〓ミスターシャが来るかと思っていたが、まさか先ず貴様らがくるとはな。これも縁というものか」と、イナスが口元に不敵な笑みを浮かべて言う。

二人はさっと立ち上がって、腰を低く構え、臨戦体勢をとった。憎々しげにカーエスが怒鳴る。

「この嘘つきジジイ! フィリーのどこにワレの血イが流れとんねん!」

「嘘つきはお互い様だ、小僧。貴様も知らないと嘘をついた」

イナスが冷静に言い返す。

一度だけとはいえ、面識のある者同士の挨拶が済んだところでリクが言った。

「イナスⅡカラフ、そこを退け。俺達はお前じゃなくて中に用があるんだよ」

「そういうわけにはいかん。我々は今、最重要任務の最中だ。邪魔をさせては困る。……どうせあの小娘を助けに来たのだから？ 安心しろ。あの小娘の魔力は我々にとって必要なものだ。放っておいても殺しはしない」

「殺さんだけやる？ おんなじ事や」

「何にしても、ここをタダで通す気はないらしいな……なら腕づくで通るまでだ」

リクが改めて戦闘体勢に入った時、横にいたカーエスが身を寄せ、リクにだけ聞こえる小声で言った。

「ここは俺が何とかする。あんたはコーダに何とかしてもらって中に入れ」

「え？」

「こいつらは一筋縄じゃいかん奴らや。二人掛かりで闘っても簡単にはカタ付けられへん。だったら手分けした方がええ」

カーエスの申し出は意外だったが的確だった。

確かにこのハツタリの利かない状況での優勝候補を倒した二人を前にしたこの自信。過信だと見ても相当手強いに違いない。

一刻一秒を争う今、手分けしてでもフィラレスの元に一人は行かねばならない。

しかしリクは先程の戦闘で覗かれたカーエスの気持ちを踏まえて言った。

「だったら俺がここに……」

「アホッ、妙な気イ使うな。俺はあんたに負けたんや。もう遠慮せ

んでええ。それに……」

そこでカーエスは言葉を切った。そして表情を少し曇らせる。意味深長な言葉の切り方に、リクが首を傾げた。

「それに？」

問われて、カーエスは意を決したように言葉を続けた。

「フィラレスが助けを待つとするとしたら、おそらく俺やない。お前や」

フィラレスは言葉が話せない分、根の素直な部分が行動に出やすい。乙女心などの言葉ににくい事は特に、だ。五年もの年月の間ずっとフィラレスを見ていたカーエスには彼女の心情がかなり正確に読み取れるようになってきていた。

そして認め難くはあったが、心の底で彼女の気持ちがかかっていだからこそ、ああしてリクに突っかかって戦闘を挑んだりしたのである。

「カーエス……」

「合図したらサソリに乗って行っただれや。後は心配せんでええ」
「でも……」

リクがさらに何か言おうとすると、カーエスはこれ以上口を挟ませない、と意思表示をするように魔導を開始した。

「《鷲掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせ！」

灼熱の炎がイナスを包む。

しかしイナスは炎を前にしても全く身じろぎはしない。
そしてたった一言唱えた。

「《散^{サン}》っ！」

そのたった一言でカーエスの放った魔法は雲散霧消する。
続けて詠唱する。

「《炎^{エン}》っ！」

同時にカーエスも防御魔法を詠唱する。

「ここに敷かれしは《水の陣》、熱気は決して入るべからず！」

カーエスの周りに青く光る円が描かれ、彼を襲う激しい炎を水が遮断した。

二つの魔法がぶつかり、カーエスは叫んだ。

「今やつ、行くんや！」

その言葉に弾けたようにリクが《シツカーリド》の上に飛び乗った。

「コーダ、頼む！」

「合点！ 舌嚙まないように気をつけて！」

コーダは返事をする、《シツカーリド》の背中に手を当てる。

「《シツカーリド》が足に宿れ《飛躍》の力！」

タイミングよく、《シツカーリド》は足を屈伸させ、魔法が発動すると同時にジャンプした。

すると、その巨体は空を舞い、あっという間に決闘場を越す高さまで跳躍すると八角形のバトルフィールドの中にその身を踊らせた。

未練に涙を浮かべながら砂に沈んで行くフィラレスを、ジルヴァルトは何を言うまでもなくジツと見つめていた。

彼は彼の属している組織から“滅びの魔力”の確保、つまりはその持ち主であるフィラレスの確保を目的としてこのファトルエルにやってきたわけだが、その目的に従うつもりも毛頭なかった。

普通に大会が進行していれば従ったかもしれない。

しかし目標の彼女が現れ、そして殺してくれと言う意思をその目に宿らせていた。

生きる意思の無い者を生かすつもりはなかった。

そして少女は完全に砂に沈んでしまった。

“滅びの魔力”ならギリギリになればあの封印魔法《魔縛りの影》も破れるかもしれないと身構えていたジルヴァルトだったが、それも杞憂に終わった。

と、思った時、彼に影が差した。

ジルヴァルトが大して驚きを見せずに上を見る。それと共に彼しかいなくなつたバトルフィールドに注がれていた観客の視線が上空の光を遮る物体に注がれた。

その先には逆光で黒く見えるが、明らかに大きなサソリのもと

思われる腹部と足が見えていた。そしてその巨体はあつという間にバトルフィールドに着地し、地響きと共に砂埃をあげる。

そこから降りてきた人物の一人にジルヴァルトは見覚えがあった。サソリに乗っていた、栗色の髪とエメラルドグリーン瞳を持つ青年はサソリから飛び下りるなり、周囲を見渡し、寸前に沈んでしまった少女の姿が確認出来ない事を認めるといきなりジルヴァルトの方に振り返り、睨み付けて言った。

「ファイリー……フィラレス＝ルクマースをどこにやった!？」

「答えさせてどうする気だ？」

「助け出すに決まってるだろ」

リクの答えを聞いて、ジルヴァルトはゆっくりと首を降る。

「その必要はない。……あの娘は元から死ぬ気で俺に挑んできた」
「なっ……!？」

その言葉にリクが目を見張らせる。

驚きと動揺を隠せないリクに対し、ジルヴァルトは更に続けて言った。

「制御が出来ないくらい大きな力を持つと、自分の意思とは裏腹に他人に被害を与える事が多い。おそらくあの娘はそれを何度も経験し、その都度罪の意識を溜め込んで来たのだろう。その罪の意識からあの娘は自分が死ねばもう人が傷付く事はないと考えた。

しかし自殺しようにも防御本能が働き、それに連動して“滅びの魔力”が発動する。だから自ら死ぬのもままならない。あの娘が死ぬ事ができるのはあの“滅びの魔力”の衣を貫く事ができる者のみ。その者としてあの娘が選んだのが俺だった。折角死ぬ事ができるのに、助け出すと言うのはそれを邪魔する事になる」

ジルヴァルトは淀みなく、そして抑揚もなく言った。その口調はまるでフィラレスの全てを知っているかのようだ。そんな絶対の響きを持つ神の信託のようなジルヴァルトの言葉に抗うようにリクは怒鳴り返した。

「それは違う！ フィリーは生きる意思がなかったんじゃない！ 死にたかったんじゃない、死ななきゃって思ってたんだ！ ホントはずっと生きていたんだよ！」

すると、ジルヴァルトはゆっくりと地面のある一点を指差して答えた。

「ならば呼び掛けてみる。娘は砂の下だ。沈んでしまったのはお前達に来る寸前、意思があればまだ助かる」

リクは数瞬、ジルヴァルトを睨み付けたままでいたが、やがて振り返りバトルフィールド全体に聞こえる大声で呼び掛けた。

「フィリーツ！ どこにいる！？ 聞こえてるなら、生きたいなら、応えてくれ！ 手を伸ばしてくれ！」

俺言っただろ！？ あきらめるなって、昨日言っただじゃないか！
なのにどうして死のうとするんだ！？ どうしてお前が死ななきゃならないんだ！？ お前は全然悪くない！ 死ぬ必要もないんだ！
お前の“滅びの魔力”なんてただの運命のいたずらだ！ だって生きてりゃ何とかなるって！ 死ぬことなんてないんだよ！

カルクもマーシアも！ カーエスも！ 俺も！ 誰も、お前に死んで欲しいなんて思っていないんだ！

死ぬな！ 生きるんだ！ フィリー！ 頼むから手を伸ばしてくれえっ！！！！」

生の世界の一步外側にあるのが死の世界、と言う訳ではない。そのどちらでもない領域というものがあるのだ。それは一本の道で“死出の道”と呼ばれている。その灰色の道以外は真っ暗で何も見えない。何の存在も感じられない。

フィラレスは今、その“死出の道”を死への世界に向かって真直ぐ歩いていた。

彼女は歩きながら時々後ろを振り返るが、その背後には誰の姿もない。

そして何の音もない。

少し孤独を感じたが、人間死ぬ時は孤独なものなのかもしれない。

しばらく進むと、死の世界が目前に感じた。

ここを一步踏み出すともう戻れない。

躊躇と言うほどのものではないが、フィラレスは一度立ち止まってもう一度、生の世界を振り返った。

無論振り返っても何が見える訳でもない。

フィラレスは前を向くと一步を踏み出そうと足を上げた。

その瞬間、何故か地響きを感じた。

彼女は反射的にもう一度、生の世界を振り返る。

人の声が微かに聞こえた。

何を言っているのかまでは分からなかったが、周りの音が無いだけにその声はどんな声か良く分かる。あの青年の声だ。

微かに彼女は口元を綻ばせた。姿を見る事が出来なかったが、声を聞く事が出来た。

幻聴かもしれない。それでも、嬉しかった。

これこそ未練が無くなると言う事なのかもしれない。そんな事を考え、フィラレスは深呼吸をし、フィラレスはこれまでとは違った比較的明るい心境でもう一度、死の世界に向き直った。

しかし一步は踏み出さなかった。

声がまた聞こえたからだ。

あの青年の声が、昨夜彼女を叱りつけた声が彼女の名を呼んでいる。

幻聴じゃない。

リク「エールが、フィラレス」ルクマースの名を呼んでいた。

どうして彼女が死ななければならないのだと問うた。

彼女は悪くない、だから死ぬ必要はないと言った。

彼女の魔力は運命のいたずらで、生きていれば何とかなると言った。

彼女の大切な人達、そして彼自身が彼女に死んで欲しくないのだと言った。

そして、死ぬな、と。

生きるんだ、と。

聞こえているなら、生きたいのなら手を伸ばして欲しいと言った。

聞こえている。

生きたい。

手を伸ばしたい。

聞こえてくるリクの言葉は、彼女にとってとても魅力的に感じた。そして、死に向かう彼女が一番聞きたかった言葉だ。

しかし、私が生き延びれば、また傷付く人々が出るのではないだろうか。

生きたいと思うのは私の我が儘になるのではないだろうか。

そんな疑問も彼女の心に浮かんだが、彼女はリクならこう言うに違いないと言った。

それがどうした、と。

お前が“滅びの魔力”をしつかりと操れるようになれば誰も傷付かない。お前の魔力だ、操れないはずがない、と。

そう思った時、彼女は生の世界へと手を伸ばしていた。

そして生の世界、砂の上に手が届いた感触があったすぐ後、彼女は自分が引っぱりだされるのを感じた。

聞こえるのは観客たちのどよめき。

そして見えるのは、会いたかったリク。エールの温かみの感じられる顔。

彼女は生の世界に還った瞬間、リクに抱き着いた。

引き上げた瞬間、フィラレスに抱き着かれたリクは思わぬ事態にひっくり返ってしまった。

「お、おい」と、リクが声を掛けようとする、彼女がすでに気を失ってしまっている事に気がついた。

リクは黙って、フィラレスの頭と顔の砂を軽く払ってやると彼女の身体を担ぎ上げた。

そして向き直るはジルヴァルトである。

「俺達、これから逃げるんだけど……邪魔はしてくれなよ」
「する理由がない」

ジルヴァルトがたった一言答えると、リクは安心した表情になる。

「一つ聞くが、お前の相棒はフィラレスを殺さない、と言ってたんだが、結局助けるつもりだったのか？」

「助けるつもりはなかった」

つまり、ジルヴァルトの目的はイナス等とは少し違っているらしい。

しばらくの沈黙が二人の間に流れた。

その沈黙を破ったのは、意外にもジルヴァルトだった。

「俺も一つ聞きたい事がある」

「何だ？」

「一昨日、お前は俺に殺されかけたはずだな。そして昨日は俺がシノン・タークスを殺したのを見て逃げた」

「あ、知ってた？」と、リクは苦笑して言った。

「それが今日は俺を相手にしている娘を助けに来た。つまり俺と闘う覚悟があったと言う事だ。……どういふ風の吹き回しだ？」

リクは少し考えた後、簡単に答えた。

「気付いたんだよ。俺はお前に勝つ事ができるってね」

そして少し間を置き、続ける。

「昨日、一昨日まで全く勝てる気がしなかったんだけどな。ま、ちよっとしたはずみってやつさ」

「……俺に……勝つだと？」

ジルヴァルトが少し眉を動かした。

リクが見た限り、彼が動揺を見せるのはこれが初めてだった。

「貴様、正気で言っているのか？」

「生憎、酒はほとんど飲めねーし、まだボケる歳でもない」

リクはしれっと答える。

そして、リクがはっと思いついたように、担いだフィラレスの左腕を持ち上げた。

「フィラレスは助かったけど、勝負はお前の勝ちだ」と、フィラレスの左腕にはめられていた腕輪を外して言った。

その言葉に反応するようなタイミングで腕輪が砂に還る。

その瞬間、鐘が鳴った。

ファトルエルの決闘大会の決勝を闘う二人が決定した事を知らせる鐘だった。

35 『あなたのためのおき』

どこで使おう、とっておき。
今使おうか。

しかし未来にもつと必要な事があるかもしれない。
ないかもしれない。

今使つて、後になって後悔するのは嫌だ。
今使わないで結局使わないのも勿体無い。

やっぱりやめよう、使うのは。

今は使わない。

未来でも使わない。

自分のためには使わない。

とっておこう、いつかのために。

とっておこう、誰かのために。

そして使おう、その時は勿体ぶらず。

いつか出会う大切な人。

あなたのためのおきだ。

「《炎^{エン}》っ！」

「ここに敷かれしは《水の陣》、熱気は決して入るべからず！」

イナス「カラフの短い言葉が放つ炎の威力は絶大だったが、そのカーエスの張った水でできた壁はそれをもろともせず、その防御力の程を見せつける。」

更にイナスは唱える。

「《氷》^氷っ！」

「ここに敷かれしは《炎の陣》、冷気は決して入るべからず！」

今度放たれたものはいくつもの大きな氷塊だったが、それもカーエスが寸前に唱えた魔法《炎の陣》の形作る炎の壁に敢え無く融解してしまう。

「《雷》^{ライ}っ！」

「ここに敷かれしは《土の陣》、電気は決して入るべからず！」

三つ目は雷だ。これもまた、カーエスがギリギリで発動させた魔法によって構成される土でできた壁によって遮断された。

イナスの度重なる攻撃をその都度防ぎ、直前のリクとの対戦で受けた傷の他は全く無傷で済んでいるカーエスだったが、戦況はあまり思わしくなかった。

レベル6、7はあろうかという規模の大きな魔法をイナスはたった一音発音するだけで発動させる事ができるのである。

速い、そして強い。

カーエスが眼鏡を外して“魔導眼”を使用し、魔導の先読みを持って相手の魔法を読み取っているからこそ、彼の唱える防御魔法は間に合うのだ。

同じタイミングで相手の魔法を圧倒する魔法が詠唱できるなら良いのだが、彼が同じタイミングで唱えられる魔法はレベル4が精々だ。話にならない。

とにかく防戦一方の戦況である。

「“魔導眼”か……。まさか生きてお目にかかれるとは思っていない

かったよ」

「……知つとつたか」

「伊達に魔導士はやつとらん。しかし、いかな“魔導眼”と言えど、我が魔導を止める事は不可能。盲目とそう変わらん。精々、研究のためにその目玉くり抜いて持ち帰ってくれわ！ 《炎》！ 《氷》！ 《雷》！ 《水》！」

立続けに襲ってくるのは熱く激しい炎、冷たく固い氷塊、鋭く轟く雷、全てを洗い流すかのような水流だ。とても防ぎ切れそうにな

い。
しかし迷う時間さえなく、カーエスは舌打ちをして唱える。

「防げずも、全ての衝撃を《和らげる障壁》！」

淡い光がカーエスを包む。

そこにイナスが放った魔法達の応酬がやってくる。

カーエスを包んだ障壁がその威力を和らげるも、あっさりとカーエスを傷付け、吹き飛ばした。

「くっ……！」

少しばかりの呻きは漏らすもすぐに立ち上がり体勢を立て直す。

《和らげる障壁》は魔法を完全に防ぐ事はないものの、確実にその威力を削ぎ取る事のできる魔法だ。使う時から多少のダメージは覚悟の上だ。

しかし速い。

このままの調子でやられ続ければ間違いなくやられる。イナスの実力は、もはや魔導士達の最高峰が集うファトルエルの大会のレベルをも圧倒している。

(なんであんなに速いんや……?)

イナスの魔導の速さは目に見えて異常だ。

魔導を行う際に詠唱する言葉を呪文と言う。あれは自分の魔導を助ける補助で、同じように魔力を動かす事が出来れば、特に唱える必要はない。しかしいかな上級の魔導士と言えども、これを行える魔導士はほとんどいない。

いるにしろ、そうして発動した魔法は実用的なレベルに達しないほど発動が遅い。結局呪文を唱えて魔導を行うほうが速く確実なのである。

しかしイナスは何も唱えていないというわけでは無いが、たった一音の呪文であれだけ大規模な魔法をあれだけ速く発動させている呪文ではない。呪文ではない何か、あの魔導を補助しているのだ。

あの言葉はその何かを呼び覚ますためのキーワードなのかもしれない。

「もう一丁行くぞ！ 《炎》！ 《氷》！ 《雷》！ 《水》！」

今度もカーエスは《和らげる障壁》を唱え、幾らか負傷しながらもなんとか危機を乗り越える。

そして体勢をもう一度立て直した時、偶然自分に向けられていたイナスの右手の掌を見た時、彼の疑問は氷解した。

「……………烙印魔法……………!?!」

「気付きおつたか……………その通りだ！」

イナスが着物の上着の裾を掴み上げて腕を振り上げる。

そしてイナスの肌が露になった。

カーエスはそれを見て思わず顔をしかめた。

そのイナスの肌には所狭しとばかりに痛々しく青黒い色の刺青が施されていたのだから。

ほとんど元のままの肌は残っておらず、遠目に見ると、イナスの肌の元の色がこの青黒い色であると勘違いしかねないほどだ。カーエスが先程見たのは右手の掌にあった刺青である。

「私が短く唱えればこの刺青が発動し、私の魔力を刻まれたプログラム通りに織り上げる仕組みだ……呪文を唱えるより遙かに確実に速い」

「……痛うなかつたんか？」

カーエスが驚愕に満ちた眼差しで刺青を凝視して訪ねる。

そんなカーエスの反応を楽しむかのような笑みを浮かべ、イナスは答えた。

「ああ、痛かつたね。これは全部一度に彫られたものだ。あの時は本当に死にそうになった。しかしその代償の価値はあったというわけだ」

「何でそんなにまでして……」

「強くなりたかつたのか、か？ 愚かしい質問だな。魔導をより完璧により迅速に使いこなせるようになる事、それは即ちより、より多くの目的をより簡単に達成できるようになる事を指す」

当然だ、決まっている、と一般常識を説明するかのよう言い切るイナスだったが、対するカーエスはその精神をいまいちよく理解出来ない。そこまでして果たさなければならぬ目的があるのだろうか。

大体“烙印魔法”は今の世界には存在してはならないものだ。

昔は戦争のため、強い戦士を手っ取り早く得るのに盛んに用いられたそうだが、あまりに安易に魔法が使えてしまう。

魔法は本来、宇宙の基盤を揺るがしかねないほどの可能性を持つた力であるため、そのようにあまりに気安く使われてしまうと、魔法の重要性が忘れられてしまう恐れがある。

そういつた理由で、ある戦争が終わった後、魔導研究所はその事をよく説明した上で“烙印魔法”の使用を禁止するよう各国に要請し、これを機会に様々な魔法の危険性を考慮した、“全世界による魔法についての使用制限条約”が国際会議で採択されたのだ。

禁じられた魔法を使ってまで遂げなければならない目的。つまり彼らはどんな事をしてでもその目的とやらを達成しなくてはならないらしい。

その目的までの行程の中にフィラレスの誘拐がある。

(何やワケ分からんけど……コイツら本気でヤバいで……)

止めなければ大変な事になる。そう、カーエスは感じた。

「さて、冥土の土産はここまでだ。タネがバレたところで決めさせてもらおう」

そう言つて、イナスは攻撃を再開した。《炎》、《氷》、《雷》、《水》のいつもの連続攻撃、カーエスがそれを《和らげる障壁》である程度防ぎ、体勢を崩す。そこに、イナスは更に踏み込んできた。

「《速^{ソク}》ッ！ 《力^{リキ}》ッ！」

手っ取り早いキーワードを口にすると、露になった刺青が発光する。そしてイナスのスピードが増し、筋力が飛躍的に上がる。

強化した身体で、イナスはカーエスの鳩尾に拳を叩き込んだ。

「ぐ……あつ！」と、カーエスは息が詰まり、声にならない呻きをあげる。

「ククク、哀れだが、これで終わりだ！」と、そんなカーエスにイナスは嗜虐的な笑みを浮かべ、更に唱えた。「《爆^{バク}》っ！」

鳩尾に触れたままのイナスの拳から光が発生し、それはどんどん広がって爆発した。

打ち消す事も、防ぐ事も出来なかったカーエスは、モロにダメーヂを受け、もんどりうって倒れる。

倒れたカーエスを満足げな顔で眺めていたイナスだったが、次の瞬間その表情は凍り付いた。

「なっ……！？」

その視線の先で、カーエスが立ち上がっていた。

衣服はぼろぼろ、その下に覗かれる肌は傷だらけだ。そしてその傷は尋常ではないほどに深い。息も荒いのを乗り越して、絶え絶えと言った感じだ。

まさに瀕死。立っていられる筈はない。

そんなカーエスの口元に微かな笑みが浮かべられた。

それを見たイナスは一瞬悪寒が背中を走った。

「ワレ、冥土の土産や言うたのう……？」

「なっ……！？ どっ……！？」

困惑を見せるイナス。

その笑みは更に広がる。

「アホやな…冥土の土産は大抵無駄になるって相場が決まっとるのに」

そう言っただけカーエスは構えた。そして少し落ち着きを取り戻したイナスを見据える。

「冗談はさておき、そろそろ決着つけよか……。俺か、ワレか」「馬鹿を言っくな！ お前に勝ち目はない！」

不可解なものを振り払うようにイナスが怒鳴る。

カーエルはそれをあっさりと否定して言った。

どことなく、その蒼い瞳は光を発しているように見える。

「あるんや。まだ俺にはとっておきがある。ワレなんぞ問題にならんくらいの凄い魔法が。」

せやけど、ごつつ時間掛かんねん。スキ見てやられへんくらいな。

せやから、この魔導やっとなる間は無防備でおらなあかんちゅうこつ

ちや。その間、好きに攻撃してええで。俺はそれに耐えてみせる。

耐えて、この魔法を完成させてみせたる。

この魔法が完成したら俺の勝ち。その前に俺が倒れたらワレの勝ちや」

そのカーエスの言動のあまりの不可解さに、イナスは眉を歪めた。

（私が問題にならない？ 今まで全く歯が立たなかつたくせに？

とっておき？ 好きに攻撃させて耐えられたら勝ち？）

いくつもの疑問符が彼の頭の中を駆け巡る。

しかしカーエスはそんなイナスの反応を全く気にせず、始めた。

「行くでっ！ 万物の流れを司る時よ！ 我が時の流れを隔絶せよ！」

唱え始めたカーエスに、イナスは取り敢えず攻撃を始めた。

「《炎》！ 《氷》！ 《雷》！ 《水》！」

炎が、氷塊が、雷が、水流がカーエスを襲ったが、カーエスは何ら防御行動をとらない。

それらがあつという間にカーエスを飲み込み、吹き飛ばす。

しかし、カーエスはすぐに立ち上がって続けた。

「隔絶された我が時よ！ 我が魔力の導きに従え！」

さらにイナスは《速》、《力》と、繋げ、今度は顎にその拳を叩き込む。

カーエスは少し下を噛んだが、倒れる事だけは堪えた。

(まだや、まだいける……！ もし、ここで俺が倒れたら……！)

フィラレスはどうなるだろう。おそらく、イナスはいち早く決闘場の中に飛び込み、リクやコーダと対峙しているジルヴァルトの元に助太刀に行くだろう。

ジルヴァルトもイナスと同じか、それ以上の強さは持っていると考えた方がいい。すると、一人でも手こずるこの状況、二人揃うと手が付けられなくなる。そうになると、リクは敗北し、フィラレスはイナス達の目的通りに連れ去られる。

連れ去られた後、何をされるだろうか。

なりふり構わない連中の事である。あまりいい待遇はされないだろう。

このとっておきは絶対に完成させなければならぬ。
これはフィラレスのためのとっておきなのだから。

(止めなあかん！ こいつは俺が止めなあかんのや……！)

カーエスは続けた。

「ここに我の流れし時あり、その時の流れは《三倍速》！」

カーエスが唱え切ると同時にイナスが拳をカーエスの胸に当てる。

「止めだ！ 《爆》！」

拳が光を放ち、爆発する。

しかし、カーエスは吹き飛ばなかった。

爆発した時にはその場にはもう、カーエスはいなかったからだ。

「……！？」

いきなり目の前から消えられ、眼を見張るイナス。

しばらく辺りを見回し、カーエスがいない事を確認した彼は、少し恐怖におびえた眼で恐る恐る自分の背後を覗いた。

果たしてカーエスはそこにいた。

「俺の、勝ちやな」

イナスが感嘆の声をあげるより先にカーエスが動いた。

「《……》……！！」

あまりにも早口すぎて何を言っているのかイナスには聞き取れなかった。しかし、その後彼を包んだ炎は明らかに《驚掴む炎》だった。

イナスは《散》を唱えようとしたがもう間に合わなかった。あっけなくイナスは初ダメージを負う。

しかし、《驚掴む炎》によるダメージよりも、全く何が起きているのか分からない事による精神的ダメージは大きい。何しろ“烙印魔法”まで使った自分より速く魔法を発動させたのだから。

種明かしをすると、先ず“魔導眼”の秘密から話さなければならぬ。

“魔導眼”は、持っているだけで魔力を肉眼で確認できる事は既に述べた。ただし、これはただ持っていただけ場合の話である。

つまり“魔導眼”はまだ潜在能力があり、それを引き出して使う事によってあらゆるものを可視化できるのである。風を見る事はもちろん、温度や、湿度、匂いまでもその気になれば肉眼で見える事ができる。

そして、時の流れさえも。

時の流れを見る事が出来れば、技量によって限度はあるが、魔力を利用する事によりある程度、操作する事も可能になる。例えば自分の中の時の流れを速めたり、遅くしたり、だ。

この場合、カーエスは“魔導眼”で時を見て魔法で自分の中の時の流れを速め、身体の速さ、口の速さ、魔導の速さも全て速くしたのである。

ただし、これは客観的に見た場合の表現である。

カーエス自身は速くなったと感じる事はない。逆に周りが遅く見えるのだ。

「……………《…》…！」

いきなりイナスの身体が空中に飛び出した。《打ち上げ》だ。

「……………《…》…！」

今度はカーエスがそれを追って《飛躍》で空中に飛び出す。カーエスは打ち上げられ、かなりの速度で上昇するイナスを軽く追い抜かし、その先で止まると、後から上がってくるイナスに向けて掌を差し出す。

「……………、……………、……………！……………《…》…！」

その掌の先に異常な速さで魔力が凝縮し固まって行く。そしてそれを押し出すようにして放出した。その魔力がイナスに当たると、イナスは何かに力強く突き飛ばされたかのように下に向かって降下して行く。《ぶちかまし》だ。

そしてカーエスも降下しながらイナスが地面に激突するタイミングをはかり、そして唱えた。

「……………！……………《…》…！」

すると大地がアッパーカットでもするかのように鋭く速く隆起し、墜落してきたイナスをもろに突き上げる。最後の止めは《大地の拳》だ。

イナスはひとたまりもなく吹っ飛ばされてそのままぐったり倒れ、動かなくなった。

かろうじて生きてはいるようで時々ピクピクと手足を動かしている。

カーエスも無事に着陸すると、その場に大の字になって倒れた。時の流れを操ると、カーエスは彼の持つほとんどの力を根こそぎ持って行かれる。つまり、後のない魔法なのだ。だからこそのおきである。リク戦で使わなかったのはあの後フィラレスを探し、救う事を計算に入れていたからだ。

彼の思い描く形ではなかったが、間接的に彼女を救うために、カーエスはとっておいた力を全て使った。

「ふう……疲れたア……」

彼の頭上に広がる空と同じくらい清々しい笑顔で、彼は言った。そんな彼を祝福するように、大きな鐘の音がその空に鳴り響いた。

36 『オキナの声と共に』

私は一人だが悲しくはない。

私には頼るものがないが心細くはない。

私に聞こえる声はないが寂しくはない。

私の手には一通の手紙が握られている。

あなたからの励ましの言葉がまつた手紙が握られている。

あなたはいつも傍にいる。

あなたはいつも私を支えてくれている。

あなたはいつも私に話し掛けてくれている。

あなたは今ここにはいないが。

あなたは確かに私のどこかに存在している。

暗闇の中を一塊の光が規則的に揺れながら進んでいた。

その光の中心には球状の発光体があり、その光に照らされて姿を現しているのは灰色の目と髪を持つ、筋肉質の男・ファルガール・カーンが歩いていていた。

片手には食料やら寝袋やらを詰めた荷物を持ち、もう片方には真新しいノートを手にはしている。

Dr・オキナ「バトレアスによって導かれ、大決闘場からこの「ラスファクト」への道に入って既に二日間が経過している。

目の前にある自分が魔法で生み出した発光体きり光源はない。その世界は見事なまでの闇で、発光体が照らし出す範囲外には世界が

無いのではないかという気すら起こる。

彼が歩くのは大抵狭い回廊だった。大決闘場と同じで綺麗に整備されている。

大体、同じ景色が続くのだが、少し妙なところがあらわれると、ファルガールはすぐさまオキナに貰ったノートを開く。

今彼が前にしているのは二つに別れたY字路だった。

さて、どちらに進むべきかとノートを見る。

『そのまま進んで行くと、Y字路がある。右か左かと考えるところだが、右に行けば行き止まり。左に行けば地下滝のある大空洞に行き着くだけだ。』

正解は真ん中だ。別れている辺りに一つだけ傷の付いた床板がある。その上に立ち、“ルケ・ヌリス・エマノメ”と唱える』

ファルガールが注意深く床板を見ると、そこに目立たないが、よくみるとやけに傷が多い床板が見付かった。

そしてその上に乗って書いてある通りの呪文を口にすると、床板が光りファルガールは一瞬にして全く別の場所に移動した。

後ろを振り向くと、行き止まりだったが、見覚えのある角度で端の幅が狭まっている。

移動する時にも何となく感じたが、どうも壁をすり抜けたようだ。

(…………相変わらず、素直じゃねエ仕掛けだな)

同時にそんな素直じゃない仕掛けを良く調べたものだ、とも思う。二日経ち、数えきれないくらいこのノートの世話になった今も驚かされっぱなしだ。

始め、ファルガールとしては“攻略本”を読んでズルをしているようで何となく釈然としなかったが、今はその考えは完全に改まっ

ていた。このノート無しでは何十年掛かっても“ラスファクト”には辿り着けない。

このノートは一貫してファルガールに話し掛けるような文体で書かれており、ファルガールはこの暗闇の迷宮での孤独感をあまり感じないでいられた。

もちろん最初、ファルガールは一緒に行ってくれるように頼んではみたのだが、オキナはそれを断った。

曰く「新しい仕事があるのだよ」との事だ。

新しい仕事があるのならばしょうが無いとファルガールは諦めたが、このノートのお陰で傍にはいつもオキナの存在を感じる事が出来た。

また回廊をしばらく歩いて行くと、少し広くなった小部屋に出た。例によってノートを開いてみる。

『そこは単なる休憩所で、何の仕掛けも無い。丁度いいから食事でもとっておけ。この先に体力のいる仕掛けが待っている』

驚いた事に、オキナのノートには休憩や食事をとるべき場所も事細かに記してあった。光の無い生活で彼の生活基準を決めているのは実際の一日とは少しずれのある体内時計でも、腹時計でも無く、もっぱらオキナのノートだった。

ファルガールはその場に座り込み、用意してきた食料である、パンに干し肉、干しぶどうを出す。

カップに水をいれて魔法で沸騰させ、何やらねじれたヒモのようなものを入れる。それにしみ込んだものがお湯の中に広がってスープができる寸法だ。ヒモのようなものは言わば麺類で、食べる事ができる。

食事の片手間、ファルガールはノートに目を通した。

『これが最後の休憩だ。つまり、今日中に君は“ラスファクト”を目にする事ができる。それをどうするかは分からないが、どうしようとは私は関知しない。好きにするがいい。だが、君なら誰よりも有効に使ってくれるのではないかと私は思う。

君はこのノートに何度も頼り、良く調べたものだと言った事だろうと思う。全て私の研究の賜物、と言いたいところだが、何も驚く事ではない。

あの入り口を見付けたのは確かに私の成果だった。しかし、その入り口に入った所で私は一つの古文書を見付けた。私はその古文書を解読し、実際に合っているのかある程度確かめた上でこのノートを書き、君に託しただけなのだよ。

私が古文書の正当性を確かめるために実際に来たのはここまでで、この先に歩をすすめるのは君が初めてになる。このノートも間違っているところはでてくるかもしれないが、実際に来た時もほとんど修正せずに済んだので、先ず間違いはあるまい』

こんな調子でノートには休憩を入れるように指示した際には自分の研究に関する思いやエピソード等が書かれていた。

お陰で休憩の間、ファルガールは退屈をする事がなかった。

しかしオキナは見付けた古文書を解読しただけだ、と他の人にもできるような調子で言うが、そもそも入り口を見つける事ができたのはオキナだけであり、それこそ執念の賜物である。そして古文書の解読も難航を極めたに違いなかった。

やはり“ラスファクト”を見つければ出てくるのはオキナでなければ出来ない事だっただろう。

食事を済ませ、一息付いた所でファルガールは出発した。

オキナによるとここからは休憩せずに“ラスファクト”に行き着けると言うのだ。イヤでも気合いが入る。

『その部屋を出てしばらく行くと、地下川が横切っている場所に出る』

果たしてオキナの書いている通りに川が見えた。そこに至る間でもだんだんと水の流れる音が響いていた。

『その川の上流に鉄の輪がある。それを引っ張れ。ちなみに鉄の輪は水の中にある。それに上流に行くには水の中を通るしかない。しかも途中で流されると戻れる可能性は低いので、そのつもりで』

(……体力のいる試練とはコレの事か)

今までは人間の頭の柔らかさを試すような知的な仕掛けが多かったのだが、暗闇を歩き続け、体力的にも精神的にも参ってこるところを見計らったように体力のいる仕掛けが来るとは。

しかも、地下水は大抵冷たい。

ファルガールは魔法で荷物を風船のように浮かせた。そして、ノートも水に濡れないようにその荷物の中に入れる。そして、ノ

そして、意を決すると、ざぶんと川の中に飛び込んだ。

川は流れが急だったが深さは腰の辺りまでだった。時々流れに足をとられたり、水底で足を滑らせたりして危ない場面はあったがどうにか流れに逆らって上って行く。

しばらく歩いて行くと、流れが滝になっていた。

良く見るとその流れの中に大きな鉄の輪が付いていた。

躊躇せずファルガールはその中に手を突っ込み、輪を引く。

「ふんっ……おらっ……」

しかしなかなか輪が引けない。
何度も根気良く試したが、鉄の輪はびくともしなかった。

「このっ……くそっ……はあはあ、……ぐわっ!？」

ファルガールの頭の上に何か落ちてきた。結構なスピードもあったので流石のファルガルも昏倒し、少し流されてしまった。なんとか立ち上がりまだ頭の上にあったそれを引っ掴んで見ると手桶だった。おそらく井戸に吊るされていたのが流されてしまったのだらう。

しかしこの時点でファルガールの理性は切れていた。

「手こずらせやがって……この俺様の手に掛ければこんなモン!」
と、言つて彼は《一時の怪力》を唱え、思いきり引つ張つた。

果たして、鉄の輪は中に繋がっていた鎖とともに引かれた。

すると、川の両側にあつた扉が同時に開かれる。

右側にはいつも通りの通路が。

左側にはたくさんのクリーチャー達が。

「え?」と、ファルガルは目を丸くしてノートを急いで取り出す。

『なお、鉄の輪を引く時には力加減に気をつけるように。引きすぎても通路は開けるが、ついでにクリーチャー達を閉じ込めてある扉も開いてしまう』

「そういう事はもっと先に書いておけエ……ッ!」

ファルガールのそんな声とともに、クリーチャー達が目を光らせた。

しかしかにかに“大いなる魔法”の生み出す超自然生物・クリーチャーといえどもファルガールの手にかかれれば赤子も同然である。

数分後にはクリーチャーの死体の山が築かれていた。

しかし、クリーチャーは後から後から増えて行く。

キリがないと判断したファルガールはその場から逃げ出した。

びっしょり濡れてしまった服で走るのはキツかった。重いし、纏わり付いてくるのだ。クリーチャー達を振り切った時にはファルガールはかなり体力を消耗してしまっていた。

しかし、休んでなどいられない。

ファルガールはノートを開いた。

『さて、クリーチャー達を振り切ったら』

「……この野郎、クリーチャーを起こす方を前提にしてやがる」と、ファルガールは悪態をついた。当たっているだけに余計に腹が立つ。

『さて、クリーチャー達を振り切ったら残る仕掛けは後一つだ。その通路は進んで行くに従ってだんだん幅と高さが大きくなって行く。その先に大きな扉があるはずだ』

オキナの書く通りに廊下はどんどん広く高くなって行きその先に大きな扉が見えた。

『その扉は一日目に手に入れた鍵で開く事ができる』

ファルガールはポケットに入っている鍵を取り出した。迷宮の大部分最初のほうで手に入れたものだ。

(まさかこんなところで使う事になるとはな)

手に入れ損ねた場合を考えるとゾツとする。

扉を開けて中に入ると、そこは広い部屋になっており、向かう壁にはもう一つ同じ大きさの扉があった。

部屋の真ん中には小さな鍵が置かれていた。

鍵は青、黄、赤の三つあった。

『三つある鍵の内、どれかを選び、向かいにある扉の鍵を開ける。選んだ鍵によっておそらく向こう側が変わる仕組みだろう。鍵のおいてあるテーブルと、鍵に付いているプレートを見てみる』

ファルガールはテーブルの傍に言った。

テーブルには何か意味の分からない文字が刻まれている。

次にファルガールは鍵を一つ取り上げた。

鍵にはキーホルダーが付いており、そのプレートにおそらくテーブルのものと同じであろう文字が書かれている。

『テーブルの文字は「汝の望みは何か」と書かれている。対する鍵のほうは青が「操る事」、黄色が「知る事」、赤が「壊す事」となる。

実はこの選択肢に関しては古文書には何も書かれていなかった。よって自分で考えるしかないわけだが、実はこの部屋に入る時に潜った扉の鍵にもプレートが付いている。

このプレートの意味は「生む事」。今までの考え方からすると、この鍵が一番適当なのかもしれない。

だが私はもう一つ選択肢があると思う。

そして私なりの解答がそれだ。

大決闘場の入り口を見つけるために、そして古文書を解読する際にいろいろな文献を私は読みあさった。その際に気が付いたのだが、

古文書の時代においては“無欲”が至上の美德とされていたらしい。“無欲”、即ち“何も望まない事”。つまり“どの鍵も選ばない”ことが正解。おそらくその扉には鍵など掛かってはいないだろう。あくまでもこれは私なりの見解なので、保証は出来ない。よってどの選択肢を選ぶかは君に任せる。

そして君の判断が正しかった時、おそらく君はその目に見る事ができるだろう』

ファルガールはそこまで読むと、先程掴んだ鍵をテーブルの上に置き、どの鍵も持たずに扉に歩み寄った。

そして躊躇せずに開けた。

その向こうに広がる景観にファルガールは口元に笑みを浮かべた。ファルガールはノートを開き、続きの文章を読んで言った。

「あんたの言った通りだ」

そこにはこう書かれていた。

『そして君の判断が正しかった時、おそらく君はその目に見る事ができるだろう。』

ファトルエルの“ラスファクト” 《グインニール》を』

37 『不覚』

強さは手に入れるものではない。

どこから手に入れた強さはあなたのものではない。

そして人に自慢できるものでもない。

強さは努力から生まれるものである。

その強さは努力をしたあなたのものだ。

しかし強さは決して必要なものではない。

オキナのノートの語る通り、ファトルエルの“ラスファクト”《グインニール》はそこにあった。

それは自ら青い光を発しており部屋を幻想的に照らし出していた。青く透き通った鉱石のようだが、人工的な手を加えられたかのようには、綺麗に横たわった十字の形をしている。

その全体からは止めどなく、透明な清水が湧き出ており、湧いた水は、床に掘られているいくつかの溝を通って外に流れ出て行っている。ここからファトルエルの街に流れ、ファトルエルの民の喉をうるおしているのだ。

ファルガールはいささか放心した状態のまま、吸い付いて行くように《グインニール》の方に足を進めた。

傍に寄って見上げる。

《グインニール》は浮いており、そしてとても大きかった。

それからは水が湧いて床に落ちて行くわけだが、滝という感じではない、水の柱、が適当な表現だろうか。一見動いていないようで、手を差し伸べると流れている事が分かる。

何という不思議なものだろう。

何という神秘的なものだろう。

オキナは“ラスファクト”の事を星の産物だといった。

いまいちピンと来ていなかったのだが、実際見てみるとまさにそれだ。

『《グインニール》』は知つての通りこの街の水源だ。しかし、それが水を生み出す原理は全くの謎だ。それが分かれば君は全世界の学者達を出し抜き、その仕事を奪い取ってしまう事になるだろうね。

“ラスファクト”の謎は最もポピュラーで最も大きな謎なのだよ。

君は“ラスファクト”について知り、“大いなる魔法”に対抗したいといっていたね。これはそのためのアドバースだと考えて欲しい

私の持っている古文書を書いた人は、メカニズムを知り尽くしたわけではないが、少なくとも“ラスファクト”がどんなものであり、どう扱うのかを知っていたようだ。

君もこの先、“ラスファクト”の事を調べようと思うなら、古代人の事から調べた方がいいかもしれない。

私の古文書にもいくつか“ラスファクト”について記述があった。記述といっても注意書きのようなものだったがね、最初に言った“ラスファクト”に魔力を触れさせてはいけないというのもその一つだ。

他には水を止めたい時には「レマ・トズミシ」、持ち運びができるように小さくしたければ「レナク・サイチ」と唱えかければいい。ただし、実際にやるな。この水を止めると、地盤を支える水脈がなくなる事でこのファトルエルの街は崩壊してしまう。

もともとそうなるように作っていたらしい。ファトルエルの主であつた者が街を奪われた時、敵に使わせようとしたのだろうね。

他の“ラスファクト”はともかく、この《グインニール》に関しては少なくとも人が利用していたものだったようだ。ただ、この古人達も、この“ラスファクト”がどこからきたものかは分からなかったらしいがね。

ひよつとすると“ラスファクト”は一つ一つが何かの源なのかもしれない。例のヴァクス山の“ラスファクト”も溶岩の源だったと考えれば説明はつく。

万物の源を全て辿ればいつも“ラスファクト”に行き着くのではないだろうかと思うのだよ。そして、その“ラスファクト”自体の源。それが“大いなる魔法”の唱え手なのではないだろうか。

全ては私の憶測で想像だ。知りたいと思うが、既に時間はない。

私は君に全てを託したこの時点で全ての研究を打ち切りたいと思う。

どうか止めないでくれ。私はもう疲れたのだよ。手がかりのあまりに少ないものを探して回るの。

……最後に私の無二の友である君に聞いて欲しい事がある』

「……オキナ……」

その先を読み、呟いたファルガールは背後に人の気配を感じ取った。

ノートを閉じて後ろを振り向く。

「先客がいる事は知ってたが、まさか貴様とはなア……、ファルガール」

「……ハークーン」ネフラ!？」

ファルガールはその男を知っていた。

十五年前のファトルエルの決闘大会三日目の夕方、ファルガールが同じく参加者であった彼を倒した時、決勝の二人が決まった事を知らせる鐘がファトルエルに鳴り響いたのだった。

「何故ここに!？」

「“ラスファクト”を頂きに來たに決まってるだろう?」

「そうじゃねエ! どうやってここに入った!？」

この地下迷宮への入り口はオキナとファルガールしか知らない。

よしんば偶然と奇跡が重なって見つけられたとしても、地下迷宮の進み方はオキナの持っている古文書かノートを見るしかないはずだ。

ハークーンは狂暴性に満ちた笑みをファルガールに向けた。

「くつくつく……分からんわけじゃあるまい?」

そんなハークーンにファルガールは不快感を表に見せる。

だが、その表情すら、ハークーンは愉快でたまらない様子だ。

ハークーンは不敵な笑みを浮かべながら身構えた。

「さあ、さっさと始めようぜ。ここは闘いの聖地。何事も闘って決めなきゃなア」

「お前、正気か? 十五年前、俺と闘ってどうなったか忘れたわけじゃねエだろ?」

十五年前、ファルガールは自信たっぷりに挑んできたハークーンをたったの一撃で楽々と破ったのである。

たしかにあの時から十五年経っているが、十五年であの時の実力の差は埋めるのはさすがに難しいのではないだろうか。

確かに十年前のリクは十五年前のハークーンよりずっと弱かった。

そして今はファルガールにもひけをとらないほど強いだろう。しかしそれはリクが成長期にあったからで、十五年前の時点でハークーンは既に完成されてしまっていた。

「それを聞くのはこいつを喰らってからにしろ！ 《炎》！」

短い言葉と共に激しく燃え盛る炎がファルガールを襲う。

ファルガールはそれに驚きつつも、冷静にそれを横っ跳びで避け、すかさず魔法を詠唱する。

ハークーンも負けずに続けて唱えた。

「《雷》っ！」

「その槍穂貫くは天地！ その光が意味するは天の裁き！ その先からは轟く光がほとばしり、全ての罪を討ち滅ぼす！ 稲光と共に現れよ！ 稲妻纏いし紫電の矛《ヴァンジュニル》！」

魔法を詠唱した後、ファルガールは手を振り上げた、そこにどこからか稲妻が落ち、閃光が辺りを包む。彼を襲ったハークーンの稲妻は完全に打ち消されていた。

そして光が収まった時、ファルガールの手には一本の長い槍が握られていた。

その槍はファルガールの身長のご二倍くらいで、その三分の一を占める長い槍穂は細長く二叉に別れていた。

その全体にはバチバチと紫電が纏われ、二叉に別れた槍穂の間には小さな稲妻の光球が浮かんでいる。

自然の力を武器の形にして使用するリクとファルガールの流派の魔法の完成型、魔法武器召還。

ファルガールが手にしたのは雷を操る矛《ヴァンジュニル》だった。

構わず、ハークーンは続けた。

「《水》っ！ 《氷》っ！」

襲いくる水流と氷塊をファルガールは手に持った《ヴァンジュニル》を一閃させるだけで振り払ってしまった。

その様子を見てハークーンは嬉しそうに笑った。

「待つてたぜ、十五年前の優勝者、ファルガールカーンの十八番！」

「“烙印魔法”か……どこで手に入れたのかは知らんがそれだけじゃ俺は倒せねえぞ」

「分かってる……だがこれならどうだ？」

ハークーンがそう言って取り出したのは青い液体が入った小ビンだった。そのコルクを開けて中を飲み干すと、小ビンは床に放り出された。

暫くするとハークーンの身体に変化が起きた。

皮膚が赤く変色し、筋肉が盛り上がって上半身の服がはち切れる。やはり、彼の身体にも所狭しと刺青が彫られている。

そんな身体からは魔力が蒸気のように“魔導眼”を使わずとも目に見える形となって溢れ出す。

得意そうな笑みを浮かべ、ハークーンは言った。

「行くぜ」

そしてハークーンの姿が消える。

と、ファルガールの背後から姿を現し、唱えた。

「《爆炎》っ！」

先程とは比べ物にならないくらい規模が大きく、激しい炎がファルガールを包む。

ハークーンは一瞬でファルガールの左側に回った。

「《雷電》っ！」

ファルガールの頭上から雷が落ちる。
つぎにハークーンが現れたのは右側である。

「《濁流》っ！」

ハークーンの目前に大量の水が生まれ、ファルガールに襲い掛かる。

そしてハークーンは笑った。

「クハハハ！ 見たか！ この俺の力を！ “烙印魔法”に加え、“ソーマ”で魔力を増強した俺の力を！ 速い！ 強い！」

ハークーンが身体に施した刺青はイナスとは少し違うものだった。二文字の呪文を用い、その威力は格段に一文字のそれとは違う。ただし、二文字に増えると、消費する魔力がケタ違いに多い。普通に使うと二、三発放つだけですぐに魔力が底をつくのだ。

それを補う為にハークーンが服用したのが、魔力を凝縮した液体“ソーマ”である。

“ソーマ”を飲めば先ず魔力が尽きる心配はなくなるし、魔力の質が重くなり、魔法の威力が格段にアップする。

要するに魔導士がこれを飲めば段違いの力を得る事ができるのだ。

だが、はつきり言って液体になるまで凝縮した魔力の量とは到底一人の中にも収まり切るものではない。

だからそれを限界まで押さえ込んだ身体は肥大化し、赤く変色するのだ。

そして、この時の身体の負担は恐ろしく重く、“ソーマ”を一瓶飲むと、一年寿命が縮むと言われている。

この負担に耐えられないためにすでに多少歳をくってしまったているイナスは“ソーマ”を使用できなかったのだが、普通の人間でも“ソーマ”は飲むのは躊躇われる。

「貴様などもはや足元にも及ばん！ どうだ、ファルガール「カーン！ なんとか言ってる……!?」

ハークーンは途中で言葉を止めた。

その顔からはどんな形であれ、先程からずっと浮かべていた笑顔がすっかり消えてしまっている。

彼の目の前にはファルガールがいた。

あれほどの猛攻撃を加えても、彼の身体には一切傷がついていない。

「……で？」

「な、……なっ!？」

彼の何事も無かったかのように振る舞う様子に驚きおののくハークーンを見て、ファルガールはため息をついた。

「それだけか？」

そう言ってファルガールがハークーンに向かって一歩足を踏み出した瞬間、ハークーンは狂ったように正面に突撃した。

「うおおおつ！ 《爆炎》！ 《濁流》！ 《雷電》！ 《豪電》
《！》」

次々とレベル7クラスの規模の魔法が四連発で発動する。

それらを前にしてもファルガールは身じろぎもせず、《ヴァンジ
ユニル》を構える。それに答えて、《ヴァンジュニル》の纏う紫電
も力を増して行く。

「電気の流れは磁力の流れ、磁力の流れはこの場を囲い、全ての流
れをねじ曲げ《磁場》をなす！」

ファルガールが唱え終わると同時に《ヴァンジュニル》の先の電
気の玉が大きく広がり、彼を守るように包み込んだ。

そして彼を襲った魔法は全て彼に届く事無く、壁に沿って方向を
変えてあさつての方向に跳ね返った。

ハークーンはその一部始終を信じられない面持ちで見つめていた。
そしてその表情に露骨な焦燥感が現れる。

「馬鹿な……馬鹿な…馬鹿な！ 馬鹿な馬鹿な………馬鹿なああ
！」

叫ぶと共にハークーンはもう一本、青い液体の入ったビンを取り
出し、今度はビンごと口の中に放り込んで噛み砕いた。

割れたガラスがハークーンの口の中を切り、彼の唇の端から一筋
の血が流れる。彼は血にまみれたビンの欠片を床に吐き出す。

それと同時に彼にさらなる変化が起こった。

ハークーンの肌が、更に血のような赤色に変色して行く。そして
身体も更に肥大化する。

もはや人間の姿ではなかった。

「あり得んっ！　ここまで強くなった俺が負ける事などあり得んっ！　うおおお！　《爆炎》っ！　《濁流》！　さらに……ぐああっ！？」

ハークーンの攻撃はそれ以上続かなかった。

その間にファルガールが《ヴァンジュニル》の先にあつた雷を帯びた玉を一振りして放ち、ハークーンの腹部にヒットさせたのだ。

帯電した玉はそのままハークーンを背後にあつた壁まで吹き飛ばし、礫にした。

ファルガールは間髪入れずに、距離を詰め、壁に張り付いているハークーンの顔のすぐ横に《ヴァンジュニル》を突き刺す。

真っ赤になつた顔を歪ませ、ハークーンはいくつもの疑問を浮かべたような表情を、自分を睨み付けるファルガールに向ける。

何故だ。

何故、全く歯が立たない。

俺は強くなつたはずだ

俺は貴様を超えたはずだ。

何故、貴様はそんなに強い。

「今すぐためエをぶちのめしてえトコだが、その前に聞く事がある」

ハークーンはそのままの表情でほとんど反応を示さなかったが、ファルガールは構わず続けた。

「オキナニバトレアスをどうした？」

「……殺した」

かろうじて、だがはつきりと答えるハークーン。

ファルガールは数瞬、ハークーンから目を放して沈黙したが、すぐにもう一度改めて睨み付け、矛を持っていない手で、ハークーンの首を掴む。

「二つ目の質問だ。てめエに“ラスファクト”を手に入れるように言ったのはどこのどいつだ？」

尋ねた後、話す事ができるように首を持つ手を緩めたが、ハークーンは全く声を挙げなかった。

「質問を変えようか？ てめエのこのくだらねえ刺青を施し、ろくでもねエ魔水を与えたのは誰だ？」

ファルガールの容赦の無い口調にハークーンがぴくりと眉を動かす。

「くだらない、だと？」

「ああ、くだらねえし、ろくでもねえ。お前は強くなったとか言っていたが、笑わせてくれるぜ。お前の魔法が速いのは誰かさんに施してもらった“烙印魔法”のお陰だ。お前の魔法が強いのは誰かさんに与えてもらった“ソーマ”のお陰だ。

お前の強さは自分自身で生んだモンじゃねえ。誰かさんに与えてもらったモンだろうが。それを自慢して見せびらかしてどうする？ ま、たとえ、自分の努力で強くなったんだとしても強さは自慢できるモンじゃねえけどな」

ファルガールの一言一言にハークーンの顔が歪んで行く。

否定が出来ない。

しかしそれを認めてしまえば、この十五年にやってきたあらゆる事も否定される事になってしまう。

彼にとってこの十五年は強さが全てだった。

この十五年を否定されれば彼の全てが否定されるに等しい。

しかしその否定は否定出来ない。

ならば……

彼の顔は歪みに歪み、そしてハークーンはいつの間にか笑っていた。

「くくく……」

「何が可笑的い？」

「いや、お前は同じ台詞をその誰かさんに言えるのかと思ってな」

「誰かさんの正体を教えてくれたらいくらでも言ってもやるよ」

ファルガールがそう返すと、ハークーン的笑みはますます広がった。

その不敵な様子に、ファルガールも眉を潜める。

「いいだろう、教えてやるよ。俺に力を与えたのはジャガントラ……」

…「グランデルク」ジャガントラだ……」

「グランデルク」ジャガントラ……！？」

ファルガールが思わず聞き返した瞬間、変化は起きた。

ハークーンの身体に異変が起こり始めた。彼の身体から光が発せられ始めている。

その変化が一体何を意味しているのかを知っているのか、ハークーン的笑みは更に広がった。

「これは土産だ。と言っても置き土産だな。しかしお前も後から

ついてくることになるかもしれないあつ！ くはははは……！」

ハークーンの笑い声と共に、光はどんどん大きくなって行く。

彼の言葉、変化からファルガールは状況を読み取り、思わず舌打ちをした。

「し、しまった……！」

次の瞬間、ハークーンは爆発した。

彼の“烙印魔法”の一つ《裏切りへの報復》。彼の属する組織を裏切る行為をした場合、自動的に発動する魔法だ。つまり、裏切った瞬間、周りを巻き込んで自爆させる魔法。

もつとも、ハークーンの場合、心から裏切ったわけではない。この魔法を発動させようと、あえて組織の頂点に立つ者の名前を教えただのだ。

もうどうでもいい。

せめてお前に一矢報いてやる。

それが俺の十五年のたった一つの成果だ……

迫りくる爆炎を前にファルガールは《磁場》を展開し、威力をいなす。だがそれだけでは威力を殺しきれず、爆圧に吹き飛ばされ、向かい側の壁まで吹き飛ばされた。

後頭部を打ち、意識が飛びかける。

朦朧とする視界の中で、魔力を含んだ爆発がファトルエルの“ラスファクト”《グインニール》を巻き込むのを捕らえる。

（ま、不味い……！）

魔力に触れてしまった《グインニール》は水を生み出すのを止め、

ぼんやりと青い光を放ちはじめる。

それはだんだんと明るくなっていき……青い閃光が部屋を包み込んだ。

こうして、ファトルエルで最も長いと語られる伝説の夜が始まった。

38 『長い夜の始まり』

全ての者にとって始まりは驚きである。

驚きは謎となり不安となる。

それらを解いていく事が物語として紡がれて行く。

それらが全て氷解した時、ひとつの物語は終わりを迎えるのだ。

ファトルエルを囲む高い石壁の上には階段が通じており、上る事ができる。ここに兵士が上って外敵を防ごうと言うのだろう。

今ここに上っている人間は一人だった。複雑に編んだ黒髪、紫色の目を持ち、妖艶な印象を与える美女、マーシア・ミスターシャだ。大会が始まってからというもの、彼女はずっとファトルエル中を歩き回っていた。他にもない。ファルガール・カーンを探すためである。

勿論ファルガールがこんな事で見付けられるとは思っていない。ただ、居ても立ってもいられず、こうして毎日一日中探し歩いている。

ずっと放つたらかきしているフィラレスの事も勿論心配だった。誰にどう襲い掛かっても構わないこの大会である。そうして襲ってきた人間に対してあの“滅びの魔力”が発動する可能性は多分にある。

そうなったらこのファトルエルでも崩壊してしまうかもしれない。それは十分に分かっている筈なのに、他人を傷つける事を何よりも嫌い、“滅びの魔力”の発動を誰よりも恐れているフィラレスが自分の意思でこの大会に参加したのだ。何かあるに決まっている。

だが彼女はそんなフィラレスよりファルガールを優先してしまっ
た。

自分でも師として失格だと思う。

十年ぶりの再会で、マーシアはもう自分の気持ちを抑える事が出
来なくなっていた。

会いたくて会いたくて仕方がない。

もう涙に暮れる日に戻りたくない。

しかしその気持ちは叶えられる事がなく、マーシアはただファト
ルエルの街を歩き回っていた。

もう通っていない道もない。この防壁の上で最後だ。

ファトルエル北門の真上まで来た時、マーシアはふと立ち止まっ
て街を見下ろした。

決闘場以外はみな件の砂レンガで出来ているので、一番高い『ル
ーフトー・レスト』でも、この防壁の高さには全く及ばない。
つまり、防壁の上からならこの街全体を見渡せるのである。

(本当にファルガールはこの街の中にいるのかしら……?)

そんな事を考えながら街の景観をしばらく眺めているといきなり
大きな地震が起こった。

かなりの揺れで、マーシアも思わず膝をつく。

地面の揺れは何故か止まらない。

次に北の方から轟音が鳴った。

何事かと、マーシアは音のした方に目を向けた。

そして彼女の目に入った光景は一瞬、彼女にファルガールの事を
忘れさせた。

「何と、それは本当か!？」

ファトルエル大決闘場の一室でその声を響かせたのは、カンファータ国王・ハルイラ「カンファータ十八世である。

その目の前にいる北門の門番兵が、手と片膝をついた姿勢のまま、頭を下げてもう一度報告した。

「はい。間違いございません。あれは大災厄にございます! 北門よりこのファトルエルに向けて接近中であります。あと三時間でこちらに到着するは必至!」

門番の口調は割としっかりしたものであったが、その表情はまるで地獄を見てきたかのように恐怖に満ちている。

ハルイラは座っていた大きな椅子から立ち上がり、端で控えていた儒者風の男に話し掛けた。

「……早急に対策を練らねばならんな。バスタ、お前はと思う?」

バスタはカンファータ王国の宰相で、言わばこの国のブレインである。

その状況整理は理路整然とし、その判断は冷静沈着。そしてハルイラの行動力がその判断をするという形で今のカンファータは切り盛りされていた。

「あまり状況はよろしくありませんな。この地震で大分家屋が崩れているでしょう。そして大災厄がやってきて雨が降り注ぐものならば、一般住居はひとたまりもありませんまい。」

よってまずはファトルエルに雨が近付いている事を警告しましょう。雨で街が崩れた事は過去にもあり、その都度ファトルエルは蘇っておりますから、雨の方は住民さえ助かれれば良しとしましょう。

問題は他の災害です。幸いファトルエルには燃え広がるようなものはどこにもありません。雷などによる火事の被害は心配はいらないかと思われまふ。しかし他にも雷に直接打たれたり、竜巻きに飛ばされる者も居ます。

さらに心配なのはクリーチャーの存在です。クリーチャー達は他の災害とは違い、確実に人を狙い、殺します。今までのデータによるとこのクリーチャーによる被害が一番大きいのです。

天気の方はどうしようもありませんが、クリーチャーを迎え撃つ事は可能です。魔導騎士団を派遣しましょう」

「ふむ」

ハルイラはバスタの意見に頷いたが少し考えてから言った。

「しかし団長のシノンが死んで浮き足立っておる」

「そのための副団長です」

「ジェシカか……。しかしちと荷が重すぎるのではないのか？」

「だからといって今出撃しないわけにはいきません」

ハルイラの口から出てくるいくつかの否定の言葉をバスタにあくまで冷静に答えて行く。これが彼の仕事だからだ。

確かに今は隊長不在、副隊長の不調、更に言うなら大会に出ているもう一人の主要戦力の欠落などの理由があるとしても、魔導騎士団の派遣を止め、ファトルエルの住民、観光客がクリーチャー達に

殺されていく様子を黙ってみているわけには行かない。

「よし、ジェシカをここへ呼べ」

「恐れながら、陛下」

ハルイラの命令に部屋に控えていた衛兵の一人が一步前へ進み出た。その衛兵は確か先程までジェシカの部屋の前で番をしていた男だ。

「どうかしたのか？」

「いえ、ジェシカ様はただ今、お出かけ中でございます」

その報告にハルイラが眉を潜める。

「どこに行ったのか分かるか？」

「何でも決勝を闘う参加者の陣中見舞いとか。名前は確か……」

「リク＝エールか？」

自分が必至に思い出そうとしている名前をあっさりハルイラに言われたので衛兵は意外そうな顔をした。

「御存じでしたか」

「うむ、ちよつとな……濟まないが、ジェシカを迎えに行ってくれないか？　すぐにここに参るようにと」

「陛下、それでは迅速さに欠けると思われます。先ず魔導騎士団を北門に配置しておき、ジェシカ様には北門に直接来て合流していただくのが上策かと」

「うむ、お前の言う通りだな。衛兵、聞いた通りだ。そうしてくれ」

ハルイラはバスタの助言に頷き、衛兵に向き直って指示し直す。

「はっ」と、衛兵はビシツと敬礼をして、きびきびとした歩き方で部屋の外に出て行った。

それを見届けてからバスタはもう一度口を開いた。

「陛下、この街には今、世界最高峰の戦力が揃っております。別働隊を設けてそれらの魔導士達に協力を呼び掛けてはいかがでしょうか？ 上手く行けば大災厄を迎えても一人の死者も出さずに済むかも知れません」

「珍しいな。お前がそれだけ楽観的な考えを口にするとは」

「私もそう思います。しかし、この街は神を相手に回しても、立派に闘う事ができるような気にさせられるのです」

そう答えるバスタの口元には珍しく笑みが浮かべられていた。

時は少し遡る。よかのほ

決勝に進んだリクとジルヴァルトには大決闘場を中心とする中央広場の北と南にそれぞれ専用のテントを与えてもらっていた。

南にあるリクのテントには彼以外にもカーエス、フィラレス、カルク、クリン、クラン、そしてコーダがいた。

「うええ……もう動かれへ〜ん……」

床に伏せたまま情けない事を出したのはカーエスだ。

“魔導眼”で時を操った後はいつもこうなってしまう。

『ルーフトー・レスト』に戻って休む方がいいのだが、こちらの

方が遙かに近かったので一旦こちらで休憩してから、という話がつつと居座られてしまっている。

「まったく、情けねえ奴だな」と、リクは呆れたように息をつく。

「そう言わないでやってくれ。“魔導眼”の本当の力を使うところなるのだ」

カルクがフォローを入れると、リクは口を尖らせて言い返した。

「それは分かっているし、あの刺青ジジイをぶっ倒したのはすげーと思うよ。でもさ、俺の時にはまだ全力出してなかったのが一番気に食わねーの！　ちっとも勝った気がしねーよ」

ちなみに刺青ジジイことイナス「カラフは禁術である“烙印魔法”を使った疑いでカンファータのファトルエル常駐兵に拘束され、連行されていた。そのうちにあの刺青は封印される事だろう。

しかしあそこでカーエスが全力を出していたらどうなっていた事か。

先ずリクはカーエスに勝てなかっただろう。

仮に勝てたとしても消耗しきったカーエスはイナスに勝てなかったに違いない。また、同じく疲れ切ったリクの声はフィラレスに届かなかっただろうし、もともと長期戦になって間に合わなかったに違いない。

とにかく、今とは全く違う展開になっていただろう。

表向き、リクがフィラレスを助け出したように見えるが、この救出劇の影の立て役者は他ならぬカーエスなのだ。

リクは自分の足元に寝そべって呻くカーエスを見下ろした。

(しかしこの男が影の立て役者ねえ……)

いまいち似合わない。どちらかと言うと三枚目である。
ふと悪戯心が差したリクはカーエスの横腹を左足のつま先でちょんと突いた。

たちまち反応したカーエスは悲鳴をあげる。

「ひええええつつ!?」

悶絶するカーエスの様子を見てリクは何となく滑稽こっけいに思えた。

(……面白い)

それからリクは何度もカーエスを小突き回した。

その度に悶絶し、床を転がるカーエス。

リクの足元を離れる時もあったが、運悪くコーダの足元に来てしまった。かれもリクの真似をしてカーエスの脇をつま先で突く。

今度はクリン・クランの前に来たが、やっぱり彼も面白がって脇を突いた。

最後はカルクの前に行き着き、彼に救援を求める。

「か、カルク先生え……」

カルクはそんなカーエスから残念そうに目を反らした。

「済まないが、弟子に艱難辛苦を与えるのが師の役目なのだ」

「へ?」

目を丸くし、カルクの雰囲気がおかしい事に気付いて青くなるカーエスをよそにカルクはカーエスを、子供を谷に突き落とすように蹴飛ばした。

「うあああああつ！ カルク先生え、あんたもかアツ！」

腹心に暗殺された某国某権力者の有名な台詞を真似て吐きながら、カーエスは更にのたうちまわる。ついにフィラレス以外に味方のいなくなったカーエスは蹴鞠けまりのごとく円になったリク達の中を転げ回る。

フィラレスはそれには参加していなかったが、それを興味深そうに眺めている。

カーエスは何とかこの円の中から抜け出そうと必至でもがいた。

しかし包囲網は固くなかなか逃れられない。

だが火事場の馬鹿力と言うのか、不意にぼろりとカーエスは包囲網の外に出た。

この機会を逃す手はないとばかりにカーエスは痛む身体に鞭打ってテントの外に這って出ようとする。

ところが入り口を出ようとした所でカーエスは何かに頭を打ち付けた。

「痛っ………！」

「ん？」

カーエスの呻きにその人物は自分の膝に当たった物体を見下ろす。その人物は大きく三つ編みに編んだ金髪の髪に碧眼、どこか気品を漂わせるきりつとした面持ちを持つ美女、その身体には魔導騎士用の軽い甲冑も着込んでいる。カーエスが頭をぶつけたのはそのすね当てだった。

「な、何やねん、あんた」

リクにまだこんな知り合いがいるとは知らなかったカーエスはぶ

つけた額をさすり、彼女を見上げた。

「カンフアータ魔導騎士団副団長・ジェシカⅡランスリアだ。リクⅡエール様はおられるか？」

外見とはギャップのあるジェシカの迫力満点の喋り方に、カーエスは黙ってリクを指差した。

その名を聞いてリクは入り口の方に目を向ける。

「ジェシカ？ ひょっとして陣中見舞いにきてくれたとか？」

「決勝進出を勝ち取ったとの話を聞いて居ても立ってもいられず、お邪魔させていただくことにしました」

そう言ってジェシカはつかつかとテントの中に入り、リクに恭しく御辞儀をした。

そんなジェシカの様子に全員があっけにとられている。

「リク、あんたもしかして貴族なん？」

「正真正銘の平民だよ。訳が分からんのだが、闘って勝ってから俺を慕^{した}ってくれてるらしい」

カーエスの疑問をリクが否定する。それでもカーエスは納得した様子は見せなかった。

その横で挨拶を済ませたジェシカがリクの周りを見回した。

「“完璧”のカルクⅡジーマンに“双龍”のクリンⅡクラン……さすがリク様、客人もそうそうたる顔ぶれです」

「……いや、単なる縁なんだが」
「待ていつ」

そう言って立ち上がったのはカーエスだ。

「……お前動けなかったんじゃないのか？」

「そんな事はどーでもええわいっ」と、カーエスはリクの突っ込みを乱暴に流し、ジェシカをビシツと指差した。「ジェシカとか言うたな？ おのれ何でリクに様つけてカルク先生に様つけへんねん！？」

「尊敬していないからだ」

あつさりとジェシカは答える。

そんな態度がかえってカーエスの感情を逆なでした。

「か、カルク先生を尊敬しとらんやと？ じゃ、何でこのくそくだらんリクなんぞを尊敬しとんねん！」

最初は冷静に受け答えたジェシカもこの発言に眉間に皺を寄せ、カーエスの喉元に槍先を突き付けた。

「それ以上リク様を愚弄すると命の保証はしないぞ」

「……」

あまりの速さにカーエスは絶句する。

「カルク＝ジーマンは確かに偉大な魔導士だと思う。しかし私にとつて、ほとんど関連の無い人物であり、尊敬の対象にはならなかった。」

私が尊敬し、様をつけて呼ぶ人物はこの世に三人だけ……いや、今は二人だけだな。我が君であるカンファータ国王陛下、そしてここにおられるリク様だけだ」

数が減ったのはシノン死亡の為である。
喉に槍を突き付けられたままでも、カーエスは負けずに言い返した。

「そんなでも強さで言うたら、おそらくカルク先生の方が強いし、俺かて、リクに勝つ可能性は十分あるで」

「私がリク様を尊敬するのは強さだけではない。私が真に尊敬するのはリク様の志だ。リク様のお陰で私は長年の疑問にやっとケリをつける事が出来た」

「……俺のお陰ねえ……」

二人の会話を完全に傍観していたリクがぼそりつつぶやく。
その横にコーダがやってきてにこりと笑った。

「俺が兄さんを気に入った理由もきつと志ってやつツスよ」
「便利屋になった時は、まだほとんど初対面だったろ？」

リクに突っ込まれたコーダは苦笑いしてぽりぽりと頬を掻く。
しかしどこか真剣な雰囲気で答えた。

「何となく分かるんす。……この人の為に働きたいってね」
「コーダ……」

と、そこに大きな地面の揺れがリク達を襲った。
立っていた面々はバランスを崩す。

哀れなのはカーエスで、突き付けられていた槍先がジェシカのバランスの崩れでサクツと鼻の頭に突き刺さったものだ。

「さ、刺さったあ！ 鼻に刺さったあ！」

「鼻の頭に刺さったくらいで死にはせん。少し大人しくしろ」と、

ジエシカは悪びれた素振りもなく、カーエスを床に押さえ付ける。

「なんスか？ この揺れ！」と、コーダ。

「俺に聞くな！」と、リク。

「ただの地震ではないな」と、カルク。

「かといって誰かが魔法で起こしたものでないようですね」と、これはクリンククランだ。

フィラレスは四つん這いになって少し不安げな表情を見せている。

各自コメントが終わった後も、絶える事なく地面は揺れ続けた。

リク達はテントが倒れてくる事を恐れて一旦、外に出る。

外には何事かと外に出てきた一般市民がたくさんいた。

その一般市民の間に交わされる会話を聞いても何が起こっているのか全く把握出来ない。

だが、その中にリクは驚くべき人物を発見した。

人々の間をすり抜け、大通りを北に向かって走る、灰色の髪と眼を持つ巨漢。

そしてリクとカルク、クリンククランが共通して良く知る人物。

三人は同時に叫んだ。

「ファルツ！」 「ファルガール！」 「ファルガール先生！」

その男、ファルガールクカーンはリク達の目の前まで来ると、その足を止めた。

そしてリクに向かって軽く手をあげる。

「よ。二日振りか？ 長えようであんまし時間経ってねえな」

「よ。じゃねーよ！ 何だこの揺れ？ ファルなら知ってるんだろ」

リクはファルガールの正面に迫って問いつめる。
いつものパターンならここでとぼけて誤魔化すところだったが、
今回ばかりはファルガールもふざけるような真似はしなかった。

「ああ、あんまし説明してる時間はねえから手短に済ませる」

その神妙な面持ちに、全員がごくりと息を飲む。

「俺がファトルエルにやってきたのはこの街にある“ラスファクト”を調べるためだった。理由は後で話す。

“ラスファクト”は自己防衛能力を持つ物質でな。魔力がそれに触れると自分を壊そうとしているんだと判断してその防衛能力を発動させてしまう。で、俺はヘマをやってここに眠ってた“ラスファクト”に魔力を触れさせちまった。で、防衛能力が働いちまった、というこった」

ファルガールは“ラスファクト”が発動してしまった事に気が付いたあと、その後の衝撃に巻き込まれないように、そこから逃れた。しかし丸二日掛かった行程をどうしてすぐに戻れたのか。

それは旅宿『バトラー』の部屋に敷いていた“引き返しの陣”のお陰だ。ある一定範囲からならば、ちょっと呪文を唱えるだけで簡単に陣を敷いたところまで戻れるという魔法の道具なのである。

そしてバトラーの部屋に移したファルガールは大通りに出てここまで走ってきたというわけだ。

「で、その自己防衛能力が働いたらどうなる？」

カルクが質問をした横から、一行に駆け寄ってくるものがいた。

「ジエシカ様っ！」

件の衛兵だ。彼はジェシカの傍まで来ると敬礼をして言った。

「魔導騎士団に召集令が掛かりました！ 直ちにファトルエル北門にお向かい下さい。北より大災厄がファトルエルに向かって接近中です！」

「……大災厄！？」「……」

衛兵の報告に、ファルガール、フィラレス以外の人物が声を揃える。

「はっ。魔導騎士団には街に向かうクリーチャーの掃討が命ぜられました！ ただ今魔導騎士団は指揮官不在で浮き足立っております！ このままでは大きな被害が出るのは避けられません！ 何とぞ一刻も早く北門にお向かい下さい！」

驚愕を表情に満ちさせる一同を見渡し、ファルガールは言った。

「……そういつ事だ」

39 『それぞれの戦場へ』

我々三人はそこに向かってひた走る。

その先に待つのは闘い。

三人それぞれにとって大きな闘い。

俺はこの場所で闘おう。

僕はその場所で闘おう。

私はあの場所で闘おう。

闘う場所は三人バラバラだ。

しかし闘いの中で向いている方角は同じだ。

そして闘いの先に目指す場所も同じだ。

闘いが終わればまた三人揃う。

我々はそれを信じて闘おう。

衛兵の報告を受けてから、リク達八人は北に向かって走り始めた。ジエシカは北門にて魔導騎士団と合流するために、他の者もクリーチャーの掃討に参加するためである。

魔導騎士団以外のカンファータ兵はあまり戦力にならないので参加者の魔導士達に協力を要請したり、ファトルエルの住民達に避難勧告をしたりしている。

「ファルツ、相手は大災厄だろ？ クリーチャーを止めるだけで本当にファトルエルは助かるのか!？」

走りながらリクは隣にいたファルガールに問う。
ファルガールは少し間をおいて答えた。

「……いや、先ず無理だろうな。クリーチャーは後からどんどん湧いてくるモンだし」

「じゃ、どうすればファトルエルは助かるんだ!？」

「ファトルエルはもう助からん!」

身も蓋もない言い様に、リクは顔をしかめる。

そんなリクにファルガールはにやつと笑ってみせた。

「……あくまで一般論ではな」

「じゃあ、助かる道もあるのか!？」

ファルガールは頷いて続ける。

「あのクリーチャー達をいくら倒しても大災厄は怯みやしねえ。だが、たった一匹、あの大災厄の柱と言えるようなクリーチャーがいる。それは“グランクリーチャー”って呼ばれている。理論上、そのグランクリーチャーを倒せば大災厄は止まる」

その答えにリクは拍子抜けしたようにしかめていた顔を緩める。

「何だ、ちゃんと方法があるんじゃないか。なのにどうしてもう助からねーなんて言われてんだ?」

「一般にそのグランクリーチャーは倒す術がないそうだ」

「なるほどね……」

リクは一旦納得したものの、また一つファルガールに質問した。

「じゃ、どつやっつて倒すんだ？」

「策はある。……あれから十年、無駄に過ごしてきたじゃねえ」

十年とはリクとファルガールが大災厄から生き残ってからの時間だ。

十年前にはファルガールは自分の身以外何も守れなかった。今回の大災厄はファルガールにとって雪辱戦である。

そういう意味で、今回の大災厄には彼は人一倍、大災厄からファトルエルを守り切りたい思いがあるに違いない。

「それにはお前の力、そしてあの嬢ちゃんの力が要る」

そう言っつて、ファルガールはくいつと顎でフィラレスを差した。

「俺とフィリーの？」

ファルガールは頷き、リクにその策を伝えた。

リク達は大決闘場の中に入った。

大決闘場の外を迂回するより、突っ切っていく方が近いためだ。幸い、開放はされていた。

南口から入りバトルフィールドを抜けて北口に向かうつもりである。

しかし一行は、バトルフィールドで思わず足を止めた。

そこには一人の男が待ち伏せていたかのように立っていた。

リクと同じくらいの体躯、模様のない黒の衣に身を包み、オールバックにして後ろで束ねた長髪は光を反射しないくらいの漆黑だ。

「ジ……ジルヴァルト!？」

驚愕に満ちた表情を浮かべるリクを正面に見据え、ジルヴァルトは静かに口を開いた。

「どこへ行くつもりだ？ リク＝エール」

そんな事を聞かれると思ってなかったリクは数瞬答えに戸惑った。

「どこへ行って……お前、聞いてないのか？ 大災厄がこの街に近付いてんだよ!」

「知っている。それで、お前は大災厄を相手に闘うつもりなのか？」

「ああ、そうだよ。文句あるか!？」

いささか、苛立った様子でリクは答えた。

その問いに対し、ジルヴァルトはしばらく沈黙した。

何も答える様子のないジルヴァルトにリクは更に続けた。

「お前とは明日きつちりと闘うから、今はここを通してくれねーか?」

「断る。お前が大災厄と闘うと言うならばお前が明日生きているという保証はない。俺はどうしてもお前と闘ってみたい」

あつさりとした答えに、そして相変わらず訳の分からない言動に、リクはまた顔をしかめた。

一体全体、この男は何を目的として動いているのだろう。

何故そこまでしてこの男は自分と闘いたいのだろうか。

「俺が負けでもいいから通してくれってのもダメか？」

答える代わりに、ジルヴァルトは手の中に光球を形作り、リクに向かつて投げ付けた。それはリクの顔の横をギリギリを飛んで行き、後ろの壁に当たって爆発した。

リクはその威力を見ると、仕方なさそうにため息を付いた。

「分かったよ……。俺はここに残る。だがみんなは通してやってくれ」
「いいだろう」

ジルヴァルトの答えを聞いて、リクは後ろに揃う面々に向き直った。

「……っつーワケだから皆で先に行っててくれ。コイツを倒した後には必ず行くからさ」
「しかしコイツ絶対あの刺青ジジイより強いぞ？ 勝つにしろ、もう闘う力残ってへんのとちゃう？」

そのカーエスの指摘はもつともだった。

このジルヴァルト相手に後を考えた闘い方など出来る訳がないし、力を尽くした後で来ても足手纏いにしかならない。

「まあ、行けば何とかなるだろ。俺はお前みたいに“魔導眼”なんか使えねーから動けなくなる事もねーよ。それとコーダ」と、カーエスにそう言った後、リクはその隣にいたコーダに視線を移した。

「なんスか？」

「これから俺がいない間、何かと皆を助けてやってくれ」
「了解しやした！」

コーダが敬礼する傍にはジェシカが居る。

リクは思わず彼女と目が合った。

彼女は何も言わなかったが、何を言わんとしているかは良く分かる。

「分かってるよ、ジェシカ。お前とシノンに誓っただろ？ 負けたりしねーよ」

フィラレスも心配そうな顔でリクを見ている。

彼女もジルヴァルトの強さを肌で体感した者の一人だ。あの“滅びの魔力”を持ってしても彼には適わなかったのである。

「大丈夫だ、フィリー。危なかったけど俺もお前の魔力に負けてなかっただろ？ 仇は討ってやるさ」

フィラレスはこくりと頷く。

その後ろから一歩前に出てきたのはファルガールだ。

そしてフィラレスの頭にぼんと手を乗せて言った。

「…いいか、大災厄を倒すにはお前と嬢ちゃんの力が要るんだからな。……負けたらファトルエルが終わると思えよ」

「なんかそれ、すげープレッシャーだな」

リクが苦笑して答える。

ファルガールはにやりと笑い返して続けた。

「時間のことは気にすんな。俺とカルクがグランクリーチャーを足

留めしておいてやる。そうすれば大災厄も進行を止める事にもなるしな。思いきり楽しめ」

言い終わるとファルガールはリクの横をすり抜け、ジルヴァルトの脇を通り抜ける。

その際に、ファルガールは一言言った。

「アイツは俺の自慢の弟子だ。勝てるモンなら勝ってみな」

そしてファルガールは北口に向かって歩いて行く。

途中で一度振り返って一同に言った。

「おい、早く行こうぜ。時間がねえんだ」

その言葉に皆はやっと進みだした。

リクに、ジルヴァルトに、それぞれすれ違う際、リクには心配そうな顔を、そしてジルヴァルトには憎しみを込めた顔、もしくは畏怖と不安が混じりあったような表情がそれぞれ向けられる。

そしてリク以外の全員が揃ってバトルフィールドの南側入り口に集まった。皆、リクの顔を振り返っている。

リクは心強く笑い返し、頷いてみせた。

それを合図に、ファルガール達は大決闘場から出て行った。

リクはジルヴァルトの背後から、ジルヴァルトへと視線を移した。遠近感の関係で視界の中でばやけていたジルヴァルトの姿がはつきりとしたものになる。

「待たせたな。……さてと、ちょっと予定より早いけど始めようか？ ファトルエルの決闘大会の決勝戦を……！」

ざっと、リクは一步踏み出して身構えた。

大決闘場を後にした一行もなおも北へ北へと掛けて行く。
戦えない一般市民達が警告に従って、南へ逃げていく。

大災厄の恐ろしさは誰もがよく知っている。大災厄に襲われたからには、助かる可能性が非常に低い事も知っている。

こちらに向かって走る民衆の表情は絶望と恐怖に満ちていた。

ファルガール達はその狂気に満ちた人々の濁流を遡上する形になり、なかなか前に進めない。

「くそっ……！ 進み辛いつたらありやしねえ！」

「仕方がない。皆必死なんだ。それに大災厄でこの程度の混乱なら御の字というものだ」

悪態をつくファルガールをカルクは冷静にたしなめた。

確かに進み辛くはあったが、本当は大災厄と言えば混乱し、もっと酷くなってもおかしくはない。

大混乱になるところを辛うじて抑えているのはカンファータの兵による必死の誘導のお陰だった。

「おい、コーダッ！ おんどれ何でサソリ持ってきてへんねん！」

「無茶苦茶言いやスね……こんなトコでサソリ乗り回したら人を踏みつぶしちゃうスよ」

だが混雑も北に行くにつれてだんだんと増しになっていった。

「カンファータの人達は、皆を各決闘場に避難させているようですね」

人々が逃げる方向が南だけではない事に気が付いたクリン＝クランはファルガールにそう漏らした。

「上策だ。南の砂漠にほうり出すよりしっかりとした建物にまとめて收容した方が守りやすい。しかも各決闘場の観客席は魔力のバリアが張られてるしな」

完全に集団を抜けてファルガール達にも北門が見えるようになった。

一行の目は総じて見開かれたものになる。

北門には既にクリーチャーと思しき人外のシルエツトがいくつも見え、その手前にはカンファータ魔導騎士団であろう、ジェシカと同じ軽甲冑を着込んだ者たちが応戦している。

その戦況は決して思わしいものではなく、彼らはだんだんと後退し、クリーチャー達が隙を見て街の中に侵入して行っている。

「不味いな……大災厄の進行が思ったより早え」

そう漏らすファルガールの横を、ジェシカが駆け抜けていく。

「《電光石火》によりて我は瞬く速さを得ん！」

閃光と共にジェシカの姿は一瞬で魔導騎士団の元に入り、早速クリーチャーを一体突き飛ばした。

「カンファータ魔導騎士団副団長・ジェシカ＝ランスリアこれにあ

り！ 皆の者！ 私に続け！」

副団長参戦を知り、魔導騎士団の志気が上がった。
たちまち、戦線が前進し始める。

「俺らも行くでえ！ 《驚掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて……」

カーエスが呪文を口にしながら、戦線に踊り出る。

「我が敵を燃やし尽くせ！」

カーエスの掌より放たれた灼熱の炎がクリーチャーを二、三体まとめて燃やし尽くす。

「我が魔力よ集まれ、敵を見据えよ、そして喰らわせる！ 瞬く力を敵にぶつける《ぶちかまし》！」

いつの間にか二人に戻ったクリンとクランが二重詠唱で威力を増した魔力の塊を敵に向けて放つ。

これに七、八体は吹き飛ばされ、壁に張り付いた。

「その槍穂貫くは天地！ その光が意味するは天の裁き！ その先からは轟く光がほとばしり、全ての罪を討ち滅ぼす！ 稲光と共に現れよ！ 稲妻纏いし紫電の矛！」

その手に《ヴァンジュニル》を手にしたファルガールも戦線に加わろうと、駆け出した時だった。

今までも小刻みに揺れていた地面が轟音と共に一瞬大きくなる。
それと同時に北門の向こうに大きな火柱が上がるのが見えた。

(……あの炎はまさか……！？)

ファルガールの表情が固くなる。

そしてクリーチャー、そしてそれと闘う者達で一杯の目の前、その次にその上にそびえる防壁を見る。

そして決心をしたように、身構え、唱えた。

「我《駆け抜ける稲妻》となりて、我が身は光となり、雷火を纏う！
我が道阻む者、我が裁きによりて身を滅ぼさん！」

詠唱を終え、《ヴァンジュニル》を天にかざす。

すると、天からファルガールに雷が落ちた。

次の瞬間ファルガールの身体は人形の雷となった。

「ファルガール!？」

驚いて目を丸くしたカルクが声を駆ける。

雷となったファルガールは何も喋らずに力強く手招きをしてみせ、まさに雷の早さで防壁の上空に飛び、その外に姿を消す。

「……ついてこいというのか？」

訳が分からぬも、カルクは呪文を詠唱する。

「風よ、そして我を大地に縛り付ける重力よ、翼持たぬ我に《飛翔》の力を！」

カルクは唱え終わると、地面からふわりと浮き、全く重力というものをおぼれたように上へ上へと登って行く。

それに気が付いたカーエスが声を掛けた。

「カルク先生！ どこ行きはるんですか！？」

「ファルガールを追う！ この場は任せたぞ！」

そう答え、カルクは塀の外へと姿を消した。

40 『誰が為に在る夢』

あなたとずっと一緒に居たい。

あなたの存在ゆえに在る気持ち。

あなたを一生守り通したい。

あなたの存在ゆえに在る願い。

あなたがいるから成り立つ、かけがえなき私の夢。

あなたがいる限り、叶い続け、在り続ける私の夢。

あなたがいなくなれば、叶う事なく終わる私の夢。

私はあなたを失えない。

その大災厄の真ん中にそれは存在していた。

グランクリーチャー《ゲインニール》。変わり果てたファトルエルの“ラスファクト”。

それは一匹の大蛇だった。その大きさは圧巻で、首を少し伸ばせばファトルエルの防壁を越える高さがある。長さに関してはもはや把握しきれない。

大蛇と言ってもただの巨大な蛇じゃない。

真ん中の首からは何本も枝別れをするように首が別れている。

首といっても鋭い牙を生やした口が開かれるだけで、口が付いた触手というのが、一番適当な表現だろうか。

そしてウロコ。普通の蛇にはない彩色だ。海のようなブルーである。

上空から見ると、本流から支流がたくさんある川のようにも見える。

その猛威を振るわんとファトルエルに向かって進む姿は、あまりにも強大で神々しくさえ見えた。

しかしその進路を妨げる者がいた。

“冷炎の魔女”と謳われるマーシア＝ミスターシャだ。

「目覚めよ、母なる大地に眠る灼熱の火炎！ そして溢れよ、《突然の噴火》となりて！」

大きな地響き、そして轟音と共に《グインニール》の真下がいきなり爆発し、火炎が立ち上る。

その巨大な蛇は天に向かって咆哮を上げ、歩みを止める。

マーシアが《突然の噴火》によって生み出した巨大な火柱に飲み込まれた《グインニール》はその炎の中からマーシアに向かって数多の触手を伸ばしてきた。

「緋なる《畏怖されし炎》の光は、あらゆる者を遠ざける！」

マーシアの周囲から炎が燃え上がった。

その色は血のように赤い色をしていておぞましい印象を与える。

彼女を狙った触手は獣が火を恐れるようにマーシアを避けて引き返していく。

その隙を見てマーシアは再び攻撃に転じた。

「我らを照らし出す星の《紅炎》よ！ 我が導きによりてこの場に現れ、汝が望むがままに燃やし、焦がし尽くせ！」

詠唱を完了したマーシアは、地面に手をかざす。

かざした先の地面が赤く光り、一筋の炎が噴き出し始めた。その炎はまるで生きた龍のように、曲がりくねり、最終的にその先に巨大な蛇を見据えるようにピタリと止まる。

そして、獲物を捕らえる獣のように猛然と《グインニール》に襲い掛かった。

グランクリーチャーは何の防御反応も起こさず、正面からその炎を受けた。

《紅炎》の炎が食らい付くようにして襲ったところは焼け焦げ、触手の四、五本は完全に無くなっている。

しかし次の瞬間から焦げた後は治り、触手も元通り生えてくる。恐るべき回復能力だ。

これほどの早さで回復出来るのならば、防御行動も必要ないわけだ。

《グインニール》がその大きな口を開けた。

数回、素早い動きでマーシアに食らい付こうとする。

しかしマーシアは素早い身動きでこれをかわす。

再度《グインニール》は口を開ける。

しかし今度は攻撃しようと思わず、何かを溜めるように少し頭を後ろに反らした。

と思うと突然、《グインニール》はその口に水の玉を作り出し、マーシアに向かって吐き出した。

「熱奪いて、火消しするものよ、この強大なる炎の前に《蒸発》せよ！」

マーシアの前に壁のごとく分厚く高い炎が燃え上がる。

それに当たった《グインニール》の水弾が、文字どおり蒸発し、辺りを蒸気が取り巻いた。

その白い蒸気の向こうに見える巨大な影を、マーシアは見据えた。

(強い……これが“大いなる魔法”の力……?)

ファトルエルの防壁の上で、大災厄の接近を確認した時、マーシアは反射的に大災厄の中に突っ込んで行った。

初めから彼女はグランクリーチャーである巨大な蛇の元に向かった。

別に彼女はファルガールのようにグランクリーチャーが大災厄の要だという事を知っていた訳ではない。

ただ、遠目に見ると、大災厄の動きはその真ん中にある《グインニール》の動きに合わせて動いており、このクリーチャーさえ止めれば大災厄の進行が止まるであろう事が分かったからだ。

そこまで見抜けたまでは賢かったが、神が使うとも言われる“大いなる魔法”の発現たる大災厄の中に一人で突っ込んで行ったのは愚行だと言える。

初め彼女は、ファトルエルの為に大災厄を止めなければならないと考えたから大災厄に向かって行ったのだと思っていた。

しかし、今ではそれはウソだと確信している。

本当は、ただ憎かっただけなのだ。

自分からファルガールを奪い去ってしまった大災厄が。

憎しみを持って闘うのは良くないと知っている。

そうして闘っても良い結果は生まれない事も。

そして、一人で大災厄に立ち向かう事がどれだけ無謀な事なのかも。

それでも、彼女はこの大災厄と闘わずにはいられなかった。

カルクは真直ぐ大災厄の真ん中に突入して行くファルガールを追っていた。

追うと言っても追いつく可能性は皆無だ。

ファルガールは稲妻となつて大災厄の中を駆け抜けているのに対し、カルクはただ飛んでいるだけだ。

ただファルガールが薄暗い大災厄の雲の下を進んでいるので、現在ファルガールがどこにいてどこに向かうのかは分かっているの
で、はぐれる心配はない。

しかし驚くべきは目の前に広がる光景だ。

竜巻き、地震、砂嵐、雷。

砂漠で考えうる災害の全てがここに集結している。カルクも何度か雷に撃たれそうになり、竜巻きに巻き込まれそうになった。

そして大量のクリーチャー。

見えている限りでも数百万、否、数千万はいるだろうか。

とても今ファトルエルにある戦力で殲滅せんめつできる数ではない。

その中でも目立つ存在である巨大な蛇。ファルガールの行く先はどうやらそこらしいが、その蛇に時々燃え上がる炎が気になった。

間違いなくマーシアの魔法だ。

マーシアが何故かあそこにいる。

あそこにてあの化け物と闘っている。

ファルガールはそれに気が付いたから皆を放つてあのクリーチャーの元へと急いだのだろう。

カルクは防壁を越えて燃え上がる火柱を何度か見るまでそれに気

付かなかった。

大会前夜に彼がリクに告白した通り、カルクはマーシアを愛している。

その時にリクはどうして見ているだけで寂しさに沈むマーシアを慰めたりしなかったのかと彼を責めた。

カルクはマーシアを愛しているが、ファルガールも好きだから、そんな事をすれば自分で自分を許せない、そしてそうする事はマーシアにとって真の幸せを使う事にはならないと答えた。

しかしそれだけではなかった。

カルクが二人の関係について傍観ぼっかんしている理由は三つある。

一つ目は、マーシアはファルガールの方を愛している事。

二つ目は、カルクがリクに答えた通りだ。

そして三つ目だが、カルクにとってはこれが全てだったのかも知れない。

カルクよりファルガールの方がずっと大きく、より強く、マーシアを愛しているという事だ。

《噴火》や《紅炎》で攻撃、《畏怖されし炎》で触手の攻撃を牽制せい、吐き出される水弾は《蒸発》させる闘いが続いた。

今までの闘いからでも読み取れるように、マーシアは炎の魔法を極めた魔導士である。

先に述べた通り、魔力は個人によって性質に差がある。マーシアの魔力は、炎の魔法を使うのに最適な魔力なのだ。液体に例えれば、油のようなものだ。

実はこの世界の魔導士はリクヤカーエス等のように、炎や水、風など全く性質の異なった魔法を使い分ける事のできる魔導士は少ない。それだけどんな性質の魔法にも順応できるニュートラルな性質がなければならぬからだ。

しかし、マーシアのように極端なタイプもまた珍しい。火の魔法使いなら水、風の魔法使いなら土というように弱点がはっきりしてくるからだ。そういう時は自分の弱点を補えるように他のタイプの魔法も修得しておくのが常なのだ。主に炎と氷を使い分けるクリン＝クランはその典型と言える。

だが、例え極端なタイプであつても大成する事はある。先程の《蒸発》で見て取れるようにたとえ弱点の水であるとしても、圧倒的な炎を持って対すれば克服は可能だからだ。

どんなものでも極めれば、どんなものにも対応できるようになるものなのである。

それでも炎が水に弱い事に変わりはない。対応できるようになつただけで、水の魔法相手は他の魔法を使う相手よりずっとやり辛い。だから、元々ファトルエルの水源地だつた《グインニール》はかなり分が悪い相手と言えた。身体自体も水の性質を持っているらしく、炎の魔法はあまり効かないし、少し効いてもすぐ再生されてしまう。

(一撃必殺しかなさそうね……)

そう考えたマーシアは攻撃するのは止め、《グインニール》の際

を伺う。

《グインニール》の攻撃は今の所、「触手で攻撃」「本体が攻撃」「本体と触手による水弾攻撃」の三種類だ。

前の二つは全く予備動作無しで繰り出してくるのだが、水弾攻撃だけは少し身体を後ろに仰け反って吐き出してくる。

複雑だがパターンがある事も分かった。

それに気付いてからそれが正しいかを確かめるためにもうしばらく様子を見る。

(水弾：本体：触手……触手：本体：本体……次は触手のハズ。それが終わったら水弾。その前に身体をのけぞらす瞬間が勝負……！)

思った通り、触手による攻撃が繰り出される。

それを軽やかなステップでかわすと、触手が退き始めた瞬間からその呪文の詠唱を始めた。

「炎よ、我が手に集え！」

マーシアが胸の前にかざした両手の間に赤く燃える玉ができる。巨大な蛇は身体をのけぞらし終えた。

「ほとばしれ、煉獄に在りし炎のように！」

火の玉が目に見えて膨らんだ。炎の温度が上がって行くのが分かる。

《グインニール》は口に水弾を形作りはじめた。

「更なる熱を持ちて全てを照らせ、眩き白色の焰ほのほとなりて！」

火の玉は膨らみ続け、その色がどんどん薄くなって行く。

マーシアはその火の玉を片手に持ち替え、すつと前に押し出した。目の前には既に吐き出された水弾が彼女に迫っている。

だがそれが彼女を捕らえる前にマーシアはその魔法を唱え切った。

「形作れ、《白き灼焰しやくえんの恒星》を！　そして灼き尽くせ！　影も形も、そして魂さえも！」

その瞬間から彼女の手の中であつた白色の炎がどんどん大きくなり、そこに届いた《グインニール》の水弾が蒸気をたてる事もなく消滅する。

最終的にその光は一つの大きな光の玉となつた。

その光は大災厄の薄暗い雲の下を、いつもの灼熱の砂漠のように明るく照らし出している。

そう、それはまるで小さな太陽だつた。

それはマーシアの手を離れ、ゆっくりと《グインニール》に向かつて近付いて行く。

そしてとうとう《白き灼焰の恒星》が《グインニール》に触れた。ジュツ、という油に水を注いだ時のような音の後は、お湯が湧く時の音がずっと続く。

触れられた部分は燃えているようには見えなかつた。煙は立たないし、焦げているようにも見えない。

ただ、消えている。

チョークで白く塗りつぶした黒板を、黒板消しがチョークの粉を拭き取り描く軌道のように、触れられた部分はただ無くなって行くだけでその他のことは何も起こらない。

究極の熱分解による完全消滅。

それを実現できる魔導士は世界でただ一人、“冷炎の魔女”マーシア＝ミスターシャのみだ。魔法もここまで来るとレベルでは分類出来ない。

(やった……！？)

断末魔とも言えるかん高い咆哮ほうしゅうを上げながら、その身体を消滅させて行く《グインニール》を見ながら、ガクリと膝を尽き、肩で息をするマーシア。

今のは彼女の精一杯ギリギリの攻撃だった。彼女に余力は微塵みじんも残っていない。

白色の焰の玉は順調に巨大な化け蛇を消滅させて行く。

本体の頭も完全に消滅し、マーシアが内心勝利を確信し始めた時、初めて異変は起きた。

《白き灼焰の恒星》の進行が止まる。

その向こうで新しく青白い光が現れ始めた。

その正体は残り半分となった《グインニール》だった。残りの身体が一塊の青白い光となっている。

その光は細長く伸びて行き、一本の長く太い光になった。そのまま蛇のような形となり、頭を《白き灼焰の恒星》の方に向ける。

その先端が更に青く輝き始めた。

次の瞬間、とても信じられない量の水流が放たれた。

それが《白き灼焰の恒星》とぶつかりあう。

大量の蒸気が発生し、辺りを包む。

それは濃霧となって、マーシアの視界を白い闇で覆って行く。

とても長い時間、いやそう感じられただけかもしれない、ともかくその間、マーシアは白い闇の中に一人で居た。

最初の内、霧は生温かった。

しかし、だんだんと霧は冷めてゆき、ほとんど水と変わらなくなる。

冷えて重くなった霧は地に降り、視界が開けてくる。

そしてその向こうに青白い大きな光が見えてくる。
マーシアは黙ってそれを見上げていた。

残った濃霧が動き出した。

その青白い光の中に吸い込まれてゆく。

そしてその青白い光、《グインニール》は呆然と自身を見上げる
マーシアに向かって頭をもたげている。

その頭が再び青く輝き始める。マーシアの最強魔法の焰すら鎮火
させたあの水流だ。マーシアがそんなものを喰らえばひとたまりも
ないだろう。

マーシアの表情には悲愴感や絶望は感じられない。

確かにいくら足掻いても、今魔法を使う事の出来ないマーシアに
はこの状況を挽回する術はない。

だが、彼女の雰囲気は恐ろしいくらいにまで落ち着いていた。

これで楽になれるかもしれない。

マーシアはそう思ってしまっている自分に気がついていた。

ここに来るまでの道のりの足取りが軽い事といたらなかった。

ファルガールに逢う事が出来るかもしれない。

その事を期待すればするほど、適わなかった落胆は大きくなる事
は分かっていた。

それでも心踊らせずにはいらなかった。

しかしその期待は裏切られる事なく、あの酒場でファルガールと
再会する事が出来た。

しばしの別れはかえってその者に対する気持ちを強める。

しばしというには長過ぎた十三年はマーシアのファルガールに対

する気持ちを強め過ぎた。溢れて、気が狂いそうになる気持ちを制御するのにどれだけ苦労をしたことか。

だが、十年前の転機がもたらしたファルガールの変化はそんな風に膨れ上がった彼女の気持ちに応える事とは全く正反対のことだった。

彼は自らの業ゆえに、自らの夢ゆえに、マーシアと逢わない戒律を自らに課していた。

考え様によつては、ファルガールの中でマーシアと逢う事が戒められる価値を持つていたという事になるかもしれない。

だがその事実は互いに想い合いながらも、結ばれないという残酷な結果をも表していた。

そう、残酷だった。

あれほど気持ちを膨らませてしまったのに、もう逢えないなんて同じ街にいて、逢う事ができる距離にいたのに。

また再び断たれていた自分と彼の関係が始まると思っていたのに、彼が弟子を見付け、育てて出てくると言っていたこの大会。再会して二人の関係がまた始まる。

何度見た夢だろうか。

寝ている時だけではない、起きている時も見た夢だった。

それが叶わない。

これを残酷と呼ばずに何と呼ぼう。

リクに事情を聞き、この事実を悟った時から今までの苦しさは、炎の魔法を極めるために行った、厳しいという言葉ではとても想像出来ない修行のそれを遙かに凌駕する。

いつその事、ここで一瞬にしてこの世から消えてしまった方が遙かに楽ではないか。

自分に向かって大水流を吐き出さんとしている《グインニール》

を見上げながら、マーシアはうつすらと微笑みを浮かべた。

青白い光の蛇は前の形態で水弾を撃つ時もそうしたように、頭を仰げ反らせる予備動作を行う。

ゆったりと、海原に向かつて大きく振られる竿のようになりつつ、マーシアに向かつて頭を戻してゆく。

そして今、水流を吐き出さんとしたその時だった。

一条の稲妻が《ゲインニール》の頭を撃った。

巨大な光の蛇は大きく身体を仰げ反らせ、体勢を崩す。

稲妻は鏡を反射する光のように《ゲインニール》の表面を跳ね返り、マーシアの前に落ちた。

その閃光にマーシアは一瞬目を瞑る。

そして、その目を開いた時、そこにいたのだ。

マーシアの愛しく、最も逢う事を夢見た男。

紫電を纏う矛《ヴァンジュニール》を携えたファルガールカーンが。

今、ファルガールはマーシアに背中を向けており、厳しい表情で上を見上げている。

その視線の先には撃ち損なった水流を改めて吐き出さんとしている《ゲインニール》がいる。

既に頭を仰げ反らせ終え、首を振り下ろしている最中であり、もう一度《駆け抜ける稲妻》を唱えるヒマはない。

ファルガールは《ヴァンジュニール》の先を《ゲインニール》に向け、唱え始めた。

「我は電気用いて縄を縊らん！ この《戒めの雷縄》に捕縛されし者は痺れと共に、自由を奪われるであろう！」

《ヴァンジュニル》の先から雷が曲線を描いて《グインニール》へと伸びてゆく。そして、その青白い光の大蛇に絡み付くと、その身体に電気が流れる。

《グインニール》はビクビクと身体を震わせる。

水流の危険が去ったにもかかわらず、ファルガールは厳しい表情を崩さない。

不意に彼の《ヴァンジュニル》が横方向に引っ張られた。

巨大な青白い光の蛇がその身体をくねらせ、《戒めの電縄》の束縛から逃れようとしたのだ。

彼は慌てて《ヴァンジュニル》を操り、電気の綱の長さを足す。

そうしている間に、《グインニール》は右へ左へと身体を振って《戒めの電縄》を外そうとした。

その度にファルガールは《ヴァンジュニル》を操ってそれを防いだ。

しかしついに、《戒めの電縄》は振り切られ、《グインニール》が再び自由を得る。

そこからの《グインニール》は早かった。

丁度引っ張ったのが頭を仰け反らすあの予備動作となっていたのだ。後は頭を振り下ろし、水流を吐き出すだけだ。

ファルガールは体勢を崩しており、どんな魔法も間に合わない。

しかしファルガールの表情はもはや厳しいものではなく、不敵なものに成り変わっていた。

後ろから聞こえる詠唱の声ゆえだ。

「火には水となり、風には土となる、斬る者あれば固くなり、殴る者あれば弾力を得ん、その特性は臨機応変、行うは武力の妨げ。我が纏いし《七色の羽衣》は如何なるものも拒絶する」

ファルガール達の上から虹色の光の膜がドーム状に被さった。そしてその魔法を行った者、カルクは背後からファルガールの前に一歩踏み出した。

今彼の目の前には、堤を破ったような大水流が迫っている。カルクは自分達を包む虹色の光の膜の前方に手を添えた。

たちまち光の膜が変型を始める。

ドームのような反球状だったものが、水の抵抗が少なくなるように魚の背のような流線形状になる。

そして初めはなよなよとした頼り無い光の膜からしっかりとしたガラスのような質感に変わる。

次の瞬間、彼らは水流に飲み込まれた。

辺り一面が水に囲まれる。

正面を見るとどれだけ激しく水が流れて行くのかが分かるが、《七色の衣》とカルクは微動だにしない。

彼の作った障壁は轟音さえ通していなかった。

「遅かったじゃねえかよ、カルク」

ファルガールが笑みを浮かべて文句を言うと、カルクは無表情のまま応えた。

「バカ言っつな、雷に追いつける者などいるものか」

そしてカルクは肩越しに二人を振り返る。

「ファルガール、お前が何の為に血相変えてここまで飛んできたのか教えてやれ。……しばらくあの化け蛇には邪魔はさせん。ゆっく

り話せ」

そうやってカルクは《グインニール》に向き直る。
言われた二人は、思わず顔を合わせた。

マーシアはコロコロと変わる展開についていけず、呆然としてい
る。

ファルガールは、さっきまで引き締まっていた顔が弛んでいた。

次の瞬間、ファルガールはマーシアに抱き着いていた。

「ファルガール……？」

そのマーシアを抱くファルガールの腕は震えていた。
何かの恐怖に解放された直後のように。

マーシアもゆっくりと、彼の背中に腕を回した。

すると、ファルガールの震えは徐々に収まって行く。

完全に収まったところでファルガールが耳元で囁いた

「やっぱり駄目だな……逢っちまうと我慢できねエ」

「え？」

「離れててやっとだ……酒場で逢った時はもうギリギリだった」

それを聞いたマーシアは驚いた。

ファルガールも自分と同じだったのだ。

彼もマーシアに逢いたくて仕方がなかったのだ。

だからこそ、自らの業の戒めとして彼女を選んだ。

「聞かせてもらわなくちゃね」

今度はマーシアから話し掛けた。

「何を？」

「あなたが血相を変えてここまで飛んで来たのは何の為？」

「……俺の夢を守る為だ」

「大災厄と闘う？」

マーシアはファルガールが魔導研究所を出た時の話を思い出した。しかしファルガールはマーシアの肩の上で首を振る。

「八十点だ。それじゃ何で俺が大災厄と闘うのかわからねエ」

「……何の為？」

しばらくの沈黙の後、ファルガールは話し始めた。

「十年前の大災厄の事は聞いたか？」

「ええ」と、マーシアは頷いた。

「あの時は自分以外誰も助けられなかった。自分の無力さを思い知ったってヤツだ。情けなくて仕方がなかった。」

で、俺が守ったんじゃねえが、たった一人生き残ったガキが言いやがったんだよ。だったら、あの嵐より強くなればいいってな。そのガキも両親目の前で殺されてるハズなのによ。俺は二度情けなかったね。」

それから俺はそのガキ、リクを弟子にして育てながら、もう一つの夢を持つようになった。『守りたい人を絶対守り切れるようになる事』だ。どんな状況から、どんな窮地から、大災厄の中からでもだ」

「守りたい……人……？」

聞き返され、ファルガールは抱き締めていたマーシアを一旦放し、一度目を合わせてから応えた。

「お前の事だ、マーシア」

マーシアの視線の先にあるファルガールの灰色の目はこれまでに見た事ないほど真摯しんしなものだった。

「……私？」

「そうだ。だからお前が死ねば、この夢も終わっちまうんだよ」

魔導研究所を出る時にした会話がマーシアの頭をよぎる。

あの時、ファルガールは夢を叶えること、夢が無くなってしまふ事が残酷だと言っていた。そしてファルガールがマーシアを抱き締めた時に震えていた腕。

彼は恐れていたのだ。

自分の夢が終わってしまう事を、そして何よりも守りたいマーシアを亡くしてしまう事を。

よりもよって大災厄に奪われる形で。

彼女のもう二度とファルガールに逢えないのではないかという懸念は間違っていた。彼は初めからいつかはマーシアに逢うつもりだったのだ。

マーシアを守る為に。

「……ホントはちゃんと守れるようになったって確信出来てから逢うつもりだったんだけどな。……この際だ、勝手に確信しちまおう」

ファルガールは優しくマーシアに笑いかけて見せる。

マーシアがファルガールの表情の中で一番好きな顔だ。

「……待たせて済まなかった、マーシア」
「ファルガール……っ！」

二人は再び抱き合った。

しばらく抱き合っていた二人の耳に、咆哮が聞こえた。

「ファルガール、済まないが時間切れだ」

相変わらず抑揚のないカルクの声に二人は顔を上げ、立ち上がる。もう、《七色の羽衣》の効果は切れており、この場は安全では無くなっていた。

それでもカルクは一度後ろを向き、彼と二人は頷きあった。

「ありがとう、カルク」

マーシアの礼に、カルクは一つ頷き、一言答える。

「君のためだ」

そして三人はグランクリーチャー《グインニール》に向き直った。三人の真ん中に立つファルガールはその巨体を見上げて一人呟いた。

「……証明しなきゃな、お前相手にも誰かを守れるようになった事を」

41 『砂漠の民を護る者』

「砂漠はとっても危険な所。

昼は灼熱、夜は極寒。

道には迷うし、いつも飢えてる怪物にも遭う。

しかし砂漠にはあいつがいるさ。

サソリに乗ってやってきて、助けてくれる、砂漠の民を護る者。

あいつの居場所は誰も知らない。

あいつの名前も誰も知らない。

ただ、あいつは“マスター・スコピオン”って呼ばれてる。

あいつの居場所は誰も知らない。

あいつの名前も誰も知らない。

ただ、あいつは困った時に必ず来てくれる。

あいつは砂漠のヒーローさ。

「撃つべき目標は一つにあらねば、我《散り拡がる紫電》を放たん
！」

ファルガールが放った雷は途中で枝別れし、彼ら三人を襲って来た《グインニール》の触手を皆吹き飛ばした。

続いてマーシアが魔法を詠唱する。

「我らを照らし出す星の《紅炎》よ！ 我が導きによりてこの場に

現れ、汝が望むがままに燃やし、焦がし尽くせ！」

マーシアの足元の地面から炎の龍が生えた。
巨大な蛇の頭に襲い掛かり、焼き落とした。

しかし《グインニール》はすぐに失った部分を再生し、咆哮をあげて水弾を三発吐き出す。

その水弾にはカルクが立ち向かう。

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増して反射する！」

カルクの前に光の板が現れ、水弾を全て受け止めた。

水弾は一旦、その光の板に当たったところでその動きを止め、その大きさを三倍くらいまで膨れ上がらせる。

そして光の板を離れると真直ぐ生みの親に向かって飛んでゆく。

「そのもの、《帯電》によりて、裁きの力を与えん！」

続けて唱えたファルガールの魔法によって弾き返した水弾に雷が当たり、バチバチと電気が通る。

それを喰らった《グインニール》は増幅された水の勢いに押され、ファルガールが帯びさせた電気に痺れた。

マーシアの《白き灼焰の恒星》で、消え去りかけてから青白い光の身体を持つ蛇だった《グインニール》は、あの強大な大水流を三度放った後、元の触手のある巨大な化け蛇の姿に戻っていた。

ファルガールの推論によると、“ラスファクト”の防衛能力は二段階あるという事だった。

つまり一段階目の防衛本能で大災厄を起こす。

そして大災厄をも倒されそうになった時、二段階目の防衛本能が発動し、あの大水流を三度放つまであの青白い光の化け蛇になるという事だ。

即ち、グランクリーチャー《グインニール》は一撃では倒せない。必ず一度、青白い光の状態にしてから、改めて必殺の一撃を加えなくてはならないのだ。

「結果的に言うと、マーシアが先に闘ってくれて良かったぜ。俺の考えていた作戦も一撃必殺だったからな。あのまんま闘ってたら、あの青白い光の状態での大水流に飲み込まれてたかもしれねえ」「しかしどうする？ マーシアはもう《白き灼焔の恒星》は撃てま
い」

カルクは後ろで汗だくになっているマーシアに目をやって言った。その答えとしファルガールは親指で自分の胸をさす。

「俺がいる」

「しかし私は後に続けるほど威力の高い魔法は使えない」

あの激しい大水流を防いだ事実が示す通り、カルクは防御系の魔法が突出した魔導士だ。防御力が異常に大きい代わりに攻撃力は犠牲にされている。

ファルガールの一撃目で《グインニール》を青白い光の蛇の状態にしても、続く魔法が使えないのでは止めがさせない。

「まだアイツがいるさ」

「……リク君か？ しかし彼がそれほど威力の高い魔法を使えるとは思えない。魔力だってそれほど高くはないだろう？」

カルクくらいの超一流の魔導士ともなれば、会うだけでどのくらいの力量を持つているかは容易に見抜ける。

ましてやカルクは教師なのだ。その眼力は他の者の比ではない。

「アイツの力は見ただけじゃ分からねえよ。俺も初めは才能がないとは思ってたが、一緒に生き残ったのも何かの縁だと育ててみたらビツクリだ」

ファルガールは楽しそうに語る。

その目をしばらく覗き込み、カルクが頷いた。

「……よし、お前を信じよう」

「ありがとよ。取り敢えずこいつを止めとくぜ。チャンスは一回こつきり。アイツが来るまでは我慢比べだ」

そして、三人は《グインニール》と闘い続ける。

ファトルエル北門では大量のクリーチャー達をファトルエルに入れまいとする防衛戦が展開されていた。

「《鷲掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせ！」

カーエスの掌から炎が放たれ、正面にいたクリーチャー五体が一瞬にして燃え尽きた。

その後ろから二足歩行型クリーチャー《切り裂く者》がその長い

爪のある腕を振り上げた。

しかしカーエスはいち早くそれに気付く。

「だあぁっ！ おんどれらマジでうっとうしいんじゃないっ！（訳注・あなた達は本当にうっとうしいのです）」

方言丸出しの怒声と共に《風玉^{かみたま}》を放ち、《切り裂く者》をファトルエル北門の向こう側まで吹き飛ばす。

今度は、《噛み千切る者》と呼ばれる、口に鋭い牙を持った四足歩行型クリーチャー四体が四方から飛びかかってくる。

「ええっ…、加減につ…、せいやぁっっ！（訳注・いい加減にしないさい）」

カーエスが怒鳴ると同時に発動したのは《弾きの壁》だ。

その鋭い牙がカーエスに届く一寸前で止まり、後は全てそれぞれ元来た方向に弾き返される。

と、その弾き飛ばされた一体が闘っているジェシカに向かって行く。

しかしジェシカは当てられる前に、その一体を槍で叩き落とした。そしてカーエスを睨み付けて怒鳴る。

「貴様っ！ 魔法を使うならもう少し周りを考えて使え！」

「どアホッ！ こんな闘いの中で周りの事なんて考えられるかアッ！」

二人とも、その会話の間にもクリーチャーを倒す。

カーエスの言い分はもつともだった。

何しろ次から次へとクリーチャーが襲い掛かってくる。

しかも一体ずつなんて優しい気遣いはしてくれない。運が悪けれ

ば五、六体を一度に相手しなければならない。

更に悪い事に、クリーチャー個体で見ても並の強さでは無い。

一匹一匹は常人の運動能力を遙かに上回り、しっかり、もしくはよほど魔導に長けた魔導士でないと太刀打ち出来ない。

それだけ強いクリーチャー達が何百何千何万、と一度にやってくる。

それが、大災厄が大災厄たる大きな要因の一つなのだ。

カーエス達の参戦により一時盛りかえした戦線であったが、先程からクリーチャーの数が増え始め、戦線が少しずつ下がって来た。

いつまで経っても終わる目処がつかない闘いに魔導騎士団員の志気も低下し始めている。

このままでは駄目だ、と判断したジエシカはクリーチャーを槍でどかしながら、カーエスの方に進んで行った。

「カーエス!!ルジュリス!」

「何ヤツ!?!」

「私と魔導騎士団は一度この場を離れる! 少しの間、お前達だけでこのラインを保っておいてくれ!」

ジエシカの要求にカーエスは眉を潜めた。

それも当然だ。

ここにいる戦力のほとんどは、魔導騎士団だ。それがこの場を離れると言っている。つまりこの場に残るのは、カーエスとクリン、クラン、後はほとんど戦力になっていないコーダとフィラレスだけだ。

「ちょ、ちよつと待てェ!」

「一瞬だけだ! 隊列を組み直して再び突入する。少し荒っぽくな

るので、怒号が鳴ったら何とかして避難しろ！」

カーエスの疑問が初めから分かっていたかのように答えると、後は返事も待たずにクリンと克蘭の元に行き、同じ事を伝える。

続いてフィラレスとコーダにも伝えると、クリーチャー達のスキを伺い、槍を振り上げて叫んだ。

「魔導騎士団に告ぐ！ 戦列を組み直す！ 戦線を一時離れて退け！」

すると魔導騎士団員達はさっと、槍と退き、後退して行く。

かなり寂しくなった戦場でクリンと克蘭は目の前のクリーチャーの大軍を見つめた。

「信頼して任されたからには責任を全うしなくちゃね、クリン」

「その通り、全力をもってしてこの仕事に当たるべきだよ、克蘭」

そして構えをとり、魔法の詠唱を始める。

「冷氣よ、凍てつく霜と共に降り……」

「《氷の足枷》あしかせとして、敵を戒め捕縛せよ……！」

砂漠の夜の冷氣がクリンと克蘭の目の前にいた数十体のクリーチャー達の足元に集い、その足の自由を奪う足枷を形作った。

突然、足の自由を奪われ、クリーチャー達の足が止まる。

「おーっ、さすがクリン！ クラン先生！ やるのう。よっしゃ俺もやっつたるでえっ！」

カーエスも負けじと魔法の詠唱を始める。

「火誘う水よ、湧き出て《油溜まり》となれ！」

クリーチャーの行く先の地面に油が湧き出て水溜まりのようになる。

そこに足を踏み入れたクリーチャー達は当然、つるりと足を滑らせ転倒した。次の者も最初に転んだ者を踏み台にして乗り越えようとするが超えられず、敢え無く転倒。

クリーチャー達が後から後から《油溜まり》に突っ込み、面白いように足を滑らせて転倒して行く。

恐ろしい風貌であるクリーチャー達だったが、そのコントのような光景でかえって滑稽に見えた。

「ハツハツハ！ バナナの皮やったらもっとおもろかったんやけどな〜」

笑い声をあげるカーエスに向かって“屍”を踏み越えてとうとうクリーチャー達が油溜まりを越えようとしている。

しかしカーエスは余裕の笑みを崩さない。

「でも、バナナやったら……」指先に小さな火をつけ、油溜まりに投げ入れる。「……あんましよう燃えへんよってな」

その言葉が引き金になったように油溜まりが燃え上がり、その上にいたクリーチャー全てをその炎地獄の中に包む。

「……流石にやるな」

魔導騎士団員達に指示をして隊列を組み直したジェシカは前方で氷に自由を奪われたり、油で足を滑らせ転ばされた拳げ句、火にまみれたりしているクリーチャー達を見て呟いた。

今魔導騎士団員は、大通りの幅一杯に一列に広がっている。

その感覚はまさにぎゅうぎゅう詰めで、これ以上どう詰めても一人、犬一匹入りはしない。

後ろにクリーチャーを漏らすのを防ぐ為だ。

勿論一列横隊なので一人でも倒れれば、穴が出来てしまう。しかしそんな穴を作る気など毛頭ない。

「ジェシカ様、戦列が整いました」

ジェシカの隣に配置されていた騎兵が報告する。ジェシカはこくりと頷き、槍を振り上げて言った。

「これより我らはあのクリーチャーの群れの中に突撃する。あの北門の入り口からクリーチャーを全て押し出すように突っ込むんだ。遠慮はいらん、遅れはとるな、以上！ ……全員構えっ！」

ジェシカの言葉が終わると同時に、魔導騎士団員全員が片手に各々の武器を携たずなえたままクラウチングスタートの構えをとった。

全員が見据えるのは前方に見えるクリーチャーの大軍だけだ。

そしてジェシカはその魔法を唱え始めた。

「刃よ、槍先よ、鋭くなれ！ 盾よ、鎧よ、堅くなれ！ 兵士達の志気よ、高まれ！ 我らを見守し《軍神の加護》の元に！」

中心にいるジェシカから外側に向かって魔導騎士団員達の身体に光が灯っていく。

全員に魔法の効果が行き渡ったのを確かめ、ジェシカは掛け声と

共に槍を天へ振り上げた。

「突撃イイツ！」

後方から光を感じ、ジェシカの掛け声が聞こえたカーエスは近く
の端にいたフィラレスの腕をとり、上空に《飛躍》で逃げた。

クリン、クランも同じ方法だ。

コーダはひらりと道路沿いの商店の屋根によじ登る。

そのすぐ後に光を纏った魔導騎士団が横一列に並んだまま弾丸の
ような早さでクリーチャーの大軍の中に突っ込んだ。

同時に前線にいたクリーチャー達がまとめて吹っ飛ぶ。

突っ込んだ勢いはクリーチャーの大軍の中に入ってもほとんど衰
えなかった。

一人一人、の剣を、槍を振るうスピードと力強さが段違いに上
がり、クリーチャーの攻撃に遭っても、全く傷付かない。

クリーチャーはほうきに掃かれるゴミと同じようにファトルエル
北門の向こうに押し出されて行く。そのほうきが掃いた後にはチリ
一つ残らない。

ともかく圧倒的な勢いでジェシカ達はファトルエル北門の内側に
いたクリーチャー達を一掃した。

その時点で、魔導騎士団員達の纏っていた光が消える。《軍神の
加護》の効果が無くなったという事だ。

しかし勝利の時の声をあげるヒマもなく、再び門からクリーチャ
ーが入って来たのを見てジェシカはその顔を歪めた。

「くっ……、本当にキリがないな……」

そこに一人のカンファータ兵が走って来て、跪いた。

「ジェシカ様、申し上げます！ この門より入り込んだクリーチャーの数が増え始め、各決闘場の防衛が厳しくなってます！」「何！？ もうそんなにか？」

確かにここで闘っていて幾らかクリーチャーを中に入れてしまった事は分かっている。しかしその数は大した事はなく、残りの兵達で何とかできると思っていたのだが、思ったより多いらしい。

「どうか、各決闘場に戦力を分けていただきたい！」
「しかしこの戦力にも余裕はない」

今までの戦力でもいくらかクリーチャーを漏らしていたからこそ、このような事になったのだから、その言葉は疑いようもない。両者が思案にくと、意外な第三者が口を挟んで来た。

「あの、俺に提案があるんすけど……」
「お前は確かリク様の従者をしていたな」
「ちよつと違うけど、まあいっす……ここは俺に任せてもらえやせんか？」

いまいちよく分からないコーダの発言にジェシカは眉を潜める。

「どついう事だ？」
「ここを守るのは俺に任せて皆で行って来いと言ってるんす」

ジェシカはますます訳の分からなさそうな顔をした。それも当然である。さっきまでほとんど戦力になつてなかった男

が、いきなり全員分の戦力になろうと言っているのだから。そんなジェシカ的心情を理解したのか、コーダは更に言葉を続ける。

「信用出来ない気持ちは良く分かりやすよ。だから見せやす」

そう言ってコーダは再び迫るクリチャーの大軍を見据えた。そして片手を天に振りかざす。

「おいで、《シツカーリド》」

それだけ唱えると、クリチャー達の上空に光が現れ、それが大きなサソリを形作る。その後、その巨大な質量がクリチャー達に向かって墜落した。

カーエス、クリン、クラン、ジェシカ、フィラレス、魔導騎士団員各位、そして報告に来ていたカンファータ兵。その場にいた者全てが目丸くした。

「何や……アレ？」

「まさか、……“召喚魔法”……！？」

“召喚魔法”。その名の通り何もないところから生き物呼び出す魔法の事だ。

しかしそれはそう見えているから便宜上そう呼ばれているだけで、実際はただ別の場所から呼び出す魔法ではない。

この魔法は魔力による物質の構成、つまり魔力で形を作って具現化させる魔法なのだ。

言うだけなら簡単だが、実際使う事はほとんど不可能だとされている。

ファルガールの《ヴァンジュニル》も魔法武器召喚という召喚魔

法の一種だが、生物を召喚する難しさはあれの比ではない。

魔力で形を作って具現化させる、それは即ち術者が魔力をもってそれを創造する事なのだ。それには外観だけではなく、内臓や関節、筋肉の仕組みも全て知っておかなければならない。しかも、非常に正確な魔力制御も必要とされる。

よってまともに“召喚魔法”を使える者は滅多にいない。

周りが騒然とする中、コーダは《シツカード》の上に飛び乗り、御者席につく。

そして、その大きなサソリの背中に手をついて言った。

「《シツカード》、“対集団戦闘モード”っ！」

それが呪文であったかのように大サソリの身体から光が発せられた。

そして光が収まると、大サソリの身体は関節を動かす邪魔にならない程度に装甲に覆われ、ハサミも金属製っぽくなっていた。

尾は長くなり、その先は鋭い鎌かまがついていた。

後はもう暴れ放題だった。

飛び回ってクリーチャーの集団を腹の装甲で押しつぶす、ハサミで一度の何体もクリーチャーを切る、そして鎌のついた長い尾を振り回す。

獅子奮迅の勢いだった。

「まさか……、“マスター・スコピオン”!?」と、言ったのは報告に来たカンファータ兵である。

「知っているのか？」

ジェシカが問うと、カンファータ兵はコーダの活躍に目を奪われ

たまま答えた。

「はっ、自分はここファトルエルの常駐兵でありまして、度々この砂漠の噂を耳にする機会がありました」

「それで“マスター・スコープオン”とは？」

「いわゆる正義の味方です。この砂漠では危機に見舞われると、どこからともなくサソリに乗った男が現れ、助けてくれるそうであります。」

彼を見たという証言がたくさんあるのでどこかにいるとは信じていました。しかしその中で何件か『“マスター・スコープオン”は何もないところからサソリを呼び出す』という証言がありまして、いくら何でもそれはないだろうと思っておりまして。しかし……全て本当だった！

このファトルエルではデュラス「アーサーが無敵を誇っておりましたが、その実、もし闘えば、本当に最強なのは“マスター・スコープオン”であるとだれもが思っています」

砂漠のヒーローを目の当たりにした興奮か、そのカンファータ兵は少々熱っぽく語ってみせた。

説明を聞いたジェシカは改めてサソリに乗った白い髪に褐色の肌を持つ青年を見る。

一旦あらかた片付け終えたコーダがサソリでジェシカの方に飛んできた。

「どうツスカ？」

「……見事だ、認めよう。お前は信用に足る実力を持っている」

ジェシカがそう言うとコーダはニカツと笑った。

「それはよかった」

「コラッ、コーダッ！ おんどねサソリ呼び出せるんやったら、何で今まで呼び出さんかったんじゃ！」

横からカーエスが怒鳴り付けると、コーダは照れ隠しか、後頭部を掻きながらあっけらかんと言った。

「だって、もしそうしてたらあんたらの仕事が無くなるでしょう？」

その不敵な発言に全員が啞然とする。

「……ともかく、これでここは“マスター・スコピオン”一人に任せて、私達は全員でファトルエルの中のクリーチャーの駆逐に当たる事ができるな」

そして全員は頷きあい、コーダ一人を残して南の方に走って行った。

残ったコーダは再び北門から侵入しつつあるクリーチャー達を見据えて一人ごちた。

「さて、砂漠の平和の為にひとがんばりしやスか！」

42 『ジルヴァルトの望み』

我ら二人は誓おう。

この場にて決着をつけることを。

勝負が決まらぬ内はこの場を決して離れないことを。

観る者達を退屈させぬ闘いをすることを。

そして、お互いに最後に立つのが自分であることを。

ここ、ファトルエル大決闘場に誓おう。

く大決闘場に刻まれた碑文よりく

ファトルエルの北門を“マスター・スコピオン” コーダに任せ
たカーエス達は北通りをひたすら南へと走っていた。

大通りにもいくらかクリーチャー達はいたが、さっきまでその数
十倍もの数を相手にして来た彼らの敵ではない。

彼らは第一決闘場に通じる道が別れているところまで来ると、初
めて立ち止まった。

「戦力は各決闘場で五等分しよう、カーエス!!ルジュリス」
「おう」

名を呼ばれたカーエスが返事をする。

「貴様には大決闘場を任せる」

「フリーは？」

「一緒に頼む」

フィラレスがこくんと頷いた。

ジェシカも頷き返しクリンとクランの方に向き返る。

「クリン、クラン両氏には第四と第三をお願いしよう」

「ああ」

「任せておいてよ」

クリン、クランがそれぞれ承諾すると、ジェシカは顎に手をやった。

「第一には私が行くとして、第二に行く人間がいないな」

「そっか、もう人数おらへんもんなあ。せや！ クリン先生、クラン先生」

カーエスが何か思い付いたのか、クリンとクランに話し掛けた。

「何だい？」

「先生達、もう二人ずつくらいに分裂出来ませんか？」

「カーエス君……君、そこはかたなく僕達を馬鹿にしてない……？」

カーエスの突飛な提案にクリンとクランが珍しく柔和な顔を歪めた。

そこで、先ほど報告をしに来たカンファータ兵が口を挟んだ。

「第二決闘場の戦力ならば心配いりません」

「どつという意味だ？」

「第二にはデュラス「アーサー」を初めとするファトルエル勢の戦力がついております」

「了解した」

ジェシカは一つ頷くと、今度は後ろに控えている魔導騎士団員達に向き直った。

「お前達は、兵力を五等分、彼らについてそれぞれの決闘場に赴き、そこに避難しているファトルエルの民を死守するのだ」

魔導騎士団員達は一糸乱れぬ様子で敬礼すると、早速人数を等分にした列を五つ作り、カーエス達の後ろについた。

「では第一決闘場に赴く者について参れ」と、ジェシカは第一決闘場への道を走り出し、列の一つがその後について行く。

「よっしゃ、俺らも行こか」

すぐそこに見える大決闘場に向かって走るカーエスとフィラレスの後をもう一列がついて行く。

同じようにクリンとクランにもそれぞれ一列ずつついて行った。

残ったのはあのカンファータ兵と一列の魔導騎士団である。

しばらくその面々を眺めるとカンファータ兵は言った。

「……じゃ、第二決闘場には自分が案内しましょうか」

大決闘場に向かったカーエスはその戦況を見て目を丸くした。

「な、何でこんなにクリーチャーいてんねん!？」

確かにあの大乱戦で幾らかクリーチャーを漏らした覚えはあるし、その数は定かではない。

しかしどう考えても目の前にいるクリーチャーの数はおかしかった。

流石に北門と同じくらいとまでは行かなかったが軽く数えて数十体はいるだろう。

ふと隣にいたフィラレスに視線を移したカーエスは彼女がずっと上空を仰いでいた事に気がついた。

カーエスも上空に目をやる。

上空には羽や翼を持った、飛行可能なクリーチャー達が飛んでいた。

と、そのうちの一体に下から放たれた光線に撃たれた。下では魔導光線銃を構えたカンファータ兵がいる。

すると、そのクリーチャーがそのカンファータ兵に向かって落下して来た。そこを他のカンファータ兵が一斉にそのクリーチャーに集中放火を浴びせ、やっと一体のクリーチャーを仕留める。

(そうか、ああやって上空から決闘場内に入らんようにしとるんやな)

カンファータ兵達の方針が分かったカーエスは次に撃ち落とされて来たクリーチャーを《わじつが驚掴む炎》で一瞬にして葬る。

突然の飛び入りに目を丸くしたカンファータ兵にカーエスは言っ

た。

「ほれほれ、早よ次撃ち落としいな」

催促され、カンファータ兵達は上に向かって魔導光線銃を構えた。そして引き金を引くと銃口から魔力の光線が発射される。今度は三体同時に落ちて来た。

「燃え立ち上がれ……」

それぞれの落下予測地点に赤い円が描かれる。

「《火柱》！」

落ちて来た三体が地面に触れる直前にカーエスは魔法を完成させた。

三つの赤い魔法陣から同時に火柱が上がった。三体はそれぞれ断末魔の声をあげて息絶える。

カーエスはそれを満足げに見届けると後ろに並んでいたカンファータ兵達に向かって言った。

「よっしゃ、ここは俺一人に任せてええから、あんたらは西、東、南に別れて頼むわ」

そのカーエスの指示に騎士団員達は「はっ」と返事をして、きびきびと行動を開始する。

それを見届けた後、カーエスはフィラレスが大決闘場を見つめているのに気がついた。

(リクの奴、……大丈夫かいな?)

大決闘場の観客席からは割れんばかりの歓声が上がっていた。はじめ、ここに来た彼らは目を疑った。

大災厄が起こった後、カンフアータ兵の誘導でここに来てみれば、五年に一度しか使われない大決闘場のバトルフィールドで闘っている者達がいたのだから。

しかもその闘っている者達というのが、夜が明けた後に闘う予定だったはずの決勝に残った二人、リク「エルとジルヴァルト」ベルセイクであったのだ。

だがそんな疑問はすぐに飛んでいってしまった。

不安に支配されたまま大災厄の夜を過ごすより、観戦して不安など忘れ去ってしまった方が遥かにいいからだ。

事実、みんな下を向いているお陰で上空に時々見られるクリーチャー達に気が付き、騒ぎ立てる者も出ない。

「我は放つ、射られし者を炎に包む《炎の矢》を！」

胸の前に構えたてから炎が生まれ、弓矢の形を成す。

リクはそれを引き絞って放った。

《炎の矢》は真直ぐにジルヴァルトに向かって飛んで行く。しかしジルヴァルトはそれに眉一つ動かさない。

「空間よ、捻れよ。離れしところを《歪みの穴》もて結び繋げ」

ジルヴァルトの正面に光が丸く円を描く。
その円の中にリクの放った《炎の矢》が飛び込んだ。
するとリクの正面にも円が描かれ、どういつ訳かあちらの円に飛び込んだ《炎の矢》がいきなり現れたではないか。

「うわっ……!?!」

リクは驚いて尻餅をついた。

その頭上を《炎の矢》が通過する。

が、息をつく暇もなく転倒している彼の周りの砂が動く。

「汝、《砂の戒め》によりて縛られよ」

次の瞬間、砂がリクに覆い被さるように跳ね上がる。

ほぼ反射的にリクは《飛躍》を唱え、空に逃れた。彼はそのままジルヴァルトの頭上まで飛び、彼に向かって落下し始めた時、リクは次の攻撃に入った。

「この場に在るもの縛るは《更なる重力》!」

ジルヴァルトの足元に黒い円が描かれる。そして彼と、その頭上にいるリク自身にかかる重力が大きくなる。

当然、リクの落下速度も大きくなる。

リクはにやりと笑って両腕を振りかぶり、更に唱えた。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて!」

冷気が彼の振りかぶった腕に集まり、鎚の形を形成する。

リクはその鎚を勢い良く振り降ろす。

増した落下速度もその威力を多分に相乗しているはずだ。

得意げなリクの笑顔に、ジルヴァルトは冷たい眼差しを向けた。その眼差しには強い失望が感じられる。

「結局その程度か……」

そう呟くと自分に向かって振り降ろされた《氷の鎚》に向かって右手を伸ばした。まさか、ただ受けようとしているのか、いやそんなはずはない。

ジルヴァルトは《氷の鎚》を受け止めた瞬間、その魔法の詠唱を始めた。

「衝撃は我が右手より左手に」

そして左手を落ちて来たリクの腹に当て、魔法を完成させる。

「《衝撃の伝導》」

そのジルヴァルトの左手は添えられた程度だった。

しかし、触れられた瞬間にジルヴァルトの右手が受けたものを、左手を介してリクの腹部に伝えられた衝撃は尋常なものではなかった。

一瞬にして、体中の空気が強制的に吐き出され、元いた場所まで吹き飛ばされる。

しかしそれだけでは済まなかった。

「なっ……！？」

落下した途端、地面が凹み、リクの身体がめり込んだ。

フィラレスにも使った《地への帰依きえ》だ。

さらにジルヴァルトは二度目の《砂の戒め》を唱え、リクの身体

の自由を奪う。

(それでも口は動く!)

そう思い、リクは呪文を詠唱せんと口を開いた。

しかし、リクは声を出す事はしなかった。

声自体は出る。が、出しても無意味である事に気がついたからだ。

(魔力が動かせない……!?)

魔力を動かせない。それは魔導を行う事が出来ないことであり、即ち魔法が使用出来ない事に繋がる。

そんなリクの元には影が差していた。ジルヴァルトから伸びて来た《魔縛りの影》だ。

頼みの魔力まで封じられ、魔法を使う順序は違えど完全にフィラレスの時と同じ状態になる。あとは《地への帰依》の効果で地面の下に引き摺り込まれるだけだ。

もはや彼に打てる手はなかった。

「くっ……!」

何も出来なくなったりリクは悔しさに顔を歪ませた。

実際にこうしてまともな形で闘うのは初めてだ。

シノンをおつという間に倒したのを見て逃げ出した時はまだ勝てる可能性を感じていたのだが、これほど厚い壁だったとは。

何度か攻撃を仕掛けたがことごとく防がれ、返されてしまった。

それに、なによりも……

(アイツ……あそこから一步も動いてねえ……)

圧倒的な力の差をまざまざと見せつけられた気分だった。実際、勝つ為に必要な行動は全て封じられ、リクの負けはほぼ確定している。そう、あっという間に。

「興醒めだな……」

リクの身体が腰まで地面に埋まってしまった時、ジルヴァルトが突然口を開いた。

「何？」

「短期間でここまで変わった男は初めてだから闘ってみたものの、結局お前は俺の期待に応えられなかった」

「お前の期待……だと？」

「そうだ。強い人間と闘う事……それが俺の望み。せつかくこのフアトルエルまでやって来たのに誰一人として俺を満足させる事は出来なかった……。そしてお前が最後の期待だった。だが見事に裏切ってくれた」

本当に失望したのだろう。ジルヴァルトのリクを見る目は見るものを本当に凍り付かせかねないくらいの冷たさを感じる。

これはリクが初めて感じたジルヴァルトの感情だった。

いや、今思えば大災厄と闘いに行くのを遮おさえつてまでリクと闘うことを望んだ時こそ彼が初めて見せた感情だったのかもしれない。

「なあ、何であんたは強い奴と闘いたがるんだ？」

「俺は冥土の土産を与えるような無駄な真似はしない」と、ジルヴァルトはにべもない。

しかし、それを聞いたリクは笑っていた。

その表情を見てジルヴァルトは眉間に皺しわを寄せる。

「死ぬのがそんなに嬉しいのか？」

「いや、死ぬのは嫌だ」

胸まで埋まったりリクは首を振って答えた。

「ならば何故笑う？」

「まだ死んでないからじゃねーかな？ お前は俺がもう死んだものだと思っ込んでるらしい。ま、それは間違いじゃない。絶体絶命、打つ手無し。死んだも同然なのは認めるが、俺はまだこうして呼吸をして生きている」

まだ彼には無邪気なように不敵な笑顔が浮かんでいる。

ジルヴァルトの眉間に刻まれた皺が消えた。

同時にリクが地中に沈む速度が格段に上がる。

「お、ジルヴァルト君はおふざけは嫌いかな？」と、リクは尋ねた。落ち着いた声の割に、既に地上に出ているのは首だけだ。

ジルヴァルトは答えない。黙って彼を見ているだけだ。

答えをまっとうしているうちに口が埋まってしまったので答えの催促も出来なくなり、彼は完全に地中に沈みきってしまった。

ジルヴァルトは黙ってリクが沈んで行った地点を見つめている。

観客達の視線もその一点に注がれていた。

時間が経つにつれ、観客席のざわめきが収まって行き、やがて時が止まったかのように静かになった。

その静寂を破ったのはそこに視線を注ぐ誰でもなかった。

ジルヴァルトが突然視線を自らの足元に移す。

そして彼がその地面の盛り上がり気味に気付いた時には既に遅かった。

「……っ！」

地面から何かが飛び出し、下からジルヴァルトの顎あごに強烈な一撃を見舞う。

かなりきつい一発だったが、彼は何とか踏み止まり、口の中の血を味わいながら、自分に一撃喰らわせたものの正体を見極める。

紛れもなく、地中に引きずり込まれたはずのリク＝エルだった。砂塗すなまみれの身体で、《鋼鉄の拳》で鉄に変えた右手を掲げるように振り上げている。この拳が先ほどジルヴァルトの顎を捉えたのだらう。

リクは脇に添えられていた左手をジルヴァルトの方に向ける。

「我は突かん、槍穂に裁きを宿す《雷の槍》にて！」

「我見たり、汝が《魔力の乱れ》」

彼の左手にその形を形成しつつあった《雷の槍》が弾けるように消える。

「流石に、二発目は無理か」と、呟き、リクは攻撃を止め、改めてジルヴァルトと向き合った。

「どうやって、あの状態から脱した？」

「沈む前にひよっとしたら、とは考えてた。あの影と《砂の戒め》は地面の下には効果が及ばない。後は《地潜ちしかぐり》であんたの真下に移動。《鋼鉄の拳》で拳を鋼鉄に変え、最後に《打ち上げ》でアッパーカット……お分かり？」

《魔縛りの影》はその影の上にある魔力を封じる。裏を返すと、

影の下に居れば魔力は使えるのである。

だが勿論地中では呪文の詠唱が出来ない。

前に述べた通り、呪文の詠唱は魔導を行いやすくする補助的な行為に過ぎないので詠唱無しでも魔法は一応使用可能である。

しかし呪文無しの魔法発動は数倍からの余計な時間が掛かり、おまけに不安定なので成功しにくい。

それをこの短時間で三つも発動させるという事は、それを行った者、即ちリクの魔導制御力が極めて高い事を意味していた。

(しかし合点が行かない)

ジルヴァルトは心の中でそう呟いた。

ここまで魔力を正確に扱えるのなら何故、レベル5以上の魔法を使わないのか。

リクがよく使う《炎の矢》《氷の鎚》《雷の槍》などは全てレベル4であり、その他の魔法にもそれ以上レベルの高いものはない。

使えないのか、使わないのか。

どちらにしろ、何か訳でもあるのか。

それらの疑問を氷解させる為にジルヴァルトの頭脳にはある策が浮かんでいた。

43 『白き鳥の名を呼ぶ時』

私の前には壁がある。
高い高い壁がある。

よじ登ろうにも手掛かりがない。
迂回しようにも右を見ても左を見ても端が見えない。
砕き抜こうにも道具がない。

しかし悲観はするまい。
やっこの見えない壁の存在を認め、越えることに挑めるのだから。^{5。}

こちらはファトルエル北の郊外。ファルガール達三人と今回の大災厄の中核を成すグランクリーチャー《グインニール》が闘っている場所だ。

あれから情勢は変わっていない。
ファルガールとマーシアが攻撃し、カルクが防御をする。

三人はびったりと息が合い、さしもの《グインニール》もなかなか足を進めさせてもらえない。

しかし、一見カルクによって簡単に防がれているかのように見える《グインニール》の攻撃の威力は半端ではない。

外れた攻撃が挟った地面がその威力を物語っていた。水弾の跡などは小さなクレーターになってしまっている。

一発でも当たれば確実に状況がひっくり返る。

「ここに敷かれしは《炎の陣》。冷気は決して入るべからず！」

《グインニール》が吐き出した水弾に対して張られた炎の壁は水弾を一瞬で蒸発させる。

攻撃で出来たスキを狙い、ファルガールが《ヴァンジュニール》を一閃させ、生み出した雷をその化け蛇の頭にぶつける。

更にマーシアが《紅炎》を使って畳み掛ける。

《グインニール》は衝撃に身を背後に仰け反らせ、更に大きなスキとなったが、三人は追撃を掛けるような事はしなかった。

三人の目的は飽く迄グランクリーチャー、即ち大災厄の足止め。

《グインニール》が体勢を直す間は無駄な追撃をするより、少しでも手を休め、力の温存を計る方を優先したのだ。

「ハア……ハアツ……！」

マーシアが苦しそうに肩で呼吸をする。

彼女の方が先に闘い、しかも初めは単独で、しかも一発限りの大魔法を使ってしまったているのだ。

むしろ今まで持っていることが驚くべきことであると言える。

「マーシア。まだ先は長い、無理するな」

「心配は有り難いけど、相手は大災厄よ……少しくらい無理をしなくちゃ……」

声を掛けたマーシアが苦しげに笑ってみせた。

それを見て、ファルガールも笑ってみせる。

カルクは少しだけ口の端を持ち上げてみせた。

「俺達は今んとこ平気だけど、だんだん辛くなって来るんだろっな」

「そっいえば、我々が待つ彼は果たして無事だろうか？」

カルクの言葉に、ファルガールはファトルエルを振り返って答えた。

「ま、危うくも何とか生きてるってトコだな。あのジルヴァルトとかいうガキ、ただ者じゃねえな。あんな奴まで参加してるとは思ってなかった」

「そんな相手にレベル4以下の魔法だけで勝てるのか？」

不意にそう問われたファルガールは困ったように苦笑してみせた。

「バレてたか」

「あれは使えないのか？ 使わないように教えているのか？」

そのカルクの問いには一瞬だけ迷った後に答えた。

「前者だ。使えねえ」

その答えにカルクは何も言わなかった。予想していた答えだったからだ。

無言のうちに更なる説明を求める。

「一応教えはした。魔力は十分あるし、魔導制御に関しちや俺でも適わんくらいなんだが、レベル5以上となると、あともうちよつとの所で魔力が勝手に引っ込んでしまうらしい」

「……それで、あの相手に勝てるのか？」
「勝てるに決まってる」

即答し、ファルガールはニカツと笑ってみせた。

その笑顔は不敵で、自信に満ちたものだ。

「ちよつと考えてみるよ。アイツは誰に守られるまでもなく、一人で十年前の大災厄を生き残ってるんだぜ？」

ファトルエル大決闘場では観客を湧かせる闘いが続いていた。《地への帰依》、《魔縛りの影》、《砂の戒め》。その三つを合わせて完全に打つ手が無くなった状態からリクが生還した時からジルヴァルトは戦法を変えていた。

先ほどまでは後の先を取り、相手に攻撃させてからそれを防ぎつつ、そのスキをつくか、《歪みの穴》や《衝撃の伝導》を使って相手の魔法をそのまま返す闘いをしていた。

それが今は打って変わったように自分から攻撃し続けていた。

「風よ、不可視なる刃をもつて全てを切り裂く《真空波》となれ」
「……っ！ 《瞬く鎧》によりて、我は一瞬、全てを拒絶する！」

ジルヴァルトが呪文を唱えきつても一見何も起こらなかったのだが、受けるリクは血相を変えて《瞬く鎧》を唱えた。

現れた障壁に突然何かがぶつかって分散した。

（見えない攻撃にこのタイミングの難しい魔法を使うとは……しかし、見たところあの防御魔法で防げるのはレベル5まで……それならば）

そう考えたジルヴァルトは次の攻撃に入った。

「念込められし《殺意の魔弾》。願われるは汝の敗北。その矢じりは射手の意に導かれ、堅き岩をも打ち砕く」

リクに向けられた彼の掌の先に黒い光の玉が形成され、放たれた。《殺意の魔弾》はうなりをあげてリクに向かって飛んでゆく。

それをリクは《飛躍》を使って上空に逃げた。

しかし、その後を追うように《殺意の魔弾》も上昇する。

(しまった……！)

下方から追い掛けて来る黒い光の玉を見てリクは舌を打った。とっさの事とはいえ、空中に逃げたのは不味かった。これでは身動きがとれない。

魔法で防ごうにも《瞬く鎧》では少々心もとない。

「我は投げん、その刃に風巻く《風の戦輪》を！」

手に現れた風の輪を下に向かって投げ付ける。

リクのすぐ下に迫って来た《殺意の魔弾》と《風の戦輪》がぶつかりあった。

しかし《殺意の魔弾》のレベルは6だ。レベル4の《風の戦輪》は少しばかり威力を殺すくらいしか出来ずに四散した。

《風の戦輪》をうち落とす、《殺意の魔弾》は更にリクに近付いた。

「《瞬く鎧》によりて、我は一瞬、全てを拒絶する！」

間一髪、黒い光の玉が触れるか触れないかの時に《瞬く鎧》が発動し、《殺意の魔弾》は消散した。

確かに《殺意の魔弾》はレベル6でそのままでは《瞬く鎧》では防げない。だからリクはまず《風の戦輪》で威力を殺し《殺意の魔弾》をレベル5の威力にしてから《瞬く鎧》を唱えたのだ。結果を見てジルヴァルトは珍しく自分を責めた。

(我ながら安直な考えだった……。一つで足らなければ二つで防げばいい。……分かっていたつもりだったが)

さつきからどうも自分の歯車が狂っている。

事もあるうにリクがもし防御出来なくても死なないように力をセーブするとは。

魔力はある。また、それを十分に制御出来ている。

魔導の技術だけはジルヴァルトをも凌ぎかねないほど高い。

それなのにレベル4以下の魔法しか使えない。そんな中途半端な素質の人間などジルヴァルトは見たことがなかった。

これがリクの限界の強さだとはどうしても思えない。

彼の限界を見ないうちには殺してしまいたくない。

全力のリク⇨エールと闘って打ち破りたい。

強者との闘いを求めるジルヴァルトの気持ちが彼に手加減をさせていたのだ。

しかし、それは甘かったことを悟った。

死ぬほどの窮地でもないのに、実力を発揮できるものか。

(もう手加減はしない。防御が出来なければ確実に死ぬだろうが、そうなれば俺の見込み違いだったということだ。もう勿体振ることはない……!)

ジルヴァルトは腕を天に向けて振り上げた。

「^{すた}廃れさせ滅ぼす力よ、ここに！」

空を向いた掌てのひらの上に再び黒い光が集まっていく。

しかし、先程の《殺意の魔弾》とは全く比べ物にならない大きさだ。

「今度はなんだ……？」

その様子に顔を強張らせているリクに向かってジルヴァルトは高らかにその名を呼んだ。

「リク!! エール！」

リクの目と自分の目が合うのを待ち、ジルヴァルトは続けた。

「これから俺が唱える魔法は小細工では止められない。詠唱中に魔導を邪魔する手もあるが、俺は意地でもこの魔法は完成させる。

お前が生き残る方法はたった一つ、これを超える魔法をもって対抗することだ! さあ迎え撃て! お前の本気を見せてみる!」

そう言っつてジルヴァルトは呪文の詠唱に意識を集中させてしまった。

今、ジルヴァルトは完全に無防備だ。幾らでも攻撃は当たるだろう。だが彼はそれを承知で隙をつくこともせず、魔導に入ってしまった。

おそらくそうなるのも覚悟の上だということだ。その上で彼は魔法を完成させると言っつた。と言っつことは、その言葉通りになる可能性は十分に考えられる。

だから、リクが確実に生き残る方法はただ一つ、ジルヴァルトの言った通り今彼が唱えている魔法と同等以上の魔法で迎え撃つしかない。

（俺の本気を見せてみるだと？）

リクはこれでも本気で闘っていた。

何度も死ぬような目にあって、これ以上無いくらいに今持っている力をフルに使ってやっと生き残っている。

確かに強者との闘いを望むジルヴァルトにしてみれば折角の決勝戦でレベル4までしか使えない、工夫と根性のみが取り柄の弱小魔導士が相手では不満を感じるのかもしれない。

（しかし無い袖は振れない……）

かと言ってこのままではジルヴァルトの魔法を喰らって今度こそ死んでしまう。

今までだって何度もレベル5以上の魔法がないお陰で苦勞をさせられた。せめて使えるレベル4以下の魔法の精度をあげていくうちに魔導制御力だけが高まっていった。

リクは大きな魔法を平気で使えるジルヴァルトが羨ましかった。

「信頼を揺るがす欺瞞よ、渦巻け！ 誰もが背を向ける恐怖よ、膨らめ！」

目の前でジルヴァルトの頭上の黒い球体は大きく膨らんで行く。これが完成すると本当に逃げ道は無くなるし、小細工も通用しそうに無い。

（ここが、俺の限界か……）

リクは思わず空を仰いだ。
無論そこにあるのは大災厄の暗黒の空だ。
あの時と同じ空。

(あんまり、コイツには頼りたくなかったんだけどなア……)

**

かつてもう自分の持つ力でどうにもならなくなったことが一度だけあった。

言うまでもなく、十年前、リクの故郷を襲った大災厄の時である。

あの時、クリーチャーに両親を目の前で殺され、続いて目を付けられたリクは必死に殺戮の中を逃げ惑っていた。

真つ暗な空、激しい風雨、暗闇を赤く照らしたす炎、立ち籠める血の匂い、地面に転がっている変わり果てた知人達。

あまりの光景に幼いリクは目を伏せて走り続けた。

誰かを頼ろうにも、もう生きている人間など見かけなかった。

リクはいつの間にか開けた場所に出て来ていた。

不意に顔を上げた時、リクは圧倒された。

それは人型のグランクリーチャーだった。

その右手には剣を、その左手には斧を持ち、全身が鉄の甲冑に覆われ、巨大な騎士という感じを受けた。

グランクリーチャーはその首をもたげ、幼いリクに目をつける。

そして、おもむろに右手の斧を振り上げた。
狙うのは勿論リクだ。

自分に向かつて振り降ろされる斧。

しかしリクは避けることをしなかった。

避けようとしても避けられない。

避けられたとしても、再び逃げる気力は残っていない。

もう逃げるだけなのはいやだ。

力が欲しい。

この嵐と闘えるくらいに強くなりたい。

この嵐に勝てるくらいに強くなりたい。

そんな気持ちを含め、上からどんどん迫ってくる斧の刃を睨み付けた。

不思議と恐怖は感じなかった。

妙に斧の振り降ろされるスピードが緩やかに見える。

その斧の向こうに見える真っ暗な空。その向こうにはちゃんと星空があるのだろうか。

そんな事を取り留めもなく考えていた。

その時だ。

彼がその暗黒の空にそれを見たのは。

(……………白い…鳥?)

この激しい風の中、それは悠々と飛んでいた。

まるでからりと晴れた青空の中を進むように。

姿を見せながら、まるで別の世界に存在しているかのよう。

ジッとそれを見ていると、その白い鳥がきらりと輝いた。

その光は一瞬のうちに広がり、リクをも包んだ。

次に気がつくと、彼は眩い光の中に居た。

立っているのか、寝ているのか、浮いているのか。自分がどのような状態にあるのかわからなかった。

だがとにかく現実離れた場所である事は分かった。

不意にどこから声が聞こえてきた。

目を覚ましたか？ 少年……

その声は聞いたことがあるような気がした。

そして何故か誰の声なのかも分かった。

「あの白い鳥……？」

その通り。そしてそなたを助けたのも私だ。

「どうして僕を助けたの？」

あのまま死にたかったのか……？……

白い鳥の声に聞き返され、リクはぶんぶんと首を振った。

「そうじゃない！ どうして僕だけを助けたの？」

.....あの状況で助けられるのは一人だけだった。

「じゃ、どうして僕なの？」

白い鳥の声は少し間をおいて答えた。

.....私は人の心を聞くことができる。あの惨事
の中、実に多くの人間の心が聞こえた.....

447

不意にリクの耳に轟音が聞こえた。

いや轟音ではない。人の声の集まりだ。

何十、何百もの声がまとめて聞こえる。

助けを乞う声、死にたくないと祈る声、そして己の無力に嘆く声。
悲鳴、怒号、絶叫。

その声の濁流は否応無しに彼の耳に流れてきた。

声の中には彼の両親、知人の声が混じっていることにも気がつ
いた。

た
た
ま
ら
ず、リクは叫んだ。

「うあああああ！」

.....そなたには酷やもしれん。だが冷静に耳を傾けてくれ.....

白い鳥の声に言われ、叫びを抑えてリクは耳を傾けた。
しかし、その真意は計りかねた。

白い鳥は自分に一体何を聞かせたいのだろうか。

不意に一際大きな声が聞こえた。

その声は全く他の声とは異なるものだった。

それは願う声だった。

力を欲し、大災厄と闘い、それに打ち勝つことを願う声。

「僕の声だ.....」

.....そうだ。あの圧倒的な声の中で、そなたの
声はつきりと大きく聞こえた。その声がある場所に行くと、かの
グランクリーチャーに殺されんとしておる少年、つまりそなたがい
たのだ.....

「一番大きい声だから助けたの？」

.....その通りだ。今聞かせたのは実際の声では
ない。あくまでも心の声だ。心の声の大きさは意思の強さの表れ.....

…私はそなたに賭けてみたくなったのだ…

「何を……？」

…この世から、大災厄を根絶することだ…

あっさりと即答されたものだが、リクはその内容は果てしなく大きいことくらいは十分理解出来た。

大災厄を根絶する。

たった一つの大災厄にさえ歯が立たない人間にそんな事が可能なのだろうか。

だが、大災厄がこの世界からなくなればどんなにいいだろう。

そして、白い鳥は自分にそれをやれと言っていた。

…そなたの欲した力を与えよう。しかしこれは素質に過ぎないので、きちんと鍛え上げなければならぬ。十年鍛え、その時点で己の限界を感じた時、我が名を呼ぶがよい…

(…あれから十年。与えられた素質じゃレベル4までしか使えな

かったんだ。責任取りやがれ！」

ぼつつと空を眺めていたリクがふとジルヴァルトに目を移す。その目は決して諦めた者の目ではなかった。突然呪文の詠唱を始めた。

「その翼は如何なる嵐にも動じない力強き翼！」

その色は何にも汚されぬ純白！」

その白銀の嘴は全ての者を貫き通す！」

リクの詠唱と共に、足元に巨大で複雑な魔法陣が光で描かれてゆく。しかし同時進行で、ジルヴァルトの魔法が着々と完成しつつある。

「これに触れるものは望むがいい、自らの消滅を！」

黒い球体が急な膨張を見せた。

そしてこれで発動するだけの所まで完成したのだろうか、ジルヴァルトはその黒い球体を頭上から正面へと移す。

「その御姿の神々しさたるや、神獣として相応しき！」

リクはそれを見ながらも冷静に詠唱を進め、魔法陣を完成させた。魔法陣を描く光が増して行く。

しかしやはり唱えはじめるのが早かった分、魔法の完成も早かった。

「そして従うがいい……冥王による《荒廃への導き》に！」

ジルヴァルトの手から黒い球体が離れる。

黒い球体は、ゆっくりとリクに向かって進んで行く。

そのまま彼に当たるのかと思いきや、その中間地点でその動きを止めた。そして、その球体から同じく黒い光で出来た何本もの触手のようなものが生えてくる。

それはスルスルとリクに向かって伸びてゆき彼を包み込むように周りから囲ってゆく。

リクは、それをも意に介さず、詠唱を続けた。

「来れ！ 天翔^{あまか}け巡り、司る者よ！ その名は……」

リクの足元の魔法陣が、輝き始めた。

しかしその次の瞬間、リクを覆った触手を伝うように、黒い球体が移動し、リクのいた場所を飲み込んだ。

ああっ……と観客から声もれる。

見るもの全てがこの勝負は決したと思った。

ジルヴァルト自身も、リクが黒い球体に取り込まれたのを見て、ため息とも取れる息をつく。

しかし、勝負はまだ終わっていないかった。

真っ先にそれに気付いたのは無論術者本人であるジルヴァルトだ。

普通ならこの後、黒い球体はだんだん縮まってゆき、最後には包み込んだもの全てと共に消えてしまうはずである。

しかし、いつまで経っても黒い球体は動こうとしなかった。

それどころか……

(収縮するどころか……膨張している?)

そう、黒い球体は少しずつ膨らんでいった。

もうジルヴァルトはこの黒い球体に魔力を注ぎ込むようなことはしていないので考えられる可能性はただ一つ。内側からの圧力だ。

それに気がついた瞬間、黒い球体に亀裂が走った。

中から眩い光が漏れて来る。

次の瞬間、黒い球体は空気を入れ過ぎた風船のごとく、割れ弾けた。

その中から姿を現わしたのは翼を広げた白い巨大な鳥だった。

おそらく、その翼を広げることで黒い球体を割ったのだろう。

手前にはリクが立っていた。

その鳥は白銀の嘴から長く伸びた尾の先まで見事に白い鳥だった。

それは白さを通り越し、ぼんやりと自ら光ってさえいる。

最後にリクはその白い鳥の名を呼んだ。

「その名は“白鳳”はくほう」《アトラ》……!」

44 『最後に立っていたのは』

闘う二人に相手以外は何も見えない。

彼らに痛みは感じられない。

そして彼らは疲れも感じない。

己が全てを賭け、

手業を尽くして、

全霊を込めて闘う二人。

彼らは何もかも忘れている。

何のために闘うのかも。

二人はただ決着をつけるために闘っている。

ただ相手に勝つために。

ただ自分が負けないうために。

最後まで立っているのが自分であるために。

目の前に広がる光景に、さしものジルヴァルトも驚きを隠せなかつた。

目を一杯に見開き、表情が強張っている。

その視線の先にあるものは、一羽の鳥だ。無論、ただの鳥ではない。嘴から尾の先まで自ら光を発するほどの神々しき純白の鳳凰だ。

(神獣の召喚……だと？)

神獣。現実には確認されておらず、神話、伝説の中のみが存在する獣の相称である。

先に述べた通り、召喚魔法というのはそれを別の場所から呼び出す事ではなく、魔力によって創造し、具現化する魔法である。そして、それを行う為には造り出す対象を知り尽くしていなければならぬ。

しかし、コーダの《シッカーリド》のような現実に存在する動物とは違い、神獣は神の使いといわれ、神話や伝説の中にしか存在しない。

実存せず、普通見ることもし出来ないような神獣を召還するという事は理論上不可能であるはずなのだ。

“白鳳” 《アトラ》はその長い首をもたげ、嘴の先をジルヴァルトに向けた。

そして嘴を開け、その口の中に光を凝縮させて行く。
危険を感じたジルヴァルトはとっさに防御魔法の詠唱にかかる。

「受容する力よ、この場より去れ！ 拒絶する力よ、この場に宿れ！」

ジルヴァルトの足元に黒く光る円が描かれ、光を発しはじめる。

「拒み、離す力に支配されし、我が《斥力の領域》は誰が力をもつとしても侵すこと難し！」

呪文を唱え切ると、ほぼ同時に魔法が完成し、円が強く黒い光を発して、半透明の黒い半球を形作った。

次の瞬間、《アトラ》は半球の中心に立っているジルヴァルトに向けて開いた嘴から光熱波を放射した。

それはあつという間に半球、即ち《斥力の領域》とぶつかりあつ。ものを引き付ける引力とは逆の力、つまりものを遠ざける斥力が支配する領域を光熱波はそれを圧倒する圧力をもって半球を歪め内部に侵入して行く。

「ぬ……うつ……！」

ジルヴァルトが更に魔力を注ぎ込み、場を支配する斥力を高める。それによつて光熱波の侵入速度は目に見えて遅くなった。が、それでも確実に少しずつジルヴァルトに向かって進んで行く。斥力を最大に高めても、光熱波を押し戻すことは出来なかった。

ジルヴァルトは黙って耐えた。

この攻撃さえ凌ぎきれば、もう一度同じ攻撃をさせる時間を与えないように攻撃することができる。

しかし、《アトラ》の放つ光熱波はじりじりと斥力の中を進んで来る。

不意に、半球内の黒い光が薄れ始めた。

それとともに光熱波の侵入速度が上がりはじめる。

(不味い……魔法の効果が持たない……！)

ジルヴァルトの《斥力の領域》が雲散霧消し、光熱波がジルヴァルトを襲った。

しかし、幸いなことにほぼ同時に《アトラ》の攻撃が終わり、光熱波はジルヴァルトにある程度のダメージを与えるのみで終わった。

立ち上がって向かってくるジルヴァルトに向けて再び《アトラ》

が嘴を開いた。再び光を凝縮し、今度は光弾を三連発で放つ。

ジルヴァルトは軽いフットワークでそれを躲しつつ《アトラ》とリクに向かって走って行く。

《アトラ》はもう一度光弾を放とうと嘴を開くが、そこで止まった。

ジルヴァルトがそれを封じたわけではない。

リクがそれを制したのだ。

意外な行動に、ジルヴァルトは足を一旦止める。

《何故止める？》

空気の振動ではなく、直接頭に響くような声で《アトラ》は尋ねた。

鳥に表情はないのでよく分からないが、もし人間ならば顔を訝しげにしかめているだろう。

「《アトラ》、折角助けてもらってこう言うのもなんだけど……これは俺の闘いなんだ。このままあんたに任せればジルヴァルトに勝てるかもしれない。

でも、それじゃ、アイツに勝ったのはあんたで、俺じゃない。俺…皆に約束したんだ。アイツに…ジルヴァルトに勝ってから行くって」

しばらく、《アトラ》は黙って自分を見上げるリクの目を見つめていたが、やがて視線を外すとその大きな翼をゆっくり優雅に羽ばたかせた。

《よかるう、私もそなたの言う“皆”の中に入り、そなたを信じて待つとしよっ》

「あ、《アトラ》、一つ聞いていいか？」

リクは、上空に飛翔せんと翼を力強く羽ばたかせようと《アトラ》を止めるように言った。

《何だ？》

「あなたが俺にくれた素質って、レベル5以上の魔法を使えないよ
うなものなのか？」

《そんな弱い素質を与えるわけがなからう》

否定する《アトラ》にリクは食い下がるように続けた。

「でも、今まで何度試しても使えなかったんだ」

答える代わりに《アトラ》は翼を一度力強く羽ばたかせ、その巨体を宙に浮かせた。そしてゆっくりと上空に向かって上昇して行く。ある程度まで高度をあげるとリクを見下ろして言った。

《……それはそなたが本当にその魔法を欲していなかったからだ。そなたが真に強い魔法を必要とする時、それは初めて形となりあらわれるだろ》

そしてその言葉を最後に、《アトラ》は大決闘場から飛び去って行った。

バトルフィールドに残った二人は改めて対峙する。

リクは頭のバンダナを締め直しながら言った。

「度々待たせてすまねーな」

「そう思うなら待たせるな」

にべもない返事だったが、リクはそれを不快に感じなかった。殺されかけたフィラレスや師を殺されたジェシカには申し訳ないが、リクは彼の一連の行動を憎めない。

ジルヴァルトはジルヴァルトで何かに対して真直ぐなのだ。

二人が同時に腰を落として構える。

リクは構え終わった刹那、全く躊躇せず^{ちゆうちゆう}にジルヴァルトに向かって突っ込んで行く。

しかし、どれだけ近付いてもリクは魔法の詠唱に入らない。

ジルヴァルトの目の前に来た時、リクは腰だめに構えていた。左手で軽く、しかし素早く連続して拳を繰り出した。

ジルヴァルトはそれを冷静に避け、こちらも拳で応戦する。

リクはそれを、背を反らして躲すと、その勢いで足を振り上げ、蹴りに持っていく。

その蹴りをジルヴァルトは完全に見切りギリギリのところであけた。

躲されたリクはそのまま身体を一回転させ元の姿勢に戻る。そこを狙ってジルヴァルトが懐に飛び込みその顔面に裏拳を叩き込む。リクはそれを手で受けると、そのまま手を取ってジルヴァルトを投げる。

その投げに対し、ジルヴァルトは自分からふわりと飛びあがって地面に着地した。

そこを狙ってリクは素早く魔法の詠唱に入る。

「我は投げん、その刃に風巻く《風の戦輪》を！」

手に現れた輪状をした薄緑色の光を投げ付ける。

この距離ならば《歪みの穴》を使う余裕はない、そして手が届かないので《衝撃の伝導》も使えないはずだ。

「風よ、不可視なる刃をもつて全てを切り裂く《真空波》となれ」

風にはより強い風で対抗するジルヴァルト。《真空波》はレベル5だから、ぶつかれば《風の戦輪》は消えるし、そのまま攻撃にもなる。

二つの魔法がぶつかる直前、リクは《風の戦輪》に向けた拳をパツと開いた。

それに応えるように《風の戦輪》は無数の小さな輪に分裂する。いくつかの小さな輪は《真空波》とぶつかって立ち消えたようだが、残りの戦輪がジルヴァルトを襲った。

しかし一つ一つが小さいのでちよつと深めの切り傷を与えただけだ。

次はほとんど威力を殺されていない《真空波》がリクを襲う。リクは急いで《瞬く鎧》を唱えるが、タイミングが合わなかったので威力を殺しきれない。

ダメージが軽く、体勢も崩されなかったジルヴァルトが次の攻撃に入る。

「念込められし《殺意の魔弾》。願われるは汝の敗北。その矢じりは射手の意に導かれ、堅き岩をも打ち砕く」

今回は一つではなく四つの黒い玉がジルヴァルトの周囲に浮かぶ。そして、四つ同時にリク目掛けて走り飛んでいった。

しかし今回は四つにした分、魔導に時間が掛かってしまい、完成した時にはリクは体勢を立て直していた。

「砂塵よ、舞い上がりて我が姿を隠す《砂幕》^{はく}となれ！」

唱え切った瞬間、リクの足元から爆発したように砂塵が巻上がり、砂煙でリクの姿が見えなくなる。

《殺意の魔弾》の目を欺こうという考えだろう。

(馬鹿な真似を…… 《殺意の魔弾》は対象の魔力を追う魔法。姿を隠しても無駄だ)

次の瞬間、砂塵の中から爆発音が聞こえた。

しかし、ジルヴァルトの表情が厳しいものに取って変わった。できるだけ急いで、詠唱をする。

「天上に在りし岩石よ、我が元に降れ！ その身を重力に任せ、眩き炎を纏いて《天下りし星屑》となれ！」

そしてジルヴァルトは人さし指を空に向けた。

彼が指差した空の一点がきらりと輝いたかと思うと、次の瞬間、とんでもない速さになった隕石が、ジルヴァルトの足元に落ちる。

場に、本物の砂煙が舞う。

その砂煙が晴れた時、ジルヴァルトの目の前に穿たれたクレーターの中心に、膝を付くりクの姿があった。

もともとあの《砂幕》は《殺意の魔弾》から身を隠す為の手段ではなかった。《地潜り》を使って地中からジルヴァルトを攻撃する為の伏線だったのだ。いくらなんでも地中に潜るのを見られては警戒される。それを防ぐ為のカモフラージュだったのである。

しかも《殺意の魔弾》に対応した《砂幕》のタイミングは「あの《砂幕》は《殺意の魔弾》の目から逃れる為だ」と取れ、「《地潜り》をカモフラージュする為だ」と取りにくい。

このタイミングはいわば、二つ目のカモフラージュを生んだ。

その機会を逃さなかったリクはまさに狡猾こつかつなる魔導士であると言

える。

ではどうしてジルヴァルトがこの二重のカモフラージュを見通し、リクの作戦を見破ることが出来たのか。

《殺意の魔弾》は地に潜ったリクを追い掛けて地面と激突して消えたのだが、ジルヴァルトにとってその時の音がその二重のカモフラージュを見破る鍵となった。

《殺意の魔弾》が当たった時の音と手応えが人間に当たったものとは違うことに気付き、ついで地面に当たったものであることに気付いたのだ。

何故、リクを追っていった物が地面に当たったのか。それを考えた時にリクの巧妙且つ絶妙な作戦は見破られた。

「なかなか見事な攻撃だった。が、言っただけだ。俺には小細工は通用しない。そろそろ決めさせてもらう。あの神獣を行かせたのが貴様の敗因だった」

クレーターの縁に立ったジルヴァルトが底にいるリクを見下ろして告げた。その言葉に続けて魔法の詠唱を始める。

「この場に芽生えよ、全てを砕く破壊の衝動！　そして宿れ、逃れられぬ滅亡の運命！」

リクのいるクレーターに赤黒い魔法陣が描かれる。

その縁にはこの世のものと思えぬような紫色の炎が上がっている。

「血よ、降り注ぎて大地を濡らせ！　そして死よ、響く悲鳴の音頭に合わせて踊り狂え！」

輪の縁に燃えていた炎が鬼火のような無数の火の玉になり、リク

の周りを踊るように飛び交い始めた。

そして、ジルヴァルトは魔法を完成させる。

「そして始まるがいい……生きる者の戦慄を呼ぶ《殺戮の饗宴》！」

無数の火の玉は一度魔法陣の縁に並ぶと、その円の縁上を再びぐるぐると踊るように動き始めた。

そして魔法陣がどんどん狭まりはじめる。

もちろん、無数の鬼火もリクに向かって迫って来る。

リクは魔法陣の外に向かって《炎の矢》を放った。

「我は放たん、射られしものを炎に包む《炎の矢》を！」

赤く燃え盛る魔力の矢は真直ぐに魔法陣の外へと飛んでいく。

しかし、鬼火達の踊る境界線まで行ったところで見えない壁に当たったかのように立ち消えてしまった。

（結界か……）

これではダメージ覚悟で魔法陣の外に突っ走ることとは出来ない。

リクは下に手をつきその魔法を詠唱する。

「我は得たり《地潜り》の力」

地上が駄目なら地下を通るまで。まさか、地面の下にまで鬼火は追って来ないつまりだろう。

しかし、リクの身体は一向に沈まない。

（……地面にまで結界が張られてやがる……！）

つまり逃げることは出来ない。彼がこの状況から生き残る道は二つ。

結界を破る、もしくはこの攻撃を耐え切る。

前者はさっきの《炎の矢》で実験済みだ。あの魔法が、現在リクが使える魔法で最高の攻撃力を誇っている。

後者も、これは推測だが、無理だろう。何故なら、今まで精一杯闘い、彼の实力を見切ったジルヴァルトが「決めさせてもらう」と言い切ったからだ。そして「小細工は通用しない」とも言った。

(こりゃ本気で《アトラ》を行かせたのは不味かったかもな)

心にも無いことを思う。

(……でも諦めるわけにゃいかねーよな)

私の代わりに、あのジルヴァルトを倒して下さい。お願いします

ジェシカとの誓いを果たす為にも。

いいな、夢を失いたくなきゃ、絶対に負けるなよ。

自分の夢を失わない為にも。
そして、

コイツを倒した後に必ず行くからさ。

自分を信じて待っている皆とした約束を果たす為に。

そして迫りくる鬼火を前にリクは立ち上がり、口元に笑みを浮かべた。単に緊張で口元が引き攣ったのかもしれない。

そなたが真に強い魔法を必要とする時、それは初めて形となりあらわれるだろう。

《アトラ》の言葉が脳裏をよぎる。

迫って来る鬼火の速度からしてチャンスは一度。失敗すれば、全てが終わる。

しかし今躊躇する理由はどこにも無い。リクは詠唱を始めた。

「その内に抱くは我！ その表面に刻まれるは守護の言霊ことだま！ それが発する優しき光は内に在る者を如何なる攻めいかからも遠ざける！ 我が身を包め、神に祝福されし護法輪ごほうりん《イール・オー・サーク》！」

唱え終わったリクの手から、四つの光の玉が出る。

四つの光の玉はリクの左肩から右腰まで、つまりタスキの角度で傾いた、半径が腕の長さの二倍の円上を高速で回転している。光の玉達は同軌道上を旋回している為、残像が繋がり一つの輪のように見える。

その輪の輝きがどんどん強くなり、いつの間にかその光の中の一つの輪が見えるようになった。

その輪は白銀に輝く何らかの金属製の帯で出来ており、三力所で捻れていた。

その帯の面には何らかの文字が刻まれているようだが、一定の速度でクルクル回っている為にそれを読み取ることは出来ない。

レベル7の防御魔法《イール・オー・サーク》が完成した直後、狭まってきた《殺戮の饗宴》の鬼火達がリクを襲った。

それに対応するように《イール・オー・サーク》が光を放ち、その輪の上下に光の幕を張った。

一斉にリク目掛けて殺到した鬼火はその光ごと覆い隠すように被さっていく。

その次の瞬間、赤黒い爆炎と、断末魔の悲鳴のような爆音と共に鬼火達は爆発した。

爆風で舞い上がった砂塵をシルヴァルトと観客が注視する。

果たしてリクが刹那に唱えたあの防御魔法で間に合ったのか。

もうもうと生き物のように蠢く砂塵が急に左右に別れた。

そこから飛び出してきたのはもちろんリクだ。身体を中心にクルクルと回る《イール・オー・サーク》も健在である。

「我は放たん、連なりて射られしものを炎に包む《火炎の連弩》を
！」

いつもの《炎の矢》と同じようにリクの構えた手の中に弓矢の形をした炎が現れ、それを引き絞る。

そしてそれを放つと、その後に続いて全く同じ《炎の矢》が六発次々に放たれる。《炎の矢》のレベルアップ版、レベル6の《火炎

の連弩だ。

連なる《炎の矢》がジルヴァルトに向かってまっすぐ飛んだ。

「受容する力よ、この場より去れ！ 拒絶する力よ、この場に宿れ！ 拒み、離す力に支配されし、我が《斥力の領域》は誰が力をもつてしても侵すこと難し！」

黒い半球がジルヴァルトを覆い、そこに赤い光の矢が当たっては消散していく。その間にジルヴァルトは反撃の魔法を詠唱する。

黒い半球が失われると同時にジルヴァルトは《殺意の魔弾》を発動し、四つの黒い玉にリクを襲わせる。

しかしそれはリクを護る輪《イール・オー・サーク》に行く手を阻まれ、リクにその手を届かせる事はなかった。

「なかなか強力な壁だ……ならば砕くまで。《破魔矢》よ、空を切り裂き、魔を砕け！」

ジルヴァルトの手の中に小さな矢が現れ、それをリクに向かって投げつける。

それがリクの《イール・オー・サーク》に当たった瞬間、《イール・オー・サーク》が光を放ち、砕け散ってしまった。

「なっ……！？」

「その茎は槍、その葉は刃。鞭のごとし蔓にて捕まえ喰らうは汝！ここに育まれよ、冥界に茂りし《人喰い草》！」

突然リクの周囲の砂が持ち上がった。

そして姿を見せたのは既にリクを真ん中に捉えた円形の植物である。

その円形が半分に折れて閉じられていく。リクを取り込まんと閉

じる顎あごのよつに。

「その頭向けしは汝！ それが象かたどられるは龍！ その口から吐き出されし火焰はあらゆるものを焼き尽くす！ 真紅の咆哮と共に我が手に収まれ！ 蒼天朱に染めし焼尽しょうじんの火吹き《ルーフレイオン》！」

リクの詠唱と共に彼の手に赤い光が輝き、やがてそれは一メートルくらいの杖のようなものになった。

その金属で出来た柄の先に付いている杖頭にあたるものは天に向かって吠えるように口を開けた龍の頭が象うかられていた。その喉には穴が穿うがたれている。

リクは《飛躍》で飛び上がると下方の《人喰い草》に《ルーフレイオン》の口を向ける。

するとその口の奥が赤くなってゆき、炎が噴き出し、一瞬の内に《人喰い草》を焼き尽くした。端から見ると龍が火を吐いたように見える。

続いてジルヴァルトに《ルーフレイオン》の口を向けようと目を移す。しかしその先にジルヴァルトはいなかった。

必死で目を走らせ、ジルヴァルトの姿を探す。すると不意に後ろから背中に手を当てられた。

「え？」

「我が手に触れられし者よ、《墜落》せよ」

いつの間にか背後にいたジルヴァルトの魔法によってリクは突然、地面に吸い寄せられるように落下した。

重力を強くしてあるらしく、高さの割に激しく地面に激突する。

「風よ、不可視なる刃をもって全てを切り裂く《真空波》となれ」

更に攻撃を加えんと唱えられた《真空波》がリクに向かって放たれる。

リクは痛みに顔をしかめながら必死で防御魔法を唱えた。

「ま、《瞬く鎧》によりて我は全てを拒絶する！」

今回はなんとか成功し、追加攻撃を喰らう事だけは免れた。

リクは《ルーフレイオン》をジルヴァルトに向け、激しい火炎を放射させた。

下から炎にあおられ、ジルヴァルトは痛みに表情を崩す。

「くっ……、天上に在りし岩石よ、我が元に降れ！ その身を重力に任せ、眩き炎を纏いて《天下りし星屑ほしくず》となれ！」

リクの頭上から、眩しい光を放った隕石が落ちて来た。

しかし、その前にリクの防御魔法が発動し隕石攻撃を防ぐ。クルクル回りながらリクをガードする《イール・オー・サーク》だ。

だがその直後、《イール・オー・サーク》に《破魔矢》が突き刺さった。

ならば、とリクが《ルーフレイオン》をジルヴァルトに向ける。しかしそれが炎を吐く直前《ルーフレイオン》が粉々に砕け散る。

先ほど《イール・オー・サーク》を壊した《破魔矢》は同時にこちらも狙っていたのだ。

「念込められし《殺意の魔弾》。願われるは汝の敗北。その矢じりは射手の意に導かれ、堅き岩をも打ち砕く」

四つの黒い玉がリクに向かって飛び走る。

それに対しリクは《砂幕》を発動、巻き上げた砂塵で身を隠した。先程も全く同じ状況があった。砂塵に隠れて《地潜り》で下から奇襲を掛けて来たのだ。

あの時は二重のカモフラージュを掛けていたのにも関わらず、鋭い感覚をもって見破られてしまった。だから前回と同じ手で来るとは考えにくい。

何よりも……

(今のリク＝エールは、あの時のアイツとは違う……！)

さあ、どこだ。

どこからくる。

ジルヴァルトは目の前の砂塵を凝視し、バトルフィールド全体に神経を張り巡らせる。もはやバトルフィールド上に彼の死角はない。そして彼はリクの気配を察知した。

(後ろだ！)

ジルヴァルトが振り向きざまに《真空波》を放つ。

しかし、そこにリクはいなかった。予想もしなかった展開に、珍しくジルヴァルトの表情が驚愕に満ちたものとなる。

その背後にリクの気配を感じる。

振り向いた所に雷の宿った矛《ヴァンジュニル》を振りかぶったリクの姿があった。

(振り向いた一瞬の隙に反対側に移動したのか……！?)

リクの《ヴァンジュニル》が振り降ろされ、ジルヴァルトの身体

に痛みと痺れが走る。

だが、ジルヴァルトもただでダメージを負う事はなかった。その痺れを制し、何とかその魔法を詠唱する。

「汝、我が痛みを押し知るべし」

そしてリクの身体に触れ、詠唱を完了させる。

「《痛み分け》」

「ぐっ……!？」

この魔法によってリクにも同じ痛み、痺れが走り、その顔が歪んだ。

しかしリクはこの痛みをさほど不快には感じなかった。だからと
いって気持ち良く感じたわけではない。

この闘いの緊張感で気にならなくなっているのだ。

一瞬たりとも気を抜けない。

攻撃する時も防御した後も、僅かな隙が相手の攻撃を誘う。

そして、こちらの攻撃もどんな小さな隙も見逃してはならない。

それを逃したら、もうそんな機会はないかもしれない。

攻撃に遭って何度肝を冷やした事か。

手傷を負って何度痛みに耐えた事か。

攻めきれずに何度悔しく思った事か。

リクはもう何も考えていなかった。

頭の中に何もなかった。ジェシカとの約束も、皆との約束も。そして大災厄の事さえも、今のリクの頭の中には残っていないかった。

彼の目にはもはやジルヴァルトしか写っていない。

ただ夢中で彼を倒すために、たったそれだけのことのために、魔法を唱え続けている。

そして、彼はその闘いの中で微笑みを浮かべていた。

（何だろうな……俺、すげードキドキしてる。こんなに強いアイツと渡り合えてる。これって何かすげーよな。何だろうな……この感じ。なんて言ったらいいんだろうな。ドキドキして油断したら心の底から笑えて来そうな感じ……これってなんか……）

楽しいよな。

観客達は息を飲んでその闘いを見守っていた。

下のバトルフィールドで繰り広げられている光景に魅入り、物事の理解出来ない幼子一人、言葉を漏らす者はいない。

一瞬の隙を許さない超ハイレベルな魔法の応酬。

喋る暇など見付からない。

見るだけで精一杯だ。

観客達は認め始めていた。

これは十五年前を超えるファトルエル史上最高の決闘であると。

「その内に抱くは我！ その表面に刻まれるは守護の言霊！ それが発する優しき光は内に在る者を如何なる攻めからも遠ざける！」

我が身を包め、神に祝福されし護法輪《イール・オー・サーク》！
「受容する力よ、この場より去れ！ 拒絶する力よ、この場に宿れ
！ 拒み、離す力に支配されし、我が《斥力の領域》は誰が力をも
つてしても侵すこと難し！」

二人の防御魔法が同時に発動し、先ほど同時に放った攻撃を防ぐ。
ただ、お互い必死で放った所為か、二人ともバランスを崩して倒
れてしまった。その倒れ様にジルヴァルトは《破魔矢》でリクの《
イール・オー・サーク》を破壊する。

二人はゆっくりと起き上がった。
その目はしっかりとお互いの相手を見据えていた。

しかしそこからなかなか動こうとしない。
二人とも満身創痍で体力も残ってないらしく息も荒れている。大
体、今倒れたのだから疲れて足腰が立たなくなっているからだ。
リクもジルヴァルトももうほとんど魔力が残っていない。

あれだけ派手に高レベルの魔法を打ち合っていたのだから当然の
話だった。

残る魔力は一発分。

次に倒れたら立ち上がれはしないだろう。
つまり、

これが最後の一撃……！！

二人は目を合わせたまま、しばらく息を整えていた。
その呼吸が次第に落ち着いていき、ある時ピタリと止めた。

先に詠唱を始めたのはジルヴァルトだ。
リクは腰を落とし、ジルヴァルトに向かって突っ込んでいく。

「廃れさせ滅ぼす力よ、ここに！ 信頼を揺るがす欺瞞よ、渦巻け！ 誰もが背を向ける恐怖よ、膨らめ！ これに触れるものは望むがいい、自らの消滅を！ そして従うがいい、冥王による《荒廃への導き》に！」

リクの行く手を阻むように、ジルヴァルトの放った黒球が膨らんでいく。リクはそれでもその足を止めずに走り込んでいき、呪文の詠唱を始めた。

「その鞘に収まりしは曇り無き直刃すくは！」

リクが右半身に構え、左の腰に両手を持っていく。それは道着と
いう彼の服装も相まって丁度、いまから刀を抜こうとする侍のよう
に見えた。

《荒廃への導き》は既に膨らみきり、動きを止めて、彼に向かっ
て触手のようなものを伸ばしていく。

「鍛え抜かれしその刃に断てぬもの無し！ 一度抜きし時、その速
さは光も超える！」

ジルヴァルトの黒球から生えて来た触手はどんどん彼を包み込む。
腰ために構えた両手に光が漏れはじめ、それは棒のように伸びて
いく。

「いざ抜き放たん！」

触手が完全にリクを覆い隠し、彼に向かって進み始めた。

だが、リクはそんな事は関係が無かった。

黒球が膨らもうと、触手を伸ばそうと、それが彼を包み込もうと、そして彼を滅ぼさんと歩もうと、彼はその足を止める事は無かった。

目指すはその向こうにいるジルヴァルト。

それ以外のものは目に入らない。

そして彼は《荒廃への導き》に正面から突っ込んだ。

リクはその中をただ前へ前へと足を進めた。

周りは全くの暗闇、そしてその闇は彼を消滅させようと容赦無く彼の身と命を削り取っていく。

痛かった。

苦しかった。

怖かった。

（倒れるな！ 死ぬな！ 止まるな！ 勝つんだ！ 絶対勝つんだ！）

何の為に勝とうとしてるのかはもう分からない。

（けど俺は勝ちたいんだ。滅茶苦茶強えアイツに絶対勝ちたいんだ！）

不意に闇から身体が抜けた。

目の前に目指していたジルヴァルトの姿が見える。

そして、彼は最後の魔法を完成させた。

「一太刀にて全てを決す神速の太刀……」

右足を踏み出しながら具現化したその刀の鯉口こいくちを左手で切る。
踏み出した右足を力強く踏み込むと同時に、リクはその眩まぶしく光る刀を抜き放った。

「《煌きりめ》……………っ！」

剣閃が走った次の瞬間、ジルヴァルトが斬り付けられた胸から血を流しながら、仰向けに吹き飛ばされて倒れる。

リクも、足が折れ、膝を付きそうになった。

彼はそれを必死で堪えた。

(まだ……………まだだ……………！)

抜き身の《煌》を支えにして何とか踏み止まる。
目の前に倒れているジルヴァルトが動いている。震える身体で、血を吐きながら必死で起き上がろうとしている。

そして、ジルヴァルトは立ち上がった。

その未だ死なぬ鋭い眼光はしっかりとリクを捉えていた。

だが、彼は遂に力つき、再び崩れるように倒れた。

その瞬間、決着は付いた。

予定より早く行われたファトルエルの決闘大会決勝戦。

リク⇨エール VS ジルヴァルト⇨ベルセイク。

最後に立っていたのは、リク⇨エールだった。

45 『みんなのいるところへ』

折角終わったのに、僕はまだ休む事は出来ないんだ。
もう辛くて、苦しくて、倒れそうだけどね。

僕にはまだ、やらなくちゃいけない事が残ってるんだ。

ああ、そうだよな。

確かに僕はよくやった。

だから何もかも放って眠ったって、誰も怒る人はいないよね。

……でも、やっぱりそれはやっちゃいけない事だよ。
それをみんなが許しても、僕が自分を許せないよ。

だから、僕は行くよ。

みんなのいるところへ。

ざっ、……ざっ、……ざっ……

稀代の名勝負に贈られる観客からの惜しめない拍手喝采の中、その足音はだんだん仰向けに倒れているジルヴァルトの耳元へと近付いてくる。

そして彼の頭の横に来た時、ジルヴァルトは目を開けた。

その視界に入ってきたのは《煌^{まひめ}》を杖代わりに真直ぐに出口を指すリクの姿が見受けられた。

「リク……エール」

荒い息に乱れた声に、リクの足がピタリと止まった。しかし、そ

のわずかな反動に耐え切れず、リクはガクリと膝を折る。

それをどうにか堪えると、上からジルヴァルトの目を覗き込んだ。

「……何…だよ？」

息も絶え絶えなのはリクも同様だ。ついさっきまであれだけ激しくはつきりと呪文を詠唱し合っていたとはとても信じられない。

「どこ……へ行く…つもりだ？ まさか……」

リクは大きく頷いた。

「ああ……大災厄、片付けに……いかなきゃ……」

「その、身体で……何が…できる？ 足手……纏まといに、なるだけだ」

その言葉にリクは力無く笑った。

「ああ……そうだよな。でも……、皆…と、約束した…んだよ。絶対……、お前に…勝って、絶対、…行くから……って、だから……待ってるって……」

そしてリクは前を向いて、また足を進め始めた。

ぎゅっ……、ぎゅっ……、ぎゅっ……

遠のいていく足音を耳に、ジルヴァルトは再び目を閉じた。

「燃え立ち上がらんかい！ 《火柱》！」

既に方言まじりになっているカーエスの呪文と共に、火柱が三本上がり、三体のクリーチャーが焼け落ちた。

カーエスも相当疲れて来ていた。もともと“魔導眼”を使っってしまった影響で動けなくなっていたのだから、最初から無理を押ししての闘いだっただと言える。

「よっしゃ！ 次落としたれ！」

その掛け声に応じてファトルエル常駐兵が魔導銃を空に向ける。カーエスも空を仰いだ。

そこには白い鳥が悠々と大災厄の暗い空を舞っている。

先ほど大決闘場から出て来たもので、クリーチャーとは違う様だが、ただの鳥ではないことは明らかだった。ではあれは何なのか。どうしてここにいるのか。

答えも、それに結びつくものも何もない。

(……一体、中で何が起こってんねん……?)

その時、いつからか静まり返っていた大決闘場の中から大きな歓声が起こった。負傷したカンファータ兵の世話をしていたフィラスもそれに驚いたように大決闘場を仰ぐ。

それから再び、負傷兵の消毒液に目を落とし、治療に専念しようとするがなかなか集中できない様子だ。

「フィリー」

カーエスに話し掛けられ、彼女は顔をあげた。
カーエスはクリーチャーが舞う空を見上げたまま続けた。

「行つたれや、アイツ迎えに」

フィラレスは手元にある消毒液とカーエスを交互に見て、躊躇ためらう様子を見せる。

するとカーエスは顔を上に向けたまま目だけフィラレスを見た。

「頼むわ。これ以上闘い続いたら俺ももたへん」

フィラレスはコクリと頷き、大決闘場の中に駆けて行つた。
それを目の端で見届けながらカーエスはひとり漏らした。

「俺もお人好しな奴やで……」

**

全身が痛い。

息を上手く吸えない。

力が入らない。

とにかく、辛かった。

まだやれる。

前に進むんだ。

約束があるんだろ。

何度も言い聞かせる自分がいる。

ここで倒れたらどんなに楽になるだろう。
ここで眠れたらどれだけ心地いいだろう。
お前は良くやった。皆も許してくれるさ。

悪魔のように囁くささやく自分がいる。

しかし、リクの身体はそれらの声とは関係無しに、大決闘場の通路をゆつくりと、ゆつくりと、歩を進めて行った。

背後から響いて来るのは未だ止まない大決闘場内の歓声。その声の具合で、これだけ頑張っても少しか進めていない事に気付いてしまう。

不意に、支えにしていた《煌》が床を滑り、リクは倒れそうになった。

手を離れた《煌》は主の魔導を失い、形を崩して消えてしまう。

彼はとつさに反対側に体重を移し、壁にもたれ掛かるようにして倒れるのを防いだ。ここで倒れたら絶対に二度と立ち上がれない。

その際の衝撃が全身に響く。

「……………っ！」

その鋭い痛み- に
リクは顔をしかめた。

しばらくその場で壁に身体を押し付けるように悶もだえていたが、やがて痛みが引くと、リクは焦点を失って移ろう眼で再び前方を睨み付け、また、足を一步前に踏み出した。

バトルフィールドから大決闘場入り口までの通路。

走って入って来た時は三十秒も掛からなかったのに、今は一刻（三時間）掛けても抜けられそうにない。
ファルガールは足留めしておいてやるから時間は気にするなと言ったが、相手は大災厄だ。いつまでも留めていられるわけがない。

そうだ、

（俺だけじゃない）

みんなあの大災厄と闘ってるんだ。
みんな苦しいんだ。

そして、

（みんな俺を待ってるんだ……！）

ここで倒れるわけには行かない。
せめてみんなのところに辿り着くんだ。

（みんなのところ……ろ……へ……っ！？）

壁にもたれていた手が、汗でズルリと滑った。
もう彼の体重の支えになるものはない。

（嫌だ、倒れてたまるか……！　こんなところで）

膝が折れる。どれだけ踏ん張っても力が入らない。
どんどん、石畳の床が迫って来るのが分かる。

（ダメだ、倒れる……！）

リクがそう思った時だった。
眼前の床が突然迫らなくなった。
自分の顎が、誰かの肩に当たっている。
そしてそこから見えるもの、腰の届く黒髪、耳に光る耳飾り、その香、自分を抱える細い腕。
どれも覚えがあるものだった。どれも彼の知っている人間のものだった。

「ファイ……リー……」

名を呼ぶと、彼女は彼を支えながら顔を見せ、コクコクと頷いた。その眼には涙が少し溜まっている。

「へ……へ……、心配、掛けち……まった……みてーだな。……ごめん……な」

リクは力無く微笑んで言う。
その時リクは自分で思った。

まだ笑う元気がある。
まだ、大丈夫。

「肩……、貸して……くれ」

リクが頼むと、フィラレスはコクリと頷いて、彼の腕を自分の肩に回し、自分の腕を肩に回した。その際に彼女は彼があまり力を使わなくてもいいようにほとんど背負うようにして彼を支えた。
そして二人は二人三脚のように慎重に前へと足を進め始めた。

フィラレスに肩を貸してもらって、リクは格段に楽になった。体重はほとんどフィラレスが支えてくれているし、バランスを崩しても、二人いればまず倒れる心配がない。暗い通路の先に、少し明るい光が見えた。大決闘場の北口だ。

(もうすぐ……もうすぐだ)

みんなのいるところまで。

「おっしゃ、次、次……つと、ちよつと待ったあつ！」

カーエスは魔導銃を上に向けたカンファータ兵をあわてて制した。そして急いで入り口に駆け寄った。

そこにはフィリーに肩を貸してもらって足取り危なげに歩くリクの姿があった。

カーエスの姿を認めると二人は彼の前に立ち止まった。

「リク……何やねん、その格好は？ そんなんで大災厄と闘えるんか？ 言わんこつちやないで」

「うる……せえ」

呆れるように言うカーエスにリクは弱々しく返事をした。

乾きに声を枯らしたリクに、カーエスは腰に付けていた水筒をだす。リクは水欲しさにその頭を上げた。

「自分で飲める？」

「…無理……だな……握力…出ね……んだ」

リクの答えにカーエスは情けなさそうにため息をついた。

「しゃーない、口移しやな」

「それだけは死んでも御免だっ！」

カーエスの提案にリクはガバツと顔をあげ、ほとんど命懸けで声をあげて拒否する。それで完全に力を使い切ったらしく、リクはガクリと頭を垂れた。

それを見たカーエスは呆れた様子でため息をついた。

「俺かて嫌やつちゅーねん。フリーならともかくなあ」と、カーエスは水筒の口を開け、その注ぎ口の上に手をかざし、撫でるようにかざした手をゆっくり振った。

呪文を唱え終わるとかざした掌から何かの液体のように光が漏れだし、水筒の中に注がれた。

それをよく振ると、その水筒の口をリクの口元に持って行く。

「ほれ、飲み」

それをリクの頭と一緒に持ち上げて水を口の中に注ぎ込んだ。飲み込む力は残っているらしく、成人を迎えているにしては小さな喉仏が上下している。少量の水が彼の口の端からこぼれ、フィラレスの肩を濡らした。

水筒の角度はだんだんと上がって行き、やがて垂直になった。

「…ふう……サンキュ」

「礼を言う前にとつとファイリーから離れえ」

カーエスは蹴飛ばすようにしてリクをフィラレスから引き剥がした。

支えを失ったリクはよろめき、力が入らないと分かっているながら反射的に足を踏ん張った。

しかし予想に反して、膝に力が入り、リクは倒れずに済んだ。

さつき飲んだ水が、そのまま体力となってリクの枯渴した身体に潤わせているのが分かる。

万全とまでには行かないが、失った体力が回復していた。

何の支えも無しに立っている自分の身体を不思議そうに見下ろし、次にその視線を正面に立つカーエスに移す。

「カーエス……お前魔法薬まで作れるんだな」

リクの目を素直に称賛ととり、カーエスは得意そうに笑った。

「研究所の魔導師の魔法を“魔導眼”で盗んだったんや。あいにく傷と魔力は回復でけへんけどな。結構まともに動けるようになったはずやで」

ひとしきり運動をして身体を慣らしたリクは空を仰いだ。

その空にはまだ白い鳥、“白鳳”《アトラ》が飛んでいる。

そんな彼の視線に気付いたのか、《アトラ》は急に方向を変え、リク達の方に降りて来た。

「スマンな、待たせたみたいで」

《謝る必要などない。そなたは約束を守った》

そして、彼の目の前に降り立つと、《アトラ》は彼に背を向けて言った。

《さあ、乗るがいい。いざ赴こう、大災厄の主の元へ》
「ああ」

そんなリクと《アトラ》のやり取りをカーエスとフィラレスは言葉もなく見つめていた。

さつきから気になっていた白い鳥がリクと話している。

(まさか、アイツが召喚したんか……？ コイツ)

《アトラ》の背に乗った自分を見上げている二人にリクは言った。

「何やってんだ、早く乗れよ！」

「お、俺らも行くんか……？」

「当たり前だろ、俺一人じゃ無理だ。来てくれ！」

リクの言葉にカーエスとフィラレスが《アトラ》の背に乗った。それをぼかんと見ていたカンファータ兵がふと我に帰ったようにカーエスに向かって声をあげた。

「ち、ちよつと、カーエス殿！？ ここの守りはどうなさるおつもりですか！？」

「スマン、俺抜ける！ 後ちよつとや、あとちよつとで終わるから何とか持ちこたえといってくれ！」

そのカーエスの返事を最後に、《アトラ》は翼を羽ばたかせて上昇した。

高度は瞬く間に上がり、たちまちファトルエル全体が見渡せるようになった。各決闘場ではそれぞれ奮戦しているようだ。

逆にファトルエルのどこからでも《アトラ》は見えるはずだ。激しい闘いの中にいる者達もこの白い鳥を見付けているかもしれない。だがこの《アトラ》にリク達が乗っている事を彼らが知る訳がない。

リクはせめてもの、と下に見えるファトルエルに向けて思った。

（みんな、頑張れ！ もう少しだ。もう少しでこの大災厄を終わらせてみせるからな！）

一方ファトルエル北、対グランクリーチャー戦線では、ファルガール、マーシア、そしてカルクの三人が、まだその戦から後退せずに頑張っていた。

相手の攻撃は“完璧”と呼ばれるカルクの防御魔法が防ぐ。

攻撃時の隙をファルガールとマーシアがそれぞれ雷と炎で攻撃し、敵の体勢を崩し、それを直す間にひと休み。

それが何十回続いただろうか。

だが、無限には続かない。その限界線が今、はっきりと引かれようとしていた。

「我らを照ら……し出す星の《紅炎》よ…… 我が導き……によりて……この場に現れ、汝が望む……がままに燃やし、焦がし尽くっ……せー！」

マーシアの足元から龍のようにのたくりながら炎が立ち上り、《グインニール》のウロコを焦がす。

それを見届けた直後、マーシアは遂に膝をついた。

「ハアツ……ハアツ……！」

「マーシア！ 大丈夫か？」

とるもの取り敢えずファルガールはマーシアに駆け寄った。その傍でカルクは《グインニール》の前に立ちはだかり、《七色の羽衣》を唱え、二人の安全を確保する。

マーシアは苦しそうに息をしながら答えた。

「ごめ……んなさい、こ……これ以上は無理……みたい……」

「ああ、良く頑張った。あとは俺達に任せておけ」

確かにマーシアはよく頑張ったと言えた。

本当なら《白き灼焔の恒星》を使用した時点で力尽きていても可笑しくなかった。あの切り札はそれほど彼女の魔力を根こそぎ奪う魔法なのだ。

それでもそのあと何十回も高レベルの魔法を放ち続けたのだから、常人からすれば、考えられないハードワークである。“冷炎の魔女”と呼ばれる彼女だからこそ、それが可能だったのだ。

「どうするんだ？ ファルガール……二人だけじゃこの戦線は維持出来ないぞ」

「どうも、こうも、出来るだけ粘るしかねえなあ」

「アレを撃つための魔力はすっかり残っているか？」

そう問われて、ファルガールは苦笑した。

「実はもう余裕ねえ」

「……どうする気だ？ 流石に私一人じゃ足止めにもならんぞ」

無傷でいられる自信はあるが、カルクでは如何せん攻撃力が足りない。

しかし何かのツケのように絶望の要素が急に積み重なって行く状況の中、彼が肩こしに除いたファルガールの顔には不敵な笑いが浮かんでいた。

「もう、足留めしておく必要はないみたいだぜ？」

ファルガールは皮肉めいた笑みを浮かべて続けた。

「見計らったようなタイミングで来やがって……あの野郎、天性の英雄だぜ」

彼の視線の先にはファトルエルから真直ぐに飛んで来る一羽の白い鳥の姿があった。

その左、つまり東の空が若干明るくなって来ている。

長かったそのファトルエルの夜にも、終わりが近付き始めていた。

46 『“二撃必殺”作戦』

そしてその者達は闘いに臨んだ。

それぞれの想いを胸に秘め、

それぞれの使命を肝に命じて。

ある者は陽動作戦の工作に、情報収集に奔った。

ある者は自軍の要と言える場所を守って戦った。

ある者は敵の陣を崩すため、そこに斬り込んだ。

皆それぞれの役割を果たすために闘った。

命を懸けて闘った。

自分達の勝利だけを信じて闘った。

そして彼らは……

大災厄の暴風、乱風の中、安定した飛行を続ける《アトラ》の上でそれぞれの弟子達は目の前に見える巨大な蛇の姿に戦慄していた。

「あの化け蛇か！？ グランクリーチャーっちゅーの！」

「ああ、間違いねー！ あそこにファルがいるはずだ！」

確かによく見てみれば化け蛇の正面あたりに、三つ小さく人影らしきものが見える。

あそこに自分の師匠がいる事をリクは知っていた。

そのファルガールと一緒にカルクがいる事をカーエスは知ってい

た。

さつき一度だけ炎が上がったのをみて、フィラレスはマーシアがそこにいる事を知った。

それぞれ尊敬する魔導士と共に闘う。

そう考えると三人は恐怖を忘れ、それぞれ誇らしい気持ちになった。

《そろそろ奴に見付かって攻撃されても可笑しくない。闘いの準備をするがよい》

「わかった!」

《アトラ》の言葉に答え、リクはグランクリーチャー《ゲインニール》を見据えた。

「しかし、あの化け蛇どないして倒すん? お前、もう魔力残ってへんのやる?」

「ああ、すつからかんだ」

もっともなカーエスの質問にリクはしれつと答える。

その様子にカーエスはあからさまに眉を潜めてみせた。

「……ここまでカツコつけて来といて策無しやったら、マジでこつから突き落とすで?」

小脇に両手を構え、じりじりとリクににじり寄るカーエス。

リクはそれを小さく手を振って止めようとする。

「まあ、早まるな。策は無いわけじゃない。考えてみるよ、策無し

なら何のためにフィリーを連れて来たと思ってるんだ？」

確かにカーエスはともかく、周りに仲間がいる状況では闘えない
フィラレスがここにおいても意味が無い。

だが、彼女の協力を仰ぐ理由の可能性はたった一つだ。

「まさか“滅びの魔力”で!？」

「正解。さすがエリート揃いの魔導研究所勢」

「でも、フィリーはアレをコントロール出来へんねんで？ 一直線
に全部の魔力をあの化け蛇にぶつけられるんやったらともかく、フ
イリーやったら力が分散してもうて、それもままならんやろ？」

カーエスの言う通り、今のままのフィラレスの魔導制御では“滅
びの魔力”は今まで通り、彼女の意識したところ全てに導かれ、分
散するだけだ。

グインニール
標的に彼女の“滅びの魔力”の手を向けるのが理想のだが、今
の彼女ではむしろより近くにいるリクやカーエス、《アトラ》に
“滅びの魔力”全てが襲い掛かる可能性の方が高いだろう。

「フィリーだったら、な」

意味ありげな言葉と共にカーエスの質問に返したリクの表情は、
そんな分の悪い賭けをする男のものとは思えないものだった。

《グインニール》正面の上空を旋回している白い鳥の真下。同じ

くグランクリーチャーの目の前で頑張っているファルガール達である。

「“二撃必殺” 作戦開始だ！ カルク、詠唱の間、防御魔法を頼む！」

「待て、あそこにリクがいる保証は無い、チャンスは一度きりしか無いんだぞ」

以前にファルガールが考察した通り、《ゲインニール》は自らの存在を危うくするような魔法を喰らうと、転生でもするように青い光で出来た巨大蛇に姿を変える。

それ故に一撃ではこのグランクリーチャーを葬ることは出来ない。青い光の姿になってから三度水流を放つ前にもう一度仕留めなければならぬ。

グランクリーチャー《ゲインニール》を倒せるくらいの大きな攻撃魔法を唱えられる人物は二人、ファルガールとリク、それぞれ一発ずつだ。

それを外すと、後はもう無い。

「一度きりしか無いんだ。もっと確かめてから……」

「頼む、信じてくれ！」

珍しく焦燥感を露にして、ファルガールは言葉を遮った。

カルクとマーシアにはあの白い鳥アトラにリクが乗っていると分かる要素は何も無い。

しかしファルガールは、その白い鳥アトラのことをリク自身から聞いていたので確信していた。あそこには間違い無くリクがいると。

「時間が無えんだ。アイツはまだこの化け蛇が一撃じゃ死なねえことを知らねえ。」

「あつ……！」

ファルガールの言葉に、カルクが声をあげる。

ジルヴァルトとの決戦前、ファルガールはリクにグランクリーチヤーを倒すための策を授けた。しかし、その時は教えたファルガールも《グインニール》に一撃必殺が通用しないことを知らなかった。だからリクは今も《グインニール》が一撃必殺で倒せると思っている。

カルクはしばらく《アトラ》とファルガールを交互に見たが眉間に皺を寄せ、ぐっと目をつぶって空を仰ぐ。

そして意を決したように目を開いた。

「行くぞ、ファルガール！ 焦って仕損じるな！」

「ああ、任せておけ！」

「火には水となり、風には土となる、斬る者あれば固くなり、殴る者あれば弾力を得ん、その特性は臨機応変、行うは武力の妨げ。我が纏いし《七色の羽衣》は如何なるものも拒絶する！」

天に掲げた掌から光の膜が広がった。それはカルク自身を、マシアを、そしてファルガールを包み込む。

信頼できる絶対安全圏の中でファルガールは《ヴァンジュニール》を構えた。その先端に余すことなく魔力を注ぎ込むと、二叉の矛の先に大きな雷の玉が膨らんで行く。

「龍の如く天翔ろ、雷光！ 鼓のように天響け、雷鳴！ そして天堂に座す雷の神よ、我が声に応えよ！ 罪とされし彼の者に、最後の審判をいざ執り行わん！」

ファルガールが一度を天に突き上げると、雷の玉が天上に舞い上

がり、あっという間に大災厄の暗雲の中に潜り込んだ。

「ここに降れ、御名における神鳴る裁き！」

そしてファルガールは詠唱を完了させる。

「《蒼き神罰の御鎚みづち》！」

カツと暗雲立ち籠める大空が光ったかと思うと、次の瞬間、柄の無いハンマーが天から振り降ろされたかのように、天から蒼い稲妻で出来た円柱が降って来た。

その稲妻の柱は呆気無くグランクリーチャー《グインニール》の巨体を完全にその内に飲み込み、押しつぶす。

「な、何や、何や……！？」

《アトラ》の上にいる全員が雷鳴に耳を塞ぎ、閃光に目を細めた。今倒そうと思ったグランクリーチャーが突然起こった太い円柱状の雷によって飲み込まれ、押しつぶされてしまった。

「ファルだ！ これはファルの雷だ！」

しかしどういうことだろう。はじめからあんな一撃必殺が出来るのなら、リクに策を授ける必要は無かったはずだ。

一同顔を見合わせるが答えは見えない。

「取り敢えず全部終わったつちゅーコトか？」
《いや、まだ、終わってはいない》

カーエスの疑問に答えたのは《アトラ》だ。

「どういうことだ？ 《アトラ》」

聞き返すリクに《アトラ》は長い首を下に向け、嘴で地上を指す。

《見ていれば分かる》

三人はそれぞれ《アトラ》の背から身を乗り出し、下を覗いてみた。

《アトラ》は彼らが見やすいように少し離れた位置まで退いた。

ファルガールの最強魔法《蒼き神罰の御鎚》で生み出された蒼い稲妻の柱は未だその場に留まり、バチバチと紫電を周囲に散らしている。

一見この稲妻の柱は天から地まで貫いているかのように見えたが、その稲妻の柱の下に、何か青い光のようなものが見えた。稲妻の柱も同系色の色なので気付きにくいだが、確かにそれは稲妻とは別のものだ。

「……………！ アレは……………！？」

その稲妻の柱が不意に少し持ち上がった。

そしてその下にあった青い光の正体が明らかになる。それは青い光で出来た一匹の巨大な蛇だった。柱の下でとぐるを巻いて踏ん張り、必死で頭の上に乗った稲妻の柱を持ち上げようとしている。

その後、その蛇はどうにか口を上に向けて開いた。
次の瞬間、その光の巨蛇の身体からは想像出来ない量の大水流が口から天に向かって吐き出された。

大水流は《蒼き神罰の御鎚》とぶつかり合い、激しく火花が起こり、あたりに紫電を散らす。

一進一退ながらも、大水流は徐々に蒼い稲妻の柱を持ち上げて行く。

そして遂に、ある時点を境に大水流は一気に稲妻の柱を押しきり、飲み込んだ。稲妻の柱に水の柱が取って変わる。

天に向かって吐き出された大水流は桶をひっくり返したような大雨となった。

その雨は《蒼き神罰の御鎚》の影響で帯電し、青く輝いており、戦場となっている一体が青く光る雨が降り注ぐという幻想的な景觀となっていた。

その雨を浴び、勝利の雄叫びでもあげるかのように、青い光の巨蛇ニールが咆哮を上げた。

「な、なんちゅー化けモンや。あんだけ強力な雷を押し返しよったで」

カーエスも雨を浴びながら、その信じられない光景に息を飲む。リクはというと、やはり驚愕に支配された面持ちで天に向かって吠える青い光の蛇を見つめている。

「あの光の蛇は……」

《さっきの化け蛇、グランクリーチャーだ。そしてあれが真の姿》
「真の姿？」

聞き返すリクに《アトラ》は再び《ゲインニール》に接近しながら答えた。

《さっきまでのあの姿は鎧兜を身に付けた甲冑騎士と同じだ。その状態で自らの存在が危うくなるような強力な攻撃を受けると鎧兜を脱ぐように普段の姿を捨て、中身の真の姿を晒す。

この“転生”の能力はほとんどのグランクリーチャーが持つており、真の姿になると大抵比喩物にならないくらい強くなる》

「厄介だな……」

リクがそう漏らしたのを聞いて、《アトラ》はさらに続けた。

《確かに厄介だが、グランクリーチャーは真の姿の時でない止めは刺せない。“転生”の能力を使うグランクリーチャーは何発か強力な攻撃を放った後、元の姿に戻るのがほとんどだ。今のうちにケリを付けなければまた元の化け蛇に戻ってしまう可能性が高い》

リクはすつくと立ち上がり、《アトラ》の前方に見える青い光の巨蛇を見据えた。だが彼はそれきり押し黙ってしまった。《アトラ》は背中に小さな震えを感じる。

そんなリクに《アトラ》は話し掛けた。

《どうした、臆したか？》

「まさか、ただの武者震いだよ。よし《アトラ》、戦線布告だ！あの化け蛇に一発挨拶をくれてやれ！」

《心得た》

《アトラ》は前方の青い光の巨大蛇に向かって嘴を開く。その嘴の中にエネルギーが溜まって行き、それは光熱波として巨蛇に向かって放射された。

その時、青い光の巨大蛇はグインニールファルガル達に向かつて例の大水流を放とうと、身体を仰け反り、口を開いているところだった。そこに光熱波が直撃し、《グインニール》は誰が邪魔をしたのかと責めるように《アトラ》とその上にいるリク達に視線を向ける。

《グインニール》とリク達の目が合った。

リクはその蛇に向かつて中指を立てた。

その隣でカーエスも親指を下に向けて突き立てている。そして思い思いに宣戦布告をした。

「行くぞ、化け蛇！」

「掛かって来いやア！」

《アトラ》も青い光の巨蛇に向かつて吠えた。

分かったのか分からないのか、《グインニール》はそれに答えるように彼らに向かつて空気を震わせるような咆哮を上げ、大水流を放たんと口を開き身体を仰け反らせる。

《アトラ》もそれに応じるように嘴を開き、その中にエネルギーを溜める。

放つのは《アトラ》の光熱波の方が早かったが、それが届く前に《グインニール》は大水流を吐き出した。

それは《アトラ》の光熱波を呆気無く吹き飛ばし、リク達に迫る。

「火には水となり、風には土となる、斬る者あれば固くなり、殴る者あれば弾力を得ん、その特性は臨機応変、行方は武力の妨げ。我が纏いし《七色の羽衣》は如何なるものも拒絶する！」

大水流がリク達を押し流すその直前、カーエスの魔法によって《アトラ》を含めた全員を虹色の光の膜がリク達を包み込んだ。大水

流が、その外側を流れて行く。

「ナイス、カーエス！」

「防御は任しとき！ これでも“完璧”のカルク＝ジーマン先生の弟子やからな！ って、あわわっ……！？」

カーエスが行った時、膜の一部が大水流の水圧にベコンと凹んだ。彼は慌ててそれを修正した。だがそれに気を取られている間に別のところが危うくなり、カーエスはやや混乱気味にその対応に追われている。

《七色の羽衣》は敵の攻撃に対し臨機応変にその性質を変える能力を持つ障壁だ。だが、その障壁の性質をコントロールするのは術者である。

つまり敵の攻撃を常に神経を張り巡らせて感知し、それに合わせて常に微妙な魔導を行わなければならないという、魔力より神経に負担の掛かる魔法だ。《七色の羽衣》を制御しながら喋るなどという芸当が可能なのはカルクくらいのものだ。

「危なっかしいなあ。……けど任すしかねーか」

防御魔法の制御に四苦八苦しているカーエスを見てリクはそう漏らした。そして隣にいるフィラレスに視線を移す。

「よし、俺達も始めるぞ」

彼の声にフィラレスは浮かない表情で頷いた。

「さあて、後は高見の見物だな」

自分の中で最強の魔法を使ったことで魔力尽き果てたファルガールは、先程まで降っていた雨で水浸しになった地面に大の字に寝転びながら言った。

その頭のあたりにマーシアが座り込んでいた。カルクもその傍に腰を下ろす。

三人の視線は頭上の《アトラ》に向けられていた。今、その《アトラ》は《グインニール》の放った大水流に飲み込まれてしまっている。

「無事かな、アイツら」

「大丈夫だろう。飲み込まれる直前に《七色の羽衣》が発動するのが見えた。まさかあそこにカーエスもいるとは思わなかったが」

言葉の割に気の抜けた口調のファルガールの言葉にカルクは律儀に答えた。

続けてファルガールに尋ねた。

「そろそろ教えてくれても良いんじゃないか？ どうやって、リクがあの大災厄に打ち勝つのか」

「そりゃ、決まってるだろ。一撃必殺のアレでだな…」

だるそうに答えるファルガールのその言葉をカルクは途中で遮る。

「あのジルヴァルトとかいう者を相手にしてそんな余力が残ってい

るとは思えんがな」

「大丈夫だろ。アイツ根性あるからな」

それを聞いたカルクは空中から目を外し、ファルガールをじろりと睨んだ。

そんなカルクにファルガールは両手をあげて降参の意を示す。

「……分かったよ。確かにあのジルヴァルトとかいう奴は強え。アイツに勝つても余力はほとんど残ってねエだろうな。

というか元々、俺の《蒼き神罰の御鎚》みたいなでかい魔法はまだ出来ねえんだ。ああいうのは先ずレベル7の魔法武器の召喚が出来るようになって、それを使い込んで熟練するようになってからでねえと出来ねエからな。

あのジルヴァルトとかいう野郎に勝つて来たところを見ると魔法武器の召喚自体は出来るようになったらしいが、まだ出せるようになっただけだろ」

「それじゃどうやって倒すつもりだったんだ？」

ファルガールはちろりとカルクに視線を移し、不敵に笑ってみせた。

「リクとカーエスだけじゃねーんだよ。あの鳥に乗ってるのは」

そしてその視線をマーシアに向ける。

その意味深長な言動にマーシアはハツとして言った。

「……まさかファイリーも!？」

「そう言っつこった。……あの嬢ちゃんだろ? “滅びの魔力”を持ってるっつのは」

「どうして分かったの?」

マーシアの記憶している限り、ファルガールがフィラレスに会ったのは初日の酒場での再会の一度きりなはずである。

不思議そうに尋ねるマーシアにファルガールは空中に視線を戻して答えた。

「存在は噂で聞いてた。あとは魔導研究所の最先端の魔導技術の詰まった最新の魔法アクセサリー。それでも魔力は封じ切れてねえときた。そうなりや可能性は一つだろ？」

「確かにあのコの魔力ならグランクリーチャーも倒せると思うけど、あのコは自分の魔力を制御出来ないのよ？」

「分かってるよ」

ファルガールは一言で答えた。制御できるくらいならあんな魔封アクセサリーなんてものは要らない。

ならどうして、と自分に問いかけるカルクとマーシアの視線を受けてファルガールはにやりと笑って続けた。

「あの嬢ちゃんだったら、な」

「どう言うことだ？」

「まだ分からねエか？ 何のために力を使い果たして、一見役に立たねえアイツがあそこにいると思ってるんだ？」

その言葉にカルクとマーシアは顔を合わせる。

今判明している白い鳥の搭乗メンバーの中でファルガールの言う条件に当てはまる人物は一人しかいない。

「……まさか!？」

「そう」と、ファルガールはやっと分かったか、とでもいうようにため息をついて続ける。

「リクなら“滅びの魔力”を制御できる」

47 『大いなる第一歩』

彼らがそうしたから世界はこう変わった。

今から見ると、彼がそうした事が全ての始まりだったのかもしれない。

あれが上手く行かなければ全ては始まらなかった。

世界も今とは全く違うものとなっていただろう。

本人達から、その時代から見ると分からないかもしれないけど、そうして世界を変えた出来事。

その始まりは今ではこう呼ばれている。

大いなる第一歩、と。

突然、彼らを取り囲んでいた大水流が消えた。

どうやら《グインニール》の一回の攻撃が終わったらしい。

それを《七色の羽衣》で防御し続けていたカーエスがガクリと膝をついた。顔面からは血色が失せ、全身の穴という穴から玉の汗がふき出している。

《カーエスとやら、大丈夫か？》

「あんまし大丈夫とは言われへんなあ……」と、《アトラ》の問いに、カーエスは苦笑して答える。「先生はコレ平気で使ったから、こんなキツイモンやとは思わなかったわ」

大水流を放ち終わった《グインニール》は《アトラ》に向かって

咆哮をあげる。そして三度目の大水流を放とうと、身体を仰け反らせる。

それを見たカーエスが顔をしかめた。

「え……、もう次撃つん？ こつちとしては、あんまし張り切られるとヒジョーに困んねんけどなあ」

緊張感の感じられない口調だが、切迫した状況をはっきりと感じさせる表情でカーエスはよろめきながらも立ち上がり、《七色の羽衣》を詠唱する準備をした。

しかしいざ大水流が放たれようとしている時、《アトラ》が嘴から光熱波を撃ち、その邪魔をする。

《ずっとは無理だが、しばらく大水流が撃てないように粘ってやる。その間、休んでおくがいい》

「……おーきに」

カーエスは礼を言うと、再び膝をついた。

全身の力を極限まで抜き、少しでも力を回復しよう意識する。そして背後にちらりと目をやる。

(ちゃんと間に合うんやろな……?)

カーエスの視線の先ではリクとフィラレスは向かい合って立っていた。

リクがフィラレスと視線を合わせ、呪文を唱える。

「我ら、互いの合意の上に契約を結ばん」

そして彼は右手をあげた。

フィラレスも同じように左手をあげる。

「汝、一時献じるは魔力。その代償に我は汝が望みし時に一度、汝が僕として振る舞わん」

これは《魔力貸借》という契約魔法である。

術者と相手の合意により、術者は相手の全ての魔力を一時借り受け、代わりとして相手が臨む時に一度だけ、僕のようにどんな事でも言う事を聞くという契約を結ぶ魔法だ。二人の右手と左手を合わせて唱え切った時、魔力は相手から術者に移動する。

この魔法を利用し、フィラレスの“滅びの魔力”をリクに移動し、リクが“滅びの魔力”を制御して、その全てを《ゲインニール》にぶつける作戦である。

リクとフィラレスも右手と左手を合わせた。

しかし、一向に魔力が渡ってこない。確かに魔力が相手から術者に渡り切るのは呪文の詠唱を終えた時だが、渡り始めるのは手を合わせた時である。

それが入ってこない原因は一つしか考えられない。

二人の合意が為されていないという事だ。

「フィリー……」

リクが名を呼ぶと、フィラレスは申し訳なさそうに目を伏せた。

だが、気持ちは分からないでもない。“滅びの魔力”がどれだけ

恐ろしく危険なものなのか、彼女は身を持って知っているのだ。もちろん周りの者にとっても危険だが、何よりも“滅びの魔力”の持ち主自身が危険なのである。

長年連れ添って来た自分でも制御出来ないのだ。そんな大きな魔力を他人に渡す事は出来まい。

(信用してくれって言っても、無理な話だよな……)

しかし、彼女の“滅びの魔力”が無い限り、この状況を打破する望みは無い。おそらくここで皆死ぬ事になり、ファトルエルの歴史はここで閉ざされる事になる。

そうなれば、リクの夢も叶わない。

「ファイリー」

再び呼び掛けられ、フィラレスは少し困った表情で、顔をあげた。リクはそんなフィラレスに優しく微笑みかけてやる。

「なあ、ファイリーの夢って何だ？」

「信じてくれ」とか「絶対に制御してみせる」とか、とにかく説得の言葉を掛けられるとばかり考えていたフィラレスは思い掛けない言葉に目を丸くする。

自分の夢。

そんなものは“滅びの魔力”が発現して以来、考えた事が無かった。

自分に夢を見る権利があるとは思っていなかったから。

今まで傷付けてしまった人達の事、そしてこれから絶対に人を傷付けないようにするにはどうしたらいいか。

そんな事ばかり考えていた。

敢えて言うなら、絶対に人を傷付けないような安全な存在になりたい。人を助けられるようになり、自分の罪を償えるようになりたい。

そんなところだろうか。

“滅びの魔力”が発現する前は、お菓子屋さんになりたかった憶えがある。そして、女性共通の夢として好きな人と結婚したいとも考えていた。

しかし、フィラレスにはそれを答えとして口にする事は出来ない。そんな事は重々承知しているリクは、フィラレスに答えを考える時間だけを与えて話を進めた。

「俺も夢がある。叶う見込みがほとんどねーような大それたヤツだけどな。でも叶ったらいいな、と思う。……フリーもそうだろ？」

問われ、フィラレスは頷く。

確かに叶えばいいな、とは思う。

「でもここで死んだら夢を叶えようと努力することも出来なくなるわけだ。それは嫌だろ？」

再び問われ、フィラレスは頷く。

そして、リクは本題に入った。

「正直言って、俺が“滅びの魔力”を操ろうなんて作戦はあまり勝つ見込みのねー賭けだと思う。俺は“滅びの魔力”なんて持ったコトねーからな。操れるかどうかなんて保証は出来ねえ。

でもな、ここで何もしなければ確実に俺達は死ぬ。俺達の夢が終

わっちまう。だがここで賭ければ俺達は助かる。夢も続く。可能性は低いけどな。

賭け金は“滅びの魔力”。勝てば命と夢。……どうだフィリー、賭けてみないか？ この俺に」

三たび問われ、フィラレスはこれにも頷いた。

何もしなくても死ぬのだ。

ここで何を恐れても無駄なだけだ。

リクも頷き返し、改めて二人は向かい合って立つ。

「我ら、互いの合意の上に契約を結ばん」

リクが右手をあげ、フィラレスが左手をあげる。

先程と比べると、心無しかフィラレスは微笑んでいるように見える。

大丈夫、上手く行く。

彼女の表情を見てリクはそう思った。

「汝、一時献じるは魔力。その代償に我は汝が望みし時に一度、汝が僕として振る舞わん」

そこまで唱え、二人はハイタッチをするように上げた手を合わせた。

その瞬間から“滅びの魔力”がリクの身体の中に流れ込んで来る。内心で成功を喜びながら、リクは詠唱を完了させた。

「《魔力貸借》」

「……数字的にはどうなんだ？」

カルクが傍らに寝転ぶファルガールに尋ねた。

「あん？」と、ファルガールは間の抜けた返事をした。疲れ切っている上に、《グインニール》に存在を忘れられたらしい現在の状況に緊張の糸が切れ、一気に眠くなってしまったらしい。

「リクの魔導制御力。何パーセントなんだ？」

魔導制御力はもし完全に魔力を制御し、完璧な魔導を行った場合の魔法効果を最高の百パーセントとする百分率で表される。

最低六十パーセントで魔法が発動するとされている。一般に一人前と認められる魔導士の魔導制御力は七十から八十パーセントくらいだ。

そして自惚れでなくファトルエルの決闘大会に出場する者達の平均魔導制御率は大体八十パーセント後半。そして毎年の優勝候補となると、九十パーセント前後が相場となる。

九十パーセント後半に手が届くものはほとんどいない。

「“滅びの魔力”を制御しようと言うんだ。まさか並みではないのだろうか？」

「……嬢ちゃんは？」

例によってファルガールは答えをじらす。

「フィラレスは八十七パーセントだったかしら」

「立派なモンだ。でもそれでも魔封アクセサリーは外せねえんだな」と、ファルガールはマーシアの答えにコメントしカルクの方に視線を移す。

「カーエスは九十一パーセントだ」

ちなみにクリンとクランは一人ずつで八十五パーセント。二人で“二重詠唱”を行った場合、例外的に百三十パーセントを超える数値が出る。

「へえ、立派に優勝候補クラスじゃねえか。で、マーシアが九十四パーセント、カルクが九十五パーセント……だったよな？ で、俺が九十六パーセント」

「……ファルガール、いい加減にしておけよ」

はぐらかし続けるファルガールにカルクが声を低くして言った。聞いていたのか、いないのか、ファルガールは同じ調子で続けた。

「……そしてリクが九十九パーセント」

その瞬間、沈黙がその場を支配した。

あんまりさり気なく答えたので一瞬何を言われたのか分からなかったが、何を言っているのかに気付き、次にその言葉が何を意味するのかを理解する。

そして長い長い三秒間が過ぎた時、カルクがやっと口を開く。

「九十……九パーセントだと……!？」

「ああ。九十九パーセント。すげえだろ？」

ファルガールは軽く言うが、クリンとクランのような例外を除くと、この数字は記録に残る限り前人未到の数字である。

ファルガールの九十六パーセントと三パーセントしか変わらないように見えるが、魔導制御力は高くなるに従って一パーセントの差が大きくなっていく。特に九十パーセントを超えるで一パーセントの差が魔法効果にはつきりと現われるようになる。

そんな魔導制御力でこの数字はまさに異常とも言えた。

「滅びの魔力」ともなると百パーセントでねえと完全に安心する事は出来ねえが、残り一パーセントの魔導制御のスキで“滅びの魔力”がどう出るかは、ま、賭けだな」

強大な魔力がリクの空になっていた身体を駆け巡っていた。

その魔力は子供のように落ち着く事を知らず、リクの制止をまるで気にとめる事もなく暴れ回る。

身体の中で暴走している“滅びの魔力”は外に出よう、外に出ようとうと動き、風船に入れ過ぎた空気のように彼の身体を内側から割ろうとし、実際、風船の穴即ちリクの傷から魔力が勢いよく漏れ出しているのが肉眼で確認できる。

息が詰まりそうな感じだったが、迂闊に息をする事も出来ない。

確実に息だけを吐かなければならない。

少しでも気を緩めたら確実に暴走が始まる。

リクは小さく呻き、膝を付く。その顔に脂汗がびっしりと浮いている。

フィラレスが心配そうにしゃがみ、リクの顔を覗き込むが、目の前の彼女も今の彼には気が付くことが出来なかった。

《アトラ》が三度目の光熱波を放ち、三たび《グインニール》の大水流を防いだ。

見た目は何も変わらないが何度も何度も邪魔をされ、《グインニール》はずこし苛立っているような感じがする。

だがそれはおそらく自分が《グインニール》の立場だとしたらそう感じるからだろう。

そんな事を考えているカーエスに《アトラ》が話し掛けた。

《邪魔をするタイミングが徐々に遅れてきてしまっている。この調子だと次はおそらく間に合わない。防御魔法の準備をしておけ》

「了解」

カーエスがうずくまってしまったリクから目を離し、すつくと立ち上がった。改めて《グインニール》を見据える。

そしてカーエスは《アトラ》に言った。

「……礼言つとくで、結構休ましてもろたわ」

《強がるな。実のところ、次の大水流は防ぎ切れないのだろう？》

言われて、カーエスはしばらく押し黙った。

だが急に明るい顔でからからと笑う。

「バレてもーてたんか。せやで、多分途中で力尽きると思うわ」

《……そなたは間に合うと思うか？》

一瞬何の事かと思っただが、すぐに分かった。
リクのことだ。

「知らん」

《知らない？ どういう事だ？》

「俺は、俺のできる事を精一杯やったる。あいつもおんなしやる。その結果がどうなるうと、俺の知ったこっちゃないわ。……おい、来るで！」

カーエスの強い視線の先では《グインニール》が最後の一撃を放たんと大きく仰け反っていた。

《アトラ》は話ながら蓄えていたエネルギーを光熱波として放つ。しかしそれは予想通り一步届かず、《グインニール》の大水流に飲み込まれた。大水流がカーエスに迫る。

「火には水となり、風には土となる、斬る者あれば固くなり、殴る者あれば弾力を得ん、その特性は臨機応変、行方は武力の妨げ。我が纏いし《七色の羽衣》は如何なるものも拒絶する！」

カーエスの手から虹色の光の膜が広がり、大水流に襲われる《アトラ》を包む。

直後、彼らを包む風景が水一色になった。

カーエスは膜を押し破らんとする目の前の激流を睨み付け、全力を持ってそれを防ぎに掛かる。

できる事をやる。

できるだけ長い時間《七色の羽衣》を維持し続けるのだ。

今はそれだけ。

カーエスはもう背後のリクを気にしなかった。

何も見ない。

何も聞かない。

そこまで集中していないと、“滅びの魔力”はすぐにどこかに行ってしまうおうとする。

リクの九十九パーセントの魔導制御力。しかし“滅びの魔力”はダムに穿たれた穴から出ようとする水のように、その残り一パーセントの穴に殺到するのだ。

リクは、意識をどこかに向けると反応してそちらに向かっってしまう“滅びの魔力”の性質が身に染みて分かったような気がした。

こんな魔力をずっと持っているなんて、考えるだけでそら恐ろしい。

そのそら恐ろしい状態ですつといたのがフィラレスだ。口が利けなくなってしまうのも分かる気がする。

しかし、抑えているだけでは駄目だ。しっかりと導いて全部あのグランクリーチャーにぶっつけなければならぬ。

何とかしなければと“滅びの魔力”を動かしてみたものの、それは過剰に反応し、危うくカーエスを背後から襲うところだった。

寸前でリクはそれを抑える事に成功したが、既に尽きかけている精神力を思いきり消費してしまった。

だが今の失敗は精神力の無駄遣いでは終わらなかった。

（そうか、元々外に出ようとする魔力なんだから、いつもみたいに

引っぱり出そうとしたら勢い余るに決まってる。

“滅びの魔力”は俺の元の魔力とは全く逆なんだ。通って欲しいところを引っぱり回して先導するんじゃない。逆に通って欲しくないところを抑えて、通らざるを得ないような“道”を作って導くん
だ……！)

そしてその道はただ一本。《グインニール》目掛けて真直ぐに。
魔導が複雑すぎるいつもの魔法では駄目だ。

自分の全ての魔力を真直ぐに敵にぶつけるシンプルな魔法。

リクはそんな魔法を一つだけ知っていた。

「く……くっ……」

《アトラ》を包む虹色の防御膜の正面部分が大きく凹んで来ている。彼らを襲っている大水流の水圧に押され始めているのだ。

カーエスは何とかそれを修正しようと魔力を送るが、送る魔力もあまり残っていないし、このデリケートな防御魔法を操る精神力が底を尽きかけている。

ふっ、とカーエスの横に影が差した。反射的にカーエスがそちらに目をやる。

「リク……！？」

リクはカーエスが目に入っていないのか、彼を押し退けるように

してカーエスに肩をぶつけて進み、《アトラ》の長い首の付け根あたりまで歩いて行く。

その視線はまっすぐ正面を向いていた。しかし目の前の大水流を見ているわけではない。その向こうの《グインニール》を見据えているのである。

肩をぶつけられた拍子にカーエスの集中が切れ、大水流が遂に《七色の羽衣》を破った。

「……しもたっ……！」

目の前に圧倒的な量の水が流れ込んで来る。

リクはそれを前にしても何ら反応を示さない。

(……まさか、あいつあの大水流が見えてへんのか！？)

しかし見えたからと言って何も変わらない。

変に焦って失敗されるよりマシだ。が、少しは急いで欲しい状況ではあるのは否めない。

リクは真直ぐ前を見据えながら目の前の大水流に向かって両手を構え、そして落ち着いた声で詠唱を始めた。

「目覚めよ、我が内に眠る全ての魔力よ！ その力解き放ちてここに集え！」

リクの全身からフィラレスの時と同じように光の帯がほとばしり、リクの掌の先に集結して行く。

それはいつまで経っても終わる気配がなく、リクの手先に集まった魔力の玉はリク自身、否、《アトラ》でさえも全身を飲み込まれそうな程巨大に膨らんで行く。

だがそうしている内にも大水流はリク達に向かって迫り、リクの魔力の玉にぶつかった。

押し流されるかと思いきや、それは川の流れを分かつ石のように、大水流から《アトラ》に乗る者達を大水流の流れから守る。ようやく魔力の玉の膨張が終わり、リクは詠唱を続けた。

「そして、我と相まみえし彼の者を討ち滅ぼす奔流となり波となれ
！」

(疲れたなあ……)

リクはそう思った。

それもそのはずである。昨日からジェシカ、クリン、クラン、カイエスと闘い、その直後にフィラレスを助けに走った。更にその夜のジルヴァルトとの死闘。自分の体力と魔力を使い果たし、一睡もしないまま今こうして大災厄と闘っている。

(……でもこれもあともう少しだ)

この魔法さえ完成させれば全てが終わる。

ゆっくりと休むことができる。

今なら、堅くて寝辛かった『旅宿・バトラー』のレンガ造りの似非ベッドでもぐっすりと眠れることだろう。

食事も腹が一杯になるまでしたい。大会中はろくなものを食べていなかった。

あれもしたい。

これもしたい。

終わった後にしたい事はたくさんある。

これさえ終われば全て実現できる。
この魔法さえ完成させれば……

そしてリクは魔導を終え、その魔法の名で詠唱を締めくくった。

「《無限の波動》！」

リクの手の中にあつた魔力の玉が光を増す。

そして魔力の奔流となつて、先ず《グインニール》の大水流と正面からぶつかりあつた。

力を分散する事なくただ一方向に集中して放たれた“滅びの魔力”は圧倒的な力を誇り、その大水流をもあつという間に制する。

それだけでは終わらず、“滅びの魔力”は更に勢いを増し、大災厄の核であるグランクリーチャー《グインニール》の身をもその流れの中に飲み込み、滅ぼして行く。

やがて《グインニール》の完全に消滅した時、大災厄の中心であるその頭上から、波紋が広がるように空を覆っていた雲が晴れて行く。

同時にファトルエルを襲っていたクリーチャー達も地面に融けるように消滅して行き、ずっと止まなかつた地震も収まった。

そして完全に大災厄の暗雲は晴れ、東の空から朝日が顔を出す。

その瞬間、ファトルエルの長い夜は終わった。

人が初めて大災厄に打ち勝つた歴史的瞬間だった。

48 『その森に語られた伝説』

ああ、その街ならこの道を真直ぐ行っただころにあるよ。
迷いやしないさ。この運河に反って一本道だからね。

え？ この運河は自然に出来たようには見えないって？
そりゃそうさ。これは元々闘いの跡だったんだ。

興味ある？ じゃ、ちょっと話をしよう。

この森は元々砂漠だったのさ……

ファルガールはいつの間にか目を覚ましていた。
しばらく何も考えずに天井を眺めていたが、気合いを入れて身体
を起き上がらせると、自分のベッドに腰掛けて隣のベッドを見る。
そこにはリクが眠っていた。

リクは全く鼾いびきを掻かない。すうすうと寝息をたてるだけで、寝顔
も可愛いものだ。成人したとはいえ、カルクに少年といわれたのも
頷うなずける話である。

そんなリクの寝顔をファルガールはしばらく眺めていた。

(よくやったよな、お前)

事実上の大会決勝戦、その直後に大災厄と闘って、それにも打ち
勝ってしまった。こんな芸当のできる魔導士は他にいるだろうか。

自分が十五年前の大会の決勝戦でカルクと闘った後の事を思い出
す。

あの時は丸一日眠ってもまだ足りない感じだった。

大会前にファルガールがオキナに話していた通り、ファルガールは今回の大会でリクに足りない、たったひとつのある事を身に付けさせるためであった。

その一つのある事とは、自分で判断する事である。

リクはファルガールを師事する間、あまり自分で判断して行動するという事がほとんどなかった。それ故に自分の行動の判断をファルガールに任せる図式が出来上がってしまったのである。

しかし大会においてリクの行動を決定付けたのは、彼から一時離れていたファルガールではない。紛れもなくリク自身の意思によるものだ。

今回の大会を経て、リクは足りなかったものも完全に身に付けた。おまけにリクの使えなかったレベル5以上の魔法まで使えるようになった。

(…………もう俺の教える事はねえ、かな…………)

あるにしてもリクはもう自分で学んでいけるだろう。
そう考えると、何だか寂しい気持ちもしないではない。

ファルガールはゆっくりとベッドから立ち上って部屋から出ていった。

「ギヤアギヤア騒ぐんじゃないよっ！ 英雄だろうが何だろうがあ

んだけのことしたんだ、少しは休ませようって気にはならないのか
いっ！ とつとと出て行きなっ！」

恐ろしい剣幕の怒号に、今回ファトルエルを救ったリクやファル
ガールを一目見ようと大勢詰め寄っていた人々が『旅宿・バトラ』
を飛び出していった。

やっと静かになった宿の入り口でその怒号の主、オウナが仁王立
ちしている。

階下に降りて来たファルガールはそんなオウナに話し掛けた。

「相変わらず、すげえ迫力だなア……」

「あたしの怒鳴り声で動じないのはウチの人とアンタくらいのもん
さ」

オウナは振り向きもせずになんか答えた。

そして一度、深呼吸ともとれる深い息をつくとき、やっとファルガ
ールを振り向き、しかし一瞥もくねずに彼の前を食堂に向かって通
り過ぎて行く。

「朝食食べるかい？」

「ああ、あんまし食欲ねえけど軽く食べとくか」

ファルガールは返事をするときオウナの後ろについて食堂に入った。

そしてがらがらの食堂の席の中から、奥の一席についた。そして
ぼんやりと向かいの席を見る。そこはいつもオキナが本を開いて陣
取っていた席だった。

彼はまだオキナが死んだ事を、オウナに知らせていない。

(さて、どう言えばいいか……)

思考を巡らすファルガールの前に、オウナがオートミールの入った器を置く。そのまま彼女はその向かい、つまりオキナがいつも座っていた席に腰掛ける。

そしてオウナは一緒に持ってきたお茶をずるっと一口すすった。

「食べないのかい？」

「猫舌だからな、冷めるまで待たなきゃならねえ」

そう答えてファルガールは手元の湯気が立っているオートミールに目を落とす。

視線を下に向けたまま彼は言いくそくに切り出した。

「その、なんだ……オキナのことなんだが」

「死んだんだろ？」

先に言われてファルガールは意外そうに顔をあげる。

「知ってたのか？」

「いいや」と、オウナは首を振る。「ただ、今まで何も言わずにこんなに長く家を空ける事はなかったからね。それに周りからもいる睨まれてた人だから。ほら、不器用な上に頑固だったろ？ 何かと敵を作りやすい人だったんだよ」

そして手元のお茶をもう一口飲む。

その間にファルガールは何か掛ける言葉を探すが、なかなか見付からない。

目の前のオウナの表情は悲しむでもなく、怒るでもない。非常に穏やかなものだった。ただ、黙ってお茶をすすっている。

「……済まん」

「何が？」

「その……俺の都合にオキナを巻き込んで……俺が来なければオキナは死ななかったかもしれないねえ」

そう言って、ファルガールは神妙な面持ちで頭を下げた。

それを見たオウナはファルガールが頭を下げた事実には一時驚きの表情を見せたが、また穏やかな表情に戻って言った。

「いや、どの道あの人は近々おつ死んでたよ。来る日も来る日も研究研究、他の事には目もくれない。自分の健康も、危険も何も顧みなかった人だからね」

そんなオウナの前に一冊のノートが置かれた。

ファルガールはぱらぱらとページをめくり、目的のページを開くとその文章を指差しながらオウナの方に向けて差し出した。

「読んでみな。遺言になっちまったが、オキナの最後の言葉だ」

それはファトルエルの“ラスファクト”《グインニール》の在り処を記した後に書かれていた文章だった。

オウナは差し出されたノートを凝視し、数瞬迷った後に結局ノートを手にとり、ファルガールが指を差した文章に目を通す。

『私は君に全てを託したこの時点で全ての研究を打ち切りたいと思う。』

どうか止めないでくれ。私はもう疲れたのだよ。手がかりのあまりに少ないものを探して回るのは。

最後に私の無二の友である君に聞いて欲しい事がある。

私はこの入り口を見つげるために非常に多くのものを費やした。

もちろん金もだが、数える事の出来ないものは果てしなく大きい。いろいろな人の協力が私の研究の礎となったのだよ。

これから私はそうして出来た、限り無く大きな借りを返して回ろうと思う。研究一筋に生き、古い先短い私ではできる事は少ない。だがそれでもそれに全力を尽くすつもりだよ。

特にオウナには苦勞ばかりかけさせた。“ラスファクト”を探すと決めて、このファトルエルにやって来たが、厳しい環境に辛い思いをしたのだろうが、それでもいつも励まされるのはいつも私だった。

あまりに手がかりの少ない研究に私は何度となく挫折しかけた。しかしオウナの言葉を聞くと折れかけた心も強い芯を入れたように補強されたものだ。

昔からこれは変わらない。オウナの喝が必要だと感じたから私は彼女と結婚したのだ。

そんな彼女に私は何を返せばいいだろうか？

オウナは私に大きなものを与えてくれたが、私が与えられるものは少ない。

しかしできる事なら何でもやろう。

君と別れ、家に帰ったら先ず宿の掃除を手伝ってみようと思う。

しかし掃除なんてやった事がないから逆に足手纏いになって煙たがられるかも知れないな。

研究一筋だった私が急にそんな事を始めて彼女はどんな反応をするだろうか？ 少し楽しみだ。

君が無事“ラスファクト”を見付けて宿に帰って来たら、他に私がオウナに何が出来るか、何をすればいいか相談に乗ってくれないだろうか？

君ならば私よりは女性の扱いについて詳しいだろうからね。

君の帰りを、首を長くして待とう。

だから、必ず帰って来てくれ。

夢見る君の老いたる友・

オキナ「バトレアス」

ぱたっ、ぱたっ、と涙が紙を打つ音が誰もいない食堂に響く。
震える声でオウナは言った。

「全くだよ……。いきなり掃除なんてされたら逆に迷惑さ。馬鹿みたいになんか追っかけてりゃ良かったんだ」

いつも迫力のあるオウナを見ているだけに、涙を見せる彼女の姿はファルガールの胸にこたえるものがあった。
怒鳴られるのは平気だが、泣かれると弱い。

そして長年連れ添ったオキナとオウナの互いに想いあう気持ちの深さを思い知る。そして想い人を亡くす悲しさも。

自分も今回危ういところでマーシアを失いかけたが、もしあの時彼女が死んでしまっていたら自分はこんな風に泣いたのだろうか。

また、自分が死んだらマーシアはどうするだろう。
それを考えた時にファルガールは思った。

(先立つのは罪だぜ、オキナ)

リクが目覚めたのは夜だった。

砂漠の夜の冷え込みに身体を震わせ、ゆっくりと目蓋を持ち上げる。そして身体を起こした。

今自分が寝ている懐かしい似非ベッドを見ると、ここはどうやら自分の宿のようだ。

フィラレスに借りた“滅びの魔力”を操って《ゲインニール》にぶつけてからの記憶が全くない。おそらくファルガールが自分を運んで来てくれたのだろう。

(そうだ、ファルガール……！)

リクはすぐさま隣のベッドを見た。

しかしそこにファルガールの姿はない。

(オウナに聞けば分かるか……。そう言えばのど乾いたな)

長時間寝ていると腹が減るより先にのどが乾く。

リクは先ず喉を潤すための水を求めて階下の食堂に向かった。

食堂にはオウナがいた。火を灯していない暗い食堂の奥の一席で一冊のノートを黙って見つめている。今までとは全く違った意味で近付き難い雰囲気だ。

呆然とそれを見つめていると、オウナの方がリクに気付いた。

「ああ、起きたのかい？」

「あ、うん」と、答えたリクの声は乾きの為にかなりしゃがれていた。

それでオウナも気がついたのだろう。黙って立ち上がり、台所から水の入ったコップをもって来た。

リクはそれを手ぶりで感謝しつつ受け取ると、口に含み、下でか

き回して中を湿らせる。そして少しずつ飲み込み、喉とその奥の食道にも水を行き渡らせた。

そうして水をゆっくり味わうと空になったコップをオウナに返した。

「ありがとな」

「いや、いいさ。それより外にあんたのお客が来てるよ」

「客？」

誰だろうと訝いぶかりながら宿の外に出る。

しかし外に出ても彼の目に人の姿は入らない。その代わりに彼の視界を大きく遮るものがあつた。

砂色の甲殻。それは砂漠を渡る運搬サソリのものであると気付くのにさほど時間は要しなかつた。そしてリクの客になる可能性のある人物で運搬サソリに縁の深い人物は二人としない。

「コーダ？」

「兄さん、気が付いたんすね。今夜の内に起きなかつたらどうしようかと思いやしたよ」と、リクの呼び掛けに応えて、運搬サソリの御者席からコーダが顔を覗かせた。

そのコーダにリクは眉をしかめて尋ねた。

「俺が今夜中に起きなかつたら何でお前が困るんだ？」

「ま、いーからいーから乗りやんせ！」

そんなリクに対しコーダは悪戯っぽい含み笑いを見せて御者席から飛び下り、さっとリクの後ろに廻って彼を運搬サソリ《シツカーリド》の客席に乗せる。

為されるがままに客席に座らされたリクを置いてコーダは御者席に移った。そして短い掛け声と共に《シツカーリド》を発進させた。

南東区の迷路小路を抜け、南通りに出る。

大通りは松明が等間隔に灯されて明るく、賑やかだった。笑顔に溢れた人々がお祭り騒ぎをしている。そう、それは実際、祭だった。静まり返る普段の砂漠の夜とは全く違った光景をリクは目を丸くして眺めた。

そうしている内にコーダは《シツカーリド》を停止させた。

そこは始めフルガールとの待ち合わせに使い、二度目に来た時はマーシアと酒を飲んだあの酒場だった。

《シツカーリド》を停めたコーダは全くの異世界に来てしまっているかのように、目に映るもの全てを呆然と眺めているリクを半ば強引に客席から引きずり下ろした。

「ちよっ、ちよっ……コーダ!？」

異常に戸惑うリクだったが、コーダはそれでも「いーからいーから」と言っただけで何ら説明をしようとしなない。

そして最後の仕上げとばかりに彼はリクを思いきり突き飛ばした。

「うわっ!」

突き飛ばされた勢いでつんのめり、危ういところで転倒を免れながらリクは目の前の酒場の中に入った。

途端、彼を盛大な拍手が迎えた。

「いよっ！ ファトルエルの救世主っ！」

奥のカウンターに座っていたファルガールの掛け声を筆頭に、酒場にいる全員が歓声をあげる。

その酒場にいる人物たちは皆見知った者達ばかりだった。

ファルガールの両隣に座っているカルクとマーシア。向かって右手奥のテーブルに付いているのはカーエスとフィラレス、そしてクリン・クランにジェシカまでいる。

いや、もう一人、彼の後ろでニヤニヤと笑っているのはコーダだ。そのコーダにリクはぼそっと尋ねた。

「どうなってるんだ？ これ」

「ははは。お祝いツスよ。外のお祭りもそうツス。なんたって、大災厄からファトルエルを守り切ったんスからね」

そういつてコーダはリクを奥へ奥へと背中を押して行く。

そしてカルクに一席ずれてもらってファルガールの隣に座らせた。

「今日は兄さんが主役ツスよ。あの大災厄にトドメを刺したのは兄さんだし、何よりこれはファトルエルの大会の祝勝会も兼ねてるんスからね」

流石にみんな疲れ切っていたので一日休んで今夜の祝勝会となったのだが、リクがなかなか起きてこない為、リクが起きるのをコーダが待つて連れて来る手はずになっていたのだという。

事情を全部話してもらっても、リクはこの状況に追い付く事はなかった。まだ呆然と自分に向かってグラスを掲げるみんなを見回している。

ふと、カウンターに背を向け、入り口に向かって座っているリク

の正面からジェシカがゆつくりと歩いて来た。
さつきまでとは違い、ジェシカは笑顔ではなく非常に厳肅な雰囲気
でリクにゆつくりと歩み寄って来る。

「リク様、恐縮ですが、目を瞑^{つむ}って頭を下げてくださいか？」

「え？ ああ、ごうか？」

「ええ。そのまましばらく動かないで下さい」

リクは顔をしかめながらも言われた通りに目を瞑り、頭を下げた。
するとリクの首に何かペンダントのようなものが掛けられる。し
ばらく位置を調整しているのが、掛けられたペンダントが微妙に動
かされた。

「結構です。リク様、目を開けてみて下さい」

リクは頭を下げたまま目を開いた。

その視界には掛けられたペンダントが入っている。リクはそれを
ゆつくりと手にとった。

「ジェシカ、これ……」

「世界最強の証“シルオグスタ”です。

正式な決勝戦で勝ったわけではないので、本来渡すべきものでは
ないのですが、非公式ながらあなたは決勝の相手であるジルヴァル
ト＝ベルセイクに勝ち、しかもファトルエルを救い、その強さを十
分に証明しました。

そこで非公式にですが、今回このペンダントはあなたに贈呈する
事に決まったのです。そして国王陛下はあなたと個人的に関わりの
深い私が、あなたにそのペンダントを渡すように託されました」

それは確かに十年前にファルガールの胸元に一度、そして大会前

日式典に一度見たペンダントだ。このペンダントはファルガールやシノンなど尊敬すべき人々の手に渡って今、リクの胸元にある。

ジツと見つめ、見た目より重いペンダントを手でもてあそんでいる内にリクの脳裏にここ三日間の闘いの記憶が蘇っては消えて行く。元々これを手に入れる為の闘いだったのだ。

それを思い出すと、リクの顔はさつきから変わらない驚きと戸惑いの表情から、喜びの表情へと変化して行く。

「ありがとな、ジェシカ」

「よくお似合いですよ」

リクのお礼に対してジェシカが笑みを返す。

そしてどうやら幹事役らしいコーダがリクに飲み物を渡して店の真ん中に立った。

「さあ、主役が参加したところで、もういっぺん乾杯いきやすよお！ 皆さんグラスを手にとってえ……！」

コーダの司会に従って全員がグラスを持ち上げコーダに注目する。

「兄さんの大会の優勝と、そして大災厄を無事撃退した事を祝つてえ……カンパライ！」

「カンパライっ！」

ここから主役を交えた本格的な宴が開始された。

ほとんどが大会に参加していたので共通の話題には事欠かない。

リクの武勇伝を始め、リクとカーエスのフィラレス救出劇、ファルガールの“ラスファクト”探し、大災厄の時のそれぞれの働き。

「コーダが召喚魔法!？」

皆の報告の中で一番リクが驚きを見せたのはファトルエル北門におけるコーダの活躍の話であった。

それを語っていたのは先ほどフィラレスの救出劇でも熱弁を振るっていたカーエスである。と言ってもほとんどの話題でカーエスはその喋りっぷりを見せている。

「せやでえ。こう、『おいで、《シツカード》』とかゆーたら、空からでっかいサソリが降ってくるやる？ それにこいつが乗った思ったら、サソリがピカツと光って全身凶器になって大暴れや。

それ見とったカンファータ兵がやな、そのヤリ女に“マスター・スコーピオン”やゆーて大騒ぎ！

それで俺が何で今までそれやらんかったんや、て聞いたら、こいつなんて答えたと思う？ 『もしそうしたら、あんたらの仕事が無くなるでしょう？』やて！」

身ぶり、手ぶり、口真似。

あらゆる口述的技術を駆使用するカーエスの話は臨場感たっぷりだ。

「ただモンじゃねーと思ってたら、とんだおとぼけ野郎だな、コーダ。ファトルエルの大会に出れば、いいとこいってたんじゃねーのか？」

話を聞いて驚嘆の目を向けられたコーダは苦笑して答えた。

「いやいや、俺あんまし闘うの好きじゃないんす」

「どーだか」

大会の参加者全員に疑惑の目を向けられ、コーダは早急に話を変える必要を感じた。

が、話題を変えたのはコーダではなかった。

「せやつ！ 召喚ゆーたらあの白い鳥なんやねん！？ 喋るし、白
いし、でつかいし！ そもそも現実にいる動物ちゃうやん！」
「なんやねんとか言われてもな。俺もあんましく知らねーんだよ
な」

困った顔でそう応じると、カーエスは両手でリクの両頬を掴み、
引っ張った。

「よく知らんで済むかい！ なら何で召喚できたんや！？」
「ほんはほひはへへも、ほんほひはへーんはほ！（訳注・そん
な事言われてもホントに知らねーんだよ！）」

次の瞬間、カーエスは青ざめた顔をしてリクの両頬を掴んでいた
両手を放して上に挙げた。その後ろではジェシカがカーエスの背中
に槍を突き付けている。

「いかに無礼講とはいえ、あまりにも狼藉が過ぎるのではないか？」
「ふ、服っ！ 服突き抜けとる！ せっ背中に刃が当たっとうっ
！」
「刺さないだけマシだ」

泣きそうな顔で叫ぶカーエスにジェシカはしれつと応じる。
「刺しちやえ刺しちやえ。後で魔法で治してやる」と、リクもジェ
シカを焚き付ける。

「リク様の命とあらば」

それを本気で取ったジェシカは槍を握る力を強める。
カーエスは大急ぎでその場から飛び退いた。

「従うなあつ！ そんな理不尽な命令！」

「逃げるな。刺せないだろうが」

「だから刺すなアツ！ んな槍振り回されたら誰かて逃げるわい！」

机の上、椅子の上、あらゆる場所を逃げ回るカーエス。それを槍を揺り回して追い掛けるジエシカ。それを余興として楽しむ周りの者。

当然無数の皿、グラスは割れ、テーブル、椅子は壊れたが、決闘の巻き添えになれている店の主人は止めるどころか声援を送っている。

この宴は史上稀に見るバカ騒ぎとなった。

時間は瞬く間に過ぎていった。騒がしかった大通りの祭りも既に終わり、いつもの静けさを取り戻している。

大通りの店の中でたった一つだけまだ閉店していない店があった。リク達の宴の催されている酒屋である。

宴の熱は冷めて来ており、大半が寝てしまつか、黙って酒を飲むだけになっている。

リクもその一人だったが、グラスをカウンターに置くと、ゆっくりと立ち上がって表に出た。

身を凍えさせる砂漠の夜気も酒に火照った身体には気持ちいい。リクは店入り口の段差に腰を下ろした。

空を見上げてみると、満天の星空が夜の闇に身を置くリクの顔を照らし出す。

前に見上げた空は大災厄の暗雲に覆われた空だった。何もかも上手くいってなければリクはこの星空を眺める事もなかった。そう考えるとこの星空が一層感慨深いものに見える。

そのリクは先ほどジェシカから受け取った“シルオグスタ”をその星空に掲げて見上げる。

「やれやれ、その世界最強のペンダントがそんなに嬉しいのか？」

突然背後から話し掛けられたかと思うと、リクの隣にファルガーが腰掛けて来る。

リクは数瞬言葉に迷うと、ちよつと照れた感じに答えた。

「世界最強が嬉しいんじゃないよ。ただ、やっと十年前のファルに追い付いたんだって思うとさ」

ファルガーに弟子入りしてから数十年。その間、リクの父親であり、兄であり、師であったファルガーは彼の憧れであり、届き難い目標だった。

出会った時に見せられたペンダント。あの頃のリクにはそれが憧れのファルガーの強さの証なのだと思っていた。

そしてカルクに話を聞いた時に、ふと思いつき、大会前日式典でカンファータ王の手の中にあるそれを見て確信した時、リクは思った。

届き難い目標に手を伸ばす機会だと。

リクにとって、“シルオグスタ”は世界最強の証ではなく、憧れに一步近付いた証なのだ。

一方、ファルガーにはリクがそんな風に考えているのが意外だ

った。

彼からしてみれば、リクはもう既に自分と同等かあるいはそれ以上の力量を持つてしていると疑っていなかった。

リクがそこまで自分の力に謙虚になつていてとは思わなかったのだ、ファルガールには既により意味があるとは思つていない世界最強の証をどうして欲しがるのがよく分からなかったのだ。

「……で、お前はどうする気なんだ？」

かなりの間の沈黙の後、ファルガールがリクに尋ねた。

「俺は魔導研究所に行つてみたいと思う」

「教師にでもなりたいのか？」

そう言ったファルガールの口元には皮肉な笑みが浮かべられている。

538

「まさか。まだ修行が足りないのに人に教えるなんて出来ねーよ」

「そりゃ大会に優勝してすぐ教師になつた俺への当て付けか？」

ファルガールに突っ込まれてリクはうっと詰まる。

「……そうなるなあ」

「認めるのかよ」

「ま、教師になれるにしてもだ。俺には他に夢がある。大災厄をこの世から無くすつて途方も無いヤツがさ。《アトラ》に力をもらった事もあるし、捨てるわけには行かねーよ。

その為にはもっといろんな事を知らなくちゃだめだと思つたんだ。魔導研究所ならそういう資料も豊富だろうし、大災厄について研究してる人もいるかも知れねえ」

「本音か？ それ」

そのファルガールの問いにリクはぼりぼりと頬を掻いた。
そしてちよつと恥ずかしそうにぼそつと答えた。

「ホントは魔導文明の最先端つてのが見てみてーだけなんだ。それにカーエスとかクリンクランとか、今回魔導研究所勢の強さが凄かったからな。あいつらが育った環境つてどんなものか興味がある」
「それでいい。無理に意識して夢に向かつていなくていいんだ。やりたい事をやつてりゃそのうち夢に行き着くもんだぜ」

リクの本音にファルガールはからからと笑つてみせる。
その後しばらく二人の間に沈黙が訪れた。
それを破つたのはリクの方だった。

「やっぱりこれからは別れるのか？」

リクの問いにファルガールは一瞬躊躇した後には答えた。

「……そうだな。教える事は全部教えたし。“大いなる魔法”の事についても、手分けするほうがいい。それに俺はちよつと気になる事が出来たしな」

「気になる事？」

「グランベルクとジャガントラの事だ」

「ああ、あの刺青ジジイの仲間の……」

ファルガールがリクと離れている間に何をやってたのかについては宴の時に大体の事を聞いていた。

「“ソーマ”といい、“烙印魔法”といい、奴らは魔導士の掟を無

視してやがる。掟を無視した魔導士ほど怖えもんはねえんだ。放つておいたら、その内大災厄より恐ろしい事になるかもしれない」
「ラスファクト」とかファイリーの“滅びの魔力”とかを狙ったところを見るとそうとうヤバいことだろうな」
「オキナの仇のこともある。この黒幕にビシツとお灸を据えてやるぜ」

ファルガールは右拳を左の掌に打ち込み、気合いを入れた。
その横でリクがすくと立ち上がり、数歩足を進めると、ファルガールに背中を向けたまま言った。

「十年か……長いようで短かったな」

「ん？」

「俺さ、十年前のあの災厄をそれほど辛いと思ったことねーんだ。信じらんねーだろ？ 親、目の前で失ってるのにな。なんでだと思っ？」

それは今までの十年間があったからなんだぜ。ファルと出会って、魔法を教えてもらってどんどん強くなつてさ。いつも『有り難き苦難だろ？』とか言つて、いろいろムカつく事もしてくれただけど、この十年間、俺は楽しかったよ」

「リク……」

そしてリクはくるりとファルガールのほうを向いて続けた。

「この十年、俺の師匠でいてくれてありがとな。俺、すげー感謝してるよ。ファルがいなかったら俺はきつとこの場には立てなかったし、この世にもいなかったかもしれない。いても今の俺じゃいられなかった」

そうして丁寧に頭を下げるリクの顔は照れも混じった柔らかい表

情で、言葉が嘘偽りない彼の気持ちそのものである事を表している。
ファルガールも微笑み、頭を下げたリクの頭を撫でた。

「礼を言うのは俺の方だ。十年間、よく頑張ったな」

翌朝、リクは宿の似非ベッドで目を覚ました。

上半身を起こし、堅いベッドで凝り固まった身体をバキバキ鳴らしてほぐすと隣のベッドを見た。

そのベッドは空だった。荷物も半分減っている。

それは分かっていた事だった。ファルガールは昨夜の内に、今朝早くに出発する旨をリクに伝えていた。

だがこうして見ると、この十年間一緒にいたファルガールが本当に離れてしまったことに実感が湧き、胸が締め付けられるような気持ちになる。

「……俺も荷物をまとめなきゃな」

荷物をまとめて階下に降りると、そこにはオウナがいつものように宿の掃除をしており、リクに気がつく朝食用意してくれた。

昨日はまだオキナが死んだことを知らなかったので普通に接することが出来たが、昨夜の宴で、そのこともファルガールから聞いていたので今朝は態度に迷った。

対するオウナは全く普段と変わらず、ぼけっと自分を見ているリクに「なんだい人の顔をじろじろ見て。あたしに惚れでもしたのか

い？」と、思わず顔をしかめてしまうような冗談を言ったりもした。朝食を食べ終わり、チエックアウトをして宿代を払おうとするとオウナはそれを辞退した。

昨日ペンダントと一緒に優勝賞金もたんまりともらっていたので払えない心配はないのだが、それでもオウナは代金を受け取るうとしなかった。

「あんたの大会優勝記念さ。これからも頑張りな」
「ああ、ありがとな」

その後、リクは曲がりくねった道を四苦八苦してどうにか大通りまで出た。向かうは四本の大通りが交差し、大決闘場のある広場である。

そこにはこう書かれた看板が立っていた。

『コーダのサソリ便乗り場』

その傍には立派な砂色の運搬サソリが停泊しており、そのサソリの甲殻を白髪に褐色の肌をもった青年が丁寧に磨いている。

その青年はリクに気がつくくと嬉しそうな顔をして駆け寄って来た。

「兄さん！」

「よ、コーダ。レンスまで乗せてくれるか？」

「勿論ス。あと二人予約入ってるんで、もう少し待ってくれやすか？」

「二人？」

聞き返す二人の後ろで、ざざつと足音が止まった。

振り返るとそこにはまっすぐに伸びた黒髪と白い肌をもつ可憐な

少女と、同じく黒髪の眼鏡をかけた少年が立っていた。

「カーエスに……ファイリー？」

「なんやリクも師匠に見捨てられたんか」

「見捨てられた？」

カーエスはちょっとぶすつとした表情でリクに封のきられた封筒を投げて寄越した。

それはカルクからカーエスに宛てたものだ。

「読んでいいのか？」

カーエスがこくりと頷く。

それを確認してからリクは封筒から便せんを抜き出し、畳んだ状態にあるそれをぱらりと開いた。

『いきなりで済まないが、私とマーシア、クリン・クランはファルガールについて行く事にした。

自分でも無責任な行動だと思うが、お前の場合はファトルエルの決闘大会に出場を決めた時点で教えることは全てなくなり、修行は終わった。後は実戦の経験を積んで行くだけだ。

今回の大会では惜しくも負けたが、お前の“魔導眼”があれば経験次第で幾らでも強くなれる。

もちろん何を経験するかはお前が自分で決めるんだ。

お前の望むままにするといい。

お前の夢が叶うことを祈っている』

「起きた時にはベッドの上にその置き手紙を残していなくなっとな」

「ふーん」

「ふーん？ なんやその反応は！」

リクの相槌にカーエスがなぜか突っかかって来たのでリクはちょっと戸惑った様子を見せた。

「いや、何やって言われてもなあ……」

「何のんびりしたこと言うてんねん！ ええか、カルク先生はファルガール、つまりおんどれの師匠についてったんや！ だから、先生が俺を見捨てたんは弟子のおんどれの責任でもあるんやで！？ 俺のカルク先生を返しくされ！」

「んなメチャクチャな……」

思わず身を引くリクだが、カーエスはまだまだ迫ってくる。

いい加減倒れそうになつたところで状況の変化は起こつた。

後ろからリクの肩ごしに何か棒のようなものがカーエスの喉元に向かつて伸びたのだ。瞬間、カーエスは硬直し、どっと脂汗を流しながらリクから飛び退いた。

そしてカーエスは恐ろしげな顔でリクの背後を指差す。

「や、や……」

「ヤリ女とでも言いたいのか？ この腐れメガネ男。少し目を放すとすぐにリク様に無礼をはたらく」

リクが振り返つたところで槍を突き出していたのは少し巻き毛気味の長い髪を持つ軽甲冑姿の美女である。

「ジエシカ！？」

ジエシカはリクに名を呼ばれるとさつと膝をついて恭しく礼をした。

「リク様。私カンフアータ王家には暇を頂いて参りました。どうか私もリク様のお供にお連れ下さい」

「っ、ついて来るのは一向に構わねーんだけど、お供にっつてのはちよつとなあ……」

このジェシカにもちよつと引きながらリクは答えた。

その答えにジェシカは更に顔を挙げて言った。

「ならば護衛でも家臣でも奴隷でも構いません」

「ちよつと待ていっ！ 今一個変なモンが入つとつたぞ！」

「じゃ、友達と旅仲間って事で」

途中ジェシカの背後からカーエスの突っ込みが入ったが、それは簡単に流された。

それは槍を突き付けられるより辛いことなのか、カーエスは両手をついてがっくりしている。

「しかし私などがリク様と対等の関係など……」

「対等でいーんだよ。人の上に立つ柄じゃない。それとも俺なんかと対等じゃ嫌か？」

「……いえ、身にあまる光栄です」

そしてリクは今までフィラレス達の荷物を上げていたコーダに荷物を渡しながらかもう一人客が増えた旨を伝え、コーダはそれを喜んで承諾した。

「いいっすよ。ジェシカさんなら歓迎っす。さあ、皆さん乗って下さいね、もうすぐ『コーダのサソリ最終便・魔導研究所行き』出発しやすよー！」

「最終便？ 魔導研究所行き？ レンスまでじゃないのか？」

客席に乗り込みながらリクが眉をしかめていると、コーダは『コーダのサソリ便』と書かれた看板を引き抜き、リク達の荷物と一緒に荷台に放り込んだ。

そして御者席に座り、後ろにいるリクにニカツと笑いかけた。

「つれないツスね、兄さん、ジエシカさんなら連れていけて、俺は連れていけないって言うんすか？ 俺の場合は連れて行かないって言っても無理矢理ついて行きやすよ〜！」

「いいや、大歓迎だよ。コーダがいると足に困らねーし」

「嬉しいことを言ってくれやすね。よし！ 今日出血大サーピス！ 《シツカーリド》 “運搬モード” の速さの限界に挑んじゃいやしよう！」

「「「ちよ、ちよつと待てえええ！」」」

以前地獄を体験したリクとカーエスから抗議が上がるが、上機嫌のコーダには、もはや何も聞こえない。

どこに繋がっているのか分からない手綱を一打ちすると、『シツカーリド』は一気に加速し、三人分の悲鳴を残して去って行く。

途中、ファトルエル西門で門番をしているカンファータのファトルエル常駐兵達をはねとばしそうになったが、彼らは身じろぎもせず元気良く声を張り上げた。

「「ファトルエルへまたのお越しを！」」

これは余談なのだが、リクがフィラレスの魔力を借りて放った《無限の波動》は砂漠の砂を抉り、北に向かって真直ぐ大きな溝を作

った。

そしていつしか、その溝の端に当たるところから水が湧くようになり、その溝は砂漠を突っ切る巨大な運河となった。

その運河は砂漠に潤いを与え、不毛の地に森を育んだ。

そしてこの時から三百年後ファトルエル以北に巨大な森が出現する。

誰ともなしにこの森は『リクエールの森』と呼ばれるようになり、この森の誕生にまつわる伝説としてファトルエルの決闘大会に出場していた一人の青年魔導士と大災厄と呼ばれる巨大な蛇の怪物との闘いが語られるようになったという。

魔法使い達の夢 第一部 ーファトルエ

ルの決闘大会 ー 完

48 『その森に語られた伝説』 (後書き)

これで第一部は終了です。長らくのご愛読ありがとうございました！
来週は……どうしようかな。第二部に行く前にあとがきか何か挟む
かもしれません。

01 『フォートアリントンにて』

状態は留まらない。

常にゆらゆらと揺れ動き、ふとした拍子に劇的に変わる。

そして新たな状態が始まる。

果実はいつまでも枝に付いていない。

刻一刻と熟れていき、いつしか腐り、風が吹けば地に落ちる。

そして種子から新たな樹が生まれる。

物語はずっとは続かない。

聞く者達の気持ちを連れて展開し、何かを変えていつかは終わる。

そしてまた新たな物語が紡がれる。

「ふう……」と、ハルイラ「カンファータ十八世は執務に臨むに当たって、張り詰めていた緊張を緩め、大きく息をついた。

今となつては見るのも嫌な書類が山と積まれた執務机に背を向け、背後にあった窓から空を仰ぐ。

(ファトルエルの大会からもう一週間か……)

そんな事を考えながらしばらくぼうつとしていると、執務室のドアがノックされた。

ハルイラはくりりと向きを変え、執務機の正面にあるドアに注目する。

少し間を置き、「失礼します、陛下」と、声を掛けながら入ってきたのはカンファータ宰相・バスタ「カノールだ。

見た目の歳はハルイラと同じくらいだが、がっしりとした体躯の国王に比べて遥かに小柄、痩せぎすで年寄りくさいとも言える落ちついた雰囲気を持っている。

緑色の髪を持っているが、眼の色は眼が細すぎて確認出来ない。その上にある白い眉毛が特徴的である。

「今回の大会に関する書類には目を通されましたか？」

そう尋ねるバスタにハルイラは苦い顔をして頷いた。

「ああ、もう一週間は書類を見ずとも執務を怠けているとは感じないであろうな」

このところハルイラは、ファトルエルの決闘大会の巻き添えで壊れた建物等の修復などに忙殺されていた。

これはいつもの事であったので大会前からある程度覚悟していたのだが、今回は更に大災厄による被害もあつたので仕事が前回の三倍に増えた。

ある者達の活躍により、通常なら壊滅的な打撃を与える大災厄を寸前で退けられたものの、やはり被害は少なくなかった。

クリーチャーの大軍によって、砂を固めただけの粗末なレンガで出来た通常家屋はかなりの戸数が倒壊させられていたのである。

救援物資を送るうにも、ファトルエルは砂漠の真ん中という厄介な場所にあるのでいろいろ面倒な手続きをしなくてはならなかったのだ。

「それでも幸運に感謝していただかなくては。もしまともに大災厄がファトルエルにぶつかったならば、もっと書類は増えていたでしょうし、もとより書類に目を通す事さえも出来なかったかもしれません」

「うむ……そうだな」

ハルイラもバスタもファトルエルの決闘大会の主催者として、あのファトルエルにいた当事者だった。

だからもし大災厄が退けられなければ命を失っていたかも知れないのだ。

そんな被害を生み出す大災厄の襲来で死者ゼロという数字はまさに奇跡と幸運の産物と言っても過言ではない。

「御安心下さい、陛下。明日は完全な休養日、そして明後日も書類に用はありません」

「それはありがたいことだ」

ハルイラには月に一回、何の執務もない完全休養日が設けられている。それは宰相であるバスタが大切な国王陛下を過労で壊さないようにと制定したものだ。

しかし、国王という本来寝ている暇すら見付け難い立場の中、そうやって一ヶ月に一日でも休養日がとれるのは、バスタが巧みにハルイラの予定を組んでいるからである。

そんなバスタにハルイラは心の内で深く感謝し、バスタあつての自分であると、程よく謙虚な気持ちにもなれている。

「そこまで喜ばれますと、私としてはいささか言いにくくなりますな」と、バスタは国王の表情を伺いながら言った。

その様子を見てハルイラは喜びに弛んだ表情を少し引き攣らせる。

「……構わん、言うがよい」

「明後日の執務には確かに書類は関係しませんが、フォートアリントンにて一年に一度の三大国による定例国際会議がございます」

その答えを聞いてハルイラは引き攣らせていた顔を更に引き攣らせた。

そして仕事が終わった時にしたものより遥かに深いため息をついた。

「今年もあの女達に会わなければならないのか……」

「御同情申し上げます、陛下」

淡々と言ったバスタをハルイラはじろりと睨んだ。

「そなた、心の内で密かに楽しんでおるのではあるまいな？」

「可能性は否定しません」

バスタはしれつと答えた。

魔法が力を大きく支配するこの世界は三つの大きな国によってその領土が分けられている。

北を十二時とした時計で言うと、十時から二時までを支配するのは“孤高なる国”と呼ばれる『ウォンリルグ』。

二時から六時までを支配するのは“平安なる国”と呼ばれる『カインファータ』。

そして残る六時から十時までを領土としているのは“高潔なる国”と呼ばれる『エンペルリス』だ。

その外側や内側にいくつか小さな国は点在しているが、この三国に比べると力も領土も小さく、どの国も三大国の内、どれかの属国

として存在している事実は否めない。

そして時計の針の軸にあたる三国を分ける境界線、もとい境界点である『フォートアリントン』。この都市だけは例外的にどの国家にも属していないので“自由都市”と呼ばれている。

三国の間では平等な関係を保つ為に、国間のやり取りで一方の国を訪問したり、招いたりする事は禁止されている。

お互いその中間点に位置するフォートアリントンまで出向くのが慣例となっているのである。

フォートアリントンは正三角形をした街で、その周りを高い壁に囲まれている。

その三角形の頂点にあたる場所は、それぞれ三大国に繋がる大きな門で、それぞれ『ウォンリルグ大門』『カンファータ大門』『エンペルリース大門』と呼ばれ、関所の役割も果たしているのだ。

そしてその中心にある逆三角形をした大きな建物が『フォートアリントン国際会議所』である。国を跨がる様々な問題の解決において必ず用いられる場だ。

かの有名な“全世界による魔法についての使用制限条約”が締結されたのもここである。

ここでは常時、各国から派遣された人間達が国間のトラブルの対処に走り回り、摩擦が少なくなるよう、よりよい国際法案を日夜生み出し続けている。

内部の真ん中には三大国による国際会議専用の会議室が設けられ、三角形の各辺の真ん中には三大国のそれぞれの首都に繋がる移動用魔法陣がある。

そして今、カンファータの王都『フリーバル』に繋がる魔法陣が

輝き、カンファータ国王ハルイラ「カンファータ十八世以下四名が到着した。

供としてついてきたのは宰相・バスタ「カノール、外交大臣・バシル「クラシー、そして今回のファトルエルの決闘大会で死亡してしまったシノン「タークスの後継者として魔導騎士団長に就任したクルラス「シリーフの三名だ。

三大国による国際会議専用の会議室には一国につき四名分の席が設けられており、そこに座る四名が国の代表としてみなされる。

「フォートアリントンへようこそ、カンファータ王国代表の皆様」

一行が到着する前から魔法陣の前に立っていた白い制服の男がそう言っただけで頭を下げた。

そしてゆっくりと頭を上げて続ける。

「エンペルリース代表の皆様が既に会議室でお待ちですので、このまま会議室へと御案内させていただきます」

案内と言っただけで先頭に立って歩くだけで、就任したばかりでここに来るのは初めてであるクルラスを除いた三名はここから会議室までどう行けばいいのかは知っていた。

魔法陣のある部屋から建物の中心部に向かって伸びる廊下を真直ぐに行けばいいので初めてでも話に聞いていれば迷う心配はいらない。

建物の内部はすっきりとした白地の壁に整えられており、埃だらけのファトルエルとは違って清楚な雰囲気になっている。

しかし、扉一枚ぐぐった会議室の中は透き通るような青を基調とした装飾で、四階建てのこの建物を貫く吹き抜けになっており、その天井の高さには何度来ても圧倒される。

大聖堂を彷彿とさせる設計は、ここで行われる会議には厳粛な気持ちをもって臨んで欲しいという気持ちが込められているのだ。

建物と同じ正三角形をした会議室にはやはり三角形をした会議机が配置されておりその頭上にはフワフワとこの星の模型が地転をしながら浮いている。

三角形の会議机の一边に四席ずつ置かれていた。

そして左手の辺の方を見ると既に座って待っている人達がいた。

先程まで一緒にいた案内係の男が言っていたエンペルリース代表の一行だろう。“高潔なる国”と呼ばれるだけあって、エンペルリースの一行は皆揃って高貴な雰囲気をつた人間達だ。

中でも目立つのは大きな衣服に身を包み、さらに悪趣味にならない程度に宝石をちりばめられている年輩の女性だろうか、上品且つ不適な微笑みを口元に浮かべながら、会議室に入って来るカンファーター一行を眺めている。

エンペルファーターの一行とはまるで面識のないクルラスでもその女性がエンペルリースの皇帝・フェルヴァーナエンペルリース三十一世であることはすぐに分かった。

「丁度正午ね。遅れるのは三流のする事、早すぎるのは二流……一流ともなれば常に時間とともに姿を表す。……貴方は一流よ、カンファーター国王陛下」

「いやいや、エンペルリース皇帝陛下。貴女がたには恐れ入るよ。私がどれだけ早くこようとしても貴女がたより早くこの会議室に入った事がない」

苦笑をしながらそう答えてハルイラは椅子に着いた。

その隣にバスタが座り、続いて残りの二人が座る。

「先日かの有名なファトルエルの決闘大会が行われたと聞いたわ。

如何だったかしら？」

「……まあ、盛況だった」

「大災厄に襲われて盛況だった、なんて控えめな表現をなさるのね」

もともと引き攣り気味だったハルイラの表情がさらに堅くなる。

その周りの人間もこのやり取りに苦笑していた。

エンペルリースの女帝の丁寧でいて、からかうような言動はあまりにも有名である。彼女を相手にしてまともに渡り合える人間はハルイラの知る限りたった二人しかない。

そこに、一人の若い男が入ってきた。元々長身のハルイラよりさらに高い長身で会議室と同じ青い外套を纏い、整った顔立ちの口元には柔らかな笑みを浮かべ、見るからに友好的な雰囲気を纏った男だ。

“自由都市”フォートアリンTONの市長・ルナイト＝シエンクランドだ。三大国による国際会議が開かれる際は彼が会議の司会進行を務める。

市長というあまり冴えない役職名はあるが、ことフォートアリンTONという地域の中に限ってはハルイラ達三大国の主達と対等以上の権限を持っている。

「皆さんこんにちは。遠いところをわざわざ出向いて下さって有り難うございます」

「どうせ、移動用魔法陣を使って一瞬で着けるのだから、そんな丁寧にお礼を言わなくてもよろしくてよ、ルナイトさん」

「それでも皆さんが貴重な時間を割いて下さっているわけですから」

そう言って、ルナイトはフェルヴァーナに微笑みかけた。その微笑みに彼女はそれ以上言葉を重ねなかった。

彼女の言葉で終わらない会話は珍しい。

ハルイラが知っているエンペルリースの女帝に適う人物の一人はこのルナイトなのだ。

「そう言えばウォンリルグ代表はまだ到着されていないのか？」

「ええ、今移動用魔法陣を使ってあちらの方に迎えをやらせているのですが……」

そう答えながらルナイトが会議室の扉をちらりと見遣る。

その視線に答えるように、扉が勢い良く開かれ、白い制服の職員が血相を変えて駆け込んできた。

「ウォンリルグ代表は到着しましたか？」

「いや、ウォンリルグに繋がる魔法陣から迎えに行こうとしたんですけど、その……行けなくて……」

「もう少し落ち着いて説明していただけると非常にありがたいわね」

職員のアマリの慌てぶりを見て、フェルヴァーナが呆れたようにため息をつく。

「つまり、魔法陣が使えなかったと？」

ルナイトの問いにその職員は言葉を忘れてしまったかのようにコクコクと頷いた。すると彼は今までの柔和な笑顔を引っ込めて真剣な表情で俯いた。

それも当然の話だった。

各国とこのフォートアリントンを繋ぐ魔法陣が使えなくなる可能性は主に二つ、魔法陣の封印が破壊である。

封印、破壊をする魔法陣はフォートアリントン側かウォンリルグ側、どちらか一つでいい。

こちらから魔法陣に何かをすることはないので、あちら側から魔法陣を封印するか破壊するかしたことになる。

その行為は三大国による定例国際会議の参加拒否の意思表示となり、ひいては三大国の関係を決定付けている“三大国協商”からの脱退を意味している。

それは、ここ百年間続いてきた世界秩序の崩壊に繋がるのだ。

「折角来ていただいた皆さんには申し訳ないのですが予定していた会議は中止にしましょう。直ちにこちらからウォンリルグに使者を送り、どういつつもりなのかを尋ねます。

事情を説明した上でもう一度皆さんを招集し、この問題に着いての対策会議を開きたいと思います。単なる事故かもしれませんがからね。いや、そうであって欲しいものです」

ルナイトの言葉に全員が静かに席を立てて会議室を去っていく。それぞれの表情は事の重大さを十分に理解し、沈痛なものとなっていた。

会議室を出てフリーバルへ繋がる魔法陣に向かうハルイラをフェルヴァーナが呼び止めた。

「今回の事だけれど、貴方ならどうお考えになる？」

「希望は常に小さなものだ。十中八九事故ではない。貴女といい、マータ・ツアルアリータの考えといい、全く私は驚かされるばかりだ。母上も私を女に生んで下さればよかったのに」と、ハルイラは苛立ちを含んだ口調で答えた。

ここ百年来、国の主には女性が就くという伝統がある。

かつて男の王ばかりだった世界には血なまぐさい戦が絶えなかった。

百年前に集結し、今の秩序を作った大戦後、三大国を筆頭に女性

を国の主に就かせる国が増加して行き、今ではほとんど常識と化している。

ハルイラの場合、先代カンファータ女王の子供はたまたま彼以外に生まれなかったため、彼しか国王のなり手がいなかったのだ。

「まあ、乱暴な発言なこと。そう思うなら引退して娘さんにもお継がせになればいいでしょうに。……たしかお持ちでしたよね、娘さん。それとも、そうしたくても出来ない事情でもお持ちなのかしら？」

「うっ……」

フェルヴァーナの発言にハルイラは何故か顔を歪めた。

その反応を見て彼女はにやっと笑う。事情が分かっているという話を向けてきたのだ。

はつきりいって夕チが悪い。

「なににせよ、いつウォンリルグが攻めてくるか分からない現状……魔導研究所の軍事部門に通達を出して新しい魔導兵器の開発を急がせた方がよろしいのかもしれないわね」

「確かに。あまり気は進まないがね」

「ではわたくしの方から通達は出させてもらいましょう」

それが本当の用件だったのか、ハルイラと向かい合って話していたフェルヴァーナがすっと離れた。

背を向けかける彼女にハルイラが声を掛ける。

「済まないな」

「いえいえその代わり、追加する研究予算の方はそちらにお任せして構いませんわね」

「ぐっ……」と、ハルイラはまた言葉をなくし、顔を引き攣らせた。

ルナイトはひとり会議室に残っていた。

真剣な表情で会議室の上で回る星の模型を眺めている。

「ここ百年停滞していた歴史が再び動き出す……か。魔導文明も既に最盛期はとうに過ぎた。……戦いは避けられても今までの状態にはもう戻れまい。世界よ、お前はこれからどう姿を変える……？」

01 『フォートアリントンにて』 (後書き)

2011年9月にアルファポリスで行われる『第4回ファンタジー小説大賞』にあわせ、本日から9月末にかけて第2部完結まで毎日連載します。(一日一話掲載では間に合わないので、一日二回更新することもあります)

コソクなポイント稼ぎとなりますが、応援よろしくお願いいたします。

02 『魔導列車とサソリ便』

学習して現在に知識を得て、研究して過去に事実を知り、開発して未来に利器を創る。

文明はそうして拓かれる。

三大国の境界点にある都市としてフォートアリントンはいまにも有名だが、同じように国と国との間にある街は存在する。そしてフォートアリントンと並んで有名なのが“世界の最先端”と称される『エンペルファータ』である。

その名が表す通り、エンペルリスとカンファータの国境線上にある街なのだが、この街の名を不動のものにしているのが、ありとあらゆる分野の技術開発と研究が日夜行われている魔導文明の先頭を行く『魔導研究所』の存在だ。

カンファータとエンペルリスの国中からスカウト、もしくは最高難度といわれる試験に合格して集まってきた最上級の人材がこの魔導研究所内で働いている。

開発部としては、軍事用の魔導兵器を開発する『軍事部門』、より豊かに暮らす為の『農林水産部門』、より便利に暮らす為の『文化生活部門』その他、様々な部門に別れ、その中でも作るものによって何チームにも別れて魔導機械の開発を行っている。

その他にも森羅万象を理解せんとする研究部があり、ここに世界の英知が集まっていると言っても決して過言ではない。

ただ世界と言っても三大国全体ではなく、カンファータとエンペルリースからだけでウォンリルグからの人材はいない。

魔導研究所設立の発案当時は三大国合同でフォートアリントンに建設する計画だったのだが、三大国による国際会議にこの議題が上がる、ウォンリルグが本国から人材と技術が流出するのを嫌って、この計画から降りてしまった。

そこで、カンファータとエンペルリースの間だけで話が進み、両国の国境上に新しい街を作って魔導研究所が設立された。以来飛躍的にカンファータとエンペルリースの魔導文明はここ数十年、日進月歩の勢いで進歩を続けている。

ウォンリルグは独自に研究・開発活動を行っているらしいが、どの程度進歩しているのかは誰も知らない。しかし、二国の力を結集しているエンペルファータの魔導研究所の方がウォンリルグより進んでいるというのが一般論だ。

実は三大国と言っても友好的とはつきりと言える関係にあるのはカンファータとエンペルリースだけで、残るウォンリルグとは両国ともほとんど交流のない、喧嘩をしない約束をしただけの、ほとんどアカの他人と代わらない関係だ。

カンファータとエンペルリースは困った時は援助を要請したり、相手が困った場合は助けてあげたりする関係だが、ウォンリルグは助けることも助けを求めることもしない。

それが、ウォンリルグが“孤高なる国”と呼ばれる所以だ。

「……なるほど、さすが育ったところだけあって詳しいモンだな」と、感心した様子でその青年・リク＝エールは言った。

短かめの栗色の髪にエメラルドグリーンの眼を持つ中肉中背の男で、成年はすでに迎えているが、それにしても少し幼さの残った顔

立ちをしている。

魔導研究所とはどんなところなのかというリクの質問から、今まで得意満面に語っていたのは、黒髪に眼鏡を掛けた一見真面目そうな印象を与える少年はカーエスⅡルジュリス。その口調はその真面目そうな風貌からは想像出来ないほどひょうきんな方言だ。

胸を張り、鼻を今にも高く伸ばしそうな勢いで真上に向けているカーエスだったが、そこに彼の真向かいに座っている金髪の美女・ジェシカⅡランスリアが口を挟んだ。

「何を威張っている、眼鏡男」

女性にしては無骨な言葉遣いだが、彼女はその言葉遣いにあつた服装をしている。

巻き毛気味の金髪は後ろで大きく一束の三つ編みにまとめ、その全身には動きに支障がない程度に軽甲冑を着込んでいた。

「貴様は教科書通りの事を話しているだけではないか。私がリク様にフリーバルの事を尋ねられたならば、日夜問わず解説し続け、リク様を王都の獣道に至るまでを知り尽くす事情通にして差し上げると言つのに」

「……それ、単なる拷問ちゃうん？」

「ま、百聞は一見にしかずだ。着いたらいろいろ案内してもらおうか。フリーもよろしくな」と、リクは彼の向かいに座っている少女に眼を向けた。

真直ぐな黒髪を腰まで伸ばした可憐な少女だ。黒いローブという地味な服装に首飾りから足首まで、揃いのアクセサリーを着けている。

リクの言葉にフリーと呼ばれた少女、フィラレスⅡルクマース

は少し顔を赤らめてこくりと頷いた。

「え、乗客の皆様、まもなく終着駅エンペルファータ、エンペルファータでございます。お降りの際は忘れ物のなきよう、お気を付け下さい。この度はコーダのサソリ便を御利用下さいまして、まことに有り難うございました。まもなく終着駅エンペルファータに到着いたします」

その声は今、彼ら四人がいる部屋の外から聞こえてきた。

この部屋は、実は運搬サソリの背にある客室で、運搬サソリ《シツカーリド》を運転している御者・コーダ・ユーヅルフは客室のすぐ前方にある御者席に座っていたのだ。

コーダは砂漠の生まれで褐色の肌に短く刈られた白髪を持ち、太陽光を反射しやすく風を通しやすい、ゆったりした白い衣を着けている。

「何だ、それは？」と、リクが客席の前方に付いている窓から顔を出して尋ねた。

「ははは、魔導列車の車掌さんのまねツスよ」

コーダが笑って答えると、今度はカーエスが顔と口を出してきた。

「え？ 魔導列車乗ったことあるん？」

「ないツスけど、まあ、こんなモンでしょう？」

話しているところに轟音が轟いた。

見ると、エンペルファータに向けて走る《シツカーリド》と平行に走っている線路を噂の魔導列車が追い抜いて行く。

「おお、話には聞いてたけど、実際見るのは初めてだな」

「この列車はフリーバル」エンペルファータ間でもっともポピュラーな移動手段なのですよ、リク様」

いつの間にかジェシカも窓から顔を出している。その隣ではフィラレスも同じようにして、電車から来る衝撃波の風に髪を揺らしていた。

「じゃ、この線路を辿ればフリーバルに着けるのか？」

リクの問いにジェシカは頷いて答えた。

「途中他の町への分岐もありますが、そういうことですね」

「街の反対側にはエンペルリス方面への列車も出てるんやで。乗るには出国手続きがいるけどな」と、カーエスも負けずに付け加える。

しかしその後余計な一言が付いた。

「しかも速い！俺らが一週間掛けてきたこの行程も、ものの四日で済むんやで？こんなサソリとはエラい違いや」

「バカ…っ！カーエス！」

リクが血相を変えてカーエスの口を塞ぐが、一瞬遅かった。

コーダが肩ごしにじろりとカーエスを睨み付ける。

「……カーエス君、今聞き捨てならないことを言いやしたね？」

男は疲れきって椅子に座ったまま居眠りをしていた。

取った休暇でファトルエルに行き、話題の決闘大会を見に行ったわけだが、いい事ばかりではなかった。

妻と幼い息子には値段の高い買い物させられ、さらに大災厄に襲われそうになって、なんだかんだで仕事をしているいつも以上に疲れた休日となってしまうた。

大会が終わった後、サソリ便でレンスに行き、そこでもう少し休暇を過ごしてからこのようにエンペルファータ特急に乗ってエンペルファータに帰ろうとしている。

「パパー、このれっしやがいつちばんはやいの〜？」

目を閉じて明らかに寝ているにも関わらず、窓の外を見て興奮しっぱなしの息子は彼に質問を浴びせてくる。しかも往路も合わせて同じ事を十三回も聞かれている。

昨日も遅くまではしゃいでいたというのに、子供の体力というものはどうしてこう限りが無いのだろうか。

彼が明らかにうるさそうに顔をゆがめると、妻が代わりに答えた。

「違うわ、一番速いのはパパが今作ってるクルマよ」

彼はエンペルリースで盛んであるレースに使う車を魔導研究所にて開発していた。

エンペルリースの魔導車産業会社に半分所属し、研究開発費用も会社から出ている。彼は数年前までは一般車の開発を手掛けていたのだが、最近彼の会社がレースに参入する事になり、その為のレース用魔導車の開発チームに選ばれてしまったのだ。

新参なのでどうにもノウハウが足りず、その割には社長の理想が高すぎるので、やれ遅い、やれ耐久性が低いと文句を言われっぱなしである。

しかも研究・開発活動はやれば進むというわけでもない。

現に今彼は行き詰まっております、研究所に帰れば焦りと会社側の催促との板挟みになるだろう、と考えただけでもげんなりする。

「じゃ、このれっしやって、なんばんめにはやいの〜?」

「そうね、少なくともカンファータの中だけだったら一番速いんじゃないかしら」

カンファータではレースは行われないので、確かにカンファータに限ればこの魔導列車が一番速いと言う事になる。

カンファータにも都会と呼べるところには車は走っているだろうが、それでも魔導列車より速い一般車は存在しない。

移動範囲が、車輪を通して魔力を供給し続けるレールの上だけと制限がある分、魔導列車の方が速いのだ。

「あつ、カニさん!」

「あら、アレはカニさんじゃ無いわよ。サソリさんよ。砂漠を渡る時に乗ったでしょう?」

妻が訂正したのを聞いて、彼はこんなところまで来るサソリ便もあるのかと心の中で感心した。

「サソリさんか〜、でもはやいね〜、どんどんこっちにおいてくるよ〜」

馬鹿な事を、さっきカンファータではこの列車より速いものは無いつて教えたではないか、と我が子の事ながら彼は少し苛立つ。

「何言ってるの、そんなに速いサソリさんはいないわよ」と、妻が子供に諭すのを聞いて男はそうだと内心で賛同した。

「でもほら、あそこみてよ、ママ」

息子が食い下がる声に彼はまた苛立つ。

そしてまた心の中で妻に早く訂正してやれと催促する。

その期待に応えるように妻が口を開いた。

「……あら本当！」

否定の言葉を待っていた男は妻の言葉にズルツと尻を滑らせ、危うくシートから落ちそうになった。

「おい、君まで何を言い出すんだ!？」

すると妻は困った顔をして窓の外を指差す。

「でもあなた、あれ見てみてよ」

男は仕方がない、とでも言いたげに深いため息を付いて身体を起こし、妻と子が指差す窓の外を覗く。

次の瞬間、その目は丸く見開いた。

「な、なんだありゃ!？」

爽快なスピードで後方に向かって流れていく車窓の景色、その中でその運搬サソリだけが前方に向かって動いていた。その足の動きは常軌に外れた速さと力強さで身体を前へ前へと進めていく。

明らかにその運搬サソリはこの列車を上回るスピードで走ってい

た。

何故だ、とも、信じられない、とも彼は思わなかった。

彼は感心していた。

(魔法で、ここまでできるのか……)

たくさん荷物を乗せて砂漠を渡るしか能がない運搬サソリをあれだけ速く走らせる事ができるのだ。あれだけの魔法の技術をもってすれば車はもつと速く走るに違いない。

彼は、さっきまで感じていた憂鬱感がすつと晴れて行くのを感じた。

その運搬サソリが彼らの視界から消えた時に車内放送が入った。

『えー乗客の皆様、まもなく終着駅エンペルファータ、エンペルファータでございます。お降りの際は忘れ物のなきよう、お気を付け下さい。この度はエンペルファータ特急を御利用下さいまして、まことに有り難うございました。まもなく終着駅エンペルファータに……何だ、ありゃ!?!』

平行して走る線路と道路を除けば周りには何も見えない荒野にある卵型の都市。それがエンペルファータだった。

街の周りは高い塀に囲まれており、魔導列車の線路と道路はその塀にポツカリと開けられた門に通じている。

車道用の穴の傍には、滅多にないが歩きでここまで来る人の為に、小さな入り口が設けられていた。

そこにリク達五人が歩いてくる。さすがに運搬サソリは街に入れないらしく、サソリ便でやってきた彼らは街の外で降りて歩行者用の入り口から入るのだ。

もっと入り口に近いところで降りても良かったのだが、御者のコードが他人に《シツカーリド》を“しまう”ところを見られたくないといいい、すこし離れたところで降りたのだった。

そのコードは上機嫌な様子でカーエスの前に回り込み、虚ろな力、カーエスの眼前にVサインを突き付けて言った。

「どうスカ、カーエス君？ あれでも《シツカーリド》は魔導列車より遅いと言いやス？」

カーエスは病人のようにふらふらと足元危なく歩いていた。

その目にはうっすらと涙が見えており、身体は老人のように曲がって、いつ嘔吐しても不思議ではない。

「な、何で久しぶりの研究所に帰ってくんのにこんな目に遭わなアカンの……？」

そう言ったカーエスの声はもう少しで吐きそうなところをギリギリで我慢している為に少しくぐもったものになっている。

「そりゃ、お前がコードを焚き付けるようなことを言ったからだろ」と、言い返すリクだったが、彼も先程までは青い顔をしていた。しかしエンペルファータに到着した興奮のせいか、今では正常な状態に戻っている。

その後ろにいたジェシカはカーエスを見て大きいため息をついた。

「軟弱者め、あのくらいの揺れで参るとは情けない。私が海上軍事訓練に参加した時など船が渦巻きに飲み込まれそうになって縦には揺れ、横にはグルグルと……」

「うっ……！」

想像してしまったのか、カーエスは奥から酸っぱいもの込み上げてくる口元を抑え、その場にうずくまった。なんとか嘔吐だけは堪えたが、そうとう消耗したらしく立ち上がったカーエスの顔が心無しかげっそりして見える。

そんなカーエスの背中を、フィラレスが心配そうな顔をして撫でてやっていた。彼女は意外とタフなもので、あの猛スピードが生み出す強烈な揺れにもほとんど動じる事がなかった。

「うっ……すまんう、俺の味方はフリーだけやなあ……」

涙ながらに感謝するカーエスを見たリクは何かを思い付いたように含み笑いを浮かべた。

「ジエシカ、そんなのまだ序の口だぜ？俺とファルが乗った船なんかすげー海がシケてきやがってさ、波なんてパイプみたいになって船がそんなを転げ回るわけだ。もうどこが上なんだか下なんだか……あんなのでよく目的地に着けたモンだ。でもあの後、船内の掃除大変だっただろうなあ、あちこち“アレ”まみれでさー」

わざわざカーエスにも聞こえるように言うものだからたまらない。“アレ”を想像してしまったカーエスがうっ、と顔をしかめてうずくまった。

「あ、あんたはオニかアツ!？」

「英雄だ」

しれつと即答したのはジェシカである。
その言葉にリクは苦笑しつつ首を振った。

「英雄なんて大それたもんじゃねーよ、ジェシカ。ただのいち魔導士だ。しかし人をからかうのがこんなに楽しいモンだとは思わなかった。ファルがいつも俺をからかっていた気持ちがあったような気がするよ」

リクはそう言って、からからと笑った。

少し歩いたところで入り口に着いた。

小さな窓口の中にいた中年の役人が暇そうにふかしていたタバコを灰皿に置いて対応する。

「えーと、あんたらは移住希望者？ 単なる観光？ 許可は得てる？」

あまり態度の良くない役人だ。だからこそ滅多に仕事のないこちらに回されたのかも知れない。そんな役人にカーエスが弱り切った顔で小さな棒のようなものを差し出した。その隣のフィラレスも同じように棒を取り出した。

棒の片端には彼らの名前が刻まれたプレートホルダーが着いており、はた目にはカギのように見える。

「俺とフィラレスは研究所関係者、後のは俺等の招待客や」
「研究所関係者？」

役人は棒を取り上げると、彼の正面にある机に乗った立方体の箱の穴に差し込んだ。

すると、その穴のある面の対面に着いていた水晶の玉が光り始め、向き合って配置されているスクリーンにカーエスの写真と彼の情報らしき文章が表示される。

カーエスの棒を箱から抜くと、今度はフィラレスの棒を立方体に突っ込んだ。同じように彼女の写真と情報がスクリーンに表示された。

「確かに」と、役人は棒をカーエスとフィラレスに返す。そして机の引き出しに仕舞ってあった紙を三枚、カーエスに差し出した。「招待客の人はこれを書いて」

カーエスがリク、ジェシカ、コーダに用紙を回し、それぞれ必要事項を書かせた。

「面倒だなー」と、リクは記入をしながら不平を漏らす。

「ああ、結構厳しいねんで。犯罪者が中に侵入でけへんように、許可された人以外は入れられへんようになってるんや」

「さっきの棒みたいなやつは何なんだ？」

「ああ、コレ？」と、カーエスはポケットからさっきの棒を出してみせた。「己が証たる鍵”って名前なんやけど、メンドいから皆は単に“鍵”って呼んどる」

「ふーん」と、リクは相槌を打ちつつ、ペンを置き、用紙を持ち上げて出来栄えを確かめた。「うし、出来た」

カーエスが三人分の用紙を回収し、そわそわと落ち着きなく待っていた役人に渡す。

彼は受け取った用紙にさらに何かを書き込むと、机の上にあった入れ物の中に入れ、カーエスやフィラレスと同じ“鍵”を渡す。

「大事なものだから無くさないこと。それから、街から出る時に返すように、以上」

そう言うと、役人はやつと厄介ごとが片付いたとでもいう様子で、リク達が去らない内に新しいタバコに火を付け、くつろぎ始めた。

「ここがエンペルフアータかあ！」と、リクは、感嘆の息をつきながら街の門を潜った。

好奇心に満ちたその目は、行き場に迷ってきよろきよろと落ち着きなく視線を振り回している。

エンペルフアータの街は師・ファルガールカーンと共にあちこちを旅して廻ったリクが知るどの街よりも進んだ街だった。

天にも届きそうな摩天楼、歩道の脇をとんでもないスピードで行き来する魔導車、機能より外見を重視したファクション、街道沿いにある店に所狭しと並べられた魔導文明の利器、そして大河を流れる水のようにゆっくりと道を流れていく人間達。

こんな街こそが栄華を極めた街と言うのだろうか。

何よりも驚いたのは気温だった。

さつきまではジツとしていても汗がにじみ出てくるような暑さだったというのに、エンペルフアータの街の気温はかなり快適な涼しさだ。

「目には見えへんねんけどな、この街をドーム状にバリアが張られるんや。バリアン中はいつでも快適な温度に保たれとる。雨も防ぐからホンマは屋根なんていらんし」

「さすが、ハイテクだな」

リクが心底感心した様子で言うと、カーエスは得意顔で胸を張る。その胸をジエシカが槍の柄で突き、カーエスは見事にそっくりかえって尻餅をついた。

「どわっ…!? 何すんねん、このヤリ女!」

「だから何故貴様が威張るのだ。あのバリアは貴様が作ったものではないだろう?」と、ジエシカは柄を向けていたヤリをくるりと回転させ、穂先を突き付ける。

「だからって何でいちいちどつかねあかんねん!？」

「その隙だらけどころか隙しかない歩き方を見ていれば、何もなくても突きたくなる」

最近ではすっかり定着してしまったカーエスとジエシカの掛け合いを見て、コーダは笑いを噛み締めながらリクに言った。

「あの2人、すっかり仲良くなっちゃいやしたね」

「全くだ」と、リクも笑って同意する。「お陰で俺も退屈しねーよ」

フィラレスにも話を振ろうと彼女を振り返ると、フィラレスの視線があらぬ方向を向いていることに気がついた。彼女の視線の先に目をやると、そこにはこの街でも一際目立つ、積み木を極めて芸術的に積み上げたような建物があった。

視線をフィラレスに戻すと、彼女と視線があった。

「あれが魔導研究所なのか？」

リクの問いにフィラレスはこくりと頷いた。

彼女が視線をそこに向けていた訳は分かった。しかしリクはどう

しても聞くことが出来なかった。

なぜ魔導研究所を見て、あんなに物憂げな表情をしていたのかを。

03 『二つの問題』

文明には必ず礎がある。

その文明から生み出されたほとんどのものにそれは絡んでくる。

それが無くなった時、文明は滅びる。

栄えた時が嘘だと思えるくらい呆気無く、跡形もなく。

人々が気付くのはいつも滅びる直前の事だ。

それは大抵人には生み出し難いもので、使えば滅るものである事を。

自動的に魔導研究所所長という肩書きもついてくるエンペルファータ市長の部屋は魔導研究所の頂上、街で一番高い場所に配置されている。

立方体のこの部屋は四面ガラス張りで、この部屋からは街の端から端までを一望できる。

その部屋の主である恰幅のよい男は黙ってエンペルファータ東口を見つめていた。

すると彼の大きな机にある、倒した円錐型の魔導器が彼の注意を促す電子音を奏でた後、階下にいる秘書の声を届けた。

『市長、行政部長が面会を希望しております』

彼、アルムスは少し間をおいて答えた。

「通してやってくれ」

『承知しました』

暫くして部屋の真ん中にある低い台に描かれた移動魔法陣が輝き出す。

そして魔導研究所の中では異色と言える、エンペルファータの役所のような存在の行政部の長・エイスが入ってきた。頭の頂上からつま先まで完璧に整えられた服装をしており、固く引き結んだ唇と鋭い双眸からは彼の性格の堅さが伺える。

「失礼します、市長。至急相談したいことがあります」

一言、上司に挨拶した後、彼は先客がいたことに気が付いた。長身でがっしりとした体格をしており、立派なヒゲを蓄えて、いかにも軍人然とした雰囲気を持つその男は、開発部長兼エンペルファータ魔導士団長のディオスカス・シクトだ。彼は、気にせず続けてくれというように、軽く手を上げてエイスに挨拶をする。

別に聞かれて困る話ではないので、エイスはディオスカスのいう通り、気にせず続ける事にした。

「魔石の件だろうか？」

「はい、先日メーアにやった調査団が帰って参りました。もうあそこの鉱山から掘りだせる魔石はないと言うことで、閉鎖が決定したそうです」

魔導文明においてその象徴たるものが魔導器と呼ばれる、魔力によって動く道具である。

この部屋にある移動用魔法陣も、机の上にある伝声器も、そして重要な交通機関となっている魔導列車もすべて魔力で動いている。

では、それらの魔導器を動かす魔力はどこからやってくるのか。

実はこの世の全てにあるものが魔力を帯びている。そこらの草や、石、獣でも勿論魔力は宿っている。

しかしそれでは魔導器を動かすほどの魔力にはならない。しかし世の中に知れ渡っているもので唯一、魔力を多分に含んだ鉱石、それが魔石なのだ。

しかし魔石は所詮鉱石に過ぎず、限りある資源だ。

この百年の魔導文明の進歩は目覚ましいものがあつたが、同時に魔石の使用量も激化し、最近あちこちで掘りつくして閉鎖される魔石鉱山が相次ぐようになった。

メーアもそんな魔石鉱山の一つで、一時はこのエンペルファータで使われる魔石の三割を算出していたという実績のある鉱山だった。

現在閉鎖が決定してしまったのがメーアを入れて三件。

今採掘を行っている鉱山はカンファータ、エンペルリース合わせで三十以上あるので世間的にはこの問題は危惧されていないのだが、最近魔石の産出量が激減し、調査団が閉鎖を議論している魔石鉱山は十五件もある。

調査団が閉鎖を決定しなくても、どのみちその魔石鉱山の先は短い。もつてあと一、二年が関の山だ。

世間に混乱を起こさないように世間には伏せてあるので問題は表面化しないのだが、今魔導研究所の学者達の間でもっとも盛んに議論が交わされているのはこの魔導問題についてである。

得に魔導文明の中心にあるこのエンペルファータは魔石が無くなればその役割を完全に失ってしまうのだ。

「そうか、それは残念なことだな」

エイスの報告にアルムスは極めて事務的な口調で答えた。

焦りを露あらわにすることを予想していたエイスは、全くその様子を見

せないアルムスに眉を潜める。

昨日まで一緒になってこの問題に頭を悩ませていたのだが、この余裕はなんなのだろう。そんなエイスの疑問を見越したようにアルムスは言った。

「実は先ほど、我が研究所の開発部軍事部門に通達が来た。三大国による定例国際会議に、ウォンリルグの代表が現れなかった。ウォンリルグとフォートアリントンを繋ぐ移動用魔法陣は、あちらから封印されてしまったそうだ。」

まだあちらにそのような動きは目立たないが、いつ攻めてくるかわからない状況だ。だから魔導兵器の開発を急いでくれとのことだ。その話を聞いたエイスは、思わずディオスカスに目を向けた。その通達の件で彼はアルムスに呼び出されていたのだろう。

「それが市長の余裕の原因なのですか？ 開戦して魔導兵器が使われるようになれば、もっと魔石の減りは早くなるではありませんか」

心配そうなエイスの言葉をよそに、アルムスはどつきりと自分の机に腰を下ろした。

そして、その立派な口ひげを蓄えた口元に、笑いを浮かべて言った。

「そうかね？ 私としては向こうが攻めて来る方が有り難いよ。ウォンリルグにはたくさん魔石鉱山があると言う……もしウォンリルグがカンファータ、もしくはエンペルリースに統合されたりすれば、当分は魔石の心配はしなくて済むというものだ」

「勝つとは限らないのですよ？」

「勝つに決まっている。こちらはカンファータとエンペルリースの二国連合軍だ、しかもその後ろには我が研究所の技術力がついてい

るのだからな」

そう言ったアルムスは、目をディオスカスに向ける。彼は誇らしい笑みをエイスに向けて見せた。しかしエイスにしてみれば、アルムスやディオスカスのそんな態度にかえって危機感を抱きたくなる。取り敢えず、エイスはこの問題については話が終わったと判断し、次の問題に入った。

「ではもう一つのエネルギー問題、“セーリア”の話に入りましょう」

そう切り出した途端に、アルムスの自信のある表情が更に深まった。

「ふふふ、それに関しても今日解決案を見出した」
「……なんですって？」と、アルムスは表情、口調共に驚きを露にした反応を示した。

エイスとて伊達に行政部長の地位に上り詰めた人間ではない。実際さっきの魔石問題については、ウォンリルグと戦争にはいるかもしれない事実こそ知らなかったが、ウォンリルグの保有する魔石鉱山には目を付けてはいた。

そしてここに来た時も、ウォンリルグに交渉を試みることを提案するつもりでいたのだ。ただ、あまりに可能性の低い提案ではあったが。

しかし後に回した“セーリア”の問題こそ、本題であり、本当に解決策を見出すのが難しいものだった。

その解決策をもアルムスは見つけだしてしまっただけらしい。

もの問いたげなエイスの視線を正面に受けて、アルムスは言った。

「可能性は十二分にある。今までに集めたデータと……彼がそう言っている」

「彼？」

先程まで真直ぐエイスを向いていたアルムスの視線が微妙にずれていた。アルムスが見ているのはエイスではなく彼の背後だ。それに気がついた彼は自分の背後を振り返る。

いつの間にか移動用魔法陣の上に一人の男がやってきていた。身体は小さく、ガリガリに痩せこけ、肌は病的なまでに生白い。ぼさぼさに伸びきった髪は目と鼻先まで達していた。前髪の先端のすぐ下にある口は笑っているように見えるが余り爽やかなものではない。むしろ妖怪に近いものを感じる。

肌を見ると五十代といったところだが、あまり健全な生活をおくっていないさそうな印象を差し引けばもっと若いともとれる。

しかし猫背で背を丸くしている所為で老人のような気さえする。

ともかく、その男の第一印象はあまり良いものでは無かった。

「彼はダクレー、元々は開発部の人間なのだが、この解決策の提案者であることもあるので、本日付けで研究部に異動、この魔導研究所における新しい“滅びの魔力”の研究者となる」

「ダクレー＝バルドーです、よろしく」と、ダクレーはエイスに握手を求めた。

エイスはそれに応えようと、アルムスの方を向いて言った。

「しかしそれではミルドはどうなるのです？」

「彼には既にダクレーを手伝うように話を付けてある。今あるデータをとったのも彼だ。最適だろう」

アルムスはそう即答した。予想された質問だったからだろう。同

時にその声の裏ではそれ以上何も追求するなという念があからさまに込められていた。

しかし研究所内の人事は行政部長であるエイスの管轄だ。それを勝手に侵されたとあっては自分の立場がない。そういう意味で、エイスはアルムスに不満げな顔を向けたが、言及することは出来なかった。

渋々ながらエイスが引き下がった様子を見たアルムスは満足そうに頷くとダクレーに視線を移した。

「ではダクレー、今日から早速研究に入ってくれ」そしてアルムスはちらりと机の上に置いてある小型の魔導投影機のスクリーンをちらりと見遣る。「丁度“研究対象”も帰って来たようだしな」

そのスクリーンには数人の連れと共に街を歩く真直ぐな黒髪を背中まで伸ばした可憐な少女が移っていた。

「あゝっ、やっと着いたで」

目の前にそびえる魔導研究所の入り口を前に、カーエスは嬉しそうに伸びをした。再び足元に置いてあった荷物を拾い上げると肩に担いで入り口に歩み寄る。

先ほど街に入る時にも出した“鍵”を扉の脇にある穴に差し込むと、扉はスルスルツと上に持ち上がった。

そしてカーエスは皆のほうを振り返る。

「俺が通つたらすぐ閉まってまうけど、こーやってココにある穴にさつき貫つた“鍵”を差し込めばまた開くよって、心配せんでもええで」

それだけ言うとカーエスは扉を潜って中に入ってしまった。

リク達もカーエスにならって魔導研究所の中に入る。

そして、初めて魔導研究所の中に入った三人は驚嘆の声を上げた。

「ええっ……!?!」

とてつもなく広いドーム状のホールだった。

面積だけではない。天井も遥か高いところに空の代わりに存在し、室内であると言うのに大樹が一本まるまるホールの真ん中に収まっている。

ともかく外見を明らかに上回る広さだった。

「魔法で空間を圧縮してるんすね〜」と、コーダがそう漏らすとカーエスが不満そうに口を尖らせた。

「今、言つたる思たのに……」

「言わなくても魔導士なら壁とか見れば分かりやすよ」

無機的なメタリックグレーの壁に隙間なく刻まれた紋様が何らかの魔導技術を施されていることを物語っている。

リクがあたりに視線をさまよわせながら言った。

「ともかくこのエンペルファータ全体が魔導技術の粋を集めて造られてるってことだな」

ホールからは入り口から向かって左右、正面の三方に大きな廊下

が伸びていた。右には『研究・開発室棟』、左には『魔導学校棟』、そして正面には『住居・宿泊施設棟』と廊下の上に案内用の板が取り付けられている。

案内人・カーエスの後に続くリク達は『魔導学校棟』への道を進んで行く。

「みなさま、この廊下の天井を飾っている天井絵を御覧下さい」

「その気持ちの悪い裏声は止めろ」

女性観光ガイドを真似て、声を裏返したカーエスの喉元にまたしてもジェシカの槍が突き付けられる。

たしかに、はつきり言って気持ちのいい声ではない。

「で？ 天井絵がどうかしたのか？」

リクが説明の続きを促すと、次に上がったのはコーダの声だった。

「へえ、『愚者から賢者への物語』スか」

「また先に言われるし……」と、カーエスは肩を落とす。

「『愚者から賢者への物語』って、……あの説話のか？」

それはこんな物語だった。

いろいろな知識を求めて旅をする愚者の前に、一人の賢者が現れ、様々な知識を与えて愚者を賢者にする、そして賢者は最後に時空を超える方法を授けて消えてしまう。

そして賢者となった愚者は気が付いた。

今まで愚者に知識を与えていた自分は、最後に授けられた方法で、時空を超えて未来からやって来た自分なのだと。

だが最後に愚者は一つ疑問を残してしまう。

今自分は賢者だが、今持っている知識は賢者に与えられただけのものだ。

しかし賢者もおそらく以前は愚者で、やはり未来からやって来た賢者から知識を与えられたのだろう。そしてその賢者も同様に。

ではその知識を本当に得たのは一体誰なのだろうか、と。

教訓も何も無い、ただの話だったが、説話なんてそんなものだ。

たしかに廊下の天井を飾る絵は『愚者から賢者への物語』を絵で表したものらしい。

「というより、ある遺跡で見付かったこの天井絵のオリジナルから、解釈、文章化された物語なんです。これはレプリカみたいっすけど、本物とほとんど出来は変わらないんじゃないスか？」と、コードは説明を締めくくった。

「……お前、ホントに物知りだなあ」と、感嘆の息と共にリクが言った。

するとコードはへへへ、と照れて笑った。

「あらゆる情報を提供してこそその便利屋家業ツスよ」

「しかし、偶然なのか狙ったのか知らねーけど皮肉なもんだよな」

リクの漏らした一言に一同が揃って首を傾げた。

代表するようにジェシカが尋ねた。

「どういう意味でしょうか？」

「前に聞いた事あるんだけど、今一般に認められている魔導体系って誰が、いつ、どこで、どうやって作ったのか、まるで分からんらしいな。それでも魔導士は生徒達に魔導を教えるわけだ」

そこまで言った時、全員が納得した。

魔導士を賢者に、生徒を愚者に、そして魔導体系を知識に置き換えれば、ほとんど『愚者から賢者への物語』そのままの話になってしまう。

「……確かに」

「兄さんって、頻繁に質問をする割に、時々凄く鋭いこと言いやすよね」

そう言ったコーダをジェシカはじろりと睨んだ。

「時々は余計だ」

「ちょっと待てい！」と、そんなジェシカを今度はカーエスが睨む。「何で俺ン時と違って、コーダん時は槍突きつけへんねん！ 不公平やないか！」

そしてびしつと勢いよく指を差す。

「隙が見付からなかったからだ」

平然と答えたジェシカは、自分を差しているカーエスの人さし指をおもむろに掴んだ。

「貴様と違ってな」

そう付け加えると、手にした人さし指を手の甲に向かって反り返らせ始めたものだ。たちまち身の毛もよだつ激痛がカーエスを襲い、悲鳴を上げさせる。

「いでででででっ！ 折れるっ！ 折れるうっ……！」

そのやり取りを見ていたリクとコーダは顔を見合わせた。

「何かカーエスって……」

「……完璧イジメられキャラっスね」

リクの隣にいたフィラレスも、こくりと頷き同意した。

『愚者から賢者への物語』の天井絵を見上げながら真直ぐに伸びる廊下を歩いていくと、やがてさっきの中央ホールと同じようなドーム状の、しかしずっと小さい部屋に出た。

「ここが学生ラウンジ。授業や修行の合間の憩いの場や」

そこには向かい合ったソファが何組か置かれ、ところどころに観葉植物が添えられている。そしてソファには、お茶を飲みながら話している学生らしき若者がたくさんいた。

カーエスは、それらの若者達の姿を見かけると嬉しそうに話し掛けた。

「ようつ皆の集！ 精進しとるかあ！？」

その声に学生達が一斉にカーエスのほうを向いた。
そしてざわざわと騒ぎ出す。

「カーエス先輩だ！ カーエス先輩が帰って来たぞ！」

「えっ！？ マジ！？ どこどこ！？」

騒ぎはあっという間に広がり、堰をきったように、学生達がカーエスに群がり出した。

「カーエス先輩！ お帰りなさい！」 「どうでした！？ ファトル
エルの大会！」 「勿論優勝ですよね！？」 「当然だろ！？ あれだけ強いんだ！」

学生達の問いに、カーエスは何かを濁すように笑って報告した。

「済まんなあ、あかんかったわ」

「え〜っ!?! うっそ〜!?!」「どっか調子悪かったんですか?」

「相手が汚いヤツだったんだよ、きつと!」

生徒達の反応に、ジェシカが驚愕に眉を潜めた。

「し、信じられん……、私は奴の妄想世界に迷い込んでしまったのか……?」

その横でコーダが苦笑する。

「気持ちは分かりやすけどねえ……。兄さん、どう思いやス?」と、コーダはリクに話を振った。

「ま、アイツの実力からしたら可笑しくはねーと思うけど?」

実は今、彼らの憎しみの対象となっている“尊敬する先輩を倒した相手”というのが、このリクである。

普段の、ほにやららした態度とは全く違ったカーエスの実力に、リクは大いに苦戦した。

リクはもう一人、もとい“二人”の魔導研究所出身の魔導士と戦ったのだが、彼らにもかなり苦しめられた。

つまり、魔導研究所にいる魔導士はエリートであり、その名を背負ってファトルエルの大会に出る魔導士は、その中でも特に優れたエリート中のエリートなのだ。

リクはその魔導研究所の魔導士の質の高さを、身をもって知った。そして、それらの魔導士が育った環境を見てみたいというのが、彼

がこの魔導研究所を訪れた動機の一つなのだ。

「しかしこの場にいる魔導研究所出身のファトルエルの大会出場者はメガネ男だけではないというのに……」

まだ不満そうに言っつて、ジェシカは視線をフィラレスに向けた。

そのタイミングにあわせるように学生達も、ようやくフィラレスの存在に気付いたらしかった。

リク達がそう感じたのは、明らかに彼らの雰囲気が変わったからだ。

「ふい、フリーもいたんだ？」

「大会……どうだった？」

フィラレスは黙って首を振って応えた。

「そ、そう。あなたも駄目だったの」

「それは残念だったな」

一応顔は笑っていたが、会話も含めて明らかに義理だった。

そしてその裏には並々ならぬ恐怖が見えかくれしている。

その理由は、リク達にもよく分かっていた。

それはフィラレスがもっている魔力だ。“滅びの魔力”と名付けられたそれは名前に負けない圧倒的な強さと、そして所有者である彼女自身でさえ制御出来ないくらい獰猛な性質をもっている。

ここ魔導研究所で“滅びの魔力”が暴走し周りに被害をおよぼした話は彼女の師であったマーシアから聞いている。そしてリクは実際に暴走に遭遇した事さえある。

だからリクはその威力もよく知っているし、彼らの恐怖も理解出来た。

ふと、カーエスを見ると先程までの締めりのない顔は影を潜め、実に複雑な表情をしていた。

（カーエス……）

彼のフィラレスに対する感情、そして学生達のカーエスに対する感情。それらを考えると彼が表情通りの心境であることは想像に難くない。

すこし気まずい雰囲気が場に混じり始めたところに一人の中年男性がラウンジ内に入って来た。禿頭にすこし腹の出た一般的な中年体型の持ち主である。

その姿を見てカーエスが声を上げた。

「校長！」

「カーエス君にフィラレス君、御苦労さん。よく帰って来たな」

そう言いながら、魔導士養成学校長・ドミニク・バージャーはカーエスを囲う学生達を分けて彼に歩み寄り、その肩に手をおいた。

「帰って来たばかりで悪いが、所長がお呼びだ。挨拶と報告に行つて来てくれ。できればその人達も一緒に連れて来て欲しいそうだ」

その言葉にカーエスは露骨に嫌そうな顔をした。

04 『孤立する日』

一度目は、生きていく心地はしなかった。

二度目も、恐怖に打ち震えるばかりだった。

三度目には、恐れながらも、動く事が出来るようになった。

四度目ともなると、慣れてきて、冷静にそれを見つめられた。

五度目からは、それが日常であると感じ、動じなくなった。

所長室へは歩いていく事が出来ない。行政部、研究部、開発部、魔導学校、各部長の部屋にある移動用魔法陣を使う事では、行く事が出来ないのだ。

しかも、移動用魔法陣はそのままでは使えない。先ず秘書室に連絡をとり、許可をもらって、秘書室のほうから魔導器を制御して、移動用魔法陣を発動してもらわなければならない。

それゆえ、部長より下の役職にある人間が、所長室に入ることは滅多にない。

カーエスとフィラレスがファトルエルへ出発する時も、校長のドミニクを通じて、一言の激励をもらっただけで、直接会う事はなかった。

だから帰って来た時も、ドミニクにさえ挨拶をしておけば、それで十分だろうとカーエスは思っていた。

まさか、今を時めく魔導研究所の頂点に立つ男に呼ばれるとは思っていなかったのである。

カーエスは、それはそれで気が楽だと思っていた。彼は高い役職に就いている人間があまり好きではなかったからだ。

と言つても、そういう種類の人間に偏見を抱いている、というわけではない。もちろんそれも少しはあるが、理由の大半を占めるのは、へりくだった態度が苦手であるという事だ。

カルクのように、本気で尊敬している人物になれば、自然に敬意を持って振る舞えるのだが、全く知らない人間に、そうした態度をとることに大きな抵抗を感じてしまうのだ。

だから、こうして所長室にやってくるのは、あまり気の進む事ではなかった。

「所長、カーエス＝ルジュリスらを連れて参りました」

そういつてカーエス達の先頭に立つて、所長室に魔法陣で移動して来たドミーニクが、彼らを迎えたアルムスに一礼する。

役職名にはないが、魔導士養成学校校長は立派な部長職で、今回の移動の許可をとつたのはドミーニクだ。

「うむ、御苦労だった。カーエス君、長旅で疲れているところを呼びつけて済まないな」

（悪いと思つたら呼ぶなっちゅうの）と、カーエスは内心で毒づいたが、それを口に出すほど彼は子供ではなかった。

かといって、明らかに気持ちとは相反する言葉を返すわけにも行かず、すこし迷つた末に「いえ、気にせんといて下さい」とだけ、素っ気無く答えた。

「フィラレス君も御苦労だった」と、アルムスがフィラレスにも声を掛けると、フィラレスは驚いた様子で慌てて頷いた。

それに対し、アルムスは満足そうに頷き返すと、彼らの背後にいる三人に視線を移した。

「カーエス、後ろの客人を紹介してくれんかね？」

カーエスは黙って頷くと、向かって左端に立っているジェシカから紹介し始めた。

「向かって左端に立っている女性はジェシカ＝ランスリア。ついこないだまでカンファータ魔導騎士団におりまして魔導騎士団勢としてファトルエルの大会に出場しました。」

右にるのがコーダ＝ユージルフ。ファトルエルで、サソリ便の御者をやっ取りました。他に便利屋も営んどるそうです。それから、真ん中にいるのがリク＝エールで、」

今大会の優勝者です、と言いかけたのを、リクに睨まれ、カーエスのはかるうじて飲み込んだ。今年のファトルエルの大会は、思わぬアクシデントで公式には優勝者が決定していない事になっている。エンペルフアータに着くまでの道中で、下手な名声は厄介な事になりやすいから、自分がファトルエルの大会の優勝者である事は黙っていてくれ、とリクに言われていたのだ。

「リク＝エールで……？」と、アルムスに続きを催促され、カーエスは目一杯考えてから答えた。

「昔ここにいたったファルガール＝カーンの弟子です」

「ファルガール＝カーン！？」

すつとんきょう
素頓狂な声をあげてこの場にいる全員の注目を集めたのはドミニクである。実はドミニクは十三年前、ここで教師をやっていたファルガールを毘にかけたこの魔導研究所を追い出した張本人である、前任の魔導学校長・ディオスカスの腹心の部下である。

よってファルガールが、どのような経緯で魔導学校を去る事になったのかは、よく知っている。

「どうかしたのかね、ドミニク？」

「い、いえ……」

アルムスに問われたドミニクは血色を失った顔を横に振って答えた。

察するにリクがここに現れたのは師を追い出した報復だとも思っているのだろう。

「ところでカルクとマーシアはどうしたんだね？」

その質問には、ややぶ然とした態度でカーエスは答えた。

「カルク先生もマーシア先生も、ついでにクリン・クラン先生もフアルガール・カーンに付いて行きはりました」

「何？……では研究所の仕事はどうするのだ？」

「さあ……。俺には教えられる事を教えた言うてましたし、辞めるつもりぢやいます？」

カーエスの回答に、アルムスはしばし黙考し、一つ頷いて答えた。

「そうか、魔導研究所としては、貴重な人材を失ってしまったな」

そして、ちらりと机に置かれた時計に目をやると、背後のガラス張りの窓を見遣った。

「……そろそろだな」

「何がですか？」

尋ねたカーエスにアルムスは疑うような眼を向けた。

「まさか忘れていたのかね？ ……なら危ないところだったな」
「……？」

まだ分からない様子で首をかしげるカーエスにアルムスはたった一言答えてやった。

「今日は“孤立する日”だよ」

「あつ……！！」

カーエスは思わず声をあげた。

やっと気付いた様子の彼をリクが小突く。

「“孤立する日”ってなんだ？」

「見れば分かる」と、カーエスはアルムスと同じように窓から見える空を睨んだまま答えた。

リクが周りを見回すと、ドミーニクも同じように空を見ている。

その顔は揃って真剣なものだった。

しばらくしてカーエス達が見つめる空が暗くなり始めた。

そう思った途端、黒の塗料をこぼしたように空が一気に闇に染まり、続いて地震が起こりはじめる。

突然の出来事に驚いているリクにさほど驚いた様子を見せないカーエスが話し掛けた。

「この揺れを感じ、覚えてへんか？」

「まさか、大災厄！？ だったらお前、何でそんなに落ち着いてるんだよ！？ 早くなんとかしなくちゃヤバいんじゃないか！？」

慌てるリクとは対称的に冷静な様子でカーエスは頭を振った。

「いや、何もする必要あらへんねん。まあ見とれ」

その彼の言葉に応えるように空が光り。雷が市街に向かって落ちた。ところが、落ちる途中で障壁のようなものに阻まれ、何も破壊する事もなく消散する。

その落雷を皮切りに、続いて何発もの落雷がエンペルファータを襲った。しかしどんなに強い落雷でもエンペルファータの街中に届く事なく弾かれていく。

そんな落雷を放っていた雲の一部が下降して来た。他の暗雲より一際暗い色をしており、定まった形はないものの、その先端部には、目なのだろうか、寄り添った二つの輝点が目立っている。

「あれが、この大災厄のグランクリーチャーか？」

「エンペルファータの人間は《テンプファリオ》って呼んどるけどな」

「《テンプファリオ》……」

リクは復唱して改めてその圧倒的な存在を見上げた。

大災厄の核であるとされるグランクリーチャー。大災厄はグランクリーチャーと共に歩み、グランクリーチャーが滅びれば、大災厄も霧散する。ファトルエルでのそれは、巨大な蛇の姿をとり、《グインニール》という名で呼ばれていた。

リク達は、実際にそれと対峙し、その存在がどれほど圧倒的なものであるか、自らの身を持って体験している。

リクが目を向け直したその時、落雷が静まっていった。だんだん収まっていき、完全にあたりが静まり返った。

一瞬の沈黙の後、今度は雷が降ってきた。否、その大きさは雷と違うには大きすぎる氷塊だ。おまけに先が槍のように尖っている。

氷塊が終わると、次は滝のような大雨だった。カーエスの話によると、この雨は骨も溶かすような強力な酸なのだという。

「その次のものが圧巻だった。」

大雨が終わって、再びあたりが静寂に包まれる。今度はいつもより長く沈黙し、次の瞬間、目のさめるような光のシャワーがエンペルファータに降り注いだのだ。

真っ暗だったエンペルファータが眩しく照らし出され、それを見ていたリク達も目を細め、やがて目を開けていられなくなった。

しばらく目蓋を通して明るさを味わい、轟音に耳を傾けた。そして暫くして目をあけると、そこには全く無傷のエンペルファータの街の姿があった。

「街に着いた時に話したつたやろ？ この街にはドーム状にバリアが張られとるつて。あれがそうなんや。“セーリア”つて呼ばれとる魔導器で発生させたモンなんやけど、見ての通り大災厄でさえ破る事は適わへん。この魔導研究所で生み出された数々の発明品の中でも最高の部類に入るモンや」

信じられない面持ちで、目の前の光景を呆然と見つめていたリクは、カーエスの説明ではっと我に帰った。

「街が安全なのは、よく分かった。でもさっきの、大災厄が発生するのを予測していたみたいだったのは？ “孤立する日”つて何なんだ？」

「エンペルファータでは定期的にアレが起こるねん。約二百日おきやったかな。大災厄がやってくると街の中は安全やけど街の外に繋がる交通機関が全部使われんようになるよつて、大災厄が起こる日を“孤立する日”つて呼ぶんや」

これで、さっき今日が“孤立する日”であると知ったカーエスが

驚いた理由が分かった。エンペルファータ到着がもつと遅れていれば、今頃リクたちはあの大災厄の中だったのだ。

「ははは、顔が青ざめているな」

アルムスが、リク達の様子を見て小さく笑った。

「まあ、それも無理はない。殊に君たちは、ファトルエルで存分に大災厄の恐ろしさを十二分に味わったのだからね。決闘大会を見に行っていた所員から聞いたのだが、誰かが、グランクリーチャーと闘って、大災厄を退けたらしいな」

アルムスの言葉に、リク達は心の中で苦笑する。その、グランクリーチャーと闘ったという人物は自分達に他ならないからだ。

そんな心中をよそに、アルムスは続けた。

「そこで君たちに相談がある」

「相談……？」

その単語に、リクは反射的に聞き返した。

おそらく、エンペルファータ市長兼魔導研究所所長という、長たらしい肩書きの人間が、わざわざ自分達に会ったのは、大会の労い^{わづらひ}などではなく、その“相談”のためだったのだろう。

「“セーリア”の無い街で、大災厄を相手に死傷者ゼロ、というだけ、おそらく史上初めての事だ。しかも大災厄を防ぐだけではなく、グランクリーチャーを倒して退けたとなると、人類始まって以来の偉業と言えよう。これは、大災厄対策研究に大きな革新をもたらすだろう。

そこで、大災厄対策の最先端をも担う魔導研究所としては、ファ

トルエルを襲った大災厄に関して、少しでも多くの証言を集めたい。そこで、実際にその大災厄を体験した君たちに、“大いなる魔法”の研究を行っている者に会ってほしいのだ」

それはこちらこそ願ってもない話だった。

リクが魔導研究所に来たそもその理由は、大災厄についているような事を調べられると思ったからだ。それなら自分で難解な資料を紐解くよりも、専門家に聞いた方が早い。

「それなら明日といわず、今からでも」

「それはありがたい話だ。それとフィラレス君」

いきなり話を振られたフィラレスは、びっくりと反応した。

彼女の目が自分の方を向くのを待って、アルムスは続けた。

「君はこれからミルドの研究室に行ってくれ。君の魔力を今日の内に検査してしまいたいそうだ」

フィラレスはこくりと頷いて、了解の意を示した。

他の者が去った後の所長室で、アルムスは机の上の伝声器に向かって話し掛けた。

「ああ。今そちらに向かっている頃だろう」

『ありがとうございます、所長』

通話の、丁寧でいて、どこか人を馬鹿にしたような響きがある声の主は、ダクレーのようだ。

「コトがコトだからな。例の話を、彼女に持ちかける時は、くれぐれも注意してくれよ。彼女自身はともかく、ミルドが反対するのは目に見えている」

アルムスの注意に伝声器の向こうのダクレーはくっくっ、とやはり卑屈な感じの笑いを漏らして応えた。

「大丈夫です。説得は必ず成功するでしょう。どのみち今日は使えるかどうかを確認するだけですからな。今日のところは心配いりませんよ」

またくっくっ、と笑いを漏らし、ダクレーは通話を切った。

アルムスも“伝声器”のスイッチを切ると背後にくり広がる大災厄の光景を眺めやった。そしてが砕けない障壁をがむしやりに攻撃し続けるグランクリーチャー《テンプファリオ》を見つめた。

「本末転倒か……この世で一番、皮肉な言葉だ」

05 『テイタとミルド』

君が怒りを内に溜めていることが悲しい。

それをぶつける事で簡単に壊れてしまう関係だと考えているからだ。

君に怒りをぶつけて欲しい。

それが、君が僕の存在を認め、意識してくれている証になるから。

魔導研究所には五種類の人間がいる。営む者、学ぶ者、教える者、生み出す者、そして知る者。学ぶ者と教える者を除いて、それぞれが主に活動する場所は分かれたれており、用もないのにお互いが顔をあわせることは、なかなかない。

中央ホールにおいては、その法則から外れていた。それぞれの活動する場所に赴くまでに必通らなければならない場所なので、自ずとここにいる人間の顔ぶれは多彩なものとなる。

その中央ホールは、最初ここを通った時とは全く違った印象の空間になっていた。

先程は、吹き抜けた先の天井窓から、大樹の葉を通した柔らかい日光がホール全体を照らし出していたのだが、今はその日光が大災厄の黒雲にさまたげられ、代わりに壁や、大樹自体がぼんやりと光っている。

昼間ほどには明るくないが、これはこれで幻想的な雰囲気ではあった。

大樹の根元に一人の女性が立っていた。年頃は三十代前半だろう

か、出るところはでて引つ込むところはしっかりと引つ込んでいる理想の体型を持っている。

艶のある瑠璃色の髪をショートカットにしており、顔は目鼻立ちのはつきりとしたそれでいて見るからに活発で気の強そうな印象があった。

彼女は、魔導学校に続く通路から中央ホールに戻ってきたリクたちの姿を見ると、手を軽く振り上げながら近付いて行く。

「やあ、アンタ達がファトルエルの大災厄の情報を提供してくれるって人達かい？ アタシは魔導研究所研究部第三研究班主任研究員、まあ、平たく言えば“大いなる魔法”の研究をしているティタ＝バトレアスって者さ。ティタでいいよ」
（……バトレアス？）

リクがその単語に眉を潜めるが、その疑問を口に出す暇いとまを与えず、ティタと名乗った研究者は、まくしたてるような自己紹介に呆然としている一同の一人であるカーエスの目の前に立った。

そして、彼の目を覗き込むように言った。

「アンタが、“完璧”カルク＝ジーマンの弟子のカーエス＝ルジュリスだね？ 噂には聞いてるよ。とぼけてるけど、師匠に負けないくらいの魔導士らしいじゃないか。上級魔導士試験にも最年少で合格したんだって？」

「お前……、そんな記録も持ってたのか……？」と、ティタの言葉に、リクが驚きの目をカーエスに向ける。

当のカーエスは、やはり誉められたのが嬉しいらしく、満面の笑みを返した。

「いやあ、はっはっは、それほどもお……」

「カルク＝ジーマン教師の弟子のあんたなら、少しはファトルエル

のグランクリーチャー討伐の事も、詳しく知ってるんでしょ？ 期待してるよ」

「オツケー、まかしといてや」

すっかり御機嫌で、カーエスは胸を叩いた。

すると「単純な奴だ」と、ジェシカが横目でなにやら不満そうに睨んで一人ごちた。リクはそれを聞き付けて、苦笑した。ジェシカは、カーエスが絡むと文句を言わなくては気が済まないらしい。

テイタは、いい返事をするカーエスにつこりと笑いかけると、その隣にいたフィラレスにも目を向けた。

そしてやはり、目を覗き込むようにして言った。

「アンタがフィラレス＝ルクマースだね。アンタの事もよく知ってるよ。ウチの人がよくアンタの話をするからね」

「ウチの人？」

カーエスが、眉を歪めて聞いた時、そのタイミングを見計らったように、一人の男性が声を掛けてきた。

「おかえり、フィリー。迎えにきたよ。ファトルエルでは大変な目にあっただってね。何にしる、無事に帰ってきてくれて嬉しいよ」

その声に、フィラレスやテイタだけではなく、全員の視線がその男性に集中した。

テイタと同じような年頃で、人あたりの良さそうな柔らかかな笑みを浮かべている、優しそうな印象のある男である。研究者で、そのような印象を持たせるのとは裏腹に、よく見ると、割とがっしりとした体躯である事が分かった。

彼は、全員の視線の中に、テイタのものが混ざっている事に気が

つくと、罰が悪そうに苦笑して付け加えた。

「……君にも会えて嬉しいよ、テイタ」

「気がついてくれて、ありがと」と、テイタは皮肉の利いた笑みを返す。

その笑顔から逃れるように、彼はカーエスに向かって、小さく手を振った。

「カーエス君も久しぶり」

「ミルドはんも元気そやね」

挨拶を交わすカーエスの袖を、リクはちよいちよいと引っ張った。

「知り合いか？」

「この人はミルドはん言うて、フィリーの“滅びの魔力”を研究しとる人やねん。フィリーの着けとる魔封アクセサリーな、あの人がデータから発案して開発されたモンやねんで」

「ほう、それではかなり優秀な学者なのではないか？」と、それを聞いたジェシカが目を丸くしてフィラレスに目をやった。

カーエスは頷いて付け足した。

「せやな、それにミルドはんは、フィリーの数少ない味方の一人なんや。めっちゃええ人やで」

カーエスは、ミルドに対してかなりの好感をもっているようだ。

「で、テイタも知り合いたいだけど？」

「知り合いたい？」と、リクの言葉を復唱し、テイタは更に顔を

引き攣らせた。「そりゃそうだわ、アタシより研究対象の女の子に先に気が付くくらいなんだからねえ」

その言葉に生える棘が、はっきりとミルドに向けられている事を、リクは感じとった。ミルドは、致命的な失敗をってしまった時のように、脂汗をびっしりと浮かべている。

ティタは、そんなミルドの正面に仁王立ちして更に威圧を加える。それにミルドは気押され、ミルドは更に縮こまった。

「さあ、しっかりみんなに自己紹介しなっ！」と、ティタは思いきりミルドの肩を叩くと、彼をリク達の方に押し出した。

ミルドは背後の威圧感におびえながら、弱々しい声で自己紹介した。

「……その、ミルドはバトレアスです。ティタの夫をやらせてもらってます」

「よろしい」

「ミルドはんが結婚しとったなんて、初めて知ったわ……」と、尻に敷かれる夫の図を見せつけられたカーエスが、呆然として漏らす。

「で、後ろのもう一人は誰なんだ？」

そう尋ねたリクの視線の先には小柄な男が控えていた。その男はあまり上品とは言えない笑みを漏らす、卑屈を絵に書いて額縁に入れたような男だ。年齢は見た目では計りにくい。

はつきりいって、第一印象はあまりよくないと言えた。

「ああ、この人は……」と、ミルドが、何故か若干表情を曇らせて紹介しようとした矢先に、一人の白衣を着た男がラウンジに駆け込

んできました。

その男は、テイタの姿を認めると、急いで駆け寄り、まくしたてるように報告する。

「主任！ 大変だ！ クリーチャー達が暴れだして、檻の中から逃げちゃった！」

「本当かい？」

確認はするものの、テイタの表情にはそれほど驚きが含まれていない。

駆け込んできた男の表情は、対照的に焦燥感を露にしていた。

「主任、どうする！？ もしクリーチャー達を逃がしたら、この研究所は大変な事になる！」

「慌てるんじゃないよ。予想は出来たことなんだ。いいかい、今から行政部に行って、魔導士団の出勤要請をしてくるんだ。アレはちゃんと“監獄”の方に閉じ込めてあるんだろ？ いくら行政部の反応がトロイって、そうそう出られやしないさ」

「そ、それが……」

テイタの言葉に、駆け込んできた男は意味ありげに口籠った。

彼女は、その意味を即座に、且つ正確に読み取ったように尋ねる。

「まさか、まだなのかい！？」

「す、すまねえ、実験室から運び出すのに手間くっちゃまってる間に、“孤立する日”が始まっちゃったもんだから……」

「じゃ、まだ実験室に！？」

男が、こつくりと頷く。

その報告には、さすがのテイタも顔色を変えた。

そんなテイタの背後から、リクがそつと話し掛けた。

「何があつたのかはよく分からねーけど、魔導士が要るなら俺達の手を貸すけど？」

彼の申し出に、テイタは振り返り、食い付くような表情を見せる。

「いいのかい……？」

「俺も、構わへんで」「私もだ」「いいッスよ、俺も」

各々で返事をし、フィラレスもこくりと頷いた。

リクは、口元に頼もしげな笑みを浮かべて言った。

「……だそーだ」

現場に早足で向かう間に、テイタはリク達にかいつまんで事情を説明してくれた。

テイタ達は前回の、つまり約二百日前の“孤立する日”に、彼女達の“大いなる魔法”の研究の一環として、エンペルファータを定期的に襲う《テンプファリオ》の大災厄の前にエンペルファータ周辺に罫を仕掛けた。そうやって、その大災厄の時に発生したクリーチャーを捕獲する狙いである。

目的は達成され、その罫にはその大災厄の時に発生したクリーチャー数十体が掛かっていた。

そして今日までの二百日間、そのサンプルでいろいろな実験を行ったテイタ達であるが、その間、クリーチャー達は割と大人しくしていた。しかし、今回の“孤立する日”に反応し、狂暴化するかもしれない、と、今日はそのクリーチャー達を要警戒生物保管庫、通称“監獄”に入れておくはずだったのだが、それは叶わなかったらしい。

“監獄”には何重もの分厚い扉と壁が囲んでおり、いくら檻を破ったクリーチャーとてそう簡単に部屋の外には出られないのだが、実験室は一枚扉で、それとくらべると少々心許ない設計だ。

そんな事態のために、エンペルファータには魔導研究所内で公式の資格を持った魔導士達で構成される、『エンペルファータ魔導士団』という一種の自警団が組織されている。

ただ、そのほとんどは専業ではなく、普段は魔導学校の教師であったり、行政部に従事していたり、あるいは研究者としての仕事をこなしていたり、と本業を持っている。彼等の頂点である魔導士団長のディオスカスからして、普段は開発部長として勤めているのだ。そのため、要請から今やっている仕事を中断して、事情を聞き、現場に駆け付けるといふ過程に、時間が掛かる訳である。

“監獄”に入れた後なら、魔導士団を待つが、実験室では、その到着を待ってられないので、要請して出勤を待っている訳には行かないということらしい。

移動に十数分掛け、リク達は、その部屋の前に到着した。

扉は重そうな金属製で、太く丈夫そうな門かんぬきが三つ付いていた。その扉の向こうで、ずしんずしん、という音と共に扉が振動した。

今現在、扉がひしゃげている訳ではないが、様子を見る限り、一刻（三時間）もしないうちに破られそうだ。

「準備はいいかい？」

視線を巡らした順に、リク達は頷いていく。それを見たティタは扉の脇にあるパネルを操作して、扉に掛けられた門を外していった。

「俺達が入ったら扉は閉めてくれ。外から中の監視はできるか？」

リクの質問にティタは頷いた。

「じゃ、終わったら鍵を開けてくれ」

そう言つと、リクはドアのノブに手を掛け、後ろに控えているカーエスとジェシカに言った。

「扉を開いた瞬間に飛び出してくるかも知れねーから、先制攻撃頼むわ」

「よっしゃ」

「お任せ下さい」

そう言つて、二人は扉の正面に立ち、腰を落として身構えた。

「行くぞ……一、二の、三っ！」

リクは気合い一番、勢いよく、その頑丈ゆえに重い扉を開いた。

「風を集めて凝らせし《風玉》よ、触れし者全てを吹き飛ばせ！」

「《電光石火》によりて我は瞬く速さを得ん！」

カーエスが風邪を凝縮した玉を放ち、ジェシカは音をも超える速さで扉の中突っ込む。

果たして、リクの予想通り、扉のすぐ向こうに、彼らの二倍はあ

ろつかという巨大な身体を持つクリーチャーが三体、飛び出してきていた。

一体はカーエスの《風玉》に、もう一体はジェシカの《電光石火》の一撃に押し返されたが、残りの一体はそのまま外に出てきてしまった。

残った一体はフィラレスに狙いを付け、飛びかかってくる。

思わず身を固くした彼女と、クリーチャーとの間にリクが割り入った。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて！」

彼の右手に具現化した、白く冷たい鎚の形をした光でリクはその一体を殴りつけ、部屋の中に押し込む。

「よし行くぞ、コーダ、ファイリー！」

コーダとフィラレスは、それぞれ頷いて、彼の後に続いて部屋に入る。

全員入ったのを確認すると、ティタとミルドが扉を閉め、パネルを操作して門を掛けた。

「頼んだよ、あんた達」と、扉に額を預けるティタの肩に、ミルドが優しく手をおいた。

「あとはカーエス君達に任せて、僕達は管制室に行こう」

「そうですね。あなたも、捕まえたクリーチャー達がどう戦うのか見てみたいでしょう？　もしかしたら、“滅びの魔力”が発動するところを見られるかもしれませんねえ」

ミルドの後ろにいた男が、エモノを前にしたハイエナのような、汚い笑みを浮かべて言う。

テイタは、その自分達の好奇だけを踏まえた発言を睨んで咎めた
が、彼はこれに動じる事はなかった。

06 『努力と成果』

人は努める、報われることを夢見て。

報われてのち、人はまた努める。

報われることの喜びを知ったが故に。

ただ、努めることが、いつも報われることに繋がるとは限らない。それで努めることを止めてしまう者もいる。

しかし報われなくても、ただ一言の応援が人を努めさせることもある。

現在の魔導研究所では、ありとあらゆるといっても語弊が生まれないくらい、たくさんの研究、開発活動が行われている。そしてそれら全てが絶対安全と言えるわけではない。むしろ、それらの半数以上に研究、開発を続けることの危険性が認められている。

しかし危険を冒さなければ、人は前に進めない。それ故に、危険だからと研究や開発を止める者はここにはいない。だが、危険を放ったらかしにしておくほど馬鹿な人間もいない。

危険が現実になっても被害が最小限に済むように、魔導研究所には、ありとあらゆるところに安全対策が施されている。

そして、それらの安全を確保するためのシステムを管理するのが管制室である。

テイタがその部屋の扉をあけると、けたたましいベル音が彼女の耳を突いた。それに少し顔をしかめつつ、中に駆け込むと、中にいた制服姿の警備員の胸ぐらに掴み掛かった。

「第三生物実験室の映像を出しなっ！」

「テイタ、それじゃまるで強盗だよ……」と、後ろからミルドがそつとたしなめる。

テイタの迫力におびえ切った警備員は、震える指で部屋の中央にあるテーブルを指差した。そこには、あの部屋全体を縮小した立体映像が投影されている。その映像は中にいる人間、生物全てを写し出していた。

彼女は警備員の胸ぐらを放すと、かじり付くようにその立体映像を覗き込んだ。げぼげぼと苦しさ^{かんば}に咳き込む警備員を、ミルドが謝りながら介抱する。

警備員が落ち着き、ミルドに礼を言っ^{かんば}て元のように仕事を始めたのを確認すると、ミルドはテイタの傍に行っ^{かんば}て一緒に立体映像を覗き込んだ。

「どづだい、戦況は？」

「……芳しくないね」と、テイタは重々しい表情で言っ^{かんば}た。

立体映像の中にいるクリーチャー数は二十。

まだ一体も減っていなかった。

この第三生物実験室は小さな運動場くらいの広さがあった。部屋には、実験で使われるものと思われるいろいろな装置や器具などが

置かれていたが、それらはここで繰り広げられている戦闘によって、ことごとく散らばり、壊れてしまっている。

「防ぐな、返せ《弾きの壁》っ！」

カーエスの周りに張られた、あらゆる物理攻撃を跳ね返す障壁が、四方から襲ってきたクリーチャー達の攻撃を受け、そのまま弾き飛ばした。

周囲がすつきりとしたカーエスは、素早く攻撃に転じ、弾き飛ばされて体勢を崩した一体に狙いを付ける。

「冷気よ、凍てつく霜と共に降り、《氷の足枷》として、敵を戒め捕縛せよ！」

冷気が、狙った一体の足首に氷塊をつくり足枷となった。身動きが出来なくなったクリーチャーに駆け寄り、カーエスは更に魔法を詠唱する。

「この玉は内に炎を秘めし《爆発の玉》。その炎、我が敵に当たりし時、解き放たれん！」

カーエスの手に、紅蓮に輝く光玉が生み出され、彼はそれを投げ付けた。《氷の足枷》で身動きの出来ないクリーチャーはもがいてはいるが、動けない。果たして《爆発の玉》がクリーチャーに触れた瞬間、耳を覆いたくなる轟音と共に爆発が起こった。

「どやっ……!?」

もうもつと噴き出る爆煙を、カーエスは眼を凝らして見つめた。だが彼の思いも空しく、爆煙の一部が動きを見せたかと思うと、《

爆発の玉』で吹き飛ばしたはずのクリーチャーが、煙を割って飛び出してきた。

まるで岩のような肩を突き出し、カーエスに向かって突進してくる。

「くっ……防ぐな、返せ《弾きの壁》！」

再びカーエスは《弾きの壁》を張り、クリーチャーの一撃をかわす。

「なんやねん、コイツら無茶苦茶カタいで!？」

クリーチャー《甲殻に護られし者》。その名の通り、その上半身が下半身より極端に大きな、厳つい身体には、見た目にも堅そうな甲殻に覆われている。

雷、雹、酸の雨、そしてあの光のシャワーを伴うエンペルファータの大災厄の、劣悪を通り越した環境を、当然のように受け入れるクリーチャーなのだから、その頑丈さは当然といえた。

《甲殻に護られし者》達の攻撃をかわすのに難はない。しかし、このクリーチャーを倒すことはおろか、傷をつけることさえも彼らには出来ないでいた。

「流星突”っ!”

ジェシカが突き出した槍から発せられた魔力の光線が《甲殻に護られし者》の腹部に突き刺さった。しかし、やはり全く傷は付いていない。

「もう少し溜める時間があれば、何とかなるかもしれない……」と、ジエシカも愛用のスピアをピタリと構えながら周囲に視線を巡らす。彼女の周りには隙あらば襲い掛からんとする《甲殻に護られし者》が六体取り囲んでいた。

そんなジエシカの目の端にある人物が写った。コードダ。

コードダは、全く慌てる様子も、困った表情も見せることなく、物が散乱した部屋をちょこまか走り回っていた。

そのすぐ後ろには、七体もの《甲殻に護られし者》が迫っている。クリーチャーは手を伸ばせば届く距離にあり、実際にクリーチャーはその手を伸ばして攻撃を仕掛けていたが、コードダは、背中に目が付いているような動きで、ひよいひよいと避けて行く。

「コラッ、コードダ！ ふざけんと真面目に戦わんかい！」

ジエシカと同じく、戦いの最中にコードダの姿を認めたカーエスが、ただ逃げ回るだけのコードダを叱咤する。

それを聞いたコードダは、おどけた様子で肩をすくめた。

「はいはい、わかりやしたよん。そろそろ行こうか《シツカーリド》」

コードダがそう言うと、彼の前方に光が現れ、ファトルエルからエンペルファータまで一行を乗せてきた、一匹の運搬サソリの姿を形づくる。コードダの“召喚魔法”だ。

彼は、その御者席に飛び乗ると《シツカーリド》と共に自分を追って来たクリーチャー達の方に向き直った。

「《シツカーリド》“対集団戦闘モード”っ！」

それが呪文であったかのように、運搬サソリの身体からは光が発せられ、運搬サソリの身体を変型させる。

関節を動かすのに邪魔にならない程度に装甲に覆われ、ハサミも金属製つぼく、尾は長くなり、その先は鋭い鎌かまがついていた。

《シツカーリド》はハサミを振り上げると、先頭に立ってコーダに迫る一体を、薙ぐようにして挟んだ。クリーチャーは見事にそのハサミに捕らえられたものの、挟まっているだけで切れる様子はない。

鋭い鎌の付いた尾も振り回す。しかし、なぎ倒せるものの、やはり切り倒すことは出来ない。

大きくジャンプして腹の装甲で押しつぶすことを試みたが、やはり押さえ込むことは出来ても押しつぶす事は出来なかった。

「あらら、やっぱり駄目でやさか」

サソリに乗って群れを駆け抜けたコーダは、自分がさんざん攻撃を加えたはずのクリーチャー達が健在なのを見て、全く残念そうな様子を見せずに漏らした。

「この防御力は本物ツスねえ……。兄さんはどうしてやさかね」

顎に手をやりつつ、コーダはその高い視点からぐるりを見回し、部屋の隅で、フィラレスを背に闘っているリクを見付けた。

丁度、彼の正面にいる三体の《甲殻に護られし者》がリクに飛びつかんと足を屈伸させている。

「我は刈り取らん、その刃に掛けし全てを薙ぎ払う《疾風の鎌》にて！」

詠唱の終了とともに、リクの手には鎌状になった乳白色の光が収まった。そしてリクはそれを、襲い来る三体のクリーチャーに向かって振るう。

無防備な《甲殻に護られし者》の腹あたりに《疾風の鎌》の刃が当たると、新たに巻き起こった風が《甲殻に護られし者》を吹き飛ばした。

（吹き飛んだだけか……ホントは全身を切り裂くハズなんだけどなア）

他の者と同じく、その甲殻の堅さに半ば呆れを感じながら、リクは吹き飛んだ三体の内、一体に追撃を加える。

「その頭向けしは汝！ それが象られるは龍！ その口から吐き出されし火焰はあらゆるものを焼き尽くす！ 真紅の咆哮と共に我が手に収まれ！ 蒼天朱に染めし焼尽の火吹き《ルーフレイオン》！」

リクの詠唱と共に彼の手に赤い光が輝き、杖頭にあたるものが、天に向かって吠えるように口を開けた龍の頭が象られている、杖のような棒が具現化する。

リクは、猛然と倒れたクリーチャーに駆け寄り、それを構え、鋭い牙の生えた口にその杖頭を突っ込んだ。

そして、にやりと口元に笑みを浮かべて言った。

「外は確かに堅いけど、大抵そういう場合、中が脆いモンなんだよな」

言い切ると同時に、仰向けに押さえ付けられた《甲殻に護られし者》の口内が紅く輝く。そして次の瞬間、その口に突っ込まれた杖頭から炎が放たれた。見ているリクにも、そこから体内の隅々にまで、燃え盛る火炎が行き渡る様子が容易に想像出来る

リクに押さえ付けられ、そして体内を灼かれて、もがきにもがいた《甲殻に護られし者》だったが、やがてその手足はぱたりと床に落ちた。

リクは、用心しながらその一体から降りると、疲れとともに息を吐く。

「ふう、やっと一体か」

「……流石はリク様だ。私も負けてはいられないな」

目の端でリクの様子を見ていたジェシカが、そんな一言を漏らした。

囲まれていたのを抜け出し、今彼女は壁に背を向け、前方の六体に注意を払っている。後ろはもう檻なので、後方の心配はする必要がない。おそらく、リクも同じ事を考えて部屋の隅に陣取ったのだろう。

ジェシカは、改めて槍を構え直した。

「さあ、どこからでも来るがいい。この槍は、一切れの紙さえも斬れない。斬れないだけに、刺し貫けないものの存在は許されない」

ジェシカの槍は刃がなく、針を大きくしたような、完全に刺す為だけのスピアである。斬る事ができる槍もあるが、それだとその分、

刺し貫く能力は落ちる。

彼女は、そんなスピアの使い手として、斬れるものは無いが、貫けないものも無い自分の槍に誇りを持っていた。その誇りを顕示するかのように、魔力を込めた槍に湯気のごとく魔力が漏れて立ち上っている。

そんなジェシカの迫力に気圧されたのか、クリーチャー達は、呼吸を伺うように身を低くして、黒地に赤い瞳の、気持ちの悪い目でジェシカを見遣る。

そして、何の合図も無かったにも関わらず、六体全部が、同時にジェシカに向かって突進してきた。

「我が足に宿れ《飛躍》の力！」

ジェシカは、落ち着いて詠唱をすると、真上に向かって飛び上がる。その下では六体の《甲殻に護られし者》が壁に突っ込み、部屋を振動させた。

それを見届けた彼女は更に唱えた。

「この場に在るもの縛るは《更なる重力》！」

ジェシカの真下、そこにいた《甲殻に護られし者》の足元に黒い円が描かれ、その円の上だけに付加された重力が、空中にいる彼女の落下速度を大幅に上げ、目標である一体を拘束する。

そして彼女は大きく槍を振りかぶり、着地しながら目標の脳天から槍を突き刺した。

「“墜星突”っ！」

果たして槍は、かなりの抵抗を感じながらも、その槍先が《甲殻

に護られし者』の堅い頭皮を破り、その身を飲み込ませていく。
スピアの半分くらいが、クリーチャーの体内に埋まったところで、
ジェシカは槍を捻りながら抜き、同時に残った五体の反撃を防ぐ為
に、その場を飛び退いた。

「……これをあと五回やらなければならぬのか……」と、ジェシ
カは槍を握った両手に痺れを感じながら漏らした。

「あらら、兄さんだけじゃなくジェシカさんまでやりやしたか……
じゃ、俺もやらないわけにはいきやせんね」

《シッカーリド》を駆り、迫りくるクリーチャーの群れを適当に
あしらっていたコーダは、一人ごちて口元に笑みを浮かべた。

彼は《シッカーリド》の右手、もとい右ハサミで《甲殻に護られ
し者》の一体を捕まえると、彼の目の高さを持ち上げた。残った六
体は、左ハサミで牽制する。

捕まえられた《甲殻に護られし者》は、可能な限り身体を動かして
脱出を試みるが、《シッカーリド》のハサミはがちり食い込んで
おり、それを許さない。

「《シッカーリド》の力は、俺が自由に操れるんすよ。さて、君の
甲殻で《シッカーリド》の力に、どれだけ耐えられやaskaね？」

そう言つて、コーダは《シッカーリド》のハサミに力を加えてい
く。

始めは見た目に変化はなかったものの、自分を挟む力が、万力の
ように確実に強まっていくハサミに、《甲殻に護られし者》の自慢
の甲殻も、みしみしという音を立てはじめ、ついにはひびが入って

しまった。

そうになると、もう耐えられずそのクリーチャーは、一気にそのハサミの力に真っ二つに分断されてしまった。

目の前で分断され、まき散らされた、血と思われる濃緑色の体液を見て、コーダは思わず眉をしかめた。

「……我ながら残酷なマネをしてしまいやしたね」

「ああっ、コーダまでやりよったあっ!?　じゃ、まだ倒せてないの俺だけ!？」

焦燥を露にした叫びを上げたのはカーエスだ。彼は四体の《甲殻に護られし者》を相手に相変わらず試行錯誤を続けていた。

「リクは口から炎やろ、ジェシカは脳天から串刺しやろ、コーダは力づくやろ、ああっ!?!　あと残つとるの何やね〜ん!?!」

個性を追及するカーエスは、他人の真似はあまりしたがらない。

槍を使っているジェシカや、召喚獣を駆るコーダの真似は出来そうにないが、それでもリクの真似さえすれば、既に一、二体は片付けていてもおかしくなかった。が、カーエスにはどうしてもそれは出来なかった。

一旦攻撃を止め、カーエスは思考を巡らせる。

「火イはリクが使いよったし、あの大災厄を抜けられるンやったら氷も、水も、普通の光弾もあかんやろ、樹とか土は、ここじゃちいと使いにくいし……」

浮かんでは消えていくアイデア。カーエスは、使える魔法を頭の

中に羅列していく。何しろ彼が覚えた魔法の数は、他の魔導士の比ではない。その魔法の多彩さが、カーエスにどんな状況でも個性を追及させるだけの余裕を持たせていた。そして彼はその魔法を探し当てた。

「風を集めて凝らせし《風玉》よ、触れし者全てを吹き飛ばせ！」

詠唱とともに掲げた手に、強風を凝縮した球体が現れた。カーエスはそれを《甲殻に護られし者》の内の一体に投げ付け、これを吹き飛ばす。

カーエスは、素早くそれを二度くり返し、一体を残して全てを部屋の端まで飛ばし、距離をおく。

「さあて、邪魔モンもおらんようになったし、ワレからいてもうたるかいつ！」と、カーエスは、威勢良く言い放ち、《甲殻に護られし者》に猛然と走りよった。

《甲殻に護られし者》は、向かってくるカーエスに、これ幸いと打撃を放つが、この程度は最初から予想しているので避けるのはわけない。

そしてカーエスが、《甲殻に護られし者》の懐に潜り込むのにも、その一回の空振りによる隙だけで十分だった。

懐に潜り込んだカーエスは詠唱を開始する。

「腸よ、踊り狂え！ 悲鳴を誘う《身中の響曲》の旋律に合わせて
はらわた しんちゆう きやうきよく
！」

そして、腹に掌を当てる。途端《甲殻に護られし者》の目が見開かれ、身体が「く」の字に折れ曲がった。

カーエスは、《甲殻に護られし者》から飛び退くと、にやりと笑

った。

「キッツい音波で体内をかき回したったんや、利くもんやる?」

《甲殻に護られし者》は、のたうちまわり、濃緑色の血が混じった汚物を吐き散らす。それを見たカーエスは、露骨に嫌そうに顔を歪めた。

「……一発じゃ足らんか。ま、レベル3の魔法やし……遠慮すんな、もう一、二発もるといたれやっ!」

カーエスは、もう一度懐に飛び込み、《身中の響曲》を唱えると、今度は左右の手を交互に腹に当てる。

すると、今度は断末魔の雄叫びをあげると共に、大量の血を吐き出して絶命した。

懐にいたカーエスは、その血をもろに引っ被る。

「……………汚っ」

「へえ、なかなかやるじゃないか、あの堅い甲殻をどう攻略するのかと思ってみれば」

立体映像でモニターされた、リク達の闘いの様子を、テイタは興味深げに見つめている。また、彼らが見付けた《甲殻に護られし者》の攻略法を、胸ポケットに収めていた手帳にメモしている。

その横で、嬉しそうにモニターを見つめていたミルドが怪訝な顔をした。そしておずおずと言った。

「……そんな重大な不安を抱えておいて、彼らを戦場に？」

かなりの小声だったのにも関わらず、しっかりと聞き咎めたのか、ティタはモニターから目を放さずに、ミルドの脇腹に肘を突き入れる。

「お黙り。あたしは魔導士じゃないんだから、攻略法を思い付かなくて当然なんだよ」

「だ、だからって肘打ちしなくてもいいんじゃないかな……？」と、打たれた脇腹を抑え、苦悶に歪もうとする表情を、何とか抑えてミルドは言った。

「しかし残念ですな」

突然、例の男が口を開いた。彼に張り付いた笑顔はそのままだが、薄暗い部屋に投影された、立体映像の光を受けて、その表情は一層不気味に見える。

振り返ったところに、そのような顔があった所為か、ミルドは一瞬戸惑いを見せてから聞き返した。

「何がですか、Dr.ダクレー？」

「いえ、このままだと“滅びの魔力”の出番がなさそうだと思いますね……」

どうやら、このダクレーと呼ばれた研究者の目には、“滅びの魔力”しか映らないらしい。発動すれば他の人間がどうなるのかと言う事を、分かりきってのこの言動に、ティタも呆れと蔑みの色を隠

さない。

そんな妻の雰囲気を感じたミルドは、ティタが口を開くより先に慌てて発言した。

「そ、そう言えば、何でリク君は、ファイリーをあそこに連れて入ったんでしょうね？ “滅びの魔力” は確かに強力だけれど、周りに人がいる状況では使えないというのに」

「おそらくは“保険” のつもりなのでしょうな」と、ダクレーは即答した。そして、少し間を開けて解説する。「もし自分達がやられても、最低限確実にあのクリーチャー達を始末できる、という“保険” でしょう。全員がやられた状況なら、“滅びの魔力” を発動させても何の問題もない」

またしても無遠慮な言葉に、ティタはキツと、ダクレーを睨み付けた。しかし怒鳴る事はしない。今口を開いたが最後、考えうる限りの辛辣な言葉が、決壊したダムの水のように溢れ出てくるだろう。ミルドも、さすがに閉口しているようだ。

ティタは、立体画像の中のリクを見て思った。

（何とか見せてやってくれないかい？ この腹の立つジジイが間違ってるって事をさ）

ファイラレスは、リクの背中に護られながら、全員の闘いをずっと見守っていた。

はじめは、クリーチャー達の甲殻の堅さに戸惑っていたようだった

だが、リクを皮切りにジェシカが、コーダが、そしてカーエスが各々の技量を発揮して次々と仕留めた。

彼らの強さに改めて感嘆し、そして自らの弱さを痛感した。

ファトルエルで大災厄に遭った時もそうだった。自分は傍にいないから、何一つ彼らの役に立っていない。

あの大災厄の核であったグランクリーチャー《ゲインニール》は、確かに自分の“滅びの魔力”がなければ倒す事は出来なかった。

しかし並外れた魔導制御力を持って“滅びの魔力”を《ゲインニール》に導いたのはリクだ。自分は魔力を貸したに過ぎない。もし自分で制御していたら、どうなっていたことが。

「ファイリー、前だっ！」

そのリクの声は、考え事に没頭していたファイラレスの意識を現実に戻した。また、彼女の正面に迫っている《甲殻に護られし者》の存在を気付かせもした。

魔導学校で技術の訓練も受けていたファイラレスは、さつとクリーチャーの突進をかわし、クリーチャーは、彼女が背にしていた壁に激突した。

振り向いたところでリクが割って入り、間髪入れずに《甲殻に護られし者》の口に《ルーフレイオン》を突っ込んだ。このクリーチャーが事態を理解するより早く、リクは《ルーフレイオン》の火力を発動させ、《甲殻に護られし者》を体内から焼き尽くす。

「危ないところだったな、怪我はねーか？」と、リクはファイラレスに声を掛けた。彼女はこくこくと頷いた。

ああ、まただ。

フィラレスは思った。こんなに足を引つ張るくらいなら、ミルド達と部屋の外で待っていたほうがよかったのかもしれない。

自分が、これ以上無いくらいに情けない。

「……あと十体つてところか。そろそろだな」と、彼らを狙っていた三体の内、最後の一体を《ルーフレイオン》の炎で牽制していたリクは、全体を見回して呟いた。

「よしフィリー、出番だ」

リクの呼び掛けに、うつむいていたフィラレスが顔を上げた。

不思議そうな顔をするフィラレスに、リクはにやつと笑って言った。

「毎朝練習してたんだろ？ “滅びの魔力”の制御。俺が知らねーとでも思ってたのか？」

知っているとは思わなかった。

リクの言う通り、フィラレスは、ファトルエルを出てから毎日、“滅びの魔力”を発動させ、それを制御する練習をしていた。

きっかけはリクである。彼は、フィラレスが貸して初めて持った“滅びの魔力”を見事に制御し、導いてみせた。“滅びの魔力”は絶対に制御できないものなのだと思っていた彼女は、少なからぬ衝撃を受けたものである。

特訓は、ファトルエルを出発した翌朝から始まった。

夜暗い内から起きだし、リク達の寝ているキャンプからこれでもかというほど離れた場所を選んだ。

訓練を始めるに当たって、取り返しの付かないことになるのではと恐れていたのだが、始めなければ何も変わらない、と自分を説得して、半ば強行する形で始めた。

初日は砂漠だったのがよかった。誰もおらず、何も無い。それは魔導に神経を集中するのに、もってこいの条件だった。特に“滅びの魔力”は意識したところに魔力が飛んでいく性質をもっているで、それでも油断がならないほどなのだから。

そのよい条件が身を結んだのか、フィラレスは初日にして“滅びの魔力”を発動させ、収めるに成功した。それでも日がのぼりきって、皆を心配させるくらい、時間が掛かってしまったのだが。

二日目からは砂漠も抜け、いろいろ精神集中を妨げるものもあったが、一度成功した実績がもたらした実績は大きく、彼女に自信を与えていた。

今では、“滅びの魔力”を完全には制御することは出来ないものの、発動させることと、収めることは素早く出来るようになっていた。

だがさすがに人のいるところで“滅びの魔力”を収める自信はない。

そんなフィラレスの不安を察したかのように、リクは言った。

「大丈夫だよ。俺も、あいつらも、お前の“滅びの魔力”を避けられないほど鈍くないし、当たっても、そう簡単に死ぬほどヤワじゃない。怪我の一つや二つはするだろうが、それでもお前の責任じゃない。そいつの修行が足りねーんだ」

リクの言葉は、フィラレスの不安を拭うことは出来なかったものの、納得はさせていた。

そうだ。

自分は何の為に訓練を重ねたのか。

ここでやらなければいつやるのか。

フィラレスは、紐で首から下げている横笛を取り上げた。

それを見たリクは、嬉しそうに「よし、その意気だ!」と、言った。そして全員の方に向き直って声を掛ける。「おーいっ! フィリーの“滅びの魔力”が発動するぞ、気をつけるよ!」

その呼び掛けに全員が目丸くしてフィラレスとリクを見遣るが、すぐに気を引き締めてそれに備えた。

フィラレスは、それを確認すると、横笛を口に当てた。そして部屋の真ん中に一歩ずつ歩きながら、その笛に息を吹き込む。

その笛の音は、静かに、ゆっくりと始まり、そしてだんだんテンポが早く、力強くなっていった。その音にあわせるように、普段魔封アクセサリーによって封じられていた“滅びの魔力”が、ゆっくりとフィラレスの身体から滲み出て行く。

吹いている間も、フィラレスは部屋の中央に向かって歩き続けた。ゆらゆらとフィラレスを囲む光の帯が尾を引き、彼女の後について行く。

彼女の存在は複雑なもので、始め《甲殻に護られし者》達は、気に止めた様子は見せなかったが、やがて何かの拍子に彼女が目止まると、相手にしていた者の事など忘れたように、ずっとフィラレスから目を放さなくなった。

それに怒りを感じたカーエスが挑発するように魔法をぶつかけたりしているが、全く《甲殻に護られし者》は反応を示さない。

やがて、《甲殻に護られし者》達は、一匹のシマウマを狙うライオン達のように、彼女を取り囲み、示し合わせたがごとく一勢に飛びかかった。

フィラレスは、クリーチャー達の突撃に全く動じない。

だが、最初の攻撃がフィラレスの身を包む光に触れた時、フィラレスは不意に高い音を吹き鳴らした。

それが合図であったかのように、ゆらゆらとフィラレスの周りで踊るだけだった光の帯が一齐に散開した。

フィラレスを中心に、何本も生えた光の帯は、手始めにフィラレスにほど近く迫っていた《甲殻に護られし者》達を、あっさりと飲み込んだ。後には、あれだけの防御力を誇った甲殻の欠片一つですら残らない。

その外側にいたクリチャー達を、手当りしだいに葬り始めた。時には、リクやカーエス達にも襲い掛かったが、彼らはそれなりの心構えも出来ているので難なくそれを避けた。

結局、リク達が手間ひま掛けてやっと一体倒していた《甲殻に護られし者》達十体を、フィラレスは一分も掛けずに全滅させてしまったのである。

しかし、フィラレスにとっては、ここから本番だった。クリチャー達を滅ぼすと、光の帯達は続いてリク達を狙ったが、リク達はそれを避け、時には魔法で防いでいる。

しかし“滅びの魔力”の威力は、たった今《甲殻に護られし者》達の身で証明した通り、一発まともに喰らえば、それで終わりだ。リク達の腕を信用していないわけではない。しかしいくら低いといっても、可能性は無くなるものではない。いつまでも続けば、いつかは必ず光の帯は、彼らを捕らえて滅ぼしてしまうだろう。

大丈夫。練習ではあんなに簡単に出来るようになった。

大丈夫。今は少し難しいけれど、出来ないことはない。

頭の中で、ひたすらそれをくり返した。

フィラレスは、笛の音に集中した。

気を落ち着けて、力強かったテンポを下げ、音を小さくしていく。すると、リク達の光の帯達は攻撃を止め、元のようにフィラレス

の周囲を、ゆらゆらと泳ぎ始めた。そして、その根元であるフィラレスの中に収まっていく。

だんだんと小さくしていった笛の音が、自分でも気付かない内に消えていた。

フィラレスはうつすらと閉じていた目を開けた。

カーエスが感涙にむせびながら、フィラレスに抱きついてくる。ジェシカとコーダは、拍手をしながら歩み寄って来ていた。

そしてリクは、その場に留まっていたが、フィラレスと目が合うと笑ってぐつと親指を突き立ててみせた。

全てが、無事に終わっていた。

「……見事だ！ 素晴らしい！」

フィラレスの所業に絶句するティタ達の中で、誰より早く言葉を発したのはダクレーだった。

その言葉にミルドが頷く。

「うん……凄いですよ」

言葉を全く発さないのは、ティタだ。

彼女の視線の先は、立体映像の中のフィラレスではなく、それを食い入るように見つめるダクレーの姿だ。

フィラレスが“保険”であると言ったダクレーの意見は、彼女の希望通りに覆くつがえされたものの、フィラレスの“滅びの魔力”の発動を見る、という彼の希望は叶えられたわけである。

その希望が叶えられ、嬉々とするダクレーの態度は、どうしても気になった。どうしても気に食わなかった。

彼女には、彼が碌ろくなことを考えているようには見えなかったのである。

07 『権力の行使』

組織内にいる人間はときに他の意思によって動かされる。

上にいる人間の命令でとつもなく嫌な事をやらされる。
上にいる人間の都合で自分の居場所が安易に変えられる。
上にいる人間の感情でやり遂げたい事を止めさせられる。

人はそれが嫌で自分が上になろうとする。

自由になる為に。

自由を勝ち取る為に。

勝ち取った自由を守る為に。

人の自由を踏み付けてでも。

「はっ、はっ、はっ……」

ティタは息を切らせながら、パネルを操作してケージ室の扉を開けた。そのすぐ向こうに、フィラレスを囲むようにして立っているリク達があった。

リクは、ティタに気付くと、嬉しそうに頷いて言った。

「どうだった？ なかなか見物だったろ？」

「いや、正直アンタ達で大丈夫なのかと思ってたけど、なかなかやるじゃないか」

その答えに頷くと、リクはミルドに視線を移した。

「フィラレスのアレはどうだった？」

「見物も何も……驚いたよ……」

彼の、まるで夢でも見ているかのような、驚きに満ちた目はフィラレスから離れない。そして彼は、おもむろに手を持ち上げて拍手をした。

それに従ってテイタやリク達もフィラレスに向けて拍手を送る。

彼女の頬は照れでどンドン紅潮していき、最後にはうつむいてしまった。

暫くするとパン、パン、パンと、ゆっくりとした、そして音のはつきりとした拍手の音が聞こえ始めた。それは祝福を表すリク達の拍手とは全く異質な拍手だった。その主は、言うまでもなくダクレーだ。

その音に祝福の拍手は止み、ダクレーに視線が集まる。

静かになったところで、ダクレーは喜びに、否、悦びよろこびに歪んだその口を開いた。

「素晴らしい……！　素晴らしいぞ、　“滅びの魔力”……！」

そのずれた発言に全員、カーエスでさえも言葉を失い、啞然とした。この男の目には“滅びの魔力”の威力しか写っていないらしい。ダクレーはフィラレスに歩み寄り、その肩に手を乗せようとした。しかし、そこにカーエスが手を伸ばし、その手を掴んでとめる。その時のカーエスの表情には、露骨にダクレーへの軽蔑が表れていた。

「女の口にあんまし気軽に触るもんやないで」

カーエスの言葉に、ダクレーはカーエスに視線を移し、しばらく固まったように動かなかつたが、やがて押し殺した笑いを漏らし始めた。

「くつくつく……、私も嫌われたものだ」

「あなたの性格で好くヤツなんか、おらんやろ」

齒に衣着せぬ物言いのカーエスだったが、ダクレーはそれでも感情を害された様子はない。彼は視線を外してひとしきり、肩を震わせて笑うと、くるりと踵かかとを返した。

「くつくつく……、では嫌われモノは退散するでしょう。ミルド君、データ測定用の意をしておくから、後でフィラレス君を連れて来なさい」

「……わかりました」

ミルドが返事をする、ダクレーは満足そうに頷き、この場を歩み去って行く。

彼の姿が角で見えなくなると、全員が大きく溜息をつく。

「陰険な感じの人ツスねえ……」

「何者なのですか、彼は？」

コーダの率直な感想に続いて、黙ってはいたものの、やはり眉を潜めて様子を見ていたジエシカがミルドに尋ねる。

それが引き金だったように、ティタもミルドに視線を送る。

「そう言えば私も知らないね」

「……さっき紹介をし損ねていたね。彼はダクレー＝バルド。今

度“滅びの魔力”の研究チーム主任になる人だよ」

ミルドの答えに、ティタが目を丸くした。

「研究チーム主任って、アンタじゃなかったっけ？」

「魔導制御の研究班の主任はそのまま僕なんだけど、“滅びの魔力”研究に関しては……僕は降ろされたんだ」と、さすがに言いにくそうにミルドは答える。そして付け加えた。「研究者の人事なんて、スポンサーの利害で決定されるものなのさ」

そのミルドの発言にティタは目を丸くした。

「珍しいね。あんたが毒づくなんて」

結局、ひとしきり話した後、ミルドとフィラレスは、ミルドの研究室に赴く事おもむになった。

カーエスは最後までそれに反対していたが、ミルドもついている事もあって、その反対は押し切られた。

「フリーっ！ 後で絶対ジツトの店行こなっつ！」

既に相当距離が離れているにも関わらず、未練がましく何度も叫んでくるカーエスの声にフィラレスは律儀に振り返り、あちらにも見えるように大きく頷いてみせていた。

ミルドもそれに付き合い、フィラレスが振り返る為に立ち止まる

度、歩みを止めてそれを待つ。

完全にカーエス達の姿が見えなくなると、フィラレスは感謝の意を込めた眼差しをミルドに向けた。

それを受けたミルドは優しく微笑んだ。

「いいんだよ、急いでるわけじゃないんだし。……しかし、カーエス君って本当にいい友達だよな」

フィラレスはこくこくと何度も頷いて同意した。

本当に彼がいなければどうなっていただろうか、とミルドは思う。フィラレスの事を想うのはカーエスだけではない。マーシアやカルクもそうだし、ミルド自身も、魔導制御研究の一環で、彼女の内にある“滅びの魔力”を研究する際に親しく付き合ってきた。

しかし、彼女と同年代の者はカーエス以外、誰もフィラレスの事を見ようとはしなかった。彼らが見ていたのは彼女ではなく、その中に宿る“滅びの魔力”だけ、その恐ろしさのみだった。

しかしカーエスだけは違った。それどころか、フィラレスに対して明らかに好意をもって接していたのである。

返答をまるで期待できないフィラレスに、懲りずに話し掛け続け、暇さえあればフィラレスの元に馳せ参じ、いつもうつむいていたフィラレスの周りで、愉快的話を聞かせ続けた。

石像に向かって続けるような行為は、ミルドも呆れるほどに延々と続いた。その飽くなき努力は時々実を結び、時にフィラレスは、口元に小さく笑みを浮かべる事もあった。

カーエスはあの通りの賑やかな人柄なので、たった一人でもフィラレスに寂しさを感じさせる事はなかっただろう。もし、義務抜きで彼女に近づく唯一の人間が“滅びの魔力”狙いであったとするならば、彼女は永遠に人間不信に陥っていたかもしれない。

（“滅びの魔力” 狙いの人間、か）

その言葉はミルドにダクレーを連想させた。しかしその事にミルドは全く疑問を感じない。ここ最近、彼の周囲で起こった変化はまるで納得できない事ばかりだったからだ。

その日ミルドは、一人で研究室にこもってデータの整理、見直しを行っていた。いつもならフィラレスと一緒にいてデータをとるのだが、この日、彼女はこの研究室どころか、エンペルファータのどこにもいない。

何とあの名高いファトルエルの大大会に出場しているのだ。

彼女の師匠である“冷炎の魔女”マーシア＝ミスターシャからその旨を聞いた時、我が耳を疑った。しかもマーシアの勧めではなく、飽く迄もフィラレスの意思だと言った時には、今回は少し早めに大災厄が来るのでは、と本気で心配したものだ。

いつもならテイタに呼び掛けられても気が付かず、後でこっぴどくのされる羽目になるくらい集中できるのだが、その日はフィラレスの事が気になって、余り集中できないでいた。

ばた、と机の上に広げたノートを閉じ、ミルドは椅子から立ち上がって伸びをした。身体を伸ばし切ったところでコンコン、とノックの音がした。

「はい」と、返事をしつつ、扉を開けてやると、そこにあった顔を見てミルドはぎょっとした。そこには、魔導研究所所長であるアル

ムスが立っていたからだ。滅多な事でもない限り、いち研究者を所長が訪ねてくるなどあり得ないからだ。

そして、滅多な事の大半が。自分の研究の打ち切りの知らせなのだからなおさらである。

「……今、少し時間はあるかね？」

アルムスの第一声、そして雰囲気を見ると、やはり彼にとって話しにくい内容らしい。

「はあ」と、ミルドは疑惑の晴れない応対でアルムスを部屋の中に入れ、取り敢えず応接用の向かい合った椅子に座らせる。

アルムスは椅子に座ると、葉巻を取り出し、それに火を付けた。それを見たミルドはわずかに顔をしかめた。ミルドは、あまり煙草の匂いが好きではない。しかも煙草の匂いは一度付いたらなかなか取れないのだ。

ミルドは、さり気なく窓を開け、お茶を入れてアルムスに差し出した。

「それで、どのような御用件なのでしょう？」

「ふむ、実は他でもない、君の研究の事なんだが……」と、アルムスはそこで言葉を切り、口から紫煙を吐き出した。そして葉巻を手に持ったまま、アルムスは部屋の中に視線を彷徨さまよわせる。

ミルドは心の中で嘆息たんそくしてから、奥の棚の中にしまっておりある灰皿を取って来て、アルムスの前に置いた。

「お、済まん」と、アルムスは、葉巻の灰を灰皿の中に落とす。

「僕の研究……打ち切りになってしまおうのでしょうか？」

ミルドは、思いきって単刀直入に尋ねてみた。

そして心の中でアルムスの否定の言葉を願いながら答えを待つ。

アルムスは、気を持たせているのか、言葉を選んでいいのか、もう一度葉巻を吸い、煙を吐き出し、灰を落とすまで何も言わない。

「……安心したまえ、それはない」

果たして、その答えはミルドの願いを叶えるものだった。だが、その後続く言葉は、彼の危惧した内容を超えた。

「しかし、君には“滅びの魔力”に関する研究の主任研究者から降りてもらおう」

「え？」

安心したところの虚を突かれたこともあり、ミルドはつい自分のカップを取り落とし、割ってしまっ

「あっ……！ すみません」

彼は慌てて布を持ってくるとこぼれた茶を拭き取り、破片を集めた。その破片は、部屋の隅においてある壺のようなものに入れた。

それは“復元の壺”と呼ばれ、砕けたものをその中に入れると数時間後に元に戻ると言うものだ。うっかり破いてしまった書類などもこの壺で復元できる。

片付けが終わり、ミルドは改めて席についた。

そして少し身を乗り出して尋ねる。

「僕が降ろされるとは、どう言う事でしょうか？」

研究が全く進んでいないのなら別だ。しかし、いつもミルドが研

研究所に提出する研究報告書には新しい記述が加えられ、研究が順調に進んでいる事を示していた。

アルムスはまた葉巻を吸ってから、灰を落とすまでの一連の動作をする。どうやら彼はそうとう答えをじらすタイプの人間らしい。

「……勘違いしないでくれ。君には、まだこの研究に参加してもらおう。それに、君の専門である、魔導制御研究全体の主任は変わらぬ君だ。ただ、“滅びの魔力”の研究に関してのみ、主任の座から降り、新しく来る主任の助手役に就いてもらいたいだけなのだ。今までの研究データを揃えたのも君だし、何よりあの“滅びの魔力”の娘の扱い方もよく心得ているだろう」

フィラレスを猛獣か何かと勘違いしているのではないだろうか、とミルドは密かに歯噛みする。意識の外ではあったが、彼の両拳もいつのまにか固く握りしめられていた。

「新しい主任研究者、というのは誰ですか？」

ミルドは自負している。魔導研究所で“滅びの魔力”を研究する自分は、この分野に関しては誰にも負けない事を。

しかも“滅びの魔力”の研究は、過去の文献が存在せず、今ある“滅びの魔力”のデータ、論理は実物であるフィラレスの協力から、ミルド自身が一から作り上げて来たものなのだ。

だから他では絶対に研究しているわけがなく、あったとしてもミルドが発表した論文を元にしてという事になるので、他の研究者は必然的に全てミルドの二番煎じという事になるはずだ。

「君の知らない男だ。それ以上は聞くな」

「それで僕が納得するとても？」

ミルドは、今までにないほどの迫力を込めた目をアルムスに向ける。

するとアルムスは深く息をついた。

「君は、何か勘違いしているようだな」と、彼は葉巻を灰皿に押し付けながら言った。そして、新しい葉巻に火を付けながら続ける。

「私は、君に主任研究者から降りてくれ、と言っているのではない。降ろす事になった、と言っているのだ。君に理解は求めている。得心してくれなくても、降ろす事に変わりはないのでな。今日は、これを知らせる為にここに赴いたのだよ」

がたつ、とミルドは思わず立ち上がってしまった。その顔には理不尽に対する怒り、興奮が露あらわになっている。

アルムスは平然とした顔でそれを見上げていた。

「確かに、魔導研究所は僕のスポンサーです。しかし、有無を言わず落ち度のない研究者を降ろせる権利はないはずだ！」

アルムスは葉巻を吸って、煙を吐きながら静かに答えた。

「君は、また勘違いをしているな。私は権利を行使しているのではない。権力を行使しているのだ。協力してもらえないのなら、資金を引き上げるだけの事。ついでに言っておくが、粹まことがって反抗するのもよした方がいい。君は、独りではないのだからね」

アルムスの含みのある物言いに、ミルドが真つ先に思い付いたのがテイタの事だった。彼女の“大いなる魔法”に関する研究も、魔導研究所から資金を受けて行われているはずだ。

こっちが反対すれば、あっちにも反動が行くわけだ。

「……何故、いきなりこんな横暴な真似を始めたのですか？」

ミルドが知っている限り、アルムスと言う人物は、カリスマ性の溢れる^{あふ}各国の王や、“自由都市”フォートアリンソンの市長であるルナイトなどと並ぶと、地味なイメージの人物であるが、少なくとも民衆に反感を買いような行動はしない男だった。

言い方を変えると、慕われる訳でもないが、憎まれる訳でもないという事だ。その点、堅実とは言える。

「私だつてこんな真似はしたくない。しかし、これはエンペルファータの存亡に関わる話、緊急の措置というものなのだ」

「エンペルファータの存亡……？ どういう事ですか？」

「今は話すべき時ではない。時期が来たら、新任の主任研究者のほうから教えてくれる」

その次の日から“滅びの魔力”の研究主任は、ダクレー＝バルドに変わり、とりあえず今日までは一緒にデータの整理をしていた。ダクレーとも結構会話したが、未だ自分の境遇をここまで変えた事情は影さえ浮かんでいない。

ミルドは大きく溜め息をついた。

「エンペルファータの存亡か……」

彼の独り言に、隣を歩いていたフィラレスが反応し、頭一つ分背の高いミルドの顔を見上げる。心配そうな彼女の目と合って、彼は

微笑んでみせた。

「何でもないよ、フィリー。君も疲れているだろうし、今日はちょっと魔力の測定をするだけだから頑張ろうね」

フィラレスはこくりと頷いた。

こんな彼女を見ると、いつも頭を撫なでてやりたくなるような衝動に駆られる。しかし彼女は十七歳、そんな子供扱いはされて欲しいわけではない。

彼女がここに帰ってきたことで、今日からダクレーを中心とする研究が、本格的に始動する。おそらくある程度研究が進んだところで、ダクレーはミルドに真相を話すつもりなのだろう。

着実に物事は進み始めている。

しかし、ミルドはある事をほとんど確信していた。

彼らの企み秘めている事は、人として良からぬ事であろうことを。そしてフィラレスに何らかの苦しみを強いるものであるうことを。

08 『もう二度と夢を潰えさせない』

諦めた時、そして命の灯火が消えた時。
それが夢の潰える時。

死んでしまった時には、次はない。
諦めた時は、別の夢に生きられる。

追い掛けるだけが夢ではない。
見るだけでいい夢もある。

しかし、それでは納得出来ない者がいる。
それが、適わぬ夢だと証明されない限り、
残る僅かな希望に、全てを賭ける者がいる。

「まあ、汚いところだけど、入んなよ」

ティタはそう言って、リク達を自分の研究室に迎え入れた。

その言葉は普通、謙遜けんそんに使われるべきものであり、そう言われると、そんなことはない、などと否定の言葉を返したくなるものなのだが、今回はかりはそうはいかなかった。

“大いなる魔法”という大きな題材の研究に相応しく、決して狭くない研究室の中でいたるところに、いろいろな本、ファイルが積み上げられて、部屋の中で山脈を形作り、床には、びっしりと文字でうめ尽くされた紙が散乱しており、床を隠しているのを通り越し、既に積もり始めている。

そんな中を、数人の研究者らしき人間が、研究室の中を往来して

おり、部屋の隅には、積もった紙に埋まるようにして仮眠を取っている者もいた。

「汚いとは言わねーけど……」

「ホンマに散らかつとるなあ……」

先頭に立っていた、リクとカーエスが、二人揃って呆れ返っている後ろで、ジェシカとコーダも、啞然としている。

正直な一同の反応に、テイタはカラカラと白い歯を見せて笑った。

「あははは、素直な反応だね。これでも、見え見えのお世辞を言うようなら、ここからたたき出しているとき。ちよつと待ってなよ、今イスを発掘するから」

テイタはそう言うと、部屋の一角にある本の山を、他の研究者にも呼び掛けて他の場所に移動させ始めた。そして、その大量の本が全て、そこからどけられると、そこには応接用の長椅子とテーブルが現れた。

「お待たせ。まあ座って座って。今、お茶くらい入れるからさ」

リク達は、研究室の雰囲気、あるいはテイタの雰囲気に戸惑いながら、言う通りに長椅子に腰掛けた。ほどなく、グラスに入った飲み物がリク達の前に出され、テイタは、満足そうに頷いて言った。

「よし、これで準備はOKだね」

それにあわせるように、リクが拳手をして言った。

「本題に入る前に一つだけ、聞いておきたいコトがあるんだけど」

「何だい？」

「あんた、さつきバトレアス、って名乗ったよな？ ファトルエルにいるオキナ「バトレアス、オウナ「バトレアスとは何か関係があるのか？」

それは、彼女が名乗った当初から、ずっと聞きたかったことだった。もちろん、ミルドの方が、オキナ、オウナの肉親なのかもしれないし、ただ単に、たまたま同じ姓を持っていたという可能性もある。

「ああ、親父とおふくろだけど、知ってるのかい？」

「オウナの宿屋に泊まったんだよ。随分世話になった」

得心がいった表情で、リクは言った。

オキナ「バトレアスは、ファトルエルで学者をやっている老人だった。そしてオウナは宿を切り盛りしながら、彼を支えている妻だった。ファトルエルで起きた一連の騒動でオキナは、その一命を落としてしまったのだが、オウナは今でもファトルエルの宿をやっている。

リクは、特にティタの女性としての迫力に、オウナに似通ったものがある、と感じていた。学者としての性格はオキナから、女性の迫力はオウナから受け継がれたものだと考えれば、ティタは間違いなく彼らの子供だった。

（コレが三十年もしたらアレになるのかあ……）と、リクは、オウナの夜中に会ったら失神しかねない顔を思い出しながら、ティタの整った顔立ちを見つめて苦笑した。

「で、親父とおふくろは、元気にやってたのかい？」

テイタの質問に、リクは少し顔を曇らせると、言いにくそうに話し始めた。

「あのな、オキナの事だけど……」

リクは、ゆつくりと言葉を選び、できるだけ丁寧に事情を説明した。

自分の師・ファルガールとオキナの関係。オキナがファトルエル“ラスファクト”を探していたこと、それを見事に見付けられたこと。その成果をファルガールに託したこと。そして、ファルガールと同じものを狙っていた組織に殺されてしまったこと。

全てファルガールから伝えられたことだが、それでもより詳しく、伝えられるように努力した。その熱意が伝わったのか、テイタも終始口を挟まず、真剣に話を聞いてくれた。

「そっか……親父は死んじまったのか……」

「ファルは、『あんなに強い志をもった人間はいなかった』って言うてた。ファルが他人を認めることは滅多にないんだけどな。それから、巻き込んで死なせてしまったことを凄く悔やんでんだ」

リクがそう言い足すと、テイタは、柔らかな微笑みを口元に浮かべ、頷いてみせた。

「分かってる。あんたの師匠が悔やむことなんてないさ。自分の研究が一番信頼できる人間に託せて死んだんだ。研究者としては本望じゃないか」そして力を抜き、長椅子の背もたれに体重を掛けて続けた。「まあ、今度の大災厄騒動で、ファトルエルに現地調査に行かなきゃならないだろうし、その時おふくろに会いに行くことにするよ」

しばらくの間、沈黙が場を支配した。

ティタは、その間に自分の飲み物を一口口にすると、湿っぽい話題はこれまで、とばかりにパアン、と一度拍手を打つ。

「さあて、本題に入るとしようか」と、ティタは脇に抱えていた分厚いファイルをテーブルに広げながら話しはじめる。「今までの証言は普通の客ばかりでさ、みんな決闘場に避難していて、空飛ぶクリーチャーがいた、くらいの証言しか得られてないんだ。あとは誰かが大災厄を倒したって事くらいかな。だからアンタ達の証言には、ちよつと期待してるんだよ。さっきの闘い方からしても、かなり前線で闘ってたんじゃない？」

身を乗り出すように尋ねられたリクは、暫く黙考しほくした後、注意深く切り出した。

「……話してもいいけど、こっちも聞きたいことがある」「情報交換かい？ 別に構わないけど、アタシの研究は日常生活の役には立たないよ。トレージャーハンティングにもね。……で、どんなことが聞きたいんだい？」

先にリクの質問から片付けようとしたのか、ティタは一度開いたファイルを閉じて、楽な姿勢になる。

リクは、もう一度間を取り、深呼吸をすると、意を決したように尋ねた。

「大災厄を、どうやったら滅ぼせるか教えて欲しい」

流石のティタも一瞬動きを止めた。

その様子を見て取ったカーエスが、笑ってリクを指差して言った。

「氣イ狂うとるとしか思われへん発言でし…ぐえっ」

「誰の気が狂っているだど!？」と、ジェシカが、カーエスの首を締めた。流石に魔導騎士団という軍隊にいただけあって、完全に極まっているらしく、カーエスは声も出せずに、ばたばたと手足を動かす。

テイタは、コーダに視線を移した。確認を取りたい意志が彼に伝わったのか、彼は頷いて答えた。

「兄さんは本気スよ。気も狂っていやせんし」

その答えを受けて、彼女はふう、と溜め息じみた息を漏らした。

「……ここにも夢見るヤツがいたんだね……」

「……?」

テイタの妙なつぶやきに、全員が小首を傾げた。

そんな一同の前で、テイタは立ち上がって言った。

「駄目。悪いけど、教えられない」

「……え?」

「アンタらで十七人目さ。“大いなる魔法”の情報を聞きに、アタシを訪ねてきたのは」

テイタは、リク達の方に視線を向けていたが、別のものでも見ているように遠い目をしていた。

そこに、リクが反論する。

「い、いや俺が聞いているのは“大いなる魔法”の在り処じゃなくて、大災厄の滅ぼし方……」

「同じことさ」と、テイタがそれを遮って言った。「大いなる魔法”は大災厄と密接な繋がりがある。結局大災厄を無くすには、“大いなる魔法”を見付けて、どうにかするしかないのさ”
「では何故、話せないのですか？」

絶句しているリクに代わり、ジェシカが尋ねた。

「……もう二度と夢を潰えさせないためさ」

テイタは、最初、自分を訪ねてくる人間に、勿体振らずに全てを話すことにしていた。自分も研究者として、夢を追い掛けている者であるし、“大いなる魔法”のような大きな夢を見ている者を応援してやりたいという気持ちがあったからだ。

しかし、情報を受けて、出かけた誰一人、二度と魔導研究所に帰ってくることはなかった。中には、もっと詳しい情報を持ち帰ってきてやる、という約束をした者もいたが、やはり帰ってこなかった。

「皆いい目をしていたよ。自信をもっててさ、アタシは訪ねられる度に、こいつなら行けるかもしれない、そう思ったのさ。……でも、誰も帰ってこなかった」

決定的だったのが、七人目の男だった。この頃には、テイタもい加減、むやみやたらと情報公開することに疑問を感じていたのだが、魔導研究所出身で、魔導士として非常に優秀であり、そのことをテイタもよく知っていた。この男なら大丈夫かもしれない、そう思って、自分の知っていることを教えてやった。

やはり、テイタから情報を聞き出し、喜んでその場所まで行ったのだが、一年後、その男の両親がテイタを訪ねてきた。何でも、彼の仲間として同行した男が、命からがら逃げ帰ってきて、両親に彼の末路を伝えたのだと言う。

そして、どれだけ息子が惨い死に方をしたのかを聞かせ、それを情報公開したテイタの責任だと言ってなじった。

「その時に、アタシは気がついたのさ。アタシは夢を応援したんじゃない。人の夢を潰えさせていたんだってね」

「でもテイタさんが情報公開しないと、そこには行き着けないんでしょう？ それだったら話さないことも、夢を潰えさせることになるんじゃないスか？」

コーダの反論に、テイタは首を横に振って答えた。

「それは違うよ。大体、アタシに聞かなくても、この部屋にある本を全て読む気力があれば、自分でも調べられる。それに……」

「それに？」

「追い掛けなくても、夢は夢なんだよ」

がた、と音を立てて立ち上がったのは、さっきから黙って話を聞いていたリクだった。

「今の言葉は納得出来ねーな。……追い掛けるからこそ、夢に意味があるんだ。夢は、ただ存在しているだけじゃ、人に強さを与えない」

夢を見る。それを叶えようと努力する。努力しようとする力は、志だ。

それが意志を強くし、前に向かう力を与えるのだ。

コーダも、ジェシカも、カーエスも、そしてリク自身も、ファートルエルの決闘大会を通して、それを学んだ。

「……それは分かる。その夢はアンタを強くしているかもしれない。

でも、“大いなる魔法”の夢は、きつとアンタを殺すよ」

「それは、ただの結果の一つだろ？ 適うかもしれない、“大いなる魔法”が存在する限り、可能性はあるだろう？」

それでもテイタは一步も譲らない。

「あつたとしても、アンタからは、それを感じられないね」

「それを感じさせればいいんだな？」

僅かに、彼女が漏らした言葉の隙を、リクは見逃さなかった。彼らを挟んでいたテーブルをまわり込んで越えると、そこで呆然と立っているテイタに詰め寄った。

「適うかもしれない、あなたにそう思わせればいいんだな？ そうすれば、教えてくれるんだな？」

リクは、その隙をこじ開けるように矢継ぎ早に言葉を繋ぎ、その度に少しずつテイタに詰め寄り、その鼻先に人指し指を突き付ける。テイタは、その展開に戸惑いを感じながら、詰め寄ってくるリクに、少しずつ後ずさっていく。彼女は、しばらく彼の目を見ていた。そして、全てを諦めたかのように手を振ると、呆然と彼に向けていた視線を睨みに変えて、言った。

「ああ、そうだよ。面倒だけど、あなた用に試験を作ってやる。アンタが、その試験の結果でアタシを納得させたら、教えてやるよ」

その答えに満足したように、リクが不敵な笑みを浮かべて言った。

「充分だ。あなたを必ず納得させてみせるよ。……ところでジェシカ」

「何でしょう、リク様？」

「そろそろカーエスを放してやった方がいいんじゃないか？ さつきから全く動かなくなっただみたいなんだが」

ところ変わって、こちらはダクレーの研究室。

ミルドとダクレーは、フィラレスの魔力を測定していた。

ミルドが主任だった頃から、定期的な魔力の測定は欠かしていない。魔力が増大し、今付けている魔封アクセサリーでは耐えられなくなる事も考えられるからだ。

ダクレーは、直接フィラレスに接しようとする事はほとんどなく、時々フィラレスに質問をするくらいで、後はミルドに指示し、彼に任せる形で測定を続けていた。

「そろそろいいかな」

ミルドはそう呟くと、フィラレスにさつきから持たせていた水晶玉を取り上げ、傍の机に置いてあった魔力測定器の丸い窪みに、その水晶玉をはめた。手から漏れた魔力を拾った水晶玉が魔力測定器の中に流れていき、それを測定する方式だ。

魔力測定器に取り付けられた指針がメモリの上を移動していく。ある時点まではミルドは、ただそれを見つめているだけだったが、その内に表情が目に見えて凍り付いていった。

「すごい……どんどん上がっていく……」

指針が止まり、ダクレーが、それに示された数値と、ミルドがまとめたデータのファイルを見比べた。

そして、今にも舌舐めずりしそうな笑みを浮かべる。

「ファトルエル出発前の軽く三十倍……クツクツ、なかなか研究のしがいのある数値だ」

しかしこの魔力の増加に関しては、ミルドはある程度分かっていた。

フィラレスの持つ“滅びの魔力”はどういうわけだが、成長し膨らみ続けている。今、彼女が付けている魔導アクセサリーは、付けた当初、“滅びの魔力”を完全に抑え込み、彼女自身が発動させない限り、外に漏らさなかった。

ところが、今では微弱ながら彼女が“滅びの魔力”を発動していないときでも魔力がもれるようになっていた。

特に“滅びの魔力”が暴走した後は、いつもとは比べ物にならない程跳ね上がるのだが、それでも精々一・五倍くらいまでで、三十倍は明らかに異常を超える変化だ。

魔封アクセサリーの制御から漏れた魔力だけでも三十倍、それを外した状態に換算すると、一体“滅びの魔力”自体はどれだけ大きく強くなったのだろう。

フィラレスに魔封アクセサリーを与えて、かなり時間が経っている。

こうして疑問を抱くまでミルドは忘れかけていた。魔封アクセサリーで抑えていない“滅びの魔力”の脅威を。

ファトルエルの決闘大会は、世界最高峰と言われている。それほどレベルの高い魔導士達が集まる所だ、それらの攻撃に遭うか、何かの拍子に“滅びの魔力”が何度か発動したとしても何ら不思議はない。

しかも、彼女は先ほど自分で“滅びの魔力”を発動させ、収めてみせたばかりだ。今でも信じられないが、彼女の自分の魔力に対する意識は明らかに変化している。

「ファイリー、ファトルエルの大会中に何回滅びの魔力を発動させた？」

一応、聞いてみた。変化の度合いからして、回数は問題ではなかったが、聞かずにはいられない。

ファイラレスは少しの間、首を傾^{かし}げて指折り数えていたが、やがてミルドに向かつて三本の指を立てた手を突き出してみせた。

「三回か……。やっぱり回数は問題じゃないな……」

口の利けないファイラレスに、これ以上詳しい事は聞けない。あとでカーエスにでも聞かなくてはならない。

「ミルド君見てくれ、このデータを！」

ファイラレスと向かい合って座り、思考にふけていたミルドの背後から、ダクレーが一枚の紙を渡して来た。

その紙は、常人には理解し難い記号と数字で埋め尽くされていたが、ミルドは、これが今日の様々な測定の結果であることを読み取った。

「量、質、全ての数値が大会前を軽く凌^{りよ}駕している！ 大会以前の“滅びの魔力”の数値では怪しいものがあつたが、今は何ら問題がない！ 大会さまさまだよ！」

彼が何を喜んでいるのか、ミルドには分からなかった。

大会前の“滅びの魔力”の数値で“どうして”怪しいのか。そして今、より膨らみ、より強くなった魔力となったことで“どんな”問題がなくなっただのか。

少なくともミルドにとって、フィラレスの“滅びの魔力”の強大化はあまり歓迎すべき事ではなかった。どうすれば彼女からこの忌わしい魔力を完全に制御、もしくは消去できるようになるのか。それが彼の専門である魔導制御の、一つの最終的な研究課題だったからだ。

ダクレーの研究が、それを目指すものではない事は明らかだった。

「そろそろ聞かせて頂けませんか？ あなたの研究が一体何を指すものであるのかを」

ミルドはダクレーに向き合って尋ねた。

ダクレーはくっくっ、と嘲るあざわらように笑って言った。

「それは明朝話す。今夜中に今回のデータを含めた最終的な計画書を作るのでね、楽しみにしておきなさい」

そう言って、ダクレーは再びファイルに目を落とす。

少し苛立ちを感じながら、ミルドは奥の部屋に姿を消そうとするダクレーをしばらく見ていたが、ハッと気がついたようにフィラレスに向き直った。

「あ、ごめんごめん。今日のお仕事は終わりだから、フィリーはカイエス君のここに行っていていいよ。約束してるんでしょ？」

フィラレスは、こくりと頷いた。

それを確認すると、ミルドはダクレーの後を追おうとしたが、肘

の辺りに抵抗を感じる。振り返ってみると、フィラレスがミルドの袖を掴んでいた。

「……何？」と、ミルドが聞くとフィラレスはミルドを見つめたまま、くいくいと袖を引つ張った。

「……つまり、僕にも来て欲しいと？」

フィラレスはこくこくと頷く。照れで頬が少し紅潮している。

その仕種はとても愛らしく、気持ちも嬉しかったが、ミルドは一刻も早くダクレーから計画とやらを聞き出さなければならぬ必要性を強く感じていた。

「でも、僕もダクレー主任を手伝わなきゃいけないし……」

ミルドが誘いに応じる事を躊躇ちゅうちゆしていると、ダクレーが、丁度奥の部屋から戻って来て言った。

「クツクツ……。気にするな、行って来たまえ。書類の作成は一人いれば十分できる仕事だしな」

「はあ……しかし……」

「遠慮はいらん。私を手伝うより、我らが姫君の誘いに応じる方が先だろう？ クツク…、違つかね、ミルド君？」

それでも迷いを見せるミルドに、ダクレーは念を押すように言う。それがミルドにはダクレーらしくない発言に聞こえた。つまりダクレーは、むしろミルドがダクレーを手伝う事で明日話す計画とやらがミルドに漏れる事を恐れ、ミルドを遠ざけようとしているのではないか。

もしそうなら手伝ったところで、ミルドには与えても計画が漏れる心配のない仕事しかまわして来ないに違いない。

無論、計画について問い詰めたところで彼は話さないだろう。

(しかし、何故明日までなんだ……?)

それはおそらく、明日になれば自分に計画をばらしても差し障りがない状況に変わるのだろう。その状況変化の内容までは読めない。少し前までは研究所に対して感じる事のなかった不透明さが、今露骨に現れている。それは、はっきり言って不快なものでしかなかった。

「……ではお言葉に甘えさせていただきます」

「あ、待ちたまえ」と、ダクレーは思い出したように、フィラレスと連れ立って研究室を出ようとするミルドを引き留めた。

そして彼が振り向くのを待つて続ける。

「明日は、緑の刻(午前六時頃)には研究室に来ておいてくれ。姫君は普段通り、黄の刻(午前九時頃)でいい」

「承知しました。では失礼します」

そう言って、ミルドは部屋を出た。

扉が閉まった後、ミルドはその場で少し立ち止まり、腰のすぐ傍にある両手を力一杯握りしめた。

(……こんなにイヤな感情を持つのは初めてだな)

ミルドは、自分自身を温厚な方だと思っていた。しかし今は額に青筋を立てているのではないかと思われるほど、憎しみと怒りに心を支配されている。

アルムスやダクレーの不可解な言動も、その負の感情の原因にはなっているのだろうが、ミルドは薄々自分で気が付いている。

本当の苛立ちの原因は、自分が主任を解任された事にあることを。

(僕にだってプライドはあるんだ……、自分の研究を取り上げられて、黙っていられる訳がない)

ふと気が付くと、隣に立っているフィラレスが、頭一つ分低い位置から不安そうにミルドの顔を見上げていた。

「ああ、ごめん。カーエス君達、きつと待ってるね。少し急ごうか」
フィラレスがこくりと頷くのを確認し、ミルドは少し早足で歩き出した。

背後から聞こえるフィラレスの足音に耳を傾けながら、ミルドはその胸中に反芻する。

(ダクレー達が何を考えているのかは分からない。しかし、もしそれがフィリーに危害を加えるようなら、僕は絶対に黙ってはいない。絶対にフィリーは守ってみせる……！)

例えば自分がティタを巻き込み、その上、研究所を去る結果になったとしても。

09 『オワナ・サカの料理大会』

祝いの宴、喜びの園、幸の縁。

響け、歌声と共に。

広がれ、舞と共に。

包み込め、悩みを。

覆い隠せ、悲しみを。

洗い流せ、心の闇を。

祝いの宴、喜びの園、幸の縁。

伝えよ、この幸せを。

唱えよ、この喜びを。

祝杯の酒が星を酔わせるまで。

笑い声が世界中に満ちるまで。

「ど、どないしてくれんねん、ワレエツ!？」

大木がすっぱり入る中央ホールに先ほど気がついたばかりのカ-

エスの声が響いた。

あまりの大声量に彼の回りにいる者達は思わず指で耳を塞ぐ。

「マジで死出しでの道歩いottaんやで!？ あと二、三歩歩いotta
ら確実にあの世の住人やったぞ!？ あっちから昔死んだひーば-

さんがオイデオイデしとるの見えたつちゅーねんっ！」

長口上ながくちようじょうに息が切れたのか、カーエスはしばらく肩で息をする。

一方、カーエスの言葉が終わってからも耳を塞いでいたジェシカは、恐る恐る指を耳から離し、カーエスの怒鳴り声が収まった事を確認すると、カーエスに向き直っていった。

「スマン、手違いだった。許せ」

「誠意が足りいいいんっ！」

再びカーエスが絶叫し、ジェシカは慌てて耳を塞ぐ。

「人ひとり殺し掛けといてたつた三言の……」

続くカーエスの大声は、いつものようにジェシカの槍がカーエスの目の前に突き付けられる事によって中断された。

「殺されかけたくらいでぐだぐだ文句を言うな。貴様も男ならリク様のように、笑って許すくらいの度量を見せたらどうだ」

「いや、俺でも流石さすがに笑えんと思うが」と、リクは口を挟むが、ジェシカはそれを全く意に介さなかったようだ。

苦笑しながら、ちらりと『研究・開発室棟』への廊下を見遣ると、そこから彼らがまっていた少女が現われた。

「よう、ファイリー。もう済んだのか？」

リクが声をかけると、フィラレスがこくりと頷いた。そのリクの言葉を聞いたカーエスが顔を輝かせる。

「ファイリーツ、待つとつたでえ！」

その後ろに控えていたミルドが、リク達と一緒にフィラレスを待っていたテイタの姿に気が付いた。

「やっぱり君も一緒だったか」

「当たり前さ。みんなで騒いで酒かつくらえる機会なんてそうそうないからね。でもアンタこそよく来れたね？ 今夜はあの陰気な男と残業かと思ってたけど」

悪意を隠さないテイタにミルドは苦笑いをする。

「手伝おうかって言ったんだけど、遠慮されちゃってね……」

「よっしゃ、全員揃そろたことやし、そろそろ行こかア！」

空は真っ暗だった。時間でいうと夕方でもまだ日が残っているはずの時間だったが、“孤立する日”である今日だけはいつもの夜より暗い空だ。

自然の光源はたった二つ。時折眩く輝く稲妻の紫電と、雲自体が身体のようなグランクリーチャー《テンプファリオ》の虚空に浮かぶ二つの目。

そのような異常な空の下でも、人はいつものように往来している。時には空の《テンプファリオ》を指差す人間もいるが、基本的にはこの大災厄は無視されていた。

人々が往来する町は明るく輝いている。まるで暗い雲に覆われた

星空の代わりを果たしているかのように。

しかしその明かりとて町の隅々に行き届くわけではない。夜がなのは大通りだけで、それ以外のところ、住居区や大通りから少し外れた横丁などは夜らしい暗さになる。

カーエスに案内される一行が向かっている西方料理店『オワナ・サカ』も、そんな横丁の一角に存在していた。

「へい、まいどあ〜」

古びた感じの入り口を潜ると、店主のものとみられる多少間の抜けた感じのする声がリク達を迎えた。

店の中はあまりきれいでさっぱりしているとは言えない、レストランと言うよりは大衆食堂という雰囲気がある店だ。値段表を見るに、都会にしては安めの設定であるところを見ると、本当に少し収入が少なめの客層を狙った店のようだ。

カーエスは懐かしそうに、にかっと笑って答える。

「お〜、おっちゃん、来たっただ〜」

その声に奥の厨房から店主らしき男が顔を出した。

蔵いつくはあるが、人懐こさに溢れた顔つき、長年着用しているに違いないその調理服と帽子はタレのようなものがあちこちに染み付いている。

外見は汚らしいが、かと言ってそれが不潔と思わせる事はない。むしろ、外見ではなく中身で勝負といった心意気が伺える。

「なんやカーエスやないけ。おんどりゃファトルエルでくたばったんちやうんかい」

「あほっ、俺がくたばるワケあるかいっ！」

「先ほどまさに死にかけていただろうが……」と、カーエスの返答に、隣にいたジェシカがボソリと言った。自分がそうさせていたという事実はもはや念頭には上がって来ない。

「この店、カーエスの行きつけだったのか？」

リクが尋ねると、カーエスは嬉しそうに答えた。

「せやで。このおっちゃん、ジット言うねんけど、俺と同郷でな。ま、同郷ちゅーてもおんなし国なだけで、町とか全然違うんやけど、そら旨い西方料理食わすんや」

カーエスだけではなく、フィラレスもこの常連だ。その関連でミルドも何度かここに来た事はある。

西方とは言ってもエンペルリスではなく、その属国として存在する小さな国『オワナ・サカ』の出身であるので、ほとんど同郷の者に会う事はない。

またオワナ・サカは独特の方言をはじめとする、他では見られない文化をもっているので、オワナ・サカを出た者はすぐにホームシックに掛かり、なかなか自国を出られないのだ。

カーエスも、ここに来たばかりの頃はホームシックに悩んだものだが、その頃偶然にジットと出会い、西方料理を食べられるようになったお陰でホームシックを克服した。

「なるほど、おふくろの味ってやつスね」

ここに着いてから、ますます饒舌じょうせつとなったカーエスの話にコーダが相槌あいつちをうつと、カーエスとジットは揃あはってちゅちゅちゅ、と得意そうに指を振った。

「おふくろの味やありまへんで」

「俺らの故郷ではこういうんや」

そして二人は声を揃えて言った。

「オカンの味！」

「あつははははは！」と、いの一番に笑い出したのはティタだ。「
いーね、いーね。アタシこういう雰囲気大好きだよ」

ティタの素直な感想に、ジットは顔をほころばせた。

「へえ、おーきに。何にしまひよ？」

「酒があればあとは何でもいいよ、アタシはね」

ティタの注文を聞き、ジットは一行の人数を数えた。

「ええと、ちゆうちゆうたこかいな、の七人か」

「人数おるし、料理はテキトーでええと思うよ」と、カーエスは言
つて、みんなを店の中央にある大きな円卓に座らせた。その円卓の
中央は段が付いており、その段はクルクルと回転できるようになっ
ている。

皆を適当に座らせる際、抜け目のないカーエスは、さり気なく
フィラレスの隣にしっかりと自分の席を確保した。

カーエスは一人だけ席に着かず、厨房の方に歩いていく。

それを見たミルドが尋ねた。

「どこに行くんだい、カーエス君？」

するとカーエスはにがごとく笑い、握りこぶしを持ち上げた。

「今日はフィリーの“滅びの魔力”制御できました記念のお祝いや

「からな、俺の手料理食わしたろーか思て」

「おっ、いいな」と、それにのつてきたのはリクだ。彼も立ち上がって言った。「じゃ、俺も何か作るか」

リクに続いて、ジエシカ、コーダも立ち上がる。

「では私もフリーバルの宮廷料理を振る舞うとしましょう」

「じゃ、俺はファトルエル料理ツス！」

がたつ、と次に立ち上がったのは何とフィラレスである。

「……フィラレスもやんの？」

カーエスの呆気にとられたような質問に、フィラレスはこくこく頷いて肯定の意を示す。

「そらマーシア先生もおつたから、フィリーが料理出来ても不思議はないんやけど、今日の主賓しゅひんはフィラレスなんやで？」

諭さとすようにカーエスが言ったが、フィラレスの体勢は変わらない。折角自分が気持ちを込めて、フィラレスに手製の西方料理を振る舞おうとしていたのに、主賓であるフィラレスも料理をつくるのは意義を無くしてしまう。

「ははは、やらせてやんなよ。みんなで賑やかに何か作るなんて楽しくていいじゃないか。いつそオワナ・サカの料理大会フィラレス記念杯つてのはどうだい!？」と、テイタがいかに賑やかなことが大好きそうな事をいう。

「でもなあ」

なおも食い下がる様子を見せるカーエスだったが、彼の耳にその後ろにいたジェシカとコーダが囁きあっているのが聞こえた。

「料理大会になったら困ったことにもなるんスカね」

「おそらくヤツはあまり料理に自信がないのだ。出す予定だった料理も実は前もってこの主人に作ってもらったもので……」

カーエスの目がキラリと輝き、振り向きざまに、びしっ、と二人を指差した。

「工工度胸やな、おんどれらっ！　そこまで言うなら受けて立つたるわいつ！　後で吠え面かいても知らんでエツ！？」

「単純なヤツ……」と、一部始終を見ていたリクが一人ボソリと呟いた。

あれから五人はそれぞれ材料の買い出しにいった。

もともと西方料理の店なのでカーエスは買い出しの必要はないが、自分で選んだ材料を使いたいのか、改めて買い物をするらしい。それにリク達の作る料理は西方料理とは全く違った料理だ。材料も、使う道具も違う。

材料が揃うと、五人は一斉に調理に掛かった。

とかかかかか、と全く音が切れない包丁音はコーダである。彼の料理風景は派手だ。ほとんど曲芸のように鍋を振ったり、食材を空中で切ったりしている。

五人の中で一番料理が上手いと思われるのがこのコーダだ。ファトルエルからここに来るまでの道中も、食事を作っていたのはコーダだった。

特に食事係を決めていたわけではないのだが、いつもいつの間にかコーダが作ってしまっているのだ。しかしこの手際の高さを見れば、ちよつと目を離れた際に食事を作ってしまうのも納得できる。

ジェシカの料理はかなり豪快だ。大きめの鳥のようなものに詰め物をして丸焼きにしている。鳥を火にかけた後は大してすることが無いのか、鳥を調理する前に火にかけたソースを時々味見するだけだ。

いつもは甲冑姿に身を包み、雄々しいとも言えるジェシカだが、今は料理の邪魔になるので甲冑は外し、前掛けをしている。その姿からはジェシカ本来の女性らしさが感じられた。

リクの料理はあまり目立ったところがない。一見普通にシチューを煮込んでいるように見えるが、それを調理する彼の表情には自信が満ち溢れている。勝つ自信でもあるのだろうか。

そしてフィラレスだ。

事前の話し合いで、彼女はデザートを作ることになっていた。買出しして来たものからすると、ケーキを作るらしい。拙い手付きでメレンゲを泡立てたりしているのが何とも微笑ましく感じられる。

しかし、何と云っても一番気合いが入っているのがカーエスだ。買出しの際は素材を厳選、使う包丁は完璧なまでに研ぎすまし、作っている麺料理にいたっては麺を打つことから始める始末だ。それになにより、いつもは着けているメガネを外している。

カーエスは“魔導眼”の保持者である。“魔導眼”とは見えない

もの肉眼で見る力のある目のことだ。即ち、^{すなわ}“魔導眼”の持ち主は相手の魔力の動きを肉眼で確認し、次に使ってくる魔法を予測することや、魔力を真似て動かし、その魔法をコピーする、などということも可能なのである。

ただ、この“魔導眼”は本人の意志に関係なく魔力を消費する、という厄介な性質を持っている。放っておくと魔力を吸い尽くされて、魔力の次は生命力を削り取られ、最終的には死に至ってしまうのだ。

カーエスのいつもかけている眼鏡は、その厄介な性質を能力ごと封印するためのものなのだ。

しかし“魔導眼”が料理の何の役に立つと言うのか。

先ほど“魔導眼”は見えないものが見える目である、と述べた。つまり、“味”も見えるのである。

味が見えると言うことは、紫を、赤に青を混ぜてつくるくらい簡単にイメージ通りの味を出すことができるということだ。

(はーっはっはっはっはっはっはっは！ 勝ちはもろたア〜！)

ただ、勝負に熱くなり過ぎて、当初の目的をすっかり忘れてしまっているようであるが。

調理の間、ティタとミルドはジットの作ったオードブルをつまみながらその様子を見守っている。厨房から追い出されたジットを始めとする料理人達もその席に同席していた。

「ワシの出番無くなってしもたのー」

ジットは机にアゴをつけ、つまらなさそうにつぶやいた。

「まあまあ、いいじゃないさ」と、ティタは酒をぐいっと煽った。既にグラス5、6杯は飲んでいるが、他人から見る第一印象に違わず彼女は酒に強い。

もうひとり、外見に違わないのが全く酒を飲まないミルドだ。生ジューズの入ったグラスを傾けながら、厨房のほうを見つめている。この店は客席から厨房が見えるようになっており、ここから五人それぞれが料理している様子がよく見える。

ティタはそれを見とがめ、頭を掴むと無理矢理自分の方を向かせた。

「アンタ、さつきから隣の美人妻を放つといてどこ見てる!？」

「ああ、ごめんごめん……つい嬉しくってさ」

「可愛いフィリーの料理が食べられることが？」

かなり刺々しい口調でティタが更に詰め寄る。ミルドが長年、実の娘のように面倒を見てきた経緯を彼女も知っていたが、やはり彼の妻としては面白くない。

するとミルドは穏やかに微笑んで言った。

「違うよ。フィリーにあんなにたくさん仲間ができたことがさ。見てごらんよ。あんまり表情には出てないけど凄く楽しそうに料理してる」

そう言って、また厨房に移したミルドの視線の先には、忙しそう

にくるくると厨房を走り回っているフィラレスの姿があった。自分の料理が終わって手が空いたのか、今はみんなの料理を手伝っているようだ。

そもそも引つ込み思案の彼女が、こんなイベントに自ら参加しようと思うなどは、ミルドは夢にも見ていなかった。

あの強大な魔力を持ったばかりに、フィラレスが手に出来なかったものは多い。そしてそのどれもが普通の女の子としての楽しい人生を彩るものばかりだ。

ミルドは、この先もフィラレスはそれらを手に入れることが出来ないのではないかと半ば諦めかけていた。

しかし今日、ファトルエルから帰ってきた彼女を見て少し安心した。

カーエスだけではなく、三人もの新しい仲間が出来ていた。

それだけではない、相変わらずの無表情だが、以前には全く感じられなかった、フィラレスの喜びの感情が体全体から感じられる。

“滅びの魔力”のお陰で手に入れられなかった大切なものをフィラレスはようやく手に入れられたようだ。

「僕らにはまだ子供もいないし、本当に僕は彼女を娘のように思ってるんだ。だから、それが嬉しくて……」

視線をテイタに戻す。彼女も、酒の所為で若干紅潮した頬を緩めて微笑んでいる。そして彼女はウインクしながら言った。

「アンタがそう思ってるなら、あのコはアタシにとっても娘みたいなもんだ」そしてグラスをミルドに突き出しながら言った。「乾杯しよう、アタシたちの娘にさ」

「テイタ……」

10 『幸せな舌』

郷土料理。

それは文化の伝統。

それは事情の落とし子。

それは歴史の語り部。

それは穫れる作物、事情からの必要性から生まれ、

歴史の中で受け継がれつつ姿を変えて今に至るもの。

そして舌を通して異文化より来たりし者にその文化を体感させる。

各々が郷土料理を持ち寄れば

驚きと発見に満ちた、楽しく賑やかな宴となるだろう。

厨房に入ってから一時間後、全員の調理が終わり、一旦丸テーブルについた。料理はまだ食卓の上には持って来ていない。前もって決めた順番で、一人ずつ厨房からこちらに持つてくることになっていたのである。

「さて、あんた達、料理は文句なく旨いのができたんだろうね!？」

いつの間にか、その場を仕切っているティタの威勢のいい声に、全員が頷いて答える。

「勿論自信作だ。ファルに毎日炊事やらされた俺の腕を見せてやる」

「自信だけあつたかてあかんで、リク。俺のはジツト直伝、モノホンの西方料理の技術に裏打ちされた味や。いつちゃん旨いに決まるとる」

「私の料理も魔導騎士団の同僚に振る舞ったことがあるが、その時はシノン様をはじめ、みんな絶賛してくれたものだ」

「俺は敢えて何も言いやせんよ。食べば分かりやス」

それぞれのコメントにテイタはあはは、と声を上げて笑った。

「ようし、その意気だ。一番目、前菜は誰だい!？」

「俺ツス」と、コーダが立ち上がった。そして厨房の中に姿を消す。

間もなくコーダは一台のワゴンに載せた料理を運んできた。

それをテーブルの横につけると、ひとり一人の目の前に置いていく。

彼らは目の前に置かれた料理に目を丸くし、覗き込むようにしてその料理を見つめた。

「……これ氷か？」

リクが料理を指差してコーダに聞く。

そう、それは氷を削ったものに黄色い液体がかけられ、その中に細かく刻んだ野菜がところどころに見られた。

「そうスよ。普通なら水から作った氷に、果汁か砂糖水をかけるみたいスけど、これはスープから凍らせたものを削ったんス。まあ召し上がりやんせ」

コーダの勧めの言葉に応じて、リク達はそれぞれ添えられたスプーンを使って一口ずつ口に含んだ。

前菜らしく、あっさりとした味に冷たい食感、何のスープかと問われると答えが出て来ないが、程々に旨味が出ている。

「お、冷たくて旨いな」

「初めて食べる味だね、でもコレが砂漠料理なのかい？ 氷料理なんて意外だね」

ティタの質問にコーダは口を綻ばせた。この質問を期待していたらしく、嬉々とした様子で答える。

「砂漠の街、特にファトルエルはあの通り、砂漠のと真ん中にあるでしょう？ だから運送が難しい氷は、宝石より貴重なんスよ。それで大切に、よりよい形で食べようってんで、ファトルエルじゃ氷料理が一番高級で発達している料理なんス」

「なるほど、そういう形で発達する料理もあるんだ」と、ミルドが感心した様子でコメントする。

「しかしスープの味も未知だ。一体なんのスープなんだ？」

このジェシカの質問に、コーダは苦笑して答えた。

「知らない方がいいスよ」

「なんじゃい、勿体振りよってからに。ケチケチせんと教えられや」と、不満そうに声を漏らしたのはジットである。一口ずつ食べることにメモ帳に何かを書き込んでいる。参考にして料理に取り入れようというのだろう。

「知ってどうなっても責任取りやせんよ？」

「ええからはよ教えられ」

コーダはしようがない、という風に溜め息をつく。厨房に戻り、“それ”を持ってきた。最初は遠くて分からなかったが“それ”がなにか分かった時点で皆が凍り付く。

それは蜘蛛くもだった。しかもコーダの手の平に収まり切らないくらい大きな蜘蛛だ。しかもそれは余ったお陰で命拾いしたのか、まだ黒く細かい毛に覆われた足をもぞもぞと動かしていた。

「アラシグモ」って言って、砂漠でこれを見かけると砂嵐に遭あう確率が高いっていうんで、この名がついたんす。大きい上に身が美味いので砂漠じゃ大切なタンパク源の一つなんす」

「じゃ、もしかしてこの細かい肉……」

「ええ、この蜘蛛の肉でyasけど？」

その時点で、口にそれを入れていた者はそれを嘔き出しかけ、口にしていないものは、次の一口を迷っている。

淡々と食べ続けているのはリクとフィラレスだけだった。

その様子を見て、コーダは不満そうに溜め息を付いた。

「……だから知らない方がいいって言ったのに……」

最後は食べる気が失せたとはいえ、あっさりとしたコーダの料理は次への料理の食欲を掻かき立て、前菜としての役目はしっかりと果たしていた。

腹を空かせた皆に急かされ、二番目に出てきたのはカーエスの料理である。

「ほった落ちても知らんでえ〜」

そう言ってカーエスが押してきたワゴンに乗っているのは、大皿に盛った麺料理だった。

彼は鼻歌まじりで、大皿をテーブルの真ん中におくと、ひとり分ずつ中皿に取り分けていく。

見た目は冷製パスタだが、麺が幾分太めだ。それにからめられた具は鮮度の良さそうな海の幸がほとんどである。その上では細かく刻んだ海苔が彩りを添えていた。

先ほど“魔導眼”を使って“味見”もした。いい色が出ており、先程のコーダの料理と比べても、こちらの方が格段に旨いはずだ。

「これには下手物ゲテモノは入っていないだろうな？」

ジェシカが不安そうに料理を覗き込んで尋ねた。知らない料理には何が入っているのか分からないと先ほど知らしめられたからだろう。

「んなモン入つとるかいつ！ コーダのとは食いモンあらへんから蜘蛛でも食べなしゃーなかったかもしれんけど、オワナ・サカは食いモン豊富やし」

「例えば？」

「オワナ・サカは島国で海産物が豊富でな、陸じゃ小麦がようさんとれるよって麺が主食なんや。だから海産物を絡めた麺っていうのがオワナ・サカの典型的な料理なんやな。まあ食ってみ」

そのカーエスの声と共に全員がフォークを取り、麺を食べ始めた。海を連想させるような自然な塩味、麺はつるつる、と喉越のどしがよく、食道を通して、身体に清涼感を与えながら腹に収まっていくのが感じられる。

具も基本的に塩味だったが、幾分質が違い、麺の塩味にアクセシ

トを与え、様々な食感が食べる者の舌を楽しませてくれた。

「お、いい塩加減で旨いな」

「この喉越しがたまらないッスねえ」

リクとコーダの感想を聞いたカーエスが、嬉しそうに料理の師であるジットに向けられる。

ジットはその視線に気付くと、わざと目を反らして言う。

「ふん、まあ不味くはあらへんわい。ただまだ麵のコシが足らへんな。具も火の通し方がまだまだ甘いで」

素直に誉められないことからくるひねくれであろう後半部分は、カーエスにはほとんど聞こえていない様子で、彼の表情が更に綻ぶ。そこにジェシカの罵声ばせいが飛んだ。

「貴様、一体この中に何を入れたっ!?!」

「……………え?」

「とぼけるなっ! コレだコレっっ!」

そう言っつて、ジェシカが呆気にとられているカーエスの前に突き出したフォークの先についていたのは、弾力のありそうな円柱形で側面は赤いもの、いわゆる……………

「……………ただのタコ……………やな?」

「やはりか!?! 貴様、私にタコを食わせたと言うのか!?!」

あまりの剣幕にカーエスも怒鳴り返すより困惑している。そんな雰囲気の中で、おずおずとミルドがジェシカに尋ねた。

「要するに、タコが嫌いなんだ……？」

そのミルドにジェシカは振り向くと、キツとミルドを睨み付けた。鋭い視線を向けられたミルドはビクツと怯む。

「ミルド殿、私を見損なわないで頂きたい。私は幼少の頃から好き嫌いのないように両親に厳しくしつけられ、そのしつけは今も私の中に生きております。私ならばどぶねずみさえも美味しく食べてみせますとも」

「う、ごめんなさい……」

「さつきは蜘蛛と聞いて食べるのを躊躇してたくせに……」

「それにどぶねずみまで美味しく食うのは、そこはかとなく間違つとるよーな気が……」

コーダとカーエスの静かな突っ込みを差し置いて、リクが尋ねた。

「じゃ、何でタコが食えないんだ？」

リクに訪ねられた途端、ジェシカは今までの剣幕を引つ込めて話し始めた。

「私の国、カンファータではタコを食べる習慣がないからです。タコにはしっかりとした骨がなく、これを食べていると骨のある人間にはなれず、また、船に足を絡めて沈めてしまう海の悪魔だと信じられています」

「うーん、いろんな文化事情もあるモンなんだなあ……」

事情を聞いたリクは、腕を組んで唸った。しばらく考えた後、リクは続けて言った。

「でもここはもうエンペルリースでもある。郷に入らば郷に従えっ
てという言葉もあるし、いつペン食ってみたら？」

リクの提案に、ジェシカはタコをしばらく眺めていた。自分の倫
理観と、リクに対する尊敬の念が葛藤を引き起こしているのだろう。
やがて決心をしたように顔を挙げて言った。

「……リク様がそう仰られるのなら」

そういつてジェシカは、他の皆が注目する中、端に避けていたタ
コをフォークで刺し、口に運ぶ。そして、口の前で一瞬躊躇してか
ら、思いきってそれを口の中に放り込んだ。

始めはそれこそ苦虫を噛み潰すように緊張した面持ちだったが、
たった一噛みで、そうした緊張は完全に解けたようだ。
その表情を見て取ったカーエスが胸を張って言った。

「どーや、うまいやろ。思い知ったか」

その一言で、せつかく緩みかけたジェシカの表情が固まる。

「ああ、旨かった。しかし貴様に言われると癢だっ！」

そう言っつて、皿の横にあったナイフでカーエスの鼻の頭を刺す。

「ぎゃあああっつ！ 何すんねん、このひねくれ魔導騎士！」

「なんだと貴様、もう一度言ってみろ！」

その様子を呆然と見ていたリクは溜め息を付いた。その横では、
コーダが微笑ましげに二人の喧嘩を見守っている。

「今回は喧嘩を防げたと思ったのになあ……」

「きつとああしてないと、落ち着かないんすよ。あの二人の場合」

一騒動あつた後、場は一応落ち着きを見た。

どのように落ち着いたかに関しては、カーエスがぼろぼろになり、他の全員が肩で息をしているところから推し量ることができる。

「はあ、一騒ぎしたらまた腹が減っちゃまったね、次は誰だい？」

「あ、俺だ」

そう言つて立ち上がったのはリクだった。すっかり忘れていたらしく、焦つたような表情を浮かべて小走りに厨房に入っていく。

間もなく、リクはワゴンに乗せた料理を運んできた。

その料理の形態に皆が目を丸くした。

一見、深底の器の縁ギリギリに半円形のものが乗っているように見える。が、もう少しよく見てみると、それは蓋のように器に覆い被さっているのが分かった。

「あら？ リク、お前シチュー作つてへんかった？」

不思議そうに尋ねるカーエスに、リクはにやつと笑つて言った。

「スプーンでそれつついてみ」

カーエスは眉を潜めたまま、リクの言う通りにスプーンを持ち上げて、その小麦色の半球体を軽く突いてみた。するとそれは簡単に

割れてしまい、スプーンはさくつと中に入り込んでしまった。中は空洞のようだ。

スプーンをどけて、中を覗いてみると、そこには美味しそうな香りを含んだ湯気を放つクリームシチューが入っている。

「へえ、パイのドームの中にシチューが入ってるんやなあ、これは珍しいで」と、カーエスが素直に感心し、皆がカーエスに習ってパイを破る。

「おー、ホントだ。中々旨そうじゃないの」

「面白い造りだねー」

テイタとミルドから歓声が上がる。

同じくパイを破って、中を覗き込んでいたジェシカが尋ねた。

「これはどうやって食べるのですか？」

「ああ、パイは端から割ってくんだ。で、中にあるシチューと一緒にすくって食べる。これだったらパイがふやけないように食べられるだろ？」

この説明を聞き、カーエスも端からパイを割ってシチューをすくった。一応メガネを外し、“魔導眼”で確認をする。

柔らかみのあるオレンジ色。味付けは甘めのようなのだが、この甘さを嫌う人間はあまりいないはずだ。大人から子供までが喜んで食べるだろう。

食べてみると、予想通りの味だ。パイに薄く付けられた塩味が次の一口をそそる。野菜も適度に火を通されていた。ファルガールに毎日炊事をやらされた腕というものはまゆつば物ではないらしい。

(こ、これはなかなか……)

味のタイプが全く違うが、自作のパスタと甲乙つけ難い味に、カーエスは内心思わずたじろいだ。

「で、これはどこの料理なんスか？」

パイを割りながら、コーダはそう尋ねた。

それにリクが心外そうに答える。

「おいおい、皆が作ったたのはそれぞれの故郷の料理だろ？俺も自分の故郷の料理を作ったんだよ。祝いの時に必ず作る料理で、村からしたら贅沢な材料を使ってるんだ」

「だから、その故郷がどこなのか聞いてるんスよ」

みんなに水を注いでやっていたリクの手が止まった。

そして、しばらく宙に視線を移して考えた後、自分でも驚いたように答えた。

「……そっついや知らねーな」

「え？」

聞き返すコーダに、リクは水を注ぐのを再開して答えた。

「十年前、大災厄に襲われた後、すぐファルと旅立って、あとはファルについていくだけだったからな。旅立つ前は俺にとっちゃ村が全世界だったし、どこをどう歩いたかなんていちいち憶えちゃいねーし」

「それで寂しゅうなかったんか？」

そう聞いたカーエスの脳裏には、自分がホームシックに悩んだ日

々を思い出されていた。

「いや、別に……帰れば寂しくもなっただろうけど、俺の場合帰る故郷は消えちまったからなあ。それに旅に出てからはずっと魔法の修行の日々だったし、ファルにはからかわれっぱなしで故郷を思い出すヒマはなかったな」

あっけらかんと答えるリクだったが、聞いた方はしーんと静まり返ってしまった。なかでも質問をしたコーダは、バツが悪そうに俯うつむいてしまっている。

それに慌てたのはリク自身だった。

「お、おいおいそんなしんみりするなよ、メシが不味くなるだろ。俺はそんなに悲しいことだと思っ
てねーんだからさ」

しかしそれでも場の空気はなかなか盛り上がりがないまま食事が進む。
空になった皿にスプーンを置いたコーダが言った。

「兄さん……」

「ん？」

「このシチュー、旨かったス」

「そっか。ありがとな」

「残り二品か。デザートはフィリーが作ってたんだから、次はジェシカだよな？」

リクがそう言って、ジェシカに視線をやるとジェシカは恭しく立

ち上がり、厨房に歩いて行った。

「はい。今お持ちいたします」

ジェシカの後ろ姿が厨房の奥に消えて行くのをみてコーダが言った。

「ジェシカさん、宮廷料理を作るって言ってたんすよね」

「ああ、どんなのが出て来るんだろうな」

「何言つとんねん。あのヤリ女や、油断してたらエライ目みるで」

間もなく、例によってワゴンに載せられた料理が運ばれて来る。

その皿は銀の半球型のフタに覆われており、彼らからは中身が見えない。

ジェシカはそれをテーブル脇まで持つてくると、フタの取っ手に手をかけた。

「お待たせしました。これが私の料理、ウエシト産ダツカのライス抱き込み焼き、クレーヴィソース掛けでございます」

そして勢いよくフタを取ると、そこには綺麗なキツネ色に焼けた大きな鳥が乗っていた。

その背中には縦に切り込みが入れられ、そこから山菜を混ぜて炊き込まれたらしいライスが見える。

その上からはなんと香しい匂いのソースが掛けられている。

(見た目はええな……見た目は)

カーエスは取り分けられてくる鳥と山菜ライスをそう評する。

そして、かけていた眼鏡のレンズを拭くように見せ掛けて、さり

気なく眼鏡を外す。

(しかし味はどうや……っ!?)

それを見た瞬間、カーエスは仰天した。

極彩色ごくさいしよくである。今まで数々の料理の味を“見て”きたがこんな色は見たことがなかった。

「じゃあ、食わせてもらおうか」

「あ、少し待って下さい、飲み物を持って来なくては」

「飲み物くらい後でいいよ」

香りに食欲をそそられるのか、幾分急かすようにコーダが言った。

「いや、この料理の場合、そうもいかんだ」

「こう見えてめっちゃ辛いっちゃうことか?」

ジットの質問に、ジェシカは意味深長にかぶりを振った。

「いえ、もっと切実な理由からです」

それだけ言うと、料理をもってきたワゴンを押して厨房に入った。

「どう言うことだ?」

リクが隣に座っていたフィラレスの方を向くと、彼女も首を傾かしげてみせた。

「どうせ宮廷料理にありがちな作法の問題とかやる」と、カーエスは構わずスプーンにライスをすくった。

「懲りない男だね、今日死にかけたばっかのクセに」

ティタが呆れたように息を漏らす。

「大丈夫、ちよつとくらいや、バレたりせーへんて」

そう言って、カーエスはすくったライスを口の中に入れてしまった。

しかし、途端に彼の動作が停止した。

「やつぱ辛いんか……いや、飲み物と一緒に食べんと死ぬほど不味いちゅうやつか？」

「あゝあ、あたしは知らないよ」

そんなジツトとティタの言葉にもカーエスは反応しない。押せば返すリアクション豊かなカーエスにしては珍しいことだ。

しかしやつとカーエスが動き出したかと思うと、カーエスは何事もなかったように咀嚼し、ごくりと飲み下す。

「う……」

「うっ？」

カーエスの反応に注目する一同に、カーエスは絶叫した。

「うまあああああああ……！！」

甘いとか辛いとか苦いとかいう話ではない。とにかく旨い。旨いという味だった。まるで、カーエスの好みを知り尽くした人間が、完璧な腕で作り上げたような完璧な旨さ。

これほど旨いものは全く食したことはない。

「やはり食べたか……」

いつの間にか厨房から帰ってきていたジェシカが咳せきいた。

「何なんだ、あの反応は？」

「今、お話しします」

リクの質問に、ジェシカは全員に飲み物を配りながら返事をした。

「では皆さん、食べ方を御説明します。さきほど私は飲み物を持って来るまで料理を食べるな、と言いましたが、まず、それを破った人間がどうなるかを見ましよう」

一同の視線がカーエスに集中する。

先程まで、ジェシカの料理の味に感激し、思わず天井を仰いでいた彼だが、今は天井を仰いでいるというより、焦点が定まらず虚空を見つめているといった感じがする。

さらに感動に打ち震えていたはずの身体だったが、今はどちらかというと痙攣けいれんしているといった方がぴったり来る。

「……ひよっとして毒料理？」

「はい、仰る通りです。ライスの中に含まれた山菜にシアスデスというものが入っております。世界一の美味を誇る草ですが、猛毒でして、料理を口にした後、三十秒以内にこの解毒剤入りの飲み物を飲まねば、あなります」

「呑気に解説してる場合じゃないだろっ!? コーダッ、早くそれを飲ませろっ！」

さすがのリクも慌ててカーエスの隣に座っているコーダに指示し

た。

いつもどこか余裕をもって事に当たるコーダもこの時ばかりは焦り、些か乱暴にカーエスの口に飲み物を流し込んで行く。

唇の端からだらだら流れているが、喉仏が動いているのを見るとしつかりと飲めていることがわかる。

「ああ、バアちゃん……今日はよう会うなあ……え？ ええとこ連れてったるって？」

「駄目だっ！ ついてくなあっ！」と、リクがぺたぺたとカーエスの頬ほおを叩く。しかしカーエスは目を覚まそうとしない。

「叩き方が温ぬるいんだ。あたしにまかせなっ」

そう言つて、ティタはカーエスをひったくるようにして自分の方に寄せると、容赦なく平手打ちの往復ビンタをマシンガンのように放った。ティタのビンタの音が響く。パンパンなんて生易しい擬音語では表現できない音だ。どちらかという也太鼓のような低重音である。

そうこつ言っているうちにカーエスの顔がみるみる腫はれてきた。

「あの、ティタ……？ 気付きのビンタで殴り殺しちゃ駄目なんだよっ」

ミルドが遠慮がちにいうが、もはや彼女には聞こえていない。

しかし一向に目を覚まさない。

流石に疲れたティタにジツトが提案する。

「気付けドリンク持って来よか？」

「何が入ってるんだい？」

「ビジルと、カルをひまし油で……」

「……それホントに効くんスか？」

ちなみにビジルは食べれば本当に口から炎が上がる世界一辛い唐辛子、カルは世界一強い酒だ。

カーエスを取り囲んでわいわい言っていると、フィラレスが指でテイタの方を突いた。

「何だい、あんたもビンタしたいのかい？」

フィラレスはふるふると首を振る。

「きつと自分にまかせてくれって言ってるんじゃないかな？」

ミルドの訳に、フィラレスはこっくり頷く。

テイタはカーエスの横にから退いてスペースを空けてやった。

「ちゅーの一つでもして生き返らせる気かね？」

テイタが腕組して見物していると、倒れているカーエスの身を起こし、その背中に回り込む。そして何かを探るように、カーエスの背中を撫でると、見付けたポイント目掛けて拳を打ち込んだ。

「ぶわっ！？」

途端にカーエスが目を覚まし、自分に注目する一同を見渡した。その中にジェシカの姿を認めると、途端にさっきまで死にかけていたとはとても思えない剣幕で彼女に向かって行った。

「ヤリ女アツ！ おんどりやよくも一服盛ってくれたな！？」

「忠告を聞かなかった貴様の自業自得だと私は思うがな」

冷静な反論にカーエスは思わずたじろく。

「ぐっ……！？ なら何でわざわざ飲みモンを後から持ってくんねん！？ 短気な俺の性分を見越した完全犯罪ちゃうんかい！？」

「……………」
「あつ、目エ反らしよつたな！？ やつぱり凶星か、この泣く子も殺す危険人物が！」

思わぬカーエスの指摘に、ジエシカはほとんど開き直つたように大声を出し始める。

「誰が危険人物だっ！？ 引つ掛かる貴様も貴様だ！ 大体やることなすこと私の気に入らないことばかり、当然の報いだ！」

「やかましい！ 知つたこつちやないわい！ あんまごちやごちや抜かすと今度は深海物のゲテモノ食わずぞコラアツ！」

リクとコーダは、その終わりの見えない口論を端で見ていた。いつもは微笑ましく傍観ほんかんを決め込む二人だったが、さすがに今日入つてからのエスカレート振りに少々呆れた感を拭えない。

「流石に見すごせないレベルになつてきたよなあ……………」

「特にジエシカさんがカーエス君を絞め殺しかけてから随分大きくなりやしたよね。今は憎みあつてゐることはなさそうすけど、あやっつていがみ合つてゐるうちに本当に憎みあつたようになつちやいやよ」

顎に手を当てながらの冷静なコーダの分析にリクは唖つた。

「何とか出来ないかな？」

「あそこまで喧嘩が大きくなつたんだ、無理にでも白黒をつけた方

「がいいスね。決闘でもさせやスか？」

確かに、ここまで大きくなってしまったいがみ合いをどうにかするにはルールをつけた勝負で白黒をつけるのが手っ取り早い。“決闘の街”ファトルエル出身のコーダらしい意見であると言えた。

「……あれ以上酷くなるようなら考えるか」

リクはそう結論付けると、自分の席に座り直した。そしてジエシカの料理をスプーンですくった。

「それ、毒でしょ？ 食べる気スか？」

「正しい食い方をすれば大丈夫なんだろ？ 折角手間かけてジエシカが作ってくれたんだ。食わなきゃもつたいねーじゃねーか。ん、旨い」

一口二口食べてはコップに入った飲み物を飲み、リクは平気で食べ進めて行く。

フィラレスもそれを見て自分の席につき、同じように食べ始めた。そんな二人に、コーダやミルド、テイタ、ジットも次々と席につく。

「……じゃ、俺も付き合いやスか」

「ま、ちゃんと食べたリク君は無事みたいだしね」

こうして会食が再開する。

見物人がいなくなっても勢いを失うことのない二人の言い合いを横目で見ながら、テイタはふと思った疑問を口にした。

「あの二人、本当のところはどっちの方が強いんだい？ 一見すれ

ば、あの槍の嬢ちゃんのほうが強そうだけど」
「相対的に見ればカーエス君の方スね」

カーエスもジェシカも、ファトルエルでリクと闘っており、結果は両方ともリクの勝ちであることには変わらなかったが、試合の内容は大きく異なる。

ジェシカは一撃で負け、カーエスは“魔導眼”によってリクに大きな苦戦をさせた。よってコーダの言う通り、相対的に見ればカーエスの方が強いことになる。

「闘いの相性にもよるだろ。ジェシカは補助魔法を絡めた白兵戦が得意だろ？ 俺の場合、魔法攻撃主体だから“魔導眼”の先読み能力で全部防がれてたけど、ジェシカの戦法だと“魔導眼”のメリックトは大してないと思うぞ」

「なるほど、そういう見方もありやaska。でもカーエス君って、兄さんと闘った時はまだ隠してた力があつたんでしよう？」

「ジェシカも同じように実力を隠し持つてる可能性もある」

リクの意見にコーダはうん、と唸る。

二人の討論を聞き、ティタは楽しそうな表情で言った。

「こうなったら謀^{はか}つてでも二人の仲をもっと悪くして、決闘に持ち込んでみたいねえ」

「ティタ……、冗談だよね……？」

リクは、いつの間にか空になった皆の皿とまだ罵^{のの}りあいが続いている二人を見た。そして溜め息を一つついて、少スキつめの調子で二人に言う。

「ジェシカ、皆食べ終わった。皿を片付けてくれ」

「は、はい。かしこまりました」

「カーエス、次はフィリーのデザートだぞ」

「せ、せやっ！ こんな下らん事に情熱を費^つやしとる場合とちゃう！」

途端に二人は喧嘩を止め、ジェシカは食器を片付け、カーエスは自分の席に座った。

それを見届けるとリクはフィラレスの方に向き直った。

「フィリー、デザートの準備をして来いよ」

リクの言葉にフィラレスはこくりと頷き、食器を片付けに厨房に戻るジェシカの後ろについていく。

それを見送ると、リクは椅子の背もたれに体重を預け、ふう、と息をついた。

そんなリクの顔を、コーダがからかうような視線で覗き込む。

「な、なんだよ」

「さすが兄さんスね。あつという間に場を収めちゃって」

「よせよ、喧嘩を仲裁したわけじゃない、中断させたただけだ」

ほどなくして、フィラレスが綺麗に切ったケーキの皿を載せたワゴンを押してきた。

そのケーキは全体的にピンク色をしており、上にはチョココレートを半分コーティングしたイチゴがのせられているという可愛らしい外見だった。

「おお〜」と、カーエスが歓声をあげる。

フィラレスが皆に紅茶をいれている間にカーエスは眼鏡を外した。
“魔導眼”でそのケーキの味を見るためだ。

フィラレスの料理の腕を疑っていたわけではないが、フィラレスの作った料理がどんな色をしているのか興味があったからである。
外見通りのピンク色が、はたまた綺麗な金色か。

(さあ、どんな色や……っ!?)

そして眼鏡を外した後、勿体振って閉じていた目をカツと開け放つ。

その直後、

「しょ、しょええええええつつつつ!?’」

悲鳴が上がり、反射的に仰け反った勢いで、カーエスはそのまま椅子ごと倒れてしまった。

それを傍目にジェシカが溜め息まじりに呟く。

「……いちいちやかましい奴だ」

「まあまあ、賑やかでいいじゃないスカ」

コーダが、それをなだめている間にジットがカーエスに尋ねた。

「お、おい、カーエス、どないしたんじゃい……!?’」

椅子に座った姿勢で仰向けに倒れたまま、カーエスは呻くように声を絞り出した。

「……ど……ドドメ色……」

ドドメ色、というのは、語感から虫の体液のような汚い色だと思われがちだが、実は紫系の何ということのない色だ。しかしながらこの場合、カーエスが見たものは世間のイメージするドドメ色、つまり虫の体液のような汚い色であったらしい。

一同の不幸は、カーエスが皆に見付からないように味の色を見ていたことだった。

ジットは「なんのこっちゃ？」と、首を傾げながらもカーエスに手を貸して、椅子と一緒に元に戻してやる。

「さあ、フィリーのケーキはどんな味かな？」

全員がその可愛らしいケーキにスプーンを入れる。その感触はふわりとしていて、ムースのように柔らかい。美味しそうな甘い匂いが全員の鼻腔びじょうをくすぐった。

周りがかぐくりと生唾を飲み込む中、カーエス一人だけがスプーンを持つ手が震え、固唾を飲み込んでいた。

そして一同が同時に口に入れた。

瞬間、サツと一同の顔が青ざめる。

そのケーキが舌に触れたその瞬間から、全身がその全本能を持って、その異物を体内に受け入れることを拒否しはじめた。

それは味の混沌こんとんだった。甘くもあり、辛くもあり、酸っぱくもあり、苦くもあり、そして何故か舌は痺しびれた感じがする。匂いは一番キツイ甘い匂いから、刺激臭、アンモニア臭、何故か血臭けっしゅうや腐臭ふしゅうまで感じられるような気がする。

身体はそれを吐き出すことを要求していた。

しかし、自分の作ったケーキの評判がどうか、気にして見つめる二つの目がある。言うまでもなくフィラレスだ。

これは悩むところだった。出来るかどうか危ういが、これを「旨い」と嘘の評価をしても、後に正直な人が「不味い」と言ったら余計に傷付けてしまうだろう。かといってこの場で「不味い」とはなかなか言えない。

しかし、それ以前に飲み込めるかどうかも危うい。何とか飲み込めても吐き出してしまうかもしれない。

ふと、カーエスは手元に紅茶があるのに気がついた。手にとって一口飲んでみる。直前に口にしたものの所為か、それはひどく美味しく感じられた。

なんとかそれでケーキの方は流し込める。

周りを見渡すと、他のほとんどの者も同じ戦法をとったらしい。

紅茶のお陰でなんとか吐き出さずに済みそうだった。

その声が上がったのは、こうして一同が紅茶に救いを見出した直後だった。

「旨いつ！ いけるぞ、このケーキ！」

（何イイいつつ！？）と、一同が危うく声を出しそうになるところを何とか堪え、驚きの眼差しでその声の主に注目した。

それはリクだった。

はじめは、フィラレスを傷付けまいとするお世辞だと思っていたが、そうでないことはすぐに分かった。

なにしろ二口三口と全く躊躇なく、フィラレスのケーキを口の中に放り込んでいたからである。そして紅茶で流し込むことも全くしていなかった。

（なんちゅー舌しとんねんっ！？）

（感服致しました、リク様……！！）

（……ある意味幸せな舌ツスねー）

フィラレスは、はにかんで少し俯いた。その頬は薄く紅潮している。

彼女はその表情をカーエスに向けた。目があった彼はびっくりと反応し、続いて彼女と同じく頬を紅潮させた。そして若干引き攣った笑顔を彼女に向けると、つまりながら言った。

「あ、ああ、リクの言う通りや。め、滅茶旨いで」

カーエスに習い、他の一同も後ではれる機会のないことを祈りながら賛辞を並べた。しかし、カーエスは最後に一言、本当に余計なことを付け加える。

「ホンマやって！ おかわりあったら食いたいくらいやで」

するとフィラレスはちょっと待っている、という意味を含むであろう、手の平をカーエスに向けて上げるジェスチャーをすると厨房の奥に姿を消す。

その瞬間、カーエスの顔が更に蒼白になり、そして彼女がケーキをもう十皿ほど載せたワゴンを押して来るのを見て、完全に血の気を無くしてしまった。

「私は既に満腹だ、付き合わないぞ」

「同じく」

ジェシカとコーダが冷たく彼を突き放す。

それを見ていたリクは、本当に不思議そうに首を傾げた。

「へえ、勿体無いな。こんな旨いケーキをお代わりしねーなんて」

11 『亡命計画』

明るい計画は白昼の日ざしの中で立てられる。
対して、暗い計画は闇夜の影の中で進められる。

それぞれの思惑と陰謀、そして利害が絡まりあう計画。
だが、暗闇の中、それらの歯車の全てが噛み合っている事を確かめる術はない。

暗い研究室の一角に明かりがあった。

一つの机と、その椅子に座る人物だけがそれに照らし出され、他の部分はそこに光を奪われたかのように暗くなっている。

光に照らし出されている人物、ダクレーは今整理し終わった“滅びの魔力”のデータをファイルに入れると、ぱたりと閉じた。

そのタイミングを見計らったように、彼の背後から声が掛けられる。

「で、どうなんだ？ “滅びの魔力”とやらの強さは」

「……全く素晴らしいですよ。それだけで十分な“手土産”になるでしょう」

ダクレーは振り返らずに答えた。振り返っても無駄だからだ。

今、彼に話し掛けている人物とは何度もコンタクトをとっているが、一度も姿を見たことはない。常にあちらから話し掛けてくるので、こちらから連絡する方法も知らなかった。

最近、ダクレーはすっかり彼の姿を見ることを諦め、^{ウソ}“幽霊”とでも話しているのだという割り切った気持ちで彼と接することにし

ていた。

「おいおい、それだけで満足してもらっちゃ、
“こちら”としては困るんだがなあ」

“幽霊”にしては軽薄な口調だが、ダクレーは、いつもこの声の裏に圧倒的な迫力を感じている。

その証拠に、ダクレーが“幽霊”と接している間は、あの下卑た物言いがすっかり影を潜めていた。

「分かっていますよ。“そちら”の我々に対する待遇は、我々が見せる“誠意”と比例する。我々の値段を高めるためにも、是非とも“計画”は成功させなければなりません」

「分かつてりゃいいんだ。早いとこ頼むぜ、ダクレーちゃんよ。こちとらこんなつまらねえ仕事はとっと片付けてえんだ」

ふざけているようではあるが、明らかにダクレーに計画の発動を強く要求していた。

しかしダクレーは、ごくりと息をのみ、答えた。

「時期がくれば、すぐにでも計画は始動させます。……余り急かさないで頂きたい。私はつまらない焦りで事を仕損じたくはないのです」

数瞬の沈黙が、ダクレー一人きりの研究室を支配する。

「……悪かったよ。もう急かしたりしねえから、ゆっくり確実にやってくれや」

そう言った後、“幽霊”の気配が消えた。今まで気配を感じてい

た訳ではない。今消えたことで始めて気配の存在に気が付いたのだ。ダクレーは、深い溜め息を付くと、そのファイルをもって立ち上がった。

＊＊

そこは、ある会議室風の部屋だった。部屋の真ん中に長テーブルが置かれ、その周りに椅子が配置されている。扉も窓もない。入り口はたった一つの移動用魔法陣で、許可された者以外は例え魔導研究所所長といえども入ることは出来ない。

その会議机に配置された椅子は、後一つを除いて全て埋まっていた。現在はその一名をまつている状況だ。

コツコツコツコツ

一番奥の座席に座っている開発部長兼魔導士団長・ディオスカスは空いている座席を見つめ、一定のリズムで机を指で叩いている。この中では一番格上であるディオスカスがこの様子なので、他の者も口を開いたりすることが出来ないでいた。

ふと、その音が止んだ。

「遅いぞ、ダクレー」バルド。紫の刻（午後9時）には来るように言ったはずだが？」

「遅くなってしまって申し訳ありませんねエ。ちょっとデータの整理に手間取ってしまいました」

謝罪はしているものの、あまり悪びれた様子がない事に、ディオスカスは眉をびくりと動かす。しかし、この男に関していえば、ど

んな事をいつても腹が立つので、いちいちそれを咎めることはしなくなっていた。

怒りを押さえるために、少し深く息をした後、ディオスカスはダクレーに、席に着くように促した。

「例の“滅びの魔力”の奪取は成功しそうなのか？」

「ええ、魔力の数値が予想より大きくなっていきますが、まだまだ押え込める範囲ですね。下手に刺激を与えず、暴走させないように注意すれば十分に運び出すことは可能でしょうな」

そう答え、ダクレーは資料をはさんでいるファイルをディオスカスに渡した。

ディオスカスは、そのファイルの資料にざっと目を通しながら話を進める。

「ふむ……、では“滅びの魔力”の運搬に使う魔導レーザーの開発は進んでいるのか？」

この質問には同席していたうちの一人が答える。

「はっ。本日主任が帰ってきてから急ピッチで進められています。旅行先で何かの閃きが得られたようで、近日完成の目処さえ立ちました」

その報告に、ディオスカスは満足そうに頷き、更に続けた。

「結構。……では、邪魔者の対応についてはどうだ？」

「それについては一つ朗報が」

今度拳手したのはディオスカスの隣に座っていた魔導士養成学校

長・ドミーニクだった。彼は魔導士団の副団長も兼任している。

「なんだ、ドミーニク？」

「今回の計画に関して、最も大きな障害になると思われた、カルク
ニジーマンとマーシアニミスターシヤ両教師、そしてクリンニクラ
ン教師が研究所を出奔した可能性がります」

「……どう言うことだ？」

意外そうな顔をして、ディオスカスが聞き返した。

その反応を待っていたかのように、表情を輝かせ、ドミーニクは
答えた。

「正確には、ファトルエルの大大会が終わった後、ファトルエルで再
会したファルガールニカーン元教師と旅に出ってしまったようです。
今日、帰ってきたのはカーエスニルジュリスと例の少女だけで、他
は3名の客人を連れていました。出奔の件は正式に認められた訳で
はないので、まだ戻ってくる可能性も捨て切れませんが、おそらく
計画の発動には間に合わないかと」

「ほう……ファルガールニカーンか、懐かしい名前だな。昔は邪魔
で仕方がなかったが、今回ばかりはいい働きをしてくれたようだな」
十三年前、魔導学校の魔導士の養成法を尽く無視したファルガー
ルは、ディオスカスにとつて疎ましい存在でしかなかった。だから
多少手荒な真似をしてでもファルガールを魔導学校から追い出しに
掛かったのである。

しかし、今回は“滅びの魔力”の保持者であるフィラレスを庇い、
自分達に立ち向かって来ることが予想された、魔導研究所最強の魔
導士の内の二人に数えられるであろうマーシアとカルク、そしてフ
アトルエルの大大会の優勝候補の一角にまで挙げられたクリンニクラ
ンが、ファトルエルでのファルガールとの再会によって闘わずして

排除できた。

特に“完璧”と呼ばれるカルクは守りに関しては、間違いなく世界一の魔導士である。それをどう破るか、それがディオスカスの大きな悩みの一つだったのだ。その心配が消えたのはまさに嬉しい誤算だ。

まさに朗報とでもいうべきドミニクの報告に、ディオスカスの口元には自然と笑みがこぼれる。

「客人とやらはどうだ？ あの二人と友好関係があるのだ。その客人も我らの味方ではあるまい」

「はつ。ざつと調べましたところ、めばしいと見られるのはカンフアータ魔導騎士団副団長であるジェシカ・ランスリアだけです。何故ここにいるのかは不明ですが、それと、客人のうちの一人はファルガール・カーンの弟子と称しておりました」

「ふむ……、確かに魔導騎士が単独でここに来るのは可笑しいな。それにファルガール・カーンの弟子か……戦力的には量りにくい^{はか}が、まさかカルク・ジーマンやマーシア・ミスターシャより強いということはあるまい」

ディオスカスはエンペルファータの魔導士団長でもある。つまり、戦闘能力のある魔導士の大半を掌握^{てつか}していることになるのだ。すでに、ディオスカスは根回しを終え、その魔導士達のほとんどの“計画”への協力を取り付けていた。

これで余程の魔導士が来ない限り、ディオスカスは“計画”を妨害する者達の戦力を遙かに上回るそれを確保した事になる。そして、長い時をかけた“計画”の準備も整いつつある。

時は熟した。今しかない。

ディオスカスは、そう自分に心の中で言い聞かせた。

彼はダクレーのファイルをパタンと閉じると、席から立ち上がった。

た。そして、会議机の席に着いている者達をゆっくりと見回すと、静かに語り始める。

「それぞれの準備は整いつつある。……そろそろ具体的な作戦を練りはじめよう。ウォンリルグへの亡命計画を」

12 『想い飛び交う夜』

星と月が飾る夜空に、想いは飛び交う。
愛しい人と離れなければならぬ夜。
離れているからこそ、想いは強くなる。

今この時、あの人は何をしているのだろうか。
あの人は自分の事を考えてくれてるだろうか。
自分と、あの人は幸せだろうか。

相手への想いが、夜空を星影となって飛んでいく。
お互いの想いが出会う時、それは離れる二人を結ぶ絆となる。

西方料理店『オワナ・サカ』での宴の後、リク達はそれぞれ今夜眠る場所に引き上げるようになった。

リク達一行はカーエスとフィラレスの客人という扱いなので、二人の部屋に分けて止まることになっている。カーエスの話によると、彼らの部屋は2、3人くらい平気で泊まれるような部屋なのだそうだ。

テイタとミルドは魔導研究所の外に二人の家を持っているので、途中で別れた。

「いいかい、リク。アンタには明日、とびつきり厳しい試験を用意してあげるからね」
「ああ、望むところだ」

リクがテイタにそう答えると、テイタは満足そうに微笑んで、ミ

ルドと共に自分達の家がある方向に去っていった。

リク達はカーエスの案内で、魔導研究所まで戻ってきた。入り口から入ったところにある中央ホールから、住居・宿泊棟へと入っていく。

長い廊下を抜けると、そこは食堂になっていた。いくつものテーブルが整然と並べられ、奥は厨房になっている。今、現在は食事の時間は過ぎてしまっているが、夕食を食べはぐれた者達の為に、即席調理器が食堂の片隅においてあるので、その恩恵に預かっている者たちがまだポツポツと残っていた。

「ここから女子寮と男子寮に別れてんねん」と、カーエスが食堂から伸びている二つの廊下を順に指差して言った。「あっちが男子寮、そっちが女子寮。フィリーとヤリ女はそっちな」

カーエスが説明を終えると、フィレスとジェシカがリク達から女子寮の廊下の方に一歩離れた。

「それではお休みなさいませ、リク様」と、ジェシカがぺこりと頭を下げる。そしてその隣ではフィレスも小さく手を振っていた。

「ああ、二人ともまた明日な」と、リクも手を振り返す。

「フィリー、おやすみ」と、カーエスも手を振る。

男子寮のカーエスの部屋はかなり上等なものだった。部屋にはかなり細かくランクが設定されており、学生の中でも最エリートに当たる彼の部屋は家族でも暮らせるくらいに広いものだ。トイレ付きのバスルームに台所まである。

しかし、流石は男の部屋というもので、テイタの研究室程ではな

いにしる、ある程度散らかっていた。カーエスは通り道にあるものを蹴り退けながら寝室へと案内した。

「ちよっと散らかつとるけど、のんびりしとれや、今風呂入れたるよって」

「ああ、悪いな」

そう言つて、リクは荷物を下ろし、リビングルームにあったソファに腰を沈めた。

しかし、コーダは荷物を下ろすと、すぐに外に出ていこうとした。それを見たリクが首を傾げて訪ねた。

「あれ？ どこか行くのか、コーダ？」

「ああ、ちよっと『便利屋協同組合』に行こうと思いやしてね」
「便利屋協同組合？」

リクが、聞き返すと、コーダはこくりと頷いて答えた。

「プロの便利屋達が集つて情報を交換しているところスよ。もつとも表立つて看板を出している訳ではないので、素人じゃ見付けられないスけどね。この街の事はあまり知らないし、予め事情を把握しておくことがトラブルを未然に防ぐことに繋がるんス」

「なるほど。じゃ、どのくらいで帰つて来れる？」

「今日は帰つてこられないかもしれないス。待たずに寝てていいスよ」と、そう言ったコーダはドアを潜くつて去ってしまった。

そこに、風呂の準備を終えたカーエスがやってきた。

リクからコーダが出かけたことを聞くと、彼は呆れたように言った。

「ホンマに行動の読めんヤツやな。普段も、なに考えとるか分からへんし」

「でもアイツは俺達の味方だ。俺達に不利益になるようなことはしねーよ」

リクの答えに否定も肯定もせず、カーエスはリクの前にいれてきたコーヒーを置いた。

「お、サンキユ」

リクは礼を言って受け取り、砂糖とミルクをたっぷりと入れた。カーエスはその様子に眉をしかめつつ、リクの対面に座った。自分のコーヒーに砂糖とミルクを入れて、ぽつりと言う。

「……まあ、あいつがおらん方が話しやすいか」

「ん？ 何の話だ？」

リクが聞き返しても、カーエスはなかなか答えなかった。余程言いにくいことなのか、いつも話す時には真直ぐ相手の目を見据える男が、目も合わそうとしない。

しばらくの沈黙の後、カーエスが決意をしたように聞いた。

「リク……お前、ファイリーの事はどう思てんねん？」

「……はあ？」と、その質問に、リクは不意打ちを食らったような顔をした。しかし自分を見つめるカーエスの真剣な眼差しを見て、すぐに態度を改め、取り敢えずカーエスに確認した。「……それは恋愛感情の面での意味だよな？」

カーエスは頷いて、答える。

「せや。普段見てりや分かるやろつけど、フィリーはお前を好いとる。でもあんたはフィリーの事をどう思っとるんか、それが聞きたいんや」

フィラレスがリクに恋をしていることは、リク自身も薄々感じていることだった。

そして、カーエスがフィラレスに同様の感情を抱いていることも既に知っていた。

知っているからこそ、それらの恋心のことは敢えて考えないようにしていた。フィラレスの気持ちを裏切るようなことはしたくないし、カーエスの気持ちも無視出来ない。

しかし、このカーエスの様子では、答えをはぐらかす事など出来そうになかった。

「……まあ、可愛い娘であることは認める。それに危なっかしくてちょっと引つ込み思案でもあるけど、健気で、守ってやりたくなるな」

「ふうん、で、好きなん？ 嫌いなん？」

「好きか、嫌いかで聞かれたらハッキリと好きだ」

カーエスの二つ目の質問に、リクはきっぱりと答えた。そしてちよつとだけ間を置いて付け加える。

「……でもそれは恋愛感情じゃない。ファトルエルの大会で、マーシアやお前が辛い思いをしているところを見ちまったからな。ハッキリ言つて愛だの恋だのつていう話にはしばらく関わりたくないんだ」

マーシアは、やっと十年ぶりに再会出来た最愛の恋人・ファルガールが自らの幸せを戒め、自分と逢う事も自ら禁じている事を知り、

もう逢えないのではないか、とリクの前で涙を流した。

そしてカーエスも、フィラレスに好意を寄せたがために、フィラレスがリクに対して淡い想いを抱いている事を知って、悩み苦しんだ。

リクは、この二人の苦しみを誰よりも近くで見、感じ取っていた。そして、その苦しみを発生させたのが恋愛感情である、ということが分からないリクではなかった。

答える事にある程度緊張を感じていたのか、リクは一つ深く息をつくと、空になったコーヒークップをテーブルの上において立ち上がった。風呂に入る為に、荷物から着替えなどを取り出すとカーエスに尋ねた。

「ところで、カーエスは俺にそんなことを聞いてどうするつもりだったんだ？」

カーエスは残ったコーヒーを全て飲み干し、俯いたまま答えた。

「……フィリーを応援したろうと思てな」
「お前はフィリーが好きなのにか？」

意外そうに眉をあげて、リクはさらに質問を重ねる。自分の好きな女の、他の男への恋を応援する。たしかカルクも、ファルガールとマーシアに同じようなことをしていたが、その心情は未だ理解し難い。

カーエスは頷いた後、苦笑した顔を持ち上げ、リクを見上げて答えた。

「俺は思春期やし、割と気の多い方なんや。マーシア先生にも、一時期憧れとったし。でもな、フィリーのお前への気持ちはちゃうで。

ホンマにリク一筋や。お前を失うたらフリーには何も残らんよ」
「……………」

それは、確かに言えることだろう。フィラレスは“滅びの魔力”の暴走で何度も人を傷付けた罪悪感がある。それが元になった、彼女の負の感情はとても深い。

フィラレスがファトルエルの決闘大会に参加したのは、“滅びの魔力”のついでに自分を殺せる人物を探すためだった。それは何とか未遂に終わったが、それで心に掛かる、負の感情の黒い霧を晴らせた訳ではない。大会以前には、ほとんど持っていなかった正の感情が、ファトルエルの大会以来、負の感情に対抗できるくらいに膨らんでいるからなのだ。

感情の正負のバランスが良くなった所為か、精神が安定し、まだ普通の人間とくらべれば表情に乏しいものがあるにしろ、この頃彼女が笑顔を見せる頻度は高くなっていく。

そして、その正の感情の大部分を占めているのは、疑う事もなくリクへの想いだろう。
それを削ぎ落とす様な真似をするのは、どう考えても良策ではない。

「せやから、リク……。恋人同士になれとまでは言わへん。ただ、できる限りフリーと一緒にいたってくれや」

リクを見上げるカーエスの表情には、彼が想いを寄せる少女への優しさが満たされていた。

一方こちらは女子寮のフィラレスの部屋である。

フィラレスの部屋はカーエスと同じグレードの部屋であるが、かなり感じが違っている。カーエスの部屋は散らかっているが、フィラレスの部屋は対称的だった。とはいえ、片付いている、という訳ではない。散らかるほど物が無いのである。

リビングから見える範囲では、簡単な椅子が二脚に小さなテーブルが一つ。チェストが一つ。食器棚は一番下の二段しか使われておらず、床にはカーペットすら敷かれていない。

今挙げたものを全て除けば本当にただの空き部屋になるような、本当に生活に必要なものだけを揃えたような、そんな質素を通り越した殺風景な部屋だった。

そのリビングで一人冷たくしたお茶を飲んでいたフィラレスの元に、全身からうっすらと湯気を立ち上らせているジェシカが歩みよってきた。

着ているのは薄い肌着のみで、普段は鎧で隠れている、彼女のスタイルの良さが惜し気もなく露あつちにされており、この場にうぶな男の一人でもいようものなら卒倒しそうな程、その姿は悩ましげなものだった。

現在それを見つめているのは同性のフィラレスのみだが、その彼女でさえ、ジェシカの艶姿あてすがたにはつい、しげしげと見とれてしまう。

「ああ、いい湯だった。まさかここにきて湯船に浸かる贅沢を味わえるとは思っていなかったな」

その領地に大きな砂漠を有している事も示している通り、カンフアータはあまり水が豊富とは言えず、シャワーさえもなかなか浴びられない。ましてや湯船に浸かるなどという贅沢は貴族以上の者にしか味わえない贅沢なのだ。

一方エンペルファータは半分カンファータ領ではあるものの、残り半分は水が豊かなエンペルリース領でもあるし、そのエンペルリースから水を引いてくる技術も発達しているため、水が不足する心配は先ずなかった。

風呂からあがって身体が火照^{ほて}っているジェシカに、フィラレスは自分も飲んで冷たいお茶を入れてやった。

「ああ、すまない」と、ジェシカはそれを受け取り、椅子の上に座ってそれを飲んだ。「ふむ、冷たい茶も旨いものだ」

そう言っただけでジェシカがフィラレスに目をやると、彼女はぼつとジェシカを見つめていた。否、見つめているのではなく、遠い目をして彼女の方をただ向いているのだ。

ジェシカはしばらくその様子を見つめていたが、やがてある事に思い当たった。

「そういえば、ファトルエルを出て以来、リク様と離れて夜を過ごすのは初めてだったな」

リクの名を聞いた途端、フィラレスの意識が現実引き戻されてきた。顔を紅潮させ、焦ったように、茶を飲もうとカップを傾^{かたむ}け、中が空なのに気がついた。

その狼狽^{もつぱい}振りに、ジェシカはからかうような含み笑いを浮かべた。

「凶星のようだな」

ジェシカに指摘され、フィラレスは顔を真っ赤にし、その火照りを覚まそうとしたのか、ポットから茶のお代わりを入れると、一気に飲み干した。

そんな彼女の様子を、微笑ましく見つめながら、ジェシカは言っ

た。

「リク様に惚れるとはいいい趣味だ。私も応援するぞ」

その言葉にフィラレスは、気恥ずかしさから俯けていた顔をがばつと上げた。

彼女の表情は驚きに染まっていた。

ジェシカも、そんなフィラレスの反応は予測していなかったので、しばらく首を傾げていたが、やがてその理由に気がついた。

「ああ、私がリク様をお慕いしたしているのでないかという事か？」

フィラレスがこくりと頷く。

そんな彼女に、ジェシカは優しく笑いかけながら答えた。

「憧れと恋愛感情は別物だ。私はリク様を尊敬はしているが恋心を抱いているわけではない。ちょっと前までなら、憧れも恋心も一緒に抱いて接した男性がいたが、その人は手の届かないところへ去ってしまった。失恋したばかりで、当分恋はできる気がしない。それに、おそらくリク様には尊敬以上の感情を抱く事はないだろう」

憧れも恋心も一緒に抱いた男性、それはジェシカの師でもあるシンタークスのだ。

魔導騎士団長であり、五年前にも開かれたファトルエルの大会の優勝者でもある彼は、優勝候補の一角として参加し、そして大会中にジルヴァルト・ベルセイクという男に殺されてしまった。

大会が終わってから、まだ一週間。リクと闘う事で、長年抱いていた悩みを解決したとはいえ、愛した男が死んでしまった悲しみは未だ風化してくれない。

言った事で、それを改めて思い出し、いつの間にか物憂げな表情
になっていたらしい。

恋心を突かれ、さっきまでかなりの動揺を見せていたフィラレス
が、今は心配そうにジェシカの顔を見上げている。

「心配しなくてもいい。確かにあの死別は辛いものだったが、出会
いがあるからこそ別れがあるのだ。私はシノン様に出会えて良かった、愛せて良かった。そうでなければ、私はここにはおらず、悩み
を晴らす事もなかっただろう。そう思った時の喜びを思えば、別れ
の辛さも耐えられる」

そう語るジェシカの表情は慈しみに満ちたものになっている。

出会いがなければ、別れはない。だが人との出会いは避けられな
いものであり、よって別れも避けることはできない。しかし、別れ
の悲しみはその時だけのものであり、また出会いはある。そして後
には、別れた事を悲しむよりも、出会えた事に喜びを感じるのだ。
愛する者との出会いとなれば、その想いはなおさらだろう。

「さて、長旅の後だ。今夜はもう休もう」

こうして想い飛び交う夜は更けていく。

13 『示された贖罪の道』

失わせた罪は許されない。
残された者は癒されない。

罪人は許されぬまま、死ぬまで苦しみ続けなければならない。
許されぬと分かっているながら、謝り続けなければならない。

もし、贖罪じゆんざいができる道があるとしたら、
許されぬ道とどちらを選ぶだろうか。

「あなたは自分の言っている事が分かっているのですかっ！？」

その怒声と同時に、どん、と机に拳を叩き付ける鈍い音が研究室に響いた。

怒声の主は、何とミルドである。かつて、彼がこれほど大きな声を張り上げた事はない。そして、机に拳を叩き付けるような行為も、ミルドにとって初めての事だった。

それほど温厚な彼に、ここまでさせたのはダクレー＝バルドだった。

彼らは、ダクレーの執務机を挟んで相對していた。ダクレーは自分の椅子に座り、ミルドは、自分の机から持ってきた椅子があったが、今は座っていない。

ダクレーはミルドの怒声に動揺すら見せる事はなかった。自分を睨み付けるミルドの視線をしれっと受け止め、口元に笑みを浮かべている。

「無論だ。十分分かっているつもりだよ」
「それでも、正気の沙汰とは思えない提案だ！」

もう一度、拳を机に叩き付ける。

二度までも何の手加減もなく叩き付けた手は、下手をすれば骨が砕けているくらい痛んでいるはずだが、ミルドはそんな痛みを感じている様子はほとんど見せていない。

そんなミルドを見上げ、なおも気味の悪い笑みを崩さずにダクレーは言った。

「私は正気だ。そして、アルムス所長も承諾しょうたくされている事なのだよ。私が正気でないとしたら、所長も同じく狂気にかかられているということになるねえ」

だからか、とミルドは思った。

フィラレスの“滅びの魔力”の研究主任から下ろされる内示を受けた時の、あのアルムスの強引な態度は、この提案を受けたからだったのだ。エンペルフアータの存亡に関わる事だ、と言ったアルムスの言葉にもその説明で決着がつく。

そうなると、なおさら自分は引き下がれない。

「むしろ、そつちのほう納得できる。こんなことが本気で提案されて言い訳がない。どこをどう見ても人の道を外れた提案です」

「そうかね？ 私はフィラレス君の為にもなると思っただがねえ」
「フィリーの為になる……？」

その言葉に、ミルドは一瞬眉を潜めた。

自分の予想通りの反応だったのに、満足だったのか、更に笑みを深くして続けた。

「フィラレス君はあの魔力故に、多くの人や物を傷付けてきた罪がある。そして本人もその罪故に苦しんでいる。裁かれない事を辛がつている。この提案はいわば彼女に、贖罪の機会を提供するものでもあるのだよ。勿論、フィラレス君にも拒否権は与えられている。罪を購あがなうことと、罪を背負い続けること、彼女はどちらを選ぶかねえ？」

ミルドには分かっている。フィラレスなら、前者を選ぶ事を。自分や、カーエス等、彼女と付き合いのある人間は、フィラレスの持つ魔力の所為せいであり、フィラレス自身の罪ではない、と慰めなぐさ続けた。しかし、彼女はそんな言葉をまともに受け取った試しはなかった。言葉の暴力等でフィラレスが傷付けられた時も、彼女は甘んじてその痛みを受け入れ続けてきた。

そして、彼女は自我を、欲を自ら封じ込めたのだ。

その事を知っていて、ダクレーはこのような提案をしたのだ。表面上、拒否権は与えられている。しかしどちらを選ぶかは分かり切っている。

そして、彼女が自ら犠牲になる事を承諾するお膳立てをしているのだ。

「……なんて卑怯な……」

「卑怯とは心外だな。私は選択権を与えているのだからねえ」

そう言って、ダクレーはククク、とくぐもった笑いを漏らした。

「189……！ 190……！ 191……！」

そんな声を、夢うつつの状態でカーエスは聞いていた。意識は臍おぼろげにあり、起きようと思えば起きられた。しかし、まだ目蓋まぶたは重く、緑黄の刻（午前7時半）に合わせておいた目覚ましがなるまでは目は開けないでおこうと決めていた。

「197……！ 198……！ 199……！ 200！」

謎のカウントがキリのいい数字まで数えたところで目覚ましが鳴り、カーエスは、そのアラームを止めると、意を決して身を起こした。

ぼさぼさに寝癖がついた頭を掻きながら、リビングまで降りた時、自分がさっきから聞いていたカウントの正体が分かった。同時に驚愕する。

リクが片手の腕立て伏せをしていた。

それだけなら、自分にも出来る。しかし問題は彼の周りであった。

リクの周囲には、クルクルと、ビー玉大の光玉が幾つか動いていた。その動きは縦横無尽で、腕立て伏せで、腕を伸ばし切った体勢になったリクの身体の下を潜ったり、あるいはリクの顔の前をフワフワと浮いていたりする。

その光玉の正体が魔力の玉であることは、考える迄もなかったが、カーエスが驚いた事実は、それらの光玉がそれぞれ違った属性を持っているらしい事だった。

ある光玉は赤く、火を纏まとっている。ある光玉は青く、水滴のなかに光っていた。

腕立て伏せをしながら、複数の、しかも属性の違う光玉を操っている。それがどれだけ難しい事か、自らもかなり優秀な方であるカーエスには分かった。自分にも出来ない事はないが、それでも、腕立て伏せをせず、ジツと精神集中をしなければならぬ。

ファトルエルの大会で、リクと闘った時、彼の“魔導眼”にはリクの魔導が、とても綺麗で理想的な型に見えたが、その影には普段からのこんな訓練があったからなのか。

「お、カーエス、おはようさん。ひよつとして起こしちゃったか？」

「い、いや。元々この時間に起きるつもりやったし……」

そうか、とリクは一言答え、荷物から取り出した布切れで身体の汗を拭いた。

カーエスは、まだ驚きに目を見開いた状態のまま、一つ尋ねる。

「毎朝やってんの？ 訓練」

「ああ、一応な。やらねーとファルに雷落とされるからな、恐怖が身体に染み付いちゃまってサボれなくなっちゃった」

この場合の「雷を落とす」は、叱られるという事ではなく、本当の意味で雷を落とされるのだ、とリクは付け加えて苦笑した。

「あの腕立て伏せやりながら魔導制御するのは、いつから出来るようになったん？」

「ん、完全に出来るようになったのはここ半年のことだな。ほら、筋トレと魔導制御の訓練って別々にやると時間食うだろ？ だから一緒にやれねーかな、と思ってさ。でもやってみると難しいんだよなあ、これが」

リクは、そう答えると明るく笑った。

本人は笑い話のつもりだろうが、カーエスには笑えなかった。ここまでになるまで、平然とこなし、笑い話として話せるくらいにまでなるには、それこそ血も汗も滲む厳しい訓練が必要だったに違いない。

それに比べると自分はどうかだ。カルクに、もう教える事はない、と言われてから訓練と言う訓練は全くしてこなかった。もう一人前の魔導士のつもりだったのだ。

「……カーエス、どうかしたのか？」

いつの間にか、リクが心配そうに顔を覗き込んでいた。カーエスは慌てて身体を仰け反らせて言った。

「あ、いや、なんでもあらへん。さ、そろそろ朝飯の時間やで。食いに行こか」

食事時の食堂は、思ったよりも空いていた。

「特に研究員とかに朝飯食わへん人が多いんやな。飯食わんと頭も回れへんちゅうのに、不健康なこっちゃで」と、カーエスが説明しつつ、厨房に入った調理師からパンと卵料理などが乗った朝食のトレイを受け取った。

リクもすぐ後ろについてそれに習う。

トレイを持って、空いている席を探していると、聞きなれた声が

彼らに呼び掛けた。

「おい兄さん、こっちツスよ〜！」

声の方を向くと、コーダが席に座って手を大きく振っていた。机を挟んだ向かい側にはフィラレスとジェシカが座っている。

その声に応え、リク達はその席に座った。

「コーダ、いつの間に帰ってきたんだ？」

「ついさっきスよ。よかった、危うく朝食食いはぐれるところでやした」と、コーダは、リクの質問に答え、ははは、とのんきに笑った。

昨日は情報収集に行っていたはずだが、今はすぐ話す程重要な情報はないらしい。ファトルエルでもそうだった。一気に話そうとせず、必要な時に必要な話をしてきていた。

コーダとの会話の切れ目を狙ってジェシカが話し掛けてくる。

「おはようございます、リク様。昨日は良く眠れましたか」

「ああ、ばっちりだ。やっぱりあれだけ上等なベッドで寝ると疲れのとれかたが違うな」

そう答えて、リクはジェシカから玉子料理を食べようと朝食のトレイに視線を移そうとした。その過程で不意に、ジェシカの隣に座っていたフィラレスと目が合った。

すると、フィラレスはたちまち顔を真っ赤に紅潮させ、慌てて視線を外したものだ。

「……………」

リクは正直、リアクションに困ってしまった。

今までも、リクと話していて頬が紅潮していたりする事はあったが、ここまで露骨な反応はなかった。

そんなフィラレスの様子を、ジェシカが微笑ましげに眺めている。おそらく、昨日のリクとカーエスのように、フィラレスとジェシカの間にも同じような話があったに違いない。それで、フィラレスはいつも以上にリクを意識しているのだ。

フィラレスは、視線を外したついでに時計を確認した。そして、少しピッチを上げて朝食を平らげると、トレイを持って席を立つ。

ちよつと名残惜しそうな視線を自分達に向ける彼女に、カーエスが言った。

「ああ、そっぴやファイリーは黄の刻（午前9時）からミルドのここに行くんやっとな」

フィラレスはこくりと頷いた。確かに、確認してみると、壁に掛けられた皿状の時計の色は大分黄色に近付いてきている。

リクは、フォークで卵料理をつつきながら自身の予定も確認する。

「じゃ、朝のうちは別行動か……。俺もテイタに白黄の刻（午前10時半）に研究室に来てって言われてんだよなあ。まあ昼メシん時には会えるだろ。取り敢えず、この食堂を待ち合わせ場所にしておこう」

そんなリクの言葉に、フィラレスはこくこくと頷き、トレイを食器回収コーナーに置くと、食堂を出て行った。

それを見送って後、リクは呟いた。

「さて、こっちは約束の時間までどうしてるかねえ……？」

フィラレスがミルドの、否、今はダクレーの研究室に到着すると、ダクレーが嬉しそうに迎えてくれた。一方、ミルドは心無しか表情が暗い。いつもは優しく笑いかけるところだった。

ミルドとは対称的にいつもよりむしろ明るいと言えるくらいの表情で、ダクレーが歩み寄りつつ言った。

「やあ、フィラレス君。待ちわびたよ」

彼女は、乏しい表情の中、少しだけ眉を歪めた。フィラレスとて、このダクレーと言う男には好感は持っていなかったのである。

そんな彼女の様子には気付かず、ダクレーは傍^{そば}まで歩み寄ると、話を始めた。

「今日、ここに呼んだのは、いつものような検査の為ではないのだよ。他にもない、君に重大な話をする為にここへ呼んだのだ」

そう前置きをして、ダクレーは研究室にあつた応接用のソファに彼女を誘導して座らせた。そして、ミルドにお茶を出すように言った。

そのダクレーの態度に、フィラレスとしては戸惑いを感じざるを得なかった。

前置きの中に出た“重要な話”とやらが関係してくるのだろうか。

ミルドがお茶を持ってきて、フィラレスの前に置いた、そして目

があつた時に小さく微笑みかけてみせてくれた。やっと見られたミルドの笑顔に、フィラレスは少しだけ安堵する。

そして、ミルドがダクレーの隣に座り、フィラレスと向き合う形になったところで、dクレーが切り出し始めた。

「ふむ。私はどうもせつかちでね、よって世間話等挟まずに、さつきから君も気になっていいるであろう重要な話に入りたいと思うが、依存はないね？」

フィラレスが頷く。

それを見てダクレーも頷き返して続けた。

「君ももしかしたら噂等で聞いているかもしれないが、昨今の魔導研究所が抱えている大きな問題の一つにエネルギー問題がある。つまりは魔石問題だよ。研究所は混乱をさせないために、その問題が深刻化している事実の公表は控えているがねえ、……まあ私としてはいきなり魔石が無くなった、と言った時の民衆の反応が見物だよ」

そしてククク、と皮肉るような咬笑を挟む。

ふと、フィラレスとミルドの視線が自分に集中しているのに気がつき、ごほんと一つ席をして、また続けた。

「失礼、話が逸れたね。まあエネルギー問題の方は少し置いておいて、皆の知るように、エンペルファータにはとても大きな恩恵を与えている魔導機械がある。そう、“セーリア”だ。昨日の“孤立する日”にもこのエンペルファータを守ってくれた“セーリア”だよ。そこで少し考えてみてほしい。“セーリア”はエンペルファータの屋根となり、雨風を防ぎ、街中を適度な温度に保ち、あれほど強い大災厄からも街を守ってくれている。つまりとてつもなく大きな魔法効果を持っているわけだ。これがどう言うことか分かるかね？」

突然問われたが、口が利けず、答えようのないフィラレスとしてはダクレーの、慈しみとはおよそ遠いところにある視線を正面から受けるしかない。

しかし、一応魔導学校の筆記試験の成績ではトップクラスだった彼女だ。一応ある一つの答えは持っていた。

先程、ダクレーはエネルギー問題を口にした。ひとまず置いておくとは言ったが、今の“セーリア”の話題に絡んでくるはずなのである。そうになると、答えは自然と出てくる。

「分かったようだね。そうエネルギーの問題だ。それほど大きな魔法効果を持っており、しかもその魔法効果が永続的に続けられている“セーリア”だ。あの魔導装置が魔法効果を維持する為に必要な魔力は他の魔導装置の比では無いのだよ。

さっき言ったエネルギー問題を今ここに蒸し返すと、私の計算では、現在魔石の存在が認識されている魔石鉱山の全ての魔石を集めても、もう三年も“セーリア”を維持する魔力は得られまい。そうになったら他に“セーリア”を採用している都市はともかく、エンペルファータは終わりだよ」

その言葉の意味は、長年エンペルファータに住んでいるフィラレスには良く分かった。雨風や、適温保持の機能が消えてもどうと言うことはない。しかし“孤立する日”にやってくるグランクリーチャー《テンプファリオ》の大災厄がやってきた時、“セーリア”が無ければエンペルファータは一晩の内に崩壊する。

雷に灼かれ、雹に打たれ、強酸の雨に溶かされ、最後の光のシャワーの前に跡形も無く葬り去られてしまふに違いない。たった、一晩の大災厄で。魔石が三年もたないと言う、この現実を知ったら、エンペルファータの住民はどうするだろうか。

「しかし、この状況を暫定的ざんていてきにはいえ、打開する策が無くはないのだ」

少し、声を大きくしてダクレーは言った。

良く考えてみると、今までのエネルギー問題やエンペルファータの危機云々を聞かされる為に自分は呼ばれたのでは無いはずだ。

つまり、今までののは前置きで、ここからが本題なのだろう。

「考えてみると、この星にあるものは皆、魔力を持ち得る。大抵は使うに値しないくらい小さくはあるがね。ところが魔石と、もう一つのものだけが魔法効果をもたらせる程の魔力を持っているのだよ」

もう一つのもの、をダクレーは強調して言った。

そしてしばらくフィラレスの藍色の瞳を覗き込んだまま、沈黙する。

言つのを躊躇ためらっている感じではない、どちらかという在意地悪く焦らしている感じだ。

「……………そう、人間だよ。魔石がないなら、最後に頼るのは人間しかない。世の中には、一握りしかない魔導士だけでなく、魔力は持つていても、それに気付かない、もしくは魔導の技術がともなわず、魔導士になれない者がいる。」

そんな人間達の魔力もあわせれば、今まで魔石から得ていたくらいの魔力は手に入るのではないかね？ しかも、魔石とは違い、人間は食物を摂取し、睡眠をとることで魔力を回復することができる。つまり、半永久的に保たれるエネルギーと言う事だよ」

フィラレスは元々、言葉を喋ることは出来なかったが、このダクレーの提案には絶句した。狂っているとしか思えない。

魔法を行使する時以外、魔力はその所持者を離れられないと言う

性質を持つ。輸血のように定期的に注射器で血を抜いて、それを保存しておくというわけには行かないのだ。よって今現在使われている魔石も、常時魔力を伝えるコードを接続しておき、必要な時に必要な魔力だけをその魔石から抽出されるのである。

ダクレーが言っているのは、魔石を人間に置き換える、つまり、魔力を持った人間を、いつでも必要な時に必要な魔力が抽出できるように魔力炉に接続するということだ。食事与えられるだろう、睡眠だつてとりたい時にできるだろう。

しかし、接続されている限りは動けない。何処にも行くことは出来ない。一言で言うと、食事と睡眠以外の行動の自由を全て奪うと言うことなのである。さらに、効率を考えると、食事ではなく、栄養分の注射だけで済ませるかもしれない。もし、そうされた人間がいたとしたら、その人間は生きていけると言えるのだろうか。

「ククク……安心したまえ。取り敢えず“セーリア”の問題さえ解決できれば、そんな措置はとらなくて済む。私としても最後の手段だと思っているしね。そして、“セーリア”の問題だが、こればかりは一刻も早く対策を打ち出さない限りエンペルフアータは滅ぶ。何しろ、エンペルフアータには否応なく二百日置きに滅びがやってくるのだからね」

ふと、ミルドを見ると、彼はダクレーの話は聞きたくないとも言つのように、苦い顔をして目を背けていた。

それで、何となくフィラレスには何故、自分がここに呼ばれたのか、ダクレーが本当に自分に話したいことがなんなのか、分かったような気がした。

自分の視線を感じたのか、いきなりミルドがフィラレスの眼に視線を戻した。そして、ガバツと立ち上がる。

そして焦燥も露に、明らかに興奮した調子で言った。

「フィリー、主任の話は聞いちゃいけない……君一人が犠牲になることなんてない！」

「ミルド君、それはフィラレス君の決めることだよ」

「いいえ、やはりこれは人道に反しています。僕はこのことを公表するつもりです！ そのためにテイタともども研究所をクビになっても構いません！ 人柱の上にはか成り立たない文明なんか消えてしまえばいい！ 僕は、決してフィラレスを“セーリア”の動力源になんてさせない！ この研究を連れだして……っも……！？」

叫んでいたミルドが、突然何かに殴られたように身を震わせ、崩れ落ちた。

ソファに倒れ込むようにして座り込むと、ひじ掛けのほうに身体を倒してしまった。

突拍子もない出来事に、流石のフィラレスも眼を丸くして驚き、ミルドに駆け寄ろうとソファを立ち上がるうとした。

それを制し、ダクレーが言った。

「いや、そつとしておいたほうがいい。すこし興奮し過ぎたようだからねえ。しばらく休ませるだけで直に良くなるだろう」と、ダクレーは席を立ち、倒れ込んだミルドをソファに横たわらせてやった。そして改めてフィラレスに向かい合って話を切り出す。

「しかしミルド君の行ったことは半分本当だ。君にしたい話とは、君に“セーリア”の動力源になってもらいたいということだよ。今だって魔石を山のように使ってやっと賄っているのだ。あれを動かすには魔導士を何人が集めたくらいでどうにかなるものではない。しかし……君のもっている“滅びの魔力”なら“セーリア”を十分に動かせる。

非道なのは十分わかっているが、私は君にとって悪い話ではない

と思うのだよ。君はその強力な魔力をもつてしまったお陰で多数の人を傷付け、君は罪に傷付き、人からは怖れられ、疎まれるようになってしまった。しかし、この方法なら、もう君は誰も傷付けなくて済む。魔力は“セーリア”の魔法効果として発散され続けるから暴走しようがない。

さらに、今まで傷を付けてしまった人達に償いつくなをすることができ
る。“セーリア”の動力源となることで、エンペルファータの人々
を守り、そして文明の最先端であるこの街を守ることで、魔導文明
自体を支えることになる。そう考えると、君が今まで傷付けてしま
った人達よりも遙かにたくさんの方達を助けることになるだろう？」

人の助けになれる。傷付けてしまった人への償いができる。
フィラレスの耳に、その言葉はとても重く、魅力的に響いた。

自分の言葉がフィラレスの耳に届いているのかを確認するように、
ダクレーがフィラレスの瞳を覗き込む。彼女の眼は目の前で動くダ
クレーを捕らえようとはしていない。おそらくいろいろな考えが頭
を渦巻き、それが感覚をほとんど遮断しているのだろう。

ダクレーはその予想通りの反応に、満足そうに微笑むと、さらに
続けた。

「しかも、君は命まで失うわけではないし、永遠に魔力炉の中に入
っているというわけでもない。ちゃんと代わりの動力源を見つけた
ら君は自由になれるんだ。罪を償いきり、堂々と自由に生きられる
んだよ。そして出た時には、君を恐れる者も、疎うとむものももういま
い

相変わらず、思考に没頭して反応を示さなくなったフィラレスの
肩にダクレーが手を置いた。

「……まあ、今日はもういいから、ゆっくり考えて、いい返事をしてくれたまえ」

14 『喧嘩の行き着くところ』

憎んでいては、喧嘩は出来ない。
しかし喧嘩はやがて憎しみを生む。

だが全力の喧嘩はお互いを認め合わせる。
そして新たに信頼関係が結ばれる。

リク達は魔導学校棟の学生ラウンジでテイタを待っていた。今は学科講義中なのか、リク達以外に見かける人影と言えば、書類等を抱えて歩き回る事務員らしき大人だけだ。中央ホールより大分小さいとは言え、十分に広い学生ラウンジに四人きりしていると、意味もなく心細い気持ちになってくる。

リク達は朝食の後、テイタの研究室に行ったのだが、彼女はまだ準備中らしく、彼女の代理で迎えた助手の一人がテイタからの伝言として、学生ラウンジで待つようにということを伝えてきた。何故待つように指示された場所がテイタの職場である研究室ではないのかが気になるところだが、その理由としては考えられることは一つしかない。

「何か試験を用意するって言っていましたね」と、ジェシカがそれに応じて言った。「どんな試験なのでしょう？」

「さあ……、簡単なモンだといいいんだけど、あの様子じゃ無理だろうな」

テイタの、“大いなる魔法”を目指す者への不信感は相当なものだ。もつともな理由もある為に、その不信感はより強固なものにな

っている。それを打ち消し、納得させる程の試験となると、簡単なものになるわけがない。

「まあ大丈夫じゃないスカ？ ファトルエルで優勝出来た兄さんだし」と、コーダが、不安げな様子を見せるリクに、気楽そうな声で言った。

それに対し、カーエスの言葉は意地が悪い。

「そーかあ、案外今日のウチに見放されたりしてな。そーなったら……」

「私が貴様の首を締めてやる」と、ジェシカが、カーエスの言葉を遮り、首元にスピアを突き付けた。「今度は、死出の道を渡り切らせてやるぞ」

ジェシカのその言葉が引つ掛かったのか、カーエスはいつものようには引き下がらなかった。

軽くジェシカを睨み返し、いつもより低くした声で言う。

「やれるもんならやってみいや。タダで殺される程、俺もお人好しやないで」

「ほう……、普段からそんなに隙だらけの貴様が言う台詞ではないな」

ジェシカも改めて睨んで言い返した。

しばらく、お互い睨み合ったまま、沈黙する。

「ちょい付き合えや。あんましナメられ過ぎて昨日みたいに殺されかけたたらたまらんわ」

「面白い、貴様の実力とやらを見極めてやる」

急に険悪になった雰囲気だったが、リクとコーダが二人を見る眼は割と冷静だ。

「いいんスカ？ 止めなくて」

「丁度頃合いじゃないか？ ここらで白黒付けといた方が二人の為になると思うぞ」

カーエスとジェシカは会って一カ月にもなっていない。それにも関わらず、喧嘩ばかりしているのは単にソリが合わないからだろう。お互いの一挙手一投足が気に食わず、食って掛からずにはいられないのだ。

最初の内は見ていて微笑ましいもののだが、この状態が長期間続くと、見ていられない程険悪になり、仲直りさせようにも、意地が生まれてしまっているので関係の修整をしづらくなる。しかしそうなる前に単純に勝負をさせれば、そんなことにはならなくて済むはずだ。

「よし、まだテイタとの待ち合わせまでの時間があるし、俺とコーダが立ち会おう」

＊＊

魔導士養成学校という名称は伊達ではない。この学校は、本当に魔導士を育てる為に存在している。

入学するパターンは主に二つ。希望して、試験に受かった場合。

この場合の入学試験は、魔力の測定、それから、魔導士として必要な知識を身に付ける為の講義についてくる頭があるかを測定する基

礎学力検定。そして、もう一つの入学パターンはスカウトされた場合である。

入学してからは、潤沢な資金をもって用意された施設を用いて、行動に耐えうる体力作り、魔導に耐えうる精神力作りが効率的になされ、魔導士としての資質を磨く。

今、カーエスに案内されてリク達が立っている『戦闘訓練場』もそうした施設の一つで、筋力や魔導制御力を高める為の様々な機材がある基礎訓練室があったり、実戦を想定した戦闘訓練のできる闘技場などが用意されていたりした。

基礎訓練場は完璧な空調設備をもって、身体への負担が少ないようにやや暖かめの気温に保たれ、闘技場は室内でありながら、床の代わりに土の地面が広がっている。カーエスの話によると、設定次第でこの闘技場はどんな環境にでも変化させることができるのだという。

彼らが闘技場にやってきた時は、何組かの師弟がそこで戦闘訓練を行っていた。

カーエス達がやってきたのを見て、三組とも訓練を中断し、カーエスに用件を聞く。カーエスは親しそうにその教師や生徒に挨拶をすると、苦笑しながら頼んだ。

「いや、わがままですんませんが、ちょっとここ使わせてくれませんか？」

「我々が退かなければ駄目なのか、カーエス？ 向こうの方は空いてるぞ」と、闘技場の一角を指差して言った。

「いやいや、ちょっと本気でやり合うつもりなんで、闘技場内に人がおると危険なんですわ」

カーエスのその言葉に、教師達は顔を見合わせた。

そしてお互いに頷きあうと、生徒と一緒に闘技場の外に出た。

「これでいいか？」

「へえ、すんません」と、恐縮して頭を下げるカーエスに、教師の一人が微笑みかけて言った。

「いや、ファトルエルに出場したカーエス、ルジュリスの、滅多と見られない本気だ。代わりにと言っちゃ何だが、我々も見物して勉強させてもらおうでしょう」

「ハハハ、そんな価値あるかどうか分かりませんがね。ともかく、感謝します」と、カーエスはもう一度頭を下げ、闘技場の中に入ってジェシカを手招きした。

ジェシカは頷くとカーエスの後について行く。

そして、二人は広い闘技場の真ん中に、三メートル離れて向かい合った。

二人の真ん中にリクとコーダがやってきて、交互に見回しながら注意する。

「じゃ、これからカーエスとジェシカには決闘をやってもらうが、これはあくまで仲間内の喧嘩の延長だ。相手を殺してしまう、もしくは障害が残るような怪我を負わせるなんて事のないようにしてくれ。それ以外は何でもアリ。それでいいな？」

「それでええよ」

「了解しました」

二人が頷くのを確認すると、リクは片手に一つの小さなボールを具現化させた。

「このボールが地面を跳ねるのが合図だ」

そう言つて、リクはそのボールを真上に放り投げ、コーダと共に闘技場の外に小走りで出て行く。

二人は、リクの手から離れたボールを目で追いながら、腰を落とす身構えた。

そして、ついにボールが地面につく。

同時に、呪文を唱える声幅広い闘技場に響き、戦闘が始まった。

「《電光石火》によりて我は瞬またたく早さを得ん！」

「防ぐな、返せ《弾きの壁》！」

《電光石火》で光に近い早さを得て、ジェシカの姿が消えると同時に、カーエスも呪文を唱え、物理攻撃を弾き返す障壁を自分の周囲に張る。自分に向かって突っ込んできたジェシカを弾き返そうという魂胆である。

しかし、ジェシカの《電光石火》はカーエスとの間合いを縮める為に唱えたものではなかった。次の瞬間、彼女が現れたのは何とカーエスの後ろである。

何も、ジェシカはカーエスの死角に入って姿をくらませようと思つていただけではない。ただ単に、背後からの攻撃が一番反応しにくいと判断したからだ。

案の定、カーエスは瞬時に背後にいる自分の気配を察知したものの、今から自分が行おうとしている攻撃への防御に入る様子がない。

構えられたジェシカの槍に魔力が込められ、槍が光を発し始めた。その槍を思いきりカーエスに向かって突き出した。

「流星突」っ！」

突き出した槍がのびるように、魔力の光線がカーエスに向かって伸びて行く。

自分の顔面に向かって伸びてくる光線に向かって、カーエスはそれを受け止めるように手を差し出した。そしてやや緊張した面持ちで呪文を詠唱する。

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増して反射する！」

すると、カーエスの手の平に、明るく輝く障壁が現れたかと思うと、そこに突っ込んできたジェシカの光線を受け止め、それを跳ね返した。

しかも、跳ね返った光線はジェシカが放った時とより太さが二倍になっている。

この《増幅する魔鏡》は、魔法攻撃を跳ね返す障壁で、追加効果として、跳ね返した時にその魔法の威力を倍増する効果がある。一見、攻守の両立した素晴らしく便利な魔法に見えるが、とにかく難易度の高い魔法だ。

普通、カーエスの若さでもとにも扱えるようになる魔法ではない。

そうして倍に増幅され、元の術者の元へ弾き返された光線だったが、その光線の向かう先にはもうジェシカはいなかった。

そのことに気付いたカーエスは、不意に危機感を憶え、その場から飛び退いた。

その次の瞬間、

「昇星突」っ！」と、今までカーエスが立っていた地面の下からジェシカが飛び出してきた。おそらく跳ね返された瞬間、《地潜り

《》を使って地中に逃れていたのだろう。そこでカーエスの真下に移動したのだ。

その点を中心に、衝撃波が派手に土や石を飛ばし、ついでに咄嗟とっさによけたカーエスも尻餅をつかされるが、彼はその口元に笑みを浮かべた。

「燃え立ち上がれ、《火柱》っ！」

“昇星突”で、空中にいるジェシカの真下に赤い円が描かれる。

《火柱》はこの円内にあるものを燃やすという攻撃魔法であるが、簡単にできる割に威力が高い。しかし、呪文を唱えきってから実際に魔法が発動するタイミングに大きなズレがある為、非常に避けやすいというデメリットもある。

しかし、今現在、ジェシカは空中にいる為に避けるという行動自体が出来ない。カーエスはその隙を見逃さなかった。

「《耐火》よ、我に火をも恐れ得ぬ肉体を！」

《火柱》発動の直前、ジェシカが唱えた。それとほぼ同時に彼女のからだか《火柱》の激しく燃え盛る炎に包み込まれる。

だが、ジェシカは皆が注視するまま、無傷でその炎の中から歩み出てきた。

「……初っ端からエライ攻防スね」

「ああ、あいつら楽しそうだなあ」

リクとコーダは、おそらく模範試合等の観覧をする為に闘技場の外に設けられている客席に座り、完全に観客気分でその闘いを見つ

めている。

さっきの三組の師弟もカーエス達の攻防に、感嘆の吐息をついていた。

「今んところ、ジェシカさんがやや押ししてやスね」

「でも、カーエスの方が弱いわけじゃない。闘いの相性があまり良くないんだ。普通の魔導士の攻撃なら、相手の攻撃を読んで、それに対応する防御魔法を唱えればそれで済む。でも、魔導騎士の攻撃は比較的分かりやすい代わりに防ぎにくい。

しかもジェシカの場合は分かりにくいところを、更にフェイント等を織り交ぜて攻撃してくる。あんなことされたら俺だってたまんねーよ」

一連の攻撃の後、再び向かい合ったカーエスとジェシカだったが、始めと違い、先に動いたのはカーエスだ。

地面に手を当てる、唱える。

「大地よ、我が魔力に育まれよ！ 若草よ、萌えよ！ 花よ、咲き乱れよ！ 樹木よ、繁れ！ 高く広く伸び広がりて、あの空を覆い隠せ！ そしてここに生まれよ、多くの命をその手に抱く《恵みの森林》！」

すると、カーエスを中心に、何本もの木や草が生え、あつという間に小さな森林が完成してしまった。

「いい手だな」

《恵みの森林》が出現するのをみて、リクは一言、そう呟いた。
「コードダがリクを振り返って訪ねる。」

「え？ でもジェシカさんを直接攻撃する魔法じゃないでしょう？
フェイント目的でも、防御魔法でもなさそうだし……、まあ、死
角がたたくさんできると言えば、効果的かもしれやせんけど……」

コードダの言葉に、リクは首を横に振って答えた。

「違う。確かに死角がたたくさんできることはできるけど、あの魔法
の使い道は別にある」

「使い道……スか？」

「そう。カーエスの闘い方はかなり合理的で、その場にある地形、
つまり要素を利用して闘う。例えば、森があれば木属性、地面があ
れば土属性の攻撃を行うわけだ。そうすると、『その場にはない要素
を作る』って作業が必要ない分、素早く魔導を行うことができるわ
けだ。」

ところが、さっきまであの場所に合った要素は土しかなかった。
あれじゃ、空気があれば使える熱気や冷気、電気を使った攻撃以外
は土属性の攻撃くらいしか素早くできる魔法がない。だからああや
って森を作って、闘技場にある要素を増やしたんだ」

そしてリクは、闘技場の方に目を戻した。

「ここから面白くなるぞ」

（少し攻めにくくなったな……）と、目の前に広がる森林を前に、

ジェシカは心の中で呟いた。

攻めにくなつたとは言つても、ジェシカの位置からはすっかりカーエスの姿は見えるし、木々の間隔は十分に広いので、カーエスの元に行くまでに邪魔されることはないだろう。

ただし、森林に攻め入つた場合、どんな魔法が自分を襲うかわからない。森林になつている小部屋一つ分の領域の主は間違いなくカーエスなのだ。

「けえへんのならこつちから行くでっ！ 地走れ、こほし《絡み上げる根から》！ 樹木を支える強さで我が敵捕らえんがために！」

カーエスが、そう呪文を詠唱し、地面に手をやる。

外見上は何もおおらなかつたが、ジェシカの表情は厳しくなり、意を決したようにカーエスの方に向かって走り込む。

すると、さつきまでジェシカが立っていたところから太い根が突然地面を突き破つて現れた。もしあの場に留まっていたら、あの根に捕らえられていたに違いない。

ジェシカは森林の手前で立ち止まると、槍を構えた。槍に魔力の光が宿りはじめる。

「“流星突”っ！」

そう叫んでカーエスに向かって槍を突き出すと、槍から光線が真直ぐカーエスの元に伸びていく。それに対し、カーエスは先程と同じく、光線を跳ね返そうと光線に向かって手を伸ばし、《増幅する魔鏡》を唱えた。

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増し

て反射する！」

その魔法が発動し、カーエスの手の平には魔法攻撃を跳ね返す強力な障壁が生まれたが、光線はそこには来なかった。

突然“流星突”の光線が曲がり、下向きにコースを変えてカーエスの足元に突き刺さったのだ。そしてその威力で、カーエスの足元の地面が爆発した。

相当量の土がカーエスの前に舞い上がり、その視界を奪う。

「うっ……………！」

「馬鹿め、何度も同じ手口で攻めるものか！ 猛者たる条件は《強力》、魔力よ、理力の源となりて我を猛者と成せ！」

筋力を増幅する《強力》を唱え、まだカーエスに向かって突進を開始した。

そして更に唱える。

「《電光石火》によりて我は瞬く早さを得ん！」

《電光石火》は光のような早さで動けるようになるのだが、如何せんそれによる攻撃は威力に欠ける。それでも十分相手の体勢を崩すのに重宝する魔法であるが、今回は《強力》を使い、足りない攻撃力をも補っている。

しかもカーエスは今、先の“流星突”に舞い上げられた土に襲われ、大きな隙ができています。この状態で、この攻撃に対する防御行動をとる事は難しいだろう。

そんな確信を持って、猛然とカーエスに襲い掛かったジェシカだったが、後少して槍がカーエスを捕らえようとする直前に槍が止まった。

「防ぐな、返せ《弾きの壁》」

カーエスによって張られた、物理攻撃を尽く弾き返す障壁によってジェシカが後ろに吹き飛ばされた。

「なっ……！？」

一瞬前まですぐ近くまで迫っていたカーエスの顔が急速に遠ざかって行く。その表情は不敵な笑みに染まっていた。

ジェシカの心の内は疑問に満ちていた。今カーエスは視界を閉ざされていたはずである。なぜ、それなのに《電光石火》に対する防御行動がとれたのだろうか。

そんなジェシカの疑問をよそに、カーエスは弾かれて飛んで行くジェシカに対し、更に続けて唱えた。

「棘持ちし蔦^{つた}は伸びて絡みて《茨の網》に！」

ジェシカの後方にあつた二本の木から、それぞれ棘がついた蔦が伸び、それが絡まりあつて網となる。そしてそこにジェシカが背中から突っ込んだ。いつも彼女が着込んでいる軽甲冑のお陰で棘によるダメージはないが、それでも衝撃は相当なものがあった。

カーエスはこの機を逃すまいと、《茨の網》に捕まったジェシカに駆け寄っている。

「我が魔力よ集まれ、敵を見据えよ、そして喰らわせろ……」

その呪文を耳にしたジェシカは戦慄した。

《ぶちかまし》だ。属性や特性がない、純粹に衝撃のみ与える魔法。以前、ファトルエルでこの魔法を目にした事があるが、最高レベルに恥じないその威力は目を見張るものがあった。

まともに喰らえばタダではすまない。

「我が前に築かれよ、《石墨》^{せきめい}！ その強固によりて、我が敵の阻
みとなれ！」

「……瞬く力を敵にぶつける《ぶちかまし》っ！」

彼女の眼前に石でできた壁が現れるのとはほぼ同時に、カーエスの
《ぶちかまし》が炸裂し、築かれたばかりの《石墨》に大きくヒビ
が入った。

その間に何とか《茨の網》から逃れて動けるようになったジェシ
カは槍を構え、目の前の《石墨》を見据え、槍を構えた

「我得るは《一時の怪力》！」

一時的に筋力が大幅にアップする魔法を唱え、構えた槍を石の壁
にむかって思いきり、突いた。

「“群星突”っ！」

ジェシカの槍はヒビの入った《石墨》を砕き、その大きな石片が、
散弾のように勢い良く散らばり、その向こうにいるカーエスに襲い
掛かった。

「くっっ……！」

カーエスは咄嗟に回避行動を試みるも、石片の数が多いため、到底
避けきれぬものではなかった。

ジェシカは、自分が放った攻撃が確実に相手にダメージを与えて
いるのを確認した。

が、次の瞬間、彼女自身も下から何かに突き上げられ、宙を舞っ

た。

「かつ……は……!?!」

見ると、さつきまで彼女が立っていた場所が極端に隆起している。これは《大地の拳》といい、相手の足元の地面を極端に勢い良く隆起させる事で、アッパーカットのように相手を下から突き上げる魔法なのである。おそらく、《ぶちかまし》で失敗した直後に呪文を詠唱したのだろう。

結果的に、“群星突”と同じタイミングで発動し、相打ちとなったわけだ。

二人は申し合わせたようなタイミングでゆっくりと起き上がると、互いの傷を確認した。

カーエスは、身体の各所に軽い打撲をおっており、露出している部分には痣も見て取れる。ジェシカは、顎に擦り傷があり、《大地の拳》に殴られた時に口の中を切ったらしく、口の端から血が流れていた。

「なかなかやるな、カーエス。ルジュリス。リク様は相手を殺したり、相手に後遺症を残したりしないように言っておられたが、ここからはお互い遠慮なしで闘わないか？」

ジェシカは静かにそう言って、今まで丸い柄の方をカーエスに向けていたスピアをひっくり返し、改めて鋭く尖った槍穂やりほをカーエスに向けて構えた。

カーエスもニヤリと笑うと、眼鏡を外し、観客席にいるリクの方に放り投げた。その眼鏡の下から現れたのは、何もかもを見透かすような澄んだ碧眼へきがんである。

「その話、乗らしてもらおうで、ジェシカ＝ランスリア」

15 『切り札をさらけ出しても』

勝って嬉しいのは、相手を強いと認めているから。負けて悔しいのは、自分も強いと思っっているから。

闘えば分かるお互いの本心、そして実力。

闘う内に、心に根ざす意地など融とけて無くなる。

ただ相手の強さを認め、素直にそれに勝ちたいと思う。

それは益のない勝利かもしれない。

だがそれでも、どうしても勝ちたいと思う。

その勝ちが、後に自らの損を招き寄せるとしても。

「初ダメージは両者相打ちスか……。凄い闘いになりやしたね」

「ああ、滅多に見られるもんじゃねーよな」

そう言っリクは右手でカーエスから預かった眼鏡を弄もてあそびながら頷いた。

それは、後ろの三組の師弟も同じ意見のようだ。二人の息もつかせぬ攻防に、皆固唾かたすを飲み、まばたきするのを忘れるくらい凝視めいししている。

「ところで、さっきジェシカさんがカーエス君の《弾きの壁》に弾き飛ばされやしたよね。あれは何でなんスか？」

あの時、カーエスの視界はジェシカの攻撃で舞い上がった土で塞ふさ

がれていたはずだ。しかも《弾きの壁》は魔法効果が短い為、唱えるタイミングが難しい魔法なのである。はたから見ても、ジェシカの姿が見えなかったカーエスがどうして、あのタイミングで《弾きの壁》を使用する事ができたのか説明がつかないのだ。

「あれはただのカン……と言いたいとこだけど、多分《電光石火》のせいだろ。あの魔法は一瞬で移動出来る。だから、カーエスはあの呪文が終わった後すぐ《弾きの壁》を唱えれば、それでタイミングは合うんだ」

もちろん、ジェシカがその危険性に気付いてタイミングをずらす可能性も多分にあったが、それでも何もしないよりかは遙かにマシな手だった。

ただ、視界を失い、多少の混乱は仕方がなかった状況で、それだけの判断を行える魔導士は中々いまい。しかもカーエスは弾き飛ばしたジェシカを《茨の網》で捕らえ、《ぶちかまし》で追撃を行ううとしているのである。

「それを返すジェシカもジェシカだと思っけどな」

ジェシカもまた《弾きの壁》で吹っ飛ばされた時点で思考力を失っただけでも可笑しくはなかったが、正確にカーエスの動きを確認し、《石墨》^{せきるい}で《ぶちかまし》を防いだばかりかその《石墨》を使って反撃さえしてみせたものである。

リクが今まで呼んだ書物の中にこう書かれたものがあった。魔導士としての最大の資質は持っている魔力の大きさや性質、魔導制御力、憶えた魔法の数などではなく、どんな状況でも冷静に、適切な魔法を行使できる判断力なのである、と。

その条件によれば、カーエスも、ジェシカも、魔導士の資質として最上のものを持っている事になる。

「兄さん、ホントにあの二人と闘って勝ったんスか？」

そのコードのからかうような質問に、リクは苦笑して肩をすくめた。

「俺自身も疑わしくなってきたところだ。まあ、二人とも精神的にキツイ時期にだったらしいからなあ。今やったらどうなることやら」

君は自由になれるんだ。罪を償いきり、堂々と自由に生きられるんだよ。

ダクレーの研究室を出た後、リク達が向かったはずのテイタの研究室に向かつて歩いて行くフィラレスの脳裏には、そのダクレーの言葉が反芻はんすうされていた。

償えない罪だと思った。だから、これ以上人を傷付けない為に、罪を重ねない為に、世界の猛者もてさが集まるファトルエルの大会で自分を殺せる人間を見付け、自分の命を捨てようと思ったのである。

ところが、償う方法が見付かった。確かに、自分が“セーリア”の動力源となり、エンペルファータを守れば、魔導文明自体を守ると言う事になる。確かに自由は無くなるが、死ぬわけではない。

元来、フィラレスは奉仕欲の強い少女だった。要するに健気なのである。しかし、“滅びの魔力”の発現以来、人の役に立つどころか傷付け、迷惑をかけるばかりの自分を、フィラレスは酷く疎まし

く感じていた。だが、それも無くなる。

この事を知ったら、リク達は止めるだろう。必死で止めてくれるだろう。だが、彼らと一緒にいても自分はほとんど役に立たない。

そんな事を考えている内に、テイタの研究室に着いて、ノックをしようと思った時、丁度テイタが扉を開けて出てきた。いきなり顔を合わせた二人は、お互いに目を丸くして驚いた様子を見せたが、相手を認識すると、すぐにその緊張状態は解かれた。

「なぐんだ、フィリーじゃん。扉を開けたらいたからびっくりしちゃったよ。カーエス達ならここにはいないよ。今、学生ラウンジで待たせてあるんだ。アタシも今行くところだったからさ、一緒に行こう」

テイタはフィラレスに向かって明るく笑いかけると、取り敢えず中央ホールの方に向かって歩き始めた。

歩行の際に、足から伝わってくる一定の振動が、フィラレスを再び思考の沼に沈める。

いかに健気なフィラレスとは言え、ほとんど死んだと同じ状態になることに全ての心を挙げて賛意を抱いているわけではない。死ぬつもりで臨んだそのファトルエルの大会の直前ならば、それこそ一欠片の迷いさえも起こらなかつただろうが。今は、あの時とは違うのだ。彼女の中では罪を償えるという事に喜びと魅力を感じる一方で、“セーリア”の動力源となる事を拒否する心があった。リクへの恋心である。ファトルエルで彼と出会い、自分の気持ちを自覚してからというもの、毎日がとても幸せに感じたものだ。

彼と離れたくない。彼の言葉を余さず聞きたい。昨日一晩リクと

離れた所為か、今日のその想いはより強い。今も、用事が思ったより早く終わり、一刻も早く彼に逢あいたい一心で歩を進めているのだ。だが、大きな罪を背負う自分が、こんな幸せに浸ひたっているのだらうかという気持ちもある。以前の自分なら許さなかっただろ。そんな意識を揺らがせる程に、リクと共にいるという事はフィラスにとつて魅力的な事なのだった。

恋心と罪の意識。昨日までバランスをとっていた二つの心が、今は彼女自身を引き裂かんばかりに心を引っ張り合う。

「フィリー……ちょっと、フィリー？」

ティタの声に呼ばれて、フィラレスははっと目を上げた。物思いにふけてしまい、我を忘れていたらしい。

慌てて自分を見つめ返すフィラレスにティタが訪ねた。

「どうかしたのかい？ 浮かない顔しちゃってさ」

フィラレスはふるふると首を振った。

とりあえず、その答えにはあまり興味がなかったのか、ティタは大して反応を見せず、周りを見渡している。

いつの間にか、彼女らは学生ラウンジに辿り着いていた。

今は休み時間となっているため、数十人からの生徒達が談話ふけに耽ひたっている。

ティタの話では、ここでリク達が待っているはずだったが、取り敢えず見える範囲に彼らの姿はない。

「おつかしーなー。待ち合わせの時間まで魔導学校でも探検してるのかねえ」

時計を見てみると、待ち合わせの時間まで、まだ大分時間がある。ずっと座って待っているというのも不毛だと考えるのは不自然な事ではない。

仕方がないので、彼らがここに戻ってくるまで二人で待っている事にした。

近くのの椅子に腰掛けようと椅子を引いた時、一人の魔導学校の生徒が学生ラウンジに走り込んできた。

「みんなア！ 闘技場にいつてみる！ カーエス先輩が闘ってるぞ！」

「え！？ マジで！？」「誰とやってんだ！？」

「昨日一緒にいた鎧の女だ！ めちゃめちゃ盛り上がってるぜ！」

「マジマジ！？」「何で何で！？」「すぐ見に行こう！」「授業なんかクソくらえだ！」

その騒ぎに、フィラレスとティタは思わず顔を見合わせた。

「カーエスと……ジエシカが？」

闘技場はかつてない程の盛り上がりを見せていた。

この闘技場では定期的に魔導学校の生徒達による試合が行われ、毎回盛り上がるのだが、今回は別格だった。

今行われている試合のレベル自体が別格だからという事が、その第一の原因だった。同じ魔導学校の生徒とはいえ、既に教師達でもそうそう適う者のいないであろう実力を持つカーエスと、彼と互角

に渡り合う女騎士。

双方の實力は素人目に見ても拮抗きつこうしており、双方全力に近い實力を發揮して、その技を競っていた。

手に汗握る闘いに、見る者達はすっかり興奮してしまっている。

今にも闘技場内に流れ込みそうな勢いで、闘いに魅入みいっている者達をかき分けて、ティタは闘技場の縁の席で闘いを見守っていたりクとコーダを見付けた。

リクはティタの姿を見てたいそう驚いた。あわててコーダに時間の確認を頼む。

「あはは、まだ時間は大丈夫だよ。学生ラウンジに来てみたら皆騒いでたもんでね。ところで、一体全体こりゃどうということ？ 何でカーエスとジェシカが闘ってるんだい？」

その問いに、リクがかいつまんで事情を説明した。

「……呆れた。これがただの喧嘩なんて、ここにいる人間の何人が信じるだろうねエ？ まあ、こういうノリは嫌いじゃないからいいけど。それより面白そうだし、アタシも見物させてもらうかな」と、ティタはリクの隣に腰を下ろした。

フィラレスも、不安げな視線を闘う二人に投げかけながら自分も腰を下ろした。

「で、今のところの戦況はどうだい？」

これにはコーダが答えた。

「見ての通り拮抗している感じスよ。最初はジェシカさんが押してたんすけど、あの森を魔法で出してからは、あの森を利用している

いろ仕掛けていやス」

接近戦になると、白兵戦中心のジェシカが圧倒的に押すが、カーエスも隙を見逃さず距離をとって魔法戦に持ち込む。

さつきから、そのパターンの繰り返しだ、とコーダはテイタ達に説明した。

「で、リクはどっちが勝つと思う？」

「さあ、俺には分からねーな。……だが、強いて言うなら、先に本気を出した方が勝つんじゃないか？」

リクの発言に、テイタは首を傾げた。

彼の視線の先にいる二人は、今現在、激しい魔導戦を繰り広げている最中だ。どちらも相手の手を良く読み、隙を見付け、勝負を決めるべく攻撃に移る。

そのどろろが本気の勝負ではないと言うのだろう。

「このままだったら勝負は付かない。自分が隠しもっている“切り札”を使わない限りな」

「“切り札”？」

テイタが聞き返したのを受けて、リクが頷いた。

そして続ける。

「平たく言やあ、一撃必殺魔法だよ。放てば最後、並みの手段や魔法じゃ防御不能って代物だ」

「そんなのがあるなら、さっさと使えばいいじゃないさ」

拍子抜けしたようなテイタの意見だったが、リクはそれには首を横に降って答えた。

「勿体振ってこそ“切り札”なんだ……って冗談は置いておいてだな、やっぱり自分の“切り札”は温存しとくべき物なんだよ。いきなり使われるから、“切り札”は“切り札”でいられるんだ。頻繁に使ってたら対策が練られ、簡単に対処できるようになる。つまり、その時点で“切り札”は“切り札”じゃなくなるんだ」

この試合は大したペナルティもない。お互い、命をとる為に闘っているわけでもないし、何か大切な者を賭けて闘っているわけでもない。そんないい加減な試合程度で“切り札”は使うべきではないのだ。

ところが、今の局面では“切り札”を使わなければ勝負が付かない。切り札は使いたくない。しかしお互い負けたくはないだろう。

「両方とも、そんな葛藤かっとうに悩んでいるはずだ。だから、より相手に勝ちたいと思っている方、つまり自分の“切り札”を晒してでも勝つ方を選んだやつが勝つ。ただ……」

「ただ？」

聞き返したティタに対し、リクは少し間を置いて答えた。

「俺は、この勝負は勝ち負けじゃないと思ってる。問題はそれに二人が気付くかどうか、ってことなんだ」

「光を持って光を奪え、《目くらまし》っ！」

掲げられたジェシカの手の平が太陽のように眩まはく輝いた。そのあまりの眩しさに、その場にいる全員が、一瞬目を閉じてしまう。

ジェシカはその隙に《電光石火》を使って、カーエスとの間合いを一気に詰めた。

「もらった！」

確信に満ちた発言と同時に槍を突き出した次の瞬間、彼女の表情が凍り付いた。

眩さに目を閉じていたはずのカーエスが目を開けていたのだ。そしてカーエスは突き出された槍をひよいと避けると、ジェシカの懐に潜り込んで魔法を詠唱した。

「風を集めて凝らせし《風玉》よ、触れし者全てを吹き飛ばせ！」

詠唱と共に風がカーエスの掌中に集まり、凝縮され、一つの玉を形作った。彼はそれを彼女の腹部に向かって放つ。それがジェシカに当たった瞬間、それは小さな竜巻きと化し、ジェシカは、その風圧に数メートル後方まで吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされている間、ジェシカは自らの愚行を反省くじろしていた。

（失態だ。“先読み”の能力を甘く見ていた……！）

カーエスの“魔導眼”は魔力を見る。つまり、魔法を行使する為に行う魔導を見る事ができるわけで、それを見れば、その魔導で次にどんな魔法を使おうとしているのか、常人より遙かには早く判断できるのである。

先程の《目くらまし》も、ジェシカが魔導を行った時点で見抜かれ、あの光が放たれた瞬間は目を瞑つむって眩しさに光を奪われる事を避けていたのだろう。

一方のカーエスはこの機を逃さず、ジェシカを追撃せんと呪文を

詠唱していた。

「木の葉達よ、刃を持って！ 風に乗って舞い踊り、《木の葉乱舞》となりて我が仇を切り刻め！」

詠唱が終わった瞬間、強風が巻き起こった。カーエスの《恵みの森林》に生える木々をなぎ倒さんばかりに吹き荒れ、その木の葉を千切りとる。

千切りとられた木の葉は風に乗って舞い上がり、体勢を崩しているジェシカに殺到した。

「くっ……!!」

ジェシカは何の防御行動がとる事も出来ずに木の葉達に教われ、顔や手など露出している部分に切り傷を作って行く。

しかし、数は多いものの、木の葉一つ一つの攻撃力は無視していてもいい範囲だ。少し我慢していれば、十分に体勢を立て直し、反撃に出る事ができるだろう。

何とか立ち上がって、攻勢に出ようと考えた時、ジェシカは自分の足元を見て戦慄せんりつした。

足元には、赤い円が描かれていた。

「燃え立ち上がれ、《火柱》！」

「《耐火》よ、我に火をも恐れ得ぬ肉体を！」

咄嗟に唱えた防御魔法の効果が現れ、ジェシカの肉体を火に耐えうるものにした時、《火柱》が発動した。赤い円に囲まれたものを焼き付くさんと炎を上げる。

しかしそれだけでは終わらなかった。

ジェシカの周りにあるのは、《木の葉乱舞》で飛ばされた木の葉

達だ。その木の葉に燃え移り、《火柱》は周りを明るく照らす程に激しく燃え盛る。

その炎は《耐火》で防護している身体をも焼き、ジェシカの身体を焦がし始めた。

(いかん……このままでは……！)

この状況を脱出する術は幾つかあった。そのうちの一つが通常の魔法を使うもの、そして更にもう一つは自分の“切り札”を出すことである。

普通の魔法で脱出できるのなら、そうするに越したことはないだろう。しかし、それではおそらく決着は付かない。そんな確信に似たような感情があった。

もう一つの方法が“切り札”を使うことだった。これならば脱出することはおろか、決着をあっさりとつけることができる。

しかし、それでいいのだろうか。お互い決着を付けようという気持ちは本物であるが、負けて何を失うわけでもない、いい加減な試合だ。

そんな試合に熱くなり、“切り札”を曝け出してまで勝ちに行く。普段の自分なら、そんな愚行は許さないだろう。いつか、本当の敵に相対した時、“切り札”が“切り札”で無くなってしまっている事を考えれば、ここで勝ちを譲ることなど何でもないはずだ。

だが、彼女の全身は、その常識を無視し、その判断を拒んでいる。

(私はやはりこの男に勝ちたい……！)

“切り札”を出しても勝ちたかった。

それは、試合が始まった当初抱いていた意地からくる感情などではない。実際に今、自分がどうしてカーエスと闘っているのか、考

えても良く分からなくなっていたからである。闘いを始めた当初の腹立たしい気持ちは、今は綺麗に吹き飛んでいた。

単純にカーエスが強いと認めたが故の、純粋な気持ちだった。改めて考え、そんな気持ちに気付いた時、彼女の表情は闘いの最中とは思えないくらいに柔らかいものとなっていた。

(……良からう。貴様ごときには勿体無いかもしれんが、私の奥義、
くれてやるう)

決断したジエシカは気を取り直して集中し、槍を構えた。

槍に魔力が込められ、それが輝き出す。

槍を構えたまま、唱える。

「猛者たる条件は《強力》、魔力よ、理力の源となりて我を猛者と成せ！」

ジエシカの全身に力がみなぎる。

「我得るは《一時の怪力》！」

そしてもう一度唱える。

「我得るは《一時の怪力》！」

槍をぎりぎり引き、炎の向こうに見えるカーエスを見据え、更に槍に魔力が満ちさせた。

「喰らえ……！ 我が槍技の一つの極み、“彗星突”！」

掛け声と共に突き出した槍から、“流星突”とは比べ物にならない

いくらい太い光線が放出される。その反動で出た衝撃が、ジェシカの身体を覆っていた炎を吹き飛ばし、光線はカーエスに向かって一直線に伸びて行く。

その先にいるカーエスは避ける様子も見せず、右の手の平を光線に向かって持ち上げて唱えた。

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増して反射する！」

魔法攻撃を倍にして返す障壁がカーエスの手元に現れ、“彗星突”の光線を迎え撃った。

その時、ジェシカが叫んだ。

「そんな手鏡で、私の奥義が破れるかッ！」

そして光線が《増幅する魔鏡》にぶつかった瞬間、そのあまりの威力に、受けた右手が跳ね上がり、その勢いをもって、カーエスの身体を後方に転がした。

しかし一応、《増幅する魔鏡》は効力を発揮したようで、倍に増幅する事はおろか、跳ね返す事さえ出来なかったものの、方向を変えることはでき、直撃する事だけは避けられた。

しかし、防いだとはいえ、カーエスは無傷というわけにはいかなかった。

“彗星突”の光線を迎え撃った右手が、見た目にも明らかに骨折していた。おそらく迎え撃った時の衝撃がその原因であることはハッキリしていた。

だが、カーエスはジェシカを見据えるのを止めず、さらに呪文を口にしようとしたその時、闘技場にリクの声が響いた。

「そこまでだ！」

全員の注目が集まる中、リクは《飛躍》の魔法を使い、客席から二人の中間点に降り立った。

二人は一瞬、リクに対し、責めるような視線を送ったが、それに答えるようにリクが続ける。

「もう十分だろ？　これは何かが悪かってるような闘いじゃない、ただの試合だ。それに、俺から見ると、この闘いの目的はとつくに果たされているように思えるしな。二人ともスッキリしたんじゃないか？」

リクの最後の問いかけに、二人は黙って構えを解いた。

その二人の様子に、リクは満足そうに頷いた。

「よし。じゃあ、とりあえず、医務室に行かなきゃな。……と、その前に……」と、リクは観客席にいる者達を見上げ、声を張り上げた。「ほら、両者の退場だ。拍手！」

途端に歓声と拍手が闘技場の中に満ち溢れた。

16 『上級魔導士試験』

真に強い魔導士は知っている。
実戦だけでは魔導士にはなれない、
知識を得る為に机に向かう事も必要なのだという事を。

真に強い魔導士は知っている。
魔導士に本当に必要なのは強い魔力ではない、
冷静に適格な魔法を使える優れた頭脳なのだという事を。

真に強い魔導士は知っている。
魔導士がその力をもって、何をすべきかを。

流石に戦闘訓練所で怪我をする人間は多いのか、医務室は戦闘訓練所のすぐ隣に位置していた。

内装は医務室らしく白い壁に、その場にいるだけで癒されそうな観葉植物が据えてある。実際に、その植物、ハーヒルの葉から空気中に散布される成分は、精神を落ち着かせ、自然治癒力を高める働きをするのだそうだ。

その他にも、治療用の魔導器が、ここにはたくさんあった。

「あいつてててて、痛い、痛いっちゅうねん！」

そんな医務室に今響いているのは専らカーエスの情けない声だった。

彼の隣に座っているのは、コーダである。何と医師の免許を持っているという彼は一人しかいない魔導学校の校医を手伝い、カーエ

スの治療を任せられ、彼のあらぬ方向に折れ曲がった右腕を真直ぐに直そうとしているのだ。

「だめツスよ、そんなに暴れちゃ」

そういつて、コーダはカーエスの腕を力任せに真直ぐにする。突然自分を襲った激痛にカーエスは声なき悲鳴をあげる。

「……………つつつつつ！」

「はい、よく我慢出来やした」と、コーダは千変万化のカーエスの表情をととも楽しそうに眺めている。

丁度、薬をとりに通りがかった校医が、その様子を見て眉を潜めた。

「あれ？ 麻酔使わなかったんですか？ あれだけしっっかり折れ曲がってたら直すのにかなりの痛みがともなうでしょうに」

それを聞いたカーエスが顔色を変えてコーダを睨み付ける。

「……………どゆ事なんか説明してもらおか」

「いやあ、カーエス君ってリアクションが素敵だからねえ」

「おんどの目エ楽しめます為だけかいっ！ って……………ひいひい！？」と、しれっと答えたコーダを怒鳴り付けようとしたカーエスだったが、コーダが薬をしみ込ませた布を骨折の患部に当てた瞬間の痛みに、つい悲鳴を挙げてしまった。

コーダはカーエスが固まっている間に、手際良く布の上から包帯を巻き、それを固定した。

「はい、このまま固定してたら明日にはくっついてやスよ」

「おんどりゃ、あとで覚えとれよ……どえええ！？」

痛みに顔をしかめながら、カーエスはコーダを睨み付けたが、今度は擦り傷に消毒薬を塗られ、またもや言葉は中断される。

しかしカーエスは、必死でその痛みに耐え、コーダに今度こそ一言かまそうと口を開いた時、コーダが尋ねた。

「どうスか？」

「え？」

「ジェシカさんに負けた気分」

コーダに怒声を浴びせかけようと思ったカーエスは、毒気を抜かれたように落ち着きを取り戻すと、溜め息を一つついた。

「正直悔しいな。……めっちゃ悔しいわ。最後の《増幅する魔境》、成功せんかったんは、間違いなく最近訓練サボった結果や。カルク先生とかリクとかやったら、倍返しまでは無理でも、無傷で方向を変えるくらいは軽くできとったんちゃうかな」

「そんだけ反省出来てりゃ、もう落ち込む必要なんてないスよ。これから頑張ればいいっス！」

そういつて、彼は包帯に固められた彼の右腕をバシンと叩いた。たちまち、カーエスの表情が固まり、目に涙が滲じんでくる。

「ぎにゃあぁ」

「……相変わらずやかましい男だ」

布一枚隔てた仕切りの向こうから聞こえてくる悲鳴にジェシカが眉をしかめ、こめかみを震わせて呻いた。

彼女も治療中だった。カーエスのように骨折をしているというわけではなかったが、ところどころ火傷や打撲が見て取れる。それは服の下にも及んでいた為、現在、ジェシカは上半身下着姿という格好だった。

校医にそれらの傷に軟膏を塗られて行く様子を見ているのは、フィラレスとティタだ。

「ハハハ、闘ってる時はあんなに寡黙かまくだったのにねエ。今はああやって泣きわめいちゃいるが、骨折した時は顔を歪めさえもしなかったし」

それほど、精神を集中出来ていたのだろう。普段ホニヤララしているのは、その精神の集中度に大きな波があるからなのだ。普段全く集中していない分、ツボにハマると周りが見えなくらいに集中する。自分の腕が折れた痛みにも気付かないくらいに。

「まあ、なんにしても勝って良かったじゃないか」

ティタの言葉に、ジェシカは少し間をおいた後、ぽつりと言った。

「私は、奴に勝てたとは思っていません」

もしあの時、リクが試合を止めず、闘いが続いていたら、自分が勝っていた保証さえない。

完全に決めるつもりで放った一発だった。

まともに喰らって殺す事にはならないだろうとは思っていたが、気絶、もしくはそれに類する戦闘不能状態には陥おちいらせるつもりで放った一発だ。

それをカーエスは右腕一本の犠牲で済ませてしまった。

そして、ジェシカは先に“切り札”を切っただけであり、それがカーエスだったとしたら、自分はそれこそ右腕一本では済まないくらしいの負傷を負っていたに違いない。

「もしあれが本当の決闘ならば、タイミングを逃さなかった私の勝ちだと言う事もできるでしょう。しかしあれは決闘というより、試合です。負けた気はしませんが、勝ったという気持ちも微塵も湧いていません。ただ、私は認めましょう。カーエス＝ルジュリスの魔導士としての強さを」

告白めいたジェシカの言葉を聞いていた、ティタの顔が次第に綻ほころんできた。

その様子に、ジェシカが怪訝けげんそうな目を向ける。

「どうかしましたか？」

「いや、ごめん。ただ、アンタ達二人はちゃんと分かったんだなっ
てことさ」

「は？」

その答えが、ジェシカの顔にさらなる疑問の色を加えた。

「リクがね、アンタ達が闘っている間に言ったんだよ。この勝負は勝ち負けじゃないって。問題はアンタ達二人がそれに気がつく事なんだってね」

その際、どういう意味なのか、というティタの問いに対し、リクはこう答えた。

カーエスとジェシカが喧嘩をするのは、お互いの力を認める事に素直になり切れていないからだ。本当は認めているのだが、認めて

いる事実を認めていない。だから、こうやって闘わせればその点に
関しての意地のよくなものが消えて、お互い素直に認めあえる関係
になれる。

この勝負は、その目的が果たせるかどうか、それが全てなのだ、
と。

「……リク様には適いませんね」と、それを聞いたジェシカが苦笑
する。

「私も、大した器だと思うよ」

テイタも笑みを返すが、何かを訴えかけるような、フィラレスと
ジェシカの視線に気付くと、すぐにその笑みを引っ込めて言った。

「しかしそれと今回の試験は別さ。なにも合格でなくても、私を納
得させる何かがあればいいんだ」

その頃、医務室に程近い小さな教室の机の一つに、リクは一人座
っていた。目の前には一枚の紙と、筆記用具が一揃い置いてある。

その紙にはこんな文が書かれていた。

問四 一般魔法に属する魔法で氷属性と認識されているものを十以
上挙げよ。

問二十七 全世界による魔法についての使用制限条約第三条第二項

の全文を書き出せ。

問三十 フォートアリントンにて可決された条約の内、カンファータ王国とウォンリルグの間に交わされたものを三つ以上挙げよ。

「……参つたな……」

問題がびつしりと書き込まれた問題用紙を前に、リクは深い溜め息をついた。

少し時間は遡^{さかの}る。

カーエスとジェシカの闘いが終わった直後、闘技場を後にして、リク達は医務室への道を歩いていた。

そしてその場にはテイタもおり、彼女は二人が治療をしている間に、とある提案をリクに示したのだ。

「上級魔導士試験!？」

「そう。アンタまだ法認魔導士じゃないでしょ?」

通常、魔導士の定義といえは魔導を行い、魔法を行使できる人物全般を差す。しかし法律上、魔導士として生きて行くには資格をとる必要がある。そして、特に資格をもった魔導士をさす単語が法認魔導士だ。

法認魔導士でない魔導士が魔法を行使する事は法律によって犯罪行為に指定されており、例えばリクが公衆の面前で魔法を使用した場合、保安機関に逮捕されても文句を言えないのである。

しかし資格を得て法認魔導士となれば、魔導士として働ける事に

なり、取り敢えず就職口には困らない上、様々な特権なども生じてくるのだ。

資格を持つ法認魔導士には幾つか階級があり、通常は下級、中級、上級、と繰り上がって試験を受ける事になる。

もちろん、上位の魔導士であればあるほど特権などは増え、影響力も強くなるのだ。

「下級、中級、上級、どれでも試験を受けるのに条件なんてないから、いきなり上級を受けてもOKなわけ。本当は試験日が固定されていて、みんな一緒に受けるもんなんだけど、今回は別の目的だし、特別に試験を受けてもらう。もし合格点をとったら、ちゃんと資格免状も貰ったげるよ。やっぱ“大いなる魔法”に挑戦するからには上級魔導士試験くらい軽くクリアしてもらわないとね」

「なるほど、魔導士としての実力を測るにはオーソドックスに魔導士試験が一番ええ方法かもしれへんなあ」と、カーエスが隣で頷く。それを聞いたティタは思い出したように言った。

「そう言えば、カーエスは上級魔導士の資格を持ってたんだっただね」「せやで。しかも成績は歴代第五位や」と、カーエスは骨折の痛みを顔をしかめながらも笑って胸を張った。

「なら、魔導士試験の結果といえども信頼性を疑いざるを得んな」「どつという意味やねん！」

済ました顔で横やりを入れたジェシカに、カーエスが怒鳴る。また喧嘩になりそうになったところに、コーダが割り込んだ。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。さっきまで思う存分やり合ったばっかりじゃないスカ。で、兄さんは受ける気はあるんスカ？」

話を逸らし、リクに話題を降ると、リクはこくりと力強く頷いた。

「受ける気も何も、やるしかねーだろ」

「よし、イイ度胸だ」

そう言っつてテイタがリクに渡したのは数枚の紙である。

「えっ……?」

「こつちが問題用紙、解答用紙はこつちね。医務室の近くに丁度いい部屋があるから、そこでやんな」

「まさかいきなり筆記試験だとはなあ……」と、リクは彼以外誰もいない教室で呟き、苦笑した。

問題は百問。魔導士にとって必修である魔法学、魔導士法学、歴史学、魔導力学、魔導科学の五つの教科から二十問ずつ出されている。難易度は上級魔導士試験というだけあって高度である。

いきなり筆記試験と聞き、今まで学科試験の類を一切受けた事のないリクは、全く出来ないのではないかと不安になったものだが、自分でも驚くくらいに答えられる問題は多かった。

解ける問題は解き、解けない問題は飛ばす。

そうしてテンポ良く問題を進めている間、リクの脳裏に思い浮かんだのは、彼がまだ魔法を使えなかった頃のファルガールとのやり取りである。

「ねえ、ファル。いい加減魔法を教えてよ。こんな勉強なんてしてても、強くなれないよ」

「喝かつつつつ！」

師・ファルガールの叫びと同時に、彼の袖を引つ張るリクの全身に電流が走った。

激しく身体を痙攣けいれんさせ、床を転がり回る。

「い、いきなり何するんだよ！」

電流によるショック状態から回復してから、リクはファルガールを見上げて抗議した。

その講義にファルガールはリクの前にしゃがみ込むと、彼の目の前に人指し指を突き付けて言った。

「ふざけた事を抜かすからお仕置きしてやったまでだ。勉強は役に立たねえから魔法を教えるだ？ いいか、魔法は感覚で使うものじゃねえ、アタマで使うものなんだよ。だから魔法を使うには、それなりのアタマを作らねえと駄目なんだ」

そう言いながら、ファルガールはリクの額をツンツン突つく。

「そりゃ確かに、何も知らねえでも感覚だけで魔法は使える。だが、感覚に任せて魔法を使うやつは、三流にしかねえよ。本当にどんな状況にでも対応できる一流の魔導士になりたきゃ、アタマで魔法を使える魔導士になれ」

「じゃ、いつになったら教えてくれるの？」

「そうだな、時々テストをやってやる。それで合格点をとれたら、考えてやる。ただし、それで合ってるのが半分以下だったら、さっ

きみてえに電流がくらわせるぞ」

その宣言に違わず、ファルガールはリクにある一定の範囲を指定して勉強させ、リクが自信をつけてテストをしてくれと言った時点で、テストを作ってくれた。

そしてこれもまた宣言通り、テストの結果が悪いと容赦なくファルガールは幼いリクに容赦なく電流を浴びせかけた。

また、ファルガールは旅の移動中も、復習の意味で時々問題を出してきた。それに答えられなければ、やはり電流をくらわせられるのだった。

「……電気を流すなんて、十歳かそこらのガキにする事じゃねーよなあ」

電流のショックは慣れるものではなく、時々死にかけた事もあり、リクはできるだけ電流を浴びずに済むよう、必死に勉強したものだ。

しかし、いざ魔法を覚えてみると、勉強した意味をしつかりと実感出来た。魔導士の大事な資質は知識だと言うが、それは実的に射た意見だったのだ。

また、ファルガールが教えていた内容は、そのまま上級魔導士試験の対策にもなっていたようで、初めて受けるとは思えないくらい見覚えのある問題ばかりが問題用紙に並んでいた。

問五十四 世界歴七六四年、ウォンリルグのケフラーで起こった事件は何か。また、その事件によって、世界にどんな影響が現れたか説明せよ。

問七十六 魔導制御力・八十パーセント、魔力質・六十ポイントの魔導士が魔法を使い、魔法効果七十ガットを得る為に必要な魔力は何マナか求めよ。(記述されている以外の条件は考慮に入れない事)

問九十六 第二式魔石ブロックに描かれたシヴ紋様に、クラリス処理を行うと、どう行った現象が起こるか。

最後の方を占めていた魔導科学の問題を、必死に記憶を掘り返して解いて行った後に最後の問題である第百問を見た時、リクのペンを走らせる手が止まった。

問百 魔導士の存在意義について論述せよ。

「……………」
リクはしばらくその問題を前に思索すると、おもむろにさらさらと簡潔に答えを書き入れた。

**

その頃、テイタと治療を終えたカーエス達はリクのいる教室へと廊下を歩いていった。

歩きながら懐中時計に目を落としたテイタが呟く。

「もうそろそろ終わっている頃だ。さて、どのくらいの出来なのかねえ？」

「意外とボロボロだったりしてなあ。師匠があの方アルガルはんやで？ めっちゃ実践派っぽいやん。勉強なんざくそくらえ、ちゅーて」

「あはは、あり得やすね。あの人なら」

カーエスの意見に、コーダが笑って同意した。

彼らは道中の折、リクからファルガールの指導振りを聞かせられていた。そのほとんどが無茶としか言えないくらいのスパルタ教育の数々だった。その話を聞いた時、一同は大抵、呆れ、リクが五体満足で生き残れている事に驚く。

そんな話をしている内に、件の教室の前に着いた。

教室の扉を開けようとドアに手を伸ばしたが、その前に扉がひとりでに開く。

「うるせー、誰のテストがボロボロだ。人がいないと思って好き勝手ぬかしやがって」

その扉の向こうから現れたのは問題用紙と解答用紙を抱えたリクの姿だ。おそらく、試験を終えた為に、リクの方からテイタに渡しに来ようと考えたのだろう。

「そうすよ、カーエス君。失礼な人スね」

「とぼけんなよ、コーダ。てめーも同意してただろうが」

「あはは、聞こえてやしたか。兄さんいい耳してやすね」

口を尖らせるリクに、コーダは朗らかに笑って応える。
そのやり取りに笑いがなら、テイタがリクの手から解答用紙を抜き取って言った。

「それじゃ、解答用紙は預かせてもらおうよ。採点をするから、その間にお昼御飯でも食べてきな」

「それで、自信の程はいかがです、リク様？」

昼食のスープをスプーンでかき混ぜてさましながら、ジェシカがリクに尋ねた。宮廷仕込みというのか、彼女の食べ方はとても丁寧かつ優雅だ。

ずっと旅して暮らしてきたため、食べ方がやや粗野になってしまっているリクや、まだ細かい仕種に子供っぽい部分が残っているカーエスとくらべると、彼女の食べ方は目立つくらいに型にはまっいて礼儀正しい。

「ん〜、そうだな。八割は確実に合ってると思う。魔法学、魔導士法学、歴史学とかの暗記モノは大体出来た。ただ魔導科学でつまずいたかな。魔導力学の計算がどれだけ合ってるかが鍵だな」

「ほ〜、試験対策も練らんと、ようそんだけとれたな」と、カーエスが素直に驚いて言った。「特に、暗記モンなんて上級魔導士試験のとなれば相当マニアックなやつも出とるよって、俺もあんまし覚えてへんねんけど」

「いやあ……、死ぬ気で覚えたから」

そう意味深に答えるリクの目は遠い。

ふと、フィラレスに目をやると、彼女と目があってしまった。

朝のように慌てて目を逸らすかと思いきや、今回は目があつた事にも気付かないようにジツとリクを見つめている。

どうかしたのか、と尋ねようとも思ったが、きつとフィラレスは首を横に振って何も言わないだろう。

しかし何かの問題を抱えている事には間違いない。

リクは、気が付いていた。エンペルファータに着いた時、フィラレスが見せていた憂うれいの影が深くなっている事に。

お昼時とは言えど、研究員はほぼ全員がまだ作業をしていた。キリのいいところまでやってから、といって結局食事が出来ないという研究者の典型パターンの賜物たまものである。

そんな賑やかな研究室の一角に据えられている机に向かって、テイタは一人リクの解答用紙の採点をしていた。

傍らかたわにおいてある解答を参照しながら、リクの解答用紙に丸とバツを付けて行く。

残り二問の時点で、八十九点だった。あと一点で合格ラインだが、九十九問目は不正解だった。

残るは百問目。しかし、最後の問題はいわゆる、答えの無い問題である。採点者の裁量一つでどうにもなる問題だ。

問百 魔導士の存在意義について論述せよ。

この問題に対し、リクは短く、こう書いていた。

「この世のあらゆる難を取り除くため」

17 『エスタームトレイル』

いかにその理論が役に立つものだとしても、それを使いこなせなければ、やはり机上の空論に終わってしまう。

理論を学び、習得する事。

その理論をもって、訓練を積み、熟達する事。

それがどんな状況にあっても適切な行動をとれる者とするのだ。

ランチタイムが終わり、周りに人がいない食堂で、リクはティタを待っていた。

他の者も、リクに付き合って食堂にいた。しかし一度話題が切れてから、一行の間に会話は無い。

フィラレスは、黙ってリクを見つめていた。これだけ待たされると、さすがのリクも、不安が隠せないらしく、平静を装^{よそお}ってジツと座ってはいるが、指で小刻みに机をたたき、水を何杯も飲んでいる。ジェシカはただ静かに座っていた。コーダは朗^{ほが}らかな表情でリクの様子を見守っている。そんな一行の中で完全にリクを気に掛けていないのがカーエスだ。待ちくたびれたのかテーブルに突っ伏し、居眠りをしていた。

皆、試験結果が気にならないのだろうか、それともリクの実力を信じ切っているのか。

全員の様子をみて、フィラレスはそう思った。本人と自分以外は試験の結果を心配している様子は見られない。しかし本当に他人事だと思っているのなら、元々ここに帰ってくるつもりだったカーエ

スと自分はともかく、ジェシカとコーダはそもそもリクの旅についてきたりはすまい。そうになると、ジェシカとコーダについては、おそらく後者なのだろう。

カーエスも、長い間付き合いの中で把握している彼の性格からして、他人事には思っていないはずだ。ただ、今は心配するより、先ほどの鬨いの疲れで眠ってしまったという事だろうか。

もし、不合格で、ティタの信頼を得られなければ、リクはどうするつもりなのだろうか。

さつきから、リクを眺めるフィラレスの頭を占めているのは、その疑問だった。

リクは、諦めまい。昨日研究室で話した時、ティタが言っていた通り、研究室にある本を、全部読む根性があれば、彼女に聞かなくても場所は分かると言っていた。彼女に聞けなければ、リクはそれをやり遂げるだろう。

そしてその場所に旅立ってしまう。

その時、彼は役立たずな自分を連れていってくれるだろうか。

カーエスはどうするのだろうか、この魔導研究所に残るのだろうか。それとも、すでにここで学ぶ事がなくなった今、故郷に帰ったり、他の場所で仕事に就いたりするのだろうか。

フィラレスは、それを考えると憂鬱ゆううつな気分になる。

たった一週間ではあったが、リクを中心とする自分達五人のパーティは、自分にとってとても居心地のいい“場所”だった。それがバラバラになるのはフィラレスにとって余り歓迎したくない事だ。

旅をしている一週間、なるべくそれを考えないようにしてきたが、目指すエンペルファータが近付くにつれて、否が応にもその思いは強くなった。

また、その事を考えている自分に気付き、フィラレスはぎゅっと

目を瞑り、軽く頭を振る。その拍子に足音が聞こえてきている事に気がつく。誰もいない食堂には足音がハッキリ響く。其の足音は食堂に向かって近付いてきていた。

リクが水の入ったグラスをテーブルに置き、視線を食堂の入り口の方に向けた。

果たしてそこから姿を現わしたのは、彼等の待ちわびていた人物だ。

「お待たせ。採点できたよ」

「ずいぶん遅かったんだな」と、リクが不満気に言った。口に出したのはそれだけだが、その表情でハッキリと、一刻も早い結果発表を求めている。

しかし気付いているのか、いないのか、ティタは答えを焦らすように、口に出した質問にだけ答えた。

「そりゃ、あの試験は選択問題じゃないからね。簡単には採点できないさ」

「それで？」

「ちゃんと部分点もつけてあるよ。三角ふたつで丸ひとつの計算」

あからさまに焦らしているティタに対し、リクは焦燥感を露にして彼女を睨み付けた。

予想外に素直な反応に、気をよくしたのか、ティタは悪戯っぽい笑顔を見せて、さらに続けた。

「それにしても、アンタの字はちょっと汚いね。ところどころ読みにくかったよ。特に最後の方」

「いい加減にしてくれよ、ティタ。早く結果を教えてください」

ついに、リクが懇願するように言い、ティタに詰め寄った。

するとテイタは吹き出し、その場にうずくまって笑い出した。

リクは不機嫌そうに眉を寄せるが、これ以上詰問しても仕方が無いと判断したのか、ただ笑っている彼女を見下ろすだけだ。

テイタはひとしきり笑うと、深呼吸をして苦しくなった息を整える。

「ははは……ふう、ご、ごめん。なんか思ったより、素直だから
いがいがあったもんで、ついね」
「うっ」

テイタの言葉に、リクは苦い顔をする。つい一週間前までの十年間、よみがえ師匠のファルガールにさんざんからかい倒されてきた思い出が蘇ったのだろう。

呼吸を完全に整い終えたテイタは、一つ咳払いをすると、改めてリクに向き直る。そしてリクの顔を覗き込み、改まった口調で言った。

「では、上級魔導士試験における、魔導士・リク＝エールの試験結果を伝える。汝、リク＝エールは、この試験に………」

次の言葉を、リクは固唾を飲んで待ち受ける。

「……………」

しかし、テイタは彼の瞳を覗き込んだまま、動かない。

「……………」

まるでにらめっこをしているかのようになり、彼の目から視線をはずさず、動かない。

「……………」

「…………… ティタ」

「あははは、ごめんごめん、つい」と、ティタは小さく笑った。「合格だよ、合格。ギリギリだけどアンタ合格」

それを聞いたリクが、ほっと胸をなで下ろす。

「軽いなあ、さんざん焦らしといて」と、いつの間にか目を覚まし、一連のやり取りを見ていたカーエスが呟く。そして続けて言う。「ほんじゃ、次は実技のアレですか？ それとも面接？」

「面接はナシ。改めて話す事も無いしね。次は実技試験だよ」

その会話で出てきた意味深長な言葉に、リクは眉を潜めて尋ねた。

「アレって何だ？」

「“エスタームトレイル”の事でしょうね」と、答えたのはジェシカだ。今は辞めたとは言え、彼女には元々カンファータ魔導騎士団の副団長を勤めていた経歴がある。

その地位にあつたからには必然的に上級魔導士である必要があるであろうことを考えると、彼女も上級魔導士試験を経験し、資格を持っているのだ。

「名前だけ聞いてもわからねーんだけど」

「まあ、見れば分かりやすよ」と、今度答えたのはコーダだ。彼が資格を持っているのかどうかは不明だが、便利屋をやっている物知り彼の事だ、知っていても不思議では無い。

そのコーダに答えてティタが言った。

「そういうこと。まあ、ついでで」

ティタがリク達を連れて行ったのは、魔導学校棟の戦闘訓練所の奥にある一室である。外見からして嚴重そうなその扉を、ティタは自分の“鍵”を使って開け、リク達に中へ導いた。

部屋の中は正面の大きなものを含む二、三のモニターや様々な機材が置かれており、その部屋のまん中には移動用と思われる魔法陣が光り輝いている。

ティタはリク以外の一同を連れて、その魔法陣の向こう側に回り込んで言った。

「その魔法陣がエスタームトレイルの入り口だよ。この試験の基本的なルールはたった一つ。そこから行ける通路、それが“エスタームトレイル”なんだけど、その一本道にそって進み、突き当たりにある魔法陣に乗ってここに帰ってくればいいだけだよ」

「エスタームトレイル内でどう行動するかであんたの合否が決まるって事やな。ただここに帰ってくるだけじゃ、合格は出来へん」と、カーエスが続けて説明する。

「本当だったら、誰か第三者の上級魔導士に見てもらわなきゃダメなんだ。心当たりが一人いたんだけど、連絡がつかなくてね。ま、上級魔導士はカーエスがいるし、正式な試験じゃ無いからアタシが見た目で判断するよ。何か質問はある？」

説明を聞いている間、リクは柔軟体操をしていた。その表情はとても楽しそうに見える。

先ほどのカーエスとジェシカの死闘に触発され、また、筆記試験で得たストレスを発散できるというのが最も大きな部分を占める理

由だろつ。

彼は体操を続けながら尋ねた。

「エスタームトレイルってどのくらいの長さなんだ？」

「悪いけどそれには答えられない。他にも、試験の内容については一切公開できない事になってるんだよ。答えられるのは規則面に関する事だけなのさ」と、ティタは小さく首を振って答える。

リクは屈伸運動をしながら、しばらく考えると、また尋ねた。

「武器は使っても構わないのか？」

「構わないよ。持って無いなら戦闘訓練所にあるヤツを貸すけど？」

「頼む。できれば剣がいい。短かめのやつ。切れ味はどうでもいいから丈夫なものを」

ティタは頷くと、モニターの前に並ぶ機材についているマイクに向かって、その旨を向こうに伝えた。

「しばらく待ちな。希望に叶いそうな奴をいくつか見繕みつくろって送ってくれるから」

「わりーな」と、今度は前屈運動をしながらリクが答える。

柔軟体操を見ている限り、リクの体はかなり柔らかい方のようだ。ファトルエルで見せた、様々な動きも納得できる。

「でも、アンタ確か、魔法武器を召還できるんじゃないっけ？」

魔導研究所に就いて早々行った戦闘を見ていたティタが不思議そうに尋ねる。

「魔法を使うのは面倒だからな。使わずに終わらせられれば、それに越した事はねーよ。なあ、もし……え」と、腰を左右に捻り

ながら言い淀むリク。

何を言おうとしているのか悟ったテイタが、助け舟を入れる。

「エスタームトレイル？」

「そう、そんな中で借りた武器を無くしたら？」

「心配には及ばないよ。遠隔操作でこの場から動かずに回収可能さ。そうそう、アンタも、もし危なくなったら助けを求めたら、すぐに助け出してやれるからね。もちろんそうならリタイアで即不合格決定だけだ」

そこまで話したところで、部屋の片隅にあった、ガラス張りにされている円筒型の物品転送装置が光ったかと思うと、ガラスの中に数本の剣があらわれた。

テイタは装置の扉を開くと、中の剣を取り出してリクに一本一本渡して行く。リクは一つ一つ軽く振り回して、振り心地や握り具合を確かめると、一本の剣を選んだ。

「これにする」

「OK。準備は整ったかい？」

リクが頷くのを確認すると、テイタはリクを移動用魔法陣に立たせた。

そして、機材を操作し、移動用魔法陣を起動させていく。移動用魔法陣は彼女がコンソールを操作するのに呼応するように輝きを増して行く。

「それでは、上級魔導士試験実技の部、エスタームトレイル……開始っ！」

テイタが最後のボタンを押した時、リクの姿がその部屋から消え

た。

移動用魔法陣を使ってリクが移動した先は、一見するとジャング
ルのような、ツタを絡ませた木がたくさん生えた場所だった。とこ
ろが周囲を見渡してみると、両側に壁があり、幅十メートル余りの
広い通路である事が分かる。天井も、高さ十メートルくらいのとこ
ろにあり、全体が電燈として光り輝いてエスタームトレイル内を照
らし出していた。

「つくづく思うけど、すげー施設だな」

感嘆の吐息を尽きながら、彼は通路を見回しながら歩き、ジャン
グルの中に足を踏み入れた。

その瞬間、背後の木の上から長い爪を持った二足歩行型クリーチ
ヤー《切り裂く者》が飛び下りてきた。

リクは《切り裂く者》が地面につくかつかないかの際に、持って
いた剣を使って振り返りざまに斬りつける。《切り裂く者》はなす
すべも無く後ろに吹き飛ばされ、そのまま動かなくなった。

「早速来やがったか」

続いて、一息つく間も無く、脇の茂みから、口に鋭い牙を持つ四
足歩行型のクリーチャー《噛み千切る者》が飛び出してきた。

それも難無く切り伏せるが、ほぼ同時にもう一体の《噛み千切る
者》が後ろから飛びかかってくる。

「っのっ……！」

リクはそれも剣で振払うように斬ると、前方に向かって走り出す。これほど自分を狙う者が多いと、立ち止まっているのは決して得策では無いからだ。走っていれば背後への警戒を最小限に抑え、前方に集中できる。

しかし、ジャングルのように木が侵食するこの通路を走るのも難しい。常に足下に気を使っていないと、木の根や草に足を取られてしまうからだ。

走り出して間もなく、堅い額から鋭い角が伸びている四足歩行クリーチャー《突き刺す者》が前方の茂みから突進してきた。

「うおっと」と、リクは左半身にその突進を交わし、そのすれ違い様に《突き刺す者》の背中に剣を突き立てた。このクリーチャーは正面からはほとんど攻撃が効かないが、背後にさえ回れば脆い^{もろ}のだ。その剣を引き抜くか否かのタイミングで今度は左右から無数の触手を生やした円柱という姿の《絡み取る者》がしゅるりとその触手を延ばす。

リクは《突き刺す者》に突き立てた剣を引き抜いた勢いで、その触手もろとも《絡み取る者》の中心部当たりを斬り付ける。振り向きざま、もう片方の《絡み取る者》の触手を払い、返す刃でとどめをさした。

が、次の瞬間、また別に現れた《絡み取る者》の触手に剣を持った右手と右足を捕まれた。

「……っ！」

ふと、前方を見ると、このタイミングを待っていたかのようなタイミングで《突き刺す者》が突進してくる。《絡み取る者》に直接攻撃力は無いが、他の絶大な攻撃力を誇るクリーチャーの攻撃を避

けられなくなるのが驚異なのだ。

「おいおい、マジかよ、冗談じゃねーぞ」

リクの顔が引きつるのにも構わず、《突き刺す者》はスピードを落とす気配は無い。

彼は渾身こんしんの力で、右手の剣を左手に持ち帰ると、必死で《絡み取る者》の触手を切り落とし、跳び箱の要領で突っ込んできた《突き刺す者》の突進を避ける。その角はさつきまでリクを捕らえていた《絡み取る者》に突き刺さった。

彼はそのまま《突き刺す者》の背中に乗ると、その剣で後頭部を斬り付け、止めをさすと、その背中から飛び下りた。

しかし、彼がまだ空中にいる間に、今度は腕の下の膜を使って飛ぶ《滑空する者》がリクの目の前に現れ、リクに向かって口を開く。

「ええい、うつつうしい！」と、リクは吐き捨てると、《滑空する者》を叩き落とすように斬る。

そして無事に着地したかと思うと、その前方には、《切り裂く者》や《噛み千切る者》などのクリーチャーが総勢七体、姿を現わしたものである。

「……やけに忙しい試験だな」

「なんか俺ン時よりキツイんじゃないですか？ この試験」

モニターに映し出された、クリーチャー群のあまりの息をもつかせぬリクへの攻撃を見ていたカーエスが言った。

「そう？ でもなんか、昔見た剣士劇の殺陣たてを思い出すね」と、テイタの方は下手をするとお茶とお菓子を口にしてもおかしくな

いくらい気楽な返事である。

この試験に出てくるクリーチャーは、研究の一貫で捕獲したクリーチャーのデータをもとに、闘技場と同じ技術で具現化させたものである。よって、このエスタームトレイルを管理する部屋から、いかようにも環境やクリーチャーの配置などを設定する事ができるのだ。

「エスタームトレイルってクリアした早さも考慮に入れられるんスよね？」と、コーダがテイタに尋ねた。

「ああ、確かそうだったね」

「しかし、あのペースでは三刻（九時間）超えますね」

どう設定しても距離は変わらないので、一度経験のあるものなら、距離とペースから予想時間を割り出す事ができる。継続的にクリーチャーに襲われ続け、なかなか前にすすめないリクの早さからすると、そういう数字が出てきてしまうのだ。

それを聞いたコーダはどこからかノートを取り出し、手慣れた手付きでページをめくると、目的のページを探し出して言った。

「なら、まだ合格圏内スね。過去の合格者の平均タイムは三刻弱（九時間弱）、一番遅いタイムでも三刻三分強（十時間強）っていうのがありyas」

「ハハハ、誰やねん、そないなタイム出したやつは」

カーエスの反応に、コーダがにやりと笑って答える。

「笑っていいんスか？ カーエス君の師匠のカルクージーマン教師ツスよ？」

「じほっ……じほっ……！」

自分の敬愛する師匠を笑ってしまった事実には気がかされたカーエスが思わず咳き込む。しかし守りに徹する彼の戦闘スタイルを考えると、そういうタイムも領ける話である。

気まずさを誤魔化そうとしたのか、カーエスが話題を変えた。

「ほ、ほな最短記録は？」

その質問に答えるために、コーダが自分のノートを覗き込む。

「一刻強（三時間強）という記録が残ってやスね」

「一刻だと？」と、ジェシカが感嘆の声をあげる。平均タイムから考えるとずば抜けた記録であると言える。「誰がそんなタイムを記録した？」

「ファルガ・ルさんスよ。兄さんの師匠の」

一同は一度顔を見合わせると、モニターに視線を戻した。

リクを取り囲むクリーチャー達は、攻撃してはリクに斬り伏せられ、倒されては新たなクリーチャーが現れるといった具合に数を増減させていた。

エスタームトレイル内での行動が評価される、というカーエスの言葉を信じて、ひたすらクリーチャーを倒してきたリクだったが、これでは前にすすめない判断し、倒せるクリーチャーのみを倒し、スピードを落とさない事に重点を置いていた。

クリーチャーは大災厄の中にしか発生しないわけでは無い、各地にいくつかクリーチャーが徘徊している場所がある。

ファルガールと共に旅していた時、リクは何度かそのようなクリチャーの徘徊する地域に放り込まれ、クリチャーとの戦闘経験を積んだ。さらに、旅をしている間の資金は、主に人間の住む街などに危害を加え、懸賞を掛けられているクリチャーを倒す事によって得ていた。

そんな経験から、リクは比較的ポピュラーな下級クリチャーとの戦闘経験が豊富にあるため、急所などを知り尽くしていた。だから彼は剣一本でここまで進んで来られたのである。

今日ほど、ファルガールが自分に教え込んだ事が、自分の助けになっっていることはない。

(つくづくあなたは凄い師匠だな。……認めたくねーけど)

そう思い苦笑したその時だった。不意にリクを取り囲み、追い縋っていたクリチャー達らの速度が落ちた。

そして完全にその動きが止まったと思った瞬間、リクは密林を抜け、広い広場のような場所に出る。

「え？」

生い茂る木々と、クリチャー。彼を脅かす要素が一気に消え去った事が逆に不安を呼んだ。そして不安を抱きながらもそのまま数歩足を進めた時、その悪い予感は当たった。

リクのいた広場全体が扉のように下方に向かって開き、足場が無くなったのだ。

接地感が感じられなくなる中で、リクはとっさに唱えた。

「……っ！ 我は捕らえん、水流にて紡がれる《水の縄》にて！」

詠唱が終わると同時に、掲げた彼の手の中から水色の光が縄のよ

うに伸びる。

その先にあつた広場の向こう側の木にその光の縄が絡まり、リクが落下するのを防いだ。リクはそのまま振り子のように穴の中から外に脱出する。

その彼の目の前に現れたのは四条の光線だ。

完全に不意を突かれながらも、リクはとつさに防御魔法の呪文を口にす。

「《瞬^{またた}く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶するっ！」

一瞬だけ現れる魔力の障壁に当たり、その光線は全て消散した。なんとか着陸したリクに、今度は上から鋭い槍が降ってくる。

「こなくそっ……！」

それこそ息をつかせない攻撃に、リクは何も考える事が出来ずに防御本能に身を任せてその危険を避ける。

槍を避けたところで今度はクリーチャーが襲ってきた。反射的にリクが剣を振り、そのクリーチャーを斬り付ける。しかし、その剣撃は全く通用せず、そのクリーチャーの身体に弾き返されてしまう。

「!?!」

改めてそのクリーチャーを眺めてみて納得した。それは《魚鱗の格闘人形》と呼ばれる、堅い鱗に全身を被われた人型のクリーチャーだったのである。

《魚鱗の格闘人形》は、自分の攻撃が避けられ、攻撃を仕掛けられると、改めてリクを敵と認識したように、その恐ろしい顔をリクに向け、赤い瞳で睨み付けると、拳をくり出して攻撃してきた。

リクはそれを避けると、慌てて間合いを取り、剣を地面に突き刺

して唱える。

「我は放たん、射られしものを炎に包む《炎の矢》を！」

呪文を唱えながら、リクは両手を胸の前に構え。背を反らせて、まるで弓矢を引き絞るかのように手を広げた。すると、炎でできた弓矢が実際に引き絞られ、呪文の詠唱を終えると共に放たれる。

《炎の矢》はうなりを上げながら、《魚鱗の格闘人形》に命中した。その次の瞬間、完全にクリーチャーを炎に包む。《魚鱗の格闘人形》は、断末魔の叫びをあげながら倒れた。

「ちゅ、中級クリーチャーまで出てくるのかよ」

クリーチャーにもある程度強さに差があり、それによって格付けがなされている。

先ほどまでの、肉体の特徴に武器を持ち、本能のみで攻撃してくるようなクリーチャーは、下級クリーチャーに格付けされ、いまの《魚鱗の格闘人形》のように、己の技に武器を持ち、それなりの知性を持っているクリーチャーは中級に格付けされている。

もちろん、その上に行く上級クリーチャーというものも存在する。

先程、地面に突き刺した剣を抜き、再び前進しようとした時、その前方を見たリクの口元から思わず笑みがこぼれた。

彼の目の前には、中級クリーチャー達がずらりと並んでいたからである。

「こいつで戦えるのはここまで、か」と、リクは観念したように、剣を手放す。そして、腰を落とし、身構えて言った。

「それじゃ、そろそろ本気でいきますか」

18 『それが一番楽しいから』

そこに着いた時はとにかく嬉しかった。

ずっとずっとここを目指して長い間歩いてきたから。

でも、ここを目指して歩んでいる時が一番楽しかった。

時には苦勞もした。とても辛い目にも遭った。

その苦勞も、辛さもそこに着いたら全部喜びに変わる。

そう信じれば苦難を乗り越えるのも面白かった。

時には、ずっとこの旅が続けばいいのに、と思った事もあった。

それでもここに着けないのは嫌だった。

そして今、僕はまた、とある場所を目指して歩んでいる。

「我は刈り取らん、その刃に掛けし全てを薙ぎ払う《疾風の鎌》にて！」

呪文の詠唱とともに、手の中に現れた鎌型の光をリクは振り回し、彼を取り囲んでいたクリーチャー達を瞬時に切り裂いた。

ほぼ同時に、分厚い刃が先に付いた振り子がリクを真横から襲う。

「我が右手は《鋼鉄の拳》っ！」と、リクは魔法で鉄に変えた右手で、その刃を受け止めた。その振り子を振払うと、斜め後方から燃えるような赤い羽を持った鳥型クリーチャー《火吹き鳥》がリクを抜き去り、旋回してリクに突っ込んでくる。

その動きは早く、小回りも利くので、まともには捕らえられそうにない。おまけに《火吹き鳥》はその嘴を開くと、火炎を吐き出したものである。

迫り来る炎を前に、リクは唱えた。

「我は召し捕らえん、向かいし全てを絡めて逃さぬ《水流の投網》にて！」

魔導が完成すると、リクの手の中には水の玉が出現する。それを炎に向かって投げると、その水の玉が広がり、網を形成した。それは、炎を防ぎ、突っ込んできた鳥型クリーチャーを捕らえる。

《火吹き鳥》の動きを捕らえたところで、リクはさらに詠唱した。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて！」

次に唱えた《氷の鎚》で叩くと、《火吹き鳥》は《水流の投網》の水と共に凍り付き、粉状に砕け散ってしまった。

リクはそれを浴びながら、さらに走る。

「え、えげつな〜。落とし穴から先ほとんど中級クリーチャーやん」
カーエスが呆れたように言い、返答を求めてティタに視線を移す。しかしティタは何一つ聞こえていないかのように、真剣にモニターを見つめていた。さっきまでのお気楽な雰囲気は完全に消えてしまっている。

噂によると、上級魔導士試験におけるエスタームトレイルの難易度は、年度によって大きく異なると言う。その難易度は魔導士の運

次第と言うわけだ。難しい設定の時には合格者が出ないくらいに厳しいものとなる。

カーエスが試験を受けた時も、わりと難しい設定だったと聞いているが、それでも中級クリーチャーは終盤まで出なかった。それでもクリアした時には魔力が底を尽き、ギリギリの状態で生還したものだ。

ところがリクの場合、中盤から既に、下級クリーチャーより中級クリーチャーが惜し気もなく繰り出され、トラップなども避けにくく仕掛けてある。中級クリーチャーの出現のタイミングも休む隙を与えないくらいに頻繁に設定されていた。

受からせる気など、微塵も感じられないような難易度である。

（こんなんで、アイツ最後まで持つんかいな……？）

実技試験開始から既に二刻（六時間）が経過していた。その間、リクは一度も休む暇なく、エスタームトレイルを駆けて行く。継続的な激しい運動、魔法の連発、さらにひとときも気を許す事も出来ない緊張が、容赦なくリクの限界を突いてきた。

リクはただ前に進む事に集中していた。スピードダウンしたい気持ちももちろんあったが、そうするとクリーチャー達は間違いない自分を四方八方から取り囲み、襲い掛かってくるだろう。

（休む事を考えながら走ってるから疲れを感じるんだ。あと三刻（九時間）くらい走るつもりで走れば、なんてことねえ）

半ば自分に言い聞かせるように、心の中でひとりごちる。もう呪文を唱える以外に声は出せない。無駄に声を出すと、息があがって呪文が唱えられなくなるからだ。

不意に目の前に現れたクリーチャーを、《雷の槍》で片付けたあと、リクは思った。

(しかし……さすがにこの状態があと三分刻(一時間)続いたら絶対に持たねーなあ)

そして苦笑していると、前方から六体のクリーチャーが並んでリクの方に襲い掛かってきた。

リクはそれを確認すると、叫んだ。

「だあつ、折角の歓迎でも、あんまり熱烈だとかえって迷惑なんだよつ、どけえつ！」そして両手を胸の前に持つてくると、呪文を唱える。「我は放たん、連なりて射られしものを炎に包む《火炎の連^{んど}弩》をつ！」

詠唱とともに、リクの手の中に炎で出来た弓矢が現れる。リクはそれを引き絞ると、それを放った。すると、一発目に続いて、五発もの《炎の矢》が放たれ、リクの目の前にいるクリーチャーにそれぞれ当たり、クリーチャー達が倒れた。

その屍を踏み越えて、リクの行く手を阻む茂みを越えると、いきなり開けた場所に出た。始めは、また落し穴かと勘ぐったが、その様子はないし、なにより向こう側に見えるのは壁だ。

「ゴール……なのか？」と、リクは目の前の壁を見つめる。

その表情が訝しげなのは、エスタームトレイルの説明を受けた時、テイタはエスタームトレイルの突き当たりにある魔法陣に乗って帰ってくるように言っていた。しかしこの突き当たりにはあるはずの魔法陣がどこにもなかったのである。

「どついうことだ？」と、リクは壁を調べようと駆け寄った。

しかし彼は、ふとその駆け足を止めると、真横に跳ぶ。

その直後、リクの立っていた場所から巨大な右腕が突き出してきた。続いて左手も別の場所から飛び出してくる。深緑の皮膚に、紫色で尖った爪をもつ腕で、太く見るからに力強い。

しかし、その一番奇妙な点は、腕だけが宙に浮いており、胴体などが全く見受けられなかった事である。

「な、何なんだコイツ……？」

余りにも特異なその姿に、リクは目を丸くして、それを見上げる。その大きさから見てもそれは明らかに上級クリーチャーだ。ほぼ人と同じあるいはそれ以上の知能を持ち、その基礎能力からして中級クリーチャーとは比べ物にならない存在。その強さと言つと、“グランクリーチャーの成り損ない”という説があるほど恐るべきものだ。

じつくりと観察している暇もなく、その上級クリーチャーがリクを襲ってきた。その大きな“右”腕を振り上げ、リクを目掛けて思いきり振りおろしてくる。

リクはそれを後ろに跳んで躲した。しかし、それがよくなかった。彼の目の前に振りおろされた拳から指が弾き出されてきたのである。思わぬ攻撃に、リクはそれをほとんど障壁も張れずにまともに受け、後方に飛ばされた。

さらに、まだ立ち上がってない彼に追撃を加えんと、今度は“左手の握り拳が頭上から振ってくる。”

「あ、あんなモンに潰されてたまるか！ その槍穂貫くは天地、その光が意味するは天の裁き！ その先からは轟く光がほとばしり、全ての罪を討ち滅ぼす！ 稲光と共に現れよ、稲妻纏いし紫電の矛

《ヴァンジュニル》！」

雷光とともに彼の手の中に現れた二又矛《ヴァンジュニル》の柄を掴んだリクは、振りおろされてくる“左”拳の真下から、今度は手の甲側に転がり出る。

そして、その拳が地面を叩いた瞬間、リクは手に持った矛を手の甲に突き刺した。

「我が矛に宿りし電気よ、大気を駆けよ！ 我が導きによる《放電》によりて！」

同時に唱えた魔法によって、《ヴァンジュニル》から、電流が“左”拳に流れ込み、“左”拳が開いて痙攣する。しかし、その痙攣の中で“左”拳は大きくもがきを見せ、リクの《ヴァンジュニル》から逃れた。

それに続いて、今度は“右”手が手刀となってリクに迫る。

彼は反射的に地面に伏せ、その手刀をやり過ぎた。

「我は放たん、連なりて射られしものを炎に包む《火炎の連弩》を！」

やり過ぎした“右”の手刀目掛けて、リクは炎で出来た矢を連射する。六本の矢はあつという間に手刀に追い付き、それを炎に包んだ。

リクは“左”腕が痙攣でまだ行動不可能である事を確認すると、炎に包まれた“右”手に駆け寄り、一気に間合いをつめて、追い討ちをかける。

「我は解き放たん、この矛に秘められし電力を！ その大量の電気が生みしは触れし全てを焦がして壊す《高圧電流》！」

そして《ヴァンジュニル》から流し込まれた大電力により、“右”腕は炎によって表面を焼かれ、また内側をも焼き尽くされてしまふ。流石の上級クリーチャーも、この攻撃には力つき、“右”腕は浮力を失って、地面に落ちてしまった。

しかし片方を片付けた事に、喜ぶことなく、リクは“左”腕の方に振り返る。ちょうど、《放電》による感電の痺れから立ち直り、再び握り拳を固めたところだった。

「我は放たん、連なりて射られ」

同じ戦法で“左”腕も片付けようとした、リクの詠唱だったが、それは途中で中断されてしまった。

その原因は背後から聞こえてきた物音だ。

リクは前方の“左”腕の方にも注意を払いながら、恐る恐る後ろを確認してみる。

そこには、先ほど力を失ったはずの“右”腕が浮力を取り戻し、みるみるその傷が修復されて行く姿があった。

「嘘だろ……」

リクが啞然とした表情で見つめる前で、修復が終わった“右”腕と“左”腕の掌同士が合わさると、何かの印のように複雑に組み合わせられて行く。その動きが止まったかと思うと、開いた両手の掌には、火の玉が生じていた。

その火の玉の熱と光が、リクを我に返らせた。その炎攻撃に対抗できる魔法を詠唱する。

「我は叩かん、追いすがりて打ちしものを凍結させる《吹雪の鉄球》にて！」

その魔法によってリクの手に現れたのは、人頭大の白い球状の光である。その光の球からは紐状の光がリクの手に伸びていた。リクはその紐状の光の部分をつまみ、光の球をブンブンと振り回す。

光の球が十分遠心力を得たところで、リクは、その《吹雪の鉄球》を上級クリーチャーの放った火の玉に向かって投げ付けた。

《吹雪の鉄球》は火の玉と正面からぶつかり合う。その威力は大したものらしく、火の玉を飲み込み、その向こうにある印を結んだままの“両”腕にも届いた。その瞬間、《吹雪の鉄球》はまばゆい光を放ち、気が付くと、“両”腕が組み合わさったまま凍り付いている。

「片手ずつで復活するなら、両腕まとめてやってやらあつ！ 天を覆い隠すは積乱雲！ その雲が抱くは神鳴る電気！ この矛も持ちし我の呼び掛けに応えて降りよ！」

彼の呪文の詠唱とともに、《ヴァンジュニル》を向けた先に雲が起こり、電気を帯びて雷雲となる。そして、呪文を締めくくると共にリクは《ヴァンジュニル》を降りおろした。

「《召雷》っ！」

同時に落ちた稲妻は正確に組み合わさったまま凍り付いている。“両”腕を打ち、粉々に打ち砕く。

その小さな破片が目の前に散らばるのを眺め、リクはふう、と大きく息を付いた。

が、次の瞬間、地面から新たに現れた“両”腕によってリクはがっしりと捕らえられる。その拍子に《ヴァンジュニル》を手放してしまい、主の魔導を離れた《ヴァンジュニル》は元の魔力に分解して立ち消えてしまった。

「なっ……!?!」

驚いている間に、リクの上空がバチバチと電気を散らしたかと思うと、お返しとばかりにリクに電撃を浴びせかけた。

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する!」

リクは必死で防御魔法を詠唱したが、その雷撃は多少威力を殺されただけでリクを強かに打ち付ける。

「く……あ……」

必死に“両”手から逃れようとする彼だが、雷撃による痺れがそれを妨げた。

カーエスは驚愕おどろの表情で呆然とモニターを見つめていた。驚くべき事実を目の前に突き付けられ、今までそれを現実だと認識するのに時間が掛かっていたのだ。

ようやく頭の中で情報の処理を終えたカーエスがティタに向かって言った。

「これはいくら何でもやり過ぎや思いませんか?」

その声には、幾分責めの気持ちが混じっていた。しかし、ティタの視線は相変わらずモニターから動かない。構わずにカーエスは続けた。

「誰がどうやって捕まえたのかしらへんけど、上級クリチャーを
エースチームトレイルに引つ張り出すなんて聞いた事ありませんで」

普通に一対一でやらせるなら上級クリチャーでもよかつたかも
知れない。しかし、今のリクはエースチームトレイルを駆け抜けてき
たばかりであり、あらゆる力が枯渇しかけている。

いつにもまして厳しかった今回のエースチームトレイルの最後とし
て、上級クリチャーと闘わせることがいかに酷であるかは経験者
であるカーエスにはよく分かっていた。

これでは受からせるつもりがないどころか、殺すつもりと取られ
ても仕方がない。

偽者とはいえ、魔力を具現化させて作るあのクリチャーたちは
幻影などではない。万が一リクが致命傷を追えば、リクには本物の
死が待っているのである。

「あの上級クリチャーはエンペルフータに捕まえられてデータ
を取られたクリチャーの中では最強の一種らしいスね」と、コー
ダがまた自分のノートを見て告げる。「あれ？ あれを捕まえた人
って……」

そこまでコーダが言った時、その発言を妨げるようにテイタが突
然発言した。

「あたしはただの上級魔導士試験をやってるつもりはないよ。リク
が“大いなる魔法”にたどり着ける事をあたしが信じるためにやつ
てるんだ。もし、これで上級魔導士試験自体に落ちても、リクが“
大いなる魔法”に辿り着けるって確信したら、あたしは喜んで知っ
てる事を教えてあげるさ」

「で、でも、これでリクが死んでもうたりますますあんたの不信感
は高なるだけですよ？」

「少し黙れ、眼鏡男」

開き直りともとれる、ハッキリとした発言に少し言葉をつまらせながらも、なお食い下がるカーエスにジエシカが言った。

そんなジエシカをカーエスが睨み付ける。

「お前はリクの味方ちゃうんかったんか？」

「その通りだが、特に文句を言う必要は感じていない。あの程度のクリーチャーでリク様が止められるとは思っていないからな」

「あの程度のクリーチャー？」と、テイタがジエシカの発言に反応した。

ジエシカはそれに答える。

「はい。あの程度の、です。リク様が上級クリーチャーで止まるような男なら、私達は今、この場にはいませんよ」

その発言には一点の疑いも感じられなかった。続いてコーダが頷きながら言う。

「兄さんを止めたかったらグランクリーチャーくらい持って来なきや駄目スよ」

「……よう言うわ、ホンマ」

二人の言葉にカーエスがため息まじりに言った。

しかし彼自身も、その言葉が真実である事を心から確信していた。

リクは両腕に掴まれたまま、何も出来ずにいた。全く抵抗せずに

いたためか、“両”腕は雷撃の後は一切の攻撃をして来なかった。一応痺れはとれ、魔法の使える状態に戻っていたリクだったが、この上級クリーチャーの正体を確かめるために、敢えて何もせず状況を見守っていた。

今、“両”腕の下は大きなへこみが出来ていた。蟻地獄の巣のように、土が穴の周りから中心に向かって流れて行く。

「さあ、出てこい」

やがてすり鉢状の穴のそこには、人の頭のような形をした怪物の顔が現れていた。リクを食べようとしているのか、その怪物の口はリクを掴んだ“両”腕に向かって大きく開かれている。

“本体”が完全に露になった後、“両”腕はリクを口元に運んで行く。リクはそれをギリギリまで待つと、突然魔法の詠唱を始めた。

「我を戒めるものよ、《解縛》かいばくによりて退け！」

魔法は詠唱の終了と同時に発動し、“両”腕は弾かれるようにしてリクの身体を離れる。

続けて、リクは唱えた。

「その頭向けしは汝！それが象かたどられるは龍！その口から吐き出されし火焰はあらゆるものを焼き尽くす！真紅の咆哮と共に我が手に収まれ！蒼天朱に染めし焼尽の火吹き《ルーフレイオン》！」

リクの詠唱と共に、赤い光を放って彼の手に納まったのは、その龍を象つえがしらられた杖頭から火を噴ふき出す事のできる《ルーフレイオン》だ。

リクは、彼が落ちてくるのを大口開けて待っている上級クリーチャーの“本体”に向ける。

しかしそれを察したのか、“本体”はリクが落ちてくる前に口を閉じると、再び土の中に身をしずめた。同時に、すり鉢状に開いていた穴もリクを飲み込む勢いで埋まって行く。

「我が足に宿れ《飛躍》の力！」と、リクは魔法を使って、閉じて行く穴から脱出する。

着地したリクの目の前には再び“右”腕と“左”腕が現れていた。

「なかなかの用心深さだな……」と、リクは苦笑して言う。そして、その笑みを不敵なものに変える。「でも尻尾は掴んだ、逃がしやしねーぞ」

「へえ、本体は地中に埋もれとったんか……」と、モニターで様子を見ていたカーエスが感心したように言った。

それに応えるようにして、テイタが解説する。

「あたし達は《怠惰なる魔人》って呼んでる。地中に埋もれた本体はほとんど動かない。魔力で作った腕を使って獲物を捕らえ、捕まえて食べる時だけあやつて姿を現わすのさ。でもクリーチャーは補食する必要もないから、単に上を通った獲物を喰い殺す習性を持つてるってことだね」

テイタ達は長年クリーチャーを研究してきたが、クリーチャーにはエネルギーを自分で発生させる器官を持ったクリーチャーは今のところ存在していない。また、死んだクリーチャーは、魔力エネルギーに分解されて雲散霧消してしまう事から、クリーチャーは召喚魔法のように、魔導で魔力を具現化させて作られたものなのではな

いかと考えられている。

“召喚”された生物のエネルギーは術者の魔力で賄う事から、ク
リーチャーにも“召喚主”と呼べる存在があり、そこからエネルギー
を得ているのではないかというのが現在の定説だ。

今、テイタ達の研究の一つには、そのクリーチャーに供給されて
いる魔力を辿って“召喚主”を求めるというテーマも存在するのだ。

テイタの解説の後、コーダが腕を組んで言った。

「しかし、逃げ足が早いクリーチャーのようスね。正体が分かつて
も簡単には倒せそうもないスけど、兄さんどうするつもりなんスカ
ね？」

「決まっている」と、そのコーダの疑問に、ほとんど即答するよう
にジェシカが答えた。「リク様なら、きっとこの単純明解な答えに
行き着くはずだ」

「埋まっているなら、掘り返せばいい！」

ジェシカと奇しくもほぼ同時に、リクがこの答えを口にしたのは、
彼を捕まえようと《怠惰なる魔人》の“両”手が彼を挟み込むよう
にして攻撃するのを《飛躍》でかわした直後の事だった。

手にした《ルーフレイオン》を下方で組み合わさっている“両”
腕に向けると、その魔法の呪文を詠唱しはじめる。

「我、火吹きに宿されし炎の力によりて、大いなる熱持ちし火球を
生まん！ その熱は触れるもの全てを融かし大地に穴を穿つ！」

《ルーフレイオン》の杖頭の先に眩しく輝く火の玉が生み出され

た。リクはそれを振払うようにして放つと同時に呪文を締めくくった。

「《融かし沈む焔》^{ほのお}っ！」

リクの放った火球は、まず“両”腕を融かして屠^{ほぶ}る。それでは勢いは収まらなかった。その先にあった地面を融かし、穴を作りながら沈降していく。

ある地点に達した時、断末魔のような声が聞こえた。

穴の縁に立つてみると、《融かし沈む焔》の火球が《怠惰なる魔人》の“本体”を焦がして行くのが見えた。

しかし火事場の力と言うものだろうか、《怠惰なる魔人》は大きな音を立てて大きく息を吸うと、その口から強力なエネルギー波を放射して、《融かし沈む焔》に対抗する。

そのエネルギー波は、あっさりと《融かし沈む焔》の火球を飲み込み、エスタームトレイルの天井を焦がした。

そのエネルギー波が尽きた時、《怠惰なる魔人》の真上には、その上級クリーチャーに向かって飛び込むリクの姿があった。

それを見た《怠惰なる魔人》は、急いで穴を埋めはじめた。

「ちよつとばかり反応が遅かったな。止めだ！ その鞘に収まりしは曇り無き直刃！ 鍛え抜かれしその刃に断てぬもの無し！ 一度抜きし時、その速さは光も超える！ いざ抜き放たん、一太刀にて全てを決す神速の太刀……」

その呪文を詠唱しながら、リクは左腰に両手を構えた。そこに白い光が集まり、棒のようなものを形成する。その形はどんどん具体化し、最終的に鞘に収まった刀のような形に変化した。

リクはそれを抜き放ちながら魔法を完成させる。

「《煌》せいめい いいっ！」

それを抜き放った時の太刀筋は決して目に見えるものではない。まさに光のようなスピードで抜き放たれた刃は叩き付けられるようにして《怠惰なる魔人》を捕らえた。

そして、その切れ味はまるで空を切り裂いているかのように、あっさりと上級クリーチャーを両断し、元の魔力エネルギーへと還す。それと同時に《融かし沈む焰》によって穿たれた穴の底に、移動用魔法陣が輝きはじめた。

「やりよつたで、アイツ……」

上級クリーチャーを倒したのをモニター越しに見ていたカーエスがいささか放心した様子で呟いた。そして後ろで移動用魔法陣が輝きはじめたのを感じた彼等は同時にそちらのほうを振り返る。

その移動用魔法陣の上に現れたリクはいきなりガクリと膝を付き、まるで体中の酸素を奪われたのを取り返すかのように、激しい呼吸をくり返した。その全身から、滝のように汗が流れて行く。

それをみた為か、フィラレスは部屋を出て行くと、コップと水差しを持って返ってきた。そしてコップに水を注ぎ、その時には呼吸が楽になってきていたリクに渡す。

リクはその水を次から次へと重ねて飲み、水差しに入った分を全て飲み干してしまった。

その後、リクを椅子に座らせ、頭に冷たい水で濡らした布を被せた。

ここまで終えた時、彼の呼吸はほとんど完全に整っていたが、そ

れでも声を出すのにも億劫に感じられる程疲れているため、彼は何も言わずに顔をあげ、テイタを見上げた。

カーエス達四人も同じようにテイタに視線を集める。

「まず、あたしはアンタに謝らなきゃいけない。このエスタームトレイルのテストは、異常なくらいに難しくしてあった。上級クリチャーも本当なら出て来ないし、中級クリチャーの数ももっと少ないはずだった。現役の上級魔導士だって滅多にこのテストはクリアできないはずさ。だから、上級魔導士試験の方は合格。本当ならいろいろ細かい採点をしなきゃいけないんだろうけど、今回の場合は通り抜けただけで合格だよ」

テイタは一度そこで言葉を切った。リクの反応を待っているのだ。しかし、彼はその言葉にはいつさい喜ぶ様子などを見せていない。ただ、テイタに視線を送り続けている。その目はハッキリと早く“本題”に入る事を要求していた。

他の者もみな同じである。

しばらくの間、場が硬直した後、それに耐え切れなくなったかのように、テイタは大きく息を付く。そして俯き、彼から視線を外して言った。

「……その、済まないけど。まだ、アンタを完全には信用できない」「そんな！ こいつはこんだけ苦しい目に遭うても、それを乗り越えたんやで？ 信用したつてもええやないですか」と、まっ先に口を開いたのはカーエスである。

「この場合は、確信はあり得ません。少しでも可能性を見出せればそれでいいではありませんか？」と、続いてジェシカも抗弁する。

テイタは顔をあげると、全員を見回して言った。

「あたしだって、確信は出来ない事くらい分かってるよ。この、とんでもない設定のエストームトレイルだって、クリアできれば可能性を見出せると思ってやったんだ。でも、どう見ても、これがリクの限界だ。本当にこれで“大いなる魔法”に向かう先で遭う本物の災難を乗り越えられるかと言えば、ハッキリと否だ。あたしはまだリクに可能性さえ見出してはいないんだよ」

カーエスも、ジェシカも、この言葉には反論する事は出来なかった。

二人とも、テイタがリクを認める事を拒否するのは、今まで認めた者達に起こった事に罪悪感を覚え、認める事をただ怖がっているのかと思っていた。

しかし、彼女がリクを拒否する根拠がハッキリと示されているのである。確かに、どう見てもリクはこれ以上何ができるようには見えない。

「……わかった」

その声に、全員が一番奥に座っていたリクに注目した。

「リク？」

「確かにこんなにバテてたら信用する気にもならねーだろうな。」
「諦めるのかい？」

てつきりもつと食い下がってくると思っていたのか、テイタが思わず聞き返す。

それに対してリクが即答した。

「なわけねーだろ。今回で納得できなかつたなら、次で納得させるさ」

「次？」

「まだ、俺に可能性がないとは言いきれない。俺はこうやってバテちやいるが、クリアした限りはまだ限界は見えてない。そうだろ？」

確認の問いに、テイタは答えない。

たしかに、まだリクに可能性を見出したわけではなかったが、ギリギリでもクリアした限りは限界を見せた事にはならない。よって、不可能だと決定できる要素はまだ何もなかった。

「手間掛けちまって悪いけど、もういつペン、もつと厳しい試験を作ってくれ」

「……それでいいのかい？ あんたは今日これ以上ないくらいに疲れる思いをしたんだ。それをもう一度やり直すって言うのかい？」

リクは不敵な笑みを浮かべて頷く。

「夢は適えた瞬間が一番嬉しいもんなんだけどな、一番楽しいのは、夢に向かって苦労している時なんだよ。少しくらい延びたって構わねえよ」

泥などにまみれて汚くなった顔の中で、その明るいエメラルドグリーン色の瞳はまだ冒険を欲しているかのように輝いていた。

19 『償わなければならないのは』

罪無き者達よ、罪負いし者達を罵るののしのは止めなさい。
あの者達を裁くのは、お前達ではない。

罪無き者達よ、罪負いし者達に償いつくなを求めるのは止めなさい。
本当にその償いを行えば、お前達はあの者達を許せるのか。

胸に手を当てて考えよ。

罪人を責め立て、本当にお前達は救われるのか。
お前達は本当にあの者達が罪人に見えるのか。

本当に償いをしなければならぬのは、どちらなのか。

夕食時になり、人で込み合う住居・宿泊施設棟の食堂の一角にリク達一行の姿はあった。一同の視線はある一人の男に注がれている。

「……おいリク」

カーエスが声を掛けるが彼は返事をよこさない。

全員の視線が集まる中、その男・リク「エールの身体がグラリと傾かたむき、机の上に、正確に言うと、机の上に乗っていたスープの皿の中に頭が落ちた。

「ぶはっ！」と、熱いスープの中に頭を突っ込んでしまったリクが慌てて顔を上げる。

その時点で、自分に集まる全員の視線に気付き、彼等を見回した。状況が掴めていないリクに、一同を代表してカーエスが言った。

「寝るんやったら部屋で寝たら？」

「あ……、俺寝てたのか？ 今」

「寝てたのかて……」と、その間の抜けた反応に、カーエスが呆れたようにため息をつく。

「はは、結構疲れてんだなあ、俺」と、ようやく目の覚めてきたリクが苦笑する。

「あまり無理はしないで下さいね」

ジエシカが、心配そうに言うと、リクは顔に着いたスリーブを拭き取りながら答える。

「このぐらいなんでもないさ。ファトルエルん時に比べればな」

ファトルエルの大会の最終日、リクはジルヴァルトという強敵と闘い、さらにグランクリーチャーを相手にしたのである。

グランクリーチャーを倒した時、リクは本当に力を使い果たし、そのまま気を失ってしまったものだ。

「そっぴや何でテイタさんにシルオグスタ見せたり、グランクリーチャーを倒した事を話したりしないんすか？ “非公式だけど世界最強で、歴史上初めてグランクリーチャーを倒した魔導士”ならテイタさんも信用してくれるかもしれやせんよ？」

「せやな、面倒事避けるために黙っとるんは分かるけど、テイタはんだけには教えたってもええんちゃう？」

シルオグスタは名高いファトルエルの決闘大会に優勝した魔導士

だけに与えられる世界最強の証である。大災厄の発生で大会が中止になり、ジルヴァルトとの闘いは事実上の決勝戦だったが、それは非公式の闘いとされ、記録には載っていない。

ただ、大会の主催をしているカンファータの国王・ハルイラ「カノンファータ十八世は事実上の決勝戦を制し、グランクリーチャーを倒した功績から、非公式のままにはあるが世界最強と認め、シルオグスタをリクに与えた。

よって、この世界最強の証はリクがまともに大災厄、ひいては“大いなる魔法”と渡り合える一番の証拠と成り得るのだ。

リクはシルオグスタの収まっている自分の胸のあたりに手をやりながら首を横に振る。

「エスタームトレイルの前までならそれは出来たかも知れねーけど、今は無理だろ。はつきりあの目で俺の実力を見て駄目だって言ったんだ。今さらそんな長ったらしい肩書きに頼っても幻滅されるのがオチだし、何より俺が嫌だ。何が何でも実力で認めさせてやる」
「兄さんらしいスね」

その時、がたっ、と音がした。一同がその音の発生源に目を向けると、その視線の先ではフィラレスが立ち上がっている。

「どっかしたのか？ フィリー」

フィラレスは、こくりと頷くと、食堂の出口を指差した。

その仕種で、リクはフィラレスが何を言いたいのかを察する。

「ああ、ミルドのところに行くのか？」

彼女は頷いて肯定する。

「俺が付いて行つたらるか？」

そのカーエスの提案にはふるふると首を振り、空になった食器のトレイを持ってテーブルを離れ、食堂を出て行つた。

「ダクレー主任。考え直しませんか？ 今ならまだ引き返せます」

先ほどダクレーの研究室のソファの上で目をさましたミルドはそう言った。

ダクレーは机に向かつてまま答えた。

「なぜ考え直さなければならんのかね？ その理由は？」

「要りますか？ 女の子を一人犠牲にする計画を中止するのに、理由が」

多少、声を大きくしてミルドが即答する。

ダクレーは大きいため息を付くと、ファイルを閉じてミルドに向き直つた。

「いいかね？ ミルド君。その少女はただの少女ではない。周囲の人物達にとって危険きわまりない魔力を持った少女なのだ。そして、その魔力を持って周りを傷つけた事に対し、その少女は罪悪感で心の深い傷を負っている。この計画は彼女の心の傷を癒してやる事にもなるんだよ？ それでいて周囲の危険も減らす事ができる。この

エンペルファータの寿命を確実に二十年以上延ばす事ができる。そして本人はこの計画に」

「まだ承諾していません」

聞き飽きたダクレーの主張にやや嫌気が差した表情で、ミルドはすかさず口を挟んだ。

ダクレーは勝ち誇った表情で言う。

「そうだ、まだ承諾していない。だったらまだこの話をするのは早いのではないかね？」

「計画を先に進めるのもまだ早いとは思いませんか？」と、ミルドはダクレーがさっきまで取りかかっていたファイルに目をやって言った。

「承諾した場合を想定して進めているだけだよ。それより……」と、ダクレーは一旦言葉を切り、ファイルを再び開きながら続けた。「君が荷物を纏めるのもまだ早いと思うのだがね？」

ミルドは自分の目の前に並んでいる自分の荷物を一瞥して答えた。「……そうですね」

彼はソファに座ってため息を付いた。

フィラレスがこの計画に承諾する事を、自分が一番確信している。自分と、マーシアしか知らず、記録もされていない事実だが、彼女は一度自殺をはかっている。結果は“滅びの魔力”の暴走。そして自殺自体は今現在、フィラレスが生きている事実からも失敗である事は分かるが、あの時ほど自分を呪った事はない。

自分は彼女を慰めていたつもりで、その傷に塩を擦り付けていたのだ。

(やはり彼女を説得しに行こう)

そう決心すると、ミルドは立ち上がってダクレーに言った。

「ダクレー主任。頭痛がするので医務室に行ってください」

「分かった。あ、すまんがついでに食堂に行って私の食事をもらってきてくれんかね？」

「分かりました」

ミルドは生返事をしながら、ドアノブを回し、ドアを開く。

その向こうにいた人物を見て、ミルドは目を丸くした。

「ファイ、ファイリー……!?!」

その声を聞き付けたダクレーが再びファイルを閉じ、わざわざドアのところまで迎えに来た。その顔は笑みに満たされている。

「やあ、フィラレス君。どうしてここに？ ひょっとしてもう答えを持ってきてくれたのかね？」

フィラレスはこくりと頷いた。

その答えにミルドが愕然とする。

「まさか！ 早すぎる!」

「それで、答えは？ 承諾するなら頷き、拒否するなら首を振りたまえ」

沈黙が場を包んだ。

ミルドは固唾かたずをのみ、ダクレーは不敵な笑みを崩さない。

そしてフィラレスは、しばらくダクレーを真直ぐ見つめていたが、

やがて決意を込めたようにゆっくりと、首を横に振った。

今度驚愕したのはダクレーだった。目を見開き、フィラレスを凝視している。

口が利けなくなったダクレーに代わってミルドが確認をする。

「それはつまり、ダクレー主任の計画への協力を拒否するってことかい？」

フィラレスはこくりと頷く。

しばらく驚きに染まった表情でフィラレスを見つめていたダクレーだったが、やがてぶつぶつ小さな声で何かを呟きながら一步一步フィラレスに近付いて行く。

「何故だ………何故だ、フィラレス＝ルクマース。お前は“滅びの魔力”で人々を傷つけた事を何とも思っていないかったのか………？ 償う気持ちは全くないと言うのか!?!」

その呟きは、最後には叫びに代わり、フィラレスに掴み掛かろうとするダクレーを後ろからミルドが羽交い締めにする。

「止しなさい、ダクレー主任！ フィラレスがそんな気持ちでいるはずがないでしょう？ どのみちフィラレスが参加を拒否している限り、この計画は終わりだ」

「それじゃ困る！ 困るんだよ、ミルド君！ このままじゃ三年後にはエンペルファータは終わってしまう！ 説明しただろう!?!? それにこれはフィラレス君の償いの機会でもある！ そう言っただろっ!?!」

半ば狂ったようにミルドを怒鳴り付けるダクレーに、ミルドは即

答して言った。

「何故そのエンペルファータの存亡とやらをこの子が負わなきゃいけないんですか！？ 償いですって？ 彼女は何もしていない！ 元々、フリーに罪など何もありません！ それなのに……：それなのにこの子は“滅びの魔力”の為に一番苦しんで、傷付いて！ 僕らはその心の傷の上にさらに傷を付けていた！ 償わなきゃいけないとしたら、それはむしろ僕らの方なんだ！」

どうして、その説明で自分は納得してしまっていたのだろう。今、このダクレーの説明を聞いて、ミルドはそう思った。

まだ三年あるし、エンペルファータは滅びても、《テンプファリオ》がこの街を襲うのは二百日の間隔がある。その前に住民を退避させればいい話だ。彼女がいなくてもエンペルファータの住民は確実に生き延びられる。

それに、ダクレーはフィラレスに償いの機会を与えようとしているという。自分はそれにも納得してしまっていた。ダクレーと一緒にあって彼女を罪人扱いしてしまったのだ。彼女には、何の罪もなかったというのに。

ミルドは、怒鳴り返されて呆然としているダクレーを半ば投げるようにソファに向かって突き放すと、フィラレスに歩み寄り、その華奢な身体をそつと抱き締めた。

「済まなかった。辛い選択をさせたね。でも、よく拒否してくれた。後の事は心配しないで。僕が絶対に君の事を守り切ってみせるから」

そこまで言って、ミルドはフィラレスの目線に合わせて少し屈み、優しく微笑みかけて言った。

「さ、今日はもう遅い。部屋に帰って休んだ方がいい」

フィラレスはこくこくと何度か頷き、研究室を後にした。

20 『問う笛の音に答える歌』

共に一つの曲を奏かなでよう。

歌と旋律に込められた想いを感じながら、
心を一つに合わせて。

君がその旋律をもって問いかければ、僕は歌で答えよう。
君がその涙をもって相談すれば、僕は笑顔で導こう。

共に一つの道を歩もう。

涙と笑顔に彩られた景色を眺めながら、
心を一つに合わせて。

ふとリクは、目を閉じながら目を覚ましている自分に気が付いた。
眠れないときに、取りあえず横になって目を閉じている事はよくあるが、それとは全く違った感覚だ。その状態は、睡魔と夢に身を任せるのと同じくらい心地よかったので気が付かなかった。

(笛の音……?)

そう、その状態を作り上げていたのは遠くから彼の耳に届いている笛の旋律だった。

原因が判明すると、この感覚を思い出した。これは目を閉じて良い音楽に聞き入っている時の感覚だ。

同時に、笛の音という言葉に連想する一人の少女を思い浮かぶ。

「……………」

リクは黙って身体を起こすと、カーエスとコーダがきちんと寝入っている事を確認し、部屋を後にした。

夜になり、中央ホールに植えられている大樹と壁が淡く光っていた。

フィラレスは、その大樹の根元にある長椅子に座って一心に笛を演奏していた。暗さに困る事はなくとも決して明るくはない照明が照らし、彼女の可憐な容貌を絶妙に引き立てている。

彼女が吹く笛の音は透き通っており、繊細ながらも遠くまで届く力強さがあった。

彼女が演奏しているのは有名な戯曲だった。

その曲に込められた物語の主人公は、舞台である二国の内の一国、リヴァの姫・シルヴィアナである。一人娘として蝶よ花よと育てられてきた彼女は、身も心も美しい。中でも声が素晴らしく、その声に紡がれる歌は万人を虜にする魅力があった。

その評判を聞き付けた隣の国、マントーンの国王は交友を計る名目で二国合同の宴を開き、余興としてシルヴィアナの歌を聞いた。

その声に惚れ込んだマントーンの国王は、リヴァの国王にこれからも仲良くしようと話しかけ、その交友の証として両国の王子と姫を結婚させようではないか、と持ちかけた。

それは、リヴァとしても悪い話ではなかった。マントーンは勢力を延ばし続ける強い国であり、一方リヴァは最近力が衰えてきている上、子供はシルヴィアナ一人で世継ぎがない。強国マントーン

との血縁関係は、リヴァとしてはとても心強い。

そんな事情もあり、リヴァの国王はその話を受け、シルヴィアナとマントーンの王子・リファスとの結婚話がまとまった。

その結婚話は、シルヴィアナにとって苦痛でしかなかった。彼女は同じリヴァが抱える魔導士・ウィリアスと密かに想いあう仲であったからだ。また、宴で言葉を交わしたリファスは他人を見下すところがあり、あまり彼が好きになれなかったのである。

しかし断れない。リヴァは現在でこそ、マントーンとは特に敵対関係にはないが、この話を断る事で関係にひびが入れば戦争にでもなりかねない。

そうなると思しむのは多くのリヴァの民である。

自分一人の愛のためにリヴァの国民全てを犠牲にするわけには行かない。そう考えたシルヴィアナはウィリアスに別れを告げ、リファスとの結婚を承諾した。

真に恋人を想うウィリアスは、自分がそばにいてはシルヴィアナが辛いだらうと考え、例え結ばれずとも、永遠に貴女を想うと手紙を残してリヴァから姿を消す。

しかし運命は、国民の為に愛を捨てたシルヴィアナを更に不幸の泥沼に引きずり込んで行く。

彼女を娶り、リヴァの王子となったりリファスは密かにリヴァの国王を暗殺し、自分がリヴァの国王となったのである。さらに、マントーンの国王が退位し、リファスにマントーンの王位を譲る。

こうして両方の国の王となったリファスはリヴァをマントーンの中に吸収し、一つの国として合併してしまったのである。元から、それが狙いだっただけだ。

その後が悲惨だった。

吸収合併された後、もともと弱い方の国であったリヴァの民はマントーンの民とは区別され、卑しい身分の者として扱われた。マン

トーンの民がリヴァの民を殺しても罪にならないくらいの露骨さである。

リヴァの民は嘆き、そのやり場の無い怒りを、たった一人残ったリヴァ王家の者であるシルヴィアナに向けて、責めた。

なゼリファス王子などと結婚したのだ、と。

この結婚がなければ、自分達は今苦しむ事もなかったのだ、と。

元々民を苦しめぬように自分の愛を諦めたシルヴィアナの心を、リヴァの民からの責めは万力でも使ったかのように締め上げ、苦しめた。

シルヴィアナは結婚を悔やんだ。そして、王妃として、今何も出来ない無力に嘆いた。

その気持ちを込め、月夜の窓辺にシルヴィアナは歌う。

私を明るく照らすのは 夜空の瞳^{ひとみ}

その暖かい眼差しは 全てを見ている

民の苦しみも 私が犯す過ちも

月よ、あなたは私を捨てますか

怒りますか 嘲^{あざわら}りますか

共に苦しみ、償^{つくぐな}う事も出来ない私を

もし許せるならば、教えて下さい。

私がこれから歩める道を。

いきなり後ろから歌声がしたので、フィラレスは笛の演奏を続け

ながらも後ろを振り向いた。その視線の先にはリクがいる。
リクはフィラレスと視線があうと、口元に笑みを浮かべ、気にせず続けると手ぶりで示した。

フィラレスはこくりと頷いて、笛の演奏を続ける。

私を優しく撫なでるのは 夜抱く腕
その柔らかい手の平は 全てを庇ひ護する
民が負う傷も 私が呼びし災いも

風よ、あなたは私を責めますか
叱ののりますか 罵ののりますか
罪負いながら、恋人に焦がれている私を

もし叶うならば、運んで下さい
私が愛する人の言葉を

君よ、貴方は私を恥じますか
笑いますか 哀れみますか
嘆くばかりで、未だ前に進めない私を

もし願えるならば、勇気を下さい
私が闘うための勇気を

リクの歌声は、成人を迎えているにしては声域が高く、女性であるシルヴィアナの歌も見事に歌い上げた。

その心地よい、ましてや自分が想いを寄せる者の声に身を任せ、笛を吹いていると、フィラレスの表情も柔らかくなって行く。

この歌を歌うシルヴィアナの心境は、今のフィラレスと重なる部分が多い。多くの人々を苦しめ、傷つけてしまう罪悪感。しかし彼女の心はそれを償う事よりも、愛する人と逢いたい気持ちの方が大きい。彼女はそれを認め、そんな自分の心を、さらに罪深く感じるのだ。

フィラレスも同じだ。“滅びの魔力”で傷つけてしまった人達に償いをするより、リクと共に行く事を選んでしまった。それは良くない事であることは分かっている。それでも、彼女はリクへの恋心を捨てる事は出来なかった。

歌い終わった後、再び振り返って目が合ったフィラレスに対し、リクが自分を指差して言った。

「結構上手いだろ？ 歌」

フィラレスはこくこく頷いた。

その反応にリクは得意そうな笑みを浮かべて続ける。

「呪文の詠唱の基本は歌だって、ファルに散々練習させられたからな。それに、これは秘密だぞ。特にカーエスの奴には」と、リクはフィラレスの耳に口を近付け、小声で言った。「それで、しまいに路銀を稼ぐために酒場で歌わされるハメになっちまったんだ。しかも女装で」

本当はまた浮かない顔をしているフィラレスを笑わせるつもりで言ったのだろうが、フィラレスはそれどころではなかった。

リクの顔が、振り返れば鼻同士があたりそうなほど近くにある。彼の声が耳のすぐそばで聞こえる。彼の息遣いさえも感じられる。

今、フィラレスは自分の顔が一気に紅潮して行くのが感じられた。

そうとは気付かないのか、リクは何を気にする様子もなく続けた。
「あんましマトモに聞いた事無かったけど、フィラレスの笛ってすげーな。なんと言うか、心に響く感じがしてさ」

自分の笛を誉められて、フィラレスの顔が更に赤みを増して行く。

「でも俺、シルヴィアナの“月夜風”つきよかせより、その後のウイリアスの“共に”のほうが好きなんだよなあ」

シルヴィアナの歌は夜風に乗って、リヴァを出て旅をしていたウイリアスの耳に届く。ウイリアスはリヴァの状況をきき、シルヴィアナと共にリヴァを救う事を誓って、シルヴィアナに魔法で歌を返す場面がある。

座り直して、改めて笛を構えたフィラレスがその曲を吹き始めた。

「お、それぞれ」と、リクは姿勢を正し、歌う体勢に入る。

君はこれ以上、何を失うというのか

家族を失い 国を失い

今の君に残されるは、月夜も心動かすその歌だけ

心悩めし君よ ならば共に失おう

失い続けなければならぬのなら、その分私が与えよう

共に歩もう もし君がまだ私を想うのならば

君はそれ以上、何に償うというのか

国家に償い 民に償い

真に償われるべきは、君が国に捧げたその身と心

心痛めし君よ ならば共に償おう

償い続けなければならぬのなら、罪を私と分かちあおう

共に進もう もし君がまだ私を信じるならば

君はそれ以上、何と闘うというのか

自分と闘い 罪と闘い

それでも何一つとして、君が報われる事などないのに

心迷いし君よ ならば共に闘おう

闘い始めなければならぬのなら、私が君の前に立とう

共に生きよう もし君がまだ私を愛するならば

共に守ろう 私達が生まれ育ったこの国を

共に救おう 虐げ^{しいた}に傷付き苦しむ者達を

共に歌おう この誓いの歌が夜空に届くまで

恋人から帰ってきた歌で、シルヴィアナは勇気づけられ、彼女は夫であるマントーン国王・リファスと闘う決意をする。夫の目を盗み、リヴァの民達と連絡を取って、計画を練り上げた。そして、ある日彼女はリヴァの民達とともにマントーンを抜け出す。

それは、決して楽な旅ではなかった。長旅には付き物の飢えと乾きの難、そしてマントーンの追っ手が彼女達を脅かす。しかしシルヴィアナは引き返さなかった。ウィリアスと誓ったから。そして彼

女に付いてきたリヴァの民も、虐げられるよりはと、どれだけ苦しくても弱音を吐く事無く彼女に付いてくる。

そしてとうとうシルヴィアナはマントーンの追っ手を振り切り、ウィリアスと再会した。

二人は残っているリヴァの民を束ね、ウィリアスを夫とし、シルヴィアナを女王とする新生リヴァ王国を結成する。

そして強国マントーンに闘いを挑んで行く。シルヴィアナに逃げられたリファスは怒り狂って、リヴァに立ち向かうが、怒りに理性を失ったリファスが率いるマントーン軍は敗走を続ける。

リファスの圧制に苦しんでいたマントーンの民も、これを機会に次々と反旗を翻し、マントーンは次第に弱体化して行く。

そしてついに、新生リヴァ王国はマントーンを追い詰め、ウィリアスと魔導士としても優秀であったリファスの一騎討ちの決着によって、マントーンはついに新生リヴァ王国の前に滅びて物語は終わる。

リクの歌と共に笛を吹いていると、今まで味わった事のない快感がフィラレスを支配した。二人で一つの曲を奏でる。自分も、リクも、曲に込められた想いを心に込める。それは即ち二人の心を合わせる事だ。好きな男と心を一つにする。それに勝る快感がこの世にあり得るだろうか。

恋をして良かった。その相手がリクで良かった。笛を吹きながらフィラレスはそう実感した。自然と自分の口元が綻んで行くのが感じられる。

この時が永遠に続けば良い。

フィラレスはそう思ったが、全ての曲には終わりがあり、今彼女も名残惜しく曲を締めくくるところだった。

既に歌い終わったリクが彼女を見つめている。そして笛を吹き終わった彼女をいきなり微笑みながら指差した。訳が分からず、ただ

目を丸くしている彼女にリクは続けて言った。

「そうそう、その笑顔だ。何を悩んでんのかは知らねーけど、取りあえず出来るだけ笑っとけば、いつかは本当に腹抱えて笑い転げられるような良い事に巡り合えるモンだ。それに……」と、リクは言いかけて、一瞬迷う。が、照れ隠しのつもりか、微妙に視線をずらし、後頭部に手をやりながら続けた。

「それに、フィリーは笑顔の時間が一番可愛いんだからな」

その言葉に、フィラレスは硬直し、今度は頭の前から爪の先まで赤くなつた。

何故だ。

フィラレスに計画を拒否されてから、ダクレーの頭の中を占めているのはこの言葉だった。

どうしても納得が行かなかつた。“滅びの魔力”で人々を傷つけた罪に苦しむフィラレスの心情を完璧に計算した計画だったはずだ。正式な資料には記載されていないが、“独自の情報源”で手に入れた情報によると、彼女は一度自殺を計っているらしい。そしてミルドの研究記録に残る彼女の行動から読み取れるフィラレスの心情は総じて自虐的な傾向にあった。

フィラレスを死に近い状態に封じ、なおかつ人々の助けになる方法を提供すれば、彼女は絶対に食い付くはずだったのだ。

(それを何故断る!?)

いくら考えても答えが出なかった。

命が惜しくなったか。そう考えもしたが、それでも納得の行かないところがある。未練はあるまい。だが、ただ命を失うのも同然の状態になるのが怖くなるということもあるが、まだ具体的な話もしていない段階でそこまでの恐怖を抱くのは不自然だ。

(口さえ利ければ尋問してでも問い詰めてやるものを……)

そんな乱暴な事を考えるダクレーの傍らにはミルドが黙って歩いていた。夕方の事があってから、彼等は一言も言葉を交わしていない。そしてそのミルドの隣には、先ほど研究・開発室棟のラウンジで偶然出会ったティタが歩いていた。

彼等が歩いているのは、研究・開発室棟から中央ホールに通じる長い廊下だ。夜は完全に更けてしまっているので、彼等の他には人の気配はない。そのために声や音が響きやすくなっており、何となく三人の間には会話がなかった。

そのうちに中央ホールに行き着いた時、ミルドが小さな声で言った。

「あれ？ あそこにいるのフィリーとリク君じゃないかな」

そう言って、ミルドが指差した先を、ティタも確認する。

「本当だ。何やってるんだらうね？」

ティタとミルドの言葉に、ダクレーは一時的に思考を中断し、そちらに注目する。

二人は話をしているようであったが、何を喋っているのかはあまり分からない。しかし遠目に見えるフィラレスの表情は彼が見た事もないくらいに明るい。これは、彼にある事実を気付かせる。

「なるほどね、そういうことか」と、そのダクレーの考えを肯定するようなタイミングでテイタが悪戯いたずらっぽい笑みを浮かべ、小さく口笛を吹く。

その隣では、ミルドも目を丸くしていた。

「あの子が……リク君を？」

一方、同じく驚愕きょつがくしているダクレーの頭の中では、表情とはまるで違った感情を持っていた。さきほどまでどれだけ考えても分からなかった事に対し、全て合点がいったのだ。

(好きな男が出来たのか……)

フィラレスが視線を向けている男を見る。先ほど、ミルドが出した名からすると、フィラレスとカーエスが連れてきた三人の客人の一人のようだ。先日密かに開かれた“亡命計画”の会議でドミーニクが報告したところによると名高い魔導士・ファルガ・ル・カーンの弟子らしい。

「リク＝エール……か」

一度、彼のフルネームを声に出して言うと、ダクレーは下品に無精髭の伸びた顎を思案顔で撫でた。

21 『実現しうる目標』

夢は、見るだけ無駄なものだ。

適えても何の意味も持たない、下らないものだ。

目指す価値など、どこにもないものなのだ。

持つならば目標だ。

自分の価値を高めるための目標。

己を導いて行く目標。

それを達成するためならば、どんなものでも犠牲にしよう。

テイタとミルドの家は魔導研究所内ではなく、エンペルファータにある住宅地の一角に建つ小さな家である。魔導研究所の居住・宿泊施設棟は、基本的に独身者専用で、結婚して家庭をもつ者達は、住宅街に家をもつ事になる。

一日の大半を研究所で過ごすこの夫婦の家は、研究室内とは違ってかなり殺風景である。それでも寝室には二人用のベッドがあり、若い夫婦は二人並んで床に付いていた。

「眠れないのかい？ ミルド」と、テイタが身を起こしてサイドボードに置いてある水差しから水を注いでいるミルドに声を掛けた。ミルドは、テイタが目を覚ましているとは思っておらず、少し慌てた様子で妻を振り向いた。

「ああ、ごめん、起こしちゃった？」

「いや、あたしもちよっと眠れなくてさ」と、テイタも身を起こし、

ミルドの方に手を差し出した。

察したミルドは、今自分の手にもっている水をティタに渡すと、自分の分を別のグラスに注ぎ直す。

「フィリーの事でも考えていたのかい？」

凶星を指されて、ミルドは少し狼狽^{うろた}える。

そんな彼の動揺を知ってか知らずか、ティタは続けて言った。

「娘のような子に、好きな男ができれば眠れなくなつて当然か」

「う、うん、まあね」

ティタのからかうような口調に、ミルドは苦笑する。

フィラレスの事を考えているのは当たつていたが、ミルドはもつと別の事を考えていた。しかしそれはティタに当てられる可能性はない。彼は、ダクレーがフィラレスに対して考えていた事を彼女に話していないからだ。

ともかく、フィラレスがダクレーの計画に参加する事を拒否した事には心底ほつとした。しかしあの執念深そうなダクレーがこのまま引き下がるとは思えない。安心する裏で何をしてくるか分からないダクレーを不安に思っていると、眠れなくなつてしまったのだ。

フィラレスは好きな異性を見つけたようだった。昔からそういう普通の女性としての幸せから縁遠い生活を送つていた彼女だったが、ようやくそれを掴みかけているのだ。これを逃すような結果にしてはならない。

しかし、相手が少し意外だった。一週間前までは会つた事もなくつたりクとは。

恋をするなら、相手はずつとフィラレスに好意を示し続けたカーエスの方だと思つていたのだが。

そう考えると、リク＝エールという人物に少し興味が出てきた。

「ところで、リク君の方はどう？」

リクが“大いなる魔法”の情報を求めていることは昨夜ティタから聞いていた。そして今日上級魔導士試験を受けさせる事も。

そうして注意深く観察しているティタなら、少しはリクの事を知っているはずだ。

ティタは、溜め息を一つ付いてから答える。

「良く分からないね」

「良く分からない？」

思わず、ミルドはティタに聞き返した。

ティタの場合、良く分からない、という言葉は珍しい。彼女はいつも答えがはっきりしており、答えられない時の答えは「研究上の機密」か「考え中」のどちらかである。研究者としての誇りを持つ彼女にとって「分からない」は、研究対象に対する敗北宣言なのだから。

「魔法の知識はギリギリ必要範囲。それから、エスタームトレイルちよつど一本分の体力。普通なら、“あそこ”に耐えられる魔導士じゃない」

その言い方はどうだろう、とミルドは思った。

上級魔導士試験の合格ラインは九割以上なので、合格する時点ですでにほとんど満点であると言えるし、なにより上級クリーチャーまで駆り出すくらい難易度を厳しくしたエスタームトレイルだって、クリアできる魔導士といえば上級魔導士の中でも限られてくるので

はないだろうか。

そんなミルドの思考に気付く様子を見せずにティタはどこか遠くを見るような眼で続けた。

「でも、あたしは心のどつかでリク＝エールに期待しているような気がする。初めは、クリアしても見込みが無い、の一言で終わらせる事も考えていたけど、いざ終わってみると、もう限界が見えたも同然なのに、まだ惜しいって思っちゃうんだよ。あの目を見てるとそんな気になる。フリーが惚れたのも頷ける話だね」

そう言って、ティタはミルドに笑顔を向けてみせた。

確かに、会った時の一同を思い出すと、あからさまにフィラレスを始め、ジエシカ、コーダに慕したわれているし、あのカーエスも軽口の裏でリクを認めているところがある。

あの青年魔導士には人を引き付ける不思議な魅力を持っているのかも知れない。

「ミルド」と、物思いにふける夫をティタが呼び掛けた。その目が自分に向けられるのを待つて彼女は続けた。「何を隠しているのかは知らないけれど、あたしの事は気にしなくていいからね」

う、とミルドは息を詰まらせた。

流石に聡明な自分の妻は気付いていたのだ。ミルドが最近何かを思いつめている事、そしてその事でティタに影響が及ぶのを恐れている事を。

半分気付かれないために、話題をリクの方に変えて、思いのほか上手くいったと思っていたのだが、彼女にはそんな小細工は通用しないらしい。

「アンタがこうと決めた道なら、あたしも一緒に歩いて行ける。思

った通りにやんな」

「……………ありがとう、ティタ」

ミルドは微笑んで感謝すると、視線の合ったティタの目に吸い込まれるようにゆっくりと顔を近付け、彼女に口付けた。

**

コンコン、と静寂の中にノックの音が響いた。執務机に座っていたディオスカスは黙って手元のコンソールを操作して、そのカギを開ける。

「失礼します」

そう言っ入ってきたのはディオスカスの腹心の部下、ドミニク・バージャーだ。しかし、その肩書きほどにはディオスカスはドミニクを信用していない。

ディオスカスのコネを使って極限まで難易度を下げた試験でやつと上級魔導士になるほど能力は低く、ただ服従する事でひたすらディオスカスから何かを与えられるのを待っている、ただの小心者。ただし、ディオスカスはドミニクのある一点に関しては認めている事がある。彼が自分を信じている事だ。心酔、もしくはほとんど狂信といってもいいほどに。

「何か用か？」

ディオスカスは、執務机の上に広げられていた書類に目を落とし

たまま尋ねる。

そのような態度にも何ら動じる事なく、ドミーニクは報告した。

「先ほどガナンより連絡がありました。魔導レーザーがほぼ完成したようです」

「ほう、昨日の今日ですか？ 目処めどがたつたとは聞いていたが、思ったより早かったな」と、その報告に、ディオスカスは思わず顔を上げると、

「閃ひらきを得た主任研究者が昨日から今日にかけて、睡眠もとらずに仕上げたそうです。あとは実験を残すのみ……これで全てのピースが揃そろいましたな」

そう言つてドミーニクはディオスカスに不敵な笑みを見せる。だが、上級魔導士の資格を持っているとはいえ、長年現場を離れて肥え太った彼の顔にその表情は似合わない。

不快感を憶えたディオスカスは、彼の顔から視線を外し、再び書類に目を落とす。

「うむ。確かに今からでも計画は開始できるが、もう少し時間を掛けたいところだな。まだ不安要素は無視できん範囲だ」

上級魔導士の資格を持ち、それぞれ弟子を持つて指導に当たっている教師を初めとした魔導士団の団員も九割方掌握しているが、残りの一割もどうにかしたい。

カーエス・ルジュリスが連れてきているという客人のことも気になる。この計画にはフィラレス・ルクマースが深く関わってくるので、彼等の抵抗も計算に入れなければならない。今日の昼間にはカーエスとカンファータ魔導騎士団の副団長だというジェシカ・ランズリアが試合を行つたらしいが、見ていたもの話ではほぼ互角だったという。

カーエスがもう一人増えた計算になると、幾分厄介だ。もつとも客人である彼等は永遠に留まる訳ではないだろう。せめてエンペルファータを出るまで待てば、ずいぶんと計画の遂行は楽なものになる。

ディオスカスは今まで目を落としていた書類を閉じると、下らない雑誌であるかのように机に放って言った。

「例のフォートアリンTONの事件で、カンファータとエンペルリースからウォンリルグとの戦争を警戒して魔導兵器の開発を急ぐように呼び掛けた件で、特別予算が届いたからこれを持って張り切って開発に勤しめ、との所長からの通達だ」

彼が何を言わんとしているのかを察し、ドミニクは意地の悪い嘲笑を浮かべて応じる。

「ククク、今のあなたからしたら滑稽こっけいとしか言えませんな。まさか頼りにしている開発部長のあなたが、事件の焦点であるウォンリルグへの亡命を企てているなどは夢にも思いませんまい」

「全くだな。我々がこれだけ大きな事を計画しているのに、薄々勘付く様子すら見せん。やはり、奴は魔導文明の先端たるエンペルファータの長としては器が小さすぎる」

溜め息にも似た吐息を付きながら、ディオスカスは言い、まるでそこに本人がいるかのように書類に視線を送る。その目は何ら良い感情という物を含んでいない冷たいものだ。

長年、アルムス・ムーアという人物の下で働いてきたが、彼がその人物の評価として下した結論は、今の言葉と、彼の眼差しが全て語り尽くしている。その結論から、自分の方が魔導研究所所長という地位に適していると考え、あれこれ画策しながら次期所長の座を

虎視眈々（こしたたん）と狙い続けてきたこの数年だが、数週間前から、彼の考えは大きく変わった。

今、魔導研究所が抱えている魔石問題は少々厄介だ。今、アルムスからその地位を奪ったとしても、その問題の解決に頭を悩まされ、結局責任を追求されて早々につまづいてしまう可能性は大きい。

そこに、ダクレーからウォンリルグへの亡命という選択肢を示された。彼がどうやってウォンリルグの者と接触を持ったのかは分からない。しかし、彼が持ってきた書簡にはウォンリルグからの者である事を示す印章が押印されていたのだ。密かに研究部に回して確認を行ったが、それはまぎれもなく本物だった。

その書簡にはディオスカスにウォンリルグへの亡命を勧める^{すす}もので、開発部長であり、魔導士団長のディオスカスの権限によって何かしらウォンリルグにもたらずものがあれば、ディオスカスをウォンリルグにてそれ相応の地位を約束する、という内容のものである。

情報の少ないウォンリルグではあるが全くないと言うわけではない。魔石資源が豊富なことはその少ない情報の一つで、魔導研究所で働く者達の中では有名だ。その中で新たに魔導研究所を創設し、その長に収まれば、ディオスカスは何の問題もなく自分の野望を達成できる。

それだけではない。話によると、ウォンリルグは戦争を企てていると言う。アルムスは魔導研究所の技術力をもって当たれば何の心配もないと思っっているようだが、仮にウォンリルグが魔導研究所の技術力を手にすればどうなるだろうか。おまけに、研究所の抱える最大の武力、魔導士団も大半がウォンリルグに寝返るのだ。カンフアータとエンペルリス、その二国合わせた力をもひっくり返せるかも知れない。

そうしてウォンリルグが世界に覇を唱えるようになれば、名実共に世界の最先端となった新魔導研究所の所長である自分はどうなる

だろう。まさに“文明の担い手”と呼ばれるにふさわしいではないか。

……夢も持つてねエような人間に、己の道が見えるもんかよ。

かつて、魔導学校の校長であつたディオスカスの下で教師をしていたファルガール「カーン」を、魔導研究所から追放するために罫を仕掛けて生徒を傷付け、監督不行届きの責任を追求した際、夢という子供じみた言葉をくり返す彼を皮肉つたディオスカスに、ファルガールはそう答えた。

不意に脳裏に蘇^{よみが}つたその言葉に、ディオスカスは苦笑を漏らした。

確かに、彼のいう通りだつた。

亡命という選択肢が見えて以来、ディオスカスは自分が何をすべきか、という点について悩んだ事はなかった。ただ、見えている道突き進んでいただけだ。それまでは常に自分には迷いと焦りが付きまどつていたというのに。

「……しかし、これは夢などという幻ではない。実現しうる目標だ」

そのためには、亡命する前に持ち出せる者は全てここから持ち出さねばならない。

22 『牙を剥く悪意』

人の心に、獣が生まれる事がある。

その身体は漆黒の毛皮に覆われ、鋭い牙と爪を持つ。

その獣はある者を警戒し、その目を大きく開いて威嚇いかくする。

そして、その緊張状態に耐えられなくなった時、

悪意という獣はその者に牙を剥むいて襲い掛かるのだ。

「リク様!？」と、声を上げたのは、カーエスの部屋に寝泊まりしている男三人が食堂に入ってくるのを見たジェシカだった。

その視線の先にいたリクは、他人の不幸は蜜の味とばかりにニヤニヤ笑いを漏らしているカーエスと、同じような顔をしているコーダに両脇から見守られ、ふらふらと歩いている。

「痛ててて……」と、声を漏らしながらリクはやっとの事で椅子に座る。

説明を求めるようにジェシカがコーダに視線を送ると、コーダは今にも飛び出してきそうな笑いを必死で噛み殺しながら答えた。

「昨日のエスタームトレイルの筋肉痛が今朝になって出てきたんスよ」

「筋肉痛が次の日になって出てくるなんて、まるで……」と、カーエスがぶつと噴き出しながら楽しそうに続ける。「お・と・し・よ・り」

リクは、カーエスを半眼で睨にらみ付ける。

「ジェシカ」
「何でしょう?」

自分を呼ぶ声に応えたジェシカに対し、リクは黙ってカーエスを指差し、短く命令する。

「殺れ」

「かしこまりました」と、ジェシカは即答し、脇に立て掛けてあった槍を掴むとカーエスに突きかかった。

その余りも素早く実行に移された行動に、カーエスはすんでのところで槍をかわして叫んだ。

「ちょ、ちょっと待てエツ! かしこまるなあっ!」

「残念ながら、これはリク様の命令だ。逆らう事は出来んな」と、言いつつジェシカは槍をたびたび繰り出して、カーエスを追い掛け回す。

「そーゆーのって、盲信とか狂信とか言うんちゃうんかなあ、とか思ったりするんですけどいかがでしょうっ!」

椅子を持ち上げ、盾の代わりにしながら、カーエスは何故か丁寧な口調で問いかける。

「ああ、私も心の底では貴様を葬る事に辛さを感じているのだが、リク様の命令に身体が勝手に動いてしまって、私にはどうする事もできないのだ」

「絶対嘘やーっ! 何、その爽やかな笑顔っ!」

今はまともな朝食時であるので、座席の幾らかは他の従業員や学生などで埋まっており、その騒動に全員が槍を持って追い掛け回す

魔導騎士と、追い掛けられる魔導士に注目している。

そんな中、その男はリク達に近付いてきた。彼は、喧噪けんそうを背後に机に突っ伏しているリクに話し掛ける。

「相変わらず君たちは賑やかだね」

聞き覚えのある声に、リクが顔をあげる。その視線の先には、彼の想像した通り、体躯たいくのいい、それでいて人当たりのよさそうな優しい雰囲気を持った研究者が立っていた。

「フリーに何か用でもあるのか？ ミルド」

「いや、今日は、フィラレスは自由にしていい。僕が用があるのは君にだよ」

「俺？」

意外な言葉に、リクは顔だけ上げていた状態から身体を起こす。

ミルドは優しく目を細めて頷うなずいてみせた。

「そう、いろいろ聞きたい事があってね。フリーの事で」

「それならカーエスに聞いた方がいいんじゃないの？」

ここにいる五人の中で、もっともフィラレスという少女をよく知っているのはカーエスだろう。他の自分を含めた四人はここ二週間足らずの付き合いで、カーエスだけはフィラレスと五年以上付き合い合っているのだ。

その次にフィラレスを良く知るのは、コードだろう。彼は便利屋という職業柄、情報の扱いには最も長けている。ファトルエルでリクと離れている間、フィラレスがどう行動していたかも把握しているだろうし、そして様々な行動から、フィラレスがどんな心理を持っているのかを察するのはさほど難しい事ではあるまい。

そしてその次に彼女を知っているのはジェシカだ。ここ二夜は同じ部屋で過ごしているし、それ以前も女同士という事もあり、湯浴みなど、プライベートな行動を共にする事はあった。

つまり、今フィラレスを一番良く知らないのはリクなのだ。

「……いや、他の人にももちろん後から聞くよ。折角の機会だから、一人一人丁寧に聞いて行きたいと思ってね。ちょっとプライベートな話もあるんだ」

答えるまでに置かれた間を、そして言葉の端に付け加えられた真実も、リクは見逃さなかった。

つまり、フィラレス云々はただの口実、ミルドは自分と二人きりで話をしたいのだ。

「分かった」と、リクは机を支えにして立ち上がる。そして脇に座っていたコーダに言った。「悪いけど、テイタが来たら話が終わるまで待つように言ってくれ。後で研究室まで行くから」

「了解しやした」

「お茶でいいかな？」

「ああ。できれば、冷たいやつがいい」

リクの注文に、ミルドはふっと微笑を浮かべて尋ねた。

「猫舌なのかい？」

「いや、俺の場合は単に冷たいやつの方が好きだけ」

猫舌だった師匠を思い出しながら答える。食事をする時、暑いものが平気なりクは大抵ファルガールより先に食べ終わっていた。十分に冷めるまでまってから食べるファルガールをリクは退屈な思いで待っていたものだ。

ミルドは了解した事を告げると、数分後冷やした茶を持って現れた。

それを、リクの目の前に起きながら話を切り出す。

「それで、フィラレスはどのくらい前から“滅びの魔力”をあれだけ制御できるようになっていたんだい？」

先ずは取りあえず、口実とはいえ、聞いておきたい事から始めたらしい。

彼が言っているのは一昨日、リク達が魔導研究所に到着し、テイタとミルドに出会った直後にあったあの事件の事だろう。リク達は開発・研究室棟の第三実験室で暴走したクリーチャー二十体を撃退した。

その半分は、最後にフィラレスが能動的に発動させた“滅びの魔力”によって掃討され、フィラレスの制御によって“滅びの魔力”はそれ以上何を傷付けることなく収められた。

「詳しい事は知らねーけど、一週間前、ファトルエルを出た時から毎朝制御をする訓練はしてたらしい」

「何故、訓練を始めたのかは分からないかい？」

フィラレスは喋る事が出来ないの、確信は出来ない。しかしながら、推測する事はできる。切っ掛けはきっとファトルエルの大会

だろう。フィラレスはあの大会で死のうと思っていた。制御できない魔力でこれ以上人を傷つける事を恐れて。

それが、“滅びの魔力”を制御しようと考えを変えたのは、おそらく自分の所為だろう、とリクは思う。

初めてフィラレスの“滅びの魔力”を目の当たりにした時、リクは自分で制御するように説いた。だが、その時は聞かず、そのまま自分を殺せるものを求めて、“滅びの魔力”を狙っていた組織に属していたジルヴァルトに挑んでいったのだ。

そして、望み通り死にかけたが、リクの呼び掛けに答え、彼女は生きる事を選んだ。生きる事を選んだ以上、彼女はリクのいう通り“滅びの魔力”を制御できるようにならなければならない。そう考えたのだろう。

しかし自分の所為だというのは、何となくおこがましい気がして、あまり話す気にはなれない。

「やっぱりきつかけはファトルエルの大会じゃねーかな。色々あったし」

「色々？」

リクの誤魔化したい意図に反して、突っ込んで聞いてきたため、リクは仕方なく話した。成るべく、自分のことは話さず、フィラレスの心境の変化だけを話す。

「なるほど。それに、君の影響もあつたんじゃないかな？」

「え？ 何で？」

隠していたはずの事を、ミルドがあっさりと言い当ててしまったので、リクは少し驚きを交えた声で聞き返した。

「実は昨夜見てしまったんだよね。アレ」

「アレ？」と、数瞬考えた後、リクはそれが何を示しているか思い当たり、つい大声をあげる。「アレかあっ!？」

おそろく、昨夜のフィラレスと一緒に歌っていた時の事だろう。遅い時間だったから誰もこないと夕力を括くくっていたので人の気配に気が付かなかった。

「フィラレスが君に恋をしているのは一目瞭然だ。おそろくファトルエルで彼女にとって一番大きかったのは君との出会いだと僕は思うよ」

にんまりと笑ってみせるミルドに、リクは溜め息を付く。

(またこの話かよ……)

二日前の夜も、カーエスが自分に対し同じような話題をふってきた。その時に答えた通り、リクにはまだ恋心というものを意識した事はなく、これからしばらくは積極的に恋に関心を持つ事もない。

昨日の昼になって、やっとこの話題が冷めてきたと思ったのだが、まさか今またこの話題が蘇よみがえるうとは。

リクの半ばうんざりとした心境とは裏腹に、ミルドは話を続けた。

「君は彼女の事はどう思っているんだい？」

リクは少し間を置き、溜め息を付いて答えた。カーエスに答えたのと、同じ答えを。

「フィリーの事は嫌い好きとに分けたらハッキリと好きだ。ただ、これは恋愛感情じゃない。それと、俺はしばらく恋愛ってモンに関わろうとは思わない」

言い切り、リクは茶を飲み干した。

視界の大部分を覆うグラスの向こうに見えるミルドの顔はいまいち感情が読めない。リクは少し違和感を覚えたが、その正体はつかめなかった。

彼が空になったグラスをテーブルに戻すのをまっつて、ミルドは静かに言った。

「それはちよつと困る」

「どういう意味だ？」

「もし、フィラレスを愛していないのなら、あまり彼女に気を持たせるような真似をするべきじゃない、って言ってるんだよ」

* * * * *

「ち、ちくしょう、折角昨日本気で決闘したのに何も変わってへん……」

テーブルに突っ伏したまま、カーエスは呻くように呟いた。

先ほどまで、リクの命令に従い、カーエスを追い掛け回していたジエシカだったが、途中、食堂で働いている中年女性に注意され、リクの姿がいつの間にか消えている事もあって、その騒動は収まった。

カーエスは体力を使い果たしたかのように机に突っ伏しているが、ジエシカは息一つ乱していない。いくら軽甲冑とはいえ、けつして軽くはない格好をして同じ運動をしていながら、全く体力は削られていないようだった。

「そんなことで良くリク様の事を笑えたな」

「……ちよつと不公平ちゃう？ リクのあれかて相当情けないと思うんやけど」

カーエスの反論に、ジェシカはきっぱりと首を振って答える。

「いや、いくら精魂尽き果てていようと、リク様は必要とあれば必ず動く」

「俺かてそうやと思うんやけど」

「機会があつたら証明しろ。それまでは信用できん」

そんな言い合いをしているところに、ティタがやってきた。昨日、エスタームトレイルが終わった後、朝食時に食堂で会おうと約束していたのだ。次の試験を用意してもらうために。

ティタは一同の顔を見渡し、リクがいない事に気が付いて尋ねる。

「おはようさん。リクはどこだい？ 定期便かい？ ちゃんと毎朝出るって健康でいいね」

「それはちよつと下品じゃないかな……？」

いつものようにおずおずと妻に突っ込んだのは、ミルドだ。その顔を見て、コーダが目を丸くして尋ね返す。

「あれ？ ミルドさん、どうしてここに？ 兄さんとの話はもう終わったんスか？」

「え？ 何の話？」

聞き返したミルドの顔は、とぼけているようには見えない。それに元々、とぼけるようなタイプでもないはずだ。

思わず顔を見合わせた一同は、リクがミルドに誘われて研究室に

行った事を話した。

「昨日の晩からずっと一緒にいたし、寝てる間にすりかわってなきや、こっちが本物だと思うけど？」

「ミルドさん、一昨日食べたケーキの味覚えてやさか？」

テイタの言葉を受け、コーダが確認の為に尋ねる。

「ある意味、忘れられないよ……。」と。ミルドは苦笑し、コーダの耳に口をよせてボソボソと何かを呟いた。

その答えを聞いて、コーダは断定する。

「このミルドさんが本物スね」

この中で、西洋料理店『オワナ・サカ』に行った時にフィラレスのケーキを食べたのは本物のミルドだけのはずだ。

「と、なると今リクが会つとるのは、誰や？」

「ともかく急ぐぞ」

頷きあう一同の中で一番先に走り出したのはフィラレスだった。

説明されても、リクはミルドの言っている事があまり理解できなかった。

しかし同じ質問を重ねるのも、意味がないので、代わりに顔を訝しげにしかめて見せる。

それで察したのか、ミルドは更に続けた。

「彼女は今、恋だけに生きている。言い換えると、君の気持ちが欲しいがために生きている。しかし君は彼女を愛していない。つまり、今彼女が過ごしている時間は無駄になっってしまうんだ。さっさと諦めさせてしまえば、彼女は他の事の為に生きる事ができると思わないかい？」

その目はミルドの物とは思えない輝きを発していた。純粹に何かを欲する、そのためには他のものは視界に入れないような瞳の妖しい輝き。

思わず声を失うリクに、ミルドはもはや、優しさの欠片もない、畏にかかった獲物を見るような嗜虐的な笑みを浮かべて付け加えた。

「もし、本気で愛しているにしろ、消えてもらうのには変わらないがね」

「お前……誰だ……!？」

反射的にソファから飛び下り、身構える。

ミルド、否ミルドの姿をしている何者かは、彼に不敵に笑いかけながら、身を翻してみせた。

その瞬間、ミルドの姿をしていた者が別の姿に取って代わる。あそこまで体格の違う者に化けていたところを見ると、何か魔法を使っていたのだろう。

小さな体躯に、病的な容貌、ぼさぼさの髪や口元の下卑た笑みは妖怪じみた印象を与える男。見覚えはあるが、リクにはどうしても名前が思い出せない。元々彼とはほとんど接点はなかったのだから、仕方のないところではある。

それを察したのか、その男は助け舟を出すように名乗った。

「ダクレー＝バルドーだよ、リク＝エール君」

「確かミルドの上司だろ。そのあんたが何の真似だ？」

先ほども述べたが、リクとダクレーの間にはほとんど接点がない。いくら悪意を持っていようと、ミルドに化けて騙す理由が思い付かない。

「君が私に何かをした、というわけではない。君の存在が邪魔なのだよ。別に教えてやる義理はないが、まあ自分が殺される理由は知っていてもいいだろう」

身構えるリクに対し、何故かダクレーは全く無防備な体勢で、話しはじめた。

「私がここで何を研究していたか、分かるかね？」

「分かるわけねーだろ」

「だろうね、相当機密には気を付けて研究していたから。で、何を研究していたかというのだ。フィラレス君の“滅びの魔力”をある物の代わりに使うための研究だ」

そこで、ダクレーは一旦話を区切り、リクを見る。

こいつは質問を待っている、とリクは察した。思惑に乗るのは嫌だが、続きが聞きたい事もあるので、その誘いに乗る事にした。

「ある物って何だ？」

リクの考えは大当たりだったらしく、ダクレーは心底嬉しそうに頷きながら続けた。

「“セーリア”だよ。知っているかね？」

確か、カーエスが説明していた。街の中を快適な環境に保ち、且つ、定期的にやってくる大災厄から街を守る絶対的に強力な障壁。

「あれを保つには、莫大な魔力が必要だ。ところが、現在の星自体からは使える魔力、魔石が枯渇しつつある。……研究所はひた隠しにしている事実だがね。輝かしい栄光を保っている表面とは違い、今、エンペルファータは確実に滅びの道を歩んでいるのだよ」

「で、魔石の代わりにフィリーを使おうってのか!？」

説明している間、リクの目の前を行ったり来たりしていたダクレーが足を止めて頷く。

「意外に聡いようだね。説明する手間が省けて助かる」

「お前、自分が何言ってるのか分かってんのか!？」

「同じ事をミルド君にも言われたよ。だが分かんわけがあるまい」

こともなげに答え、ダクレーはまた人の心に触るような笑みを浮かべる。そしてまた歩みと説明を再開する。

「セーリアの動力源になれば、眠ったままずっとその場でエネルギーを吸い取られ続ける事になる。君たちの言い方で言うと死んだも同然の状態になるわけだ。ミルド君にした説明をくり返すと、私は彼女に償いの機会を与えてやろうとしているのだよ。人々を傷つけた罪を償いたがっているフィラレス君にね」

「何を勝手な事を言ってるやがる。フィリーには何の罪もねえだろうが」

叫ぶ事を止め、押さえた低い声で睨み付けながらリクは言う。

「まあ、その通りだ。その理論は今や意味をなさない。彼女には協力を断られたよ」

ダクレーがリクの正面で歩みを止めた。そしてリクに向き直り、話を続ける。

「私は何故彼女が断るのか分からなかった。彼女に罪はない。しかし彼女の心に罪悪感があった」

それを聞いて、リクの中で一つの疑問が解けた。

昨夜、フィラレスがミルドの研究室に行ったのは、そのダクレーの計画に協力する事を拒否するためだったのだ。つまり、昨夜フィラレスと会ったのは、断った直後という事になる。

あの時、フィラレスは酷く辛そうな顔をし、そして罪悪感に後ろを引かれながら愛を求める歌姫の戯曲を奏でていた。その時、彼女はまさにシルヴィアナと同じ心境だったのだろう。罪悪感と恋心、フィラレスは恋心を取り、あの時、彼女は罪悪感を振払う事に必死だったのだ。

「それが分かかって、わざわざフィリーに協力を求めたのか？」

リクの、ダクレーを睨み付ける瞳に更に力が加わる。

ダクレーはそれを正面から受け止め、睨み返した。ダクレーの瞳に、初めて狂暴性というものが宿る。

初めて会った時から、人を馬鹿にし、思いやりも何も感じられないような無神経な目はしていたが、攻撃性と言う物はあまり見受けられなかった。しかし今、ダクレーからはハツキリと悪意と敵意、そして殺気を感じる。

「昨日、貴様とあの娘を見た時、全てが分かったよ。つまり、あの

魔導を始めた瞬間、彼は自分の身体に強力な違和感を覚えた。それは急速に膨らんでゆき、本格的に魔導に入った時、その違和感は激痛に変わった。不意の事に、リクは魔導を中断してしまい、片膝を付く。

そこを狙って、ダクレーが魔法を打ち込んできた。

「我が魔力よ集まれ、敵を見据えよ、そして喰らわせろ、瞬く力を敵にぶつける《ぶちかまし》！」

そのレベル7の魔法に対し、リクはとつさに障壁を張ろうとしたが、それも激痛に阻まれ、普段から反射的に張れるように訓練している薄い魔法障壁ですら張れなかった。

純粹に衝撃のみを与える光弾がまともに命中し、リクは部屋の壁まで吹き飛ばされる。

部屋の壁に背中を強かに打ちつけ、視界が暗転しかけるのを気力で防ぎながら、リクはただ、訳の分からない状況を把握しようと、思考を巡らせる事しか出来なかった。

23 『魔導士殺し』

死は全ての終わり。

幸せ、希望、そして夢。

罪、責任、そして絶望。

死は優しい、死に逃げよと負が告げる。

生は素晴らしい、生き続けよと正が告げる。

人は常にその二択の前に立って生きている。

(ど、どうなってんだ……!?)

《ぶちかまし》と、壁に背中を打った時の衝撃で、危うく失いかけた意識をどうにか繋ぎ止めながら、リクは誰ともなく心の中で問いかける。

魔導を行うと激痛が伴う。

ファトルエルの大会ではジルヴァルトという強敵に魔導を封じられた事はあったが、このような体験は初めてだった。

「不思議に思っているようだが……少し考えれば分かる事ではないのかね？」

目の前から、ダクレーの声が聞こえた。壁に背を預けて座り込んでいる形のリクを見下ろしているようだ。表情は、おそらく見れば間違いなく不快感を覚えるだろう。

その目を開き、顔を上げようとしたリクは、思わず咳き込んだ。

同時に口の奥から何かが込み上げ、それを吐き出してしまう。
血だった。

それだけではない。先ほどまでは魔導を行った時にしか感じなかった激痛が、継続的に彼を襲うようになっていく。視界は歪み、全体が熱を持っているのが感じられる。呼吸も、少しずつ困難になってきていた。

歪む視界で、先ほどまで座っていた接客用のソファを捕らえる。その上には中身が飲み干されたグラスが置かれているはずだ。

(毒……か)

その思考を読み取ったかのようなタイミングでダクレーが言った。

「どうやら、分かったようだねえ。そう、これは毒の一種だよ。さつき君に出した茶に混ぜてあった物だ。この毒は魔法毒の一種で《導きの戒め》、通称は“魔導士殺し”という毒でね、それを飲むと助かる方法はただ一つ。二度と魔導を行わないことだけだ。

少しでも魔導を行ったが最後、《導きの戒め》は魔導士の身体を蝕んで行く。魔導を行えば行うほど、毒の回りは早くなり、命が短くなって行くというわけだ。……あの時点でもう、この勝負は決まっていたのだよ、リク＝エール君」
(気安く人の名前を呼ぶんじゃないねえ)

呼吸すら困難な状況で、喋ることの出来ないリクは胸中で毒づいた。

中々力が入らず、言うことを聞かない身体を誤魔化し、リクは立ち上がるうとする。

それを見たダクレーが、大仰に憐れむような仕種で言った。

「ああ、まだ立ち上がるうとするとは立派だねえ。心が強い！ し

かし如何せん、注意力と経験が足りなかった。君の死に様に、君の師匠も悲しみながら誇りに思うだろうねえ」
(それを見る前に殺されるぞ、アンタ)

隙を見ては逃げ出そうとする己の意識を捕まえておくために、リクは敢えてダクレーの言葉に集中して耳を傾け、いちいち心の中で返事をする。

何とか腰を浮きあげた。とたんにふらついて倒れそうになったので、リクは慌てて背中を壁に押し付けるようにして身体を支える。そしてそのまま少しずつ、身体をずり上げて行った。

「もう助からないが、少しでも長く生きたいと思うなら動かない方がいいと思うんだがねえ。ああ、この苦しみからとっとと離れたいと言っことかね!？」

(ああ、コイツ、黙らせてえ)

ようやく、背中を壁に預けたままだが、ほとんど直立の体勢にまで戻した。そして、リクは大きく、ゆっくりと息を吸い込んで行く。これが、最期の呼吸であるかのように。

その間に、両脇に下げたままの両手を、軽く握りしめる。そして、リクは目を大きく見開くと、その魔導を開始した。

「その翼は如何なる嵐にも動じない力強き翼！」

魔導を始めた途端に、さらなる激痛がリクを襲った。その痛みに、リクは魔導を中断しそうになったが、気力をもって、痛みを押さえ、魔導を続ける。

「その色は何にも汚されぬ純白！」

呪文の詠唱と共に、リクの足下に光が走り、複雑な魔法陣を描き上げていく。

「その白銀の嘴は全ての者を貫き通す！」

「何だ、その魔法は！？ この期に及んで、まだ悪あがきをする気かね！？」

目の前に顔を近づけて何かを言っているようだが、リクは気にせず続けた。

魔導が完成しないとタカを括っているのか、幸い、邪魔をする気はないようだ。

「その御姿の神々しさたるや、神獣として相応しき！」

「痛いだろう！？ 苦しいだろう！？ もう止しておきたまえ！」

毛穴と言う毛穴から脂汗を垂れ流しながら、魔導を続けるリクを、ダクレーはまだ余裕を持って、面白そうに眺めている。

リクは、そんなダクレーの顔は視界には入っていなかった。既に彼は何も見えていないからである。ただ、この魔導を完成させることに集中している。

痛みは既に感じなくなっていた。その代わりに、離れて行くことする意識を必死で留める事に既に尽きかけている精神力を費やさねばならなかった。

「来れ、天翔け巡り、司る者よ！」

「止めると言っているだろうが！」

リクの足下に魔法陣が完成し、輝きが増したのを見たダクレーが、流石にリクを止めにかかった。魔法はもう間に合わないため、テーブルに置かれていた花瓶を手にとって、リクに向かって振りかぶる。

彼は、わざと尻餅を付くように体勢を崩し、その一撃をかわした。背後の壁にあたった花瓶は砕け、その破片と、中身がリクに降り注ぐ。

水浸しになりながらも、リクはその魔法を完成させた。

「その名は“白鳳”はくほう」《アトラ》！

リクが詠唱を完了させると同時に、その魔法陣はその上に向かつて光を放つ。その光はどんどん広がっていき、やがて、この部屋全体を満たした。

光のまぶしさに反射的に目を瞑っていたダクレーは、目蓋の上からまぶしさが感じられなくなったことを確認すると、恐る恐る目を開けた。

そして驚愕する。

ダクレーの目の前には、自ら光を放たんばかりに眩しい純白の羽に身体を覆われた巨鳥が姿を現わしていたのである。白銀の嘴は鋭く、その尾は長い、鳥というよりは鳳凰という方が相応しいだろう。その身に纏う雰囲気には神々しささえ感じられた。

目の前で、その巨鳥、“白鳳”《アトラ》は長い首をもたげ、自らの大きな翼で庇護するように覆っているリクに顔を向けて話し掛ける。

《大丈夫か？ リク「エール」》

その声は空気の振動によるものではない。直接頭の中に響くものだ。

リクは苦しげな顔で、なんとか苦笑を作ってみせて答える。

「実はあんまり……。下らんことで呼び出して済まねーな」

《れつきとした危機のようだ。遠慮はいらん》

高度の制御力と知識をもって自らの魔力を具現化させる高等魔法、召喚魔法。そうして“創り出されたもの”である召喚獣は自らの意志を持たない。その召喚獣があたかも独立した存在であるかのよう
にリクに語りかけ、会話を成立させている。

リクがそう喋るように操っていれば、あり得ない光景ではないが、余裕のないリクにそこまで出来るわけがない。“魔導士殺し”と呼ばれる魔法毒《導きの戒め》の冒^おかれておきながら、創り出した召喚獣の姿を保たせる事も不可能だ。

否、そもそも、創り出す対象のものの事を熟知していなければならぬ生物の召喚魔法で、あのような実在しないようなものを召還することからして、あり得ない。

奇跡としか説明しようのない状況に、思考の混乱を感じながら、ダクレーは呆然とその光景を見つめていた。

が、はっとして我に帰る。

(私は、ここで失敗するわけにはいかんだ……！)

フィラレスが協力を断った動機そのものであるリク「エールを排除することによって、事態の好転を狙ったダクレーだったが、思わぬ展開となってしまうた。

しかし、まだ終わったわけではない。召喚獣^{アトラ}の能力のほどは定かではないが、《導きの戒め》に毒に縛られているリクである。どれだけ気合を入れようと、召喚獣の制御で手一杯のはずだ。

つまり、《アトラ》は無視し、リクに直接止めを入れれば、それで終わるはずである。

しかし、《アトラ》の戦闘力が未知数である今、油断は出来ない

上、策を練ることもできない。即ち、自らの最大の攻撃をもって正面から魔法を打ち込むのが最上の策ということだ。

「じゃ、ま、あと頼むわ」

《心得た》

軽く事情を説明したあとに、頷いて自分の方に向き直った《アトラ》と目があう。ダクレーは構わず攻撃に移った。手を前に突き出し、短く唱える。

「《爆炎》っ！」

短い呪文に反して、激しい炎がダクレーの掌から放たれた。その炎はリクを庇うかばうようにして立っている《アトラ》ごとリクをその中に取り込むように、その手を広げる。

《“烙印魔法”らくいんまほうか……。強い魔法だが、同時に己自身の弱さを語る魔法だな》

“烙印魔法”。呪文の代わりに、魔導を補助する魔導紋様を身体に刻み込むことにより、キーワードになる言葉を一言発するだけで魔法を発動できる魔法の事である。

高い魔導制御力を必要とする高レベルの魔法でも、必要な魔力さえ持つていれば確実に、しかも異常なまでに素早く発動することができるのだ。あまりに安易に高威力の魔法を発動することができるのでこの魔法は“全世界による魔法についての使用制限条約”によって使用を禁止されている。

《アトラ》は嘆息まじりに言い捨てると、その翼の内にリクを抱いた。

そして《爆炎》は彼等を包み込んだ。次の瞬間、《アトラ》が翼を勢い良く広げ、それによって起こった風により、あれだけ激しく燃え盛っていた炎が一瞬にしてかき消された。

「なっ……！？」

一回きりの自分の切り札を、いとも簡単に防がれたダクレーがその目を見張る。

驚愕を露にするダクレーを見下ろして、《アトラ》が言った。

《やっとの事で見つけた私の“最後の主”だ。簡単に殺されては困る》

言っている意味が分からず、啞然とするダクレーに向かつて、《アトラ》は嘴を開いた。そこに、高密度のエネルギーが集められていく。

明らかに自分への攻撃だと見て取った彼は、防御するための魔法を探す。しかし、自分の持っている魔法では、この高威力の魔法には対抗できそうにない。

自分の魔法でなければ、あるにはあるが、《爆炎》は一言でレベル7並みの魔法を発動できるが、如何せん一発ずつに要する魔力が桁違いに大きい。先ほどの一発で、すでに使えなくなっているはずだ。

考えている内に、《アトラ》は自らの嘴に構成した魔力の光弾を放った。

それを見たダクレーは決死の覚悟で、その切り札である烙印魔法のキーワードを唱えた。

「つつ………！ 《爆炎》っ！」

今度こそ根こそぎ魔力を失った感覚と共に、光弾に向かって突き出した手から凄まじい勢いで炎が放射される。

ところが《アトラ》の光弾と衝突した瞬間、それは呆気無く掻き消えた。

「馬鹿な……、あり得ない！」

ダクレーは、自分の気持ちを集約するような一言を放ったあと、光弾に吹き飛ばされた。

「うっ……ぐ……」

打ち所が良かったのか、《爆炎》が少しでも威力を軽減してくれたのかは知らないが、ダクレーはそれでも意識を保っていた。

腹部に重度の火傷、背中に打ち身を負っているほかはほぼ無傷で済んでいるらしい。腹部の火傷の保証は出来ないが、現段階の感覚としては立つて歩くことはまだできるだろう。なんとかこの場から離れることができれば、自分にもまだ生き延びるチャンスはある。

もうリク＝エルは放っておくことにする。無理をして止めを指さなくても、“魔導士殺し”と呼ばれる《魔導の戒め》の毒が発動した今、彼に助かる術はないのだ。

自分の状況の確認を終えたとき、ダクレーの耳にコツ、コツ、コツ、とゆったりとした足音が聞こえた。

そして感じる気配。それは、彼の知っている者の気配だった。否、彼にとって、その者存在はその気配が全てだ。

（“幽霊”……！？ 何故ここに……！？）

受けた衝撃で歪んでいた視界を意識的に直すと、ダクレーは足音のするほうに目を向ける。

「“白鳳”ねエ……、意外なところでとんでもねエものを見つけちゃったぜ」

その軽い口調は、確かにダクレーが何度か話したことのある“幽霊”の声だった。その姿はまるで枯れ木のようで、ひよろりとした超長身に、長いリーチ。全身をびったりと覆っているスーツをみると、細いながらも、質のよさそうな引き締まった筋肉を持っている事が伺える。頭は完全にそり上げ、その上から布を巻いていた。

身に纏う雰囲気はどこか軽いものがある。隠そうとしていないのか、その裏に何の抵抗もなく人を殺めることのできる、人殺しの狂気があるのが明らかに分かった。

興味ありげに口元に軽い笑みを浮かべながら、“幽霊”は《アトラ》の足下に倒れているリクを覗き込むようにしゃがむ。

「となると、このガキか……あの鼻持ちならねエジルヴァルトをやったってエのは」

《私の“主”に何か用か？》

リクを覗き込んでいた“幽霊”の顔を、《アトラ》がさらに覗き込み、警戒心を露にした言葉を吐く。

「そつとんがるなよ、“白鳳”」

“幽霊”は余裕の笑みを崩さずに、両手を小さく上げてリクから下がって見せる。

どうやら“幽霊”はあの訳の分からない召喚獣が何なのかを知っ

ているらしい。そしてリク「エールが何者なのかも。

「白鳳”に選ばれたり、ファトルエルの大会で勝つちまったりする野郎だ。普通なら勝負してみてもエところだけだよ、毒にやられて弱ってるこいつには用はねエ。運良く生き残ったら、改めて闘ろうって伝えといてくれや」

“幽霊”の言葉に、ダクレーは驚きを隠せない。まさか、自分の殺そつとした男が、現在、世界最強と認められている魔導士だったとは。

結局動けず、成りゆきを見守っていたダクレーに、“幽霊”は不意に視線を投げかけてきた。

「今回はあっちの方に用があるんでな」

びくりと、目を見開くダクレーに、“幽霊”はコツ、コツ、コツ、とわざと響くような足音を立てながら近付いてくる。

実際それを狙っているのだろうが、その足音は確実にダクレーの全身から血の気を奪っていった。

「よう、ダクレーちゃんよ。狸寝入りなんてしてねエで起きてくれや」

その言葉に、ダクレーは誰かに蹴飛ばされてもしたかのように飛び起きた。

彼の顔には、脂汗が滝のように流れている。呼吸器官がやられているわけではないが、軽い調子の裏にある殺気に息も上手く吸えない状態だった。

“幽霊”は、そうしたダクレーの反応を楽しむかのように、彼の顔を覗き込み、言った。

「ダクレーちゃんよ、あんた言ったよなア？ 焦ってしくじりたくねエから急かすなってよ。俺ア、ちゃんと言い付けは守ったぜ？ あれからいっぺんも接触してねえだろ？」

口答えをした子供を、改めて諭すように、“幽霊”は言った。

ダクレーは、後ずさるうとして、後ろに壁があったことを思い出す。思わず後ろを振り向くダクレーの顔を、“幽霊”が掴んで自分のほうを向かせた。

「なのに、何だ？ このザマは」と、“幽霊”の表情が一変する。見る者を縮こまらせるような、殺気を具現化したような表情だ。「罪悪感を突いて誘えば、“滅びの魔力”の娘には断られる。その原因を排除しようとするれば、返り打ちにされる。どっちも、あんたは確実だと思ってやった事なんだろうが。あ？」

「あ……ひ……」

「俺ア、こういった工作は苦手だからよ、こういったセコセコしたのが一番得意そうなあんたをわざわざ引き入れたんだぜ？ 滅多に施せねエ烙印魔法まで与えてよ。平たく言やあ、期待してたんだ。しっかり見事に裏切ってくれたよなア、ダクレーちゃんよ？」

ダクレーは、逃げることも叶わず、目の前で豹変する“幽霊”に素直に恐怖した。この恐怖から解放されるのならば、死んだ方がいいかも知れない。

そう思いはじめた時、“幽霊”は元のように笑みを浮かべて続けた。

「しかし、だ。“ジュー・ラ”は優しい組織なんだよなア。こんなふうには、失敗を犯してもよ、許してやる事になってんだよ」

許す、という言葉にダクレーはびっくりと反応した。

彼の喉さえ縛り上げていた恐怖が解けていく。呼吸ができるようになり、ダクレーは生きている実感を覚えながら、尋ねる。

「本当……ですか？」

「ああ、本当だぜ？ 全く甘エ組織だよなア？」

更に笑みを広げながら、“幽霊”はダクレーに向かって掌を突き出した。

「え……？」

再び笑みが解けたダクレーが、自分に向けられた“幽霊”の掌に急速に魔力が集まっていくのを見た。

そして、表情とは裏腹に、凍てつくような冷たさの音が、ダクレーに告げる。

「全ての責任を投げ捨てて死ぬのを許すなんてよ」

次の瞬間、ダクレーの世界は暗転した。

「早く早く！」

急かす妻の声に、ミルドは息を弾ませながら自分の“鍵”をダクレーの研究室の扉に差し入れた。

がちやりと、ロックが解ける音がすると同時に、テイタがその扉を蹴り開ける。勢い余ってか、扉は蝶番ちょうつがいごとはずれ、内側に向かつてぱたりと倒れた。

「……どうせ壊すなら鍵開ける必要なかったんちゃうかなあ、アレ」

ぼそつと、カーエスが自分の心中と同じ突っ込みを入れるのを耳に入れながら、ミルドはテイタに続いて研究室の中に入った。

最初に、ミルドの心を支配した感情は驚きだった。

きちんと整理していた研究室が、泥棒に入られるより酷く荒らされている。

次に発生した感情もまた驚きだが、また別の驚きだった。恐怖の混じった驚き、というのだろうか。

扉を入れて右手に赤い物が視界に入り、そちらに目を向けると、その目に入ったのは血の海だった。その中に、小さな人型の固まりが落ちている。明らかに死体だ。血に染まって一瞬分からなかったが、すぐにミルドの知っている人物だと知れた。

(ダクレー主任……いや、ダクレー＝バルドー)

胸中で呼称を改めながら、その死体に目を落とす。

胸のまん中に大きな穴が飽き、その顔は驚きと恐怖に固まっている。見るからに凄惨せいさんな死体なのに、それでもミルドは目をそらそうとは思わなかった。

そして、彼の死にほっとしている自分がいることに気が付く

まさか、自分が人の死を喜ぶ人間だとは思っていなかったが。これが、本当の憎しみというものなのか。

（気に入らない人でしたが、あなたにはいろいろなことを教えていただきましたね）

まだ見ていなかった部屋の左手に目をやると、ミルドは三たび驚きに支配された。

ダクレーのそれほど大きくはないが、飛び散っている血、そしてそのまん中に倒れているのは、

「……………リク君？」

気を失いながらも、苦しみに呻き^{うめ}続けているリク＝エールだった。

24 『作戦、始動』

彼は夢を持っていた。

夢を叶えるために、彼は私を頼ってきた。

私は彼の夢を繋^{つな}げてあげた。

私の夢は彼の夢が叶う事と同義だった。

だから、私の夢の為^{ため}にも、彼の夢を続けさせた。

ところが、彼は夢に死に、彼の夢は潰れてしまった。

私はまだ生きており、私の夢だけ残された。

私の夢を続けると、彼等の夢が潰れてしまう。

私が夢を諦^{あきら}めても、彼等の夢は潰れてしまう。

この悪夢の鎖^{くわ}は、叶う事では断ち切れない。

「リクツ、返事せえや！」

「リク様っ、お願いします！ 目を覚まして下さい！」

運ばれていく担架の両脇から、カーエスとジェシカが大声で呼び掛ける。フィラレスは今にも顔色を失い、泣きそうな表情で、ミルドも心配そうな表情をリクに向けている。

その中で、テイタは唯一、冷静な顔で苦痛に喘ぐリクの顔を見つめ続けていた。おそらく、自分の顔は薄情に見えるだろう。実際、彼女の心の中を満たしているのは、その表情に程近い、失望と言う感情だった。

――俺は、諦めませんよ。何度でも来ます。これ以外の夢は見られないから。

夢破れ、今は亡き青年魔導士の姿が脳裏に蘇る。よみがえ

昨日、エースチームトレイルが終わった時に見せたリクの眼。あれを見た時から、彼の姿が頭から離れない。

あまりに、似過ぎていた。

今まで、何人もの男がその壮大な夢を持ってテイタの元を訪れたが、あの眼をしていたのは、今まではその青年魔導士だけだ。

そして昨日、テイタは再び、あの青年魔導士と同じ、夢に輝く瞳を見た。

実力的にもかなり似通っている。彼も、極限まで難易度を上げたエースチームトレイルをクリアしたものだ。今日、彼に同じ試験を課したのも、彼との比較をするためだ。

だが、彼女は今、それを悔やんでいる。何より、あの瞳を見るべきではなかった。どうやらあの手の瞳は人に無条件で期待を抱かせるものらしい。この眼の主なら、何かができるかもしれない。集めたデータがどれだけそれを否定しても、そう思ってしまうのだ。

リクにも同じような感情を抱いた。しかし、それは思っても見なかった形で裏切られようとしている。

どうしてこのような危険な状態に陥おちっているのかは定かではないが、今彼が“大いなる魔法”に挑戦しようとする前に死にかけているのは事実だ。瞳に見せられて、期待感を抱いた心が、今は、全く反対の言葉を囁ささいている。

彼は、結局ここまでの男だったのか、と。

――アンタが息子の馬鹿な夢を指示しなければ、あの

子は死ぬ事もなかった。“大いなる魔法”じゃない、アンタがうちの息子を殺したんだ！

かの青年魔導士の姿と共に、後にテイタを糾弾した彼の両親の声が耳に蘇る。

その時に、彼女は気付いた。おそらく、彼女自身も夢を見ていた事を。自分が与えた知識を手に、“大いなる魔法”を手に入れ、自分の元に報告に戻ってくるという夢を。

リクに“大いなる魔法”について、教えてくれるように頼まれた時、テイタは情報を公開しない理由として、もう二度と夢を潰えさせないためだと答えた。それは、自分の夢の事も含んでいたのだ。

彼等の夢は自分の夢だった。だから、それを潰えさせるのが怖くなったのだ。

昨日、リクの眼を見てしまった事で、彼女は再び夢を思い出してしまった。

だが、思い出し、再び褪せる前に、その夢はまた潰れようとしている。

「テイタ、大丈夫？ 顔色悪いよ」

心配そうに覗き込んでくるミルドの声に、テイタは現実に引き戻された。

リクを載せた担架はもうすぐ研究所にある医務室に到着しようとしているところだ。

「いや、大丈夫だよ、あたしは。それより心配しなきゃいけないのはあっちだよ」

そう答えて、彼女はリクに視線を投げる。
リクは、たった今、魔導医師の待機する医務室に担ぎ込まれたところだった。

研究には実験が付き物である。そして、それは時々、危険なものである。実際、リク達が研究所に付いた日、テイタが行っていた《甲殻に護られし者》に関する実験も、“孤立する日”に伴うクリーチャーの暴走という事故が起こった。

もちろん実験をするための施設にも幾重もの安全措置（いくえ）が施（ほ）されているが、実際、テイタの実験の場合は、処理が間に合わず、リク達がいなければ小さくはない被害を受けていただろう。

そんな中で人々が傷付く事は当然と言える。そんな時の為に備えてあるのが医務室だ。研究所には医療魔法を研究する班もあるので、その研究班に従事する研究者達が交代で医務室を担当しているのである。

研究所の医務室は、性質自体は言葉通りだが、医療魔法の研究施設と兼ねている事もあり、その広さと設備は医務室という言葉で、人が想像するよりはるかに大きく、本格的な医療設備が整っている。しかし、そんな仰々（ぎょうぎょう）しい設備が役に立つのは、いくらありとあらゆる研究を営む魔導研究所でも多い時で三日に一度くらいの頻度だ。そのために、医務室の中は基本的に静かで平穏な時が流れている。

ところが、今日はその静寂を破り、慌ただしく一人の急患が運び込まれてきた。

「ど、どうしたんですか!？」

その日の医務室の担当であった魔導医師は、見た目からしてただ事ではないリクの様子に、驚いた様子を見せた。

「俺らも見てたわけやないんで、良う分からんです。ただ、外傷はたいした事ないんですけど、やけに苦しがつとるんですね。内臓も触った感じはまともですし、多分毒でも飲まされたんじゃないかと」

カーエスが意外にすらすらと報告する。そう言えば、先ほどカーエスがリクの身体を撫で回していたようだったのだが、あれは触診だったのだ。医師免許を持っているというコーダならともかく、カーエスがそのような医者 of 真似事を出来ることに、ティタは少し驚きとは違った引つ掛かりを感じる。

しかしそれはわざわざカーエスに問いたださなければならぬほどの事ではなかったため、取りあえずそっちは置いておく事にする。

魔導医師は、カーエスの報告に頷くと、自分でも確かめるようにリクの身体を調べる。触診をしながら、彼はカーエスに尋ねた。

「毒、ですか。薬品の毒か、魔法による毒、どちらかは分かりますか？」

「いや、そこまでは」

カーエスが、首を振ると、すかさずコーダが割れたグラスの破片を差し出してみせた。

「毒の種類を知るのに役に立つかと思って、現場に落ちてたのを拾ってきた。どっちが、どっちのを飲んだのかは分からなかった」

ので、両方とも」
「お借りします」

魔導医師は、コーダの手からグラスを受け取ると、助手に命じて、
機材を持って来させた。円筒形の入れ物で、表面にはいろいろな数
値を示すメーターが付いている。グラスをその中に入れ、幾秒か待
つと、それぞれの数値が出て来た。

その数値を見て、魔導医師は眉を潜める。

「科学的な数値は問題ありません。ただ、魔力の数値に引つ掛かつ
たので、魔法毒ということになりそうですね。あとはおおまかな魔
法毒の性質が分かれば解毒できるかと思えます。でもその断定には
少し時間がかかります」

リクの様子を見れば、一刻も早い対処が必要である事は一目で分
かるが、確かに薬品による毒と違い、魔法毒はおおまかな特製だけ
でも断定するのが難しい。機械に掛けて物質の割合を調べれば分か
る科学毒に対し、魔法毒はいろいろな検査をして、その結果から推
測しなければならぬからだ。

「しかしそんな悠長なことをしとる暇ないのに……」

眩くカーエスを顧みたジェシカが、何かを思い付いたように提案
する。

「魔法ならば、お前の“眼”を使えば分かるのではないか？」

「そう言えばカーエス君の“魔導眼”がありやしたね！」

ジェシカの発言に、コーダが嬉しそうに手を打つ。

確かにカーエスの“魔導眼”は魔力の動きを肉眼で確認する事が

できる。全く見た事のない魔法でも、魔導は理論に乗っ取って動かされているものなので、魔力の動きを見ればある程度どのような魔法なのかは分かるのだ。

カーエスも同意したのか、賛同の声をあげる代わりに、いつも掛けていた眼鏡を外してリクを見る。

その瞬間、カーエスは背筋に寒気が走るのを感じた。

いつもは、リクの身体の周りを滑らかに走っている白い魔力が、今は何かに汚染されたように赤黒く染まっている。

血のように赤いそれを見て、カーエスは一瞬眼を反らしたい衝動にかられたが、それでもなんとか気を保ってそれを凝視する。

「これは、ヤバいで……」

そう呟いて、カーエスは再び眼鏡を掛けた。

説明を待つ全員から集められている視線を感じ、カーエスは大きく息を付く。

「魔導を行うと、発動して、その後は魔力を動かす度にリクを苦しめとるんです。多分、リクは毒を受けた後、かなりの魔法を使っています。毒を飲まされた後にあのダクレーに攻撃されたんやな。」

俺がヤバい言うたんは、魔法毒だから魔法でしか取り除けないのを、魔力に反応してリクを苦しめる性質を持っている事で、解毒を不可能にしようとすることですわ」

「じゃあ……」と、カーエスの説明に、全員が顔をあわせる。

しかしその先は誰も言わなかった。打つ手がないとは誰にも認めなくなかったのである。

「探すしかないですね。魔法を使わずに魔法毒を取り除く方法を」と、

コーダが腕を組んで言った。

「でも、魔法は物理的な存在じゃない。無理ですよ」と、否定するように魔導師が言う。

魔法は物理現象に干渉する事ができる。しかし物理を介する魔法でない限り、逆に物理が魔法に干渉する事は出来ないのだ。これは完全に証明されている、原則と言ってもいいほどの事実である。

「でも、ここで諦めるわけにもいきません」と、ミルドが初めて口を挟んだ。「取りあえず、リク君の状態を安定させる処置だけでも施してくれませんか？」

しかし魔導師は再度首を振る。

「無理です。現在、患者はあらゆる魔法を受け付けない状態になっていますから、魔法による処置は一切取れません。魔法を使う以外の方法は、私は知らないのです」

魔導師は魔法を使って患者を救う。魔法は物理にも魔法にも干渉する事ができるので、魔法を使えば、大抵の怪我や病気に対応する事ができるので、それ以外の方法は知っていても仕方がないのだ。

「コーダ、お前はどうか出来ないのか？」

冷静を装いつつも、すこし焦りの滲んでいる声でジェシカが尋ねた。

コーダも首を横に振る。

「俺はどっちかというと外科的な治療しか出来ないんす」

コーダは魔法を使う以外の医療の知識を持って、カーエスの骨折した腕を診たことはあるが、確かに、骨折の治療は外科の分野にあたる。

「じゃあ、魔法と普通の両方の医療の知識を持った内科医が必要ってことか……」

ティタが頬に手をやりながら呟く。そんな細かい条件に合った医者がエンペルファータ内で見つかるだろうか。

「心当たりがないわけでもないで」

カーエスの発言に、全員が彼に注目する。

彼は、コーダを見て言った。

「コーダ、《シッカーリド》を飛ばして、ある人を拉致ってきてや。嫌がると思うけど、無理矢理な」

「何！？ ダクレーが殺されただど！？」

恐れながらのドミーニクの報告を受けたディオスカスは、ドミーニクが恐れた通りに大声を張り上げた。

彼の低く重い声は彼の執務室の隅々まで行き渡り、その音波で物を震わせる。その音波を直接向けられたドミーニクが一番震えているのは仕方のないことだろう。

「誰に殺された!？」

「詳細は分からないのですが、リク＝エールであるという可能性が一番高いそうです」

ドミーニクは精一杯身を縮こませながら答える。

意外な名前にディオスカスは、眉を潜めた。

「リク＝エール？ カーエス＝ルジュリスが連れ込んだ客の一人か？」

資料の上ではあまり重要視されていない名前であったが、“ファルガールの弟子”という肩書きの関係上、ディオスカスは自然と彼の名前を覚えていた。

「その通りです。現場を見てきた者の報告によると、戦闘を行ったらしい痕跡が残されているとの事だそうです」

その答えに、ディオスカスの顔はますます訝いぶかしげに歪められる。ダクレーは一応魔導士である事は知っている。しかし、その腕はたいした事がない事も知っていた。ダクレーが相手ならドミーニクでも十分楽勝できるだろう。

それが何故、あのファルガール＝カーンの弟子であり、ファトルエルの決闘大会に参加して、その実力の大きさがほぼ保証されているリク＝エールに戦闘を仕掛けるような愚行を犯したのだろう。

「それで、そのリク＝エールはどうした？」

「意識不明の重態だそうです」

「何？」

簡潔に返ってきた答えだったが、ディオスカスの怪訝な表情は深まるばかりだ。

そんな彼の視線に気が付いたのか、ドミーニクが付け足すように説明した。

「リック・エールは現在、研究・開発室棟の医務室にて治療を受けておりまして、証言者の言葉によりますと、何らかの厄介な毒にやられたとか」

「毒……、か」

その答えで、ディオスカスはやっと事件の一端を飲み込めた。

つまり、何らかの手口でリック・エールに毒を飲ませ、彼から闘う力を奪った上で闘おうとしたのだろう。いくらダクレーでも毒に苦しむ人間になら勝てる。非常にダクレーらしい考えと言えた。リック・エールに毒を飲ませる手段なら、あの狡猾なダクレーなら幾らでも考え出せるに違いない。

が、それは見事に半分失敗し、毒を飲ませたはいいが、返り打ちに遭って殺されてしまったのだ。

「しかし何故、いきなりリック・エールを排除しようと思ったのだ……?」

その疑問だけは、どうしても出てこない。

考えを巡らせようとして、ディオスカスは無理矢理その思考を打ち切った。今は原因を追求している時ではない。ダクレーを失ったことで発生する誤算を修正するために動かなければならない。

「ドミーニク。ダクレーがいなくなった事によって変わってくる事柄を挙げてみる」

「はっ。まず、ダクレーは単独で“滅びの魔力”奪取計画に従事し

ておりましたので、まず、“滅びの魔力”は我々自身が入れなければなりません。次に、殺される前、ダクレーがリク・エールに何を喋ったのか分かりません。もし、リク・エールが計画の決行前に目覚める事があれば、今後には少なくともない支障を来す可能性があります」

ドミーニクの考察を聞き、ディオスカスはふむ、と頷く。

彼に、彼なりの考えを述べさせ、それが自分の考えと同じならば、その考えを第三者的な視点から見直し、違っていれば、自分の考えと比べる。これは、ディオスカスが何かを考える時に必ず行う事だった。経験から、この方法の方が考え逃しをする事が少ない事を学んだからだ。

「確かに、“滅びの魔力”を奪取する計画はダクレーがいなくてもどうにでもなるかもしれん、しかし問題は後者だな。確かにダクレーがべらべら計画の事を喋っていれば、邪魔が入る事は確実だ」

ダクレーの事だ、必ず殺せると確信していれば、冥土の土産とばかりに計画の事を喋っている可能性はある。そしてリク・エールは殺されかけたからには、ダクレーの話を冗談にとってくれる可能性は皆無に等しいだろう。

「それでなくても、リク・エールが殺されかけた事により、研究所は事件の背後関係について調査に乗り出すに違いない。そうなるはどこからボロが出るか分からん」

ディオスカスは、顎に手をやりながら大きく息を付くと、仕方がないとばかりに言った。

「ドミーニク、全員に確実に伝達しろ。本日白の刻（正午）に計画

を始動する。特別な指示がない限り、予定通りに動け、とな」

25 『元魔導医師』

何かたった一つの存在がなくなるだけで全てが無に還る。^{かえ}
それが怖くないのか。

そのたった一つの存在がなくなる事を何故考えない？
可能性がない等と言っても、考え付かないだけだろう？

今、俺達が何に縋^{すが}っているのか、良く考える。
それがなくなったら、どうなるのかも。

現在は手をつけられる事もなく、リクは苦しみ続けていた。気道
が狭くなっているのか、呼吸一つするのも全身に力が入る。時々
血を吐くが、それを吐き出す力がないらしく、傍^{かたわ}らで見る魔導医師
によって、顔を横に向けられてその血はようやく流されるのである。
そのため、彼の顔の周りは血塗^{ちまみ}れで、彼の童顔は痛み^{ちまみ}に歪み、肌
は血の気が引いて真っ青だ。それに反して全身から脂汗のようなも
のが滲^{にじ}み出している。

それはただ見ているだけでも苦しくなってくるような状態だ。

「お待たせしやした！」と、そこに先ほどカーエスに頼まれて、人
を連れに出かけていたコーダが帰ってきた。先ほどから十五分も経
っていない。

息を切らせる彼の肩には、布でぐるぐると巻かれた大きな荷物が
担がれている。

「おい、アイツはどこやねん？」と、カーエスが急かすように尋ね

る。

「ちゃんと持ってきてやったよ」

「持ってきた？」

コーダの答えにカーエスが眉を潜める。そして、彼の担いでいる荷物に視線を移す。

それは丁度、人一人分の大きさで、よく耳を済ませると、奥からうなり声がしているのが分かり、ジッとみていると、わずかにもぞもぞと動いているのが確認できる。

「おい、まさかこれ……？」

そのカーエスの質問に答えるように、コーダがその荷物を降ろして布をとっていく。

その中から現れたのは一人の男だ。

威つくはあるが、人懐っこそうな顔に、着ているのは魔導医師や研究所員が着るような白衣ではなく、茶色い染みが沢山付いた調理服。

魔導医師と助手を除いた全員が、その男に面識がある。

「見ての通り、ジットさんスけど？」

そう、その男は魔導医師ではなく、西方料理店『オワナ・サカ』の店主であるジットだった。

「確かに拉致^{らび}つて来いとは言ったけど……」

まさかここまでやるとは、という言葉を飲み込み、カーエスは呆れ顔のまま、ジットに駆け寄る。

「おっちゃん、おっちゃん、すっかりしたってや」と、ぺちぺち頬を叩いて、眼を覚まさせてやる。

すると、ジットはゆっくりと眼を覚ました。そして、目の前にいる馴染んだ顔を見て、がばっと身体を起こす。

「カーエス！ いきなし誘拐されて何のこっちゃや思てたら、おんどれの仕業かい！ おんどれに構つとるほどワシあ暇ちゃうねんぞ、まだランチの仕込み途中やったのに！ ここはどこやねん！」

「お、落ち着いてや、おっちゃん。コーダ、お前まだ事情説明してへんの？」

自分の胸ぐらを掴んでいるジットをなだめながら、コーダに視線を送ると、コーダは頷いて答えた。

「時間が惜しかったし、説明するなら実物を見ながらのほうがいいかと思いやして」

その会話に、カーエスを吊るし上げて鼻息を荒げていたジットがハッと我に帰ったように落ち着きを見せる。

「事情？ そういやここはどこやねん？」

「研究所の医務室」

ようやく放された胸元をぱたぱたと払いながら、カーエスが簡潔に答えた。そして、改めてジットに向き直り、真剣な眼差しを向けて言った。

「今日は、西方料理店『オワナ・サカ』の店主としてのおっちゃんやない、元魔導研究所研究部第十研究班研究員やった、魔導医師としてのジッターク「フェイシンに頼みがあるんや」

久しぶりにフルネームで呼ばれ、ジット、もといジッタークーフ
エイシンはその厳しい顔を思わず引き締めた。

黙って、カーエスに話の続きを促す。うなが

カーエスは焦らず、順序だてて事情を説明する。カーエスの話が
リクの容態と、自分の眼を使って確認したことの報告に移ると、ジ
ッタークの表情は厳しいものになっていく。

「よっしゃ。事情はよう分かった。そういう事なら協力するで」と、
ジッタークは力強く頷いてみせると、魔導医師に向き直る。「あん
さん、悪いけど白衣貸してんか。流石さすがにこの格好じゃ、医者 of 真似
事するには汚すぎるんや」

魔導医師は、ジッタークを驚きと訝いぶかしみに満ちた眼差しで見つめ
続け、何も答えない。

「ジッターク、フエイシン……あなたが……」

「なんやワシに文句でもあるんか？ あんたはもうサジを投げたん
やさかい、この患者はワシのや。この上邪魔するんやったら許さへ
んで」

そうジッタークが凄んでみせると、魔導医師は反射的に反論した。

「しかし、あなたは研究所を追い出され、医師の資格を剥奪された
身でしょう」

「関係あるんか？ 命の懸かっこの時に、それが。資格がない
から患者を救われんかった、で済ませ言っんか？ あんたは」

半ば叱責するように冷たく響くジッタークの言葉に、魔導医師は
黙って奥にジッタークを案内する。

それを見送った後、今の一連の会話についてカーエスが説明する。

「ジッターク……おっちゃんはな、昔、この研究所で医療魔法を研究しとる魔導医師やったんやて」

今は、魔法で大抵の病気が治せる。だから研究所では魔法を使わない医療は研究していない。ところが、ジッタークとその師匠である研究班の主任は、魔法を使わずに治せる方法を研究し、それで済むなら魔法を使わずに治した方がいい、と主張していた。

ジッターク曰く、魔法という存在に寄り掛かった今の一本柱の医療に危惧を覚えたらしい。魔法の存在がなくなるだけで、今の医療技術は全て無用の長物と化してしまう。またそれを抜きにしても、魔法という、世界の基盤をも揺るがしかねない、余りにも便利で大きな力に依存しすぎるのには抵抗を覚えるのだそうだ。

魔法の存在がなくなったらとか、魔法が世界の基盤を揺るがすなどという話を聞いて人々は嘲笑^{あざわら}う。どこにそんな可能性を示唆する証拠があるのか、と。

そんな反応を示す人々にとって、ジッターク達は異端であった。しかし魔導医師として腕が良かった彼等は、戯^ざれ言を言う以外は優秀な研究員であったので、研究所も彼等を切り捨てる事はなかった。ところが、ある事件が起こり、ついに彼等は研究所を追放されてしまつのである。

「ある事件？」

反射的にジエシカが聞き返す。

カーエスは頷くと、話を続けた。

「おっちゃん達は、ある日“どんな病気、怪我でも治す魔法”を見

ついでしてしもたんや」

「え？ そんな魔法があつたら、もう研究とか必要無くなるじゃないスカ！？」と、コーダが驚きの表情を見せる。

その反応に、カーエスは首を振る。

「いや、そうはならんかった。噂を聞き付けた人らがようさん研究所に押し掛けてきたんやけど、おっちゃん達はその魔法を一切公開せず、そのまんま禁術として封印してしもたんや」

「おかげで、スポンサーや、押し掛けてきた人はこぞって、ワシらを責めよつた。その結果、ワシらは研究所を追い出されてしもた」

着替え終わって、彼等の前に再び現れたジッタークがカーエスの言葉を引き継ぐ。

「……つたく、人の暗い過去をベラベラ喋りよってからに」

恨みがましい目でカーエスを見つめるジッタークをその場にいる全員が凝視した。

「な、何やねん」

全員分の視線を受け、ジッタークは少ししたじろぐ。

半ば呆然とした様子で、カーエスが言った。

「おっちゃんが、若く見える……」

「放つとけ！」

中途半端に伸びていた無精髭は剃られ、洗った顔は見るからにさっぱりしている。煮染めたような調理服から、洗いたてのぱりつとした白衣に着替えたジッタークはまるで別人のように見えた。

もともと、厳つい顔をして五歳は老けてみられるジッタークであるが、あの調理服の汚さも相まって、五十代くらいの若さに見えていたが、今はきちんと年相応に四十代前半の外見をしている。

ジッタークは、全員が同じような印象を抱いていることに、少し拗ねた様子を見せたが、すぐに厳つく引き締まった魔導医師の顔に戻ると、リクの方に駆け寄った。

少し顔を上の方に向けて、口の中や、瞳孔の具合等を確かめてみる。

「ちょっと、カルテ見せてんか」

ジッタークが、手を差し出すと、魔導医師は抵抗する事もなく、手に持っていたファイルを彼の手に渡す。

「おおきに」と、カルテを受け取ったジッタークは短く感謝の意を述べると、ぱらぱらと何枚からかの紙からなるファイルに素早く目を通して行く。

一通りの事は調べ終えたのか、彼は大きく溜め息をつく。

「これはちょっと難儀なんぎやな……」

「やっぱし、アカンのか？」と、カーエスが不安げに尋ねる。

ジッタークの過去を知っていたカーエスは、最初から駄目で元々のつもりで彼に頼んだので、彼でも手がだしようもないとしても責めるつもりはない。

また、彼の過去から、今の魔導医療に偏りかたよがある事は感じていたので、その偏りの外にいるジッタークならば何かリクを治す方法を見つけれられるかも知れない、と思っていた事も事実なので、失望感も拭えないものではあった。

「なら、せめて今の苦しみだけでもとってやってくれへん？」
「いや……」

カーエスの言葉に対するジッタークの否定の言葉に、カーエスは更に顔を暗くする。

「それもアカンのか？」

「そやない」と、ジッタークは首を振る。「カーエス、さっきの話、全部ホンマか？」

「こんな時に、嘘なんかつく訳あらへんやんか」

質問に明確な答えを返してもらえない事への憤慨ふんがいを交えながら、カーエスは答える。

それを気にする様子もなく、ジッタークは、リクを見ながら静かに告げた。

「なんとかなるかも知れへんで」

「……ホンマか!？」

声を出して反応したのはカーエスだけだったが、ほぼ同じタイミングで、この場にいる全員が顔をあげる。

「覚えとるか、ワシと師匠が作った禁術」

「まさか、あの“どんな病気、怪我でも治す魔法”!？ 実在していたんですか!？」と、魔導医師が声を上げる。

そう思うのも仕方がないだろう、とカーエスは思う。

誰の目にも触れないうちに禁術として封印されてしまい、本人達以外に証言者がいなくなったため、当時から研究をしていた者以外の魔導医師達は、その理想を越えた医療魔法の存在を事実として受

け止めていない事が多い。

「言葉面ほど便利な魔法やないねんけどな。アレは嘘やない」と、重い息と共に、半ば罪の告白でもするようにジッタークは言う。「ホンマは禁術やけど、何の因果か、今回だけはアレを使うための条件が揃ってしもつとる。ただ、アレは確実やないで。生存確率は良くて2割やと思とくんやな」

逆に言うと、死ぬ確率は八割という事だ。

その事実にも、全員が言葉を詰まらせてしまう。たしかにこれに賭けなければ、どうせ失われる命だ。決断をするべきだろう。それは分かっているが、自分のものではない命を気前よく賭ける事に、抵抗を覚える。

決断を待ち、ジッタークはカーエス達が見合わせるのを見守る。

部屋の中を沈黙が支配する。

「それ……で……いい。やつ……て……くれ」

それを破ったのはこの場に立っていた誰でもなかった。

「リク、お前氣イ付いとつたんか!？」

「信じられへん……こんだけ身体ン中メチャクチャになつとるつちゆうのに……」

意識を失っていたはずのリクが声を発した事に、全員が彼に注目する。その表情は例外なく驚きに満ちていた。

彼は、苦しげに呼吸をしながら言葉を繋^{つな}げる。

「俺……は、こじ、じゃ、……死ぬねえ……。悪い……けど、……」

頼む、わ」

それだけ言うと、また血を吐いて黙ってしまった。
ジッタークは、そんな彼に目をやり、呟いた。

「カーエス、おんどれが何でそんなにコイツを生かしがるんか、分かった氣イするで」

ジッタークの言葉に、カーエスは頷く。

外見からして毒に冒され、かなりの苦痛を感じているはずだ。それは氣を失わずにいればなおさらのはずで、下手に氣を抜けば命を失いかねない。そんな状態で意識を留めておける精神力を持つ者がこの世界には何人いる事だろう。

「ほな、何がなんでも生かしてもらおうか」

続いて、コーダとジェシカも頷く。

「八、九割の死の確率じゃ、絶対に死にやせんよ、兄さんは」

「その通り。リク様は生きるべくして生き、死せるべくしてやはり生きる方だ」

彼等の言葉に、ジッタークは表情に自信を満ちさせて答えた。

「ほいだら、絶対に助けようやないか」

先ず、ジッタークは紙に乱暴に何かを書きなぐって行くと、コーダに向かってそれを差し出す。

「あんだ、これ手に入れられるか？ 半刻（一時間半）以内に」

コーダは手渡された紙に目を走らせると、力強く頷く。

「六分刻（三十分）で手に入れてみせやス！ 便利屋の名に掛けてろくぶんこく

そう言い放ち、コーダは身を翻して医務室をかけ出していく。それを見送った後、ジッタークは次にカーエスに視線を送る。

コーダのように何か指示をされる事を予想し、身体を固くした。

「カーエス、おんどれにはちいとヤバい仕事してもらうで」
「禁術破りか？」

今までの話の流れからすると、危ない仕事といえは禁術破りだろう。危険性を考慮され、禁術とされた魔法は全ての資料がある所に封印される。そこに封印され、長い間、放置されて行く内に、その魔法は忘れられて行く。それが“忘却の間”。

カーエスは、使わないと決めた魔法の資料をどうして焼かずにとっておくのか、疑問に思ったものだが、今となってみると焼かれずに済んで良かったと思う。

「でもおっちゃん、“忘却の間”がどこにあんのか知ってるの？」
「あ……っ！」

カーエスに指摘され、ジッタークは思わず声を漏らす。

「封印に立ち会ってたさかい、場所は知っとるけど、ややこしい事務手続きを踏まんと絶対に行かれへんのや」

この魔導研究所にはしばしばそういった、物理的に繋がっておらず、移動用魔法陣を通してしか行けない場所が存在する。

移動用魔法陣は普段封印されており、事務手続きを経て、魔導研究所所長の許可をもらわなければ封印は解けない仕組みになっているのだ。

実際、所長であるアルムスの部屋も、移動用魔法陣を介さなければ行けず、秘書に頼み、アルムスの許可を得てからでしか入れない。

「どうにかして行けないものかな……？」と、ミルドが腕を組んで思案する。

その答えは、意外と彼に近い所から返ってきた。

「行けるよ」

その声に、ミルドは自分の隣に立っていたティタを見る。

先ほどからと変わらない無表情のまま、ティタは淡々とした調子で続けた。

「少し考えてみれば分かる。“忘却の間”への立ち入りに必要な手続きをいちいち踏んでたら、秘密裏に動きたい時でも周りに動きが知れてしまう、例えばある部長が他の部長を出し抜きたい時とかね。そんな時の為に手続き抜きで行けるように、抜け道が作ってあるわけさ」

「で、ティタ殿はそれを知っておられるのですか？」と、ジェシカが希望に少し怪訝な響きを混ぜた声で尋ねる。

何故、それをティタが知っているのかという疑問が残るからだろう。

それを察したのか、ただ、頷く事はせずに、何故自分がそんな事を知っているのかという事も付け加える。

「昔、そういう上の動きが気に入らなくて、調べた事があるのさ。流石に手間取ったけどね。あたしに掛かれば解けない謎なんて“大いなる魔法”の謎くらいのもんだよ」

「で、それはどこにあるんです？」と、カーエスが聞き返すと、テイタはカーエスの方に歩み寄って答える。

「ちょっと口では説明しにくいからあたしも一緒に歩いていくよ」
「では、私も行くよ」

そう言っつて、カーエスの傍に歩み寄ったジェシカに、カーエスは物問いたげな視線を送る。

「医者知識もない私はここでは役に立たないからな。禁術破りとなれば少しは武力が必要な場面があるかもしれん」

三人揃って、ジッタークに向き直ると、彼は服の下から、自分の首に掛けていたペンダントを取り出してきた。

その細い鎖の先に付いていたのは飾り等ではなく、細長い棒だ。

「“鍵”……」と、カーエスが思わず声を漏らす。

“己の証たる鍵”。最新の魔導技術で自分のデータが詳細に刻まれ、エンペルファータにおいて自分の身元を証明するものである。自分の“鍵”のデータを登録した扉ならば、全て、この“鍵”一本で開けられる。

「おっちゃんのか？ それ」

自分に向かつて差し出されたそれを見ながら、カーエスが問う。
ジッタークは厳かな面持ちで頷いて続けた。

「せや。“忘却の間”の中には金庫の棚があつてな、他の禁術の資料とかがそれぞれ収まつとる。この“鍵”はワシらがつくり出した禁術の収まつとる金庫を開けられるんや。番号は一四七九番、忘れたらあかんで。やり方は覚えとるから、資料はいらん、ただその金庫に収まつとる道具を持ってきて欲しいんや。アレだけは欠かさへん」

「分かつた」と、カーエスがジッタークから“鍵”を受け取ると、自らの首にかける。

「カーエス。おんどれ、ホンマに分かつとるんか？」

準備を進めるカーエスに、ジッタークが尋ねた。

質問の意図が分からず、カーエスは怪訝けげんな顔をする。

「どつという意味？」

「“禁術破り”なんて大それた事やらかしたら、おんどれはもう研究所に入られへんようになるんやで」

魔導士養成学校の生徒という立場は、この世界に認識される中で一番のエリートコースだ。最低でも高級官僚並みの出世が約束されているのである。

「つまらん事を聞くなや、人の命が懸かつて時間もないつちゅうのに」と、カーエスはその質問をつまらない、のたった一言で吹き飛ばす。

その答えに、ジッタークは満足そうな顔をして、付け加えた。

「いい忘れとつたけど、コイツの命はそう長く持たへん。持って赤の刻（午後三時）と思って動けや」

今は白の刻（正午）の六分刻（三十分）前。何かあるのかは分からないので、断言は出来ないが、取りあえずは十分な時間は与えられていると言っていていいだろう。

ジッタークに言われた事をもう一度思い返して確認すると、カーエスは頷いた。

「分かった。後は頼むで」

そう言っつて、カーエス達は医務室を後にした。

四人もの人間が去って少し寂しくなつた医務室に残されたミルドは妻を含む一同が去つた扉をずっと眺め続けている。

「ミルドはん」

「え？ あ、はい。何でしょう？」

魔導師とその助手に、矢継ぎ早に指示を出して、リクの苦痛を和らげるのに忙しいジッタークに名を呼ばれ、ミルドは我に返つたように返事をする。

「面倒でっけど、今出てつたやつらの為に、昼飯用意したつてくれまへんか？ 帰つてきよる頃には腹減つて死にかけてるでしょうか」

その頼みに、ミルドはにっこり笑つて答える。

「そうですね」

26 『白の刻』

時は確実に流れている。

早くなる事もなく、遅くなる事もない。

常に同じ早さで流れている。

予め定められた事象がある。

それは起きるべき時が刻まれるのを静かに待っている。

そしてその時は確実にやってくる。

「馬鹿が……」

大きな執務机の上で、握り拳をわなわなと震わせながら、魔導研究所所長・アルムス・ムーアは呻くように呟いた。

先ほど、研究所内で起こった、最近開発部から研究部に移ったダクレーという男が戦闘の末に殺された事件のことを知ったばかりなのだ。

“セーリア”を初めとする魔導器によって、環境を快適に保たれているこの街は、それ故に税金が高く、貧しい者は住めない仕組みになっており、貧富の差による事件というものは起こらない。

また、“鍵”のように、最新の魔導技術による防犯が利いているため、エンペルファータ市民は、事故の可能性が多分にある研究所に勤めている者を除けば、護衛に囲まれて暮らしている各国の王家の人間よりも安全であると言われているのだ。

そのため、殺人事件が起こったと聞いて、報告してきた行政部長・エイスの声は強ばっていたが、彼をいらだたせているのは、殺人事

件という事件の性質ではなく、殺された人物であるダクレーの方にあった。

昨今、彼の頭を悩ませていたのは二つのエネルギー問題である。一つは魔石問題。次々と魔石鉱山が閉鎖されていき、魔導文明の源と言える魔力が尽きつつある。しかしこちらの方はウォンリルグにまだ豊富にあるとされる魔石資源に頼ることで、どうにか乗り切る事はできるだろう。

しかし、問題はもう一つのエネルギー問題、“セーリア”のエネルギー問題である。これは魔石問題とは全く別の問題だった。

“セーリア”は大災厄にも対抗できる障壁。その魔法効果の大きさからも、消費魔力の大きさは想像できる。実際、普通の魔石では“セーリア”に必要な魔力を賄い切れない。よって、“セーリア”の動力源は魔石ではない、“あるもの”だった。

ところが、その特別な“あるもの”も内に宿す魔力が尽きかけている。このままでは数年持たずに“セーリア”はその稼動を停止してしまうだろう。

これは、エネルギー源の代わりが思い付かず、“セーリア”が使えなくなれば、その後二百日以内に“孤立する日”という確実な滅びがやってくるといって、魔石問題よりずっと切実で難解な問題だった。

そんな問題に一つの解決策を見出させてくれたのがダクレーである。度々暴走を起こし、彼の悩みの種の一つであった“滅びの魔力”を“セーリア”の動力源にしようという案は彼にとっては一石二鳥の提案であった。

アルムスはその提案を受けた後、それを実現すべく多少の無理を押し、ダクレーを“滅びの魔力”研究の主任に据えた。

その結果がこの事件である。

ダクレーを殺した魔導士というのが、リク＝エールという、フィラレス＝ルクマースと共に魔導研究所にやってきた男であるから、おそらく、彼等の戦闘の原因は“滅びの魔力”絡みだろう。何かの失態を犯し、その繕いつくろをするために、彼に戦闘を挑んだという見方が一番あり得る話だ。

だが、その戦闘で勝つたらしいリク＝エールも、今は重態となっているらしいので、ダクレーがリク＝エールに何を喋っていたようにと外部にもれる心配はない。つまり、ダクレーの“繕い”は半ば成功している。

大事になつてしまったが、この状態ならダクレーの提案を他の人間に任せる事もできる。

(やはり、狡猾なだけの奴では駄目だな。代わりはもっと器の大きな男にしくはなくは)

“滅びの魔力”を持つ娘をその気にさせる事が出来、且つ、ダクレーの計画を引き継いで進める事ができるだけの頭脳を持つ人物。

能力的には、以前から“滅びの魔力”を研究していたミルドが適任だろうが、彼はフィラレス＝ルクマースに娘のように愛情を注いでいる節があり、反対するのは目に見えているので、思想的にいえば、ミルドはこの計画を任せるには最悪の人材と言える。

(どつしたものが……)

研究部と開発部の名簿を眺めながら、アルムスが一人思考を巡らせていると、“伝声器”から秘書の声が聞こえた。

『市長、開発部長と魔導学校長が面会を希望しております』

「そうか」と、アルムスは短く答え、胸中で丁度いい、と思った。

ディオスカスとドミーニクはダクレーの計画を知っている数少ない人間の二人だ。ダクレーの代わりの人選をする相談にはいい相手だろう。

おそらく、彼等が今来たのも、ダクレーの事件を聞き付けたからに違いない。

「通してやってくれ。それと三人分の昼食の用意を」

ちらりと時計を見ながら、アルムスが告げる。色を変えて時を知らせる時計は、限り無く白に近い、卵色になっていた。

「丁度、呼び出そうと思っていたのだ、そっちのほうに掛けてくれ」と、アルムスはディオスカスとドミーニクを接客用のソファに座らせる。

「所長も既にお聞きでしたか」と、ディオスカスはゆっくりとした動作で柔らかいソファに身を沈める。ドミーニクもそれに倣い、ディオスカスの隣に腰掛ける。

アルムスも、二人の向かい合う形でソファに座ると、アルムスと二人の間にあるテーブルに、研究部と開発部の名簿を投げ出した。

「至急、ダクレーの代わりの人選を急がねばならん。君達に能力的、思想的に信頼のおけそうな人物に心当たりはあるかね？」

ディオスカスはその名簿を取り上げ、ぱらぱらと捲ってお座なりに目を通しながら答えた。

「掃いて捨てるほどいますよ。人材に関して、ここまで贅沢なところは他にはないでしょうからな」

「ふむ、ならばこの中から一人選んでくれんかね？　なるべくなら、今度は性格のいい者を頼む」

元々、問題の多い男だったが、その中でも一番大きな問題は、その性格だったとアルムスは思う。

あれほど人の喜ばせ方を知らず、人の気分の害し方を熟知している男はいないだろう。たとえ必要があるにしても、彼にはなるべく接触したくない男だった。

「それで、目撃者であるリク＝エールの方はいかがしますか？」

「どうするって……彼は死にかけているのだろう？」

何を知っていようと、かなり状態の安定した状態にならない限り何を喋る事も出来ないだろう。

ディオスカスはそれをどうしろと言うのだろう。

「万が一、ということもあります。命を取り留めて、彼の口から計画の事が漏れれば厄介だ。それに、命を取り留めてから口封じをしたのでは、いささか不自然になってしまう。死にかけている今がチャンスですよ」

「私に彼を殺せと言うのか……!?!？」

驚きに目を見開いているアルムスに、ディオスカスは意外に感じたように言う。

「今さら何を仰る。^{おかし}元々この計画はエンペルファータの為に一人の少女を犠牲にしようというものではありませんか」

「殺すのではない。他の手段が見つかるまで、眠ってもらおうだけだ」

「詭弁ですよ、それは」

反論するアルムスに、ディオスカスは切り捨てるように言葉を返す。

ディオスカスは柔らかなソファから立ち上がって続けた。

「他の手段が見つかるのはいつの事ですか？ 少なくとも十年や二十年は無理でしょう。見つかる保証もない上に、見つかったとしても、あの利用価値の高い娘をむざむざ手放すはありません」

ディオスカスこそ今さら何を言うのか。

アルムスは内心で一人ごちた。ダクレーを紹介し、この計画を自分に進めたのは他ならぬディオスカスだ。その彼が、何故今、アルムスを批判し、責める。

答えはすぐに出てきた。要するに彼は言いたいのだ。自分はもう既に引き返せないのだと。

ディオスカスは、ゆっくりとソファの周りを歩き回りながらアルムスを諭すように言う。

「たかが一人の男ですよ。それがエンペルファータの市民三万人を救う事になるのです。犠牲を渋れば、大事は成し得ません」

「……………」

口をつぐむアルムスを、見下ろしつつ、ディオスカスはドミニクに視線を移した。

その視線に気付いたドミニクは時計にちらりと見遣ると、目だけで頷いてみせた。

それを受けた、ディオスカスは言葉を続ける。

「そう、大事には犠牲が必要な場合が多々あるのです、所長。例えば魔導文明の第二の黄金期を築く事ができるとしたら、その為にエンペルフアータを犠牲にする覚悟はおありですか？」

突如として開発部長の口から出てきた大言に、アルムスが弾かれるように頭をあげる。

「エンペルフアータを犠牲にする？ どういう意味だ？」

「例え話ですから具体的には言えませんが、取りあえずこの街が無くなるという事です。住民はどこかに移住する事になりますな」

「しかし、魔石の底が見えている今、あの頃の状態に戻るはずがない」

魔導文明の黄金期。それは今から三十年前から二十年前を指す言葉だ。掃いて捨てるほど魔石が採れたあの頃は、魔力は底なしと信じきり、それこそ湯水のごとく浪費をしていたものだ。

今から丁度二十年前に魔石鉱山の一つが初めて閉鎖され、資源が有限である事実を目の前に突き付けられた時、魔導文明の黄金期は終わりを告げ、過去のものとなったのである。

黄金期の頃の魔導器の開発は、いかに効力が大きいものを作るかが課題であったが、どの魔導器も黄金期の終わりあたり、魔石の減少と示し合わせるように、効力の増加も頭打ちになり、最近の開発課題は同じ効力でどれほど魔力の消費を抑えられるか、だった。

当時から研究・開発活動に関わっていた者たちは嘆く。黄金期の開発はいつも前を向いて歩いている気持ちだった。今は後ろを見ながら横に歩いているような気持ちである、と。

アルムスもその頃は開発活動に関わる者の一人で、彼も、そのような気持ちを抱き続けている。

「出来る事ならば、あの頃に戻りたい。だが、それはもはや幻、夢物語だ」

ディオスカスの言葉から、彼の心の内に蘇った思いを吐き出すかのように、アルムスは漏らした。

その言葉に、ディオスカスが満面に不敵な笑みを浮かべる。

「しかし、私なら出来る」

「何？」

余りに簡潔な言葉だったので、アルムスは反射的に聞き返した。

カラーン。

同時に時計が白の刻（正午）を告げる、気持ちのいい鐘の音が響く。

立っているディオスカスを見上げたアルムスの視界の隅で、ドミニクが動くのが見えた。

「《蔓^{つた}の束縛》によりて、我は汝の愚かな動きを戒^{いまし}めん！」

ドミニクの魔法は即座に効果を現わし、ソファから生えてきた蔦が瞬時にアルムスを縛り上げた。

混乱しながらも、アルムスは、自らの魔法を持って、ドミニクの《蔦の束縛》を破ろうとするが、その動きを見切ったかのように、ディオスカスが、いつの間にか手に持っていた首輪を素早くアルムスの首に取り付ける。

“滅びの魔力”保持者であるフィラレスがしているのと同じ魔封アクセサリーだ。“滅びの魔力”ならば、まだ漏れ出して魔導を行

う余地があるのだが、常人並みの魔力だと完全に封じ込めてしまう。

カラーン。

どう足掻いても手も足も出ない事をアルムスが理解すると同時に、再び鐘の音が聞こえる。

「ディオスカス！ 貴様、一体何を考えている！？」

「申し訳ありません、所長。私は一つだけ嘘をついておりました。

アレはただの例え話ではありません。本当に起きる事だったのです」

アレ、とは先ほどのディオスカスの例え話の事だろう。第二の魔導文明の黄金期を作る為にエンペルファータを犠牲にする、という夢物語だと否定するアルムスに対し、ディオスカスは確かに自分なら出来ると言った。

「まさか、貴様………それを実行する気なのか！？」

馬鹿な、出来るわけではない。

魔導文明の第二次黄金期など、夢幻に過ぎない。

アルムスは言外にそう付け足す。

彼の知る限り、ディオスカスはこのような大それた夢に取り付かれるような男ではなかったはずだ。

「馬鹿な真似は止める。このような夢が叶う訳がなからう」

「これは、叶う、叶わない、という問題の夢などではありませんよ。行く、行わない、という問題の計画なのですから」

カラーン。

ディオスカスの断言に同意するかのようなタイミングで三度目の鐘が鳴る。

絶句するアルムスに背を向けて、ディオスカスは所長用の大きな執務机に向かうと、伝声器を操作して所内放送に切り替える。

そして、彼は宣告した。

「魔導研究所関係者全員に通達する。本日“白の刻”を持って、魔導研究所は暫定的に当研究所開発部長兼魔導士団長・ディオスカス「シクトの指揮下に入る」

カラーン。

“白の刻”を告げる最後の鐘の響きは、ディオスカスによる、魔導研究所史上初のクーデターの始まりを祝っているかのようにだった。

**

心地よい鐘が白の刻を告げた瞬間、魔導研究所の状況は一変していた。

それは魔導研究所の開発部軍事部門の施設である『軍事魔導器管理室』においても例外ではない。否、むしろその筆頭と言ってよかった。

「何の……つもりだ!？」

魔法によって強制的に引き起こされた睡魔に必死で抗いながら、軍事魔導器管理室の事務員である男は尋ねた。

彼の周りには、既に眠りに落ちた同僚達が転がっている。魔法で引き起こされた眠りだ。彼等の“事”が済む間では決して眼を覚ますまい。

彼等の前に立っているのは、同じ軍事魔導器管理室の事務員だった魔導士の男だった。

「見ての通り。魔導兵器を使うのさ。折角作り出したのに、使わないのも勿体無いだろう?」

簡潔に答える魔導士の背後には、次々と軍事魔導器を運び出していく、おそらく彼等も魔導士であろう別の人間達の姿が見える。

睡魔に侵されつつある、彼の脳裏に先ほどのディオスカスの宣言が蘇る。

あれは、本気だったのだ。

考えてみれば、これはいつでも起こりうる事だったのだ。

魔導研究所には表立って軍隊などはない。しかし選りすぐられた資質に最先端の養成を施された魔導士達、そして最新鋭の技術を持つて生み出された魔導兵器の持つ軍事力は、三大国のうちのひとつと戦争を行っても十分に渡り合えるくらいの大きさはある。

そして魔導士達を統べる魔導師団長、魔導兵器を扱う者たちの長である開発部長。双方の肩書きをもつディオスカスなら、このようなクーデターは十分に可能だ。魔導士団に所属する魔導士達の力で所員をまとめて眠らせ、さらに魔導兵器を持ち出す許可を与える権利を持っている。ただでさえ質がいいと言われている魔導研究所の魔導士達はその魔導兵器を使えば、いとも簡単に魔導研究所を制圧する事ができるだろう。

所内での肩書き上はアルムスに劣るとは言え、ディオスカスは純

粹な意味で非常に大きな力を持つ、危険な存在だったのである。

気付くべきだった、その事に、もっと早く。

世界から戦が姿を消してはや百年。

その間に自分達は忘れてしまっていた。

最後に物を言うのは、権力などではなく、武力なのだと言う事を。

自分の小さな抗いなど何の意味もない事に気付いた彼は、限界に達していた睡魔に遂に身を任せ、その場に倒れ込む。

次に眼を覚ました時、“事”の全て終わった魔導研究所に思いを馳せながら。

ばたん、と魔導レーサーのエンジンルームを閉じ、開発部文化生活部門第六魔導車開発班主任は満足そうに頷いた。

無理をして休暇をとり、ファトルエルの大会を観に行った帰り道に見かけたサソリ便。あの走りから閃きを得て、それを失わない内に形にするのに今まで不眠不休で働いていたが、ようやくのところ、今日試走ができるところまで漕ぎ着けた。

集中が切れ、二日二晩働き続けていた疲れがどつと身体を襲うが、今となつてはそれも心地よく感じられる。試走が終わって家に帰ったら一眠りして、子供と遊んでやろう。ずっと構ってやれないできっと怒っているだから。

「ガン君、準備は出来たか？」と、助手であり、この魔導レーサーのドライバーである男を呼ぶ。

彼は魔法による加工によって事故から身を守れるくらいの頑丈さを誇るツナギを着け、脇にヘルメットを抱えて現れた。

「主任、もう昼ですよ。試走の前に腹ごしらえしときませんか？」
「ああ、そういえばそんな時間か。研究活動しているとどうも時間の感覚が無くなるな。よし昼食にしよう。空腹で試走に支障をきたすといかんからな」

そういつて二人明るく笑いあつたところで、“白の刻”を告げる鐘がなる。その後の所内放送による自分達の上司にあたる開発部長・ディオスカス^ニシクトの声明には、あまり研究所内の人事には^さ聡くない彼も驚いた。

「ガナン君、これはエライ事になったな。私達はどう動けばいいんだ？」

「寝ていればいいんじゃないですか」

彼は、このガナンの答えを自分達の雲の上で起こっている、あまり自分達には影響のないものだということ^を皮肉つたものだ^と解釈した。

確かに、自分達の研究は所長が交代したところでどうにかなるといふ、あまり大規模なものではない。しかし、この分だと今から行おうと思っていた魔導レーサーの試走をするわけにはいかなさそうだ。

そのことについて相談しようと、ガナンの方を向いた時、彼の目が見開かれる。ガナンは自分の間近に迫り、自分に向かって《催眠》の魔法を詠唱している。

「ガナン君!？」

「すみません、“ジーフォリオン”は頂いていきます」

魔法を発動した後、彼の見開いた目に答えるようにガナンは答えた。

襲い繰る猛烈な睡魔を感じながら、彼はガナンに問う。

「どうして……!？」

「全ては魔導文明を護る為です。主任にとっては大きな不利益になるでしょう。しかしこれは世界にとっては必要なことなのですよ」

申し訳ありません、とガナンはもう一度謝罪の言葉を口にした。

そのガナンの謝罪は何故か心からのものを感じられ、彼にはガナンを責める気持ちは一切湧いてこなかった。そして怒りを抱く気持ちも。それどころか試走無しで持つて行くらしい“ジーフォリオン”に不具合が出なければいいが、とさえ心配したほどだ。

眠りに落ちる直前に、彼が考えていたのは彼の家族の事である。

この大きな事件の噂はすぐに広がるに違いない。妻は心配してくれるだろうか。

家に帰ったら、子供と遊んでやろう。ずっと構ってやれないできっと起こっているはずだから。

27 『制圧、そして掌握』

相手の立場になり、相手の出方を読む。

その上で、相手が狙っている事を防ぐ手を打つ。

自分が構成に出る前に、もう一度相手の気持ちになって考える。
まだ手があるのなら、その芽を積んでおく。

そうして、全ての望みを断ったとき、私は場を掌握する。

医務室を出たティタ達は一時も足を止める事なく、目的地に向かって走っていた。彼等が今いるのは、研究・開発室棟から魔導学校棟に直接通じている通路で、その途中にあるのが、今の彼等の目的地である『魔導研究所図書館』である。

「ティタはん、早よ早よ！」と、一足先に図書館の前に着いたカーエスが、遅れてきているティタに向かって催促する。

そのかなり後方でティタは、ほとんど歩くのと変わらないスピードで走っていた。息は既に切れ、顔全体に玉の汗が浮かんでいる。気丈な性格とは裏腹に、彼女は運動があまり出来る方ではない。とはいえ、それは戦闘訓練を受けているカーエスやジェシカを基準にした場合の話で、体力面からもティタの身体能力は十分に人並みと言える。

「あたしは、アンタ達と、違って、戦闘訓練を、受けてる、わけじゃないんだから、そんなに、急かされても、困るんだよ」と、肩で

息をしながら、テイタは言い返すと、図書館の入り口の方によるよると入っていく。

魔導研究所図書館は、円筒状の施設でとにかく天井が高い。この図書館の蔵書量は、世界中から集められた論文を中心に百万冊以上の蔵書量を誇る。それは高い天井まで届く大きな本棚に、隙間なく本が収められている様子を見れば分かる。

円筒の底にあたるフロアには何組かの閲覧用の机と椅子が配置されていたが、利用している者は誰もいなかった。この膨大な容積を誇る空間が、無人の寂しさと静けさを強調している。

この図書館に収められている本の内容は全てデータ化され、研究所内の魔導器に保存されているため、研究室にある端末からいつでも直ぐに知りたい内容を検索し、閲覧する事ができるのだ。そのため、わざわざここまで来て本を探し、ページをめくって自分の知りたい情報を探すという行為をする人間がいないのである。

図書館の入り口にあるカウンターには一人の司書らしき初老の女性が座って本を開いていた。

テイタ達の気配に気が付いたのか、その女性は本から顔を挙げ、テイタの顔を見上げて嬉しそうに微笑む。

「おや、テイタさんじゃないか。また何か探しに来たのかい？」

その笑顔が人懐っこいと感じるのは気のせいではないだろう。こんな広い場所ですっと一人でいなければならぬのだ。

テイタは度々、ここに訪れる数少ない常連の一人だった。

研究の為に、使うわけではないが、余暇などを得た時、息抜きをしたい時などにはここに来て、何となく興味のある本を読みふける。

端末で見られるデジタルな文献では感じられない、本の匂いやペー
ジをめくる時の感触、そしてこの図書館の静寂さがティタは気に入
っていた。

「ああ、ちよつと本でも読みながら考えたい事があってね。しばら
く奥の方を借りるよ」と、ティタは司書に親しげに挨拶をすると、
カーエス達を連れて奥に入っていく。

図書館は円筒状の施設だが、円筒は入り口にある一つだけではな
い。円筒を束ねたような構成で、奥にはいくつもの同じような空間
が繋がっている事が見て取れた。それ故に迷い易い構造の図書館を、
確信しきつた足取りで奥へ奥へと入り込んでいく。

最初は周りを見回しながら、道を見失わないように付いてきてい
たカーエスだが、今はその努力を諦めたようで、代わりに何か聞き
たげな眼をティタに向けていた。それでも、口を開かなかつたのは、
どんなに小さな声で話してもその声が大きく響いてしまうからだろ
う。いくらティタの馴染みの司書だろうが、“禁術破り”という立
派な違反行為を実行に移している今、それをどんな人間にも漏らす
わけにはいくまい。

ティタは図書館のある一角で足を止めると、ティタは本棚に向か
って立つと、おもむろにその本棚に収められている本を持てるだけ
持つ。

彼女は下で呆然としていたカーエス達に歩み寄って指示した。

「何ぼさつとしてるのさ。その一角にある本を全部こつちの机に
移すんだ。手伝いな」

そう言ってティタは、中央に置かれていた閲覧用の机に自分の持
ってきた本を積む。

次の瞬間、どさどさ、という音と共に、机の上が本で埋め尽くされた。テイタが眼を丸くしてカーエスを見遣ると、彼はにやっと笑った。

「こんなもんで？」

「……じゃあ、次は空になった段の棚板を外してもらおうか」

カーエスは、目標をちらりと見ると、右手を上げて手招きのような仕種をする。

すると、本棚の空になった段を分けていた棚板が次々と外れ、本が山のように積まれている閲覧用の机に立ち掛かる。

そして、彼はもう一度テイタをみて、にやっと笑う。

テイタは、呆れたように言った。

「全く便利だね、魔法ってやつは」

テイタは、隙間なく本が敷き詰められた図書館の本棚の中で、ポツカリとスペースの空いている棚の背板に向かうと、真ん中あたりに開いていた小さな穴に指を突っ込み、引き戸を開くように引く張る。

すると、棚の背板が本当に引き戸のようにがらりと開いた。

その奥にはすぐ壁があったが、外見からしてただの壁ではない。

そこに描かれていたのは何らかの効果をもたらすと思われる魔法陣である。おそらく移動用魔法陣だろう。今は何の輝きも発していない事から、今はその働きはないらしい。

テイタは、その壁を撫でるように手を滑らせて唱える。

「いざ開けん、忘却の引き出しを。そして取り戻さん、忘れ去られし知識を」

魔法の呪文に似た響きのその言葉は、その魔法陣を発動する合い言葉だったのだろう、唱え終わった瞬間から、魔法陣が輝きはじめた。

その輝きはどんどん強みを増し、ある瞬間にテイタの身体をその光の中に取り込むと彼女の姿がその場から消える。

案内人であるはずの彼女が、何も言わずに姿を消してしまった事にカーエスとジェシカが一度顔を見合わせるたが、なんの事はない、彼女の真似をすればいい話なのだと思いつくのに時間と言うほどの時間は掛からなかった。

果たして、それは正解だったようで、彼等が同じように合い言葉を唱えて閃光に包まれたカーエスは気が付くと長い廊下の端のようなどころに立っていた。続いて、ジェシカが同じように姿を現わす。全員揃ったところで、テイタは廊下の伸びていく方向を指差した。

「この先は一本道だから、アンタ達でも十分行けるはずだよ」

「え？ テイタはん、来えへんのですか？」

「あたしの役目は無くなつたし、これ以上先に進んでも足手纏あしでまといになるだけだからね」

テイタはそう言ってひらひらと手を振りながら踵を返し、その場にあつた移動用魔法陣の上に乗った。おそらく図書館に戻るためのものだろう。こちらのものは常時発動しているタイプの魔法陣らしく、特に合い言葉を唱えなくてもテイタを光に包み込んでいく。

「ああ、言い忘れるトコだったけど、忘却の間の前では自動の防衛用魔導兵器が一体いるから。詳しい事は知らないけど、噂じゃどんな魔導士でも勝てないって話だから気をつけな」

光の中からティタは捲し立てるように付け加えると、その言葉を言い終わるのを待っていたかのようなタイミングで彼女の姿が消えた。

その場に残された二人は、お互いを一瞥する。

「遅れんなや」

「それは私の台詞だ」

そう軽く言い合つと、その廊下を限り無く全力疾走に近い早さで走り始めた。

一人、魔導研究所図書館の一角に戻ってきたティタは静寂を乱さない程度に息を付き、閲覧用机に並んでいる椅子の内の一脚を引いて腰を掛けた。

先ほどまで慌ただしい状況に身をおいていたため、今の図書館の静けさの中に一人身をおいているこの状況は、あたかも時が止まっているような気さえ起こさせる。

つい、手助けをしてしまった。

失態でも侵してしまったかのように、彼女は高い天井を仰いだ。先ほど完全に失われたはずの希望だった。リク「エールの限り無く死体に近い状態をみた時に、自分は確かに失望したはずだった。それが今また彼女の心の中で燻り始めている。

絶対に助からないと言われた状況で、カーエスが呼んだ元魔導医師が、“どんな病気、怪我でも治す魔法”を開発し、あっさりと禁術にしてしまったという噂でティタ達の間では有名だったジッターク「フェイスンで、同じくその場にいた自分は偶然、許可無しでも

“忘却の間”へ行ける道筋を知っていた。

全てがリク＝エールの命を助けるために動いているようにさえ感じられる。学者である立場上、あまり非論理的な事は信じられないのだが、今は運命というものを信じてもいい。

(あたしもいつの間にかアイツに惚れ込んだかな……?)

否、初めリクからその質問をされた時から、彼女はリクを助けたかったに違いない。しかし気に入っただけに、自分の夢の為に死なせるのを惜しいと感じていたのだろう。

しかし、今、リクを助けるために何のためらいもなく行動を起こしている自分に、テイタは自然と笑みがこぼれた。

一番楽しいのは、夢に向かって苦労している時なんだよ。

エースチームトレイルの終了直後に聞いたリクの言葉が蘇る。確かに、何を悩む事無く夢に心を浮かべている時、心は軽い。何の束縛も感じない。何の悔いも起こる気がしない。一刻一刻、確かに生きているという実感がある。

リクも同じなのだろう。あの瞳の輝きは、夢に身と心を任せているから在るものなのだ。それを邪魔するのはやはり、あの瞳の輝きを鈍らせる事にはならないだろうか。

そんな考えが自分の中に生まれはじめていることを、テイタはハッキリと自覚していた。

乱れた息が完全に整い、汗も引いた時、ふと自分の目の前に積み重ねられた本の山を一瞥したテイタは思わず溜息を漏らしてしまった。これを元に戻すのは相当骨が折れる作業だろう。

(どうするかなあ、コレ。あとでカーエスにでも頼んだ方がいいか)

人に頼るのはあまり好きではないが、魔導士があれだけ便利な存在だと、何もかもを任せてしまいたくなる。

おそらくジッタークが魔導医療に付いて訴えたかったのはそういう事ではないだろうか。より体重を任せて寄り掛かっていると、それだけその支えが消えた時の転び方は激しい。

この図書館にしてもそうだ。今は全てを記録した魔導器を使って簡単に検索でき、研究も効率的にできるが、もし魔導器が使えなくなったら、今の楽な研究方法に馴れきった魔導研究所の研究員達は、研究に対する根気を保つ事はできるのだろうか。

ともかく、バレて邪魔が入らないようにするためにも、移動用魔法陣だけは隠した方が良さだろう。不自然に見えないように、柵板もできるだけ早く戻しておいた方がいい。

先ほど走ったばかりなのに、気が滅入るが、リクの様子も気になるので、重い腰を上げて、作業に取りかかった。

引き戸のような本棚の背板を元に戻し、柵板を何段かはめなおしたところで、彼女は遠くの方で騒がしい物音を耳にした。

この音の響き具合では、図書館の入り口あたりからだろう。

(やれやれ、図書館では静かにするって最低のマナーも守られないとは嘆かわしい世の中だね)

ティタは呆れたように眉根を寄せると、一喝注意してやろうと入り口の方に足を運んでいった。

ほどなくして、そこに辿り着いたティタだったが、入り口のエリアに入ろうとする直前で反射的に身を隠した。

何か様子が変だ。

入り口には何故か軍用魔導器を装備した魔導士がおり、司書の女性はカウンターに突っ伏している。わずかに肩が呼吸で上下している事から、ただ眠らされているのだろう。

魔導士は一人ではなく、四人おり、中心になっている一人が残りの三人に指示する。

「図書館の中を一度見回っておけ」

「しかし、誰がいるでしょうか？」

もつともな部下の質問に、リーダー格の魔導士は小さく頷いて答えた。

「万が一という事もあるだろう。この作戦に失敗は許されないんだ」

（そんな余計な事考えなくてもいいのに）

ティタは胸中で毒づいた。よく分からないが、“作戦”とやらは相当大掛かりなものらしい。会話からは、研究所にいる全員を巻き込むつもりのようなのだ。もし、見つければ司書の女性のように眠らせるのだろう。

特に必要がなければ、危害は加えるつもりはないのだろうが、それでもティタはここからどうしても抜け出す必要性を感じた。

ここから抜け出して、開発・研究室棟の医務室にいる皆にこの事態を知らせなければならぬ。このことに巻き込まれてリクの治療を邪魔されては困る。図書館まで手が回るくらいだから、手遅れかも知れないが、何も手を打たないよりかはマシだ。

魔導士相手なら、どんなに弱い相手でも叶うわけがないが、幸い図書館の地理は知り尽くしている。ここから抜け出すくらいなら何とかなるだろう。ティタは自分の方に歩いてくる魔導士を一瞥して図書館の奥へと駆けていった。

『住居・宿泊施設棟全エリア、制圧しました』
『開発部全エリア、制圧しました』
『研究部実験施設第二エリア、制圧しました』

伝声器から、次々と研究所各部の制圧が完了した旨を伝える報告が流されてくる。今、この場を支配しているのはその伝声器からの声だけだ。

未だドミーニクの《蔓^{つた}の束縛》に拘束されたままのアルムスはその声を聞く度に、その顔を強ばらせる。彼も気付かされていた。ディオスカスがいかに大きな力を持っていたかという事に。

しかし効率上、魔導士団の団長と開発部長は同一人物である方が良かったのだ。開発部は様々な魔導器を開発する。魔導器の中には魔導士でなければ扱えないものがあり、その試験をするために必要な魔導士を比較的簡単に調達できるし、なにより魔導器を創る開発者達には魔導理論を肌で理解している魔導士が多いからである。

「研究所全てを制圧して、それからどうするつもりだ？」

「あなたがそれを知る必要は無い。ただ、我々のする事を黙って見ていていただければよろしい」

ほとんど呻^{うめ}くようにして発せられたアルムスの質問を、ディオスカスはあると切り捨てるように応じた。

その後、再び彼等の間には沈黙が訪れるが、三秒後、ディオスカスが付け足して言った。

「いや、あなたには二、三していただく事がある。あまり無駄な事は考えずに協力願いたい」

何かを含んだようなディオスカスの物言いに、アルムスは眉を潜めた。

『研究部医務室以外の全エリアを制圧しました』
「御苦労。医務室については後で指示を与えるまで手を出すな」

簡易な報告に、簡易な指示。それ以外のものは要らないくらいに、この計画は綿密に練られているのだ。

この状況をひっくり返すのは難しい。魔導研究所内にある武力のほとんどはディオスカスの手の中にあるのだ。

しかし手が全く無くなったわけではない。

『行政部全エリアを制圧しました。しかし、行政部長が抵抗し、逃走。現在行方不明です』

「エイスカ……。奴は聡い^{さと}からな。構わん、取りあえず予想範囲内の事だ」

エイスカ「マークシオ。ディオスカスと並び、昨日まで自らの片腕だった行政部長の名前を聞いて、アルムスは内心ほくそ笑む。

魔導士団には属さないが、彼は立派に上級魔導士の資格を持っている。聡い彼の事だ、きっと彼の考えている事を実行に移してくれるだろう。

しかし、次の伝声器からの報告がアルムスを打ちのめした。

『魔導士養成学校を閉鎖、完全に隔離を完了しました』

「なっ……………!？」

思わず声を上げて眉を釣り上げるアルムスに、ディオスカスが勝ち誇った笑みを浮かべる。

「おや、申し訳ない。あなたの希望を潰してしまったようだ」

アルムスの考えていた手とは、魔導学校の生徒を頼る事だった。ディオスカスは機密を守るために、信用するに足りない魔導学校の生徒までは配下に加えてはいないだろうし、それどころか眼中に入れていない可能性もあった。

だが魔導学校の生徒のほとんどは魔法を実践レベルで使いこなす事ができる。もちろん実力は魔導士団に所属するレベルの魔導士達には叶わないだろう。しかし、数は多く、戦力にはなりうる。やり方次第ではディオスカスに対し、アルムス達が唯一切れるカードになるはずだった。

しかし使うには信用が足りず、放っておいては邪魔になる魔導学校の生徒達を、ディオスカスは魔導学校ごと封じてしまったのだ。単純且つ、確実な対処法であるといえる。

「ふむ、これで一応状況は落ち着いたか」

魔導学校、行政部、開発部、研究部、住居・宿泊施設棟。今までの報告からすると、今の魔導学校の閉鎖で、ディオスカス達は魔導研究所のほぼ全体を掌握した事になる。これからどうするのかは知らないが、ディオスカス達がどこに移動しようとも、抵抗を受ける事はないだろう。

ディオスカスはちらりと時計を見た。アルムスもつられてそちらに目をやると、“白の刻”から六分刻（三十分）も過ぎていない。その迅速さに満足したのか、ディオスカスは口元に笑みを浮かべると、伝声器を通して言った。

「同志諸君、御苦労。ただ今を持って作戦の第一段階を終了する。続いて第二段階にはいる。各自作戦内容を確認し、油断せずと与えられた役割に従事するように」

そう言っつて、ディオスカスは伝声器のスイッチを切り、アルムスに向き直つて言った。その口元には、楽しみにしていた時がきたよ
うな、そんな笑みが浮かべられている。

「それでは私に付いてきていただく」

28 『返り血を浴びる覚悟』

生まれれば、後には引けない。
生まれれば、達成するより他はない。

自分の命を削る事になろうとも、
他人の命を奪う事になろうとも、
前に進むより他に道は無くなる。

だから、私は始める前に覚悟を決めたのだ。
何も顧みる事なく、ただひたすら前に進む覚悟を。

「黙って歩くのもつまらない、差し障りのない質問になら答えて差し上げるが？」と、ディオスカスは隣を歩くアルムスに話し掛けた。

所長室から移動用魔法陣を使って移動した先は、ディオスカスの開発部長室だった。そこからは中央ホールに向かうルートをとって彼等は歩いている。彼等とは言っても、ここに要るのはディオスカスと、アルムス、それから数人の魔導士だけで、ドミーニクはいない。彼は、ディオスカスの指示でやはり数人の魔導士と共に魔導研究所各所の状況を見回っているようだ。

通路の各所には、魔導器で武装をした魔導士が配置されており、アルムスから見える範囲には魔導士団が開発部に所属する人間以外は見受けられない。

「……他の研究所員はどうしたんだね？ まさか」

「殺してはいないので御安心を」と、ディオスカスはアルムスより

先んじて答える。「邪魔にならないように眠らせて一所に固めてあるだけのこと」

答えた後、ディオスカスは意地悪くからかうような笑みをアルムスに向けて続けた。

「何より先に研究所員の安否を気づかうとは御立派な事だ」

丁寧ではあるが、明らかに自分を嘲笑あざわらうようなディオスカスの口調と言動に、アルムスは強い憤りを覚えるも、現時点で何の抵抗も出来ない事実、アルムスは必死で耐えて何とか言葉を返す。

「……当然の事だろう」

「白々しい」と、ディオスカスは、アルムスの返答を切り捨てる。

「本当は別の事をお聞きしたいのだろうに。無理をなさる事はない。何が目的なのか単刀直入に聞かれればいい」

その言葉に、アルムスは怒りに任せてディオスカスを振り返る。彼と知り合ってから十数年になるが、ここまで彼に憤いきんりを抱かされた事はない。

「……分かっているなら聞かれる前に答えたまえ」

アルムスの怒りはハッキリと感じ取れるだろうに、それでもディオスカスは笑みを崩さない。それどころか、その怒りを楽しむかのように一層笑みを深くする。

そして、少し間をおいて答えた。

「今の私の目的はウォンリルグへの亡命だ」

ウォンリルグへの亡命。

その言葉に、アルムスの表情からは怒りが抜け、啞然あぜんとしたものになる。

そんなアルムスの反応は予想できた事なのか、ディオスカスが言葉を失った彼の気持ちを代弁した。

「不可能だ、とお思いだろう」

ウォンリルグの別称は“孤高ここうなる国”。何者も出さず、何者も受け入れない、閉鎖的な国政からそう呼ばれるようになった。

そんなウォンリルグが亡命者を受け付けるわけがない。

そう考えていたアルムスに、ディオスカスは一通の手紙を広げてみせた。

その内容にアルムスは再び目を丸くして絶句する。

「亡命を許可する旨を書いた書状だ。別に研究所の魔導器で検査していただいても構わない。確実にウォンリルグ国内で書かれたものである事がお分かりいただけるだけだと思うが」

「……馬鹿な、あり得ん」

やっとの事で絞り出したようなアルムスの言葉に、ディオスカスは得意げに答える。

「ところがあり得た。その代わりに私達はそれ相応の“誠意”を見せなくてはならない」

「“誠意”……？」

含みのある単語を思わず聞き返すアルムスだったが、元々それを狙っていたのかディオスカスはちらりとアルムスに目を向けて答え

た。

「それは、今私達が向かっているところにあるもの」

丁度いいタイミングで、到着したのはやはり中央ホールだった。

どこか圧倒される雰囲気のある大きなホールに植えられた大樹に向かって、ディオスカスはまっすぐ歩いていく。

「無知なる大樹」……。無知であるが故に、子供のように飽くなき好奇心を持ち、知識にかくも大きく育つ。まさにこの研究所の象徴だ」

左手で、大樹の幹の表面を撫でるようにして、ディオスカスは大樹の周囲をぐるりと回ると、受付のそばにある扉に向かって歩いていく。

アルムスはそれを見て、ディオスカスの狙いが自ら予想したものと同じものであるという事を確信し、顔を強張こわばらせた。

扉の脇には一人の魔導士が配置されており、その魔導士はディオスカスがやってくるのを見ると、その扉を自分の“鍵”を使って開ける。

この先は研究所の重要施設であるため、特に厳重に管理されているはずだが、既に研究所全体を掌握しているディオスカスに掛かれば、この扉を開ける事など造作もないに違いない。

扉の先は螺旋階段になっており、薄暗く、細い通路が下に向かって続いている。それを下りていくと、彼等は中央ホールの真下に当たる部屋に辿り着いた。

その部屋は、異様な気配に包まれた場所だった。至る所におそらく中央ホールの大樹のものであろう根が走っており、中の明かりは

何かの制御用の魔導器の光と、部屋の中央から来る明るい光のみだ。部屋には壁と同心円でもう一つ仕切りがあり、この部屋にあるおびただしい数の魔導器は全てその仕切りの向こう、部屋の中心にあるものに繋がれている。

そして、その魔導器の線を辿った向こうにあるもの、それは人頭大の球形魔導器だ。寶石のような美しさをもつ緑色の材質に、肉眼では確認できないほど細かな魔導紋様が施されている。部屋の中央から来る明るい光の光源は、その魔導器が自ら発する光だ。

「やはり貴様の狙いはこれか。……“英知の宝珠”^{まじく}」と、アルムスは呻くように言った。

魔導研究所では、自分達の研究が失われないように、その日一日の研究データを記録することが義務付けられている。

その記録は各研究室に備え付けられている端末から記録するのだが、その端末は全てこの部屋に繋がっており、そのデータが記録されるのは今アルムスが“英知の宝珠”と呼んだ、部屋の中央にある魔導器だ。

簡単に言つと、その人頭大の球形魔導器には、魔導研究所の全てありとあらゆる情報が詰まっているのである。

「宝珠とはよく名付けたものだ。輝きは寶石に劣るが、これは人類が創りだした、いわば魔導文明の至宝。その価値は国一つでは賄い切れん^{まかな}」

ディオスカスは“英知の宝珠”を目の当たりにして感極まったのか、その笑みは恍惚としたものになっている。

「しかし、国一つでは賄い切れんものを、私が貴様などに渡すと思うか？」

アルムスは、白の刻から^い威めしいままだった表情に初めて笑みを浮かべる。

“英知の宝珠”は、質量はそう大したものではないため、運搬は難しくない。しかし現在“英知の宝珠”は、その制御用の魔導器に接続されており、それを取り外す事は不可能なのである。魔導研究所所長であり、取り外すための合い言葉を知っているアルムス以外には。

「私は“魔導都市”エンペルファータ市長、そして魔導研究所所長だ。いかなる苦痛を与えられようと口を割る気はないぞ」

確かに、アルムスはディオスカスから見れば、無能で目立たない長だったのかもしれない。しかし、彼はその肩書きに誇りを持ち、彼なりに強い責任感を背負っている。

ふっ、とディオスカスの顔から笑みが消えた。

彼はつかつかとアルムスの方に歩いてくる。がっしりと大きな^た体躯をしたディオスカスが近付いてくるのに対し、アルムスは反射的に身を固くする。

が、ディオスカスはアルムスの脇を通り過ぎ、その向こうに倒れていた一人の男を掴み上げた。行政部から特別に選出され、ディオスカスが魔導文明の至宝と呼んだ魔導器を管理するために、この部屋で働いている技術者である。おそらく彼等も、事の途中で目を離さないように眠らされたのだろう。

呆然と、自分の行動を見ているアルムスに対し、ディオスカスは言い放った。

「あまり私を舐められては困る」

今は封じられているものの、同じく魔導士であるアルムスには感じられた。その技術者の喉元を掴み上げているディオスカスの手に魔力が収束していくのが。

ディオスカスがしようとしている事を察し、思わず、声を上げる。

「や……止めろおっ！」

制止の声も空しく、ディオスカスは手の平に収束させた魔力を放出し、自分の手を握っているもの、男の首を吹き飛ばす。

大量の血液が、男の肉片があたりに散らされる、ディオスカス自身も大量の血液を浴びたが、本人は眉一つ動かさない。

「なっ、……貴様……!？」

驚愕きょうごくに目を見開いているアルムスに、ディオスカスは言った。

「こちらとて、命をかけている。事の達成にあらゆる犠牲を厭いとわないつもりである。こうして、返り血を浴びる覚悟もしている」

尚なほも、何かを言い返そうと口だけを動かすも、声が出ないアルムスを睨にらみつけて言った。

「こちらは、“英知の宝珠”が必要と言うわけではないのだ。要するにウオンリルグに対して“誠意”を見せられれば。何も手に入れないまでも、エンペルファーター一つを滅ぼすだけで、十分それを示す事ができる」

ディオスカスは、まだ掴んでいた男の死体を離し、足下に落とすと、アルムスに歩み寄り、耳もとに口を寄せて囁ささやくように尋ねた。

選びたまえ。国一つでは賄い切れないものか、エンペルフ
アータ市民三万の命か。

その一言は、アルムスから抗う気持ちを奪うには十分な力を持っ
ていた。

「ちやぶ、と器に満たされた水で手を洗い、ジッタークがふう、と
一息ついた。

「なんとか、落ち着いたみたいやな」

ジッタークの視線の先にあるのは、未だ苦しげな表情は変わらな
いものの、先ほどまでの、身をよじり、全身でもがいていた様子と
比べると、明らかに安らかなリクの顔だ。

「あと僕らにできる事は待つ事だけ、ですね」と、ミルドの顔にも
安堵の色が見える。

先ほどまで、ここはある意味戦場だった。

白の刻少し前にコーダが帰ってきてから、ジッタークはそれこそ
戦場を駆け巡る修羅しゆらのように医務室を駆け回り、リクに処置を施し
ていく。

ジッタークは、この医務室の主である魔導医師やその助手、医師
免許を持っているコーダはともかく、医学では素人のミルドやフィ
ラレスにさえも矢継ぎ早やつぎはやに指示をだし、この部屋には忙しくない者

などいなかっただ。

彼の処置は非常に的確且つ迅速だった。コーダが調達してきた薬を並べると、目盛りも見ずに薬を吸い上げ、三秒と掛からずに注射する。内科的な処置なので、見た目には地味な作業だったが、その元魔導医師の手付きの早さは明らかに熟練したものだった。

「あとは祈る事、やな」と、どっかりと椅子に腰を落としながらジツタークは付け足す。

「しかし、さっきの放送は本当なのでしょうか？」

忙しかったのでその時は気にしなかったが、ミルドが言っているのは、治療で走り回っている最中に所内放送で聞こえた声明の事だろう。魔導研究所の指揮権は一時開発部長のディオスカス「シクト」が握る、確かにそう聞こえた。

「本当スよ」と、短く答えたのはコーダだ。「冗談でこんな声明は出来やせんし、便利屋協同組合の方でも、近くクーデターがあるかも知れないっていう情報がありやしたから」

「じゃあ、コーダ君はこうなることを知ってたの？」

知らせてくれれば事前に止められたのに、という意味合いも含めてミルドが尋ねる。

それに対し、入り口脇の壁に背をもたれさせているコーダは肩を竦めさせて言った。

「噂レベルの信憑性のない情報でやしたけどね」

ディオスカスが所長・アルムスに良くない感情を抱いている事は確かで、権力から動かせる武力を考えても、クーデターを実行する

には十分なものがあつたが、エンペルファータの市長でもある魔導研究所の所長は選挙で決まる。

エンペルファータ市民にとって今の所長は早く倒れて欲しいと願うほどの悪い所長ではないし、そんな乱暴な方法で所長の椅子を奪つても市民の支持が得られずに困るだけだ。そのため、組合の方も首を傾げる^{かし}くらいの話だつたのだ、とコーダは説明した。

「ただ、そのディオスカスつていう人と、ダクレーさんに繋がりがあつたのは分かつてたんで、ダクレーさんに気をつけるよう、兄さんに言えたかもしれやせん」

先ほどから、コーダの雰囲気ごとく沈んでいるのはその為だつたらしい。ここに着いた一日目の夜にコーダが情報収集に出かけたのは何の為か。こういつた事態を未然に防ぐ為に他ならない。

大会の時から、ほとんど無条件でリクに付いている便利屋としては非常に情けなく思っているに違いない。

「でも、状況を考えれば、リク君がその事を知つてても、これは防げなかつたんじゃないかな」

それだけでなく、ダクレーは人にあまり信頼のおかれる人物ではなかつた。それを自覚していたのか、ダクレーの言動は自分が疑われていることを前提しているようなところがあつた。そして、ダクレーがリクの命を狙っている事を知つていても、ミルドに変身して近付かれては防ぐ事は叶わなかつただろう。

「何にしても、今何を言つたつてなかつた事にはならへん。クーデターとやらは俺らの邪魔をする気はないみたいやし、今は放つておいてもええやろ。今は魔導研究所よりリクを助けるのが優先や」

そのジッタークの言葉を最後に、重苦しい沈黙が医務室を支配した。先ほどまでの忙しい時間だったから気が紛れていたのだが、カーエス達を待つ他は何もする事がない今は、みんな一様に酷く落ち着かない様子だ。

所在^{しよこ}なげに視線を彷徨^{さまよ}わせては、時計に目をやる。今は白の刻（正午）から六分刻（三十分）過ぎたところだ。“忘却の間”までどれだけ距離があるのか分からないが、往復すれば三分の二刻（二時間）は掛かるだろう。タイムリミットである赤の刻（十五時）ぎりぎりになる可能性も十分にあつた。

そんな面々を見回し、フィラレスはリクの顔に視線を戻した。無防備なリクの寝顔に浮いてくる汗を、彼女は手にしている布で拭き取ってやる。

フィラレスに今下されている指示は、リクの手を握っていてやる事だった。気を失っていても、触覚は働いている。手を強く握っていてやる事で、患者は傍^{そば}に誰かがいることを感じ、頑張れるのだ、とジッタークは言った。

「リクも握られるなら女の子の方がええやるし、何より、嬢ちゃんが一番強くリクに助かって欲しい思ってるんちゃうかな」と、ジッタークはからかうような笑いと共に言ったものだ。

最初は、断わりもなく手を握っていいものかと、フィラレスはためらいを感じたが、そつと握ってみると、リクも弱々しくも彼女の手を握り返してくれた。その手は大きく暖かく、フィラレスの手を包み込んで、それはまるでリクが自分は大丈夫だ、と心配するフィラレスを慰めているようにさえ感じた。

元気づけるのは自分の役目なのに、まるで逆になっている事実、フィラレスは自分が情けなくなり、リクの手を両手で包み込むようにしてしっかりと握る。

あらん限りの力と、それをはるかに上回る祈りを込めて。

29 『立ちはだかる魔導兵器』

かつては敵として闘った事のある二人が共に闘う。
技量は互角、足を引つ張る事もない。

相手の事を知り尽くしているが故に、
何かをして欲しいと、期待する事ができる。
相手の期待を理解し、応える事ができる。

そうして、二人が協力する事の強さを知った時、
どんな厚い壁も二人の前に砕け散らずには終わらない。

果てしないと思われるほど長い廊下をジェシカとカーエスが駆けていく。運動能力で劣っていたテイタが抜けてからはそれこそ全力で。

ジェシカはいくら走っても姿を変える事のない廊下に焦りを覚えながら、隣を走るカーエスを盗み見た。自分と同じ速度で、同じ距離を走っても息が乱れている様子は見受けられない。意外と体力はあるようだ。

彼女自身は、元々は名誉あるカンファータ魔導騎士団の副団長。
栄光に輝く表面からはとても想像できない訓練をくぐり抜けてきているので、決して軽くはない軽甲冑を着込んでいようとあと二刻（六時間）は余裕で走れるだろう。

カーエスは魔導研究所出身でどちらかというと文官らしい雰囲気があったので、自分とは違って布の服のみという服装とはいえ、それでも自分についてくる体力を持っているようにには思えなかった。普段の情けない姿からはとても想像が出来ない。

普段は隙だらけのカーエスだが、今は正直どこから攻めていいものか分からない。それに今のカーエスの真剣な面構えを見ると、魔導学校のラウンジに初めて行った時に見たカーエスの後輩達からの人気も頷ける。

「な、何やねん、人の顔をジロジロ見よって」

「貴様の普段との今とのギャップに頭を悩ませていたところだ」

不自然な視線に気付き、迷惑そうな顔をして聞くカーエスに、ジエシカは正直にそう答えた。

その答えに、カーエスにはやりと口元に笑みを浮かべて答えた。

「ギャップは男の魅力やって言うからなあ」

「馬鹿じゃないのか」

意外に冷たく返されたカーエスは顔をしかめて見せる。

「あ、今の傷付く」

「貴様がそんなタマか」

再び、呆気無く返され、カーエスは落ち込んだように顔をうつむけた。

(よくそんなにコロコロと表情が変わるものだな)

半ば感心にも似た気持ちで、ジエシカは心の中で呟いた。

カーエスは喜怒哀楽の移り変わりが激しい。が、ジエシカはそれが人前での態度である事に気が付いていた。夜の見張りなどで、一人で見るところを覗いたところがあるが、その時のカーエスは驚くほどに無表情だ。

人間誰しも一人の時は表情が影を潜めるものだが、リクはいろいろ考えている事によって表情が変わるし、フィラレスだって、普段から無表情ではあるが、やはり表情に変化はある。時々、リクの事を考えて顔を紅潮させて微笑みを浮かべるのが、最も顕著な例であろう。コーダは一人だろうが人前だろうが変わらずに柔和な笑みを浮かべている。それはそれで怖いものがあるのだが。

カーエスは一人の時、不自然なまでに表情を変える事がない。ただ、周囲に警戒の網をはり巡らし、黙っているだけ。今走りながら見せている表情のように真剣で、そして隙がない。普段、おどけているのがまるで嘘のように。

否、ジェシカは半ば確信している。普段のカーエスは、彼自身が演じている偽りの人格。一人になったときのように、真剣で無表情なのが素のカーエスなのだ。

ジェシカにはカーエスという人間が分からない。

リクは、表も裏もなく感情を表に出す人間だ。フィラレスも然り。自分も、己を理解している限りは、素でもってそれぞれに接しているつもりだ。コーダは、明らかに自分を隠しているが、表に出さないだけで、隠している事自体は隠さないし、表に出している部分は偽りではない。

カーエスだけが、偽っている。彼にとって、自分達四人は信頼のおけない人物ではあるまい。何を考えて自分の素を隠して接しているのか。彼が表に出している事全てを嘘と否定すると、彼に真実は残らなくなる。

そうすると、“何”がカーエスという人物なのか分からなくなる。

これは、本人にも気が付いていない事なのかも知れない。

もし、知らないのだとしたら、それを知った時、“自分”が全て自ら作り上げた嘘であることを自覚した時、

“カーエス”という存在はこの世から消えてしまいかも知らない。

(何を……馬鹿な想像を)

あまりにただ走り続けるのが退屈で、余計な事を考えてしまったようだ。

そついう事にする。

(だが、いつかりく様に話してみよう)

想像されている本人には悪いが、疑問に思った事には違いない。もし、カーエスでなくても、そんな人間がいるとしたら、その人物の素はどこにあるのか、自分はその人間にどう接すればいいのか。

彼なら答えを持っているかも知れない。少なくとも答えへの導き方を知っているかも知れない。いつも通りの単純明快な答えで。

その為には、まず彼の命を助けなければならない。

ちょうど思考を終えたところで、二人は廊下の端に当たる場所に一枚の扉を見つけた。ハンドルを回して開けるタイプの重い扉で、自分達を通ってきたルートの機密性から考えると、廊下側からしか開かない仕組みになっているに違いない。そして、向こうから見れば、扉は扉とも判らない。

カーエスがハンドルを回し、ジェシカが蹴り飛ばすようにして開ける。その向こうには、ちょうど各棟のラウンジほどの広さの部屋があった。その広さに反し、やたら頑丈そうな印象のある壁、そして大きな壁に対しぽつんと小さく存在する、丸い金庫扉以外のものは見当たらない。

「随分と空間無駄にしとるなあ」と、カーエスがのんきそうな声で感想を述べると、ジェシカはそれを咎めるように言う。

「しかし可笑しい。ティタ殿の話では自動防衛用の魔導兵器が配置されているはずだが」

直ぐに金庫扉に駆け寄らないところを見ると、カーエスの方もその事に関して疑問に思っていたようだ。二人は、今までの駆け足とは違うそろそろと警戒に満ちた足取りで“忘却の間”への扉に近づく。

扉まであと数メートル、というところで、突然二人の足下で魔法陣が発動した。同時に二人は後ろに飛び退く。取りあえず魔法陣の外に出た二人が呆然と見ている前で、魔法陣から何かがつくりとせりあがってきた。

それは、一見すると刺が至る所に付いた半球体だった。

正面の、口に当たるであろう部分には、小さな端末とモニターが付いている。

おそらくこれが噂の魔導兵器なのだろう。

『“忘却の間”立入許可証ヲ　オ見セ下サイ』

人間味の薄い声はその半球体から発せられた。

思わず、二人は顔を見合わせる。立入許可証など持っているわけがない。

『繰り返シマス。“忘却の間”立入許可証ヲ　オ見セ下サイ。十秒以内ニ提示出来ナイ場合、不法侵入者ト見ナシ攻撃ヲ行イマス』
「ソナンニ　待タナクテ　イイデスヨ」

カーエスは魔導兵器の口調を真似て答えると、即座に魔導を開始

した。これほど大掛かりな魔導兵器なら、魔法耐久度も相当なものだろうが、五秒も待ってくれたなら、レベル7の魔法を余裕で放つ事ができる。

ジェシカも、同じ事を考えたようで、槍を構え、呪文を唱えている。

『魔導流まどうりゅうヲ感知。自立式防衛用魔導兵器“ディージー”、認証モード、終了。侵入者排除モード、起動中………』

「え？」

カーエスが魔導を中断して顔をあげる。

『始動』

同時に、その防衛用魔導兵器“ディージー”の全身から生えていた刺だと思われるものが触手のように伸び、カーエス達に襲い掛かってきた。

無数の尖った触手がカーエスとジェシカに四方八方から取り囲む。カーエスはジェシカの前に移動すると、物理防御障壁を構成すべく呪文を詠唱しはじめた。

「防ぐな、返せ《弾きの壁》っ！」

しかし次の瞬間、カーエスの目が見開かれる。

（魔法が発動せえへんっ!?!）

もう何をするにも間に合わず、カーエスは後方に飛び退きながら、極限まで身をねじって襲ってくる触手をかわす。

だが、数が無数の触手を全てかわす事は叶わず、刺される事はな

かったが、かなりの数の触手がカーエスの身体を引つ搔くようにかすっていき、傷つけた。

「くっ……！」

触手の勢いは相当なものだったらしく、かすっただけでもカーエスの身体が後方に吹き飛ばし、カーエスは後ろにいるジェシカと一緒に仰向けに倒れた。

「何をやっているんだ、貴様は！？」

下敷きにされたジェシカが、怒鳴ると、カーエスはすぐさま立ち上がり、ジェシカに手を貸して立たせる。

「よう分からんが、とにかく魔法が発動せえへん。しばらく魔法は使わんほうがええ」と、ジェシカに耳打ちし、自分の掛けている眼鏡を外して続けた。「多分何かの魔法効果なんやと思う。俺の“眼”で探ってみるよって、しばらく防御だけに専念しといてや」

ジェシカは頷くと、“デイジー”に向き直った。とたんに襲い来る触手を、ジェシカは槍と見事な体さばきで触手をかわす。

カーエスの方も、魔法が使えないと分かっていたいれば、数が多いだけで、ただただ自分の方に向かってくるだけの触手をかわすのにはあまり難はない。攻撃には波があり、一度攻撃が済めば、“魔導眼”を使って、“デイジー”がどんな能力を有しているのか、解析するのには十分な隙が生まれるのだ。

いざ、“魔導眼”を防衛用魔導兵器に向けてみて、カーエスは再び戦慄する。

（“眼”の能力も使われへんようになって……）

魔法が使えず、魔法の使用を禁じている効果を解析するにも“魔導眼”が使えない。

つまり、現在“デイジー”の前に、カーエスは完全に無力化されていた。

自分の現在の状況に思考を巡らせた時点で、カーエスはぶんぶん、と頭を降り、否定的な考え方を吹き飛ばす。

(“眼”エなんぞに頼らんでも、まだ考える事はできる……！)

強い意志を込めて、カーエスはきつ、と“デイジー”を睨み付けた。そろそろ次の攻撃に入るはずだ。

魔法の使用を妨げる方法は主に二つ。魔導を妨害するか、それとも、魔力を封じるか。前者ならば、“デイジー”自体に、“魔導”を感知した瞬間に魔導を妨害する能力”が備えられている可能性が高い。後者の場合、この部屋自体に、魔力を封じる効果が秘められている事が考えられる。

おそらくは、前者。“デイジー”が侵入者排除モードに入ったのはカーエス達がこの魔導兵器を破壊すべく魔導を開始したのを感じたからだ。

しかしそれでは解せない事がある。魔導を妨害された場合、魔導を行うカーエス達にも妨害された事を感じる事ができるはずだ。少なくとも《弾きの壁》を使用しようとした時、カーエスはそれを感じず、きちんと魔導を完了させた。だが、発動しなかったのだ。

(これは妨害やない。それに近い何かなんや)

そこまで考えた時、カーエスは“デイジー”の動きが先ほどま

でのパターンとは違う事に気が付いた。

今までならば、カーエス達に向かつて伸びてくるはずの触手が、今はただ本体の周りを漂うようにうねうねと動いている。だが、カーエスはそれぞれの触手の先端に魔力が集められて行くのを感じた。

「う、げっ……!？」

カーエスが驚きに顔をしかめた次の瞬間、「デージー」を中心に全方向に向かつて衝撃波が放射された。

魔法を奪われているカーエスにはそれを防ぐ手立てはなく、まともにも喰らい、後ろの壁まで吹き飛ばされてしまう。

範囲の広い攻撃である分、攻撃力は少なく吹き飛ばされるだけですむ攻撃だが、カーエスは背中から強かに壁に打ち付けられ、しばらく動けない状態になってしまった。

そこを狙ったのか、「デージー」の触手がひと束に束ねられ、その先端をカーエスに向ける。そして、その先端には再び魔力が収束して行く。

今度は効果範囲が狭い分、強力な光線でも発射して動けないカーエスに止めを刺そうというのだろう。

「や……ば……」

やがて想像通りに光線が発射され、カーエスに向かつて白い光の槍が伸びて行く。

しかし、それがカーエスを貫く直前、ジェシカがカーエスを突き飛ばし、かろうじて、彼は止めを刺される事だけは逃れられた。

ジェシカは、先ほどの衝撃波を上手くさばいてカーエスのように行動不能になるのを避けられたのだ。

「……おーきに」

危機一髪の状況から生き残った事に対する安堵感から息を乱しながら、カーエスが礼を言うと、ジェシカは取りあえず彼に手を貸して助け起こしてから言った。

「礼は要らん。私も何度か試したが、やはり魔法は使えないようだ。“魔導眼”で何か分かったか？」

「いや、“魔導眼”も使えんかった」

カーエスが頭を振って答えると、ジェシカが大きく息を付く。

「……そうか。貴様はしばらく休んでいろ。しばらく私がああ魔導兵器の相手をする。物理的な攻撃なら何とかなるかもしれん」

そう言うと、ジェシカは槍を構えて、“デイジー”を見据えた。そんな彼女に向かって防衛用魔導兵器は触手を伸ばす。

彼女はそんな触手に恐れを見せる事もなく、自分に襲い掛かってくる触手に向かって走り出す。

牙を向いてくる触手の刺を、すれすれでかわして受け流し、ジェシカはさらに“デイジー”本体に肉迫する。

見たところ、彼女が向かっているのは、“デイジー”の正面。一番目だっているモニターの部分だろう。他の装甲部分では、魔法無しに貫く事は叶わないだろうが、モニターの部分ならある程度のダメージは与えられる可能性はある。

正面に回ったジェシカに対する攻撃がさらに激しいものになった。まるで、守備力の薄いところを守ろうとしているかのように。

「貫けエツ！」

激しい攻撃をかいくぐり、辿り着いたモニターの正面、ジェシカはかけ声を上げながらモニターに向かってその槍穂を伸ばす。

しかし、その穂先は魔導兵器を捕らえる事はなかった。

モニターに届く直前で槍が進まなくなったかと思うと、彼女の槍に込められた力に抵抗する斥力が感じられる。

その次の瞬間、ジェシカは後方に思いきり弾かれた。せつかく苦労してモニターの真正面まで行き着いたのが、一瞬にして、反対側の壁まで吹き飛ばされる。

(《弾きの壁》……?)

自分も似たような効果を持つ物理防御魔法を頻繁に使用する為、まず連想したのが、その魔法だった。もちろん同じ魔法ではないだろうが、取りあえず、モニターを狙う敵に対する攻撃を激しくする事で、モニターが弱点だと思わせる。そして敵がモニターを攻撃すれば、あの防御魔法が発動する。考えてみれば簡単なフェイントだ。それに《弾きの壁》程度の障壁ならば、破る事はそう難しいではないが、それは魔法が使えたらの話であり、魔法無しでは絶対に不可能だ。つまり、魔法も物理攻撃も通用しない今、“デージー”を破壊する方法が皆無なのである。

ティタが言っていた、どんな魔術師でも勝てないという噂を思い出す。確かに、実際に闘っている今、かなり絶望的な気分させられている。

「こないなシロモン作ったヤツ、とんでもない根性悪やな」

自分を奮い立たせる為に、毒づいた彼ははっ、と顔を上げた。こんなに容赦のない魔導兵器が吹き飛ばしたジェシカを放っておくはずがない。

見てみると、案の定“デージー”は、ジェシカに向かって触手を伸ばしていた。ジェシカは吹き飛ばされた時のショックで脳震とうでも起こしたか、ぐったりとして動かない。

反射的に、カーエスは駆け出した。自分も少なからず傷付き、身体が軋むが、そんなものには構わず、全力で走った。

一見すれば、触手の方が速い。このタイミングでは自分も巻き添えを食ってしまいそうなものだが、それでもジェシカを見捨てるわけには行かない。人の命を助ける為の行動だ。それで人の命を失われれば、意味が無くなってしまう。

「こなくそおつつ、間に合ええつつ！」

カーエスは、声の限り叫ぶと、倒れているジェシカに向かって飛び込んで行く。視界の端には襲い来る触手が見えるが、それが彼を怯ませることはない。

火事場の馬鹿力というやつか、最初はとも間に合いそうに見えるなかったのが、なんとか触手がジェシカに止めを刺す前に抱き上げ、その場から飛び退く事が出来た。

だが、それで魔導兵器の攻撃が終わったわけではない。ぎりぎりカーエスを掠めて通り過ぎた触手は、ぐるりと大回りして再び彼等を襲ってくる。

それをみたカーエスは顔をしかめる。とてもじゃないが、ジェシカを抱えたまま、あの数の触手を避け切るのは無理だろう。

どうにか出来ないかと、周囲を見渡した彼の視界にあるものが入る。

もしかして、とカーエスは思い付いた事があった。しかし、今、それを試すのはほとんど賭けだ。だが、今はその賭けに身を預ける他に自分達の安全を確保する手段はない。

一瞬にも満たない逡巡しゅんじゆんの後、カーエスは目指すところに向けて走りはじめた。その後ろから、触手もカーエス達の後についてくる。カーエスは後ろを見る事なく、ただ一直線に走った。

どんとんと目的地が近付いてくる。触手が動かす風が背中当たるのを感じ、ほとんど触れるか触れないかの位置まで近付いてきている事が分かる。

カーエスは、届くか届かないかの位置から目的地に向かって跳躍した。

目的地、カーエス達がこの部屋に辿り着くまでに通ってきた部屋に転がり込んだカーエスは、ジェシカを寝かせると触手が迫ってきたはずの背後を振り返った。

そこでは、触手が旋回して、戻って行く様子にカーエスは自分が賭けに勝った事を知り、更にある事実に気が付いた。

「……見えた」

「んっ……」と、ジェシカは小さなうめき声を上げて目を覚ました。

次の瞬間、自分が何故気を失っていたのかを思い出し、ジェシカは跳ねるように身体を起こした。

彼女の傍で膝を付いているのはカーエスだ。

「あの魔導兵器は!？」と、ジェシカは問うが、カーエスは聞こえていないかのように、動じない。

カーエスは興味深げに何かを眺めており、その彼の視線を辿って行くと、そこには“ディージー”が彼等を待ち構えるように佇たたずんでいた。

槍があゝの魔導兵器を捕らえられなかったことは分かっていたのだが、ああも無傷な姿を見せつけられて、ジェシカは絶望的な気分になった。

「ああ、目エ覚ましたんか」

今頃、気が付いたようにカーエスが、ジェシカを振り返る。

先ほどまでの、焦りに濁にごったそれとは違う、何もかもを見透かしてしまいそうな、澄んだ蒼い眼を向けられ、ジェシカはぎくり、とした。

「貴様が助けてくれたようだな。……礼を言う」

「お互い様やな。俺も助けられたし」と、カーエスは、明らかに無理をして固い表情で礼を言うジェシカを見て、苦笑する。

そんな笑顔を見せるカーエスに、ジェシカは、“ディージー”を一瞥いちへつして尋ねた。

「随分とのんきそうな顔をしているが、“あれ”を壊す算段でもついたのか？」

彼女の問いに、カーエスは自信ありげに頷いた。

「ああ、あの魔導兵器の能力は見切ったで」

禁術破りを実行しようとした者がいるという話は聞いたことがな

い。しかし、いないはずはない。そして禁術にされるくらいの魔法を盗み出せば、騒ぎにならないはずがない。それなのに成功したという話を聞かない。つまり、今まで誰一人として無断で“忘却の間”に足を踏み入れたことのある者などいないのだ。

その大きな原因と考えられるのが、目の前の防衛用魔導兵器“デージー”だ。それが起動した時にはもう魔法が封じられ、この兵器の火力に対抗する術がなくなる、そして物理攻撃に対する対策も抜かりない完全無欠の魔導兵器。

しかし、“デージー”が無敵でいられるのは、ある条件の下のみ。

「その条件というのが“半径十メートル以内”。つまり、限られた範囲の中の敵にしか通用せえへんのや」

その範囲内には部屋がすっぽり収まってしまふ為、部屋の壁が敵の行動範囲を制限してしまい、安全な範囲外まで逃れることを禁じてしまっているために、それに気が付かなかったのだ。実際に、部屋の外に出て、廊下に転がり込んだカーエス達を、“デージー”の触手は追撃しなかったのだ。

“デージー”が侵入者排除モードに切り替わった時点で、本来の入り口は閉じられてしまっている。こちらの廊下は隠れ通路だったために、“デージー”の制作者の考慮には入らず、なんとか範囲外への逃げ道が存在できたわけだ。

「……魔法が使えないことへの説明は？」と、自分達のいる廊下を通ってこなかった場合の事を考えて、少し顔をなくしたジェシカが促すと、カーエスはこくりと頷いて続ける。

「それや、それがこのクソ忌々しい魔導兵器の真骨頂なんや」

一定の範囲内であるとはいえ、魔法は完璧に封じられていた。魔

法を封じる方法は先に上げた通り、主に二つ。魔導を妨害するか、それとも魔力自体を封じるか。その両方ではないことは明らかだった。魔力を動かせるかどうかは感覚で分かる。そうでなかったのだから、まず後者は否定される。

そして、カーエスはきちんと最後まで魔導を終えたはずだった。妨害が成功した時点で術者は半ば強制的に魔導を中断しなければならなくなる。それがなかったということは、妨害もされていないということになる。

「まあ、それは飽く迄も“範囲内”の話やからな。取りあえずここからなら魔法も使えるし、“魔導眼”も使えるようになったんで、お前がちょっと氣イ失うてる間にいろいろ見とつたんやけど……」

「ちよつと待て」と、ジエシカがそこでカーエスの解説に口を挟んだ。「範囲外なら魔法が使えるのなら、ここから遠距離用の魔法を打てばいいのではないのか？ たった十メートルだ。届くだけじゃなく、破壊力も十分ある魔法を貴様が使えんとは言わせんぞ」

「それができるならお前が起きるまで待つとるなんて悠長な真似はせえへんよ」

“魔導眼”も所詮は魔力を用いて発動している能力である為、範囲内では使えなかつたが、範囲外では使えた。それは魔法も使えることをも意味しており、それに氣付かないほどカーエスは愚かではない。

試しに、一発軽いのを放ってみたのだが、それは範囲内に入った瞬間、煙のように雲散霧消してしまったのだ。普通なら驚くだけだが、その時のカーエスには“魔導眼”が復活しており、何が起こったのか、一部始終を確かめることが出来た。

そして彼は“ディージー”という魔導兵器に付与されている能力を全て悟った。

「あれは、“動いている魔力を吸収する”能力や」

封じるのも妨害するのでもない。魔導として動かしている魔力を吸収し、発動する瞬間には動かしている魔力が魔法として発動するには不十分な量になってしまっているのだ。

「だから、発動までこぎつけても魔法は発動せえへんかった。範囲外から撃った魔法もあの魔導兵器に届く迄に魔力として吸収されてしもたんや」

カーエスが出した結論に、ジェシカは眉を潜めた。範囲外からの魔法が使えれば、何とかなりそうだと思っただけにそれが駄目となるとやはり打つ手がないように見える。

しかし彼は、それがあのかのような余裕の表情をしている。

「それで、私はどうすればいい？」

カーエスはジェシカが起きるのを待っていたという。つまり、自分の力が必要なのだろう。彼が分かっている、自分が分からず、カーエスに主導権を握られているのは正直不本意だが、リクの命が掛かっているこの際、意地を張る意味はない。

カーエスは頷いて、答えた。

「吸収は厄介な能力やけど、その分、魔導難度の高い能力や。封印や妨害と比べると意外と限界が低い。フリーがおったら、吸収し切れん“滅びの魔力”で片付けてまうところやけど、おらんのはしやーない。今回は吸収する“速さ”の限界を突く」

ジェシカは、廊下と部屋の境目ギリギリの所に立ち、槍を構えた。正面にいたのはもちろん、“デイジー”である。大きな部屋の中にぽつんと存在するそれは、今は触手を収めており、先ほど闘っていた時から考えると意外なまでに小さく見える。

緊張した面持ちのジェシカに、カーエスが横から言った。

「ええか、もう一度確認するで。今から突くのは奴の要である吸収能力を実現させとる魔導器や。意外と小さいからおおまかに教えるだけでは場所が分からんよって、俺が印をつけに行く。その印から垂直に槍を突き立てるんや」

「分かった」

ジェシカが息を大きくつきながら頷くのを見ると、カーエスも“デイジー”を半ば睨み付けるように見据え、深呼吸した。

「ほな、行ってくるわ」

カーエスはもう一度大きく息を吸い込むと、息を吸い切ったところでぴたりと止めた。次の瞬間、カーエスは“デイジー”に向かって飛び出して行く。

それと、ほぼ同時に彼の魔力を感知した“デイジー”は彼に攻撃を加えようと触手を伸ばした。

攻撃の第一波が、カーエスの目の前に迫った。

彼は、少しだけ跳躍し、触手を上に引き付けると、ギリギリ前に着地し、わずかに開いた下の隙間を転がるようにして攻撃をさける。その際、やや左前に転がり、そのすぐ後ろに迫っていた第二波の触手を左側に誘導し、今度は右に跳んでかわす。

カーエスはジェシカほど白兵戦が得意なわけではない。しかし彼

女のように軽甲冑を着込んでいるわけではないので、このように身軽に動く事ができるのだ。

だが、カーエスが向かっているのは、先刻ジェシカも突撃を実行した“デイジー”本体の真正面に近いところで、その分攻撃は激しい。しかも、最初の二波とは違い、随分攻撃も複雑化している。そして、避け切れなかった触手が遂にカーエスを捕らえる。

「カーエスツツ！」と、魔導兵器の触手がカーエスの脇腹を掠めた瞬間を見たジェシカが彼の名を叫ぶ。

彼は、傷付いた脇腹に手をやると、目の前に存在する、触手達の間はずかな隙間に飛び込み、ようやく目的地に到達した。

カーエスは自分の記憶と、今日の前にあるものを比べて確認すると、自分の手の平で張り手でもするように“デイジー”本体の正面左脇あたりを叩いた。後には、脇腹に手をやった時に付いた血の後が残ったのを、ジェシカははつきりとその眼に捕らえた。

その瞬間、ジェシカは詠唱を開始する。

本当は一度攻撃が終わるタイミングを待つ予定だったが、カーエスはもう動けまい。そのカーエスを、触手が狙いをつけている。

「猛者たる条件は《強力》、魔力よ、理力の源となりて我を猛者と成せ！」

彼女の筋力を一定時間高める魔法《強力》の光が彼女の身体を包む。更に、彼女は続けて、《一時の怪力》を二度唱え、全身に力がみなぎるのを感じる。

今、彼女の筋力は限界まで高められた。

防衛用魔導兵器“デージー”の吸収能力は厄介だが、一瞬で魔力を吸い尽くされてしまうわけではない。人が飲み物を飲む速さに限界があるように、“デージー”が魔力を吸うのにもある程度の時間が掛かる。

範囲内で魔導を行うと、魔法の為に身体の中から出した魔力が端から吸収されてしまう為、全く付け入る隙はないが、既に範囲外で完成した魔法ならば、魔力を吸収されて効果を失ってしまうまでには間がある。

ならばその効果が失われてしまう前に、その魔法が“デージー”に届けばいい。それが、カーエスが言った言葉である、「“速さ”の限界を突く」の意味だ。

《一時の怪力》の効果は高い。その分持続する時間は少ない。しかし、ジェシカは焦らずにカーエスを狙う触手の動きを読む。そして、ジェシカの場所からカーエスの血によって打たれた印まで一直線に繋がる道が見える直前、ジェシカは仕上げの魔法を唱える。

「《電光石火》によりて我は瞬またたく早さを得んっ！」

“直星突”！

ジェシカは光のような速さで、触手の合間を一直線に走る。たまに触手ギリギリを掠めるが、彼女が驚く事はない。

《電光石火》は速さとひきかえに、一度走り出したらコースの変更が出来ない。そのために、使う前に自分の進路を見極めなければならぬのだが、その点、ジェシカはしっかりと訓練を積んでいる間違いなく、カーエスの元に迄、触手に触れずにたどり着けるという確信があった。

気がつけば目の前にカーエスのつけた印が見えた。それに向かって、ジェシカは腰ために構えた槍を力に任せて突き出した。

先ほど自分を吹き飛ばした、魔導兵器に備わっている物理防御障壁が展開されるが、魔法によって強化されたジェシカの槍の前には大した抵抗にはならず、あっさりとそれは突き破られた。

魔導兵器特有の特殊合金で構成された“デージー”の甲殻に、ジェシカの槍が吸い込まれて行く。

ジェシカは槍を握る自分の腕に何らかの手ごたえを感じた。

ふと気が付くと、自分とカーエスの周りから、触手達が避けようがないほど近付いてきていた。

思わず、ジェシカが固唾を飲んだ時、カーエスの声が部屋に響く。

「防ぐな、返せ《弾きの壁》っ！」

詠唱の終了と同時に、触手達は自分達を目前にぴたりと止まり、次の瞬間それぞれ元来た方向に弾き飛ばされてしまった。

魔法の効果が現れた事に、ジェシカとカーエスは思わず顔を見合わせ、笑みを交わす。

「魔法が使えるんなら、こっちのモンやっ！ 裁きよ、天より降りて《罪討つ落雷》となれっ！」

カーエスの魔法によって、天井の方から雷が落ちてくる。《罪討つ落雷》の雷はそのまま、ジェシカが槍で穿った穴に吸い込まれるように命中した。

そこで、小さな爆発が起こり、槍の太さと同じ大きさしかなかった穴が、人頭大にまで広げられる。

それでもカーエスは手を休めない。

「この玉は内に炎を秘めし《爆発の玉》！ その炎、我が敵に当た

りし時、解き放たれん！」

呪文の詠唱と共にカーエスの手の平に赤い光の玉が収まった。彼はそれをその穴に向かって放り投げる。

それが“デイジー”に触れた瞬間、その手の平大の大きさからは想像出来ないくらいの大規模な爆発が起こった。

爆炎の向こうに見える“デイジー”はほぼ全体の甲殻が剥げ、内部機器が剥き出しになっている。あちこちで煙が上がっているのが見え、明らかにほとんどの機能が失われている事が見て取れた。

内部機器の中心からやや左寄りに淡く光る丸い石のような部品がある。配線などが全てこの部品に集まっているところを見ると、これが防衛用魔導兵器“デイジー”の心臓部なのだろう。

(つまり、あそこを碎けば全てが終わる)

《飛躍》で“デイジー”の上方約七メートルあたりまで跳躍し、壊れかけている魔導兵器を見下ろしたジェシカは、槍をその“デイジー”の心臓目掛けて構えて、仕上げの魔法を唱えた。

「この場に在るもの縛るは《更なる重力》！」

その魔法によって、彼女の落下速度が目に見えて上がる。彼女は《強力》で強化されている腕を限界まで引き、狙い定めたところに向かって槍の一撃を放った。

「“墜星突”っ！」

槍の穂先が“デイジー”の心臓部を捕らえた。

次の瞬間、その淡く光る石にヒビが入り、呆気無く形を崩して碎

けた。

着地したところに、カーエスが歩み寄ってきた。

「御苦労さん」

「貴様もな」

形ばかりではあるが、労いの言葉を掛け合った後、二人並んで、完全に機能を止め、あちらこちらから煙を出している防衛用魔導兵器を眺める。

「まったく、ここまで手強いとは思わなかったで。独りやったら絶対倒せんかった」

「ああ……思わぬ時間を食ってしまった」と、ジェシカが懐から懐中時計を取り出す。

その時計は今ちょうど桃の刻（午後一時半）を差したところだ。

「赤の刻（午後三時）まであと半刻（一時間半）。急がなくてはギリギリになってしまうな」

二人は顔を見合わせて頷くと、“デイジー”の残骸の向こう、それが守っていた“忘却の間”に向けて足を踏み出した。

30 『可能性』

盤上の遊戯ではないのだから、投了は許されない。

諦める事はできるが、結果を考えるとそれも出来ない。

打つ手は全て封じられている。

相手の勝ちほぼ確定している。

彼にできる事は諦めない事、そして待つ事。

盤上の遊戯ではないのだから、可能性が途切れたわけではない。

彼自身が動かなくても、外が動いている。

刻々と状況は変わって行く。

劇的に変わるのかもしれない、結局変わらないのかもしれない。

どちらにしても、彼は今、待つ事しか出来ない事に変わりはない。

ドオン、と重い音が“忘却の間”内に響いた後、その扉が開いた。否、開かれたのではなく、破られたのだ。ジッタークの“鍵”が開けるのは禁術に関する物が収められている金庫であり、“忘却の間”それ自体の扉は開けられない。時間を掛けて魔法で穏やかに解錠する選択肢もあったが、結局力技で手っ取り早くいくことにした。カーエスの魔法で、一撃を加え、ジェシカが止めを差し、扉は破られた。

「ああ、本格的に犯罪者やな、俺ら」

派手に壊れた扉と、その向こうに見える“デイジー”の残骸を振り返り、カーエスが苦笑する。

もつとスマートに行っていけば、禁術破りをした事すら分からなかったかもしれないが、今は一目見ただけで、それが行われた事はつきりする。

おまけに、破壊された防衛用魔導兵器や扉には自分の魔力の痕跡が残っているだろう。人の持つ魔力には個性があり、犯罪捜査においては、指紋と同じくらい個人を特定する鍵となる。特に、カーエスは魔導研究所に身を置くものとして、自分の魔力のデータを研究所に把握されているので、解析用の魔導器にかければ直ぐに自分が出たことであると発覚する。

「リク様の為なら、喜んで悪魔にでもなるわ」

「真面目な話、そういう人の信じかたはどうかと思うで」と、ジェシカの先に歩いているカーエスが返す。「素直に相手を認められるのはええ事やと思うけど、一度認めたらそいつの全てを肯定するっていうのは危ないんじゃないか？　どんな人にもええトコと悪いトコがあるんじゃないから」

思わぬカーエスの意見に、ジェシカは痛いところを突かれた思いを禁じ得なかった。

確かに、自分は物事を両極端で考え過ぎるのかもしれない。ファトルエルで抱いていた性別の悩みも、今から思えば、結局は自分自身の偏見から来ているものだった。

沈黙が二人の間を包む。彼女らの立てる足音が、“忘却の間”の薄暗い空間に響いていく。

“忘却の間”は広さがさっぱり分からない。自分達のいる周りの床のみが淡い光を放ち、周りを照らしている。その光は弱く、自分達の立っているところから五メートル先からは完全に何があるのか

さっぱり掴む事が出来ない。完全に闇ではないが、入り口のある面を除いた壁、天井など、この部屋を形成する要素が全く見えないのである。

ただ、淡い光で分かるのは、膨大な量の金庫棚が縦横無尽に並んでおり、それぞれの列にある番号の案内が側面に表示されているだけである。

はつきり言つて、薄気味悪く、不安な気持ちを掻き立てる雰囲気を持つ部屋だった。

ジェシカの先を歩くカーエスは、棚の側面に表示されている番号を目で追いながら黙つて歩く。

そして「お」と、短く声をあげると、棚のある列に入つて行つた。棚の列は一メートルほどの幅しかなく、酷く狭く感じられる。特にこの薄暗闇の中ではそれが一層心細く感じられた。

それから、カーエスは黙つて先を歩き続け、列の片側の番号に目を走らせて行く。

やがて、カーエスは目的の金庫を探し当てた。確かにジッタークから聞いた一四七九番という番号が刻まれた札がつけられている。見た目はただの金庫が積み重なつたようなものだが、質はそんなじよそこらのものとはハッキリと違うはずだ。“デイジー”に使われているよりも遥かに堅い、魔法で合成された金属に、魔導処理を施して、何重にもプロテクトを施し、絶対に壊れることはないと保証できるほどには堅牢なはずである。

金庫の扉にぼつんと存在する鍵穴に、ジッタークから預かつた“鍵”を差し込むと、中がチャリ、と鍵が外れる音がした。

カーエスが慎重な動作で金庫の扉を開く。

ジェシカは、固唾^{かたす}を飲んで、その中を覗いてみた。その中には一つの卵のようなものが安置されている。

「“圧縮卵”か」

この魔導研究所自体も、空間が圧縮され、見た目よりも遙かに中
が大きいように、荷物などを持ち運び易いように、圧縮して卵の形
にしたものが“圧縮卵”である。それに設定された条件が満たされ
ない限り、この圧縮が解けて元に戻る事はない。

その性質から、持ち運びや、物の管理に非常に重宝できる魔法だ
が、空間および物品の圧縮という魔法は非常に高度である為、コス
トが掛かり世間には普及されていない。

「正直大荷物をえっちらおっちら運んでいかなあかんのや思っとな
たから、ちよつと安心したわ」と、先ほどまで押し黙っていたカー
エスがやっといつもの呑気のんきさを見せた。「圧縮の解き方は多分おっ
ちゃんが知つとるやろ」と、その“圧縮卵”を自分の懐に納める。

ジェシカはそれを自分の目で確認すると、カーエスに頷いて見せ
た。

「よし、急いで帰るぞ」

そして踵を返し、今度はカーエスの先に立って走りはじめた。

アルムスが、“英知の宝珠”の取り外し方を白状してから、既に
六分刻（三十分）が経過していた。そしてアルムス自身が、“英知
の宝珠”が接続されている制御用魔導器の前に座って操作を行って

いる。

普段からここで勤務している者はほとんど眠らされてしまっている。所長として一通りの事ができるアルムスがこの作業を行っているのである。しかし、ほとんど触った事がないのも事実で、元々時間の掛かる作業であることを差し置いても、彼の作業は遅れていた。

見た目にももたついているアルムスの作業を、ディオスカスは特に苛立った様子もなく見張っている。その視線が気になり、アルムスが作業の合間にディオスカスを盗み見ると、ディオスカスは余裕のある笑みを返して言う。

「ごゆっくりどうぞ。特に急いでいるわけではないので」

その余裕をどうにかして削り取ってやりたい、とアルムスはあるが、今は自分の非力を呪う事しか出来ない。

このような大掛かりなクーデターの発生を許してしまった責任は大きい。どんな結果に転がっても、もう自分はエンペルファータ市長兼魔導研究所所長という地位を無くしたも同然だろう。否、これが終われば、彼は自分から降りようと思っている。

何故か、あまり未練は感じていない。今の自分の地位が、昔憧れていたほど名誉と栄光に満ちたものでは無かったからだろう。

時代も悪かったと思う。魔導文明の中で、黄金期と呼ばれた時代とは違う。文明の発展と進歩が目に見えて遅くなった今の時代、もはやエンペルファータは“時代の最先端”という呼称に見合うほど飛び抜けた存在では無くなっているのだ。

黄金時代という過去の栄光に捕われた自分より、現在、前を見られる人物の方が今は適任だろう。そう思うと、彼は清々しい気持ちにさえなれた。何故もつと早くそうしておかなかったのだらうと思いながら。

だが、今となつては、その前にやらなければならぬ事がある。自分以上に過去に捕われ、第二の黄金期を夢見てこのような馬鹿げた行動を起こしているこの男を何とかしなければならぬ。

しかし、打てる手が見つからない。下手に抵抗をすれば、彼はエンペルファータを滅ぼすつもりだ。戦力を集めようにも、魔導士団は彼の指揮下にあり、その卵である魔導士養成学校の生徒達は魔導学校棟ごと封鎖され、閉じ込められてしまっている。

唯一期待できるのは、上手く姿を消す事が出来たエイスだが、これも一人ではどうにかできる問題ではないだろう。

考えに没頭しながら作業をしていると、扉の開く音と共に、一人の魔導士がこの部屋に入ってきた。

その魔導士と、ディオスカスの会話にアルムスはさり気なく耳を傾けた。^{かたむ}

「何？ 禁術破りだと？」

その魔導士は、ディオスカスに指示され、なぜか制圧の手を逃れている研究・開発室棟の医務室で何かあった場合、知らせる役目を帯びていたらしい。

「はっ、毒に倒れたりクゥエールの治療の為、禁術を使うつもりでいるようです」

「禁術？」

つい、ディオスカスが聞き返すのも無理はない。一言に禁術といつても、“忘却の間”には膨大な量の禁術が眠っている。そのうちのどれかを使えばリクゥエールを救えるかもしれない、という考えは分かるが、あの金庫棚の列の中からそれを探し当てるのは、森の中で一枚の木の葉を探すよりも難しいはずだ。

「はっ、彼等の話では“どんな病気、怪我でも治す魔法”を使うのだとか」

それを聞いたディオスカスの目が細まる。

「……その提案に至るまでの詳しい経緯を」

魔導士が報告するところによると、医務室の魔導医師が助けられないと判断した為、カーエスⅡルジュリスの知り合いである元魔導医師・ジッタークⅡフェイシンが呼び出され、その彼の提案で、禁術破りをすることに決定したらしい。

そして今から三分刻（一時間）ほど前に、カーエスⅡルジュリスとジェシカⅡランスリアが、“忘却の間”に向けて出発したのだ、とその魔導士は報告した。

「ジッタークⅡフェイシンか……」と、得心が行ったように、ディオスカスが呟く。

その名前を聞いてアルムスもようやく話が掴めた。今から十年ほど前に“どんな病気、怪我でも治す魔法”を開発しながら、人々に公表する前に早々と“忘却の間”に禁術として封印してしまった人物として、当時まだ開発部の部長補佐でしかなかったアルムスの記憶に残っていた。

家族に重病人を抱え、その噂を聞いた者達が、こぞって魔導研究所の扉を叩いたあの騒動は昔の事ながら鮮明に憶えている。彼があの事件の後、魔導研究所を辞したのは知っていたが、まだエンペルファータ内に残っているとは知らなかった。

そして、あの魔法を生み出して、封印したジッターク自身ならば金庫を開ける為の“鍵”と、その金庫の在り処を示す番号を持って

いても不思議ではない。

そして、ふとアルムスは思い当たる。今、医務室で倒れているのはリク「エールだ。ならばカーエスやジェシカばかりではなく、彼らと連れ立ってファトルエルからやってきた、フィラレス「ルクマ・スに、サソリ便の御者で、便利屋もやっているという、あの褐色の肌の青年も一緒だろう。

魔導研究所に所属する二人以外の戦力は未知数だが、それでも“滅びの魔力”があるフィラレスがいる。あの無限にも等しい大きさの魔力は使える。一度発動すれば何が起こるか分からないが、上手く作用すればディオスカスの野望を打ち砕く事も不可能ではない。実際、ディオスカスもフィラレスを下手に刺激したくない、という事情から医務室に手を出さなかったのだと考えられる。便利屋をやっている青年とやらも、情報収集などはお手のものだろう。

カーエス達が帰ってくれば、便利屋の青年が収集した情報を元に、策を練って動く事ができる。そこにエイスマ加わってくれば、さらに可能性は高まる。

しかし、心配なのは“忘却の間”に向かったカーエスとジェシカだ。あそこには防衛用魔導兵器“ディージー”が配備されていたはずだ。資料を見る限り、あれを倒す術は思い付かない。自分も魔導士の資格は持っているとは言え、そうそう戦闘に長けたものではないので、彼等なら何とかするかもしれない。

「他に報告する事は？」

「そう言えば、リク「エールに、治療を施す時間は限られており、カーエス「ルジュリスらは本日赤の刻（午後三時）までに禁術を持って帰らなければなりませんよ」

「ふむ、タイムリミットか……」

ディオスカスは、少し視線を外して思案し、指示した。

「ならば焦りを誘ってやるのが吉だな。以下の事を各所で見張っている連中に連絡しろ」

「はっ」

「カーエス＝ルジュリスとジェシカ＝ランスリアの二名を見かけたら、奴等の行く手を妨害。捕らえたり、倒したりする事より、より手間を掛けさせる事に重点を置く事。赤の刻まで奴らを医務室に近付けるな。以上だ」

「了解しました」

ディオスカスの迅速な判断に敬礼をし、魔導士は部屋を出て行く。

（全く、相手の嫌がる事ばかりを良く突いてくれる）と、アルムスは今のディオスカスの判断に、内心で舌打ちをした。

今の指示から、カーエス達は大幅に医務室に帰るのが遅れる事になるだろう。二人が“忘却の間”を目指して医務室を出た時間からすると、彼等はまだクーデターの事を知らないはずだ。医務室に帰って来るまで、彼等に対クーデターの戦力として当てにする事は出来ない。

おまけに、“デイジー”の戦闘、さきほどディオスカスが指示をした邪魔者との戦闘で随分くたびれる事になる。焦りから失敗をして魔導士団に捕われるかもしれない。それに、その結果、禁術破りまでして助けようとしたリクを助けられなかったショックも少なくはないはずだ。

（までよ）と、アルムスは一つ引っ掛かりを覚えた。

カーエス達は禁術破りをしている。これは国際法の顔ともいえる

“全世界による魔法についての使用制限条約” にしっかりと定められている違反行為。つまり、カーエスは重大な犯罪を現在進行形で行っているのだ。

罪を犯したからには、魔導研究所を追放されるだけでは済まない。“自由都市” フォートアリントンから、司法機関が派遣され、カーエス達は身柄を拘束されてしまう事になる。それが分からない程彼等は子供ではあるまい。

彼等は犯罪者に身を落としてまで肉親でも恋人でもない男を助けようとしている。そのたった一人の男、リク「エールとは一体何者なのだろうか。

(あのファルガール「カーンの弟子とか言っていたが……)

彼が去って、十五年経ったが、まだ彼の影響は魔導学校に色濃く残っている。未だ誰も寄せつけぬエスタームトレイルの最速記録を初め、今魔導士団で抱えている上級魔導士の一部は元々ファルガールの生徒だった者達だ。そして、現在、魔導研究所の抱える魔導士の質を大きく押し上げている一師一弟制は元々ファルガールの推奨していたものだ。

彼と直接話す事は遂になかったが、そんな自分でもファルガールの話になれば話題には事欠かない。

“孤立する日”の初対面の際、“グランクリーチャー”《テンプファリオ》の大災厄を見た際に発した彼の言葉が印象的で、今も耳に残っている。

早くなんとかしなくちゃヤバいんじゃないか!?

大災厄に対して、何とかする、と。ファトルエルで大災厄の猛々(ただだけ)しさを知っている人間の言葉とはとても信じられなかった。あれは、大災厄が相手でも何とかできると思っている台詞だ。

確かに、ファトルエルの大災厄に際し、史上初めて人間が大災厄を退けた。しかし、倒しても倒しても湧いて出て来るクリーチャー、異常を通り越した天変地異の数々、その中をただ生き残ったからと言って、大災厄を退けた実感を持つ者はいないはずだ。

実際に、大災厄に止めを刺し、退けた者を除けば。

(まさか……)

アルムスはファトルエルの大災厄を退けたのはおそらくファルガールだろうと思っていた。それが、魔導研究所最強の魔導士にも数えられるであろうカルク「ジーマン」とマーシア「ミスターシャ」。その三人が揃えば、不可能も可能になると、アルムスは何となく納得してしまっていた。

しかし、彼等の弟子であるリク、カーエス、そしてフィラレス。彼等が今行動を共にしている事からしても、彼等三人がファトルエルでの大偉業に何らかの関わりがあった事は何ら不自然でもない。何故、今までその可能性を考えなかったのか。

「手が止まっておられるが、どうかされたのか？」

思考に集中してしまい、アルムスはそのディオスカスの声で、自分の手が止まっていた事に初めて気が付いた。

「ああ、どうしたら君を止められるのだろうと考えていてね」と、あまり誤魔化さずに正直に言い、再び指を動かしはじめる。

「それは、思考力の無駄ではないかと思われる。……先ほど聞き耳を立てておられたようだが、少なくともあなたに打てる手はない」

もうすぐ、正念場だ。

アルムスは何の根拠があるわけでもなく、そう感じた。

カーエス「ルジュリスらがリク「エールを助けられるか否か。

それが、このクーデターの結末を左右する分岐点になるのではな
いか、と。

31 『時が赤を刻んで』

時を刻む音が大きく聞こえる。

それは命を刻む音。

夢が消えて行く音。

その音は焦燥感を煽り、

絶望の縁へと追い詰める。

時を刻む音が大きく聞こえる。

それが強くなればなるほど、祈る気持ちも強くなる。

この時ほど、時計が怖いと思うことはない。

ばしゅっ、と空気が勢いよく漏れるような音がして、次々と“英知の宝珠”に接続されていたコードが次々と外れて行く。そして、その名が示す通り魔導文明が生み出された知識の全てが詰まったその魔導器を固定していた柱が、ゆっくりと低い音をたてて上下に別れて行き、最終的に部屋の真ん中に取り残された台座の上に、“英知の宝珠”が安置される形となった。

「御協力、感謝する」と、ディオスカスはアルムスに勝ち誇った笑みを向け、つかつかと“宝珠”に歩み寄って行く。

そして、“英知の宝珠”の前に経つと、そっと自分の手をそれに這わせ、下部に手を差し入れると、ゆっくりと重みを確かめるように力を込めていく。やがて、あるところまで力を入れるとそれは、重々しく持ち上がった。

「ふむ、これが文明の重みというものが」

“宝珠”を片手で胸の高さまで持ち上げ、ディオスカスは満足げにそれを眺める。

「片手で持ち上げられるんだ、大した重みではないだろう」

そうアルムスが答えると、ディオスカスはいきなり声を上げて笑った。

「窮地に立たされると人が変わるといっが、それは本当らしい！あなたからそんな気の利いた冗談が飛び出るとは思わなかった」
「お気に召したようで何よりだ」

不機嫌そうな顔でアルムスが返すと、ディオスカスはまた笑い、手に持った“宝珠”を持参してきていた鞆かばんの中に詰めて、傍にいる魔導士に持たせた。

「それでは次の目的地へと御同行願おう」

余裕があるのか、自分に背を向けて身をひるがえ翻すディオスカスに、アルムスは尋ねた。

「貴様、研究所からどれだけのものを持って行くつもりだ？」

ディオスカスは、足を止めて振り返る。その顔は今までとは比べ物にならないくらい悦びに満ちたものだった。

「いただけるものは全て……と言いたところだが、流石に持ちきれないので取りあえず三つ」

ピツ、とディオスカスは人差し指を立てた右手をあげる。

「一つが、今手に入れた“英知の宝珠”」

知識は、力だ。

魔導士として修行をすると、この言葉が酷く実践的であるどころか、この言葉が全てであるような実感を覚えることがある。

ウォンリルグへの亡命という話が、タチの悪い冗談でないとするのなら、そしてフォートアリントンからのウォンリルグが戦争を企てているという情報が間違いでなければ、三大国のうちエンペルリスとカンファータの知識の全てが詰まった“英知の宝珠”はウォンリルグにとって、非常に戦略的価値のある品物となる。なにしろ、それ一つで敵国の持ちこたえる魔導兵器などのデータが全て網羅できるのだから。

“孤高”^{ウツク}を貫くウォンリルグでもそれを手みやげにわたせば、十分ディオスカス達を迎え入れる可能性が出て来る。

「二つめは、“滅びの魔力”」と、ディオスカスは挙げた右手に中指も追加して立てる。

これは純粋な力故だろう。扱いきれないという、致命的な欠陥を持つが、それでも人を惹き付けてやまない魅力的な量の魔力。

力も、やはり力である。

「ダクレーを使って、もつと確実に奪うつもりだったが、御存じの通りの結果だ。おかげで計画が早まってしまい、こちらの件については全てが即時臨機対応で動かなければならなくなってしまった」などと、愚痴めいた事を語るディオスカスの口調はそれでも得意げだ。騙した狐が、畏に掛かった兔に己の知恵をひけらかすように。

やはりか、とアルムスは内心で思う。

ダクレーは元々ディオスカスから送り込まれる形で研究部にやってきた男だ。彼にディオスカスの息が掛かっているても可笑しくはない。彼が、自分に“滅びの魔力”のセーリアへの転用を提案したのだって、おそらくはディオスカスのいう“確実に奪う”策略の一端だったのだろう。

そんなダクレーの口車に動かされ、ミルドを初めとする方々へ、権力を行使してまで強引に計画を勧めていた事を振り返ると、アルムスは自分が非常に情けなくなる。彼は、自分の計画を動かしているつもりで、その実、ディオスカスの計画通りに動かされていただけだったのだ。

「そして三つ目が、今から我々が取りに行くもの……」

だが、そんなアルムスの自責の念も、ディオスカスが三本目の指を立てると同時にいった言葉に全て吹き飛ばされてしまう。

「それが……エンペルファータの“ラスファクト”《テンプファリオ》」

気が付くと、リクは流れが激しく、深い川の中で石にしがみついで耐えていた。それは奇妙な光景と言えるのかもしれない。周りは何も見えないような暗闇で、光源は一切見当たらないのに、自分と、その川だけはハッキリと見える。逆にいうとそれ以外は何も見えず、

敢えていえば暗闇が在るだけだった。

しかし、彼は、この場所が人々に何と呼ばれているのかは知っていた。

「これが“死出の道”ってやつか……初めてみるなあ」と、孤独感から出た彼の声は、いやに呑気のんきな響きがする。

“死出の道”とは民間伝承に端を発する死後の世界に関する定説だ。“死出の道”は生の世界と死の世界の狭間に在るものであり、人は意識を失った状態で死の危険に曝されると、この場所に辿り着く。

道、という名前でも、大抵の場合は川らしい。瀕ひんしている危機の重さに比例して、生の世界から、死の世界に流れている川の深さ、流れの激しさが変わる。重ければ重いほど上流、つまり生の世界に戻るのが困難になるのだ。流されて、死の世界への境界線を超えた時、人は死ぬと言われている。

彼がはつきりと憶えているのは、《アトラ》を召還するまでで、後の事は知らない。他に方法がなかったとはいえ、“魔導士殺し”と呼ばれる魔法毒《導きの戒め》に身体を冒された状態で召喚魔法なんて高度な魔法を唱えたのは己の事ながら無茶だった。

そこから、何とか意識は保てていたらしく、カーエス達によって発見され、ジッタークが魔導医師として呼び出されて半ば博打のような治療法を提案し、自分がそれに同意するまでで、あとは意識が途絶えてしまっていた。

そして、先ほどまで完全に意識を失っている間、捕まることもなく、ただ流されていたような記憶がある。つまり、自分ではもがきようもないほど危険な状態だったらしいが、今は何とか掴まって流れに抵抗ができるほどの危険度らしい。

ジッタークが、何らかの手段でリクの状態を比較的安定させたの

だろう。しかしこの川の水量と流れの速さからすると、命の危険が去ったわけではない。取りあえず、苦しみがやわらげられただけというところだろう。

リクは後ろを振り向いて、川の下流を見つめた。

岩に捕まっている今は流されることはない。しかし水量は目に見えて増えて行っているし、無意識のまま掴んでかなりの時間が立つのか、腕に痺れを覚えはじめていた。しかも精神世界の一種に存在しているからといって、今現実世界で感じている苦しみが取り去られたわけではない。

普段心身健やかなリクは未だかつて経験したことのないような頭痛や、身体のたるさ、咳など彼が病気という言葉聞いて連想できる、ありとあらゆる症状が彼を襲っていた。このままでは後幾らも持たないだろう。

初めて体験する死の危険に、身体を蝕む症状とは明らかに懸け離れたところで彼の身体に冷やりとした何かが走る。

「死んで、たまるか」

自分に言い聞かせるように、リクは声を絞り出す。

自分はまだ死ねない。叶えたいという夢がある。必ず叶えると誓った夢がある。その為だけに、彼はこの十年という歳月を生きてきたのだ。それなのにはるか長いこの道の第一歩すら、まだ踏み出せていない。せめて手を伸ばさそうにもどの方向に伸ばしたものが分からない。そんな状態で死ぬのは絶対に嫌だった。

意識を失う直前、彼は確かに聞いた。カーエスも、ジェシカも、そしてコーダも彼が助かると信じてくれている。ジッタークは必ず助けると。

そして、彼は今も感じていた。右手の温もり。声が出せない少女

は、代わりに自分の言いたいことを伝える術を沢山持っている。この温もりもそうだ。彼女はあらん限りにリクの生還を祈っている。

川の様子が急変し、リクは遂に捕まっていた岩を離してしまった。流れていくリクは、上流の方を睨み、がむしゃらに上流に向かつて泳ぎはじめる。しかし、川の激しい流れはその泳ぎを全く問題にせずリクを死の世界に続く下流へと運んで行く。

そんなことは分かっている。僅かどころか、ひよっとしたら全く無駄な行為なのかもしれない。それでも、彼は悲鳴を上げる自身の身体に鞭を打って泳いだ。

これは意思表示だ。

絶対に諦めない、絶対に生き残ってみせる。

これはリクからの、彼を死に運ぶ川への宣戦布告だった。

「なんとかギリギリで間に合うな」

守備よくジッターク指定の禁術を手に入れ、図書室の一角に戻ってきた時、ジェシカは懐中時計を確かめてそう漏らした。

状況の異変は、図書室を出た後からだ。図書室の入り口で出くわした魔導士らしき男が、彼等を見るなり指を差し、「いたぞ！ カ―エス!! ルジュリスだ！ 女魔導騎士の方もいる！」と、仲間らしきを呼び集めたのだ。

（ばかな、いくら何でも対応が早すぎる！）と、ジェシカは心中で叫んだ。

防衛用に配備されていた魔導兵器と戦闘を行ったりして、幾らかは派手な行動だったとは思うが、あんな人の滅多に來なさそうなところで起きたことなど、定期的な見回り以外に発見する手段はない。それにも関わらず、ほとんどタイムラグも無しに対応されている。

否、この魔導研究所の技術力ならば、常時“忘却の間”の様子をモニターなどで伺^{うかが}っていてもおかしくない。しかしそれでも、秘密の通路の入り口である図書室にピンポイントでやって来るのは明らかに不自然ではないだろうか。

このことを知っている人物はごく限られているはずなのに。

しかも、彼女らを発見し、集まってきた魔導士達は、用件を話すことはおろか、本人なのかを確かめようとせせずに、即時に各々呪文を唱えはじめ、戦闘体勢に入っていた。

問答無用、そう彼等の態度は訴えていた。

そんな彼等を説得して通してもらうのは、無理だろう。

ジェシカは密かに舌打ちをすると、立ちはだかる魔導士に槍を向けて詠唱を始める。

「猛者たる条件は《強力》、魔力よ、理力の源となりて我を猛者と成せ！」

筋力を増強させる《強力》の幕が彼女の全身を包む。そして、さらに彼女は定石通りに《電光石火》を唱え、光のような速さを得る。しかし槍は穂先を相手に向けるのではなく、自分に対し平行に構えたまま突撃をした。

そうすることで、集まって目の前に並んでいた数人の魔導士全てに槍が当たる。槍が当たった瞬間、ジェシカは《衝撃の増幅》という、その名の通り、その瞬間相手に与えた衝撃を二倍に増幅すると

いう魔法を唱えた。

魔導士全てを一度に槍に掛け、分散した衝撃をそれで補うと、目の前に並んでいた魔導士達全てが吹き飛び、戦闘不能状態になる。複数の相手を一掃できることから、これは“掃星突”と呼ばれている技だ。

「カーエス、魔導研究所の魔導士団とやらは、随分好戦的なのだな？ 犯罪者を逮捕するためとはいえ、有無をいわさずいきなり攻撃を仕掛けて来るとは！」

ただでさえ残っている時間が少ないというのに、邪魔された鬱憤からか、半ば怒鳴り付けるようにカーエスに言う。

「いや、違う。あれはおかしい。いつもの対応と全然違うで」

疑問に顔をしかめたカーエスは、走りながらジェシカに答えた。

そもそも、犯罪者を掴まえ、取り締まるのは魔導士団の仕事ではない。

先に述べた通り、魔導士団は研究所最大の武力ではあるが、そこに所属する大半の団員は専業ではなく、研究者などの兼業だ。それ故に緊急事態が起きても、召集をかけてから出動するまでの時間が多く掛かってしまう。

そんな対応の遅い団体に警察組織としての仕事を任せるわけにも行かず、エンペルファータには正式な司法機関が設けられている。その機関にも戦闘要員として、研究所出の魔導士はいるが、それでもおかしい事がある。

それは、彼等が強力な魔導兵器を装備していたことだ。

「それは私も思った。だからさっさとケリをつけたんだ」と、カー

エスの説明に、ジェシカも難しい顔をして頷く。

魔導士団にしる、司法機関にしる、魔導士は魔導を助ける程度の小さな魔導器を持つことくらいはあるが、彼等の持っていたそれは殺傷能力が大きく、戦争か賊の討伐くらいにしか使い道のない魔導兵器は開発されても研究所の保管庫に管理されているはずである。

魔導兵器関連の事情は、もともとカンファータの軍事団体である魔導騎士団に所属しているジェシカのほうが詳しいだろう。

「これは、良うない予感がするで。問題はリクの事件だけやなさそ
うやな」

一端は目の前の敵を片付けられたジェシカ達だったが、今はそういうわけにも行かなかった。

「こつちだ！ もっと応援を呼び寄せる！」
「絶対に逃がすな！」

叫び声と共に、数人の魔導士が廊下を駆けつけて来る。倒しても、倒しても、湧いてでるように増えて行く魔導士達を睨み付け、ジェシカは狂ったように槍を振るい、前に立ちはだかる魔導士達を片付けて行く。

魔導士団は、数が多いがそのほとんどは中級、下級魔導士だ。上級は一握りしかいないので、多数を相手にしてもそうそう遅れをとることはない。

しかし、彼等の進行は遅々として進まない。

「“掃星突”っ！」

対集団戦闘に重宝する、槍を横に構え、そのまま突撃をする技を仕掛けるが、今度は数人の魔導士が防御用魔法を唱え、吹き飛ばされるのを防いだ。

それを見て、ジェシカはぎり、と奥歯を噛み締める。

禁術破りの現行犯のジェシカ達を捕らえにきた魔導士達にしては、彼等はあまり積極的に彼等を捕らえに来ない。それよりも防御魔法を中心に唱え、しつこいくらいに粘^{ねば}って来る。こちらが上級魔導士二人という情報を得て、持久戦に持ち込んだ可能性もあるが、どちらかというと、ただ彼等の行く手を邪魔しているようにしか見えな

い。
「何故だ。何故私達の邪魔をする……！？」

防御用魔法の効果が切れたところを見計らい、直接槍で“掃星突”で踏み止まった者達を蹴散らしながら、ジェシカはそう漏らした。その声は、悲痛にさえ聞こえる。

他の者に損をさせる行動をとっているわけではない。自分達は、ただ一人の青年を助けたいだけだ。大きな夢を持ち、それを本気で叶えようとしている青年を助けたいだけだ。

何故、そんな男が夢に破れる事も出来ず、このようなところで果てなければならぬ。

普段、あまり否定的なことを考えない性分のジェシカであるが、この焦りの募^つる状況でそのような考えを押し込める事は出来ない。

この戦闘に入ってから、どれだけ時間が経ったのか分からない。確認はしたかった。その余裕も無くはなかったが、今懐中時計を覗くのは怖かった。すでに手後れという時間になっているという場合が恐ろしかった。

「ジェシカ！」

夢中で槍を振るっている横からカーエスの声が聞こえた。彼は何度も叫んでいたらしく、やっと顔を向けると、苛立ったような口調でまくしたてる。

「ええか、ワケ分からんけど、見ての通りあいつらは防御に徹してる。でも魔導研究所の魔導士は大抵魔法戦に長けとるけど、白兵戦はあんまり得意やない。そこを突いていくで。補助魔法は俺がかかるから、アンタはただひたすら槍を振り回すことだけ考えろや」

「……了解。補助呪文の方は任せる」

焦る気持ちで叫びたくなる気持ちを押さえてジェシカは、カーエスの提案に頷いた。

その後、カーエスの前に出た、ジェシカの背後から、早速補助魔法の詠唱が聞こえる。

「汝に与えるは、《豪なる力》！ 傑となりし汝の前に抗うる力無し！」

《強力》と同じく、一定時間筋力を高めてくれる魔力の膜がジェシカの全身を包んだ。彼女はみなぎる力を存分に込め、手当りしだいに敵の魔導士達に槍を叩き付ける。

「ふ、防ぐな返せ……」

「我見たり、汝が《魔導の乱れ》！」

反射神経のいい魔導士が、《弾きの壁》を唱えようとしていたが、カーエスはそれを見逃さず、《魔導の乱れ》で、その魔導を妨害する。

おかげでほとんど防がれることもなく、ジェシカの槍は狙った相手を捕らえて行く。

「我に付き従いし《追い風》よ、駆けし者の背を押し、向かいし者を押し戻せ！」

続いて唱えられたカーエスの魔法によって、カーエス達の背後から強力な風が吹いた。呪文の通り、強力な風はカーエス達の背をようにふき、彼等の走る速度を高め、ついでに彼等の前に立ちふさがる魔導士達の体勢を崩す。

体勢を崩したところを、また次の魔法が襲った。

「燃え立ち上がれ、《火柱》」

魔導士達の足下に赤い円があちこち三ヶ所ほど現れ、同時に激しい炎が上がる。狭い効果範囲の魔法だが、魔導士達は固まっているので、一つの円で数人の魔導士達が片付けられた。

続いて間髪入れずにジェシカの槍が陣形を崩した魔導士達を襲う。カーエスの補助魔法は恐ろしいほどタイミングよく入って来る。欲しい時に欲しい力を与えてくれる。初めは、彼の補助呪文に合わせて槍を振るえばいいと思っていたジェシカだが、今は、ただ自分の勢いに任せて槍を振ればいいだけだった。

先ほどまであれほど手こずっていた魔導士達が、呆気あっけな無く片付けられて行く。

ようやく進みはじめた自分に、ジェシカは自分の内に渦巻いていた焦りが薄らいで行くのを感じた。

まるで鬼神のようにも思える二人の魔導士を前に、魔導士達は心に抱いた畏怖を隠せない様子だ。

この一隊に何かと指示を出していたリーダー格の男は青ざめた顔をしながら懐中時計で時間を確かめると、手を挙げて指示をする。

「……っ！ て、撤退だ！」

その声を引き金として、半ば混乱した様子で引き上げて行く魔導士の一個隊を目にして、ジェシカは眉をしかめる。

そして、はっとした様子で懐中時計に目をやった。

その時計の文字盤は静かに赤の刻を告げていた。

32 『その目に見るまでは』

君は先の見えない夢を歩くなら。

私はその歩みを信じて付き添おう。

君が断崖からその身を落としてしまったら、

私は君に手を差し伸べよう。

君が闇の中にあり、その目が利かなくても、

私が声を持って、君を呼ぼう。

例え君が死に瀕し、苦しみの中に身を置いても、

私は決して君から目をそらさない。

君が諦めないのなら、

君の夢を見守る私もまた諦めない。

夢に死ぬか、叶えるか。それともその苦難に折れて諦めるか。

終わりを迎えるその日まで、私は君の夢を見届けよう。

「そ、そんな……」

ジェシカの全身から力が抜け、彼女はその場に崩れ落ちるように
膝をつく。

何度手元の懐中時計に目をやっても、その文字盤は赤く染まり、
ジッタークが彼女らに告げた限界の時刻を差している。

「おい、なにぼさつとしとんねん、さつさと行くで」

カーエスが声を掛けると、ジェシカは何も答えず、今にも泣き崩れそうな顔を彼に向けた。

もう、何もかも終わりだ。

望みは全て断ち切られた。

いつもの鋭さが欠片も見られず、絶望に満ちてそう語っている、力のない目を向けられたカーエスは、表情を消し、つかつかとジェシカに歩み寄ると、その胸元を掴んで引き寄せた。

「……見たんか？」

「え？」

特に抵抗もせず引き寄せられた彼女が、ぼそつと尋ねられた言葉の意味がとれずに思わず聞き返す。

「見たんか？ リクの死んだんを。それとも何か、おんどれとリクは心で繋がって死んだら分かるようになってるんか？」

そんなことがあるわけがないだろう、とジェシカは反射的に心の中で反論しようとしたが、声に出さずに次の言葉を待ったのもまた反射的な判断だった。

カーエスは、掴んだジェシカの胸元をぐいつ、と更に持ち上げると互いの鼻が付きそうになるまで顔を近付けて怒鳴る。

「諦めたんか！？ リクを普段、様付けで呼んどるのはアイツを信用しとるからちやうんかいっ！ 尊敬しとるからちやうんかいっ！ おんどれの尊敬しとる男は医者が宣言した時刻にきっちり死ぬよ

うな男かいつ!? 第一おんどれも言つたやろうが! リクは生きるべくして生き、死せるべくしてやはり生きるて! アイツは諦めへん! 絶対に生きること諦めへん! どんなに苦しくても、夢を捨てて死に逃げるような男やない!」

先の戦闘の際に、カーエスは敵の動きを見切る為に眼鏡を外し、目を露出していた。ここまで顔を近付けられると、“魔導眼”が、細部までハッキリ見えた。離れていても全てを見透かすような透明感のある蒼^{あお}だが、近くで見るとその色の深さが伺^{うかが}える。その深さと青さは、まるで海のようなようだ。

怒鳴るだけ怒鳴ると、カーエスはジェシカを半ば突き放すようにして解放する。しかし、その目は離さなず、カーエスは静かな、それでいて良く通る声で続けた。

「……俺は、お前が一番それをよう分かつと思つたよ」

ぼそりと、漏らすような声で付け加えられた言葉に、ジェシカはハツとして身を強張^{こわば}らせた。

「俺かてもうガキやない。もう望みはないのは良う分かつとる。奇跡を信じる気持ちも疑いまじりや。それでも諦める理由にはならへん。アイツが死んだるのを目にして本当に認めてまうのを怖がる気持ちはよう分かる。俺かて同じや。でも一応最後までやり遂げようや。アイツは諦めへん。だから、俺らも諦めへん。それが……アイツを信じとる人間としての筋を通す事になると思つ」

言いたい事を全て言つたからか、カーエスは彼女から目を離すと、踵を返して向かう道に足を踏み出した。

「お前が行かんのなら俺だけでも行くで」

置いて行かれてしまう。

その瞬間、ジェシカはそんな孤独感を覚えた。何だかんだ言っただ喧嘩ばかりしている二人ではあるが、それでもお互いを許せて来られたのは、リクを認め、信頼しているという共通の心があったからだろう。

今、自分が諦めかけた事は、リクに対する裏切りだった。そして、カーエスに対する裏切りでもある。ここで、付いて行かなくては、カーエスは自分を今度こそ許さないだろう。

「待ってくれ」

カーエスがびたりと前へ進もうとする身体の動きをとめる。ジェシカは、急いで立ち上がると、彼の隣に駆け寄った。

「済まない。悔しいがお前の言う通りだ」

「分かれば、ええ」

カーエスは短く答えると、走りながら懐から禁術の詰まった“圧縮卵”を取り出し、ジェシカに手渡した。

「落としなや」

受け取った“卵”はカーエスのものか、それとも卵から生まれようとしているリクの命の脈動か、仄かな熱を彼女の手の平に伝えた。

沈黙が医務室を制してから随分長い時間が経ったと思う。もつとも完全な沈黙ではなく、リクが咳せきをしたり、呻うめいたりした時、ジッタークが軽くリクを診て、簡単な指示を飛ばすだけだ。

ジッタークも、ミルドも、コーダも、そしてフィラレス自身も赤の刻が近付くにつれて時計に目をやる頻度が増して行く。先ほどまで桃色だったのが、今はもうかなり赤みが増している。リクの容態も、それに伴って悪くなっていた。咳などの頻度が増し、息が切れたように荒くなっている。

ジッタークは、できる限りの事はやろうと、かなり頻繁にリクの熱を計り、咳を収めようと薬を投与する。ミルドは心配と焦りを露あらわにした表情でリクを見守っている。コーダからはいつもの朗らかな雰囲気が影を潜め、不安を表に出さないようにしているのか、無表情のまま、淡々とした様子で、この部屋の元々の主である魔導医師やその助手とともにジッタークを手伝っていた。

フィラレスは、彼の傍らに座り、両手で包み込むようにしてリクの右手を握っている。もう彼から握り返してくることはなくなっていた。時計を見るたびに、絶望感が彼女を遅い、彼女はリクの手を握った両手に額を押し付けるようにして祈る。

やれる事がなく、頻繁に時計に目をやっていると、時の流れが遅く感じる時がある。先ほどまでは、それがもどかしく感じていたが、ここまでぎりぎりとなると、逆にそれがありがたい。

しかしいくら遅く感じていても、時は確実に進んでいる。

そして時は訪れた。

赤の刻少し前、リクの容態が急変する。

突然激しく咳き込んだかと思うと、血の塊を吐き出し、ジッター

クが苦しまないように処置を施す前よりも酷い状態に陥ってしまう。ジッタークがそれでも慌てず冷静に対処するが、何を試しても効果が見られない。押しても引いても変わらない容態に、ジッタークの顔がついに焦りに歪んだ。

「カーエス……！」

呟かれた同郷の若い魔導士の名に、ジッタークがリクを診ながらもずっと心の奥に感じ続けていたとみられる不安が滲む。医者は、その不安を患者やその家族に悟られてはならない。それが出来ない状況ということは、それほど状況が切羽詰まっているという事だ。赤の刻が限界だと言ったジッタークという言葉は、善くも悪くも裏切られる事はなかった。

フィラレスは祈りをさらに込めるように、もともと強く握りしめていたリクの右手を全力で握りしめた。その時、彼女はある事実に気付き、顔を上げる。

彼女の手のひらに伝わって来る熱が下がってきている。もともと高熱が出ていたので、それは良い事なのかと想着ってしまったが、熱かった手がどんどん冷たくなって行くにあたり、フィラレスは感じってしまった。

行ってしまう、と。

失われて行く熱は、去り行く彼の存在。そうと決まったわけではないが、それでもフィラレスはそう直感したのだ。

もはや肉体を繋ぎ止めていても、意味はない。それよりも心を繋ぎ止めておかなくては。

それにはどうすればいいか。目を閉じて、フィラレスは自問する。自分にできる事は何か。

答えは、暫くして出てきた。

呼び掛ければいいのだ、“死出の道”にいる彼に。

カーエスとジェシカは廊下をひた走る。もう邪魔は入らなかったが、あちらこちらに配置されている魔導士達は嫌でも目に入る。カーエスの魔導学校の生徒として研究所で過ごした時間は八年以上、と長い部類に入るものだ。しかし、この状態が何を表しているのかさっぱり分からなかった。魔導士の一人を掴まえて問いただしてやりたい気もするが、今は時間がない。

否、できるなら足を止めたい気分だった。先ほど、絶望に足を止めてしまったジェシカを叱咤したカーエスだったが、リクが死んでいるところは想像出来ないものの、理性でどうやってジッタークの告げた時刻である赤の刻を超えて生きていられるのか全く分からない。想像が付かないだけに、現実にそれを見るのが怖かった。

できるのはただ願う事、祈る事、奇跡が起こる事に賭けて、自分達の役目を果たす事。

既に赤の刻を過ぎている今、どんな状況であれ、医務室の面々は自分達の帰りをまつているのだろう。否、その前にこの研究所の異様な雰囲気の中で医務室は無事なのだろうか。対集団戦に強いと思われるコーダはとっくに帰っているはずで、攻め込まれても戦闘力が足りないという事はないだろうが、それでも戦闘の影響で治療に支障が出ているという事はある。

(何でこんな事になってるんやろ……)

カーエスは心の中で自問した。リクはただ、夢を果たす為の情報を得ようとエンペルファータに寄つたに過ぎない。それなのに何故命を狙われたりしなければならぬのだろう。誰に迷惑を掛けるでもなく、ただ真直ぐに夢を目指しているだけの男なのに。何故、夢に挑む前にもかかわらず命を落とさなければならぬのだ。

夢に挑む途中で果てるなら本望というものだが、それも出来ないのは端から見ている自分でも納得が出来ない。

結果の事など知らないが、挑ませるくらいはさせてやりたい。

それに、フィラレスの事もある。あれだけ純粋な気持ちを抱いているのだ。リクが死んでしまっていたら、どれだけ悲しんでいる事か。彼が、現実に見るのが一番辛いのは彼女の嘆きだ。“滅びの魔力”という厄介なものを保持しているが為に今まで絶望の中にいたのが、やっと最近生きる喜びを見出してきたところだったのに。今度また絶望に落ちたらもう這い上がって来られないかもしれない。

(こんだけ死んだらあかん理由があるんや……ここは生きとこつや、リク)

生きているのかどうかも分からない夢見る青年魔導士に、心の中で語り掛ける。初めは気に喰わない男だったが、今は素直にリクという人間を認められている。それは自分でも不思議な感情で、劣等感を抱いているわけでも、卑屈になっっているわけでもなく、ただ純粹に信じている。

最後の角が見えてきた。ここを曲がれば視界に医務室が入る。一歩ごとの振動が直接響いているように、激しく鼓動した。

ふと、その医務室の方から何かが聞こえてきた。

(……………笛の音……………フィリー?)

繊細でいて良く通る、透き通った笛の音。あまり吹くのを聞いた事はないが、初めてそれを聞いた時には正直に感動してしまった音を聞き違えるはずがない。

その音に、思わず足を止め、ジェシカと顔を見合わせる。

まさか、鎮魂の曲ではないかと思い、また走り出しながらも耳を傾けるが、どうもそういう感じの曲ではないようだ。

優しさと暖かさに溢れた、言うなれば母のような慈愛に満ちた曲。安らかな眠りを願う曲というより、爽やかな目覚めを誘う曲。

角を曲がると、医務室の外にはミルドが立っていた。足音で気が付いたのだろうか、角を曲がった瞬間に、ミルドが彼等の方に顔を向ける。そして、ミルドからも彼等に歩み寄ってきた。

「カーエス君！ ジェシカさん！」

名前を呼ぶが、後の言葉が続かない。きっと言う事が色々あり過ぎて、どれから話そうか迷っているのだろう。そこで、それを助ける為かカーエスが質問をする。

「リクは……………？」

その質問に、ミルドは力強く頷いて答えた。

「まだ、生きてるよ。大丈夫」

その答えに、カーエスとジェシカが顔を見合わせる。
お互い、思わず笑みが零こぼれてしまう。

しかしその笑みはすぐに影を潜めた。

「でも、どうやって……？」

折角生きていたのだから、疑う必要もないのだが、やはり気になる。ここに来る間、どうしても絶望感が振り払えなかったのは、リクが赤の刻を過ぎても生きていられる、という根拠がどうしても思い付かなかったからだ。

今度の質問に、ミルドは興奮したような、それでいて不可解そうな、とにかく複雑な苦笑と共に答えた。

「まあ、見れば分かるよ」

そう言って二人を医務室の扉の前に導いた。ミルドはタイミングを計って開けてやろうとしているのか、ドアの取っ手を握って待っている。

二人がドアの前に並ぶとミルドは、力強く頷うなずいてみせると、ドアの取っ手を回し、ゆっくりと開けた。

ドアと枠に隙間が出来た瞬間、先ほどから途切れることなく続いているフィラレスの笛の音が一掃大きく、強く、そして優しく二人の鼓膜を揺する。

その調べはリクの目覚めを願うと共に、二人の帰還を祝福しているように聞こえた。

33 『夢を繋ぐ魔法』

遠くに遊びに行つて、帰り道が分からなくなったことがある。
一人、知らない道に立ち尽くしていよいよ泣きそうになった時、
母さんが俺を見つけてくれたんだ。

やっと見つけた。

こんなところまで遊びに来たことを怒るでもなく、
母さんは優しく微笑んで俺と手を繋いでくれた。

さあ、帰ろうか

帰り道で母さんはずっと歌っていた。
その歌は繋いだ手と同じように、暖かくて、やさしくて、
それはかなり昔の事だけど、今でもはっきりと俺の耳に残ってい
る。

歌が聞こえる。

自分を包み込むような、暖かく優しい歌が。
流されている間ずっと流れに逆らって泳ぎ続け、心身疲れ果てて
いたリクは、ふと自分の手足が止まっていることに気がついた。“
死出の道”にいたはずのリクは現在、今までに感じたことのないよ
うな明るい光の中に身を包まれている。

“死出の道”の川は未だリクの周りで激しく流れている。しかし
ながら、その流れが彼を押しながすことはない。彼を包んだ光が、
その圧力を全て受け流しているらしい。

彼は完全に今まで感じていた苦しみの一切が取り除かれて、今感じている心地よさに心身をゆだね、そして聞こえる歌に耳を傾けながら、ただ流れの中にたゆたっていた。

満天に散らばる星の中に　ひととき強く光るあなたの夢
幾千の海の中に埋もれても　一目で見つけられるその輝き

混じり気の無い眩めまさに照らされて　私の星も瞬またたきをはじめた

感謝しています　出会えた奇跡に
苦しみに沈んでいた私を　優しく見つめてくれた瞳に

さあ目を覚まして　あなたという星はまだ輝ける
あなたが光を与えた星達が　あなたを照らし返すから

足早に流れる時の中にて　曲がること無く歩むあなたの夢
ときどき機運を掴み損ねても　決して振り返らないその生き方

立ち止まらない足音に急かされて　私の時もまた流れはじめた

感謝しています　暖かい笑顔に
悲しみに流れていた私を　ふわりと包んでくれた心に

さあ目を覚まして　あなたが行く時はまだ止まらない
あなたの後に続いてくる時達が　あなたの背を押して行くから

聞いたこともないはずの声だった。しかしリクは優しく、そしてどこまでも強いその歌声が、誰のものであるかをハッキリと認識している。

(フィリー……)

自分を想ってくれている少女。罪と恋の板挟みになって苦しんでいる少女。どれだけ強大な魔力を持っていても、弱々しいイメージしか無かったフィラレスだったが、歌から伝わって来る彼女の強さは、それを完全に覆すものだった。

リクは“死出の道”と死の世界の境界線が思いのほか近いのを感じた。よく分からないが、このフィラレスの力がなければ、おそらく激流に流されて、その境目を踏み越えてしまうところだった。

歌われている通り、彼の夢はまだ終わっていない。フィラレスがその夢を繋げてくれた。

その想いは、無駄には出来ない。

医務室への扉を抜けたカーエス達の目の前に現れた光景は、ミルドがわざわざ百分は一見にしかずと、わざわざ持って回ったような言い方をしていたことを十分すぎるほどに納得させるものだった。彼は好きでそのような言い方をしたわけではない。単にその光景を言い表す言葉が見つからなかったのだ。

その光景は光に満ちていた。

目を閉じ、今まで見せたことのないような、優しい微笑みを口元に浮かべ、横笛を吹き続けるフィラレスから幾筋もの光の帯がにじみ出るようにゆっくりと伸び、リクの身体を包んでいる。

滅びの名を与えられているはずの魔力だったが、それに触れられたリクが傷付くことは無い。その光の帯たちは愛し気にリクの身体を撫で、むしろ先ほどまでリクを苦しめていた苦痛を全て取り除いているらしい。今のリクの表情ともすれば死んでしまっているのでは無いかと思ってしまうほど安らかだ。

「もうアカンと思たよ」と、扉の傍で未だリクとフィラレスの間に繰り広がる幻想的な光景に魅入っていたらしいジツタークが脱力した様子でぼそりと言った。「そんな時に、あの嬢ちゃんが笛を吹きはじめよってな。声が出んさかい、ああやって必死で“死出の道”からリクを呼び止めようとしたんやろうな」

「そんな強い思いに“滅びの魔力”が応えたと？」

そうジェシカが続けて問うと、それにはミルドが答えた。

「そうとしか説明が付かないよ。いくら“滅びの魔力”と言ってもフィラレスの魔力だ。元々操ろうと思えば、操れないことも無いんだ。それでも、今までどんなに強く傷つけたくないと思っても“滅びの魔力”は制御出来なかったのに……。よほど純粋にリク君を助けたいと願ってるんだらうね」

そう語るミルドの顔は嬉しそうだ。元々、彼の“滅びの魔力”の研究は強力すぎる魔力に困っているフィラレスの為に、何か制御できる方法は無いか、と魔導制御研究の第一人者であるミルドが始めた研究である。その問題が解消する見込みが付いてほっとしたのだらう。

続けて、ミルドは思い出したようにカーエスに尋ねた。

「そういえば、ティタは？　一緒じゃなかったのかい？」

聞かれたカーエスが驚きの表情をミルドに返す。

「え？　帰つとらんですか？　足手纏あしでまといになるからって図書館でティタはんは先に帰ったんですけど」

聞き返されたミルドの顔色が蒼白になった。その理由に心当たるものがカーエスにはあつた。

「ひよつとしたら、あの魔導士連中に捕まえられたりしとるんかもしれへんなあ。コーダ、あのそこらにうるついとる魔導士連中の事何か知らへん？」

「ああ、まだ伝えてやせんでしたっけね。って言うかあの白の刻の放送聞いてなかったんすか」

「白の刻？　おそらく“忘却の間”への秘密通路に入った頃だろうな」

秘密の通路だけあつて、伝声器の声も届かなかったのだ、とコーダも納得すると魔導研究所開発部長のディオスカスの起こしたクーデターについて話した。

「へえ、そんなエライ事が起こつたんやな。でも、何で俺らがここに帰つてこようとすんのを邪魔されたんやろ？」

「それは、ダクレー＝バルドーもディオスカス＝シクトの計画に一枚噛んでたからでやしようね。ダクレー＝バルドーが兄さんと何かを話しとつたことは確実スから、口封じの為に目覚まされたら困るんでやしよう」

コーダの冷静な解析も、ミルドの耳には届いていないようだった。しきりに扉の方に目をやっては何かを言いたそうにしている。

彼の分析が終わったのを見計らって、ミルドは勇気を振り絞るようにして言った。

「僕、テイタを探しに行つてきます」

「いや、探しにいくつたつて、ミルドはんは魔導士でも何でもないんやから危険ちやいますかって……ちよ、ミルドはんっ!？」と、カーエスが反論するが、ミルドはそれを言い終えるか終えないかという内に踵を返して、医務室を飛び出して行つてしまった。

「仕方がないな。私が彼についていこう」

溜息まじりにジェシカが動こうとするのを、コーダが止める。

「まあ、放つて置いてても大丈夫だと思いやすよ。クーデターは戦争じゃないんすし。見つかつてても精々眠らされるだけでやしよう。それより、ディオスカスシクトがこの妨害に出て来る事もあり得るんで、あまり戦力を拡散させない方がいいんじゃないすかね」

「でも……」と、カーエスが食い下がろうとするが、コーダの言い分にも納得できるものがあつたので、結局は引き下がった。

「さて、アレもいつまでもつか分からんし、とつとと始めよか」と、いろいろなものを動かし、スペースを作っていたジッタークがカーエス達に手を差し伸べた。何を求めているのかを察し、ジェシカが“忘却の間”から取ってきた“圧縮卵”をジッタークの手のにせる。ジッタークは感慨深げな目でその卵を目の前にかかげると、その圧縮を解く為の合い言葉を唱えた。

「血の上に成り立つ命”よ、こじこじ」

すると、“卵”がかつ、と一瞬、眩い閃光を放ったかと思うと、ジッタークの足下に一冊のノートといくつかの魔導具らしき物が姿を現わした。

「血の上に成り立つ命……スか。それが“どんな病気、怪我でも治す魔法”を封印した理由でヤスカ？」

「まあな」と、ジッタークが魔力を通し易い魔石の屑くずからつくられたチヨークで床に魔法陣を描きながら答える。そして脇で見守っていた魔導医師に指示をした。「クロニカ二瓶にヴアム処理。ハスタ―魔素は粉末にして一瓶分のジェルに融かす。それらの薬をクオンと混ぜるんや。魔法物質の配置はあんさんの方が詳しいやろ」
「で、でもクオンなんてここにはありませんよ？」

次々と上げられて行く魔法物質の名の一つに魔導医師が反応した。クオンは別に珍しい物質ではないが、需要が極端に低い物である為、置いてあるところがなく、入手が非常に難しいのだ。

「さつきその便利屋に持ってきてもらたモンの中にトウワがある。それをヨート第三式分解すれば抽出できる。他に質問は？」

「ヴアム処理の度数は？」

「247度きつかしや。頼むで」

ジッタークの声に、魔導医師は任せてくれとばかりに力強く頷うなずくと、助手を伴って医務室の奥に消えていく。少しばかり興奮気味なのは、気負いと、魔導医師であれば一度は興味を持つ“どんな病気、怪我でも治す魔法”にたずさわれる喜びからだろう。

「なあ、おっちゃん。そろそろ教えたってくれへんか？ “どんな

病気、怪我でも治す魔法”ってどんな理論から成り立ってるんや？」

それはそもそもあり得ないことと言われている。病にも怪我にも種類はある。それによって施せる適切な処置とは全く違って来るものだ。極端な話、病と怪我の治療法は全く相容れない。そういった適切な処置を施すのに必要な知識が膨大だからこそ、医師という専門の職業があり、外科、内科と別れているのだ。

「……言つてまえば簡単な話なんや」と、複雑な魔法陣を迷いのない手付きで描きながらジッタークは答えた。「生まれつきの持病やない限り、誰かて病気に掛かる前は健康や。だから、患者の身体の間を戻し、その時の状態に戻すだけのこっちゃ」

「それって……」

ジッタークの言葉に、その場に居た全員の表情が固まった。患者の身体の間を戻す。これは魔導医学の分野ではない。ファトルエルでカーエスが使った《三倍速》と同じ、時空魔法学の分野だ。夢のまた夢、または限りなく不可能に近いと言われる時を操る魔法。

その疑問に答えるように、ジッタークは自嘲するような笑みを顔に浮かべて続けた。

「不可能に限りのう近いモンを可能にするんや。タダでできるわけやない。便利屋、アレをみんなに見せたれや」

ジッタークの指示に、コーダは自分が集めてきた荷物の中から、一瓶の液体を取り出してみせた。その中身は赤黒く、医学知識のないカーエス達にも見覚えのある色だった。

「……それ血イか？」

「せや。おんどれらもよう知つとるダクレーちゅう奴のな。さつき
その便利屋に頼んで採ってきてもろうたんや」

“血の上に成り立つ命”。
さきほど、“卵”の圧縮を解くのにつかつた合い言葉が脳裏に蘇
る。

「普通の血液では上手くいかん。八刻（二十四時間）以内に死んだ
人間の血液でないとな」

それが、ジッタークとその師が生み出した万能治療魔法を封印し
た理由。

誰もが納得した。

「どないに試しても、これは抜かされへんかつた。今回は八刻も戻
せば十分やけど、戻す時間の長さに比例した量の血が要る。一年戻
そう思たら、そやな、ざつと五十人からの死体から血の一滴も残さ
ず搾り取らなあかん。たつた一人の命を助ける為にや」

犠牲は人を救う方法にはならない、とジッタークの師は最後に咳
くように漏らした。

そんな非人道的な魔法が認められるはずがない、と彼等はよく分
かっていたが、広い世の中には狂った人間も存在する。自分の愛す
る存在を救う為に、他の百の命を犠牲にしてもいい、と。

「言葉面ほど便利な魔法やないてそういう意味やつたんか」と、カ
ーエスが禁術破りに出発する直前に聞いたジッタークの言葉を振り
返った。

同時に、ジッタークはその禁術を使う為の条件が揃っていると

言っていた。

今回のリクの場合はたまたま、戻す時間が少なく済んだこと、死者の血液が必要になった段階ですでにダクレーという死者が出ていたこと、という二つの偶然が重なり、非人道的な行い抜きに万能治療魔法を行使できる条件が整っていたのだ。

「あの、ちょっと聞いても良いですか？」

「何や？」

「その魔法つて兄さんの中の時間を巻き戻すんよな？ そしたら、時間が経ったら同じ状態に戻るって事はないんすか？」

ジッタークは首を横に降って答えた。

「あらへんよ。この方法は魔導列車が一度分岐点の後ろまで後退して、違うレールに進むと同じことやからな。もう一回毒を煽らん限り、この状態に戻ることはない。これが病気やった場合は発病するかせえへんかは運次第になるけどな」

「ほな、記憶は？」

今度はカーエスの質問だったが、それにもジッタークは首を降る。

「戻らんはずや。肉体と精神は別の時間が流れとるっていう定説を鵜呑みにすればの話やけど。そうでないと説明が付かんつちゆう事例も数多いし、ほぼ確実やな。他に質問は？」

「私に魔導医学の知識はないので余計なことかもしれませんが、リク様の身体は現在魔法を受け付ける状態ではないと聞きました。この“身体の時を戻す魔法”を受けて大丈夫なのですか？」

今リクの身体を蝕んでいる魔法毒は、魔導に反応して毒を受けたものを苦しめる性質を持っている。それによって、魔法でしか取り

除けない魔法毒の治療が不可能な状況になっているわけではないが、今、ジッタークが行おうとしていることも特殊とはいえ結局は魔法に他ならない。

「余計なところどころやない。俺が生存確率はよくて二割うちゆうたんはそれがあるからや。苦しんで死ぬ前に毒を飲んだ時点の前まで時間が戻れば助かる、そうでなければ死ぬ。ほとんどギャンブルやな。勝ってもほとんど見返りのない」

そう言つて、ジッタークは苦笑する。しかし、放つて置いてもなくなる命だ。賭けるしか選択肢はない。賭けて勝つしかないのだ。

魔法陣を描き終えたらしいジッタークは立ち上がって各々の面々を見回して続けた。

「でもな、今回はあんまり心配ないんじゃないかと思う」と、ジッタークは今も笛を吹き続けているフィラレスを指して言った。

そういえば、フィラレスの身体から出ている幾筋もの光の帯も、魔力のはずだ。それでもリクは苦しんでいる様子がない。

「多分、嬢ちゃんいちゃの魔力が強力すぎて、魔法毒が与える苦しみいちゃが癒しに追い付かんのやな。あれと平行してやればかなりの確率で生存が期待できる」

言葉と共にジッタークの顔に浮かぶ笑みには自信が満ちあふれていた。

その時、ジッタークの指示に従って、魔法物質の調合を終えた魔導医師とその助手が彼等の元に戻ってきた。

「おーきに」と、三角フラスコの中に入っている物質を目の前に掲げて出来を確かめる。「カーエス、便利屋、リクの身体をベッドに

移してんか」

ジッタークの指示に、カーエスとコーダが了解、と頷いてリクに駆け寄るが、ふと止まる。

「動かしてもええんかな？ コレ」

「その前に触れるんすか？ コレ」

立ち止まった二人の目の前には、フィラレスから発生している光の帯達に包まれているリクだ。彼等が全く動かなかつたから、今までずっとこの状態を保持できていたものの、動かしただ瞬間に集中が乱れて、“滅びの魔力”が暴走するかもしれない。

その前に他の者が、その光に触れられるのかどうかさえ定かではない。

「他に方法ないんや。さっさとやったれ」と、後ろからジッタークが叱咤する。「大丈夫、きつと、いや多分、おそらく何とかなるはずや」

ちらりと後ろを振り返ったカーエス達がたちまちその顔を胡散臭げに歪めた。

「……そういう保証は、まず物陰から出てきてから言うてくれ」

「それに保証するならもつと断定的に言うて欲しいもんすね」

その視線の先では、薬品棚の後ろに隠れ、避難体勢を整えたジッタークと魔導医師達がいた。

溜息を付いてリクの方に向き直り、カーエスが言った。

「まあ、やるしか選択肢はないわな」

「じゃあ、一、二の三で一気に入きやしょうか」
「よっしゃ。三と同時にやで、三で一拍おいていくんとちゃうからな」

念を入れて確認する二人は、それぞれリクの足と肩を持ち上げられる位置で身構える。

「一、」

「二の」

「三ッ！」

二人の身体が同時に動き、ベッドに寝ているリクに手を出す。途中で、フィラレスの魔力の光に触れたが、それは彼等の身体を傷つけることはなかった。リクの身体を持ち上げ、魔法陣の上に移す時、光の帯達もそれに付いて来る。

笛の演奏に集中して、他の事は全く感じられないはずのフィラレスだったが、自分と、リクとを繋ぐ光の帯に引かれるように立ち上がり、自らも魔法陣の傍に立ち、演奏を続ける。

「うっむ……」と、カーエスがそれを見て複雑そうな顔をする。フィラレスの恋を応援するとは決めたものの、それでも彼自身の気持ちも雲散霧消したわけではない。こうして自分が好いている少女の、他の男に対する想いの強さを見せつけられると、やはり心が曇る。

「ま、よかつたじゃないスか。心配したことも全く起こらなかつたんスから」と、彼の心中を察したのか、コーダがカーエスの肩を叩く。

「よっしゃ。ほな、本格的に始めよか」と、ジッタークが隠れていた物陰から姿を現わした。右手には、杖が握られている。隠れてい

る間に“圧縮卵”に収まっていた魔導具のいくつかを組み立てたものらしい。杖頭に嵌まっていた球状の容器の中で、魔導医師に調査してもらった魔法物質が揺れている。

ジッタークは自分の来ている白衣を脱ぐと、代わりに魔導具の中にあつた長衣を羽織り、様々な装飾品を身に着けた。

そして、ふと自分を見ている四人の目を見て、ジッタークは苦笑して言った。

「なんせ時を操るほどの魔法やかな、ワシの魔導制御力じゃぜんぜん足らん。魔法陣を作った上に、この魔法の為だけに作った魔導具を山ほど身に付けなあかんねん」と、手を広げて自分の仰々しい姿を見せる。

その時、医務室のドアがやや乱暴にノックされた。

「中にいる者に告ぐ！ 我々は魔導士団の者だ。君たちは既に包囲されている！ 大人しく扉を開け、全員投降せよ！ 我々は虐殺を行っているのではないが、手向かうならばそれ相応の対応を行う権限を与えられている！ 抵抗は無駄だ！」

その声に、全員がその扉に目を向け、一様に眉をしかめた。

「全くもう、これからつちゆう時に……。おっちゃん、あいつらは俺らが抑えるから、おっちゃんはリクを頼むで」

「よっしゃ。そっちも気い付けや」

カーエスはジッタークと頷きあい、次いでジェシカ、コーダに目配せをすると、彼等と連れ立って扉に歩み寄る。

扉を目の前に、三人並び、再びカーエスがジェシカとコーダに頷いてみせると、扉のノブに手を掛け、勢いよく開けた。

扉の向こうには見える範囲だけで五人、魔導兵器で武装した魔導士達が待ち構えており、その中の二人が医務室へと突撃を試みたが、カーエスの防御魔法に守られたジェシカが迎え撃つことで、これを押し返し、カーエス達が扉の外に出る。

ジッタークは、カーエス達が出るのを見届けた後、にわかに顔を真剣なものに変え、杖を構えて魔法陣に向かい合った。杖を両手で正面に持って構えると、目を閉じ、大きく息を吸って呪文の詠唱を始めた。

「生きとし生けるもの、命持たぬもの、世界、ありとあらゆるものに流れる時」

詠唱の節々で、ジッタークはとん、とん、とん、と魔法陣の各所を叩いて行く。触れた場所から魔力が流れ、光が灯る。

「淀むことなく永遠を流れ、変化を呼ぶ時。しかし時それ自体は変わることを能^{あた}わらず」

次に、ジッタークは魔法陣上に描かれた文字をなぞるように杖を動かす。やはり、なぞられた部分から、線が光を帯びて行く。

「されど敢えて願わん。その者リク＝エールの時間の逆行を、死せる者の血で持つて！」

最後に、ジッタークが魔法陣の外側の円をなぞると、魔法陣の全ての線が強く輝いた。

そして彼はその魔法の名で詠唱を締めくくる。

「《巻き戻し》」

歌に引かれ、光に導かれて、リクは、“死出の道”の激流を遡上そじょうするように進んでいた。

すると、突然リクの前方から光が走り、目の前がフラッシュする。

「……っ!？」

その眩さに閉じていた目を開くと、川の流れがピタツと止まっている。流れが無くなったわけではない。時を止めたかのように動かなくなったのだ。

不思議に思いながら、前進を再開してそれほどもしない内にもう一度閃光が走った。

次の瞬間、川が逆流を始める。

何事だ、と思う暇もなく、光に庇護されて流されることがなかったはずのリクの身体はその逆流に飲まれた。

方向は生の世界なので、もがく必要はなかったのだが、流れに飲まれ、渦にさらわれるうちに、自分がどの方向を向いているのかわからない。息も突然出来なくなり、彼の脳内はかなりのパニックに陥っている。

混乱の内、意識が遠ざかって行く中、リクは最後までフィラレスの歌を聞いていた。

決して折れない志に誘われて 私の夢も形成しはじめた

感謝しています 強い導きに

闇の中に迷っていた私に 希望を示してくれた光に

さあ目を覚まして あなたの見る夢はまだ終わらない

あなたが私達にくれた夢達が あなたを待ち続けるから

34 『陽動』

別の問題を発生させる事で、本当の問題を覆い隠す。
それが陽動。

この手の作戦の存在は教えてくれる。
人がいかに目に見える問題ばかりに気をとられているのかということ。

コツ、コツ、コツ、と一人一人の足音が大きく響く螺旋階段をアルムス達はひたすら下りていく。

この螺旋階段は“英知の宝珠”^{ほつじゆ}の部屋から、更に下に向かって伸びていたものだ。公にされているものではなく、その場所は代々魔導研究所の所長しか知ることはない。言うなれば、魔導研究所最大の秘め事。

「もうそろそろ三分刻（一時間）か……」

この螺旋階段を進みはじめて、何度目かで懐中時計を盗み見ていたアルムスが、前を歩くディオスカスの声に身を竦^{すく}ませる。彼に目をやるが、彼は前を向いたまま、手に入れたばかりの“英知の宝珠”を手に弄んでいるだけだ。

今、ディオスカスが言ったのは、先ほど話題になっていたリク・エールの件のことだろう。そのヤマと見られる赤の刻（午後三時）から三分刻経ったという意味だ。

「どうやら彼等は間に合ったようで。赤の刻自体には間に合わなか

「だが、“滅びの魔力”の少女がその魔力で持って消え行く命を繋ぎ止めていたらしい」

ディオスカスは、小型の伝声器を使って、階上の様子の報告を受けているらしい。アルムスが傍聴するのを嫌ったのか、それを耳に直接つけ、アルムスには聞こえないようにしていた。

「“滅びの魔力”が人を癒すなど考えたこともなかった。これは実に驚くべきことだ」

自分の策が失敗したというのに、ディオスカスの声からはあまり落胆が感じられない。むしろ、予想を上回り続ける相手を愉快にさえ思っているようだ。

「利用価値が高まるから、か？」
「単刀直入に言うと」

アルムスの訝し気な問いに、ディオスカスがしれつと答える。“英知の宝珠”に続き、“滅びの魔力”をも狙っていることを隠そうともしない。

「しかし手に入れるのは難しいのではないか？ 彼女は今一人ではない。今、彼女の傍にはカーエスⅡルジュリスをはじめとして優秀な魔導士が付いている」

「そう、それが一番の問題だった」と、ディオスカスはふと足を止め、階段の二段ほど上にいるアルムスを見上げる。その表情は種明かしをする策士のような喜びに満ちている。

「色々と厄介な問題点はあったが、誤算のお陰で一番確実な方法をとることが出来た」

「どづいつ意味だ？」

思わず聞き返すアルムスに、ディオスカスは不敵な笑いを浮かべ、再び身を翻して全身を開始しはじめた。

「そろそろ彼等もその意味を知る頃だろう」

「《鷲掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせつ
！」

「ここに敷かれしは《水の陣》、熱気は決して入るべからず！」

カーエスの手のひらから放たれた炎が、敵の張った障壁に阻まれ
て散る。

十分な広さがある為、コーダは《シツカーリド》を召喚している
のだが、敵との距離が遠すぎてなかなか攻撃が出来ない。それはジ
エシカも同じ事だった。

「いつそ突撃してくれれば、こちらも手の打ちようがあるというも
のを！」

「かえって好都合じゃないスか？ こっちは時間を稼がなくちゃい
けないんスし」

ジェシカが苛立ちまぎれに吐き捨てた言葉に、“対集団戦闘モ
ド”《シツカーリド》の御者席からコーダが応える。

「にしても戦力バランスが悪いなあ」と、カーエスが《風玉》で敵を牽制しながらばやくように言った。

確かに遠距離攻撃が得意な魔導士は三人の中でカーエスのみである、遠巻きに彼等を取り囲んでいる魔導士達を先ほどから相手にしているのは実質カーエスのみだった。

しかも、強力な魔導兵器を装備していたり、実際に魔導のレベルが高い魔導士がいたり、さきほどカーエスとジェシカが医務室に戻ってくる時に邪魔をしてきたのとは全く質が違う。ジェシカもコーダも医務室の扉を離れ、敵に向かって行きたいところだったが、その間に残りの魔導士達が殺到されるとカーエス一人ではさばききれなくなるのだ。

だから、ジェシカもコーダも攻撃には参加せず、相手の打ってきた魔法を槍で払うなり、甲殻に守られたサソリのハサミで受けるなりしている。

できれば、全員倒してしまいたいところだった。

時間を稼ぐといっても、いつまでこれが続けばいいのか分からない。仮に、ジッタークの“身体の時を戻す魔法”が完成しても、リクが目覚めるまでは医務室に足を踏み入れさせるわけには行かない。

それならば、一度全員倒して、再び敵の手が伸びる前にリクをどこか安全な場所に移動させてしまいたい。

守るだけでは余裕があるが、なかなか攻められない現状にカーエスは焦る。

(しゃーない、多少無理してでも大きな魔法を使うか)

カーエスは敵を見据え、脇を守る二人に注意を促して呪文の詠唱をはじめた。

「大地よ、我が魔力に育まれよ！ 若草よ、萌えよ！ 花よ、咲き乱れよ！ 樹木よ、繁れ！ 高く広く伸び広がりて、あの空を覆い隠せ！ そしてここに生まれよ、多くの命をその手に抱く《恵みの森林》！」

詠唱の声に応えてカーエス達の足下が光りはじめ、そこから驚くべき速さで芽が出て、あっという間に立派な木々になる。

突如として医務室の前に出現した森に、カーエス達を囲む魔導士達にたじろぎを見せた。この小さな森は医務室のドアをほぼ完全にカバーしているので、魔導士達に安易に攻め込まれることはない。

しかし魔導士達の動揺を誘えたのはほんの一瞬のことだった。彼等は頷きあう様子を見せると、魔導兵器を持つものはそれを構えて炎を発射し、持っていないものは炎属性の魔法を使うべく詠唱をはじめた。

彼等の放った炎はカーエス達のいる《恵みの森林》に食らい付くように燃え移り、ことさら激しく燃えはじめた。

「まあ、冷静な対応だな」

燃え盛る木々の中に立っているカーエスは、周囲の状況など目に入らないがごとく平静を保っている。

口元には、してやったりと言いたげな不敵な笑みさえ浮かぶ。

「でも、アンタらがこうする事を俺が読んでへんと思わんのか？ 猛る炎よ、燃え盛れ！ 油を注がれるがごとく、どこまでも伸ばせ、その手を、その背を！ 汝は地の底に渦巻く焰！ 冷気に怯まず、水をも焦がす！ この場に形作れ、悪しき心の者達を畏れさせる《焦熱地獄》を！」

一瞬、《恵みの森林》を貪るむように燃えていた炎の動きが止まった。そして次の瞬間、一層激しく燃えはじめ、木々の全くないはずの魔導士達の方に燃え広がりはじめ。それはまるで生きているかのように、魔導士達に襲い掛かる。

炎は結構な範囲に広がっていたはずの魔導士達全てを包み込み、その熱で持つて責める。身を焦がされる苦痛に、魔導士達から悲鳴が上がり、この場は阿鼻叫喚の、そうまさに地獄と化した。

「て、撤退しろ！」

そんな声が炎の中から上がり、魔導士達は自分にまわりつく炎を必死で振払いながら、散り散りに逃げて行く。

全員逃げた事を確認すると、カーエスは《焦熱地獄》の炎を納めて、片膝を付く。高レベルの魔法を連発したお陰で魔力、精神力を共にかなりすり減らしてしまったのである。

「カーエス、御苦労だった」

「カツコよかったツスよ」

カーエスの傍にいたジェシカとコーダが労いの言葉いらいをかけると、彼は玉の汗を浮かべた顔に照れくさそうな笑みを浮かべる。

が、その直後、彼等の耳に足音が聞こえ、三人は反射的に身構えて臨戦体勢に入る。その視線の先にいたのは、いかにも役人然としたスーツを身に纏いまと、頭から爪の先まで完璧に整えられた格好をした男だった。その唇は堅く引き結ばれ、その双眸そらばなはかなり鋭い。

相手があまりに先ほどの魔導士達と懸け離かれていた事と、たった一人でやってきていることに、カーエス達は思わず緊張を少し緩める。

「貴方はディオスカスの手の者か」

丁寧だが、油断のない口調でジェシカがその男に問う。
答えたのは、その男ではなく、便利屋のコーダだった。

「行政部長のエイスマークシオさんでやスね？」

男、エイスは全く面識のないコーダが自分の名を知っていた事に鋭い双眸を少し広げて驚きを見せたが、答える代わりに、懐から自分の身分を証明する手帳と“鍵”をカーエス達の方に放って寄越す。拾い上げて確認するカーエスに、コーダが説明する。

「元から野心家の気があったディオスカスシクトに対し、エイスさんは保守派の堅物として有名なんス。情報からしても、ディオスカスシクトの一派には数えられていやせん。また、数少ない上級魔導士の一人スから力になってくれるはずでやスよ」

「……そこまで知っているとなると、私が言う事はほとんど無くなってしまうな」

先ほどから発言する機会を伺^{うかが}っていたらしいエイスだったが、彼の言おうとしていた事を、コーダに喋られてしまった為、やや溜息まじりにエイスが口を開いた。

しかし本人からの自己申告ではなく、味方のコーダからの情報であったのが幸いしたのか、カーエスとジェシカは警戒を解いて、彼等に向き合う。

「疑ってしまつて失礼しました。魔導騎士のジェシカランスリアと申します」と、ジェシカが軽くお辞儀をして、謝罪をしながら名乗る。

「いや、この状況では信じるより疑うほうが大事だ。気にしなくて

いい」と、エイスが応じる。今度はコーダの方に視線を送ると、彼はエイスに笑いかけて名乗った。

「便利屋のコーダ」ユージルフと言いやス。以後宜しくよろしく」

「ほんで俺は……」と、カーエスが名乗ろうとすると、エイスがそれを遮った。

「カーエス」ルジュリスだね？ 会ったのは初めてだが、君のことはよく知っている」と、エイスは笑みを返す。だが、直ぐに顔を引き締めて尋ねた。「もう一人、フィラレス」ルクマースはどこだ？ 君達と一緒にいると思っただが」

「医務室の中よ。兄さん……リク」エールに付いてやス」

答えたコーダの口から出たリクの名にエイスが反応した。

「リク」エール……彼はどうなった？ 聞くところによると、ダクレー」バルドーと闘い、殺した方がいいが、本人も重態でここに運び込まれたのだと聞いたが」

「結果は私達にもまだ分かりません」と、ジェシカがいい、今までの事情をかいつまんで説明した。どうせ隠す事でもないのだから、自分が「禁術破り」をしたことまでも。

エイスが反応したのは、フィラレスの“滅びの魔力”が癒しの力を発現した下りだった。

「フィラレス君は大丈夫か？ それだけの力があると分かった今、ディオスカスが狙わないはずがない」

「あ、そういえばそうですね。でも俺らがいるし、諦めてるん違います？ リクの場合は邪魔するだけで殺せるからええけど」

しかし、その隣にいたコーダはカーエスほど、楽観的ではなかつ

た。

先ほどとは一変してその顔を真剣なものに変えて言う。

「さっきの魔導士達、本当に兄さんの治癒を邪魔しにきたんスカね？」

計画は既に実行に移されており、聞いても止められる者がいない今、リクの口を塞ぐ事には何の意味もないはずだ。

リクの治癒への妨害が嘘であるとするならば、あの魔導士達の行動は……

「俺達を彼女から離すための陽動作戦」

「ファイリー……！」

コーダの結論に、カーエスとジェシカの顔から血の気が引く。彼等はいち早く踵を返すと、医務室の扉に飛びついた。必要以上の力を込めてノブを回し、扉を押しあける。

医務室に飛び込んだ彼等の眼前に広がっていたのは、彼等の願望とは全く違った光景だった。

医療用具は床に散らばり、その隅には傷付いたジッタークが倒れている。その傍の魔法陣の中心には気を失ったままのリク。しかしそれ以外に人はいない。魔導医師も、その助手も、そしてファイラスも。

「カ、カーエス」

痛みに震えた声（ふる）がカーエスを呼んだ。カーエスは、ハツとしてジッタークに駆け寄り、魔法で傷を治療してやりながら聞く。

「おつちゃん、何があつたんや？ あの魔導医師は、フィリーはどこやねん!？」

「道理で、医務室の中の様子が詳しく知れた訳だな」

ディオスカスから彼のとつた策を聞いたアルムスが忌々（いまいま）し気に吐き捨てる。

“英知の宝珠”の接続を解いている時に届いた、カーエス達が禁術破りをするに至つた経緯を聞いた時に、いやに詳しいと思つた。医務室は密室のはずだ。正しく管理されている限り、魔導器によって監視されていることもない。ならば最初から答えは一つ。

「あの魔導医師達が貴様の手の者だつたとは」

魔導士達を差し向ける事によつて、カーエス＝ルジュリスなどのあの場にいる戦力は医務室の外に出る事を余儀無くされてしまう。

そして中に残るのは戦闘能力のないジッターク＝フェイスン、眠り続けるリク＝エル、そして標的のフィラレス＝ルクマースのみ。そんな状況になつてしまえば、隙を見てジッタークを倒し、フィラレスをさらつて裏口などから出てしまえばいい。

「お分かりいただけただけようで」と、ディオスカスはアルムスが齒噛みするのを勝ち誇つた顔を向けて見やる。

ダクレーが死んだお陰で、ディオスカスの“滅びの魔力”の入手するための計画を狂わされたはずだった。しかしリクが倒れた為、その治療を邪魔するというカモフラージュが出来た。それを利用しての陽動作戦はダクレーに任せるより遙かに成功確率が高かったのだ、かえって彼にとってはいい方向に転がってしまった事になる。

「“滅びの魔力”は一足先にエンペルファータの外へと運び出すように指示してある。これで“英知の宝珠”と合わせて二つ。残るは一つだけ」

ディオスカスが言葉を切ったのと同様、アルムス達が下りていた階段も途切れ、彼等は目的地に付いた。真つ暗なその部屋に入ると、ディオスカスは守備よくスイッチを見つけ、明かりを点ける。

光に照らし出された“それ”を目の当たりにし、アルムスは分かっていた事ながら、目を見張った。巨大な半球形をした、他の魔導器とは一線を画す存在感。その正体はおそらく“それ”から発せられる圧倒的な魔力。

「“ラスファクト” 《テンプファリオ》のみ」

その強大な魔力の存在感に、やや恍惚こうごうとした表情を浮かべ、ディオスカスは“それ”を見上げながら歩み寄る。

都市対象万能障壁構成魔導器“セーリア”を。

35 『魔導都市が秘めし皮肉』

剣は斬るものであり、突くもの。
盾は防ぐものであり、護るもの。

いかに優秀な武具とはいえ、使わないことに越したことはない。
例え護りきれぬ絶大な力を持っていても、
その力が危険を呼ぶなど、本末転倒も甚だしい。
はなはだ

ディオスカスは手懐けた猛獣を愛でるように、“セーリア”の表面を撫でる。その周りには、切れ目が入っており、その部分が扉のように開く事を示している。

「他の大都市にも“セーリア”は設置されているが、エンペルファータのものは特別だ。元からの動力が違う。魔石中の魔石。下手をすると全ての魔石鉱山を足しても“これ”一つには及ばないかもしれない」

ディオスカスの口から紡がれて行く言葉を、アルムスは黙って聞いていた。

エンペルファータ最大の秘め事。どうあっても一般には公開出来ない事実。

「“ラスファクト”こそが、このエンペルファータの“セーリア”の動力」

星の産物と呼ばれる“ラスファクト”だからこそ、エンペルファ

「一タ建造以来、二百日置きにこの地を襲うようになった大災厄を長年退けてこられるほどの魔力を得られた。」

「しかし、今までの記録を見れば“ラスファクト”と大災厄には密接な関係がある事は明らかだ」

エンペルファータを大災厄が襲うようになったのも魔導都市が機能しはじめ、“セーリア”が稼動しはじめた頃と重なる。

“セーリア”の動力に“ラスファクト”が使われている事実を、知識のある者が知れば、その者達が導き出す答えは一つしかないだろう。

「この“セーリア”の“ラスファクト”があので二百日置きの大災厄を呼び寄せている」

それはほぼ確信されている事だった。この“ラスファクト”が放つ魔力と、エンペルファータを襲う大災厄の魔力の性質は一致している。だからこそ、この中に収められている“ラスファクト”にも、大災厄のグランクリーチャーと同じ《テンプファリオ》の名が与えられている。

それならば、“ラスファクト”をどこかへ運んでしまえばいいのだろうが、誰もそうしようとする者はいなかった。

“ラスファクト”を運び、“セーリア”の護りを失ったエンペルファータを、《テンプファリオ》が襲わない可能性はどこにもないからだ。だから、この事実を知った者たちは、誰一人としてこの問題に関して行動を起こす事はなかった。

クク、と噛み殺した笑いをディオスカスは漏らした。

「これは今まで聞いた中でも一番に痛烈な皮肉だ。護るための殻からな

のに、殻自体が危険を呼んでいる」

この言葉に聞いてだけは、全くだ、とアルムスは内心で同意する。ディオスカスは“セーリア”を離れ、アルムスの元に歩み寄る。アルムスはこの次の彼の言葉を正確に予想する事が出来た。

「さて、“ラスファクト”を“セーリア”から取り出していただくか」

《巻き戻し》が成功に終わった後、フィラレスが気を失った事。途端に魔導医師と助手がジッタークを殴り倒した事。そして、抵抗出来ないフィラレスを何か箱のようなものに押し込め、裏口から逃走した事。

ジッタークが語り終える頃には、全員の表情から血の気が引いていた。

「医務室に手を出さないと思っていたら……」

「……初めからディオスカスの手の中にあったんやな」

しかし呆然としていたのも束の間、コーダが一步進み出て言った。

「俺、フィリーさんを追いやス」

「でも、追うと言つてもどこに行つたのか分からないのだぞ？」

裏口から逃走したとは言つても、その先の道は沢山あるので追え

るはずもない。

しかしコーダは小さく首を振って答えた。

「情報によると、奴らは魔導レーザー開発の班に仲間を潜り込ませているらしいんす。おそらくそれでエンペルファータを脱出するつもりなんでやしよう」

半ば確信を持った様子で答えるコーダに、カーエスが視線を送る。

「ほな、任せてええんやな？」

「フィリーさんは必ず取り返しやすよ。便利屋の名に掛けて」

コーダは力強く頷くと、身を翻して裏口から出て行った。

コーダを見送った後、エイスが全員を見回して尋ねた。

「さて、君達はこれからどうするつもりなんだ？」

尋ねられて、カーエスとジェシカは顔を見合わせた。言われてみると、何もする事がない事に気付く。

今まで忙しかったのは、リクを助けるためで、今、彼の状態は安定している。ジッターク曰く、今はただ眠っているだけ、というこころらしい。敵が狙っているのがリクでないと分かった以上、彼を移動させる必要もない。

沈黙を答えとして受け取ったのか、エイスが重ねて尋ねた。

「何もないのならば、ディオスカスを止めるのを手伝ってくれないか？ 奴はウォンリルグに亡命するつもりだ」

エイスの言葉に三人が驚いた顔でエイスに向き直る。

「え、でも、ウォンリルグは“孤高なる国”ですよ？」と、カーエスが動揺も露に言う。

“孤高”の名は伊達ではない。ウォンリルグは“来るものは拒み、去るもの許さず”と言われ、何かを受ける事も、出す事も嫌うため分からない事が多い国だ。そんな国が亡命を許すだろうか。

「確かに突飛な発想かもしれないが、エンペルファータでここまで大きな罪を犯しておいて、そのままエンペルファータかカンファータ、もしくはその属国に留まるほど、奴は馬鹿ではあるまい。それに前例が無いわけではないのだ。“セーリア”がウォンリルグの首都に備えられているのがその証拠だ」

“セーリア”は三大国の首都とこのエンペルファータ、そして外交的に非情に重要な“自由都市”フォートアリンTONの五大都市に設置されている。それは約百年前に結ばれた“三大国協商”に乗っ取り、“セーリア”の開発に伴って主要都市の安全を計ろうと、五大都市それぞれへの設置を促したわけだが、受け入れる事も嫌うウォンリルグはこの時ばかりはこの決定に抵抗する事は無かった。

「よって、出す事ならともかく、自分達にとって非情に大きな利益になると分かれば受け入れる事はあり得る。ディオスカスは既に“滅びの魔力”を手にいれている、さすがのウォンリルグも“滅びの魔力”の無限とも言える魔力を見逃すはずはなかるう。それに、ディオスカスはおそらくもう一つ、いや二つ狙っているものがある」

「……それは？」

「“英知の宝珠”と“ラスファクト”だ」

挙げられた二つの品、特に、後者に驚きを露にする一同に、エイスは自分が知りうる限りの事を話した。“セーリア”の動力が“ラスファクト”であること。それがエンペルファータに大災厄を呼んでいるらしいということ。

「エンペルリースとカンファータの魔導文明の全ての知識が宿っていると思われる“英知の宝珠”。莫大な魔力を誇る“滅びの魔力”に“ラスファクト”。それだけの“誠意”を見せれば、十中八九ウオンリルグはディオスカスの亡命を受け入れるだろう。それに……」

そこでエイスは一度言葉を切り、目を伏せて一度ためらいのようなものを見せた後に続ける。

「最近、ウオンリルグの挙動が怪しい。もしかしたら戦争になるかもしれない。今回奴が持ち去ろうとしている物は、いわば技術と火力。戦略的に非常に価値のあるものだ。あれらがウオンリルグに渡れば、カンファータ、エンペルリースを同時に相手しても勝利できる可能性すら出てくる。勝算があれば、ウオンリルグも躊躇はすまい」

つまり、ここでディオスカスをとめることができれば、戦争を止めることができる、もしくは戦争になったとしても犠牲者を減らすことができるということだ。

「それでは一刻も早く止めなければ」と、真つ先に反応を示したのはジェシカだった。先ほどウオンリルグの話聞いた時から、表情を厳しくしていた。元々、カンファータの軍人、しかもかなりの要職に就いていた彼女はそういった国勢に敏感なのだろう。

「俺にも手伝わして下さい。どっちにしろ、ここでディオスカスを見逃すのはようない」

一歩ずつ進みでたジェシカとカーエスに、エイスはそれぞれ頼もしそうに頷いてみせる。

「でも、どつちやにせよ、多勢に無勢が過ぎるんと違いまっか？
上級魔導士もぎょうさん抱えとるようやし」

意気込む三人に、水を差す事にばつの悪さを感じる様子を見せながらも、ジッタークが発言する。

それに対し、エイスは少し表情を堅くしながら答える。

「先ほどの戦闘も見ていたが、この二人からは上級魔導士以上の力と戦闘経験の豊富さを伺えた。うかがこれなら多少の数の不利は何とでもなるだろう。しかし余りに数が少なすぎる。そこで、魔導学校の生徒達の力を借りようと思う」

「あつ、その手がありまんな」と、ジッタークが手を叩いて感心する様子を見せる。

確かにそれは有効な手かもしれない。ディオスカスが抱える魔導士の中には生徒達が師と仰ぐ者も多数含まれているが、十年ほど前から一師一弟制が取られるようになってから、魔導士の質はかなり向上した。

今の師たちはまだ一人の教師に多数の生徒が付いている時代に育ったため、その質は安定しない。あまり対戦することはないが、ともに闘えば意外に力の差はないはずだ。

「しかし、ディオスカスがそれを見逃すとも思えないのですが」

そのジェシカ言葉ももつともだった。フィラレスをさらうために彼が用いた策を思えば、おのずとディオスカスの頭のよさは分かるというものだ。

それに同意するように頷いて、エイスは答えた。

「君の言う通りだ。奴は見逃さなかった」と、エイスはディオスカスの手の者によって魔導士養成学校が封鎖されてしまったことを伝える。

「それじゃどうやって……」

期待を裏切られたような響きのジッターク言葉を遮るようにエイスは続ける。

「しかし、それはディオスカス最大の失策だったと言えるかもしれない」

そこで言葉を区切り、エイスは自分の懐から畳んだ紙を取り出し、医務室にあったテーブルの上に広げた。その紙はこの魔導研究所の地図らしく、それも機密扱いにされてもおかしくないほど詳しいものだ。

「ここが中央ホール。そこから北にあるのが研究・開発室棟。名称には現れていないが、ここには行政部も含まれている。その隣には管制エリアもある。そこから操作すれば、魔導学校の封鎖も解けるはずだ」

その提案に、地図の上を滑るように動くエイスの指から目を離し、一同が顔をあわせる。

エイスはそんな一同を見渡し、頷いてみせた。

「抵抗されるのを恐れて魔導学校は丸ごと封鎖して動けないようにしたのは懸命な判断だったが、それはそのままこちらにとっての戦力を保存しておくことになったわけだな」

封鎖されているから動けないだけで、中にいる魔導学校の生徒達は傷付いたわけでも眠らされているわけでもない。封鎖を解けば、彼等はまるまる戦力になるのだ。

「じゃあ、先ずはその管制エリアに行って封鎖を解くんですね」

カーエスの言葉に、エイスが頷く。

「うむ。生徒達を味方につけても力不足は否めないが、どう闘うかは取りあえず生徒達と合流してから考えよう。時間はたっぷりある。焦らずに確実に行こう」

今、ディオスカスは“知識の宝珠”と“ラスファクト”を手に入れるために地下に潜っているはずだ。それなりにセキュリティは施してあるから、どんなに順調にいつてもかなりの時間がかかる。

ジェシカも槍を掴みとり、医務室を出て行こうとしているカーエスとエイスの後ろから付いて行きつつ、ジッタークに言った。

「ジッターク殿はここでリク様の事を頼みます」

「ああ、そっちもようよう気い付けるんやで」

自分と、眠っているリク以外誰もいなくなった医務室で、ジッタークは静寂に耐えきれなくなったかのように、はあ、とあえて音を立てて溜息を付く。

そして、魔法陣の上に眠るリクを担ぎ上げ、ベッドの上に戻してやる。治癒の甲斐あり、先ほどまでその表情に満ちていた苦悶が消え去り、ただただ眠り続けている。

周囲の状況とは懸け離れたところで安らかに眠るリクの寝顔を見遣りながら、ジッタークは、優しく話し掛けた。

「お前の仲間はよう頑張つとる。お前も仲間の期待に答えて、はよ目エ覚ましいや」

角の影から、先の通路を覗いた後、ティタは舌打ちをして身体を元の位置に戻す。

なんとか医務室に戻ろうと、見張りのいない道、もしくはどうにか誤魔化して通ることが出来る道を選んで進んでいるのだが、遅々として医務室には近付けない。今に至っては通れる道さえも見つけられないのだ。

行き詰まったこのルート諦めて、別のルートを探そうと踵かかとを返したティタはそのまま身を固まらせた。そこに、数人の魔導士達が立ちはだかつていたからだ。

「おや、まだ捕まっていない人がいたのか」

そう言ったのは魔導士達を率いて先頭に立っている、見覚えのある男だった。髪の毛の少なくなった頭に、肥満が所々に見える体型。見た目からすると器は小ささそうであるが、その口元に浮かぶ笑みは不似合いなほどに不敵である。

「アンタは確か……魔導学校の校長の……」
「その通り、ドミーニク『バージャーだ』」

テイタが自分の事を知っていたことに気を良くしたのが、ドミーニクは得意げに少し胸を逸らせる。

そんなドミーニクの挙動に、テイタは内心辟易へきえきとする。テイタが彼について知っているのは、世渡り上手でうまくディオスカスに取り入り、上級魔導士の資格と魔導学校校長という不相応に高い地位を手に入れたことである。

そんな人の噂話をまともにするほどテイタは愚かではないが、彼の人と成りを見てみると、それが真実であると感じていた。上級魔導士の資格とはいっても、彼の実力は普通の中級魔導士より遙かに劣るだろう。体型からして訓練も怠っている様子でもあるし。

だが、それでも魔導士ですらないテイタが適うわけがなかった。隙を見て逃げようとしたテイタの身体を、あっさりと《蔓つたの束縛》で身動きが取れなくされてしまう。

「どこに行く気かね。別に無理はしないで眠っていればいいだけだ」というのに「

どこか嗜虐しやく的な雰囲ま気を纏まとったドミーニクが縛られたテイタに話し掛ける。

テイタはそんなドミーニクを睨にらみ付けて答えた。

「関係のない人達を眠らせたりしてるんだから、わざわざ聞かなくても分かっているんだろ」

「それもそうだ。しかし、ここまで頑張った褒美に選択肢を与えてやってもいい」

テイタはその瞬間、彼の笑みに下卑たものが加わるのを感じた。ダクレーのものにも嫌悪感を感じたが、ドミーニクに感じるそれも負けてはいない。

「選択肢？」

「邪魔をせず大人しくしていると約束するのなら、君も我々の仲間に入れてウォンリルグに連れて行ってやろうというのだ」
「ウォン……リルグだと？」

不意にドミーニクの口を付いて出た国名にテイタは思わず聞き返す。

「その通り、私達はこれよりウォンリルグに亡命をする。あちらは既に受け入れてくれる気であるらしい。無論、私達もそれなりの“誠意”を見せなければならぬがね」

「まさか“英知の宝珠”を持ち出す気かい？」

“誠意”と聞いて、先ず初めに思い当たったのがそれだった。魔導研究所の持ちうる全ての知識を集めた魔導器。それにはもちろんテイタの研究内容も収められている。そしてミルドのものも。

「もちろん。世界最高峰の知識の結晶なんだ。“孤高なる国”である手前、表には目を向けもしないが、あちら側も喉から手が出るほど欲しいだろうよ」

「アンタ、自分のやってることが分かってるのかい？ あれはただ知識が詰まった魔導器じゃない！ 私達が手間暇かけて育て上げた子供みたいなもんなんだ！ 夢そのものなんだよ？ アンタらの一存でほしいほい持ち出したりしていいモンじゃない！」

思わず、ティタが怒鳴るが、ドミーニクはそれに動揺した様子はない。それどころか、ティタの言葉を嘲あざわらるように笑ってみせる。

「おやおや、外見は冷たそうだが中身は案外アツいようだ」

そう言つて、《蔓の束縛》で縛られたままのティタに近付く。

「それで、どうする？　ここで眠るか、それとも私達に付いて来るか。後者は特別な措置だからね、それなりの“代償”は必要だが」

含みのある物言いだつたが、その行動でそれが何を言わんとしているのかは明白だつた。動けないティタの太ももを撫で上げたのである。

ティタも三十路に入り、もう一概に若いとは言えない年齢になつたが、老いているわけでもない。そのプロポーションは魅力的であり、成熟した美しさに溢あふれている。ドミーニクがそんな彼女の身体に目を付けるのも不思議ではない。

「……………っ！」

全身に悪感が走り、服の下では鳥肌が立つが、動揺は見せないようにする。眠ることを選択しても、この助平が相手では全く信用が出来ない。

未だかつて感じたことのない身の危険に、ティタは本当に珍しく恐怖を感じた。

化粧などする気など起こらない自分が、密かに毎日運動をしたりして、体型を保つ努力をしているのは全てミルドの為だ。

こんな男に身を任せるなどつての他である。

「さあ、どうするかね？」

ドミーニクが下心を覗かせる笑みをみせ、太ももから尻に手を伸ばしながら答えを急かすが、テイタは冷たく彼を睨んだまま答えない。どちらに答えても結果は同じだ。ならば答えずに時間を稼ぐ。たった一つの可能性に望みを賭けて。

カウントダウンをするがごとく、テイタの肢体を這い回るドミーニクの手は上へ上へと伸びて行く。

そして、その手が胸に伸びようとした時、爆発的な突風が吹き、ドミーニクの身体が後方へと吹き飛んだ。

同時に、テイタを縛っていた蔦も切れた。しかし彼女は未だ身動きが出来ない。

それは背後から何者かに抱き締められていたからだ、彼女はドミーニクに触られていた時のような嫌悪は一切感じない。

自分を抱き締める腕が誰の腕なのか、それがはっきりしているからだ。もう、何度も何度も抱き締められ、その力の入れ具合、感じる意外に厚い胸板と太い腕。

彼女が心の中で呼び続けていた名前の持ち主。

「ごめん、ちよつと遅くなったね」

「全くだね……まあ、来てくれたからいいよ」耳もとで囁かれたその声を、くすぐったく感じ、テイタは微笑みながら答え、改めて声に出して彼の名を呼ぶ。

「ミルド……」

36 『風の悪魔』

その魔導士は強かった。

並の魔導士が束になって掛かっても、歯が立たないくらい強かった。

やがてその強さと闘いぶりから、彼は“悪魔”と呼ばれた。

しばらくして“悪魔”はふと気が付いた。

自分は何のために闘っているのだろう。

何故自分は強くなるうとしていたのだろう。

自分が魔導士である意義。

“悪魔”にはそれがどうしても思い付けなかったのだ。

「人の妻に随分と気安く触ってくれていたみたいですけど、何か弁解はありますか？」

ひとしきり抱き締め、愛する人の無事を噛み締めた後、彼は彼女を背に庇かばうように、ドミーニクの前に立ちはだかつて言った。

吹き飛ばされたことに少なからず驚きを感じていたドミーニクだったが、状況をすぐに理解し、余裕を取り戻して答える。

「ミルドゥバトレアス……君も魔導士だったとは知らなかったぞ」

彼の名前を思い出すのにさほど時間は掛からなかった。“滅びの魔力”奪取における計画の中では頻繁に出てきた名前である。

「いや、僕はしががない研究者ですよ。魔法が少々使えるだけの、ね」
自嘲めいた笑みと共に帰ってきたミルドの答えに、ドミーニクは眉を潜^{ひそ}める。

気弱そうだが、筋は通す。しかしながら好戦的な性格では決してない、というのがミルドの性格に関して報告書が語っていたことだったが、今日の前にいるミルドは少々印象が違っている。

口調は丁寧だが、明らかにドミーニクを挑発している。

「君はこの状況が分かっているのかね？」

「ええ、一応は。一対四……ちょっと足りないですかね」と、ミルドがわざとらしく困惑した顔をしてみせる。

ミルドが魔導士だと分かったところで、所詮相手は一人。こちらには自分を除いても上級魔導士が三人も付き従っているのだ。

自分の優位を確信したドミーニクは、再び胸を逸らせるように立ち、三人の魔導士にミルドを攻撃するように指示した。

その命令に従って、三人の魔導士達は一斉に魔法を唱えはじめる。素早く、強い魔法として定石にもなっている《火柱》だ。魔法の詠唱から発動までタイムラグがあるために、避け易い魔法だが、三人もいれば時間差をつけて使用することで、その欠点を補うことができるのである。

三人の詠唱に合わせて、三つの赤い円がミルドの周囲に描かれて行くのを見回して、ミルドは眉根^{まゆね}を寄せた。

「まあ、《火柱》は順当だと思いますけどね……」

溜息にも似た吐息をつく、大きく息を吸い呪文の詠唱を開始する。

「我が前に形成したるは《火避けの風》、その息吹は患者の放ちし炎を払う」

呪文の終了と同時に、ミルドとテイタを包み込むように風が吹きはじめた。同時に魔導士達の放った《火柱》が発動し、二人を包み込む。

が、次の瞬間、ドミーニクを含めた魔導士達は驚愕きょうがくに目を見開いた。敵を焼き尽くし、しとめるはずの《火柱》の炎が、ミルドを離れ、あるうことが自分達の方に返ってきたのである。

魔導士達は慌てて《炎の陣》を形成し、それを打ち消す。

思わぬ反撃をなんとかやり過ごし、顔をあげた先には、ミルドが無傷で立っている。

「風上に火を置くべからず」。……魔導学校でそう教えてませんでした？」

火は風に逆らえない。風は火を流し、煽あおって強くすることさえできる。水は火を消すのみだが、風は火を制することができるのだ。炎属性の魔法が、本当の意味で相性が悪いのは風属性の魔法なのである。

「馬鹿な……！」

理論上はそうでも、炎が風と相性のよくないことをあまり知られていないのは、ただ単に風が炎を御することが可能であるだけで、炎は風に弱いわけではないからだ。水属性の魔法はレベルが低くても相当高レベルの炎属性魔法を圧倒できるが、風属性魔法で炎属性の魔法を御するには、対象となる炎属性魔法より風属性魔法のレベルは高くなければならない。

よって風で火を防ぎ、あまつさえ弾き返しさえするのは相当術者

の力量が違わないと適^{かな}わないことだ。ドミーニクがここに連れてきているのはいずれも上級魔導士。それにも関わらず、ミルドはそれらの実力を遥かに上回る計算になる。

「そつちが何もしないなら、今度はこつちから行きますよ。我に付き従いし《追い風》よ、駆けし者の背を押し、向かいし者を押し戻せ」

魔法は即時に発動し、ミルドの後方からドミーニク達の方に向かって強い風が吹き付けた。しかしこの魔法には攻撃力は備わっていないので、魔導士たちは妨害も防御も行わない。

構わずにミルドは詠唱を続けた。

「我に齒向かいし《向い風》よ、向かいし者を助け、駆けし者を妨^{さまた}げよ」

今度はドミーニクの方からミルドの方へと向かう強力な風が発生する。そして《向い風》は《追い風》とぶつかり、ドミーニク達がいるあたりに複雑な気流が生まれる。

見たことも聞いたこともない魔法の使い方に、ドミーニク達はどう対処していいか分からず、刮^{かっもく}目したまま成りゆきを見守るだけだ。

「巻き立ち上がれ、《旋風》」

ミルドの詠唱の完了と同時に、ドミーニク達の丁度中央あたりに白色の円が引かれて行く。呪文と、この効果から《火柱》と同系統の風属性魔法と判断したドミーニクと魔導士達は巻き込まれるのを恐れてその円から離れる。

しかし、魔法が発動して巻き起こった《旋風》は、予想に反してレベル6の《竜巻》と比べてもそんな色ないほどの規模の大きさを見

せ、退避したドミーニクと魔導士達を巻き込んだ。

吹き飛ばされ、壁に打ち付けられたドミーニクは悟った。先の《追い風》と《向い風》はこの《旋風》の為だったということ。強風がぶつかり合って生まれた気流が、たかがレベル2でしかない《旋風》をレベル6と遜色ない威力にまで強化したのだ。

《旋風》は魔導士全員を吹き飛ばしたわけではなかった。吹き飛ばされたのはドミーニクともう一人の魔導士だけで、後の二人はとつさに《土の陣》を唱えてこの攻撃をなんとか凌いだらしい。

風は土の前に呆気無く弾かれる。いま攻撃を防いだ二人は、とつさにそのことを思い出すことが出来たらしい。

が、何とか防ぎきった程度で隙の出来ている二人を、ミルドは見逃さない。

「風の中を走れ、疾く鋭く！ 《かまいたち》」

呪文と唱えると共に一閃させたミルドの手から生まれたのは三日月型の風の刃だ。呪文の通りに、《かまいたち》は素早く駆け抜け、残った二人のうち一人の胸元を鋭く斬り付ける。

「わ、我が敵の前に立ち塞がれ！ 地の力によりて、堅く強い《守り石》よ」

残った一人はこの隙を付いて風属性用の魔法を唱え、目の前に見るからに厚い石盤を造り出す。ミルドが他の属性の魔法を唱えない保証はないが、これだけ風を扱うことに特化している魔導士だ。他の魔法を唱えられても何とか耐えられるだろう。

「いい判断ですね。基本がしっかりと出来ている。しかし」と、ミルドは残った一人に駆け寄りはじめる。「何事も例外というものは

存在するんですよ」

《追い風》を背に受けて疾走しながらミルドはその呪文を詠唱した。

「右手に渦巻く《風玉》、左手に逆巻く《風玉》、刃と刃が噛み合わせ、堅い石をも削る牙となれ」

そこまで唱えた時、ミルドは右手と左手に生まれた回転の違う二つの《風玉》を一つに合わせた。すると、その《風玉》を二つ分合させただけとは思えない大きさになる。

ミルドは、それを向かう魔導士の《守り石》に押し付けるように放ちながら詠唱を終わらせる。

「《風牙》！」

《守り石》の影にいた魔導士は思わず目を見開いた。目の前の分厚い石盤にヒビが入って行ったのだ。やがて、それが砕け、その向こうにミルドの姿を見た瞬間、身体と共に彼の意識は吹き飛んだ。ミルドは、それを見届けた後、構えを解いて呟く。

「やっぱり四人じゃ足りませんよ」

鬼神のような闘いを終え、自分の方に近付いてくるミルドの姿に、ドミーニクは思わずその名を漏らした。

「風魔」……「風魔」ミルド「エーヴィスか」

「懐かしい呼ばれ方ですね、今呼ばれても全然嬉しくないですけど」

“風魔”ミルド・エーヴィス。十年から九年ほど前にエンペルリース各地に出没していた凄腕の魔導士の名前だ。

魔導士養成学校は生徒の実践訓練の為、各地の要請に応じ、魔導士達を派遣している。大抵はどこかから迷い込むように発生したクリーチャーの討伐が殆どで、後は徒党を組んだ悪党の討伐などの任務があつた。

ところが、時々派遣された魔導士達が現場に着いた時には事件が解決されているということがあつた。現場に残った闘いの後や、関係者の証言などから、名前と主に風の魔法を使う凄腕の魔導士であること、その闘い方がかなり容赦のないものであることなどが分かつた。

実際に派遣した魔導士達と遭遇したこともあつたが、生徒達はもちろん、付き添っていた教師でさえも全く歯が立たなかつた。死なない程度に痛めつけて弄もてあそばれ、その後、自然に嘔嘔吐かれることになつたのが風の悪魔の意であろう“風魔”の二つ名である。

「あの頃は随分無茶をしていましたからね」と、言つてミルドが苦笑する。「でも僕はもう“風魔”ではありません。そのために名前も、魔導士としての人生も捨てたんです」

結婚をすると、普通妻が夫側の姓を名乗るものなのだが、ミルドは逆にテイタのバトレアス姓を貰つたのである。

「何故、魔導士を辞めた」

そう尋ねるドミーニクはいかにも理解し難いといった様子で眉根を寄せている。

魔導士は、稀少価値のある人種であり、同時に利用価値の高い人種でもある。魔法を少し使えるというだけで、いい職にいくらでもありつけるのだ。ミルドほど腕の立つ魔導士となると、相当重要な

役にもつけるだろう。

魔導士であることを辞めるメリットなんて一つもないはずだ。

しかしミルドはその質問を無視し、^{かが}屈み込んで、壁にもたれて座り込んでいる姿勢のドミーニクに視線を合わせて言った。

「僕は確かに“風魔”と呼ばれる魔導士であることを辞めました……ですが」と、逆接の接続詞をつけると、ミルドは柔和で人当たりの良さそうな表情を崩し、怒気も露にドミーニクを睨み付けた。「“風魔”としてではない、今の研究者・ミルド＝バトレアスとして何かに怒りを抱けば、持てる力を行使することは躊躇わない」

すぐ後ろは壁なのにも関わらず、ミルドの迫力に、ドミーニクは思わず仰け反り、後頭部を壁に打ち付けてしまう。

慌てて身体を横にずらすようにして、とにかくミルドから離れようとするが、それを見逃すミルドではなかった。

「我、《風責め》によりて汝の自由を奪い、苦を与えん」

すばやく魔法の呪文が詠唱されると、ドミーニクの足下から風が巻きはじめると、あっという間に小さな竜巻きとなり、ドミーニクはその中に捕らえられ、身体を浮かされた。手足に強力な風が絡み付き、縄に縛り付けられたように身体を動かすこともままならない。

「な、何を……うああっ！」

風に捕われて、身動きの出来ないドミーニクの体のあちこちに浅く切り傷が走り、出血を始める。

「知っていることを全て教えて下さい。今やって見せたように少し

僕が念じれば容易くあなたを傷つけることが出来ます。今のは軽い切り傷ですが、その気になればもっと深い切り傷、それどころか、手足を切断し、耳鼻をそぎ落とすことさえも出来ます。逃れるのは不可能でしょう。僕とあなたでは実力が違い過ぎますから」

その言葉が真実であることは疑い様もない。たつた今、彼は上級魔導士の中でもそれなりの実力を持った精鋭三人を瞬く間に倒してみせたのだから。

ドミーニクは人としての器は小さかったが、馬鹿ではなかった。いくら心酔しているとは言え、自分の命と忠誠心を秤に掛けて、忠誠心を取るほど馬鹿ではなかったのである。

どさつ、という音と共に、ドミーニクが床に崩れ落ち、ミルドはしばらく彼を見下ろして、彼から得た情報を頭の中で整理する。やがて、一つ大きな息をつくとき、ミルドは踵を返し、ずっと黙って状況を見守っていたティタに向き直って言った。

「……カーエス君達と合流しよう。僕達で何としてでも計画を止めなくちゃいけない」

「ミルド、大丈夫？ あれほど、嫌がっていた魔法を使ってさ」

“風魔”であることを辞めてから、ミルドは魔法を使うことを極度に避けるようになった。どんなに魔法を使った方がいい状況でも、使おうとしなかった。再び使えばまた悪魔に戻ってしまうのが怖かったのだ。

向かうところ敵がいなかったミルドは、ある時に気が付いたのだ。自分のやっていることが何の意味もないことに。闘って、相手を負かすだけ、それだけの行為は何も生まないことに。魔導士として、自分は何の目的も持っていなかったことに。

「あはは、つい使っちゃったね。でも、今回だけは大丈夫だと思う」
全世界を揺るがしかねないディオスカスの計画を止めるとい
目標の元に力を振るうのだから。

「それに何より……」と、言ってミルドはテイタの肩を抱き寄せた。
「今は君が付いてくれてる。君に軽蔑されるようなことは出来ない
よ」

「な、何だお前は!?!」
「奴を止めるお!」
「うあああああつっ!」

魔導研究所のある場所、ある廊下では、そんな絶叫が響き渡って
いた。その騒動の真ん中を一般の魔導車など問題にならないほど驚
異的なスピードで走り抜けていくのは一体の巨大なサソリである。
騎乗用なのか、そのサソリの上には一人の青年が乗っていた。

褐色の肌に白髪、布をそのまま巻き付けたような、砂漠特有の装
束という印象的な外見を持つ男、コーダはそんな騒動をまるで気に
していないように、真直ぐ前を見据え、彼の召喚獣であるサソリ《
シッカーリド》を“全速走行モード”で走らせる。通常の“運搬モ
ード”とは違い、基本的に御者であるコーダー一人しか乗ることが出
来ないぶん、足の速さと身軽さに長けた形態だ。

フィラレスを誘拐した者達はコーダ達が見つけた瞬間には姿を消していたので、本来行き先はしれない。

しかしコーダは便利屋協同組合において、噂レベルの情報ではあったものの、ディオスカスの計画に付いて多少の心当たりがあった。ディオスカスの一味の中に、魔導レーサー開発班の助手でありテストドライバーの役を負っている男が入っていたのである。

それから考えると、“滅びの魔力”を持つフィラレスを奪取した後は、魔導レーサーを使ってエンペルファータを脱出するつもりなのだ。

目的地はおそらく北だろう。情報によるとディオスカス達は魔導鉄道にも手を回しているようだ。それからすると、目的のものを全て手に入れた後、ディオスカス達一同は魔導列車を奪取してエンペルファータを脱出するつもりなのだろう。ディオスカスの一派は大所帯だ。効率的に脱出するなら魔導列車は理想的な手段であるといえる。

そして、ディオスカスが手配した魔導列車の動きからして、彼等が向かうのは北。合流することを考えると、魔導レーサーの方も北に向かって走るとみて間違いはない。

そういった理由から、コーダは魔導研究所北入り口に向けて《シッカーリド》を走らせていた。

北という彼等が向かっている方角から、コーダはある推測を立てていた。

三大国のなかでも、エンペルリスとカンファータは仲が良く、違う国であって、同じ国のようなもの。

魔導研究所でクーデターを起こすなどという大掛かりな反逆行為を犯した今、この二国、あるいはその属国のどこに行っても、ディオスカス達の平穏はあり得まい。しかし三大国協商の中で、ただ一つ相互不可侵のみを主張し、特に他国からの干渉を嫌う国がある。

そこへ逃げ込まれば、二大国といえども簡単には手が出せない。

(ウォンリルグ……か)

便利屋協同組合で仕入れた情報の中に、先日フォートアリントンにて開かれた定例国際会議を、ウォンリルグ代表が無断欠席した上、フォートアリントンとウォンリルグを繋ぐ移動用魔法陣があちらから封印されたという大事件のことがあった。

今のところ表面に混乱は現れていないが、政治の世界では国際的にかんがりの緊張状態が続いているらしい。一応、戦に備えてエンペルファータとカンファータから魔導兵器の開発を急がせる通達が魔導研究所に届いたらしいことは便利屋の間でささやかれていた。

その事件と、このクーデター、時期的に繋がっているような気がしてならない。

(最後の戦争が終わって百年だ……、これから、その反動が来るのかもかもしれない)

もう、ウォンリルグとの戦争は避けられないのかもかもしれない。

しかし、事はできるだけ小さく収まるに越したことはない。ここでフィラレスを取り戻せるか否かで、これから起こる事の被害者は圧倒的に違ってくるだろう。

否、それ以前にフィラレスは大事な仲間だ。それを取り戻し損ねたときにはもうコーダはリク達の元には戻れないだろう。あそこに帰る時は、フィラレスを取り戻した時だけ。

不思議なことに、世界のこれからの被害を考えるよりも、仲間の元に戻れないことを考えると、心に一層緊張感が増してくる。

コーダにとっても、リク達の元は今まで生きてきた中で一番居心地のいい場所だった。目的のない旅ではない。どんな結果になっても何年も一緒にいられるわけではないだろう。それでも夢の一時は

長いに限る。

それが納得の行く形で終わるまで、夢は見続けていたいものだ。そのためなら、どんな労力も惜しまない。

研究・開発室棟の奥にある魔導研究所の北入り口は、いわば裏口で大きな機材などの搬入出を行うための入り口であるため、車両がそのまま入っていける造りになっている。

コーダは度々邪魔に入る連中を蹴散らしながら、その広く開けた入り口を抜けた。その瞬間、夕暮れに入る直前の柔らかな太陽の光がコーダを照らす。

研究所内は十分に明るかったが、やはり本物の太陽の光は違う。砂漠という環境に育ったコーダにとって、太陽は特に付き合いの深い存在だった。ジリジリと自分を照らし熱を与えるその光は、彼の気持ちを鼓舞こぶさせるに十分な影響力を持っている。

「《シツカーリド》が足に宿れ《飛躍》の力！」

外に出て天井が無くなったところで、コーダは魔法を使って《シツカーリド》を空高く飛ばせる。眼下に広がる都会の景色の中で、コーダは情報にあった魔導レーサーの外見特徴が一致している車を見つけた。

随分遠く、確かに飛ばしてはいるが、流石に他の車も通っている市街地で全開にするわけにも行かないのだろう。普通の魔導車でも出せるレベルのスピードだ。

（今の内に距離を少しでも縮めておいた方がいいな）

速さで負けるわけではないが、市外に出て全速で走られると流石に追い付くのが困難になる。

コーダは《飛躍》で飛ばした《シツカーリド》を手近な建物の屋根に着地させ、跳ねるように次の屋根目掛けて飛ぶ。屋根を飛ぶことによつて、下の人間を巻き込むことなく走ることが出来るため、かなりのスピードが出せた。コーダの視界に捕らえられたままの魔導レーザーがどんどん近くなつてくる。

しかし如何せん距離がありすぎたか、もう二飛びしたらエンペルファータの壁をこえるというところで、魔導レーザーは街の外に出ってしまった。

一足遅れて街の外に出た時には魔導レーザーは既にその性能を如何なく発揮し、結局最初に開いていたのと同じくらいの差が出来てしまつていた。

その速さを見てコーダの顔には、初めは驚きを覗かせたものの、そしてその次の瞬間には歓喜にも近い笑みが広がる。

「速さだけなら、誰にも負けやせんよ」

今日は後ろで泣き叫ぶ同乗者もない。

そして何より、彼の前には張り合う相手がいる。

コーダは久々に正真正銘の全開走行に入った。

37 『迫る同族の影』

影に背を向けて、光に向かって走っても、
後ろを振り返らず、ただひたすら光を求めても、
その背後には常に影が付いてきている事実は変わらない。

どうすれば影は消えてくれる。
どうすれば光に手に入れられる。

どれだけ影を消そうと試みても、
光がある限りそれは消えることはない。

影と向き合い、受け入れること。
それが光を手に入れられる、ただ一つの道なのだ。

「いい調子だ」

完成直後の魔導レーザー“ジーフオリオン”の運転席にて、魔導レーザー開発班の主任付き助手兼ドライバーだったガナンは、赤いツナギにヘルメットをかぶり、どこまでも真直ぐ伸びて行く道を見据^{すえ}えてアクセルを踏み締めて呟いた。

全開走行は初めてだが、感覚からすると順調のようだ。この間までは、加速力、最高速度、ハンドリングなどの性能のバランスがどうしても決まらなかったのに、今はまるで一つの生き物として生を受けたかのように自然な走り、力強く加速して行く。

ここまで加速すれば、もうどんな乗り物でも追い付くことはあるまい。

性格的に考えて、自分達の考えを理解してもらえそうになかった
ので、残念な別れ方になったが、あの主任はやはり優れた技術者だ
っただらしい。

ふと気配を覚えて、バックミラーを覗いたガナンは思わず目を丸
くした。彼の駆る“ジーフォリオン”の後方に、砂埃を上げながら
走る巨大なサソリの姿が確認できたのである。かなり離れた位置で
はあるが、驚いたことにそれ以上離れない。

その事実の意味することはただ一つだけである。

(この魔導レーサーと同じスピードで走っている！？)

この世には魔導レーサーより速いものは存在しない。魔導レーサ
ーに対抗するには魔導レーサーしかないはずだった。しかし後ろに
迫っているのはそんなものではない。ただの騎乗用のサソリである。
こんなことがあり得るのか

「流石に速いスねえ……なかなか追いつけそうにないスよお」

遠く離れた場所を走る魔導レーサーの姿を見遣り、コーダは呟い
た。言葉とは違い、表情は随分と嬉しそうだ。

彼が速さに魅了されたのは、ある集団から逃走していたときだっ
た。融けるように流れて行く周りの景色、普段では感じることもな
い見えない大気の壁、そして普段は遠く歩けば何時間か掛かりそう
なところへもあっというまに着いてしまう感覚。全てが彼を虜にし
た。

ただ、残念なことは競争相手がいないことだった。走ることでそれ
自体は楽しいが、やはり競争相手がいると張り合いが違う。しかし
魔導列車にも勝ってしまった後は彼より速いものが無くなってしま

っていた。魔導レーサーの存在は知っており、いつか競争をしたいと思ったものだが、魔導レーサーは公道では走らないので適わないことかと思っていた。しかし、こんな形で適う^{かな}とは。

データ上、最高速はあの魔導レーサーのほうがわずかに速いが、それでも着いて行けているのは、おそらくサーキットの完璧に整備された道路と公道の違いとところだろう。ちなみに《シッカーリド》はどちらかというとオフロード専門なので、道路など無視し、ずっとその脇を走っている。

また、魔導レーサーとていつでもそのスピードで走れるわけではない。限界に近い速度で走っている分、ちょっとしたこと、速度は極度に落ちる。

そのスピードの安定度という点に関しては、コーダの《シッカーリド》は魔導レーサーより遥^{はる}かに勝っている。これが、魔導レーサーに追い付く鍵となるだろう。

一定の距離を保ったまま、なかなか近付けない魔導レーサーの後ろ姿を見据えながら、コーダは冷静に考えた。

道路は基本的に直線であるが、エンペルファータからフォートアリントンを繋ぐ、この道路は違う。その途中に湖があるため、それを迂回するように緩^{ゆる}くカーブを描いているのである。

普通に走る分ではスピードを落とすほど、鋭い曲がりではないのだが、限界走行状態の魔導レーサーにとってはそれでも十分きつく、かなりスピードは落ちるだろう。しかも、オフロードを行ける《シッカーリド》はそのカーブをショートカット気味に走ることができ^る。

(しかしこの距離じゃ、それでも足りないか……)

競争相手がいることに少なからず喜びを感じているのはガナンも同様だった。彼は元々魔導レーサーのドライバーである。いわばことういった競争に魅入られ、その道のプロとしてハンドルを握っている人種なのだ。

反面、計画のこともあるため、追い付かれたらと思うと気が気でない部分もあるのだが。

初めは驚きで満ちあふれていた頭も、今は随分冷静になっている。

（あれは魔法だ。どんなものかは知らないが、魔法によってサソリがあそこまで速くなっているのだ）

そう納得してしまうと、相手の泣きどころも見えてくる。

今のところ直線のスピードは互角。突き放すことは出来ないが、追い付かれることもない。この、競争と決めて行っているものではない競争にゴールはないので、これはどちらかが諦めるかの勝負となると問題になるのは耐久力だろう。

わけが分からないが、サソリをあそこまで速く走らせるのは並大抵の技ではない。その魔法を長時間維持するのは無理だろう。魔力はともかく魔導を行うための精神力が持つまい。対してこちら“ジーンフォリオン”の走行のための魔導はすべて搭載されている魔導器が行うために、精神力に関しては心配はいらない。魔力が切れる恐れもあるが、フォートアリントンに着くまでは十分に持つ。

焦ることはないのだ。

そう思い直したところで、あるものが彼の目につき、ガナンは思わず舌打ちした。

彼にとって、もう一つ不安な要素があった。一般車の存在である。滅多に通ることがないとはいえ、通る車があるからこそ道路がある。だから、一般車の交通はあり得ないことではないのだ。

当初、一番の心配は一般車の存在だった。そのスピード故、小回りが利かないので、車一台追い抜くのにモータースピードを落とさなくてはならない上、曲がり過ぎてコースアウトなどをすれば、ひとたまりもなくクラッシュしてしまう。

その一般車が今現在、“ジーフォリオン”の前方を走っているのだ。

流石に一般の汎用魔導車と、魔導レーサーでは勝負にならず、ほとんど對抗車のような勢いで前方の一般車は迫ってくる。

ガナンは慎重にハンドルを切りその一般車を右側から追い越すが、その際、スピードメータに目をやり、眉根を寄せる。次にバックミラーを見て、その表情は更に曇った。

先ほどまで随分と離れて感じていたサソリが、その距離を半分近くまで縮めていたのだ。

距離と共に、ガナンの心の余裕は確実に削り取られていた。

ガナンとは対照的に、不確定要素である一般車の存在によって、追い付く公算が立ったのがコーダである。

彼は元々道路の傍そばのオフロードを走っているので一般車がいようが魔導レーサーが走っていようが関係ない。よって、そのまま最高速を維持したまま、追い抜きのために失速した魔導レーサーとの距離を大幅につめることが出来た。

(よし、これで湖のカーブで絶対に追いつける)

既に彼等の右手前方には湖らしきものが見え、道路が僅わずかかずつ左に曲がりはじめている。

コーダはその道路にはわざと離れ、やや右寄りに走る。流石に湖

が邪魔になり、直線で走るわけには行かないが、舗装された道路の上を走らなければならぬ魔導レーサーよりずっと小さな曲がり道でショートカットをすることができる。

じりじりと、左前方を走る魔導レーサーが左横へと移動して行く。魔導レーサーのドライバーの腕も相当なもので、このカーブによるタイムロスを少しでも減らそうとカーブの一番内側を走っている。

あのスピードでそこまでコントロールできるのも大したものだが、コースアウトすればオフロードの地面の凹凸を大きく拾ってひとたまりもなく横転したりしてしまう魔導レーサーで、よくあそこまで際どいコースがとれるものだ。

右手の湖が途切れて間もなく、左側にあつた道が《シツカーリド》に向かつて近付いてくる。カーブが後半に入り、元の直線に戻るうとしているのだ。

そして、直線に入った時、《シツカーリド》と魔導レーサーが横一線に並んでいた。それを横目で確認したコーダはよし、と頷く。

しかしコーダは気が付いていた。ここで本当に問題になるのはどうやって追いつくかではないことに。

近付かれた時は焦りを感じたものだが、横一線に並ばれても、ガナンは自分でも意外なほどに平静を保っていた。追いつかれ、追いつかれたところで、あまり意味はないからである。

そう、あのサソリがこの“ジーフォリオン”を追っているのはおそらく積んである“荷物”、即ち“滅びの魔力”を保持する少女を取り戻すためだ。追いつき、追いついたところでそれは達成されない。そのためにはこの“ジーフォリオン”を止めなければならないのだ。

しかし、それには問題が生じる。止めるだけなら、体当たりでも

何でも仕掛けてくればいい。それが出来ないのは“滅びの魔力”の少女という人質がいるからだ。つまり手荒な手段は一切使えない。この人類の限界に挑戦するスピードで走る“ジーフオリオン”は既に巨大な慣性エネルギーを帯びている。下手に止めれば大クラッシュ、
“滅びの魔力”の少女もろとも吹き飛んでしまう。

ガナンはちらりと“ジーフオリオン”のすぐ右を走るサソリを盗み見た。その際、その御者席に座っている男がこちらを向いているのが見えた。

褐色の肌に白髪、砂漠特有の衣装を着ており、目には風防としてゴーグルを着用している。その唇は堅く引き延ばされ、眉根は緩く寄せられていた。あちらもこの問題に気がつき、思索しているようだ。

(さあ、どうする?)

一旦追い付いてしまうと、コーダからは先ほどまで感じていた競争の高揚感は失せていた。代わりに、このスピードで走り続けたことに対する疲労が表れ、この状態を長く続けられないことに焦燥を感じはじめた。

《シツカーリド》はコーダの召喚獣であり、一個の独立した生命ではない。魔力で削り上げたそれを維持し、ここまで常識はずれなスピードで走り続けさせるには、それ相応の魔力がある。そしてコーダの内にあるそれは、決して無限ではないのだ。

それがきれいな内にかして真横を走る魔導レーサーを止めなければならぬが、その方法が思い付かない。

タイヤを撃とうにも、そんなことをすればあの魔導レーサーは激しく横転してしまうだろうし、体当たりをしても同じことである。

《シツカーリド》のハサミで抑えようとも思ったが、このスピードで走っている中で《シツカーリド》にこれ以外の行動をとらせるのは無理だろう。第一失敗すればやっとな手の届くところまで近付いた魔導レーザーにまた引き離されてしまうだろう。そうなれば、もう追い付く自信はない。

何とか出来ないだろうかと魔導レーザーを観察していると、あるものの存在に気が付いた。魔導レーザーの後部にむき出しになった魔導器である。魔導レーザーは軽量化の為、あえて耐久性には目をつぶり、そのように内部機関がむき出しになっていたりするのとは良くあることだ。

コーダは魔導レーザーの基本的な構造の情報を思い出してみた。むき出しになった部分は魔力の供給を受け、推進力を発生させる、いわば魔導レーザーの心臓部のようなものだ、と確か資料には載っていた。

その魔導器自体には何も出来ないだろう。心臓部なだけに、魔力コーティングはされているだろうし、下手にいじればどう誤作動したものが分からない。しかしコーダが注目したのはその魔導器に接続されている管の一つだった。

たくさん付いている管の中でもそれは一際太いのは、十中八九その魔導器に魔力を供給する管だろう。あれを切断すれば燃料切れでも起こしたように穏やかに止められる。

方法は決まった。

となれば、あとは行動あるのみである。

コーダは《シツカーリド》のスピードを少し落とし、魔導レーザーの後ろ側に回り込んで、目標の管を狙いやすい位置に付く。

足をしっかりと固定されているのを確認すると、コーダは手綱を離し、右手の親指と人さし指で銃のような形を作り、左手をその手首

に添えた。

「光よ集え、指先に！ 我が指し示すは小さな点、その先に広がるは大きな未来！」

呪文の詠唱と共に、彼の人さし指の先に光が集まり、凝縮して行く。

小さいが強い光を指先に宿したまま、コーダはしばし狙いを定め、精神を集中させる。そしてその引き金を引く代わりに、呪文の詠唱を終了させる。

「《狙撃》」

その言葉と共に、光は光線となってまっすぐコーダの指し示す先に伸びてゆき、コーダの狙い通り、その光は魔力の供給管を撃ち抜き、断ち切った。

断たれた供給管からは魔力が漏れて行き、空気中に霧散して行く。それにともない、魔導レーザーのスピードも目に見えて落ちて行き、やがて静かに止まった。

完全に止まった後、赤いツナギを着けた男、ガナンが車の中から飛び出し、急いで後部座席に駆け寄った。しかし、その動きはコーダによってもう一度放たれた《狙撃》の光線がガナンの目の前を掠めた事で阻まれる。

「ファイリーさんを人質にしようというつもりなら、今度は頭を撃ち抜きやスよ？」

穏やかな口調で諭すように言ったコーダの指はガナンの頭に向けられており、いつでも発射できるということを示しているかのよう

に、指先には小さな光が灯っている。

《シッカーリド》の上でチェックメイトを宣言するコーダを、ガナンはしばらく憎々し気に睨み付けていたが、ある瞬間、ガナンはその顔に不敵な笑みを走らせた。

「これで終わりだと思っなよ？ こちらも邪魔をされたりすることは想定済みだ。無論、そのための対策もある」

そういつて、ガナンは着けていたツナギの上の部分だけ脱ぐと下から現れたタンクトップのみの上半身を見せつける。強い遠心力と、激しい荷重移動に耐えるためのレースドライバーらしい、みるからに強靱な肉体は確かに驚嘆に値するものがあるが、コーダを驚かせたのはそれではない。

両腕に施された刺青である。

(“烙印魔法”……！？)

本来正確な魔導が要求され、長い呪文が必要となってくる高レベル魔法を、体に魔導紋様を刻み込むことよって短い言葉で行使用することが可能になる技術であり、あまりに劇的な効果があるため、全世界で使用を制限されている技術だ。

コーダ自身ではないが、先日ファトルエルでの騒動の中で、カーエスとファルガールが“烙印魔法”を施した魔導士を相手にしたという話を聞いていたため、その存在は否応無しに思い出された。

コーダに動揺を生まれたが隙と見たか、ガナンは魔力を刺青に注ぎ込み、その紋様の力を発動させる。

「出でよ、《セディビート》っ！」

短い言葉と共に、その紋様は強い輝きを放った。コーダはとつさに《狙撃》を発動させてガナンを撃つが、輝きが止み、ガナンの目の前に“召喚”されていた背中に赤い殻をもつ巨大なムカデが《狙撃》の光線を防ぐ。

「さて、どうする？ 見たところ、そちらのサソリは走るだけで戦闘能力はないように見える。だまって俺を行かせるなら、攻撃はしないでおいてやるが？」

上半身を立ち上げ、蛇のように首をもたげて巨大サソリ《シツカーリド》とその御者、コーダを見下ろす《セディビート》の横で、ガナンは不敵な笑みを崩さずに警告する。

が、次の瞬間、《シツカーリド》が眩い光を放ったかと思うと、どうみても騎乗用のサソリでしかなかった《シツカーリド》が、金属製らしい走行に覆われ、ハサミなども金属製になり見るからに戦闘に相応しい姿に変わった。尾の先は毒針の代わりにどんなものでも切り裂けそうな大鎌になっている。

「……これで満足か？」

その声を掛けたコーダの声は恐ろしく低く響く。口調も変わり、視線もさつきまでとは違い、冷たく感じる。外見以外のありとあらゆるものががらりと変わり、先ほどまで表に出ていた柔らかく、呑^の気な雰囲気は全て消えてしまっていた。

コーダの豹変ぶりにガナンは少し驚いたものの、恐れはしなかった。サソリが変化したように、これがこの男の“戦闘モード”なのだろう、闘う時と普段の態度が全く違う人間は珍しいわけでもない。

「成る程……そっちも召喚獣だったか」

普通のサソリに強化魔法を掛けて操っているのかと思ったが、普通のサソリをベースにここまでするのはさすがに無理がある。

計画からは大きく外れて、追いつかれたうえに、武力抵抗されることが確定したというのに、ガンンは心が弾むのを隠さずにはいらなかった。ガンンは魔導士ではないので闘った経験はない。しかしレーザーであり、闘うことへの憧れはあった。

この計画に際し、この“力”を手に入れ、はじめてその凄まじさを目の当たりにした時、実際に使ってみたくて仕方がなかったのである。

「ならば遠慮は要らん。行けっ！」

主の声に答え、巨大ムカデ《セディビート》はもたげていた首を大きく点に向かって伸ばし、仰け反ると、《シッカーリド》に向かって激しい炎を吐き出した。その大きな炎はあっさりとコーダの乗ったサソリを包む。

さらに《セディビート》は、持ち上げていた上半身を地面に降ろすと、燃えている《シッカーリド》にむかって一直線に突き進み、そのまま頭から体当たりする。足が沢山生えている分、力があるのは確かなようで、見た感じ、体当たりの衝撃はかなり大きいだろう。

「どうだっ！」と、ばかりにガンンは胸を張る。自分の持っている力の大きさが誇らしい。武力を持つということの素晴らしさが身にしみる。

が、流石にその異変には気が付いた。《セディビート》がずっとその体勢で留まったままなのだ。《セディビート》はガンンが命令しない限り、半自動的に攻撃を繰り返す性質なので、命令してもいないのに、あんな風に留まっているのは変だ。

次の瞬間、その異変の正体がおのずと分かる。《シツカーリド》を包み込んでいた炎も吹き飛ばされ、その中の様子が見られるようになったからだ。《セディビート》はあの炎の中、無傷でいた《シツカーリド》のいかにも強力そうなハサミに挟まれ、身動きが取れなくなっていた。

「少しは考えてから攻撃するべきだな。ムカデがサソリに適う訳がない」と、御者席からガナンを見下ろしていたコーダが、炎が燃え移ってしまった上着を脱ぎながら言う。

そして驚愕に目を見開くガナンの目の前で、《セディビート》は胴体から真つ二つに切断された。致命的なダメージを与えられた《セディビート》はその場に崩れ落ち、その体を構成していた魔力に還って、空气中に霧散していく。

コーダは《シツカーリド》から下り、労うようにその頭部を二、三度撫でてやると、強力無比だと信じていた自分の召喚獣が呆気無く消され、呆然としているガナンの傍をすたすたと通り過ぎ、「ジーフォリオン」の後部座席から棺にも見える大きな箱を運び出した。その箱に刻まれた魔導紋様を見て、コーダは納得した。

「なるほど、魔力封じか」

魔導制御研究の第一人者であるミルドの作ったアクセサリーの質は疑いもなく最高のものだったが、それでも強力すぎるフィラレスの“滅びの魔力”は抑えきれない。この箱のように大きさを気にしなければ抑え込むことはできるのだが、それではフィラレスの自由は失われてしまうのだ。ミルドはそのことを気にし、小さくすることこだわっていた。

ミルド製魔封アクセサリーの上にこのように大きさにこだわらず

に作った魔封じの箱に押し込めればほぼ確実に“滅びの魔力”は封じられる。

その箱は鍵が掛かっていたが、鍵開けならば便利屋としてそこそこの技術を持つているコーダはあまり時間を掛けずに開けてしまった。その中でフィラレスは何事もなかったかのように眠っていた。おそらく、あの“滅びの魔力による癒し”で長時間集中しすぎたのだろう。

彼女の無事を確認すると、コーダは彼女を箱の中から抱え上げ、運んで行く。《シツカーリド》を普通の“運搬モード”に戻すと、座席に優しく彼女を寝かせた。

(これで、何とかみんなのところに帰れるな)

そう考えると、先ほどから厳しく引き締まっていた顔が緩みはじめる。が、それも一瞬の事だった。

(……本当に、帰ってもいいのか?)

コーダは再び表情を堅くすると、先ほどから全く動いていないガナンの方を振り返った。

《セディビート》が敗れた時、ガナンは激しい虚脱感を覚えた。信じていた力があっさりと破られたことに驚いているだけではない。《セディビート》を構成していた魔力は自分が持っている魔力の殆どであったため、それが一気に失われたことで失血にも似たショックを受けているのだ。

固定された彼の視界の中で、あの凄まじい力をも押さえ付けた男が、“滅びの魔力”の少女を運んで行く。そして、その男、コーダ

は何を思ったか、少女を今は運搬サソリになっている《シツカーリド》の客室にのせると、ガナンに近付いてきた。

「え……あ……」

近付くほどに大きくなる威圧感に、ガナンはつい口を開くが、言葉にならない声のみがこぼれるのみだった。

そんなガナンに、コーダは視線をあわせるように座り込んで話しはじめた。

「その“力”をどこで、どうやって、誰から、手に入れた？」

混乱している人間にも分かりやすく、一言ずつ区切って聞くコーダに、ガナンは首を振った。

「い、言えない」

“力”は無償では手に入れられない。自分達の事を絶対に喋らない。喋れば死ぬ魔法を体に刻む。それが彼に“力”を与えた者たちとの契約内容だった。

「その連中はこうは言っていないかったか？ 自分の召喚獣が敗れた時、自分も死ぬと」

そのコーダの言葉に、ガナンは目を見開いた。それを否と受け取ったか、コーダは静かに告げた。

「生物の“召喚”はとてつもなく難しい。出来たとしてもまともに動くだけで精一杯だ」

それが何故、ガナンの召喚獣セディビートは火を吐いたりするなど、ふつうの生物にはあり得ない能力を持っていたりするのか。

それは術者が命を懸けているからだ。

それ一匹限り、それが死ねば自分も死ぬ。そういう風に設定し、契約を交わしているからこそ、持ち得た力だった。

「その様子だと、知らせられてなかったらしいな」

「な、何でお前がそんなことを」

知っているのかと聞こうとしたガナンははっ、と言葉を切る。

先ほどの説明に際し、コーダはガナンの《セディビート》にのみ触れたが、コーダの所有する《シツカーリド》も、否、《セディビート》をあつさりと破った《シツカーリド》こそ、異常なのだ。

事実に関が付いて行かないガナンをよそに、コーダはガナンの頭を挟み込むように手を添え、呪文を唱えはじめた。

「現れよ、汝の奥に仕舞われた記憶よ。語れ、汝の心に飛び交う思いよ。我は受け入れよう、《読み取り》て全てを受け入れよう」

後半部分は繰り返して詠唱された。語りかけるような甘美な響きと共に、ガナンの頭にそえられた手から光が発せられる。そのぼんやりとした光に、ガナンの頭には《セディビート》を手に入れた時の記憶が次々に蘇る。

計画への誘い、主任を裏切る事への苦しみ、将来への憂い、決心、何度となく秘密裏に開かれた会議、主任の目を盗みながらの作業。

そして、ディオスカス直々の呼び出し、“力”を持つことの利点の説明と、了承の確認。目隠し。暗闇の中での会話。知らない声。ウォンリルグの技術。その一族が。烙印魔法。バレはしない。あくまで保険。やられたら終わり。耳もとで囁かれる声。暗黙が“力”

の代償。

激痛、そして暗転。

試験使用。現れた《セディビート》。目の前を覆い尽くした炎。快感。“力”を得たことで生まれた周りに対する優越感。なかなか進まなくなつた魔導レーサーの開発。計画が狂うことへの恐れ。焦り。主任の休暇。帰還後の主任の張り切り。はかどる開発。ほぼ完成。

そこで、コーダが手を離し、フラッシュバックは終了する。《読み取り》は術者に精神的疲労を強いるのか、コーダもガナンと同じく顔面に汗を浮かばせて大きく息を付く。

「これで、喋ったことにはならん」コーダはそう言って、今度はガナンの腕をとって続けた。「このままだとお前は死ぬ。その前に刺青を消すぞ」

頷くこともせず、呆然とコーダを見ているガナンをよそに、彼は刺青の端に手をかけると、呪文を唱えはじめた。

「汝に刻まれし業よ、痛みと共に消え去れ。汝を縛る《烙印との別れ》によりて」

詠唱を終えると、コーダは光を帯びた手で刺青を撫でるように手を動かした。

とたんに、刺青の部分が熱を帯びはじめ、間もなく激痛に変わる。

「く……あぁっ！」

「我慢しろ。これしか方法がない」

痛みにガナンが暴れようとするのを、コーダが必死で押さえ付け

た。このまま暴れさせておくと、どこかにぶつけて大きな怪我に繋がる恐れがあるからだろう。口調は戦闘の時と変わらず淡々としたものだが、ガナン自身に対し、悪い感情は抱いていないようだ。

ガナンの体を襲う激痛は数十分も続いた。実際はもっと短かったのかもしれない、苦境では時の流れは遅くなる。一応の問題が解決されたのか、コーダは自分のカラダを押さえ付けていた腕を離すと、すっと立ち上がった。

朦朧としているガナンの視界の中で、彼はくるりと踵を返し、運搬サソリの方に歩いて行く。その時見えた背中に、ガナンは思わず声を漏らしかけた。

その背中には、サソリを象ったものと思われる刺青が施されていた。

コーダは焼けて穴が空いてしまったものの、取りあえず火は消え、焼けたところの熱も引いたらしい上着を着直すと、《シッカーリド》の御者席につく。

そしてしばらく、そのままぼうつ、と前方を見つめていたが、やがて目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をすると、《シッカーリド》をエンペルファータ方面に向けた。

「……帰りやしょうか」

それが正しいのかは分からない。間違っているとしても、童顔が悩みの青年魔導士はきつと自分を笑顔で迎えてくれるだろう。

何より、コーダは彼等の元に帰りたいかった。

38 『そして最終段階へ』

道が重なる。

時には平行に、あるいは遠ざかった二つの道が交わった先は一つの道。

ただ一つの結果。

光が見える。

一つずつ昇った階段の先に見える出口の光が。

最後の一段の先は光の中。

そこに何があるのかは未だ見ることは適わない。

魔導研究所行政部管制エリアは基本的に棟ごとの管制室に分けられて配置されている。第四管制室はその中で魔導学校棟を管理監視する為にある部屋だ。

計画の第二段階においてディオスカス自身やガンなど数人の例外を除くと、基本的に制圧状態を維持し、ディオスカスがこの研究所の“宝”を手に入れて来るのを待つだけ、平たく言えば退屈な段階であり、この部屋にいた二人の魔導士はもっぱら会話を楽しんでいた。

「おい、今何時だ」

「そろそろ赤橙せきとうの刻せきとう（午後四時半）ってところだな。計画通りならもうすぐディオスカス様から連絡が入るはずだ」

一人の質問に、壁に掛けてある時計を見てもう一人が答える。

「なあ、ウォンリルグに行ったら俺達どうなるんだ？」

「基本的に今までと変わらんだろ。ディオスカス様についていくだけさ」

ディオスカスの計画は、ウォンリルグに脱出するまでで、その先の事は論じられていない。ただ、クーデターの計画を立てる段階でディオスカスの口から聞いた、魔石の豊富なウォンリルグで新たな魔導文明の黄金期を造り上げる、という話からするとウォンリルグに新しい魔導研究所を作るつもりなのだろう。

「しつつかし、男ばかりでムサいのはいただけいな」

「あっちにもいい女の一人や二人くらいいるだろ。それに家族を捨ててく奴が言ってたんだが、うまくいけばあっちに家族を呼ぶことくらいはできるらしいぜ」

「何にせよ夫婦共に開発部に勤めているやつが羨ましいな」

無論、開発部や魔導士団の全員が独身と言うわけではない。今回ディオスカス達に協力するものたちの約半数は結婚し、家族を持っている。が、今回の亡命でその家族を連れて行くことは出来ないと言われていた。

ディオスカスに言わせると、家族も含めると足手纏いが多すぎることになる上、計画の秘密が漏れる恐れもあるということだった。

「物価とか、品揃えとかはどうなんだろうな」

「ウォンリルグは資源が豊富だって言われているから案外安いかもしれないぞ？　ただし魔導器関連はあんまり充実していないだろうなあ。あっちは遅れてるっていう話だし」

「いや、案外こっちよりずっと進んでいるのかもかもしれない」

最後の背後から聞こえた声に、話していた二人は驚いて振り返った。そこにいたのは明らかにディオスカスの一派には入っていない人物だろう。魔導研究所内で、彼、行政部長エイスマークシオの顔と名前は割と広まっている方である。

入り口には見張りが立っているはずだが、何故気付かれもせずここまで入り込んでこられたのか。

その答えを得られる前に、二人の意識は吹き飛んだ。

「どのみち、君達にウォンリルグに逃げ込ませるわけにはいかなかったわけだが」

意識を失い、足下に転がった二人の魔導士を見下ろしながら独り呟く。

とりあえず部屋の外に出たエイスの耳には騒々しい物音が入り込んできた。見ると、入る時には扉の脇に立っていた見張りの魔導士がいない。そんなエイスの元に一人の魔導士が吹き飛ばされてきた。エイスの記憶が確かなら、この魔導士が見張りの魔導士だったはずだ。

吹き飛ばされてきた方向に目をやると、何人も魔導士が、少年魔導士と、女性魔導騎士という二人の侵入者を迎え撃っている。いま吹き飛ばされてきたのも、そうして迎え撃ち、返り打たれた一人だ。

まだ争乱は続いているものの、戦闘はほとんど終わっており、何人も魔導士達があたりに転がり、残った魔導士達が撤退を叫んでいる。

廊下に静寂が訪れ、一息付いた後で自分達を眺めて待っているエイスの姿に気が付いたのだろう、侵入者の片割れである魔導士、カイエスが戦闘直後とは思えないほど呑気な声で声を掛けた。

「ああ、もう終わってしまったんですか。《不可視》つちゅうのも便利な魔法ですなあ」

今回のクーデターでは、限られた人数で広い魔導研究所全体を掌握しなければならなかったため、この管制エリアの制圧は最優先で行われ、配置されている魔導士の数も他のエリアより圧倒的に多い。それでもカーエス達には突破出来る自信はあったが、そんな状況では戦闘が大規模になってしまい、必要な機器まで巻き込まれて壊れてしまうことになる。そこで、対象の姿を消すことが出来る魔法《不可視》で姿を消したエイスが先に目的の部屋に忍び込み、おんひん穩便に事を片付けるのと同時にカーエス達が作業の邪魔になりそうな他の部屋の魔導士を倒しておいたというわけだ。

「さて、しばらくは邪魔が入らないでしょうし、始めましょう」

ジェシカの声に、エイスとカーエスは頷き、うなず第四制御室に入った。

第四管制室は、魔導学校の主要な場所を映す投影器が沢山あり、その下には様々なものをコントロールする制御盤がある。エイスはしばらくその制御盤を見て回っていたが、やがて魔導学校の閉鎖用隔壁を操作する装置を見つけると、その前に座る。

ジェシカは万が一邪魔が入った場合に備え、部屋の外で見張りに立っている。

残ったカーエスは手持ち無沙汰になり、エイスと同じように幾つかの制御盤を見回っていたが、やがてあるものを見つけて作業中のエイスに声を掛けた。

「エイスはん、俺一応、伝声器で誰か呼び掛けてみようか思っんで

すけど」

「ああ、それはいい考えだな。今の段階で連絡がとれれば、後の事がずっとやり易くなる」

了解、とカーエスは頷いて伝声器のチャンネルを魔導学校の学生ラウンジに合わせた。非常事態にはそこで集まり、待機することとして一応の訓練がなされていたからだ。

回線を開き、話し掛ける。

「こちらは行政部第四制御室。応答を願う」

「こちら魔導学校学生ラウンジ。用件を伺う」

「あ、通じとる」

意外にすぐに返事が返ってきたため、カーエスが思わず驚きの声を漏らす。

その声を聞きとったのか、相手の方が続けて尋ねた。

「その訛りはカーエスか？」

「あ、その声はシューハ先輩？」

カーエスは見知った声に反応する。

シューハはランドー。カーエスより四年上の先輩にあたる魔導学校の生徒である。そしてあることでも有名だった。それは十三年前までファルガール・カーンの受け持つ教室の一員だったからだ。ファルガールが魔導学校を去った後、シューハやクリン、クランといったファルガールの生徒達は別の教室に引き取られ、またその後の一師一弟制への移行に伴う混乱によって、大半は魔導学校の外に出て行った。

それでもシューハとクリン、クランを含み、五人ほど生徒として

学校に残っていたが、彼等のほとんどはファルガールの考え方に深く共感しており、ファルガール派と呼ばれた。

その中で、独自に“双魔導”という非常に珍しい魔導形態を完成させ、教師の資格を得てファトルエルの決闘大会に出場する榮譽を受けることが出来たクリン・クランを除き、ファルガール派の生徒達は、十分な実力があるにも関わらず、ファルガールを疎んでいた元魔導学校長ディオスカス・シクト、そしてその腹心の部下であるドミニク・バージャーによって教師になることも、上級魔導士の資格をとることも出来ずに、最年長の生徒として今も魔導学校にいる。

そんな不遇の扱いを受けていても決して腐らずに、いろいろ教えてくれたシューハはカーエスにとって恩のある存在であり、師の力に次ぎ、尊敬の出来る人物だった。

「やっぱりカーエスカ。返ってきたとは聞いちゃいたが、何でお前がそこにいる？」

「いろいろあったんですよ。それより、そっちの状況はどないですか？」

「ああ、いつでもいけるぜ」

あっさり返ってきた答えに、カーエスは一時言葉を失ってしまふ。

「え？ どないな意味です？」

「だから、そっちから封鎖を解いてくれるんだろ？ そしたら魔導学校のみんなでディオスカスの奴らを迎え撃てるだろうが」

そういって、シューハは魔導学校の全ての生徒が学生ラウンジにあつまり、シューハ達ファルガール派がそれを纏めているというのである。

闘う生徒も既にシュー八によって選抜されていた。下級魔導士以上の資格を持つもので、実践訓練に十回以上出たことがある生徒を選び、三十名ほどいる、とシュー八は言う。

今は、それぞれの使える魔法、得意な戦法などを一人一人から聞きながら、作戦を練っているところだったらしい。

それを聞いたカーエスとエイスは思わず顔を見合わせた。魔導学校の中は思った以上にいい状態だ。

『おい、聞いてんのか？』

「ああ、すんまへん。何か望みが見えてきたなあ思いました」

そう言つて、カーエスは今のところ分かっている状況をすべてシュー八に知らせる。

「ここには行政部長のエイスはんもおるんです。もうすぐ封鎖を解きますけど、しばらくはそこを動かんといて下さい。こっちもできるだけ仲間つれて向かいますんで」

『了解だ』

エイスによつて、魔導学校の封鎖を解かれると、彼等は今も一度動かされることのないように制御盤を破壊し、三人揃つて医務室に戻ってきた。

「あ、お帰りなさい」と、医務室に返つた三人を迎えたのはミルドである。その隣にはテイタも座っていた。

「テイタはん、ミルドはん、無事やったんですか」と、嬉しそうにカーエスが二人に駆け寄る。

「まあ、なんとかね」と、ミルドが自嘲じみた笑みを浮かべて答える。そして、自分達にあったことを事細かに説明した。

カーエス達は基本的に静かに聞いていたが、流石にミルドが魔導士、それもよく話に聞く“風魔”だったというところでは声を挙げて驚いた。

「まあ、そんなわけで、戦闘をする時には僕も参加します」

「それは願ったり適ったりだな」と、静かにエイスが答える。

カーエスは噂程度にしか聞いたことがなかったので、真偽の別も付かないが、エイスは違う。要請を受けて、そこに魔導士達を送り、報告を受けるのは行政部の仕事である。そうやって、“風魔”ミルド、イーヴイスに関する報告を実際に受けたので、実際に現場に行った魔導士達には適わないものの、彼の強さはかなりのレベルで実感しているのだ。

カーエス、ジェシカ、ミルドと、一騎当千に値するようたとび抜けた実力を持つ魔導士に加え、魔導学校の生徒達の戦力。可能性は高まるばかりだ。

「で、そっちはどうだったんだい？」

「上々でしたよ」と、カーエスがシューハから確認した魔導学校の様子を語る。「それでこれからみんなで移動しよう思っんですけど」

カーエスの提案にジッタークが質問を挟んだ。

「それはええけど、俺とかリクはついてった方がええかな？」

「連れて行きましょう。リク様はもう治療の要る体では無くなっていることですし、それなら全員固まった場所にいた方が」

ジェシカが答えると、全員が頷く。

「ほな、リクは俺がおぶっていったるわ」

「いや、ワシの方がええやろ。万が一敵に遭ってもうたら適わんし」

リクを担ぐと、自動的に戦闘力が奪われることになる。となると、戦力でないものが担ぐというジッタークの提案は当然の事だろう。

しかし、そんなジッタークにカーエスは笑みを浮かべて答える。

「大丈夫、大丈夫。どのみち両手使えんかったって魔法は使えるし、ここには他にもようさん強い人はおるしな。いざとなったらいつでも落とせるし」

そう言っつて、カーエスは寝台に眠ったままのリクに近付き、その顔を覗き込む。先ほどまでの苦しみようはどこへやら、遊び疲れた子供のような無邪気な寝顔を曝し、安らかな寝息を立てている。

カーエスは、彼の腕を引き、背中に担ぎ上げようとした時、思わず膝を付き、床に身を崩しそうになった。

(疲れとるんか……俺?)

思えば、リクが倒れてから今まで走り通し、闘い通しだった。気が付いてみると、全身の筋肉が悲鳴を上げ、精神は頭痛と共に休息と睡眠を要求している。そういえば、昼食も食べそびれたままだ。

ふと、ジェシカに目をやった。カンファータ魔導騎士団の訓練の賜物たまものか、彼女は相変わらず凜々(りり)しく直立の姿勢を保っているが、心無しか表情の覇気が薄れているような気がする。彼女も、今回はカーエスとずっと一緒に行動していた。白兵戦を得意とする分、肉体の疲労はカーエスとは比べ物にならないはずだ。

「……まったく、クソ忙しい時にぐーすか眠りよって……」と、カー

エスは肩に乗ったリクの頭を振り返って毒づいた。そしてしっかりとリクを担ぐと、医務室のドアに向かって歩き出し、その後、他の者達が続いた。

（まあ、精々身体休めてろや。おんどれが起きるまでは何とか俺らが頑張ったるから）

何故だろう、とカーエスは自問する。

リクが無事である限り、希望が続いている気がする。諦める気にはなれない。

精一杯粘っていれば、いつかリクが全ての絶望を払ってくれる気さえするのだ。

「……そうか」

アルムスが“ラスファクト”を納めた、セーリアの心臓部の扉のロックを解除をするために作業をしている横で、ディオスカスは受けた連絡に眉をぴくりと反応させた。

「何かあったのかね？」

投影器の映像から目を離さずに尋ねてみる。

「魔導学校の封鎖が解かれたらしい。実行犯はどうやらエイズとカーエス＝ルジュリス、あとはジェシカ＝ランスリアとかいう女魔導

騎士らしいな」

先ほどの連絡は襲撃を受け、撤退中の魔導士からだった、とディオスカスは告げた。

聞いても無駄だと思い、駄目で元々のつもりで尋ねたのだが、答えてくれるとは思っていなかったアルムスは、頭の中で情報を整理する。

「魔導学校の封鎖が解かれたということは……」

「魔導学校の生徒達を相手にしなければならぬ」

ディオスカスは、代わりに結論を言うと、ククク、と喉の奥から笑いを漏らした。

その反応が理解出来ずに尋ねる。

「何故笑う？ 予定通りには行かなくなったと言うことだろうか？」

「確かに、多少苦勞をすることにはなるかもしれない。だが、上手く行き過ぎるのも詰まらぬと思っていたところだ。それより、手を止めないでいただけるかな？」

ディオスカスの言葉に、アルムスはむっとして言い返す。

「パスコード解除は全て終わって、今は全ての魔導を停止しているところだ」

後一分も待てば終わる、というアルムスの言葉に、ディオスカスは満足そうに頷いた。

「余裕ぶっているが、いいのか？ 魔導学校の生徒の質は意外に高いぞ」

知らないわけがない。仕事上の関係から言えば、元校長であり、今もその校長を腹心においているディオスカスのほうが、アルムスより生徒に近いのだ。魔導士団を仕切っている以上、将来の戦力になる生徒達の能力は把握して^{しか}いて然るべきだ。

「構わん。魔導学校の未熟な生徒ごときに負けるような奴は必要無い。人材など向こうにいくらでもいる。丁度いい淘汰^{とうた}の機会だ」
「淘汰で済むと思っっているのか？」

今、あちら側にはカーエス、ジェシカに加え、エイスがいます。それを軸に魔導学校の生徒が相手になるのだ。十分勝機があると言える。

すると、ディオスカスはにやりと笑って答えた。

「済むとも。最低でも私一人は残る」

何とも不敵な断言に、アルムスは言葉を繋ぐことが出来なかった。ディオスカスの魔導士としての強さは本物だということはアルムスも知っている。“冷炎の魔女”マーシア・ミスターシャ、“完璧”カルク・ジーマンがいない今、疑いようもなく彼が魔導研究所最強の魔導士だろう。

しかし、そんな魔導士でもズバ抜けた腕を持つカーエスやジェシカ、エイスを同時に敵に回して勝てるものなのだろうか。

その時、不意に静寂が訪れた。元々この空間には大掛かりな魔導の為に生じる小さいが重い音が常時響いていたのだが、それが止まったのだ。同時にあちこちの光が消え、部屋の薄暗さが増す。

長きに渡ってエンペルファータを守り続けてきた、都市対象万能障壁構成魔導器“セーリア”の、史上初の運転停止だった。

「御苦労」

ディオスカスは、大股でセーリアに歩み寄ると、その正面に立った。目立たないが、そこには四角い切り込みが見え、取っ手のようなくぼみが真ん中に付いている。

ディオスカスはそれに手をかけると、その扉を観音開きに開け放った。中からは白い煙が漏れ、その中心には、メダルのような形をした空色の宝石が輝いている。

「これが“ラスファクト”《テンプファリオ》か……」と、ディオスカスは慎重にその宝石に手を伸ばし、手のひらより二周りほど大きなそれを手にとった。

“ラスファクト”からは湯気のように、光が立ち上っており、この宝石が先ほど扉を開けた時に出てきた煙の源だったと知れる。そしてその煙はこの魔力溢れる存在から漏れ出ている魔力が具現化したものらしい。

一見する限り、この“ラスファクト”の残留魔力のことで、この間まで悩んでいたとは思えない。

「枯渴しかけていても、そのあたりはそこらへんの魔石とは違うな」

ディオスカスはそれを、腰に下げていた袋の中に入れる。“ラスファクト”は魔力に触れると大災厄を呼ぶという報告を聞いたことがある。おそらくその袋は魔力を通さない“断魔布”だんまふで出来ているのだろう。

そして、動力源を失ったセーリアには欠片ほどの興味を持たないで行った感じで背を向け、つかつかとアルムスの元に戻ってくる。

「欲しいものは全て揃ったわけだが、これからどうするつもりだ？」

ウォンリルグへの亡命と行っても、エンペルファータさえ無事に脱出できれば終わるものではない。北に向かい、ウォンリルグへの国境を越えてこそ完了するものだ。エンペルファータを抜けても、あちらに付くよりは早く各国首都、そしてフォートアリントンに連絡をすることが出来る。

「取りあえずは気ままに列車旅などをしようかと」

魔導列車を使ってウォンリルグに向かうということだろうか。確かに大人数で移動するには列車は効率的だが、その分ルートが限られてしまうので、先回りは容易になってしまっただが。

「ですが取りあえずは」と、ディオスカスは続けて答え、アルムスに笑いかけた。「用済みになったあなたに死んでいただこうか」

アルムスが言葉の意味を理解するより先に、ディオスカスの手が彼の頭を掴む。

そして彼が反応する前に、ディオスカスは掴んだ手のひらから魔法を放ち、アルムスの頭が吹き飛んだ。

びしゃ、と足下の血溜まりの中にエンペルファータ市長兼魔導研究所所長という肩書きをもっていた死体を放り捨てると、ディオスカスは制御盤に近付き、伝声器を起動させ、全所内放送に設定して告げる。

「ディオスカス」シクトより、同志諸君に告ぐ。今を持って計画の第二段階を終了する。続いて、最終段階に入る。抵抗勢力による邪魔が予想されるが、一切相手にはせず、第七地点に集合することを

優先すること」

ディオスカスはもう一度繰り替えて言うと、“伝声器”を切り、踵を返して引き返そうとする。その途中に、アルムスの死体があり、彼はそれを見下ろして呟いた。

「全ての過去を背に、我は無に身を投ず」

昔、他国に亡命した詩人は、自分の行為をそう言い表したのだが、ディオスカスは上手いことを言ったものだと思う。

エンペルリースの帝都に生まれ、才覚を現わしてエンペルファータにやってきて以来、今日まで続く自分の歴史はここで一度終わる。そして、未知の土地に待つ未来は予想し得ない全くの“無”。光でもない、闇でもない、無。

ディオスカスはそれでもいいと思う。

後ろを向いて横に歩いていた現状を捨て、無に光を信じて前に進むこと。

それが、彼等の望みなのだから。

39 『両勢揃って』

そこには二種類の間達がいた。

犠牲を払ってまで前に進もうという者達。

その犠牲に見兼ねて止めようとする者達。

迷いはあったのかもしれない。

正しいのか、間違っているのか。

だから、その闘いは必要な者だった。

それぞれの考え方を信じ、ぶつかりあう事で、

確かな形で自らの考えが正しい事を証明するために。

それは迷いを振り切る闘い。

正否を神にゆだね、決める闘い。

その結果は誰にも分からない。

『愚者から賢者への物語』が描かれた長い通路の向こうに見える学生ラウンジには沢山の生徒達の姿が見えた。あちらからもそれは認識できたらしく、自分達の方に向かって歩いてくるカーエス達の姿を見て、色めき立った。

口々にカーエスの名を叫び、ディオスカスという強大な力相手にここまで生き残り、あまつさえ魔導学校の解放までやってのけたことを賞賛し、まるで一人の英雄である。

その生徒の中から、明らかに年長者と見える、長身で、長いアシユブロンドを後ろで束ねた精悍なイメージを持つ男、シューハッランドーがカーエスに近付いてきた。

「よう、カーエス。お手柄だな」

「いや、エイスはんも、こっちにおけるジェシカもおりましたし、どつちかというところエイスはんのほうがよう働いとつたかと」と、カーエスが照れくさそうに答える。

その言葉に、シューハがカーエスの後ろにいる者たちに目を向ける。

「行政部長も無事で何よりです」

「君とは何度か会ったことがあったね、シューハ＝ランドー」

そう言つて、二人はがちりと握手を交わす。

そんな調子で、取りあえず自己紹介を済ませて行く。当時魔導研究所にいた人間は、ジッタークと、“風魔”であったミルドの存在に驚いたようだった。半ば伝説と化していた二人に、直接会う日が来るとは思っていなかったのだ。しかも、こんな騒動の中で。

「随分と豪華な面子だな、カーエス？」

「ジットのおっちゃんの前から知つとつたんですけど、まあいつの間にか」

シューハは、そう答えて苦笑するカーエスの横で眠る顔に気が付いた。

「その、お前が背負つてる“女”は誰だ？」

その言葉に、カーエスとティタ、ミルドが噴き出して笑う。

リクが童顔を気にしていることを知っているジェシカは笑わなかったが、肩のあたりがふるふると震えていた。確かに起きている時

はともかく、リクの寝顔は女性に間違えられても仕方がないほど、可愛いとしか表現のできないものだ。

意外な反応に怪訝けげんな顔をするシュー八に、カーエスが笑い終わるのを待つて答えた。

「一応男ですよ、コイツ」

「え？ そうなのか？」と、リクの顔を覗き込むシュー八に、カーエスは続けて言った。

「リク＝エールって言いまして、シュー八先輩の弟弟子になるんですかね、ファルガール＝カーンの教えを受けた魔導士なんですわ」
「……何？」

その言葉に、生徒の中から後二人、ばたばたと駆け寄ってきた。シュー八と共にファルガール派と呼ばれる生徒達である。

「カーエス、お前、ファルガール先生に会ったのか？」

「ええ、ファトルエルで。今は別行動なんですけど」

シュー八達の顔を見て、カーエスは告げて良かったのか、と自問した。当時、カーエスは魔導学校にいなかったが、周りの話からすると、ファルガールの出奔しゅっほんは突然で、客観的に見ると、捨てられたのも同然だったという。

それからシュー八達を取り巻いた不遇を考えると、彼等の旨に抱く感情はさぞ複雑なものだろう。

「で、何で寝てるんだ？」

「まあ、色々あったんですよ。いつ起きるかは分からへんで、こいつは戦力に入れん方がええでしょう」

「ああ、そうだな。全部終わって、目を覚ましたら色々先生の話

聞くとするか」と、シュー八は納得した様子で頷く。

「とにかく、今は一刻も早くディオスカス達を迎え撃つ作戦を練らなければならぬ」と、提案したのは最年長のエイスである。

「行政部長の言う通りだ。取りあえず俺達の案を聞いてくれ」と、シュー八が今まで練っていた策を説明する。

「結論から言うとだな、俺達は個ではなく団で闘う」

魔導士養成学校を抱える魔導研究所の魔導士の質は高いこと有名である、エンペルリース、カンファータ両国の国立魔導士団の中にも多数、魔導研究所出身の魔導士が所属しているのだ。

そうして完成された魔導士団の魔導士達とただ闘って勝てるわけがない。数はあちらの方が多いのだ。

そこでシュー八が考えたのが集団で闘うことだった。一つの魔法を全員で使うことによって、相乗効果で威力を大きくしようという作戦だ。

魔導研究所の魔導士は有力と有名だが、魔導士団としてはさほど有名ではない。つまり個々の実力はあるが魔導士の集団としての機能は他の魔導士団とくらべると遥かに劣るのである。所属する魔導士のほとんどが専職で魔導士団に勤めているわけではないので、それは当然なのだが、要するに一集団としての纏まりまとに欠けるといのがエンペルファータ魔導士団の一般の評価だった。

「そこへ行くと、俺達は学校で“集団魔法”の練習はするしな」

“集団魔法”のカリキュラムは、ごく最近に取り入れられたものだ。週に何度か生徒を一所に集め、全員で一つの魔法を行使する練習をする。“集団魔法”の訓練をカリキュラムに取り入れることを提案した張本人であり、二人でいち魔導士、と公言するクリニック

ランの“双魔導”程の精度は誇らないものの、全員で唱えれば通常の一・五倍の威力は出せるはずだ。

「ほしたら、指揮はジェシカに任せたらええと思いますよ」と、カーエスが口を挟んで提案した。

ジェシカは元々カンフアータ魔導騎士団という集団の、副団長という地位にいた者だ。集団を指揮することには慣れているだろう。それに幾つか集団対象の補助魔法を使えたはずである。大災厄の発生で大量に押し寄せてくるクリーチャー相手に魔導騎士団を見事に指揮して蹴散らしていた事は記憶に新しい。

「そうだな、……頼めるか？」と、シューハがカーエスの後ろに立つ凜々し気な女性魔導騎士に話し掛けると、ジェシカはこくりと頷いた。

「やれるだけやってみよう。“集団魔法”で使える魔法を教えてください」

シューハは頷いて、ジェシカに大雑把に自分達の使える魔法を提示して行く。ジェシカも、自分が指揮官として何が出来るのかを明かした。

それを軸に、カーエス達も加わって、エイスが持つディオスカス達の情報を合わせて作戦を練って行く。

ちょうど、作戦が大雑把に決まったところで、所内放送のスイッチが入る音がする。

『ディオスカス』シクトより、同志諸君に告ぐ。今を持って計画の第二段階を終了する。続いて、最終段階に入る。抵抗勢力による邪魔が予想されるが、一切相手にはせず、第七地点に集合することを優先すること』

「いよいよだな……」と、エイスが堅い表情で言った。

「第七地点つていうのはどこか分からないんですけど、ドミーニクは魔導列車を使って、エンペルファータを脱出する計画だと言っていました。下手に集まる前の人達に手を出すと見逃すこともありま

す。だから駅前の広場で待ち構えていた方が」

ミルドの提案に、カーエスとジェシカも頷く。

「そうですね、奇襲もありでしょうけど、逆に言えばこっちも浮き足立つことになりかねへん」

「どっしり待ち構えて、落ち着いて作戦を実行した方が確率は高いな」

シューハもそれに同意し、魔導学校の生徒達に向かって叫んだ。

「よし、テメエら！ 向かうは駅前広場！ 上手くやれば絶対に勝てる！ 気合い入れて行くぞ！」

おお、と全員が呼応する声が学生ラウンジに響いた。

同じ頃、計画内で第七地点と呼ばれる中央ホールにも、おお、という声が上がった。この場合は感嘆の声ではあったが。

このクーデターを指揮するディオスカスが、地下から中央ホールに到着したのだ。

先ほどまで、カーエス達抵抗勢力に押され気味で、ディオスカス

派の者達は土気が下がっていたのだが、今は自分達が付いて行くと決めた指導者が目の前にいる。そう思うだけで、安心感が増すのだろうか。

ディオスカスは自分の名を呼ぶ声に答えつつ、威風堂々とした歩みで“無知なる大樹”に歩み寄る。

そうして大樹の下に立つディオスカスに、各班の代表が点呼の報告に来る。

住居・宿泊施設棟を警備していた者たちは全員揃っている。研究所を警備していた者たちもあらかた揃っているが、カーエス達の邪魔をするように指示した者たちは欠けていた。だが、解せないのはドミーニクの不在である。

「ドミーニクはどうした？」と、ディオスカスが聞くと、魔導士達の一人がドミーニクをはじめとする遊撃班が研究所の片隅で倒されていたことを報告する。

「そうか」と、報告した魔導士に労いの言葉をかけると、自分と一緒に地下に潜っていた側近の魔導士が尋ねてきた。

「ドミーニク様を回収されますか？」

「いや、自分の責務も全う出来ん奴はどのみち要らん。貴様もやらねばおいて行く。そうならない為にもしっかりと動くんだな」

点呼が終わると、一同は静かになり、じっと大樹の傍に立つ指導者を見つめる。

その注目に応えるように、ディオスカスはゆっくりと、大樹の周りを歩き始め、同時に演説を始めた。

「同志諸君、諸君の協力において、壮大に思われた計画をここまで

実現することが出来たことを感謝する」

静かになった中央ホールの巨大な空間に、ディオスカスの低い声が通る。

「しかし、計画に反し、抵抗勢力の力は大きく、魔導学校の封鎖が解除され、我々はその一派と闘わなければならなくなった」

大樹を回りながら、ディオスカスは自分に注目する魔導士一人一人と視線をあわせるように目を配った。

今現在五十名近くいる一団の一人一人が、故郷を捨て、裏切つて、自分に付いて行くと決めた者たちだ。新天地で、魔導文明第二の黄金期を造り上げることを選んだ者たちだ。

「普段、教師をしている者たちの中には、自分の弟子と直接闘わなければならないのかもしれない。師匠と弟子、まともにやれば、負けるはずがない。しかし、それでもあちらは必死で闘って来るだろう。我々を止めようと、それこそ命を懸けて立ち向かって来るだろう」

これだけの人数がいれば、中には迷っている者もいる。

「だが、情けを掛けて手加減しようなどとは思わぬ。我々は選んだのだ！ “過去を背にし、無に身を投ずる”事を！そして誓ったのだ！ 背にした過去は決して振り返らない事を！」

その迷いは、今ここで断たなければならない。

「それ以外の者も皆同じ。家族を残して行く者もいる、大切な者を裏切る結果になる者もいる。これから臨む闘いは、その過去を振り

切るための闘いだと思え！」

それは、ディオスカス自身にとっても同じことだ。

「何もない“無”から、光を見つけだす強さを得るために！ 再び前を向いて歩んで行くために！」

力強いディオスカスの声に応え、その場にいる一同も中央ホールを揺るがさんという大きさの音が響く。

その声を受けて、ディオスカスは口元を持ち上げて笑う。今ここにいる者たちに迷いはない。

「行くぞ！」

ディオスカスは先陣を切り、進軍を開始した。

エンペルファータの真ん中にある魔導研究所、そのすぐ北には魔導列車の駅がある。東のカンファータ方面、西のエンペルリース方面、そして北のフォートアリントン及びウォンリルグに続くエンペルファータの駅は大きい。

北側の入り口が正面入り口となっており、その前は広々とした広場になっている。

今、その入り口前では三十名ほどの若い魔導士達、おそらくは魔導学校の生徒達と思われる者達が整然と並び、正面を見据えている。

まだ何も知らない街の人間達は、何が起こったのかと揃って公園を取り囲んでいた。否、何かが起こったのであることは確かだ。先ほどまでは快適な温度を保っていた街の気温が、今はじつとりと汗ばむ暑さとなっている。これは、エンペルファータに最大の恩恵を与える魔導器“セーリア”の運転が止まったことを意味していた。そんな野次馬達の一角で新たにざわめきが起こり、取り囲んでいた者たちの一部が左右に分かれた。その間から歩み出てきたのは、魔導研究所開発部長兼エンペルファータ魔導士団長・ディオスカス。シクトが率いる五十名ほどの魔導士達だった。

そんな二つの団体が対峙する形で向かい合えば、住人達にもこれだけは理解できた。この二つの集団はここで闘うつもりなのだ。

ディオスカスの一団が、生徒達の前に並び立つ。双方にらみ合ったまま、沈黙の時間が過ぎて行ったが、その沈黙を破ったのはディオスカスだった。

「そこを退け、と言っても無駄なのだろうな、エイス、にカーエス。ルジュリス。貴様らのお陰でだいぶん予定が狂った」

生徒側の戦闘に立っていたカーエスとエイスは、ディオスカスに話し掛けられ、一歩前に出て答えた。

「そんな気がちよつとでもあつたらハナからここまで来とらんわい」
「貴様こそ考え直すなら今の内だろう。研究所から奪ったものを返せば、まだ引き返せる」

エイスの言葉にディオスカスが嘲るように笑って答えた。

「二人、殺した」

その短い言葉に、二人が目を見開く。

「所長のアルムスを含めて、な。……もう引き返せる段階ではない。これだけ血を浴びたのだ。もとより、今日の白の刻、計画開始から私には止まるつもりなど毛頭ない。それが私の覚悟であり、決意だ。止めたければ私を倒せ。」

その機会なら今、ここで与えてやる。私、いや我々にもこの闘いは必要なものに感じられてきたところだ」

その言葉に、カーエスはディオスカスの後ろに立つ者たちを見回した。その目を見て彼は確信した。ディオスカスだけではない、彼等にもう、迷いなど存在していない。

「阿呆が……」

ディオスカス達の目的はエイスから聞いて知っている。魔石不足で、ほとんど進歩しなくなった魔導文明を憂^{うれ}いて、魔石が豊富にあるウォンリルグに移動し、再び魔石を好きなだけ使って魔導文明のさらなる発展を図るつもりなのだ、とエイスは言っていた。

そのために、今まで育ってきた国や人々を捨てて、自分が過去にやってきたことも捨てて行くことが何故出来るのだろうか。

結果的に、エンペルファータを裏切ることになり、これから起る可能性が高くなってきたウォンリルグとの戦争が激化すること、ディオスカスは承知の上だろう。彼はそれでも魔導文明が発展するための犠牲だと言うのかもしれない。

だが、人の為にある文明が人を殺して何になるのだろうか。

「……どうだ？」

陣形の真ん中で油断なく、ディオスカス達に目をやりつつ尋ねたジエシカに、カーエスはかぶりを振った。

「……あかな。止まりそうもあらへん」

「私達で止めるしかないだろうな」

カーエスとエイスの言葉に、その場にいた全員に緊張が走る。

こうして対峙すると、多勢に無勢なのが良く分かる。魔導士の質も熟練した者がほとんどのあちらの方が上なのだ。

皆が固唾を飲む中に、ジエシカの声が響く。

「恐れるな。勝算あってこそ、私達はここにいる」

その言葉に、一同は先ほどたたえた作戦を思い出す。それを聞いた時には必ず勝てると思った。勝算はあるのだ。

「戦闘開始だ。全員、精神集中しろ。私の合図と共に“攻の一式”、詠唱開始だ」

エンペルファータ史上初のクーデターの幕は近い。

40 『迷いは躊躇い』

彼等は強い。

何故なら迷いが無いから。

恐れが無いから。

自分達が傷付くことに対する恐れだけではない
大切な人達を傷つける事にも迷いが無い。

彼等を止めるには決意が要る。

大切な彼等を傷つける覚悟が要る。

思い出せ、私達にとって今、一番大切な事を。

その闘いは、女性魔導騎士の高く良く通る掛け声で始まった。

「“攻こうの一式”詠唱開始！」

「光よ並びて走れ、我が敵の元に！ 向かう方向は皆同じ、決して
交わる事はない！」

声が揃った詠唱と共に、生徒達の目の前に光の玉が二十ほど並ぶ。

「放てッ！」

『《平行する光線》！』

ジェシカの鋭い声と共に、その光の玉は全て光線と化し、ディオ
スラス率いるクーデター勢に襲い掛かる。その光線の進行上にいた

者達はそれぞれ、防御魔法を唱えて、それを防ぐが、思った以上に威力が高く、五十の内二十名がよるめいてしまう。

しかし残る三十名が攻撃魔法を唱えはじめた。

それを見たジェシカが、再び号令をかける。

「防の三式”詠唱開始！”

『我が前に立ち上げられ炎！　そして築け、攻める者を防ぎ燃やす《赤壁》を！』

詠唱の終了と同時に、生徒達の足下から、大きな炎の壁が出現し、クーデター勢の放った魔法をかき消してしまう。

しかしこの魔法はそれだけに留まらなかった。生徒達が揃って手を前に押し出すような動作をしたかと思うと、その壁がクーデター勢の方に倒れ掛かったのである。この魔法《赤壁》は一度、魔法を受けると、その魔法を放った者の方向に倒れ、その炎をもって攻撃するという反撃の効果をもっている攻防一体の魔法なのだ。

それも何とか防御魔法を使って受け止めるクーデター勢だったが、やはり受け止めるのが精一杯で今度は全員が反撃不能の状態になってしまう。そこに、集団魔法には参加していなかった、カーエス、エイス、ミルドの主力遊撃班が突撃する。

「《驚掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせ！」

「大地を揺るがすは地上の波！　そのうねりを持ちて飛ばすは《岩飛沫》！」

「風の中を走れ、疾く鋭く！　《かまいたち》！」

それぞれ炎が、岩が、そして真空波がクーデター勢を襲い、防御が間に合わなかった五人ほどが脱落する。

その間、ジェシカもただ見ていたわけではない。指示するのでは

なく、自分の魔法を唱えようとしている。

「今をもって他はなし！ 同志達よ、心を合わせ立ち上がれ！」そう言っ、ジェシカは懐から出した紙を地面に落とし、槍をその上から突き立てた。「《群起》！」

魔法の完成と共に、槍が貫いた紙が光りはじめ、突き立てた槍を中心に複雑な魔法陣が描かれていく。魔法陣が完成すると、その光で描かれた線が一層強く輝き、その上に立つ生徒達を明るくて照らし出した。

「“攻の四式”、詠唱開始！」

ジェシカのかけ声を受け、生徒達が空に手を掲げて唱える。

『魔に怒れ、雷雲！ 悪に叫べ、雷鳴！ そして、罪に降れ……』

そこで、一斉にクーデター勢を指差し、詠唱を完了させる。

『《雷撃》！』

魔法の発動と共に、黒い雷雲が上空に立ち籠め、雷の雨を降らしはじめた。今のところは、対象であるクーデター勢の周囲にしか降っていない。そうやって、対象を一定の範囲から逃がさない効果があるのだ。

周囲に外れて落ちる雷は大きく地面を抉り、その威力の大きさを現わす。本当に自分達を狙って落ちてくる《雷撃》の威力はまだ大きいはずだ。

元々、大掛かりな魔法ではない。そして“集団魔法”で威力を高

めたからと言って、ここまで威力が高まるのも不自然だ。それもジエシカの魔法の為だった。集団対象の補助魔法《郡起》。範囲内にいる、味方の魔力を大幅に上げる魔法である。

集団で唱える事によって高めた魔法の威力を、さらにジエシカの補助魔法で高める。それが、今回生徒達がとった作戦の基本戦術だった。

そして、遂にクーデター勢の真上から大きな雷が落ちてくる。魔法の規模の大きさにクーデター勢は一応防御魔法を唱えるものの、それで防ぎきれぬ自身はなさそうだ。

稲光りに、一瞬場は白い闇に閉ざされ、轟音になる。

閃光に奪われた視力が回復した者達が見た光景は、彼等が予想した光景とは全く違っていた。クーデター勢全体を、石で出来たドームがすっぽりと覆っていたのだ。卵が孵化する時のように、その石のドームに亀裂が走り出し、ぱぁん、という音と共に割れ、中からは全く無傷のクーデター勢が姿を現わした。

使われた魔法はおそらく《抱き包む石》だ。本来、自分個人のみが対象になる魔法だが、何らかの手を加えることによりで一集団を包めるほどに効果範囲を広げたのだろう。

こんな真似が出来る人間を、カーエスはある中では一人しか思い浮かばない。

「……これで終わりか？ 生徒諸君」

クーデター勢の真ん中で杖を掲げて立っていたのは、カーエスの予想通りディオスカスⅡシクトだ。

必殺の一撃だったはずの攻撃が防がれ、半ば呆然としている生徒達に向かってディオスカスは続けた。

「やれやれ、危ないところだったではないか。あのままでは君達の敬愛している師の何人かは焼けこげて死んでしまっているところだ」
「不味い、聞くなっ！」

ジェシカがディオスカスの意図を察して、全員に言うが、ディオスカスは構わずに続ける。

「何も考えずに、大きな魔法を使って浮かれているようだが、その魔法は人を殺すには十分だと言う事を忘れないでくれ」

ディオスカスの言葉に、生徒達が顔を見合わせる。その表情は明らかに動揺に染まっていた。時折、こちらに視線を送っているが、その先にはおそらく彼等の師が立っているのだろう。

自分の言葉がもたらした効果に、ディオスカスは満足げに笑みを浮かべる。先ほどは、味方の迷いを断ち切るために演説などをやったが、今度はその逆、敵に迷いを生ませるために気付かせたのだ。“集団魔法”は一個団体としての精神の統一が不可欠である事は明らかである。こうして少し心を惑わせるだけで簡単に魔力化できるだろう。

あと、一押しで簡単に生徒達は落ちる。

「攻撃だ」

短く自ら率いる魔導士達に命じる。

迷いのない魔導士達は、返事をする、めいめい得意な魔法の呪文詠唱を始めた。

「く……、 “防の一式” 詠唱開始！」

ジェシカが号令をかけると、生徒達は我に返ったように詠唱を始めた。

『我が前に構成されし不可視の壁よ、向かいし魔を《遮断》しゃだんせよ！』

魔法が発動すると、生徒達の前にオーロラのような光の幕が引かれたが、ジェシカがそれを見て眉を潜めた。薄すぎるのだ。やはり、心を乱した状態ではまともに“集団魔法”は機能しなかったらしい。数秒後に、クーデター勢の魔導士達の魔法が放たれ、生徒達の張った《遮断》が迎え撃つが、呆気無くその防御魔法は撃ち破られ、クーデター勢の魔法が生徒達に降り注ぐ。

それでも多少は弱まったか、幾人かの生徒を除く生徒達が防御魔法を各自唱え、威力をいなす。しかし、おそらくは下級魔導士であろう、何人かの未熟な生徒達は反応が間に合わず、《遮断》で弱められているとはいえ、熟練した魔導士の放った魔法に吹き飛ばされてしまった。

その様子を見た残りの生徒達にさらなる動揺が走る。やらなければやられる。しかし自分達の師匠を攻撃したくない。勢いで出てきたが、自分達が負けた時の事を考えていなかったが、今、その可能性を見せつけられて、今さらながらに恐ろしくなったのだ。

恐怖感、それがディオスカスの狙ったもう一押しだった。もう生徒達は落ち着きを取り戻せまい。確かに、“集団魔法”が持続すればあちらにも勝機はあったかもしれないが、もはやそれは使えまい。

「波状攻撃を仕掛ける。絶えまなく攻撃していればいつかは崩れる」

ジェシカは、クーデター勢の魔導士達が端から順番に、輪唱のように魔法を唱えはじめたのを見て、舌打ちしたい衝動に駆られた。

この作戦の肝は、こちら側の攻撃のリズムを保ち、あちらのリズムを乱す事だ。“集団魔法”は魔法を強化する事ができるものの、どうしても大掛かりな者になってしまふなど、小回りの利かなくところがある。だから波状攻撃などで連続して攻撃されると、防ぎきれない。

“集団魔法”だけではなく、個別に魔法を使って防ぐ事も可能だったのだから、今回は作戦を練るのに時間がなく、行動に対する符号を決められただけでも上出来だった。

このように、通常の状態でも波状攻撃はきついのに、今生徒達が浮き足立っている状態でそれをされてはそれこそひとたまりもない。今とれる策は一つしかない。そしてそれを実行できると確信できる人間は一人しかない。

「カーエ……」

その名を呼んで振り返ろうとした時、彼女の目の前を何かが横切った。黒く短い髪に眼鏡を掛けた男だ。そして彼女が口に仕掛けた名前の持ち主でもある。

その男、カーエス「ルジュリスは、生徒達の一番前に出て来ると向かい来る魔法を前に、詠唱を始めた。

「火には水となり、風には土となる、斬る者あれば固くなり、殴る者あれば弾力を得ん、その特性は臨機応変、行方は武力の妨げ。我が纏まといし《七色の羽衣》は如何いなるものも拒絶する！」

彼が行使した魔法の発動に伴い、彼の前には虹色の光の膜が現れ、彼を含め、後ろにいる生徒達をカバーするように広がる。その膜に、波状攻撃の第一派が届くが、呆気無くこの光の膜に弾かれてしまった。

カーエスは、その魔法を維持したまま、肩越しにジェシカに視線を送る。

「三分！ 三分やるからどないかして、体勢立てなおせ！」

カーエスの提案に、ジェシカは驚きに眉を持ち上げた。それこそ、ジェシカの考えていた事だからだ。あそこで、とれる策は一つだけ。誰か卓越した者に守りを任せ、その間に体勢を立て直すのである。その守りを任せられる能力をもっていそうな者は幾人かいたが、確信出来るのはカーエスしかいなかった。

ジェシカは、カーエスにも見えるように頷いてみせると、生徒達を見回して言った。

「……お前達はお前達の師匠を傷つけない、そうだな？」

ジェシカの問いに生徒達は頷く。

「それは、お前達にとって師が大切な人間だからだろうか？」

二度目の問いにも、生徒達は頷いた。

「では、お前達は師匠を一体どうしたいんだ？」

三度目の問いには、答える者はいない。ただお互い顔を見合わせているだけだ。

「例えば、お前達の父が罪を犯そうとしていた事を知る。父の決意は堅く、説得では止められない。さあ、どうする？」

ジェシカが例を出すと、生徒達は彼女が何を言わんとしているの

かを察した。

その答えは、“力づくで止める”しかない。

「ここでお前達がお前達の師匠を止めなければ、もっとたくさん、大切なもの、大切な人々が傷付く事になる」

先ず、その先陣を切るのがエンペルファータになるだろう。“ラ
スファクト”、“英知の宝珠”という損失はエンペルファータにと
つて、あまりにも大きすぎる。この街には大きな混乱が訪れるだろ
う。それからすぐに、“大災厄”という明確な滅びが訪れるのかも
しれない。もうこの街を護る不可視の屋根は存在しないのだ。

そして、ウォンリルグとの戦争になれば、魔導研究所で開発され
た魔導兵器によって多くの人々が殺される事になる。

彼等をこのまま見逃す事は、均衡を保っていた世界のバランスを
崩し、予測不可能な状態に陥れる事になるのだ。

「いわば、ここで彼等を止められるか否かで、私達、それから私達
の大切な者達の未来は大きく変わる」

小さな駅前広場に限られた闘いかもしれない。人数も本物の戦争
とくらべると桁違いに少ない。しかし、この小さな闘いの勝敗は世
界の分岐点とも言えるものだ。

「ここでもう一つ聞く。お前達の師はお前達の魔法ごときで死ぬよ
うな実力の持ち主か？ それともお前達が手加減しても勝てるよう
な相手なのか？」

生徒達が同時に首を降る。

「ならば遠慮は要らん！ お前達が師を想うのならば、私達は彼等

を止めなければならぬ！ 私達はお前達の師匠を倒さなくてはならない！ そして……そしてお前達はお前達の師を超えなければならぬ！」

熱が入りはじめた言葉に、生徒達が力強く頷く。その瞳から迷いが消えていく。

そして彼等は、再びクーデター勢に向かい、陣形を組み直した。

「“攻の三式”詠唱開始！」

『天へと届け冷気！ その冷たさをもちて形作るは氷塊！ 猛威を知らずべく我が敵の上に降り注げ、《凍てつけし飛礫》！』

綺麗に揃った声は、今度こそ完璧に発動し、白く輝く魔力が敵の頭上に向かった。次の瞬間、その魔力から生み出された特大の雹がクーデター勢に降り注いだ。

その防御の為、クーデター勢の攻撃は止み、カーエスは《七色の羽衣》を解く。

「“攻の一式”詠唱開始！」

『光よ並びて走れ、我が敵の元に！ 向かう方向は皆同じ、決して交わる事はない！』

闘いのはじめに唱えた魔法であるが、現在は《郡起》によって強化されているため、数は倍の四十に増えている。

「放てッ！」

『《平行する光線》！』

魔法を発動した瞬間、魔力の光線が、クーデター勢に雨霰あめあられのように降り注ぐ。素早い魔法の発動であったため、あちらの防御は間に

合わないはずであったが、待たしてもディオスカスが行使した全体防御魔法によって、弾かれてしまう。

「防の三式”詠唱開始!”

「我が前に立ち上がれ炎！そして築け、攻める者を防ぎ燃やす《赤壁》を！」

あちらはまだ攻撃体勢に入っていなかったが、それでもジェシカは防御魔法の行使を命じた。生徒達の足下から大きな炎の壁が出現する。

「続けて“防の五式”、対象は水！」

「出で現れよ、《選別する鏡》！私の望むもの“水”を跳ね返せ！」

《赤壁》の前に、もう一枚の障壁が現れた。そこに次々と襲ってくるのは水属性の魔法である。指定により、対象の属性のみ跳ね返す性質を持つ《選別する鏡》はその魔法を次々と弾き、その術者へと返していく。

《赤壁》は攻防一体の便利な魔法であるが、多くの炎属性魔法と同じように水属性の攻撃に弱い、どんなに弱い水属性の魔法でも一度うければ反撃をせずに消えてしまうのだ。

今、ジェシカがとった策はクーデター勢の攻撃前に《赤壁》を張らせる事で、クーデター勢に水属性の魔法を使わせ、特定の属性の魔法“しか”弾けない《選別する鏡》で跳ね返すという策だった。万が一、他の属性を使われていたら、《選別する鏡》は素通りしただろうが、その後ろには《赤壁》が控えているという保証付きの策だ。

が、跳ね返した水の魔法も、ディオスカスの防御魔法で遮かきられて

しまう。

ジェシカは、内心で舌打ちをすると、大きく息を付いてその名を呼んだ。

「カーエス」

その声は小さかったはずだが、それでもカーエスはその声を聞き付けて傍によってくる。

「何や？」

「ディオスカスを頼む。このままでは埒らちがあかない。奴一人を抑えれば勝機が見える」

先ほどからの攻防を見ていれば、クーデター勢の中で誰が一番強いかは目に見えてくる。そしてディオスカスはあちらの指揮官だ。それを倒せばクーデター勢は一気に崩れるだろう。

「……よっしゃ」と、カーエスは頷き、クーデター勢の方を向いて歩き出した。

心無しか、疲れが彼の背中に見えた。それもそうだろう。今朝からはずっと闘い通しだった。先ほども、大きな防御魔法で時間を稼いでくれた。魔導騎士で補助魔法だけ唱えていればよかった自分と違い、魔法戦を専門とする彼の精神的な疲れは自分の比ではないはずだ。

それでも、ジェシカには、彼しか頼れなかった。

「カーエス」

何か声を掛けなければ、と思い、ジェシカはとりあえず彼の名前

を口にして呼び止めた。

カーエスは何も答えず、立ち止まって、彼女を振り返る。

眼鏡越しに見える黒い目を見て、ジェシカは不意に、眼鏡を外した時の蒼い目を見たくなつた。あの全てを見透かすような澄んだ碧^{あき}眼^{がん}で、今の自分の心の中を読み取って欲しいと思つた。

何度もこき使う事になつてしまつたという謝罪の心。そして、その度に期待に応えた事に対する感謝の心。今は感じている、カーエスの強さに対する信頼の心。

それを、言い表す言葉が上手く見つけられないから。

「お前の勝ちは計算に入れておく」

やっと、絞り出した言葉に、カーエスは一度ジェシカの元に戻ってくる、眼鏡を外し、それを彼女に差し出した。

そこに現れた碧眼で彼女を見つめて言った。

「預かつといてんか。すぐに戻ってくるよつて」

そう言つたカーエスの表情は頼もし気で、疲れなど問題に見えなかつた。

ジェシカも、精一杯の笑みを返すと彼の眼鏡を受け取る。

遠ざかっていくカーエスの背中を見ながら、ジェシカはそれを大事に胸元にしまった。

41 『シセーリア』の壁

武器を持つ事で人は強く在ることができる。
しかし武器を持つ事では人は強くなれない。

その者は元々強かった。

強かった上に、武器を手に入れて、
その武器のお陰でとても強く在る事が出来た。

だがその者は、その事を忘れてしまった。

その為にその者は、強く在ることが出来ても、
その者自身の強さを、失ってしまった。

生徒勢の陣を抜けたカーエスはそのまま真直ぐクーデター勢の正面に歩いて行った。そのあまりに大胆な行動に、忘れたようにクーデター勢は彼に攻撃を加えようとしない。

「ディオスカスッ！ ディオスカスシクト、出てこいッ！ 俺と勝負や！」

カーエスが指導者の名前を呼んだところで、クーデター勢の一人が、思い出したように彼に攻撃した。

「貴様ごときがおこがましい、これでも喰らえ！ 《驚掴む炎》^{わじつか}よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせ！」

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増して反射する！」

カーエスに向かつて放たれた炎は、彼の前に現れた障壁に当たると、その大きさを倍に増して、術者に返った。

《驚拵む炎》の術者は成す術もなく、自分に返ってきた炎を浴びる。

「う、うわああっ！」

「おんどれこそオコガマシイ。雑魚は黙つとれ」

一瞥して、言い捨てるカーエスに、自分の部下を退かせて歩み寄ってくる男がいた。ディオスカス「シクトその人である。」

「私に何か用かな？」

「よう、俺とサシで闘ろうやないか」

カーエスは、頭一つ上から見下ろしてくる体勢となっている長身のディオスカスの視線を正面から受けて不敵に言った。

普段のカーエスからすると違和感のある蒼い瞳に、ディオスカスは興味ありげな笑みを返して答えた。

「“魔導眼”保持者か。面白い、その勝負受けようではないか」

二人は、生徒勢とクーデタ勢の真ん中に改めて向かい合った。カーエスは身構え、ディオスカスは懐から伸縮式の杖を出して伸ばし、右手に持つ。そのまましばらく睨み合いが続いたが、カーエスは、ディオスカスが自分から動く気がない事を悟ると、先手を打った。

「地に潜む雷よ、《地走り》て我が敵の影を撃て！」

魔導完了後、カーエスは地面にしゃがみ、拳を叩き付ける。するとその拳からディオスカスの足下に向かって、電撃が一直線に走っていく。

ディオスカスは、余興でも楽しむかのように眺め、ギリギリまで引き寄せると、「ここに敷かれしは《土の陣》、電気は決して入るべからず」と、落ち着いて呪文を唱え、《地走り》を防ぐ。

それだけでは終わらない。ディオスカスは続けざまに次の魔法の詠唱に入った。

「大地よ、見せるがいい。海のような柔らかさを」そして、杖を地面に突き詠唱を締めくくる。「《波打つ大地》」

杖の石突きが地面に着いている点から、カーエスに向かい、地面が水面のように波紋を広げた。

自分の立っている場所が大きく揺れてカーエスがバランスを崩すのを確認すると、ディオスカスは間髪入れずに次の魔法に入る。

「風のごとく走れ《弾け飛ぶ雷》、拡がりて我が敵を捉えよ」

魔導と共に、ディオスカスの正面に大きな氷塊が生まれ、彼が杖を一閃させると、カーエスに向かって飛んでいく。そして、その氷塊はカーエスに当たる直前、ぱつと弾けその破片がカーエスに襲い掛かった。

だが、カーエスはバランスを崩しながらも冷静な判断を崩さず、防御魔法を唱える。

「ここに敷かれしは《炎の陣》、冷気は決して入るべからず！」

カーエスの魔導によって現れた炎の壁が彼に襲い来る氷の破片を全て消滅させた。

と、そこで急に彼の足下が盛り上がり、彼の顎目掛け、大地が鋭く隆起してきた。ディオスカスが《大地の拳》を発動したのだろう。「……っ！」と、声にならない呻きと共に彼はそれを反射的に仰け反り、《大地の拳》を避ける。
しかし後方に避けたのが失敗だった。

「大地を揺るがすは地上の波。そのうねりを持ちて飛ばすは《岩飛沫》」

《大地の拳》で隆起した地面が元に戻り、ディオスカスを隠していた死角がなくなると、カーエスの目の前に現れたのは自分に向かって飛んでくる一団の岩だ。防御魔法は間に合いそうにないので、横っ跳びに避けようとしたところで、カーエスは自分の足下を見て戦慄を覚える。

一塊の氷が足枷のように彼の足を縛っていたのだ。氷属性捕縛魔法《氷の足枷》である。さきほど、《大地の拳》を避けたさい、《岩飛沫》を唱える前に行使したのだろう。

カーエスはとりあえず頭を腕でガードし、《岩飛沫》を受けた。カーエスの腕と脇腹、太ももにかなりの大きさの岩があたり、カーエスは地面に転がされる。

「なんとか膝をついた体勢を取り戻すと、ディオスカスを改めて見据えた。」

「一ラウンド目は私に軍配が上がったようだが？」

さて、どうする。と、余裕を持った表情で問いかけるディオスカスに、カーエスは睨み付けて答えて言った。

「上手い連携やったな。認めたる」そして、カーエスは目をカツと見開き、痛みを堪えて立ち上がって叫んだ。「せやけど、まだまだ勝負は始まったばかりや！ 大地よ、我が魔力に育まれよ！ 若草よ、萌えよ！ 花よ、咲き乱れよ！ 樹木よ、繁れ！ 高く広く伸び広がりて、あの空を覆い隠せ！ そしてここに生まれよ、多くの命をその手に抱く《恵みの森林》！」

カーエスを中心に、半径二メートルの円が輝きはじめ、その光の中から、映像の早送りでも見ているかのように、芽がでて、育まれ、あつという間に円の中に立派な森が完成した。

「地走れ、《絡み上げる根》！ 樹木を支える強さで我が敵捕らえんがために！」

その魔法が発動しても、一見何か起こっているようには見えない。しかし、数秒後ディオスカスの足下の地面を突き破り、太い根がディオスカスを捕らえんとその手を伸ばす。

ディオスカスは落ち着いて《絡み上げる根》を避けると、《岩飛沫》を持って反撃する。

先ほど自分に初ダメージを与えた一団の岩を見据え、カーエスは防御魔法を行使した。

「我を庇護せし《樹木の守り》は、我を傷付けるものの進行を許さず！」

魔法の発動と共に、彼を囲う木々から枝が伸び、草が絡まって一つの壁を構成した。《岩飛沫》はその壁にぶつかり、消滅する。

続いて、カーエスが唱える。

「木の葉達よ、刃を持って！ 風に乗って舞い踊り、《木の葉乱舞》となりて我が仇を切り刻め！」

呪文の詠唱と共に起こった強風によって《恵みの森林》の木々の葉は千切りとられ、風に乗ってディオスカスに殺到した。木の葉一つ一つの攻撃力は微々たるものであるため、ディオスカスは軽い障壁を張ってその木の葉の攻撃をやり過ごす。

そのディオスカスの足下に、赤い円が描かれていく。

「燃え立ち上がれ、《火柱》！」

ディオスカスは一步後退し、《火柱》の直撃をやり過ごすのが、その炎は彼を取り巻く木の葉に燃え移り、大きな炎と化した。

自分を焼き付くさんとその牙を向く炎を見回し、ディオスカスはふん、とつまらなさそうに鼻を鳴らして呪文の詠唱を開始した。

「冷気よ、我が元に集れ。風よ、吹き荒べ。水よ、凍り付け。雪よ、踊り狂え。高く積もりて大地を覆い隠せ。ここに訪れよ、全ての生物を死に誘う《雪山の厳冬》」

ディオスカスの詠唱に伴って、彼を中心に冷たい風が巻きはじめ、雪が舞いはじめた。その冷気に彼を取り巻いていた炎は退き、風が巻く範囲が拡がると完全に鎮火してしまう。それでも、範囲の拡大は収まらず、最終的にカーエスのいる《恵みの森林》を取り込んでしまった。

その寒さに、カーエスを取り巻く森林が寒さに枯れ果て、その地面にはどんどん雪が積もっていく。

雪を伴い、吹き荒ぶ風の中で、ディオスカスは真直ぐカーエスに視線を送って言った。

「……これで終わりか？」

にやりと持ち上げられるディオスカスの口元に、カーエスは半ば衝動的に対抗する魔法を唱えた。

「大気がその身に熱を宿せば、そこは全てが燃ゆる《熱地獄》！」

カーエスが魔法を発動すると、カーエスとディオスカスの間を中に、身を焼くような温度を持つ空間が広がり、《雪山の厳冬》で現れた冷風、雪を全て消し去っていく。

雪が融けた水は二人の足下を浸していたが、それはカーエスの方に引いていった。彼の次の魔法のためだ。

「水よ、波立て！ 波よ、立ち上がりてより大きな《津波》となれ！ 《津波》よ、汝が巻き込みしもの全てを洗い流せ！」

カーエスの魔法によって吸い寄せられた波はその質量を更に増して大きな高波となり、ディオスカスの前に立ちはだかった。

成長と続けながら、自分を取り込まんと押し寄せてくる《津波》を前に、ディオスカスが防衛行動に出る。

「《抱き包む石》よ、その冷たく堅き腕の中に我を迎えよ」

周りの地面が盛り上がり、それがドーム上の岩となって彼を包む。そこに《津波》が押し寄せ、《抱き包む石》ごと、その大量の水の中に飲み込んだ。

《津波》による大量の水が引いた場にはぼつんと無傷の《抱き包む石》が残されていた。相当強力な防御魔法らしく、レベル7の《津波》を喰らった後でも、全く傷が付いている様子はない。

しかしカーエスは、強力な魔法なりに弱点がある事を見抜いていた。《抱き込む石》はドーム上の石の中に自らを閉じ込める魔法だ。石の中からでは外の様子は見えない。今、自分がこうして駆け寄っていても。

十分に距離を詰めたところで、《抱き込む石》にひびが入り、その中からディオスカスが出てくる。そしてその目の前には、カーエスが迫っていた。

「第二ラウンドは俺の勝ちやなあ！ 《鷲掴む炎》よ、その灼熱の炎によりて我が敵を燃やし尽くせ！」

カーエスの突き出された手から、激しい炎が放たれた。近距離からの発動であるため、ディオスカスはせめて威力をやわらげるための障壁を張るくらいしか防御手段はない。“はずだった”。結果を述べると、カーエスの《鷲掴む炎》はディオスカスを傷つける事はなかった。呪文無しに発動した対炎属性魔法用防御障壁によって阻まれたのである。

「なっ……！？」

完全に隙を付いたはずの攻撃が防がれ、カーエスは驚きを隠せない。

《抱き込む石》の弱点を利用して攻撃する事を読まれていたのか、それにしてもなぜ炎属性魔法だと分かったのか。否、その前にあれほどの防御魔法を行使している片手間に、別の魔導を行えるのだろうか。

疑問が頭の中を駆け抜けるなか、視界の中のディオスカスはにやりと笑って《弾け飛ぶ電》を発動していた。それによって生み出された氷塊は彼の腹部に命中し、今回のカーエスこそひとたまりもな

く吹き飛ばされてしまう。

「どうやら第二ラウンドも私のものようだ。《弾岩》^{だんがん}よ、駆け飛びて我が敵を撃ち抜け」

追撃に行使された魔法により、一塊の岩が勢いよくカーエスに向かって飛んでくる。

カーエスは上手く息を吸えないのを何とか堪え、飛んでくる《弾岩》に向かって手を伸ばした。

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増して反射する！」

伸ばされた手の平に、明るく輝く障壁が生み出され、《弾岩》を受け止めた。それだけではなく、《弾岩》は速さと大きさを増し、ディオスカスに戻る。

まさか、自分がこれを返せるとは思っていなかっただろう、とカーエスは内心ほくそ笑む。今度こそ完全にディオスカスの裏をかいたはずだ。

が、待たしても増幅され、ディオスカスに弾き返された《弾岩》が、彼を傷つける事はなかった。先ほどと同じく、詠唱無しで対土属性魔法用障壁が展開され、《弾岩》は呆気無くその壁に阻まれ、砕け散る。

だが、先ほどとは逆に、カーエスは頭の中が冷静になっていくのを感じた。今回はその魔法が発動する瞬間を自分の“眼”で見、そして全ての疑問が氷解したからである。

「……どうも、そんな悪趣味な杖を振り回しとる思うたら、そういうことやったんか」

立ち上がったカーエスの視線の先にあるのは、決闘を始める前にディオスカスが手にした杖だ。特殊合金であろう銀色の杖身には魔導紋様が施され、石突きと杖頭には宝石にも見紛うほど上等な魔石が設えてある。一見には、やたらと豪華ではあるが、一般の魔導士がよく使う魔導制御の補助や、足りない魔力を補完するための普通の杖にしか見えない。

先ほどカーエスが見たのはディオスカスではなく、この杖の魔導によって障壁が展開される光景だった。

つまり、この杖は持ち主を護るために自動的に障壁を張る能力を持つ魔導武器だったのだ。

「なるほど……その“魔導眼”はただのハツタリではなかったわけだな」と、ディオスカスは、見破られたことに対して多少の満足さえ感じられるほどの余裕を持った雰囲気と言った。そして、自分の手に持った杖を目の前に掲げて見せる。

「いかにもこの杖“シセーリア”は持ち主に襲い来る危険に対し、魔法障壁を張る能力がある。しかも、属性を自動的に判断し、最適な障壁を張るといふ機能までついている。“小さなセーリア”という名前はこの杖にぴったりだろうか？」

得意げな笑みを浮かべると、ディオスカスはその杖をふりかざし、魔法の詠唱に入る。カーエスが“魔導眼”で魔導を一見したところ、かなり大掛かりな魔法のようだ。普通なら一手目で大技は禁忌とされるのだが、ディオスカスが持つ“シセーリア”が、それを許している。邪魔をしようと思っても手が出せないのだ。

「水よ、冷氣よ、集つどいて数多あまたなる雪を我が頭上に！ 白く優しく見える雪なれど、集えば全てを押し流す恐怖とならん！ 我が声に応じて駆け降くだれ、白き凍こてつく奔流ほんりゅう……」そこで、ディオスカスは掲

げた杖を力強く振り降ろした。「《全層雪崩》！」

ぜんそうなだれ

すると、何も無いディオスカスの頭上から大量の雪が溢れ出すように現れ、カーエスに向かって落ちてくる。しかし、《全層雪崩》の使用を“魔導眼”で見切っていたカーエスは《熱地獄》を発動し、襲ってくる雪を端から融かし、難を逃れる。

さきほど《津波》でやったのと同じように、融けた水をつかって魔法を行使する。

「留まりし水よ、流れを持ちて突然なる《鉄砲水》となれ！」

カーエスの魔力によって支配された水は、一筋の強い流れとなり、ディオスカスを襲う。が、ディオスカスは微動だにせず、“シセーリア”が障壁を構成して《鉄砲水》の強大な水圧をいなす。

無論、種が明かされたからには《鉄砲水》だけでやれると考えるほどカーエスも馬鹿ではない。《鉄砲水》の発動直後、別の場所に移動しつつ、矢継ぎ早に呪文を唱える。

「《弾岩》よ、駆け飛びて我が敵を撃ち抜け！」

「風の中を走れ、疾く鋭く！ 《かまいたち》！」

「風のごとく走れ《弾け飛ぶ雷》、拡がりて我が敵を捉えよ！」

岩の塊が、真空波が、氷塊がディオスカスを襲うが、それに応じて“シセーリア”も次々と障壁を構成していく。最後の《弾け飛ぶ雷》に合わせ、“シセーリア”に対し《魔導の乱れ》も使ってみたが、やはりプログラム通り魔導を行うだけの魔導武器にたかだか妨害を行うだけの《魔導の乱れ》は通用しない。

「まだやっ！ 《電光石火》によりて我は瞬く速さを得ん！」

一瞬だけ光のような速さで動ける魔法で、カーエスは瞬く間にディオスカスとの距離を詰め、腰だめに構えた拳をディオスカスに向かつて突き出す。

「物理攻撃なら、どうやっ！」

しかし、次の瞬間カーエスは“シセーリア”によって展開された対物理攻撃用障壁に弾き飛ばされてしまう。

魔法攻撃も、物理攻撃も通用しない。一体どうすればいいのか。そんな疑問が顔にあらわれるカーエスに、ディオスカスは嘲るように笑って言った。

「万策尽き果てたと言うところだな、カーエス。ルジュリス。魔法も拳も“シセーリア”を破ることは出来ない。ここまでくると、これこそ“完璧”と呼ぶべきなのかもしれんな？」

ディオスカスの言葉に、カーエスに見え始めていた絶望の色が消える。

カーエスは黙って立ち上がると、怒気に満ちた表情を見せつけ、あらん限りの声でディオスカスを怒鳴り付けた。

「ワレごときがカルク先生の二つ名を口にするんやないわっ！ 先生の“壁”はホンマに隙がない。破りようのない、血の滲む努力の末に得たホンママンの“完璧”や！ ワレみたいに悪趣味な杖に縋ってホイホイ得られるような紛いモンやない！」

カーエスの態度の豹変に、ディオスカスは眼を細める。ただでさえ厳しい顔のディオスカスは、そうすると殺気が感じられ、直視すらし難しいものになるのだが、カーエスは真直ぐにその視線を受け、

腰を落として身構える。

「第四ラウンドや。ワレの“壁”が如何に脆いかいか教もろえたる」

仕切り直しの末に、先に動いたのはやはりカーエスだ。ディオスカスは防御に動く必要がないので、その場に留まり、カーエスがとる行動を観察している。

「風のごとく走れ《弾け飛ぶ電》……」と、カーエスは一見普通に魔導を行うが、次の瞬間、カツと眼を見開くと共にその魔導を中断し、新しく魔導を組み直す。「風の中を走れ、疾く鋭く！ 《かまいたち》！」

その名を口にすると共に、一閃されたカーエスの腕からは真空波が生み出され、ディオスカスを斬り付けんと襲い掛かる。しかし、ディオスカスの持つ“シセーリア”が発動し、防御するための障壁を張る。

が、カーエスの放った《かまいたち》はあっさりとその障壁をくぐり抜け、ディオスカスを鋭く斬り付けた。

「なっ……！？」

大きく眼を見開き、胸にしっかりと刻まれた切り傷と、カーエスを交互に視線を移す。

カーエスはそれを全く気にせず、次の魔法の詠唱に入る。

「地走れ、《絡み上げる根》！」と、再びここで、詠唱と魔導を切り、素早く別の魔法に変える。「《弾岩》よ、駆け飛びて我が敵を撃ち抜け！」

ディオスカスの手の中の“シセーリア”ははめられた魔石を淡く光らせ、発動を知らせる。しかし、またしてもディオスカスに向かってくる《弾岩》を弾くことはなかった。が、ディオスカスはとっさに身を振らせ、胴体に当たりそうなところを、肩を掠らせる程度にとどめる。

「随分と不思議そうやな？ 何で発動してんのか、何でそれやのに防がれへんのか、そういう顔しとるで」

《弾岩》の掠った肩を抑えながら、カーエスを睨み付けるディオスカスに、カーエスは口元のみを笑みを浮かべ、数歩近付く。

「要するに、その杖は二つ同時には障壁を作られへん言うことやな」

ディオスカスの握る魔導武器“シセーリア”の能力が露見してから、カーエスはずっと“シセーリア”が発動する様子をつぶさに観察していた。どんな条件で、どんなタイミングで、どのように発動するのか、それこそ一切見逃さないように注意して見ていた。

その結果、分かったのは、発動するタイミングは、カーエスの魔法が発動する前だという事だった。もっと正確に言うと、魔導の過程で、放つ魔法の属性が決定される瞬間だ。そこまで見切れるのだから“シセーリア”には驚くべき解析能力が備わっていると見える。

そこでカーエスがとったのは、“シセーリア”が発動し、障壁を構成するための魔導を開始した時点で、自身の魔導を中断し、別の魔法に切り替えるという策だった。“シセーリア”は既に発動し魔導を開始した時点で、それを途中で止める事は出来ない。

結果、カーエスが直前に唱えていた魔法の為の障壁を構成するものの、切り替えて行使した魔法の為の障壁ではないため、素通しし

てしまったのである。

ちなみに、この時カーエスが使った技術“切り替え”はそう簡単
にできるものではない。魔導によって動かされる魔力にも、物理学
でいう慣性の法則のような力が働いている。中断する事は、誰にで
もできるが、即座に別の魔法に“切り替え”る事ができるのは、こ
く限られた者のみである。

出来ても、カーエスのようにスムーズには行かない。自分の魔導
を肉眼で確認できるカーエスだからこそ、無理なく“切り替え”ら
れる魔法、タイミングを選ぶ事ができるのだ。

「なるほど、参考になった」と、カーエスの説明を聞いたディオス
カスは納得した様子で、頷いた。そして、また余裕を取り戻した様
子でいう。「だが、まだまだ青いな。得意げに語る気持ちは分かる
が、その策だと対抗策はいくらでもでて来るぞ」

ディオスカスの言う通り、ネタが割れてしまえばカーエスの使っ
た“切り替え”は対抗策を施す事ができる。“シセーリア”だけが
防御魔法を使えるのではない、そこにはディオスカスも要るのだか
ら、“切り替え”た時、“切り替え”た魔法に合わせてディオスカ
スが防御魔法を行使すればいいのだ。

だが、そんなディオスカスに対し、カーエスは笑い返して答えた。

「青いのはアンタやな」

普段よく笑うカーエスだが、その笑みは今まで見た事のないよう
な嘲りを含んでいる。カーエスが今だ発している怒気に相まって、
その表情は凄惨せいさんささえ帯びていた。

嘲笑など受けた事のないディオスカスは、カーエスの笑みに思わ

ず、感情を荒げた。

「何だと、貴様アツ！ 汝を照らすは《極寒の光》！ その光を浴びし者、その身に冷たき痛みを刻み込まれん！」

「我が前に立ち塞がりし《増幅する魔鏡》は、受けた光を倍に増して反射する！」

カーエスが差し出した手のひらに、明るく輝く障壁が生まれ、ディオスカスが放った触れたものを凍結させる光線を倍の太さにして跳ね返す。

そして、カーエスはさらに唱えた。

「《電光石火》によりて我は瞬く早さを得ん！」

その補助魔法によって、光のごとき速さを得たカーエスは跳ね返した《極寒の光》とほぼ同時にディオスカスの元に到達する。

ディオスカスの持つ“シセーリア”は《極寒の光》に対抗する障壁を展開するが、同時に迫るカーエスには対応出来ず、カーエスが障壁の中に侵入するのを許してしまう。ディオスカスは《電光石火》の速さに反応出来ず、カーエスが放った拳を捌く事はかなわない。何とか腕でガードするが、《一時の怪力》で強化していたらしく、ガードの上からでも、ディオスカスを吹き飛ばす威力は十分あった。この時、ディオスカスが握っていた“シセーリア”が持ち主の手を離れ、からん、からん、という音を立てて、地面に転がった。ディオスカスはその音に、眼を向け、慌ててそちらに手を伸ばした。しかし、カーエスがそれを見逃すはずはない。

「風の中を走れ、疾く鋭く！ 《かまいたち》！」

腕を一閃させてカーエスが放った空気の刃は、先ほどまで彼をあ

れほど苦しめていた防御能力をもつ魔導武器を呆気無く砕き折った。
自らに大きな力を与えていた“シセーリア”を破壊されたシヨックなのか、半ば呆然とした表情でカーエスを振り返るディオスカスに、彼は言った。

「アンタ、俺をナメ過ぎたな。俺が他に何の策も無しに、ベラベラ口を滑らすような阿呆すべや思っと思ったんか？」

要するに、“シセーリア”の二つ同時には障壁を構成出来ないという、“シセーリア”の弱点を突くことができれば、どんな策でもよかったのだ。他にも、対抗策を思い付いていたからこそ、カーエスはディオスカスに“切り替え”の種明かしをした。

「さて、クソ厄介な杖も無くなったトコで、最終ラウンドに入るかと、カーエスは宣言すると、右腕を天に掲げて詠唱を始める。

「魔に怒れ、雷雲！ 悪に叫べ、雷鳴！ そして、罪に降れ……」
と、掲げた右手でディオスカスを指すと同時に詠唱を締めくくった。
「《雷撃》！」

その声に応えるように、中空から稲妻が発生し、ディオスカスを撃たんと落ちてくる。

だが、それを黙ってみているディオスカスではない。《抱き包む石》を唱え、堅いドーム上の岩屋にその身を隠し、《雷撃》を防ぐ。

「また殻に閉じこもりよったか……でも、俺にはちゃんと“見え”とるで？ その殻の弱いトコが」

そう言って、カーエスはまだ《抱き包む石》が解けていないのに

も関わらず、その岩のドームに駆け寄り、超近距離から次の魔法の詠唱に入った。

「我が魔力よ集まれ、敵を見据えよ、そして喰らわせろ！ 瞬く力を敵にぶつける《ぶちかまし》っ！」

カツ、と閃光が走ると共に、ドーム上の岩屋に衝撃が走った。流石に堅く、純粹な攻撃力が特徴の《ぶちかまし》もそう簡単に破る事はかなわない。

が、数秒後ピシッ、という音と共に、その堅いはずの岩屋にヒビが入った。それは放射状に広がっていき、やがて亀裂に変わる。その次の瞬間、《抱き包む石》がバラバラに碎け散り、カーエスの放った《ぶちかまし》はその中にいたディオスカスを捕らえる。

完全に鳩尾みそおちに入った《ぶちかまし》の衝撃に、ディオスカスの身体はくの字に折れ、その顔は苦痛に歪む。

「止めやっ！ 我が身を取り囲む熱よ！ 我が心に渦巻く怒りよ！

そして我が拳に握られし魔力よ！ 我に与えよ、破壊の力を！

我が前に立ち塞がりし者よ、喰らいて退け！」

聞き覚えのある魔法の詠唱に、ディオスカスはカツと眼を見開いた。なんとか防御しようと腕を上げ、防御用魔法の詠唱をしようとするが、先ほどの衝撃は身体から抜け切っておらず、声が出ない。

カーエスは構わず詠唱を締めくくりながら、腰だめに構えていた掌底てんていをディオスカスの鳩尾に叩き付けた。

「《魂からの一撃》！」

魔法の発動と同時に、ディオスカスの胴体に叩き付けられた掌底から衝撃波が走る。

相手に対する感情や、身体に触れなければならないという、発動に幾つかの条件を持つ分、一般魔法の中でも随一の破壊力を誇る魔法に、ディオスカスの身体はたまらず後方に吹き飛んだ。

「確かに、あの杖はアンタの力を上げてくれたのかもしれへん。でもあの杖は同時にアンタ自身の実力を下げてしまった」

しばらく、掌底を突き出した格好のまま、クーデター勢の真ん中に飛ばされていくディオスカスに向かって呟く。そして、彼が完全に気を失って動かなくなつたのを見届けた後、カーエスは彼に背を向け、空を仰いで息をつきつつ生徒達の元に歩き出した。

「もし、アンタがあの手に出会わなかったら、俺はアンタに勝たれなかったやろうな」

42 『待ち望まれし帰還者』

私達は闘い続けた。

闘い続けて、疲れ果てた末に、追い詰められた。夢を掛けた闘いだっただ。

私は夢の終わりを感じた。

諦めたわけではない。

ただ、望みが無くなってしまうた。

いよいよ夢が終わりを迎えた時、彼は帰ってきた。

途絶えかけた夢だった。それを、私達が繋げた。

その夢が私達の前に再び姿を現わした。

今度は私達の夢を救うために。

おおお、という感嘆の音が闘いの舞台となっている広場に響く。

“完璧”カルク“ジーマン”や“冷炎の魔女”マーシア“ミスター”シヤと共に、エンペルファータ魔導士団長として魔導研究所最強の魔導士の一人として名声を欲しいままにしていたディオスカス“シクト”が、一人の魔導士養成学校生徒に敗れ去ったのだ。

クーデター勢は自分達の真ん中に吹き飛ばされた指導者を囲み、騒然としている。

一方生徒達から起こったのは歓声である。

大きな声に支配される場の中に、ジェシカの凜とした声りんが響いた。

「よし、敵が統率を失った今がチャンスだ！ “攻の一式” 詠唱開始！」

「光よ並びて走れ、我が敵の元に！ 向かう方向は皆同じ、決して交わる事はない！」

詠唱と共に生徒達の前にいくつもの光の玉が並ぶ。

「放てッ！」

『《平行する光線》！』

生徒達の、一つに揃った声に合わせて、それぞれ光の玉が光線となり、指導者を失い、混乱するクーデター勢に襲い掛かる。今が戦闘中だという事を思い出すも時すでに遅し、前線にでていた者達はあらかたまともに光線を浴び、戦闘不能となる。

それがクーデター勢の注意を引き戻したか、次の攻撃ではまともに防御魔法を行使され、一人も脱落者は出ない。

しかし、統率者を失った事は大きかった。先ほど一度引つ掛かったはずの、《赤壁》で水属性魔法を使わせて、《選別する鏡》で跳ね返す作戦に引つ掛かり、さらに水属性魔法以外の魔法を使い、《赤壁》の反撃能力を発動させてしまう愚を犯し、また数人の魔導士が防ぎきれずに戦線離脱する。

防戦一方のクーデター勢は確実に数を減らしていき、今となつては最初の半分、三十五名ほどしか残っていない。はじめは圧倒的不利かと思われた闘いは生徒側が主導権を握っていた。

そこで、クーデター勢は一か八かの行動にでた。全員が生徒達に向かつて接近してきたのである。

(不味い)と、ジェシカは奥歯を噛み締めた。

ここに突っ込んで込まれたら、頼みの“集団魔法”が使えなくなり、個々で迎撃する事になる。そうなると、いくら数はほぼ同じでも、詠唱の声に疲れが見え始めた生徒達と、経験の豊富なクーデター勢の魔導士達とでは勝負にならない。

こちらにはミルドやエイスなど、上級魔導士のなかでも腕の立つ魔導士が揃っている。彼等なら一人で四、五人は相手にできるだろうが、それで戦力の不利を覆せるかどうかは微妙なところだ。

(ここが正念場だな)

ジェシカは決戦の覚悟を決めると、とりあえず広範囲が狙え、短時間で発動できる《平行する光線》の詠唱を生徒達に命じた。その名が現わす通り、平行に並んで伸びていく光線は、突っ込んでくる魔導士達の内、十人ほどを脱落させたが、二十人以上の魔導士が生徒達の陣に突っ込んでくる。

彼女は次に各々の裁量で敵を迎撃するようにいい、自らも槍を手にとって構える。

その時、不意に彼女の上から影が差した。

その影はすぐに彼女の上を通り過ぎ、突っ込んでくる敵の目の前に降り立った。その大きな影の正体は巨大なサソリのようだ。

今は背を向けている為、そのサソリには誰かが乗っているのかどうかすらさえ、ジェシカには図りかねるが、サソリという生き物はエンペルファータ周辺には生息はしていない。生息したとしても、サソリと聞けばジェシカは一人の男を連想してしまう。砂漠の民族衣装に身を包んだ褐色かつしよくの肌を持つ、いつも呑気のんきそうな印象を持つ便利屋だ。

「コーダ!?」

名を呼ぶのに、偶然カーエスと声が重なった。どうやら彼も同じ人物を思い描いていたらしい。

サソリは、その大きなハサミを一振りし、呆気にとられているクーデター勢の魔導士を五人も殴り飛ばす。そのついでにその身を横に向け、御者席に座っていたコーダが笑顔で手を振った。

一対多の戦闘に長けているコーダの参戦により、情勢は一気に偏り、そこから生徒勢の勝利という形で決着が付くのにさほど時間はかからなかった。

戦闘が終わると、カーエスとジェシカはコーダに駆け寄り、フィラレスの無事を確認すると、コーダは“運搬モード”になっていた《シッカーリド》の客席に寝かせているフィラレスを見せ、二人を安心させる。

フィラレスが無事に奪還されたという報告をジェシカから受けたエイスは目の前に倒れているクーデター勢の魔導士達を見渡して言った。

「これで、奪われたものは全て取り返せるわけだな」

ディオスカスは、ウォンリルグへの亡命の手みやげとして、クーデターを起こし三つのものを奪っていた。

その一つがフィラレス、というより彼女が持つ“滅びの魔力”だ。後の二つ“英知の宝珠”に“ラスファクト”もこの倒れている魔導士達の誰かが持っているだろう。

カーエスはとりあえず、一番可能性のある人物に近寄り、その軍人然とした大きな身体をまさぐる。すると、懐から防魔布で出来た袋を発見した。中身を確認すると、圧倒的な魔力の気配が感じられ

る、メダルのような形をした宝石である。その輝きは宝石と呼んでも軽々しすぎるほどに神々しい。

「エイスはん、これは……？」と、唯一確認ができそうなエイスにそれを見せる。

「これは“ラスファクト”だな」

これが、と生まれて初めてみる星の産物をしげしげと眺めるカーエスに、エイスは静かに注意した。

「魔力を触れさせると大災厄を呼ぶらしい。扱いに気を付けてくれ」とするとカーエスは時限爆弾でも持っているのに気付かされたかのように、慌ててそれを元のように袋に戻す。

カーエスは、続けてディオスカスの身体を調べるが、“英知の宝珠”と呼ばれるものは持っていない様だった。

「これ以上は何も無いみたいですね」

「では、別の魔導士に持たせたのだろうか」と、エイスは累々と転がる魔導士達の身体を見回して溜息を付く。五十代であるエイスはもうお世辞にも若いとは言えない。闘いで疲れているので、これ以上の労力は避けたいところなのだろう。

「お探しの物つてのは、これかい？」

不意に声を掛けられ、エイスが振り返った先にいたのはこの場には明らかに異質な男だった。全体的に枯れ木のようなシルエツトを持つ男で、ひよろりと伸びた長身に細いが引き締まった筋肉が見える。

基本的に全身ぴったりのスーツを着けているが、腰回りや頭髮が見えない頭には布が巻かれ、胴体には胸当てなどがつけられている。腰の布には鞘に収まった一本の剣が差さっていた。

そして、彼の目の高さに掲げられた手には“英知の宝珠”とみられる全体に魔導紋様が施された球形の魔導器が乗せられていた。

「ああ、確かにそれだが……、君は？」と、エイスが応対する。

先ほどまでは生徒側にも、クーデター勢にも、そして観客の中にもいなかったはずの男だ。そのシルエツト故に、いれば相当目立っていただろう。

とりあえず、“英知の宝珠”を受け取るうと、エイスが腕を伸ばすと、男はひよい、と小馬鹿にしたようにそれを持った手を上げる。

「……どうやら味方ではないらしいな」

そう言うエイスの顔はあまり意外そうでもない。男の表情は笑っているが、それは喜びや楽しみからのものではなく、何かを面白がり嘲るような類のものであって、あまり友好的に感じられなかったからだ。

「そうだねエ、ま、どっちかつつと、ここにぶっ倒れてる魔導士達の側だわな」と、男は相も変わらず軽薄な口調で答える。「俺はウォンリルグの者だし」

何気無く付け足された台詞に、その場にいる全員が驚きを露にする。この事件ではウォンリルグが深く関わっていたが、まさか「来る者まず許さず、去る者絶対に許さず」と言われるほど自国のものを外に出したからないウォンリルグ人を、まさかここで見られるとは思わなかったのである。

「死んじゃった、っつーか俺が殺したんだが、ダクレーちゃんには“亡霊”って呼ばせてたんだがな、俺の名前はグレン、グレン＝ヴァンター＝ウォンリルグ」

彼の名乗りにいち早く反応したのはジェシカだった。

「“ウォンリルグ”と名乗るのを許されているのは“宗家”のみだと聞いたが？」

ウォンリルグは一つの家族のような国で、国家元首であるマータを母と仰ぎ、国民はその子ら、つまり兄弟としてお互いに愛し合うという形が基本である。

無論、三大国の一つに数えられるウォンリルグの全ての住民を一つの家族としてまとめるには無理がある。その為に、ある単位で“分家”として枝別れしているのだ。

その分家の中心にあるのが、カンファータで言う王家に相当する“宗家”であり、エンペルリースでいうと、大貴族にも相当する高い地位になる。

「ああ、俺は“ラ・ガン”だからな」と、グレンと名乗る男は胸元からウォンリルグの国旗を象つたペンダントかたじを、得意げにちらつかせてみせる。

「“ラ・ガン”……マータ直属の精鋭部隊か」

ジェシカの眉が苦々し気に歪められる。家族というと血縁関係を想像し、ウォンリルグは血統を大事にする印象を受けがちだが、それは全くの誤解である。確かに血統もある程度大事にされるが、それ以上に実力が重視されている。

生まれは末端の分家でも能力があればあるほど高い地位につける。

その典型が、ウォンリルグでも最強の十三人のみが所属を許される
マータ直属の精鋭部隊“ラ・ガン”だ。これはマータの手足と考え
られ、配属されたその瞬間から地位は“宗家”となつて“ウォンリ
ルグ”の名を名乗る事ができるのだ。

(これはまた大物が出てきたものだ……)

“ラ・ガン”と言えば、世間一般の認識でカンファータ、エンペ
ルリース双方で七人しか認められていない“ヴィリド(守護せし
者)”クラスだと言われている。簡単に言えば、ジェシカの師であ
り、前カンファータ魔導騎士団長・シノンタークスと同じかそれ
以上の実力の持ち主というわけだ。

「返してくれと言つても返さないのだろうな」

エイスが念のために尋ねると、グレンは手の中の魔導器を眺めな
がら答えた。

「俺的には、こんなモンどうでもいいんだが……」と、そこでグレ
ンは自分を取り囲むジェシカ達に視線を移して続けた。「返しちま
つたら、アンタらと闘えねえンだろ？ そいつはつまらねエな」

そう言つて、グレンは“英知の宝珠”を腰に巻いた布の中にしま
い、腰を落として身構えた。

「アンタらにこれを取り返すチャンスをやろうじゃねエか。全員ま
とめて掛かつてこいや、俺に勝てたら返してやるよ」

それは不敵な発言だったが、その軽い口調の裏には、それを冗談
とは思わせない迫力が込められており、ジェシカ達は皆一様に緊張

を表情に走らせた。

とりあえず、ここは数で闘っても仕方がないので他の生徒達を、そしてディオスカスとの厳しい闘いを制したばかりのカーエスを下からせ、ジェシカ、コーダ、ミルド、エイス、シュー八の五人がグレンを見据^{みす}えて身構える。

先に攻撃を仕掛けたのはグレンだった。

「我は望む、質より数を！ 《連なる射撃》」

短い呪文の後に向けられた掌^{てのひら}からは、魔力で構成された光弾が三つ続けて発射され、それらの光弾はシュー八を狙う。

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

シュー八は落ち着いて魔導を行い、効果は短いが強い防御障壁を張り、《連なる射撃》の光弾を防ぐ。

つづけて、シュー八は《絡^{から}み上げる根》でグレンを捕獲に掛かった。

「地走れ、《絡み上げる根》！ 樹木を支える強さで我が敵捕らえんがために！」

グレンはそんなことはお構い無しにシュー八に向かって一直線に駆ける。途中で地中からは《絡み上げる根》が彼を狙ってその根を伸ばすが、それは大きく跳躍する事で避けられてしまった。

「弾け、ばらけよ、仇なす者に確かな傷を！ 《散^{さん}弾》」

発射した瞬間からばらけ、広範囲に攻撃が渡る《散弾》だが、グレンはシュー八に対しかなりの近距離でそれを放った為に、ばらけた光弾がほとんど彼に命中してしまう。

とっさに薄い障壁をはって、致命傷を逃れるが、戦闘不能になるには十分な傷を負って、シュー八は後方に吹き飛ばされてしまった。

「おいおい、せっかく相手してやってんだ、もうちょい粘れや^{ねば}」

負傷して生徒達に駆け寄られているシュー八に嘲りの言葉を投げかけつつ、観察し、彼がそれ以上闘わないであろうことを確かめると、グレンはその目をエイスに向けた。

エイスはその視線を受け、その顔を強張^{こわば}らせるが、即座に魔法の詠唱を始め、その攻撃に備える。

「光よ、曲がり通りて、我が身体を《不可視》のものに！」

その魔法が発動し、エイスの姿がグレンの視界から消える。

グレンは《連なる射撃》や《散弾》など、射撃系の魔法を得意としているようなので、こうして姿を隠すのは有効な対抗策のはずだ。あとは適当に距離を詰め、隙を見て姿を現わして攻撃を加えればよい。

「ハン、まあ第一線を離れたオジサンにしちゃ考えたが、世の中いや『数撃ちや当たる』ってない言葉もあるんだぜ？ 我は望む、質より数を！ 《連なる射撃》」

シュー八を狙った時は三つだったが、その数は好きなだけ調整できるらしく今回は二十も三十も光弾が掌から発射される。エイスの消えた地点を中心にグレンは前後左右くまなく光弾を掃射し、エイ

スを探す。

危険を感じたのか、あるところでエイスは《不可視》を解き、その掃射をとめるべく攻撃魔法を唱える。《不可視》は便利な魔法だが、不可視状態のままでは別の魔法を使えないというデメリットがあるのだ。

「大地を揺るがすは地上の波！ そのうねりを持ちて飛ばすは《岩飛沫》！」

エイスの目の前の地面が海のごとく波打ち、いくつもの石が礫しぼりとなってグレンを襲う。

「そこにいたのかい」と、グレンは自分に向かってくる石に掌をむけ、今だ連射を続ける《連なる射撃》によってそれらを全て撃ち落とした。「まあ、とりあえず消えても動けねえようにしときますか。集つとい凝こりし《貫く光線》よ、我が敵撃ち抜く槍となれ！」

すると、魔法の発動と同時にエイスに向けられた指からは細い光線が発射され、あっさりとエイスの足を撃ち抜いた。

「クッ……！」と、思わず膝を付くエイスに、グレンはゆっくりと歩み寄っていく。

「さーて、動けなくなったところでゆっくりと料理してやるかね」

そんな彼の歩みの前に立ちはだかったのはジェシカである。

「決まった勝負を続けるのもつまらんだろう。今度は私が相手だ」

眉間みけんに向けて突き付けられた槍の穂先を前に、グレンはニヤリと笑う。

「美女に凄まれるってえのもなかなかオツだなア」

そう言つて、グレンは腰に差していた剣を引き抜いた。その切っ先を槍の穂先にあわせるように構え、空いた方の手で来い、とでも言うようにくいくい動かした。

それに応えるように、ジェシカはグレンに踏み込んで、取りあえず刺突から入る。グレンが剣でそれを受け流したところを、彼女は振払うように槍を横よこに薙なぐ。それに抵抗し、その場に留まろうとするグレンだったが、込められた力の強さが予想より大きく、その抵抗は失敗に終わった。

「魔法で肉体を強化してやがったのか……、こいつは失態だな」と、自分の剣を眺めて自嘲気味に言ったグレンは、改めて剣を構えた。

「今度はこつちから行くぜ」

グレンはその剣をもってジェシカの懐に飛び込む勢いで踏み込むと、力強くその剣を振るうジェシカは自らの槍を持って、それに応じ、お互いの武器をあわせること数十合。その立ち回りは、誰が見てもジェシカが押されている事は明らかだった。

もともと、剣と槍という組み合わせが悪かった。槍は剣よりも小回りの聞かない武器で、剣と闘う場合は距離をとりつつ闘わなくてはならない。

「おいおい、もう息が上がったのかよ？ んじゃ、そろそろ決めちまうかあ？ 我が剣は《俊速しゅんそくの剣》、その速さ、汝の目に写ること適あわらず！」

射撃系のための魔導士かと思われていたグレンはジェシカと同じく補助系魔法にも長けているようで、その魔法の発動後、グレンの持つ剣が輝きを放ったと思うと、恐ろしい速度を得てジェシカに襲い掛かる。

ジェシカはどうか急所への攻撃だけはさばき、軽い攻撃を受けて体中に浅い切り傷を負う。しかし、一気に傷を負ったことの衝撃は大きく、グレンに対し隙を見せることになってしまう。

元々それが目的の魔法だったのかグレンはにやりと笑って次の魔法の詠唱に入った。

「汝、我が剣の前に退くがいい、両に開きて我が道に続く扉となるがいい！」

そこまで唱えると、さらに輝きが増してきた剣をグレンは大きく振りかぶり、詠唱を完了させる。

「からたけわ《幹竹割り》ッ！」

「……っ！ 《電光石火》によりて我はまたた瞬く速さを得ん！」

ふ、とその場からジェシカの姿が消え、その一瞬後、グレンの剣が力一杯に振り降ろされる。ジェシカがいたはずの空間を切り裂いたグレンの剣は、地面を打ち、爆音ともとれる轟音と共に、地面に大きな亀裂を残した。

とつさに《電光石火》を使って目の前から離脱し、距離をとったジェシカだったが、その威力を見てその目を大きく見開く。

必殺の一撃を躲され、舌打ちをしたグレンは、いち早くジェシカを見つけると、掌を向け《連なる射撃》を発動。幾つもの光弾が彼女を襲う。

ジェシカはそれを叩き落とそうと、槍を構えるが、その光弾は途

中で軌道を変え、足下に着弾する。もうもうと砂埃すなほこじが彼女の視界を奪い、グレンの姿はそうして出来た死角の中に消えた。

「駆けよ斬撃！ 離れし者にその力を見せる為に！ 《飛燕ひえんする斬撃》」

砂埃の向こうから声が聞こえた直後、その砂埃からジェシカ目の前に現れたのは三日月のような形をした魔力の光だった。意外な攻撃に、ジェシカは飛来してきた斬撃をほぼともに受け、その場にならずくまってしまう。

自分の連続攻撃が上手く決まったことに、満足そうに頷くグレンは、おもむろに横に振り向き、側面からの攻撃に対応した。

その視線の先には両手に短刀を握った褐色の肌の男・コーダがいる。

「不意打ちたあ随分行儀が悪いんじゃないかねえか？」

「俺は礼儀作法を心得た騎士じゃないスからね」

受け答えの間にも、彼等の間には剣戟けんげきが続く。先ほどのジェシカとは逆に、短刀を持つコーダの方が小回りが利き、しかも二刀流だ。力が若干足りないものの、そこを上手く捌さばいて手数で上回っている。

「ふむ、なるほど。ちったあ速いが、さてコレは受けきれるか？」
と、言うと、グレンは鋭く、且つ大きく剣を振り、コーダを少し離れさせると、呪文を詠唱しはじめた。「我が剣は《俊速の剣》、その速さ、汝の目に写ること適わず！」

グレンの剣が輝くと共に、その剣筋が閃く。ジェシカはかろうじ

て急所を外したが、コーダはそれを受けられず、全ての斬撃を受けてしまった。

彼のように見えたが、次の瞬間、血を流して倒れ伏すはずのコーダの身体がぼやけて消えてしまった。

「ち、《残像》かよ」と、驚くこともなくグレンは舌打ちをする。

《残像》は自分の姿をその場に残したまま移動できる魔法だ。ただしこの魔法の効果は像を残すまでで移動は普通に行わなければならない為、だまし討ちに使うには手品師のような、他人の目を騙す能力に長けている必要がある。

「だけだよ」と、敵の策略に引つ掛かり、舌打ちをしたはずのグレンだったが、次の瞬間にはその口元を釣り上げて言った。「一つ忠告しとくぜ、ウォンリルグの戦士の後ろにや立たねえことだ」

その言葉に、グレンの背後に忍んだ影が動揺を見せる。

「戦士たる我、何人たりとも我が背後に立つことを許さず！ 《背撃》」

その動揺の間について唱えられた魔法が生み出した障壁は、背後で攻撃を加えようとしていたコーダを吹き飛ばす。

「ああ、今度はアタリだったなあ？」と、確実な手ごたえを得たグレンは、うしろを振り返って、すぐさま《連なる射撃》を行使した。彼の掌から放たれた光弾が、コーダに命中していく。

四、五発も命中したところで、後に続く光弾がコーダを護るよう

に巻いた風がそれをかき消した。

「……そういや、もう一匹残ってたっけか」と、グレンが目を向けた先にはがっしりとした体躯たいくであるものの、その身体に羽織っているのは研究者の証である白衣を来ている男、ミルドがいた。

ミルドは、いつもは人当たりの良い表情を浮かべている顔を厳しくしかめて唱える。

「巻き立ち上がれ、《旋風》！」

自分の周りに引かれていく緑の円を見て、グレンは素早くその場を立ち退いた。しかし、その動きを読んだのか、立ち退いたグレンを狙って《かまいたち》を放った。

避けきれない速さで迫る空気の刃の前に、グレンは剣を構え、對抗する為の魔法の呪文を口にする。

「駆けよ斬撃！ 離れし者にその力を見せる為に！ 《飛燕する斬撃》」

詠唱が終わると同時に振り抜かれた剣からは、三日月型の魔力の光が放たれ、《かまいたち》と交錯すると、お互い相殺して消える。

「我は望む、質より数を！ 《連なる射撃》」

「護りし風よ、我が敵の手を《巻き込み》て掻き消せ！」

先ほどはコーダを護った風が今度はミルド自身の周りに巻きはじめ、彼に向かって飛んでくる光弾を防いだ。

五、六発ほど続いたそれを、《巻き込み》の風でかき消し、再び反撃に出る為にそれを解いた時、グレンはその様子ににやりと口元

に笑みを浮かべる。

「《跳弾》によりて、軌道よ変われ、我が意のままに」

ミルドの背中に冷たいものが走り、反射的に背後をみる。すると、先ほどの《連なる光弾》の際、三発ほど外れていた光弾が鋭角に軌道を変えて彼に迫っていた。

防御魔法も間に合わず、ミルドは必死で身体を捻^{ひね}り、その攻撃を避ける。

何とか避けられたことにほっとするミルドの耳もとから不意に声を掛けられた。

「闘ってる最中は相手から目を離さねエことだぜ、ニイちゃん」

目を向けた時には既にミルドの懐にグレンが入り込んでいた。驚きに目を見開くミルドに、グレンは敢えて一呼吸あけて目を合わせ、笑ってみせると、既に構えていた剣を振り抜く。

もともと、白兵戦の心得がほとんどなく、その上不意も突かれていたミルドにそれを受ける手段も避ける手段もなく、彼は一閃される剣に斬り付けられた。

「ミルドッ!」

広場を囲み、闘いを見守っていたエンペルファータの住民達の中からテイタが飛び出し、倒れたミルドに駆け寄った。ろくに声が出せないミルドが離れていると掠れた声で必死に伝えるのも聞かず、頭を持ち上げ、その胸に抱き寄せる。

テイタは弱々しく彼女の腰に回されるミルドの腕を感じながら、グレンを睨^{にら}み付けた。

「美しい愛だねえ。無力ながら身を挺して傷付いた男を護るってか」と、グレンはその視線を受けて嘲るような表情を返すが、

「美しすぎて反吐が出る」

次の瞬間、その顔が不快そうに歪められた。

「ニイちゃん、何だ、その情けねエ姿はよ？ 女に護られるなんざみつともねえとは思わねえのか？ あ？ そうか、みつともねえのも気にならねえほどアイシあってるってか？ なら二人一緒に殺してやらアッ！」

そう言つて、グレンは掌をテイタとミルドに向け、《連なる射撃》を詠唱する。来る衝撃に備えて、テイタはミルドを一層堅く抱き締め、身を固まらせた。

一欠片の慈悲も見せることなく、放たれた光弾がテイタとミルドには届かなかった。

「火には水となり、風には土となる、斬る者あれば固くなり、殴る者あれば弾力を得ん、その特性は臨機応変、行方は武力の妨げ。我が纏いし《七色の羽衣》は如何なるものも拒絶する！」

ディオスカスとの死闘の為、いままで休んでいたカーエスが二人の前に飛び出し、障壁を張る。《連なる射撃》は途切れることなく続いているが、障壁もまた消えることはない。

「助け合つて、思いあうことがみつともないことがあるかい！ それに文句垂れとるおんどれのほうがよほど醜いわっ！」

障壁越しにグレンを睨み付け、怒鳴り返すカーエスにグレンは不快そうだった表情を再び愉悦ゆえつに歪める。

「見てられなくなって出てきたか？　しかし疲れが見えてるぜ、小僧。その強がりがいっつまで持つか見せてみるや」

グレンの《連なる射撃》の連射をカーエスの《七色の羽衣》が防ぐ、という状態はしばらく続いた。テイタはカーエスの障壁に守られながら、ミルドに応急手当てを施している。無駄かもしれないが、思いつつも他にすることもないし、何もしないよりはマシだった。何とかミルドを担いでここから離れられれば、とも思ったが、障壁の外に出ればグレンに狙われるだろうし、ミルドは雰囲気きんぐいに反して身体ががっしりしていることもあり、担いで移動することさえ出来ないかもしれない。

目の前で障壁を張り続けるカーエスの顔には玉の汗が滲にじんでいた。朝から闘い通しのところに、ディオスカスとの全力を出しての決闘を終えた後だ、魔力に限らず体力、精神力、気力、力と名のつくもの全てが彼の身体から枯渴こかつしかけているに違いない。

もし、カーエスの《七色の羽衣》が消えたらどうなるのだろうか、とテイタは思った。とりあえず、自分達やカーエスは無事では済まないことは想像に難くない。問題は、もうグレンを止める人間がいなくなるからだ。

今、彼が持っている“英知の宝珠”、そして“ラスファクト”は持ち去られ、後はどうなるか分からない。ウォンリルグはカンフータとエンペルリースに戦を仕掛けるのだろうか。

どちらにしろ、“英知の宝珠”が持ち去られるのは口惜くししかった。

あれに詰め込まれているのは、魔導研究所における全ての人間達の成果、いわば研究者、開発者達の夢そのものなのである。それが、それを手に入れるのに汗も涙も流していない者たちに渡るのは嫌だった。

（ここで、終わりなのかね……）と、ティタは心の中で呟く。

諦めあきらめという言葉にあまり縁のないティタだったが、今この状況を打開する方法が思い付かない。打開できる要素が見つからない。

空を仰ぐと、カーエスの張った虹色の障壁が少し色褪せているのが感じられた。ずっと見てみるとだんだんと色を失っていくのが分かる。

（ここで、終わりなのかね……）

もう一度、心の中でその言葉を繰り返した。本心では諦めてなどいない。受け入れる気などさらさらない。ただ、希望がないだけだ。ティタはどんどん希薄になっていく虹色の障壁を眺め、ひたすらその疑問をその向こうに見える空に投げかける。

その空に、一筋の光が見えた。

（流れ星……？）

まさかこんな昼間に、と否定する間もなく、それは一条の稲妻となつてグレンの上に落下した。

グレンは直前に気付き、魔力で精一杯の障壁を構成し、回避行動を取るが、その威力に数メートル吹き飛ばされた。

その稲妻が落ちた地点には、もうもうと上がる砂埃の中にはおぼろげに人影のような者が見える。その煙が晴れていくにつれて、その人物を知る者たちの目が見開かれていく。

そこに飛び込む稲妻を見て、シューハはかつての師を思い出した。

自分に魔法を教えていたファルガールが突然魔導学校を去った時、シューハは自分達が見捨てられたのだと感じた。後で、その事情を聞き、決して見捨てられたのではないと知ったシューハは本当の意味で見捨てられないように精進した。

だが、精進すればするほどに、自分の限界を知った。隣で大きく伸びるクリンクランと比べ、自分の力の小ささを知った。そして、師がいかに大きかったのかを知った。

ファルガールから直接聞いたことがある。彼の夢は自分の育てた者をファトルエルの大会で優勝させることだと。

しかし師として、目標にするにはファルガールは大きすぎた。しかし、彼の大きな力を全て受け止め、彼の夢を叶えてやれる者はいらぬのだろうか。それが一つの憂いだった。

稲妻が晴れた時、そこにいたのはファルガールではなかった。優しい気な印象を与える栗色の髪を揺らす外見はまるで似つかない、少年とも呼べるような幼さを残した顔つきの青年だ。

しかし、その身体から散るのは紫電、その手に構えているのはかつて師が得意としていた武具召喚魔法の雷槍、グレンを見据えるエメラルドグリーンの眼には意思の強さが宿る。

そして、その胸に下がるペンダントは。

先生の夢は、適えられたらしい。

テイタは、自分達の危機を救い、この場に降り立った男を信じられない眼差しで見つめていた。

一度は砕け散りかけたはずの夢だった。それを、周りの人間が駆け回って繋ぎ止めた。

彼の夢を繋いだ者たちが力つきようとしている時、彼は戻ってきた。

今度はテイタ達の夢を取り戻す為に。そんな、タイミングのいい話があるのだろうか。

いずれにせよ、彼がここにいることは紛れのない事実だ。ここには無くなったはずの希望が、ここに降りてきたことは。

まだ、終わってないんだ……。

「ったく……」

《七色の羽衣》を解き、緊張が弛んだのかその場に座り込んでしまったカーエスが悪態をつく。

「またええトコ持っていきよってからに」「そう言っな、みんな分かってるさ。今回一番よく働いたのはお前だ。そのお陰で俺は今ここにいられる」

そう言って、その青年、リク＝エルは肩ごしに振り向き、カー

エスに笑いかけた。

「お疲れさん。後は俺に任せろ」

43 『砕かれた夢の結晶』

目障りだ。

ぬる
温い環境で、不自由なく育った奴。

お互い弱くある事を許しあうような甘ったるい関係。

人は強くあるべきなのに。

そうでなければ生きる資格などないというのに。

目障りだ。

自分はそうして生きてきたのに、

それに従わず、強くなろうともせずへらへらと無意義に生きる奴
が。

そんな奴等が見る夢など、砕けて壊れてしまえばいい。

「リク……？ アンタもう動いて大丈夫なのかい？」と、目の前に現れた青年魔導士にテイタが声を上げる。

「ああ、みんなのお陰だ。ありがとな」と、リクは毒で苦しんでいたことはまるでなかったことのように力強く頷いた。そして尋ねる。「……どう言う状況だコレは？」

リクはクーデター騒ぎの間はずっと生死の境を彷徨っていたので、事情はほとんど飲み込めていないだろう。リクの傍について残ったジッタークに駅前の広場で最終決戦をやるということは伝えてあったので、それに加勢するつもりで、文字どおり飛んできたのだ。

とりあえず、今見たのはミルド達を攻撃するグレンで、彼は相手

をするべき敵なのだろう、と最低限の判断を下し、攻撃して今に至ると言うわけだ

「詳しい事情は説明している暇はないね」

「よく分からんが、とりあえずアイツを倒せばいいんだよね？」

確認するようなりクの問いに、ティタは一度、腕の中で朦朧もろろとリクの姿を見ているミルドに目をやり、頷いた。

「ああ、アイツを倒せば終わりさ」

「了解」

そう言つて、ティタに踵を返して歩き出したリクの背中に再びティタは声を掛けた。

「リク」

呼び止められ、リクが振り返つてティタに視線を送ると、ティタは一呼吸置いてから告げた。

「アイツは“知識の宝珠”……アタシ達の“夢”を持っている」

それが“宝珠”と呼ばれるまでになつたのは価値からではない。ティタ達、魔導研究所の研究者、開発者が知り、作る夢を見つづけて、作り上げられたものだからだ。

一つ一つの夢の輝きが、そこに集まり、美しく眩い輝きに匹敵するものになつたからこそ、ただ知識を保存しておくだけの魔導器が“知識の宝珠”と呼ばれるようになったのだ。

「アイツを倒して、それを取り返してくれたら」

一度力つきても、この青年は戻ってきた。

「大いなる魔法”について”

これは、同じように強く夢を見据え、そして夢に散った青年魔導師にはなかった。

「アタシが知っている事を教えてあげるよ」

ならば賭ける価値はある。

リクは、その言葉を聞いた時、見て分かるくらいに、その瞳を輝かせた。エスタームトレイル終了直後にティタが見た、夢に輝く瞳、それが適う未来を信じて冒険を求めている目だ。

「それは嬉しいけど、無理はするなよ。闘いを見て納得できなかつたら教えなくてもいいからな」

その瞳の輝きと共に発せられた、その意外な言葉は、ティタにはとてつもなく優しく感じられた。

突如として戦闘の場に現れ、今は自分に向き合って歩み寄ってくるリクに、弾き飛ばされるようにして後方に退かされた男が舐めるように観察する視線を送った。

「いきなり現れて、誰かと思ったら……“白鳳”^{はくほう}の坊やかい。アンタ死にかけてたんじゃなかったっけ？」

その声を聞いて、初めてリクはこの人物は知らない人物ではないことに気が付いた。ダクレーの“魔導士殺し”にやられて倒れ伏したものの、意識はあった。よって《アトラ》とこの男が会話しているのも聞いている。

「お前、あの時ダクレーを殺した奴か」

あの時、意識が遠のくのを必死でこらえながら聞いていた男の声、それは軽薄な口調だったが、その声には聞く者を畏怖させるような殺気が込められていた。

「何だ、あん時まだ起きてたのかい。大した根性じゃねえか、坊や」と、男はおどけるように片眉を上げてみせる。「間に合って嬉しいぜ。ちよつとここにいたのはイキが悪くてな、退屈してたトコだ。坊やならもうちよつとは楽しませてくれるんだろう？ あん時からいっぺん闘やつてみたかったんだ」

「そりゃ、急いできた甲斐があったな。でも“坊や”は止めてくれよ、一応成人してるんだから。リクニエールッてちゃんとした名前もある」

名前を名乗り、リクは腰を落として紫電しでんを纏まとう矛を構えた。そんな彼にやる気を見たのか、男も満足そうに笑い、身構えて名乗る。

「そうか、俺の名はグレンニヴァンターニウオンリルグ。グレンでいいぜ、“坊や”」

「やな奴だなー、あんた」

名前を教えたのにも関わらず、明らかに嫌がらせて“坊や”を強調するグレンに、リクは眉を潜ひそめて文句を言う。

何となく和やかな会話の流れだったが、それは突如として殺伐とした雰囲気にとって変わり、グレンが高らかに呪文の詠唱を始める。

「距離は縮まりて、踏み出せばそこは望みしところ！ 《縮地》」

詠唱完了と同時に一步踏み出すと、グレンの姿が突然リクの目の前に現れた。

似たような魔法にジェシカが好んで使う《電光石火》があるが、この《縮地》という魔法はその印象において決定的な違いがあった。《電光石火》は“動きを速くして走ってきた”という感覚が少なからずあるのだが、《縮地》の場合はそれがない。自然な動作で一步踏み出した続きといった感じで目前にあらわれるのだ。

リクは心臓が驚掴みにされたかと思うほど驚き、背中に冷たいものが走る。反射的に立ち退こうとするが、それを追うように続けて魔法を行使する。

「我が剣は《俊速の剣》、その速さ、汝の目に写ること適わず！」

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

刀身が輝き、速度を増したグレンの斬撃を、効果は短いが強い障壁で防ぐと、リクは持っていた《ヴァンジュニル》を振り回した。紫電を散らしながら襲い来る槍に、グレンは舌打ちをして後ろに下がる。

「我は電気用いて縄を縫らん！ この《戒めの雷縄》に捕縛されし者は痺れと共に、自由を奪われん！」

適度な距離を取り、グレンの剣の攻撃範囲から離れたリクは、《ヴァンジュニル》の槍先からグレンを捕らえんと縄のような形をした電気を放つ。その《戒めの雷縄》は確実にグレンを捉え、その自

由を奪う。

攻撃も防御も適わなくなつたところで、リクは《ヴァンジュニル》を構え、グレンを攻撃すべく、離れた距離を詰めていく。

「いかなる緊縛も、我を戒める事能わず！ 《破戒》っ！」

グレンは自分を縛っていた電気の縄を破ると、自分に向かって距離を詰めてくるリクに掌を向け、《連なる射撃》によって光弾を放った。

すると、リクは反射的に走る方向を変え、グレンの周りを回るように走りながら胸の前に両手を持っていき、魔導を開始する。

「我は放たん、連なりて射られしものを炎に包む《火炎の連撃》を！」

胸の前に構えた手の中に現れた炎の弓矢を引き絞り、放つと、一つめの矢に続いて五つもの槍が続き、それら全てがグレンを目標して飛んでいく。

「《弾幕》を張りて迎え撃たん、我が敵の魔手！」

グレンが襲い掛かってくる炎の矢にむけて掌を向けて唱えると、同時に二十発ほどの小さな光弾が発射され、《炎の連撃》と衝突して消える。残りの光弾がリクを襲ったが、リクは危な気なくそれを避けた。

「面白エ。あまり見ねえ魔法を使いやがる」と、攻防に区切りがついたところでグレンが言う。

確かにリクは、一般魔法に属する魔法ではなく、流派固有の魔法

を多用する。魔法は知られていなければいるほど対策を立て易く、未知の魔法はとつさに防ぐのは難しい。しかし、闘い慣れて来ると見飽きた魔法より、珍しい魔法を使う魔導士と闘う方が新鮮で面白く感じられるのだ。

「だが、これは受け止められるか!?」と、グレンは腰をぐつと落とし、両手をリクに向けて構えると、魔法を唱えはじめる。「破り壊す力よ、ここに満ちよ! 貫き砕く力よ、ここに集え! 我の意に従い、解き放たれよ!」

グレンの呪文の詠唱に応えるように、グレンの構えた掌の先にはみるみる魔力が集まっていき、リクを畏怖いふさせるには十分な大きさを誇る光の玉になる。グレンは、その詠唱を完結させ、その光の玉を解き放った。

「《波動砲》っ!」

その光は魔力の奔流ほんりゅうとなり、地面を削りながらリクに襲い掛かる。リクは《ヴァンジユニル》を構えると慌てて対抗するための魔法を唱えはじめた。

「電気の流れは磁力の流れ、磁力の流れはこの場を囲い、全ての流れをねじ曲げ《磁場》をなす!」

リクを中心に強力な磁場が形成され、その磁力が《波動砲》による魔力の奔流を受け止めた。だが、その《波動砲》の威力は大きく、《磁場》の磁力は魔力の奔流の勢いを流し、方向を変えて受け流す事がなかなか出来ない。

「くっ……!」と、リクは力を振り絞り、《磁場》に追加の魔力を

注ぎ込んで《波動砲》に対抗する磁力を高めると、その強大な魔力の奔流はやつと明後日の方に飛ばされていく。

防御には成功したものの、リクは幾らか残った《波動砲》の圧力にふらりとよるめいた。

それを見逃すグレンではなかった。《縮地》を唱え、リクの正面に移動すると、両手で剣を大きく振りかぶって呪文を詠唱する。

「汝、我が剣の前に退くがいい、両に開きて我が道に続く扉となることがいい……」

振りかざされた剣から発せられる威圧感にリクは戦慄を覚えた。しかし同等の規模を持っていた《波動砲》を防いだばかりの今はあまり大きな防衛行動を取れない。

「《幹竹割り》っ！」
からたけわ

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

二人の声が同時に重なり、振り降ろされたグレンの剣を、リクの障壁が受け止める。しかしその障壁は少し抵抗したのみであっさり破られた。だが、威力を多少はやわらげられたらう。リクはその上で、《ヴァンジュニル》の柄でもってその剣を防いだ。

たっぷりと魔力を帯びた剣を《ヴァンジュニル》が受け、バチバチと紫電が散る。数瞬、その状態で停滞したが、リクは遂に後方に飛ばされる。

何とか転倒を免れ、《ヴァンジュニル》を構えて、グレンを見据えるが、その手の中にあつた《ヴァンジュニル》にはヒビが入っていき、パキーン、という音と共に碎けて魔力に還つた。

砕け散った《ヴァンジュニル》を持っていた手を見つめたのち、
リクはグレンの方に目を戻した。

(理に適った強さだな……)

それがグレンの強さに対するリクの感想だった。

《連なる射撃》等の遠距離戦用魔法、《俊速の剣》等の近く中距離戦用魔法、自分の使う魔法を単純なもので構成する事によって速さと強さを上手く両立している。属性をもった魔法がない分、得意なタイプはないだろうが、逆に苦手とするタイプの魔導士もいまい。一対一でもできるし、他の魔導士と組んでも、グレンは上手く働けるに違いない。

それだけではなく、魔力や魔導制御力等の魔導士としての基礎能力が高い。そして剣を操る筋力等も申し分なかった。闘いにも慣れ、経験も豊富だろう。

つまり、グレン＝ヴァンター＝ウォンリルグは単純に強いのだ。

(とりあえずこっちは丸腰だ。新しいのを召喚しなくちゃな)

グレンは《縮地》という魔法を持っている。いくら距離を離しても、あっさりと懐まで潜り込まれてしまうので、あっちの剣に対抗するものがないのは少し厳しい。

先ほどまでで、グレンの強さは十分に分かった。この際、出し惜しみしている場合ではない。こちらも最高の魔法武器を召喚して対抗するのだ。

「その鞘に収まりしは曇り無き直刃！ 鍛え抜かれしその刃に断てぬもの無し！ 一度抜きし時、その速さは光も超える！ いざ抜き放たん、一太刀にて全てを決す神速の太刀……」

その呪文を詠唱しながら、リクは刀を抜くように、左腰に両手を構えた。そこに白い光が集まってゆき、棒のようなものを形成する。その形はたちまち具体化し、最終的に鞘に収まった刀の形になる……はずだった。

「……………っ!？」

実際には白い光が集まり、棒のようなものを形成するまでで、その後魔力は霧散^{むさん}してしまっただのである。

(失敗!? 嘘だろ……!?)

疑問がリクの頭の中に駆け巡る。確かに、魔法武具召喚は普通の魔法と比べると遥かに高い魔導制御力が必要なので、知っただけでも使える者はあまり存在しない。その点、リクは魔導制御には自信を持っていた。未だかつて、否、たった今まで魔法の発動を失敗させた事等なかったのである。

「どうしたア? 魔法使うんじゃなかったのかよ? そっちが来ねえならこっちが行くぜ! 我は望む、質より数を! 》連なる射撃
《
「

向けられたグレンの掌から無数の光弾がリクに向かって放たれた。リクは何発か妙に狙いの外れた光弾が混じっている事に気がついた。先ほど使った時には、動かなければ全て命中していたほどの精度はあつたはずだ。

(わざと外している、ということか)

リクがよく使う防御魔法《瞬く鎧》はレベルの割に強力だが、障壁をはっている時間が短く、使うタイミングの難しいところがある。外された光弾をどうにかして、《瞬く鎧》の効果時間の短さを突こうというのだろう。

となれば、とる行動は防御より……

「回避だな。我が足に宿れ《飛躍》の力！」

今度の魔法はきちんと効果を現わし、リクは上空に離脱する。

「おいおい、それじゃ狙ってくれって懇願こんがんしてるようなモンだぜ。集い凝りし《貫く光線》よ、我が敵撃ち抜く槍となれ！」

グレンがさした指から光線が発射され、真直ぐリクに向かって伸びていく。

「『《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

今度こそ、障壁をはって《貫く光線》を防御すると、リクは放物線に従って着地する。

が、着地した際、今度は膝に力が入らず思わず膝を付いてしまった。

「あ………れ？」

「おいおい、余所見しちやイヤだぜ？」

その声にリクは跳ねるようにその頭を上げる。その前には、その一瞬の隙を付き《縮地》で近距離に近付いて来ていたグレンがいた。

「弾け、ばらけよ、仇なす者に確かな傷を！ 《散弾》」

障壁を張る暇も、回避するも余裕もなく、リクは《散弾》による光弾を腹部に受け、後方に弾き飛ばされた。

「……どうなってるんだい？」

訳の分からぬ間に劣勢に陥ったテイタが、カーエスに解説を求め
る。

そのカーエスはディオスカスを倒した時に、ジェシカから返して
もらい、掛け直していた眼鏡を外して様子を見る。その瞬間、カー
エスの表情が凍り付いた。

「嘘やろ……」

「やはり、魔力が切れかけているのか？」

呆然と漏らしたカーエスの隣に、どっかりと腰を下ろしたのはジ
エシカだ。どうやら力を振り絞ってここまでやってきたらしい。他
にも、コーダやシューハ、エイス等といった顔ぶれが、この一角に
集結しつつあった。

「魔力が切れかけてる？」と、ジェシカの言葉に反応したのはテイ
タだった。「どういうことだい？ さっきまでリクはたっぷり寝て
たじゃないか」

「しかしそれしか考えられない」

リクは、魔導制御力・九十九パーセントと言う、常人とは懸け離
れた魔導制御力を誇っている。だから、魔導制御の問題で魔法が失
敗する事はある得ない。だとすると先ほどの《煌》マジックが失敗した理由

はただ一つ。

「魔力が足らなかつたからです」

「魔力だけやないよ。体力、筋力もかなりギリギリや。最後、着地した時ちよつとよろけたのも筋肉に疲労が溜まつとつたんや」

“魔導眼”でリクを観察しながらカーエスが付け足す。

しかし一体何故、リクがそこまで消耗しているのか。その疑問に揃つて首を傾^かげているところにジッタークが野次馬の住民を割つてカーエス達のもとにやつてきた。

「お、カーエス、無事やつたか。……戦況の方はどや？ さつきリクが起きて飛んでいきよつたが」

「あんまし芳しいとはいわれへんなあ」と、カーエスはとりあえず、リクの力が尽きかけている事を話した。

「そらそうや、あの魔法は“リクの身体の時間を戻す魔法”であつて“リクの身体を回復させる魔法”やない。今のリクの状態は戻つた先の時間、つまり昨日の今頃の状態と同じ状態なんやな」

「昨日の今頃……」と、カーエスが考えを巡らしはじめ、しばらく経つと、カーエスだけではなく、ティタ、ジェシカ、コーダが揃つて声を上げた。

「あつ」

そして、全員揃つて顔を合わせて言った。

「エスタームトレイル……っ！」

「おいおい、アンタさっきまで全然闘ってなかったろうが。何でも疲れてんだよ」

「……それは俺が聞きたい」

《散弾》で吹き飛ばされたものの、当たり所がよかったのか、幸いにもリクはまだ動く事が出来た。しかし立ち上がる時、身体が猛烈に重く感じた。これは疲れた。理由は分からないが、自分の身体からは力という力が枯渴しかかっている。

なんとか、グレンに向かって身構えるが、正直まともに闘える自信がなかった。

（でも、俺のだけじゃねえ。テイタ達の夢も掛かってる。負けるわけにはいかねーんだ！）

ありつたけの気迫を込めてグレンを見据^{みす}えるが、グレンはそれを受けても嘲^{あざわら}るような視線を返すだけだ。

「武器もねえ、魔力もねえ、おまけに体力もねえ。そんな奴ちゃ、興味は湧かねえな。とっとと終わらせるぜ。距離は縮まりて……」

（不味い、《縮地》だ）

リクは内心で舌打ちをする。先ほどとは違って今は丸腰だ。接近戦に持ち込まれると、グレンの剣を防ぐ手段がない。やるなら遠距離戦に徹しなければいけない。

「我は投げん、その刃に風巻く《風の戦輪^{せんりん}》を！」

「踏み出せばそこは望みしところ！ 《縮地》」

とりあえず速く威力もそれなりにある魔法を唱えて、グレンを牽

制しようとするが、グレンは《風の戦輪》が迫ってくるのにも動じず、落ち着いて《縮地》を発動させ、《風の戦輪》をかいくぐるようにしてリクの目前に現れた。

「我が剣は《俊速の剣》、その速さ、汝の目に写ること適わず！」

剣が閃き、目には捕らえられないくらいの速さでグレンの剣がリクに向けられる。リクはそれを何とか《瞬く鎚》で防いだ。

とりあえず、この男とは距離をとらなければならぬ、と考えたリクは近距離用だが効果の高い魔法をぶつけるべく呪文の詠唱を始めた。

「我は叩かん、衝撃が凍結を生む《氷の鎚》にて！」

頭上に振り上げられたリクの両手の中に鎚の形をした白い光が現れた。リクはそれをグレンに向かって振り降ろす。

「近距離はお好きじゃねえらしいなあ？」と、グレンはからかうようにして言うと、リクのすぐ横に移動し、《氷の鎚》を避けた。

からかいに対して文句の一つも言ってやりたいリクだったが、グレンとは違ってあいにく彼にその余裕はない。文句の代わりに口をつくのは更なる攻撃魔法の呪文である。

「我は刈り取らん、その刃に掛けし全てを薙ぎ払う《疾風の鎌》にて！」

今度リクの手の中に現れた鎌型の乳白色の光を、リクは自分の左側に移動したグレン目掛けて横に薙ぐ。《疾風の鎌》は近距離用の魔法で、その範囲は広い。先ほどはすぐ横に逃げる事で避けられたが、今度は後ろに下がるしかあるまい。

迫る刃を見て、グレンは剣を構えて魔法を唱えはじめた。

「剣よ、迫り繰る困難を《切り開き》て、打破せし力を！」

グレンの剣が光を帯びはじめ、彼がそれを振るうと、《疾風の鎌》が切り裂かれ、彼を傷つける事なく四散する。

予想外の防御法に、リクが動揺している間に、グレンはもう一度《俊速の剣》を行使し、リクに斬り掛かった。

「くっ……！」と、両腕でできる限り急所をカバーし、その攻撃を受ける。しかしいくら速さ重視で攻撃力のない攻撃だからといって、防御魔法無しに受けたとあらば、その後に隙ができるのも無理はない。

その目の前でグレンの威圧感がどんどん膨らんでいく。その剣は大きく振りかぶられていた。

「汝、我が剣の前に退くがいい、両に開きて我が道に続く扉となることがいい……！」

リクの頭が発する警告を、身体が受け止めたのか、《俊速の剣》で衝撃を受けて動けないはずの身体がわずかに動いた。リクは目の前に迫る危機を回避しようと必死で後退しつつ、防御魔法を唱える。

「《幹竹割り》っ！」

「《瞬く鎧》によりて、この一瞬、我は全てを拒絶する！」

間一髪でリクの防御魔法が発動し、頭上に迫るグレンの剣を受けた。リクは必死で《瞬く鎧》になけなしの魔力を注ぎ込み、少しでも強く《幹竹割り》に抗おうとするが、それも長くは持たず、《瞬く鎧》は破られた。

しかし、その剣がリクを斬り付ける事はなかった。剣を受けるものはなかったが、《瞬く鎧》で稼いだわずかな時間に後退し、間合いから抜けていたのだ。

だが、斬撃は防ぎ、回避できても、《幹竹割り》の威力は半端なものではない、その検圧と、地面を打つ時に発生した衝撃波がリクに襲い掛かり、リクはこれ以上抵抗出来ないまま、吹き飛ばされる。リクは、後方にあつた魔導列車の駅の壁に打ち付けられると、そのまま前のめりに倒れてしまった。

「リクツ!!!」「リク様ツ!」「兄さん!」

カーエス、ジェシカ、コーダが三者三様に彼の名を呼ぶ声が広場に響いた。

彼等にとつては、もう勝負が決まったようなものだろう。先ほどリクがもともとエスタームトレイル終了直後と同じ、消耗しきつた状態であるということを知っているのだから。よしんばここでリクが立ち上がったとしても、それこそもう魔力も体力も残っていないだろう。

勝負が付いたかと、ざわめく観衆の声の中、グレンはリクに向かって不快そうに顔を歪めて言った。

「つまらねえな。折角面白くなってきたトコだったのによ。あんまりアツサリくたばってもらわれるとこつちが困るんだがなあ?」

それが聞こえたか聞こえなかったかは定かではないが、全員の注目が集まる中で、リクの身体がゆっくりと立ち上がっていく。しかし誰の目にも彼はもはや闘える状態ではないことは明らかだ。

立ち上がったリクが、腰を落として身構えるのを見て、グレンは目を細めた。

「そんな疲れきった状態でまだやる気かよ？」

「あつさりくたばつてもらっちゃ困るんじゃないかったのか？」

即答で自分の言葉を返すリクに、グレンが舌打ちをする。

「舌はまだよく回りやがるみてエだな」と、とりあえず悪態をつき、グレンは続けた。「でもアンタにやもう一欠片も力は残っちゃいねエだろうが。ここで立ち上がったても意味ねえだろ」

「これが、最後のチャンスだと思うんだ」

リクは答えたが、意味がとれなかったのか、グレンは聞き返す事も言い返す事もせず先に促した。

「お前に勝つて、その魔導器を取り戻せば、俺はテイタに“大いなる魔法”の事を教えてもらえるんだ」

エスタームトレイルでも一杯一杯に闘ったのだが、それでもテイタはリクを信用しなかった。そんなテイタが先ほどグレンを倒して、“知識の宝珠”を取り返す事ができれば“大いなる魔法”の事について教えてやると言った。

「多分、俺を信じ始めてくれてるんじゃないかって思う。だから、ここでテイタの信用を裏切ったら、多分テイタは俺を二度と信じない。俺はそれでも諦め^{あきら}ないつもりだけど、事実上、これが最後のチャンスだと思う」

「で、“大いなる魔法”のことを知ってどうするつもりだ、坊や？」

そう問うグレンの口調は、まるで変人の言動を面白がっているよ
うな、からかいを父君だものだったが、リクは飽く迄あも真剣までに答え
た。

「大災厄をこの世から無くす。それが俺の夢なんだ」

その答えに対し、グレンはもう耐えられない、とばかりに吹き出
した。

「ハーツハツハツハツハツハ！ 大災厄をこの世から無くす？
本気で言ってるのか、この小僧！ ハーツハツハツハツハツ
ハ！」

「笑いたきゃいくらでも笑えよ」

笑われたことに、少しかちんときた様子でリクが言い捨てる。
グレンはひとしきり笑うと、急に不機嫌そうに顔を歪め、地面に
唾を吐き捨てる。

「くだらねえ、そんな叶わねえ夢、見るのなんか止めっちまいな」
「叶わねーなんて誰が」

決めたんだ、と続けて言い返そうとしたのであろうリクの足下に、
グレンは光弾を放って、その言葉を遮る。

「目障りなんだよ」

その言葉は何事かとざわつく観衆の声の中で、冷たく響いた。

「信じあうだの、愛しあうだの、助けあうだの言ってお互いがお互
いに甘えて、弱えままで認めあう関係にいる奴らも、ぬくぬくした

環境でへらへら笑って無駄な時間を過ごす奴らも、現実を顧みねえで夢見て目エ輝かしてる奴らも！

現実をみて、厳しい環境に自分をおいて、強くなるべきだろうが！ 血反吐を吐きながら努力して、強くなって、自分の役割を得る！ そうでなきゃ生きる価値も資格もねえだろうが！ そんなことを欠片も考えねえで無駄に生きてる奴らは目障りなだけだ！」

それこそが、グレンの育ってきた環境だったのだろう。正しいと信じて努力してきたからこそ、彼の今の強さがある。だからこそ、ぬるま湯のような環境に甘えて生きる者達が憎らしい存在に思えてくるのだ。

グレンは、ひとしきりまくしたてると、自分の腰布の中に隠していたあるものを取り出した。リクに突き付けるようにして、差し出されたグレンの掌に乗っているのは“知識の宝珠”だ。

彼のその行動の意図が読めず、怪訝そうに眉根を寄せるリクに、グレンはにやりと明らかに何らかの悪意を込めた笑みを返す。

「その夢とやらを叶えるには、確かこいつを取り返さなきゃならねえんだったよなあ？」

「え？」

どくん、とリクの心臓が跳ね上がるように大きく一度鼓動する。

そして、彼の魔導士特有の感覚は、“知識の宝珠”を持つグレンの掌に魔力が集まって行くのを感じる。

アイツは“知識の宝珠”……アタシ達の“夢”を持っている。

不意にティタの言葉が脳裏に蘇る。

つまり今、彼の手の中にあるものは、ティタ達、魔導研究所員全
ての夢そのものであり、

「その夢、俺が覚まさせてやるよ、坊や」

それを取り返せば道が開ける、リクにとっての夢への道標で、

「な、何考えてんだ止めろおっ！」

いわば、夢の結晶とも呼べる魔導器。

「これで、もう一度夢は叶うと抜かしてみやがれ！」

“知識の宝珠”は、グレンの手の中で、リクの制止の声も空しく
砕け散った。

44 『日は沈み、乱は明ける』

乱れ乱れた騒動もここに終わり、
和やかな時が再び始まる。

だが掻き回されすぎた過去はもう戻らない。
その形でいられた時代は夕日と共に滅びる。

そして人々は未来を見据え、また新しい形を創り始める。
新しい時代は次の夜明けともやってくる。

それぞれ“英知の宝珠”と呼ばれていた魔導器の欠片が乾いた音を立てて地面に散らばる。事の行方を見守る者達がざわめく声が絶えないのにも関わらず、小さいはずのこの音だけは大きく響いた。

「残念だったなあ？ コレを取り返せば、あんたの夢が叶ったんだろうに、壊れっちまっちゃあなあ……。折角気合入れて立ち上がったのによ」

握り込んだ手の中に残っていた“英知の宝珠”の欠片を足下に落としたながら、腹から絞り出すように嗤^{わら}うグレンの視線の先で、リクは右手を制止の為に伸ばしたままの体勢で固まっていた。

ほとんど白黒のついた勝負に、なお立ち上がり、夢を語ったりくに動揺が見えるのをみえ、グレンは口上の裏でほくそ笑む。

「これでもまだやるか？」

その問いに、リクは答えなかった。代わりにゆっくりとした歩調でグレンへと歩き、囁くように呪文を詠唱する。

「その鞘に収まりしは曇り無き直刃」

その呪文を聞いた、グレンは拍子抜けをしたような表情で言った。

「おいおい、その魔法はさっき失敗したばかりじゃねえか」

しかしリクは構わずに詠唱を続けていく。

「鍛え抜かれしその刃に断てぬもの無し」

「ありや、魔力不足。やり直したところで結果は変わらんぜ」

リクが唱えようとしている魔法《煌》は一度失敗に終わっている。それは魔導の失敗ではなく、魔力の不足によるものだろうことは熟練の戦士たるグレンにも一目瞭然だった。

故障した魔導車は修理をすれば走るようになるが、魔力切れの魔導車はどこをどういじっても再び魔力を充填させなければ動かないのと同じく、魔導の失敗によるものならばやり直せば発動させられる可能性はあるものの、魔力の不足が失敗の原因ならば休んで失った魔力を回復させない限り何度やっても発動は出来ない。

「一度抜きし時、その速さは光も超える」

そこまで唱えられた時、長年の戦士としての経験から培われてきた感覚が、リクの手の中にしっかりと魔力が集まっていくのを感じ、にわかに口元に浮かべていた笑いを引っ返めて再び臨戦体勢に入る。

「いざ抜き放たん、一太刀にて全てを決す神速の太刀……」

リクは手の中に光と共に顕現した鞘入りの刀をゆつくりと構え、腰を落とした。

己の危機感の告げるままに、グレンは最も強い防御魔法をひたすら急いで練り上げる。

「我が足よ、大地に根付け！ 我が身体よ、鋼と為せ！ 今、我は責めを捨て守りに徹さん！ 《堅牢の構え》」

ほとんど膝をつくまでに重心を低くし、剣を地面に突き立てて、それにもたれ掛かるようにして構えるグレンの身体を魔力の膜が覆う。この魔法は《弾幕》などとは違って反撃が一切出来ない代わりに術者の身体自体を強化し、その上に更に魔力の障壁を張る、絶大な防御力を誇る魔法だ。これなら大概の魔法は弾き返せるだろう。準備が整うのを待っていたかのようなタイミングでリクは構えた刀をグレンに向かって一気に抜き放つ。

「《煌》」

一瞬、何が起こったのか分からなくなった。とにかくリクが目の前から消えた次の瞬間、《堅牢の構え》で受けたにも関わらず、大きな衝撃がグレンを襲い、彼は大きく後ろに押し退けられた。

「な……」

その威力に驚くグレンが、胸元に目をやると、左肩の辺りが浅く切り裂かれている。つまり、《煌》の刃はグレンの最強防御魔法の壁を越えて、彼を傷つけたのだ。彼にとって、《堅牢の構え》は反撃を前提としない、なりふり構わない防御の切り札であり、今までそれを破られた経験はない。

「真紅の咆哮と共に我が手に収まれ！ 蒼天朱に染めし焼尽の火吹き《ルーフレイオン》！」

距離が少し開いたと見るや、リクが抜き身の《煌》を鞘に納めて始めた新たな呪文の詠唱と共に、《煌》は光となつて徐々に形を変え、最終的に天に向かって咆哮する龍を象つた杖頭をもつ杖のようなものに成り変わった。

「その身に吸い収めよ、その大気！ 満たせば噴き出せ、《炎の息吹》として！」

続けてリクが杖頭をグレンに向けると、龍を象つた口から激しい炎が吐き出された。さらに右手でそれを続けながら、左手を虚空にかざす。

「その要に据えられるは原初！ その骨に封ぜられるは十種！ 一度その身に大気を捉えれば、そこに巻き起こるは望みし気流！」

その詠唱の声に伴い、周囲からリクに向かって風が吹き巻いていく。まるで、空気が彼の元に集まって行くかのように。

「ここに開かれよ、風を司りし鋼鉄の扇《如意風天扇》！」

緑色の光と共に彼の手に収まったのは一つの扇だった。通常よりひとまわり大きく、その光の反射具合からそれが何らかの金属で出来ていることが分かる。リクがそれを人振りして畳まれていたそれを広げると、そこには優雅な紋様が描かれていた。

「《煽り立てる風》よ、燃え盛る炎に荒ぶる力を！」

短い詠唱と共に《如意風天扇》を一振りすると、とても一つの扇から発せられたとは思えない風が巻き起こった。その風を受けた《炎の息吹》の炎が一層激しく燃え盛った。

「くっ……」

地面を舐め尽くすような炎の勢いに、グレンはとっさに上空に避難する。

そして下に見えるリクに向けて両手を構え、魔法の詠唱を始めた。

「破壊の力よ、彼の地に隙間なく降り注げ！」

魔法が完成すると、構えたグレンの両手の間には魔力が集まって行き、最終的には一抱えもあるうかという光の玉となる。十分に魔力が溜まったことを感じると、グレンは呪文を締めくくり、魔力を解放した。

「《絨毯爆撃》」
じゅうたんばくげき

すると、その光の玉は無数の光弾と分裂し、あめあられ雨霰とばかりにリクに降り注いだ。その光弾一つ一つはあまり大した威力はないが、何せその数が違う。雨粒を避けることが困難であるように、リクがこれをさけるには防御魔法を使うしかない。

しかしグレンはリクの防御魔法といえは《瞬く鎧》しか見ていない。しかしあの強力だが一瞬しか効果のない魔法では、この効果の長い《絨毯爆撃》を防ぎ切ることは難しいだろう。

(ちて、どじする……?)

上空から様子を見守るグレンの視線の先で、リクは自分に降り注いでくる光弾を睨み付け、魔導を開始する。

「その内に抱くは我！ その表面に刻まれるは守護の言霊ことだま！ それが発する優しき光は内に在る者を如何いかなる攻めからも遠ざける！ 我が身を包め、神に祝福されし護法輪《イール・オー・サーク》！」

詠唱の終了と現れたのは四つの光の玉だった。それらはリクの手から離れると、彼を中心とした円状をぐるぐると周りだし、一つの光の円を描く。そしてその光が収まると、そこにあったのはリクの周りをぐるぐると回る銀の大きな輪だった。

その直後、光弾は次々と地上に着弾し、小規模の爆発を起こして爆炎を上げて行く。絶えまなく光弾が降り注いでくる為、その煙幕もなかなか晴れることを許されず、地上を取り巻いて行く。

《絨毯爆撃》が終わり、砂煙が薄まって来るとグレンはその中に佇たたずむ一つの人影を見た。疑いようもなくリクだろう。

（ほう、しのぎやがったか）

リクはそこから一步も動いた様子はなかったが、彼は微塵みじんも傷を負っていない。彼の周りを回る《イール・オー・サーク》が全ての攻撃を完全に防ぎきったのだ。

「訳が分かんねえが、さっきまでと同じと見るわけにはいかねえらしいな」

一端は尽きた魔力がどうして、召喚魔法などの強力な魔法を連発できるまでに回復したのか、という疑問は残るが、それはひとまずおいておくに限る。魔法という存在からして不思議なのだ。何が

起こっても不思議ではない。重要なのは事実を把握し、それに対処することである。

「なら、これはどうだ！ 浴びよ、我が仇なす一人の者よ！ 力集いて汝を狙う《集中砲火》を！」

今度放たれたのは五、六発からなる光弾である、先ほどまでの光弾より明るく大きな光弾で、見るからに威力が高い。

しかし、迫り繰るそれらの光弾を見つめるリクの目は冷静そのものだった。

「我を守りし護法輪よ！ その廻りの力を高め、迫る彼の魔を、その主の元へ！」

そこで詠唱をとめると、リクは初めの光弾が、彼を取り巻く輪に着弾するタイミングを図り、呪文を完成させて魔法を発動する。

「《折り返し》！」

すると、着弾した光弾はリクを守る輪《イール・オー・サーク》を、回転にあわせるようにして一周し、その遠心力に身を任せるようにして輪を離れ、術者たるグレンの元に返って行く。それは他の光弾にしても同じことだった。

「距離は縮まりて、踏み出せばそこは望みしところ！ 《縮地》」

完璧に自分に返された《集中砲火》を、グレンは大きく移動することで避けた。しかし、未だ距離は大きく保ったままだ。

「上等じゃねえか、ならこいつも返してみろや！」と、グレンはぐ

つと腰を落とし、両手を前に差し出すように構えて呪文の詠唱を始める。「破り壊す力よ、ここに満ちよ！ 貫き砕く力よ、ここに集え！ 我の意に従い、解き放たれよ！」

彼の呪文に答えるように、構えた両手の先には魔力がみるみる集って行き、見るものを畏怖させるような大きさの光の玉を形作った。集まった全ての魔力を解放させるべく、グレンは魔法を完成する。

「《波動砲》っ！」

発動と共に、堰を切ったような魔力の奔流がリクに殺到した。が、リクは全く動かず、《折り返し》のような魔法を唱える様子も見せず、そのまま魔力の奔流の中に飲み込まれて行く。

ああ、とその勝負を見守る者達から声が漏れた。しかし、その声とは裏腹にその奔流が過ぎた後には何事もなかったかのように、そこに立っているリク「エール」の姿があった。

その青年魔導士の姿を一際驚愕の目で見つめる者がいた。人とは違った“眼”を持つ男、カーエスである。

「で、デタラメや……」

「リク様の魔力は枯渇していたのではなかったのか？」

そう尋ねたのは隣に腰を下ろしていたジェシカである。

彼女の疑問ももつともで、先ほど《煌》が発動出来なかったのはカーエスが確かめた通り、魔力の不足である。しかし先ほどリクは失敗した《煌》に加え、《ルーフレイオン》、《如意風天扇》、《

イール・オー・サーク』の三つの魔法武器を同時に召喚しているのである。

おまけに《如意風天扇》を召喚した際にはもう片方の手に持った《ルーフレイオン》で攻撃を続けながらの魔導だったのだ。超高等とも言える召喚魔法は片手間に完成できるほど生易しいものではない。

後者は、リクの強みの一つである魔導制御力の高さの賜物たまものと言っているが、前者はどうやっても説明がつかない。

その点、魔力が肉眼で確認できるカーエスは何かが分かるはずである。

「……魔力が湧き出しとる」

ぼそり、とカーエスが答えた。

「どういう意味だ？」

流石にそれだけでは理解出来ず、ジェシカが聞き返した。

「だから、リクの身体の中から、魔力が、どんどん、湧き出しとるつちゅーとるの。今はもうほとんど満タンに近い状態ちゃうか」

「……どういう事だ？」

カーエスは一言ずつ区切って、答えたのに対し、ジェシカがさらに突っ込んで聞くと、カーエスは半ば自棄になった様子でジェシカに怒鳴り返す。

「俺が知ったこっちゃあるかい！俺が見られるのは事象じしじょうで、事実やないわい！何やねん、アレは！？一旦無くなつた魔力が湧き

出して元に戻る！？ セコいといしか言い様がないわい！ 普段俺らが魔力節約すんのどれだけ苦労しと思うてるねん！ あんなンデタラメや！ 詐欺やー！」

カーエスの憤りいきりももつともなものがある。人外の力を持つ魔導士達も所詮人の枠は超えられない。持てる魔力にも限界があり、それを使い切れば、栄養をとり、しばらく休んで魔力を取り戻さない限り魔法は使えない。

今、リクが彼に見せている事象は、その原則ともいっていい自然の法則を完全に無視した形に見える。

そして、現在グレンを圧倒しているあの強さは、ファトルエルでカーエスが相手をした時のリクを遥かに超える強さを持っている。密かに彼に対抗意識を燃やしているカーエスとしては憤りを覚えな理由がなかった。

「……多分、魔力の性質じゃないかな」

そう口を挟んだのはジッタークの治療を受けている最中のミルドである。

「フィリーの“滅びの魔力”も、彼女の感情に合わせて質量が増える時がある。今のリク君はかなり感情が高ぶっているようだし、彼の魔力が“感情に敏感に反応する性質”を持っていたとしたら、わずかに残った魔力があそこまで増大することもあり得ると思う」

魔導士であり、同時に研究者でもあるミルドの意見は流石さすがに納得できるものがある。

魔力、と一言にいつても個々が持つ筋肉の性質がそれぞれ違うように、魔導士達もつ魔力にも個性がある。フィラレスの“滅びの魔力”はその顕著けんちやな例で、膨大ぼうだいな質量をもったそれはフィラレスの

意識が赴くままにその手を伸ばすという獰猛ていもうとしか表現出来ない性質を持つているのだ。

リクの感情が高ぶっている、という点ももつともだった。彼は“夢”という言葉、概念に敏感に反応する。先にグレンが行った“夢の結晶”とも呼べる“英知の宝珠”の破壊は、彼の精神に大きな衝撃を与えただろう。

「何にしても、普通じゃないけどな」と、ミルドは付け足す。

「それはそやな。アイツの場合、魔導士としての成り立ちからして人とは違つとるし」と、ミルドの説明に、一応の得心を見せたカーエスが頷く。

これはリクからの伝聞でしかないのだが、今リクが保持している魔導士としての能力は元々自分のものではない。十年前、リクの村を襲った大災厄の中で、リクが出会った“白鳳”《アトラ》が彼の大災厄を滅ぼしたい、という想いに応え、その為の力を与えたのだ。その《アトラ》からして、リク自身もほとんど知らないという謎の存在であるのだから、《アトラ》から彼に与えられた能力が理解の範疇はんちゆうで収まるものである事自体おかしいのかもしれない。

「流石に“シルオグスタ”の持ち主だな。あれは間違いなく世界最強クラスだ」

「“シルオグスタ”？」

不意にシュー八が漏らした台詞に、聞き返したのはティタだった。

「“シルオグスタ”っていうのは、ファトルエルの決闘大会の優勝者に与えられて…」

「公式に世界最強だと認められている証。それは一応知識として知ってるよ、学者だからね。今リクが掛けているペンダントがそうだ

っていいのかい？」

そういって、ティタはリクの首に下がっている意味ありげな紋章を象った首飾りに眼をやる。

「ええ、間違いないですよ。昔、実際にファルガール先生に見せてもらったこともありますし」

「……じゃあ、上級魔導士どころじゃない、リクは既に“特級魔導士”の資格を持ってたんじゃないか」

シューハの保証に、ティタが驚きの声をあげる。特級魔導士は上級魔導士の上に位置する法認魔導士資格で、試験などはないが、魔導士として働き、目覚ましい功績をあげたと認められた時に与えられる称号である。

公式に世界最強を決めるファトルエルの決闘大会の優勝者には自動的にその特級魔導士としての資格が与えられるのだが、リクはそれを知らなかったのだらう。おまけに“シルオグスタ”の持ち主は“世界の守護者”とも言われる“ヴィリド”の一席に数えられるのである。

「しかし、あの大会の決勝戦は大災厄で中止になったと聞いたが」と、そこに口を挟んだのは同じく彼の下げる首飾りの意味に気がついていなかったエイスである。行政部長という立場上、そういった情報はいち早く耳に入ってくるのだらう。

全員の視線があの日ファトルエルにいた者達、カーエス、ジェシカ、コーダに向けられるが、三人は答えるのを躊躇ちゆうじゆして、一度顔を合わせた。

ティタによる上級魔導士試験の直後、リクは世界最強の証である“シルオグスタ”をちらつかせるような真似はしたくない、と言っ

ていた。その彼の意思に反して喋ってしまったことに躊躇い^{ためら}を覚えたのだ。

しかし、話の流れでそうなってしまったのだから、話す時だろう、という事でコーダが答えはじめた。

「実は、あの時の大災厄騒ぎの中なんすけど、決勝戦の相手だったジルヴァルトという人と非公式で対戦してるんす」

「それで勝ったとしても所詮非公式だろう。“シルオグスタ”が与えられた、ということはカンファータ王家がそれを認めたことになる」

エイスの疑問は仕方のないことだった。非公式の私闘でそれを認めれば大会の意味が無くなってしまふからだ。一つの国としては民を収めるために、ある程度の体裁を保たなければならぬ。人はそれをお堅い、と言うだろうがそれを守らずに全てを認めていると、不公平だと騒ぎ出すものが出てくるからだ。

彼に心えたのはジェシカである。

「もちろん、非公式に行われた決勝戦だけではカンファータ王家は動かなかつたでしょう。しかし、リク様はその私闘の後、“それ以上の偉業”を成し遂げました。それが王家にリク様を世界最強だと認めるに相応しい^{ふさわ}と判断させたのです」

ジェシカは遠回しな表現をしたが、全員がその裏に隠された意味を理解し、顔を見合わせる。

「つまり、あのファトルエルの大災厄を退けた魔導士って……」

そこまで言ったテイタの視線が、駅前広場の一角に佇む一人の青年魔導士に移った。

「遠距離戦はどうも分が悪イみてえだな」

遠距離魔法で最大の攻撃力を誇る《波動砲》を持ってしても傷一つつかなかった《イール・オー・サーク》を見据え、グレンは改めて剣を抜いて構えた。特に接近戦に勝機を見出したわけではない。遠距離戦では歯が立たなかったため消去法の結論として接近戦を選んだだけだ。

《縮地》を使って、リクの目の前に移動すると、とりあえずその剣を彼を守るように囲っている《イール・オー・サーク》に叩き付けた。すると、《波動砲》でも傷がつかなかった防御魔法がガラスが割れるような音を立て、呆気無く砕け散って消散した。

(なるほど、物理攻撃には弱かったってわけかい)

何にしても、邪魔な護法輪が無くなり、リクに《ルーフレイオン》や《如意風天扇》を振るわれる前に更にリクに接近した。

それに対し、リクは《如意風天扇》を魔力に還し、《ルーフレイオン》を刀の居合い切りのように構える。

「いざ抜き放たん、一太刀にて全てを決す神速の太刀《煌》！」

構えた《ルーフレイオン》が眩い光を放ち、その姿を鞘入りの刀に変える。迫るグレンに向かってそれを抜いた。キーン、という金属音が響き、グレンの剣とリクの刀が刃をあわせる。《煌》の居合いは絶大な威力を誇るが、今回は溜める間がなかったために、速さのみが現れた形になったのだ。

遠距離からの魔法戦は突如として接近した大立ち回りになり、二

人は絶えまなく金属音を鳴らして、お互いに持つ武器をあわせる。

「我が剣は《俊速の剣》、その速さ、汝の目に写ること適わず！」

「汝が刈り取る力、我は《柳のごとく》受け流さん！」

不意にグレンの剣が光を発して速さを増し、それに応じてリクの刀も光を発し、その見えない斬撃を何事もなく流す。そして再び剣戟げきが続く。

「何度でも言つてやるさ」

剣を打ち合わせた瞬間、リクは刃と刃の接点を支点に、巧妙に位置を移動し、グレンの側面に回る。

「夢は、叶う！」

その言葉と共に繰り出された斬撃を、グレンはなんとか防いだものの勢いを殺しきれず、バランスを崩して後退する。

リクはそれを見逃さず、後退した分距離を詰めてさらに攻撃を加える。

「意味の無い夢かもしれない！ 努力するだけ無駄かもしれない！ それでも俺は夢を見ている限り“生きて”いることができるんだ！」

鋭く横薙ぎに振るわれた《煌》がグレンの胸を横一文字に浅く切り裂いた。

「くっ……」と、思わぬ初ダメージにグレンが舌打ちしたが、リクは全く構わない様子で続ける。

「夢があるから、俺は生きてる！　生きる限りは夢は続いている！」

鋭く、力強い斬撃が、息をつく間もなく繰り返され、さしものグレンもさばききれずにその身に浅い傷を受けて行く。

「今日は危うく終わるところだったけれど、みんなが夢を繋いでくれた！」と、グレンがバランスを崩したのを見計らい、リクは大きく《煌》を振りかぶった。「俺の夢は、まだまだ終わらねえ！」

そう言って、リクは力任せに叩き付けるようにして、グレンに《煌》を振り下ろしたがグレンはその前に、《縮地》を使ってリクの正面から脱出し、少し離れたところに移動した。

避けられるのを予期していたかのように、リクは外したことへの動揺を全く見せず、離れた場所にいるグレンに向かって《煌》の切っ先を向けた。

「夢は、お前なんか壊して砕けるような“カタチ”じゃないんだ」「なるほど、ならここでお前を殺せば、その夢とやらは終わるんだな？」

そう言ってグレンは自分の剣を天に掲げた。掲げた剣の刀身は集まってくる魔力に輝きはじめた。そのうちに、グレンの全身から魔力と見られる蒸気のような光が立ち上りはじめ、剣に巻き付くようにしてグレンの剣の輝きが増して行く。

「ここまでやって引かねえってんなら、力づくで排除するまでだ」「そうか……なら」と、溜息まじりに答えて、リクも《煌》を鞘に戻し居合いの構えをとる。「俺も、目の前に立ち塞がる壁は突破するまでだ」

明らかに次の一手で決めるつもりでいる二人の雰囲気、観衆も静まり返って固唾を飲み、瞬きを惜しんで見守った。

一瞬にも、永遠にも思える間の後、先に動いたのはグレンだった。おそらく彼の残りの魔力全てを注ぎ込み、眩しく光り輝く剣を大きく振りかぶり、彼の知りうる限り最大の威力を持つ魔法の呪文を口にしながら、リクとの距離を詰めて行く。

「汝、我が剣の前に退くがいい、両に開きて我が道に続く扉となるがいい……」

防御をまるで無視したように、大きく剣を振りかぶって伸び上がったグレンが眼前に迫っても、リクは居合いに構えたまま動かない。

「《幹竹割り》っ！」
からたけわ

魔法の完成と共に、遂にグレンの剣が振り下ろされた。それがうなりを上げ、今までのものと数段威力が違うことを告げているにも関わらず、リクはその恐れのない目を真直ぐグレンに向け、わずかに腰を落とした。

「研ぎ澄まされよ、覚おぼえと刃。解き放たれよ、心と力。我は全てを込めん、この一太刀に！」

そして、リクは構えた刀を抜き放つ。

「《閃の初太刀》っ！」
ひびきのしゅたうち

その動作はまさに一瞬で、同時に閃光が場を包んだために、観衆からは何が起こっているのかは分からなかった。しかしその光の中では雷が落ちた時のような轟音となり、衝撃の余波らしき、突風がリク達を中心とする波紋状に広がる。

閃光の白い闇の中で、リクの《煌》はグレンの剣を跳ね飛ばした。驚きに見開かれたグレンの目を真っ向から見据え、リクは居合いで出来た回転の勢いをそのまま利用し左手に持っている鞘を振り上げる。

「《旋の式ノ太刀》っ！」

リクが逆手に握られた《煌》の鞘は、剣と共に跳ね上げられたグレンの腕に邪魔されることもなく、まともにグレンの胴体を打つ。

「か……はっ！」

鞘とはいえ、人間の限界をこえる速さで叩き付けられた為、グレンはひとたまりもなく身体を九の字に折り、後方に吹き飛ばされた。リクはそれを追うようにグレンに向かって跳躍し、左手に持っていた鞘を離して両手で《煌》を逆手に持つ。続いて地面に仰向けに転がったグレンに向かって、《煌》を勢いよく振り上げた。

「《輓の終太刀》っ！」

そしてその《煌》が倒れたグレンの顔面に向かって突き降ろされる。

閃光の白い闇に視界を奪われていた観衆を、突然巻き起こった風

が襲う。

そろそろ視力が回復してきた目を薄く開いてみた時、彼等が見たのはグレンの頭のすぐ傍に刀を突き立てたリクの姿と、その地点を中心に地面に広がった大きな亀裂だった。先ほどの風はその最後の一撃の衝撃の余波だったのだろう。

リクは、《煌》を突き立てた姿勢のまま、信じ難いといった風でリクを呆然と見つめているグレンを覗き込んだ。

「俺がここまで強くなれたのも、夢を叶えるためだ」

リクがそう言うと共に、彼が《閃の初太刀》で跳ね飛ばしたグレンの剣が落ちてきて、地面に突き刺さった。

それがこの大勝負の決着の合図だったかのように、クーデターの集結に沸き上がる観衆の声の中、リクはそれをまるで気に掛けた様子も見せず、《煌》を魔力に還すと駅前広場のある一角に向かって歩いて行った。

そして立ち止まったかと思うと、リクはそこで何かを拾い上げる。グレンの手の中で砕け散った“英知の宝珠”の欠片の一つだ。

アイツは“知識の宝珠”……アタシ達の“夢”を持っている。

テイタの言葉がリクの脳裏を横切った。グレンを倒し、クーデターを終わらせたのはいいものの、彼は結局彼女が“夢”と呼んだ魔導器を守ることが出来なかったのだ。

不意に悔しさが込み上げてくる。

それを押し込めるように、右手に持った魔導器の欠片を握りしめると、リクはティタの元に歩いて行った。

リクは、魔導器の欠片をティタに差し出しながら言った。

「ごめん……、ティタ達の“夢”、俺……守りきれなかった」

俯く^{うつむ}ように頭を下げたリクだったが、ティタは何も言わず、リクの肩を掴んで頭を上げさせた。

「何馬鹿言ってるんだい！ アンタはアタシ達の夢を立派に守ったじゃないか！」

突然大声を出された事と、意外な言葉に目を丸くしたリクの視線の先で、ティタは微笑んでみせる。

「『夢は、壊して砕けるような“カタチ”じゃない』。“英知の宝珠”が砕かれても、アタシ達の夢が壊されたわけじゃないんだろ？ 夢を見るアタシ達はここにいる。その事実が変わらない限りはアタシ達の夢は終わらないさ！」

それはグレンとの戦闘の中でリク自身が言った台詞だ。

「“英知の宝珠”が無くなったのは痛いけどね、あれは元々アタシ達が創ったものさ。壊されたなら、もう一度創る！ 少しくらい足留めされても、後ろに下がらなくちゃいけないくても、前を向いて足を進め続ける！ それが夢を見ることで一番楽しい事なんだから、言ったのはアンタじゃないか」

そう言ってティタは胸を張ってみせる。

「魔導研究所の一つや二つ、すぐに蘇よみがえらせてみせるさ！ ここにはエンペルファータ三万の市民の夢が詰まってるんだからね！」

わあああああ、とそれを聞いていたエンペルファータの民衆が沸き上がった。

彼等も少し不安だったのだろう。薄々悟っていたのだ。詳しいことは分からないものの、魔導研究所が取り返しをつかない事態に陥っていることに。それが街の全て、と言えるほどにエンペルファータにとって魔導研究所の影響は大きい。

テイタガリクに言った言葉は、そんな彼等の不安をも同時に取り去ったのだ。

思わぬ市民の反応に戸惑っているテイタを呆然と見つめていたり、クほしろうの顔が綻んだ。

「ああ、その通りだな」

駅前広場の決戦を赤く照らしていた夕日が落ちて行く。

あたかもエンペルファータ魔導研究所初のクーデターの幕を下ろし、古い時代に名残惜しく別れを告げているかのように。

明日の朝日が昇る時、エンペルファータは新しい歴史を歩みはじめるのだろう。

45 『これからの課題』

一つの高い壁を乗り越えた先には、山が見えた。

彼等の前に続いている道は、真直ぐその山に伸びている。

そしてその道自体、歩くことが決して簡単ではないでこぼこな道だった。

しかし彼等は足を一步踏み出すことに迷いはなかった。

困難な道を歩いて行くことに、躊躇ちゅうちゆはしなかった。

高い壁を乗り越えた時に絶えず進んで行くことを決めたから。

最後まで歩み抜くことを誓ったから。

ふと気が付くと歌のようなものが聞こえてきた。その旋律は優しく、つい目が覚めているのにも関わらず、目蓋まぶたをあけるのを忘れてその歌に聞き入った。そのうちにその旋律が聞き覚えのあるものだと気が付いた。それは旋律はともかく、その歌詞を知っている人間は自分を除くと、一人しかいない。

フィラレスは、ぱちりと目を開け、首を動かしてその歌い手を盗み見た。

「お、起きたのか？」

その視線の先には、彼女が思い当たった通りの人物がいた。栗色の髪に、一見地味だが印象的なエメラルドグリーンの瞳、そして実際の年齢よりかなり若く見える童顔を持つ青年、リクが果物の皮を剥むく手を止めて、フィラレスの顔を覗き込んでくる。

彼が毒に倒れた時以来、初めて合った目に、フィラレスは頬ほほが紅

潮し、熱が帯びて行くのを感じた。

リクは、フィラレスの顔色に異常がないことを確認したのか、一旦視線を外して急いで皮を剥ききり、果物をナイフで二つに割って、片方をフィラレスに差し出す。

「腹減ってるだろ？ 食べよ」

フィラレスはこくりと頷くと、差し出された果物を受け取って、おずおずと一口かじった。甘酸っぱい果汁が口の中に広がり、空腹と同時に感じていた渴きも癒してくる。じつくり味わって、飲み込むまでを見守っていたリクが小さく笑って言った。

「今日は、クーデターの翌日の夕方だ。あのクーデターは失敗に終わった。みんな頑張って止めたんだ。……俺も少しだけ手を貸したんだけどな」

昨日の事を思い出しているのか、果物をかじりながら少しフィラレスから視線を外した。

そして、昨日全てが終わった後、カーエス達から聞いた事情をフィラレスに話して聞かせた。

「あのディオスカスって奴も、結局自分の夢を叶えるための行動をしただけなんだよなあ。ただ、それは結果的に魔導研究所の人達の夢を壊してしまう上に、戦争を酷くするような事で、受け入れられないことだった。だからみんな闘った」

それは夢同士が矛盾していたから、それらがぶつかった結果だ。そんな時は何らかの形で闘って、どちらかが壊されるしかない。

「今までは、そんなことを気にしたことはなかったんだけど、これ

からはそうもいかねえだろうなあ」

リクの旅の目的は大災厄を滅ぼすことだ。そのためには“大いなる魔法”を探し出さなければならぬらしい。そして“大いなる魔法”を狙っている者はそれこそ五万という。大きな夢だけに、それを本気で狙う者達の想いは強い。

「それを砕いて行くのは、ちと気が引けるが……俺が夢を諦めるわけにはいかねえ。そのへんは覚悟しとかなくちな」

リクは最後に残った果物の芯を、部屋の隅のクズかごに向かって投げた。それは綺麗な放物線を描き、どこに触れることもなくクズかごの中に落ちる。そして再びフィラレスに視線を戻した。

視線が合ったまま、しばらく間が開いたあと、リクはフィラレスに小さく笑いかけて言った。

「ありがとな」

明らかに自分に向けられた感謝の言葉に、フィラレスは目を丸くする。

「フィリーが救ってくれたんだろ？ 俺の命が危なかった時」

昨日、ダクレーの毒に倒れたリクを癒すために、行動したカーエスとジェシカだったが、ディオスカス派の妨害に遭い、ジッタークの指定した赤の刻（午後三時）までには間に合わなかった。

しかし、リクを死なせたくない一心で横笛を吹いた。そしてその笛の音に乗せられた想いは“滅びの魔力”を発動させ、全てを破壊する力は一人を癒した。

「あの時、歌が聞こえたんだ。あれはフィリーの声だったんだよね？　優しくて、綺麗な声だった」

実際には歌っていない。口の利けないフィラレスは歌えない。ただ、歌詞を込めるつもりで夢中で横笛を吹いていた。

あの時ほど歌いたかったことはない。あの時ほど自分の声が出ないことを呪ったことはなかった。自分の声で、“死出の道”にいるリクを呼びたかった。

しかし、フィラレスは歌えていたのだ。ちゃんと彼女の声はリクに届いていた。

「ありがとな」

再び、発せられたリクの感謝の言葉。それはやけに胸に染みて、その胸からは何らかの感情が込み上げてくる。

呪わしい、破壊以外に何も出来ない力だと思っていた。ずっと、罪だけを重ねて生きて行くのだと思っていた。力を使ってお礼を言われることなどないと思っていた。

できるのはこれ以上人々を傷つけないように、自分ごと消えてしまふことしかない。そう思って、今まで生きてきたが、きちんと制御をすれば、人を助けることもできるのだ。

自分には、生きていてもいいのだ。

嬉しい。

その感情に合わせて目に込み上げてきた涙が今、こぼれ落ちよう

とした時、リクが突然微笑みながらフィラレスを指差した。

フィリーは笑顔の時間が一番可愛いんだからな。

記憶に蘇ってきた言葉、フィラレスは顔を不器用に綻ばせる。

すると、リクは彼女を指差していた手で、フィラレスの頭を軽く撫でて言った。

「そうそう、その笑顔だ」

部屋から食堂に降りてきたリクとフィラレスを迎えたのはいつもの三人だった。夕食はクーデターの解決祝い、ということでジッタークの西方料理店『オワナ・サカ』で食べることになっていた。そして、そこに皆で行くために、食堂で待ち合わせをしていたのだ。

「ん？」「フィリー!？」「フィリーさん、起きたんすか？」

フィラレスの思わぬ登場に、三者三様に驚きを表した三人に、リク達は食堂の中に入り、とりあえず彼等に歩み寄った。

「ああ、ついさっきな。これからジットのところに飯を食いに行くんだろ？ フィリーも丸一日何も食ってねえ状態で腹減ってると思うし」

リクの説明に、隣でフィラレスがこくこく頷うなずいて肯定する。

なかなか目を覚まさないの、今回の夕食会に彼女が加われない、と諦めかけていたカーエスの顔がぱつと明るくなりかけたが、その表情はすぐに曇り、心配そうに言った。

「腹減ったって、そんないきなりまともなモノ食うてええんかな？」
「大丈夫でやしよう、たかが一日寝ただけで胃がどうにかならずにはしゃせんでしょうし、ジッタークさんも食事に関しては何も言わなかったじゃないスカ」

エンペルファータのクーデターが終結を迎えた後、フィラレスはどう見てもただ眠っているだけだったが、一応、ということでジッタークの診察を受けている。その結果は、やはり眠っているだけで暫くすれば目を覚ますだろう、ということだった。凄腕の魔導医師として有名だったジッタークの言葉だ、信用してもいいだろう。

そのジッタークは、昨日の内にクーデターで出た怪我人の診療を全て済ませ、自分の店の方に戻っている。

「ああ、せやな！」と、コーダの言葉に、カーエスは今度こそ表情を輝かせた。

一同が揃って住居・宿泊施設棟から中央ホールに向かっていると、中央ホールの方から多数の人間によるものと思われるざわめきが聞こえてきた。何の騒ぎかと顔を見合わせて中央ホールに入ってみると、大勢の人間が真ん中にいる見覚えのある女性に詰め寄っているところだった。

「頼むよ、テイタさん！」
「私はあなたがいい！」
「あんたならできる！」
「どこまでもついていきます！」
「俺ア、あの演説に感動

したんだ！」「一人でやれなんて言わない！」「私達も手伝うから！」

『ぜひ、研究所の新しい所長に！』

なんと、この大勢の人々は、テイタに次の魔導研究所長になってくれと頼みに来ているのである。

話を聞いてみると、クーデターの最後を飾ったリクとグレンの闘いの直後、テイタがリクに言った言葉が、魔導研究所の人々を感動させたらしい。その時、研究部員のほとんどはクーデターに加担した魔導士達によって眠りについていたのだが、残っていた少数の者達や、市民が抜け目なく記録していたらしい映像でその演説を見たのだという。

『夢は、壊して砕けるような“カタチ”じゃない』。“英知の宝珠”が砕かれても、アタシ達の夢が壊されたわけじゃないんだろ？ 夢を見るアタシ達はここにいる。その事実が変わらない限りはアタシ達の夢は終わらないさ！

“英知の宝珠”が無くなったのは痛いけどね、あれは元々アタシ達が創ったものさ。壊されたなら、もう一度創る！ 少しでも足留めされても、後ろに下がらなくちゃいけないけども、前を向いて足を進め続ける！ それが夢を見ることで一番楽しい事なんだって言ったのはアンタじゃないか。

魔導研究所の一つや二つ、すぐに蘇^{よみが}らせてみせるさ！ ここにはエンペルファータ三万の市民の夢が詰まってるんだからね！

これらの言葉は、市民ではなく、リクに向けられたものだが、クーデターによって乱された研究所の未来に不安を抱く人々の心に明

かりを灯した。今、研究所の人々は今回の事で失った大きなものを取り戻す為に、必要な気力を支えられる言葉を持つ者が必要としているのだ。

詰め寄られているティタはというと珍しくも困惑した様子を見せていた。

「そんないきなりいわれても困るよ。第一指導者なんて柄じゃないし」

「いや、ティタさんなら大丈夫!」「私達が保証するよ!」「あんたの迫力は十分リーダー向きだって!」

“無知なる大樹”を背にし、これ以上後退出来ないにも関わらず、ティタはそれでもできるだけ後ずさり、大樹の幹にぴったりと背を付けている。

「い、いやでも、そう、ほら! まだ行政部長のエイスさんがいるじゃないさ。アタシは一介の研究者に過ぎないし、いきなり所長になつたりしたらそつちのほうから波風が」

「私は別に構わないと思っっているが?」

ティタの声を遮るおさへようにしていったのは、当のエイスである。リク達と同じように、ちょうど研究・開発室棟からミルドと連れ立って出てきたところらしい。

「というより、むしろ私も次期所長には君になって欲しいと思っっている。私も、君の演説を聞いて心に触れられた者の一人だからね」

エイスの言葉に押されたように、人々はますます声高にティタに詰め寄った。ティタは助けを求めて、その隣にいるミルドに視線を

投げかけるが、ミルドは苦笑して肩を竦めるばかりだ。確かに、こ
こはミルドあたりがどうにか言ったからといって退くような勢いで
はない。

彼女は必死で視線を彷徨たぐひらせていると、住居・宿泊施設棟の入り
口あたりにリク達が立っているのが見えた。

「か、考えとくから、今日はこれくらいにしてくれないかい、これ
から約束があるんだ」と、ティタは逃げるように詰め寄る人々をか
き分けてリク達の方に進む。そして、面白気に事態の成りゆきを眺
めているリク達の後側に回ると、彼等を盾に研究所の出口へと移動
した。エイズとミルドもその後を追う。

その背後で、研究所の扉が閉まるまで、「きつとだよ!」「期待
していますよ!」という声が投げかけられていた。

「はあ……、偉い目に遭ったよ」と、普段の彼女では見られないく
らい憔悴しやうすいしきった顔でティタが漏らした。

「ははは、皆がなれって言うてるんだから、なればいいのに。俺は
ティタを所長にするってのはいい考えだと思っけどな」

珍しいティタの姿を面白そうに見遣りながらリクが言った。

「そうそう、柄やないいうても、もともと研究班の主任でリーダー
シップをとるのには慣れとるし、面倒なことや分からんことはエイ
スはんに聞けばええと思うし」

「私も同感です。貴女なら、戦闘能力さえあれば魔導騎士団の一個師団でも率いられる」

折角あの民衆の中から逃げ出すことに成功したと言うのに、続いてリク、カーエス、ジェシカまでも褒められたので、ティタはさらに消沈した。

その様子を横目で見ながら、エイスが言う。

「これはからかいや、冗談の類いではない。本気で考えて欲しい事なのだ」

その表情は、面白がっている節もある他の面々に比べると、随分と真剣な表情だった。

「我々は現在、今までにない量の問題を抱えている。それらを解決できるのは、私のような者ではない」

「そういや、あの子のことはどうなってるんだ？」

そこに、リクが口を挟んで尋ねた。リク達は闘いが終わった後は、ゆっくりと身体を休めていただけなので、あの事件の後をどう処理して行っているのかわからない。

所長であるアルムスがディオスカスに殺害されてしまったため、事後処理に奔走しているのは、それに代わって臨時的に魔導研究所を取り仕切っているエイスだった。

「まだほとんど手付かずだが、とりあえず“ラスファクト”《テンブファリオ》は元のように“セーリア”の本体に戻した。それから、“英知の宝珠”は“復元の壺”に入れて現在修復中だ」

「えっ？」

その報告に、最も大きく反応したのはリクだった。気にするな、とテイタは言ったが、それでも彼は魔導文明の結晶とも言える魔導器を守りきれなかったことに責任を感じていたのだ。

「直るのか？」

「一応、アレも魔導器だし、現場に破片は全部残っていたからな。無論市販もされているものではなく、精密な魔導器専用の特別な“復元の壺”を使用しなければならぬ上、記録されていた知識が全て戻る可能性は低いが、ほぼ元の状態までに復元できるだろう。ものがものだけに、一カ月近く時間は掛かるだろうが、な」

非常に特別な魔導器であるため、砕かれたり破損したりするともう元に戻せないと思っていたので、リクとしては意外な報告だった。幾らかは知識が損なわれるにしても、一から創り直すよりは遙かに楽だろう。下手をすれば完全に失われるところだった知識が、取り戻せると聞いてリクは大きな安堵を覚えた。

「クーデターに加担した者達は怎么样了のですか？」

ジェシカの質問にエイスはうむ、と頷いて答えた。

「クーデターのみならずエンペルファータ内でカタが付いたのだが、彼等が狙っていたのはウォンリルグの亡命だ。これは非常に国際的な問題になってしまったため、取り調べのためにフォートアリントンに送られた」

昨日の今日ですでに移送されているという非常に迅速な対応に、一同が目を丸くするが、ディオスカス達が亡命先に選んだのはウォンリルグであるという事が問題だった。

この国はつい最近、フォートアリントンでの定例国際会議に無断

欠席し、フォートアリントンからウォンリルグの首都・ヴェアレンティアに続く移動用魔法陣がウォンリルグ側から封印、もしくは破壊した、という事件を起こしている。

下手をすれば戦争が起こりかねない、大事件にフォートアリントンはウォンリルグの動きに非常に敏感になっているのだ。

「グレンもか？」

そのような状況であるならば、ウォンリルグの宗家に籍を置く“ラ・ガン”グレン“ヴァンター”ウォンリルグはフォートアリントンにとって特に重要だろう。

だがエイスは、そのリクの質問に答えるのに少し躊躇を見せた。

「……実は、彼は死亡してしまった」

そう答えた後、エイスは続けてリクから受けた傷が原因ではないことを付け足した。死因を調べると、逃亡を防ぐための魔封処理を施す前に発動させていた自殺魔法が原因だったという。

「流石は宗家と言うべきか、捕まって尋問されるとなると、命を捨てることに躊躇ためらいはなかったようだ」

「そうか」

敵とは言え、全力で闘った相手が死んでしまったと聞くとある種の感慨を覚えるのか、リクは複雑な表情を見せる一方、コーダが次の質問をする。

「クーデターに加担していたのはほとんどの開発部員と魔導士団員でやしょう？ それが抜けた後の穴埋めはどうするつもりなんですか？」

「それが一番の問題なんだ」

ほとんど溜息まじりに、エイスが答える。

先ほどエイス自身が述べた通り、クーデターに加担したほとんどの開発部員と魔導士団員は捕まってしまい、現在研究所を去ったことになっている。

「魔導士団の方は、魔導学校の生徒からシュー八など実戦経験の多い者達に勤めさせるつもりだ。しかし資質はともかく数や経験の差から戦力はがた落ちになるだろう。ディオスカスが勤めていた魔導士団長には、現在魔導研究所に所属する者でもっとも強いと思われるミルドを挙げてある」

夫の名前が出てきたことに、ティタは驚いて隣のミルドの方を向くと、彼は苦笑して肩をすくめた。ミルドもつい先ほど、この話を聞いたばかりらしい。だからエイスと共に中央ホールに現れたのだ。強さなら確かに自分のほうが上だが、生徒達をまとめるのはシュー八の方が上だとミルドは主張したのだが、エイスはシュー八には副団長をさせれば済む話だ、と返したらしい。

「それに、あの時はつい使っちゃいましたけど、僕は魔導士として生きて行くつもりはないんです」

「団長が出て行くような場面はなかなか訪れないだろうから、いざと言う時の強さがあれば普段は魔導士でなくてもよろしい」

ああ言えば、こつ返されるといった具合でミルドはほとんど陥落寸前のようなのだ。

エイスは自分が有利な内にこの話を切り上げるためか、素早く次の話題に入った。

「で、開発部の人材だが……これが如何いかんともし難いがた」

魔導士団はほとんどの団員が研究員や開発員が兼任していた事実からも分かる通り、補助的な機関に過ぎず、極端な話、無くても運営に支障は現れない。さらに、ある程度戦えればいいので、人材の穴埋めは簡単なのだが、開発員は事情が百八十度異なる。

研究部、開発部の現在の体勢は長年掛けて築き上げてきたものだ。開発部は分野ごとにノウハウが全く違っているので、いかな秀才と言えども、それらを憶えて使い物になるまでは時間が掛かる。しかも今回の場合、そのノウハウを教えるべき先達せんだつがいなくなってしまうのだ。

「私としては何とかフォートアリントンと交渉し、条件を付けてでも開発部の人材を魔導研究所に取り戻せるよう要請するしかないと思っている」

確かにそれしか無いだろうが、フォートアリントンとしては国際犯罪を行おうとした者達を簡単に元の生活に戻すことに納得するわけが無い。

まさしく、その点に関しては前途多難と言えた。

「そういった困難な状況を突破して行くには、全員の力を合わせて行くしかない。こういった状況で相応しいのは仕事に有能な指導者などではない、皆みなに慕したわれ、付いて行くことを心から望まれている指導者なのだ」

最後のテイタに向けた言葉に、テイタはムキになって否定することは無かった。

「本日貸し切り」と書かれた札が掛けられているドアを潜った際に迎えたのは、あちこちタレのようなものが染み付いた調理服を来て、厳いかついなながらも人なつこさに溢れた顔のジッターク「フェイスンである。

「へい、まいどあ〜」

いつもの挨拶に、つい一同はジッタークの頭の頂上から爪の先までを見つめてしまう。

「……？ な、何やねん、じろじろ見くさって」

「いや、今のおっちゃん、医者版のおっちゃんとホンマに同じ人物かと疑うたりして」と、同郷のカーエスが怪訝けげんな顔つきで答える。魔導医師としてのジッタークは医者としての威厳あぶに溢れ、きりつとした男らしい魅力があったのだが、今はそのへんのどこにでもいる中年男性である。

「放つとけ」と、返すジッタークの表情も若干諦めが混じっていた。

店の中央に用意されている大きなテーブルに先に着いていたのはシュー八だった。

「よっ」

「シュー八先輩、待って来てはったんですか」

「いや、俺も今来たトコだ」と、答えるとシュー八はカーエスの後ろの面々を一通り見渡して付け加える。「これで全員みただいな。」

約束の時間よりちつと早いけど始めっか」

シュー八がそう言つて視線を送ると、ジッタークは厨房に向かつてポンポンと手を叩いて呼び掛けた。すると厨房からは、二人の料理人が、料理を満載したワゴンを押してテーブルにやって来ると、見た目も匂いも美味しそうな料理が次々と並べられて行く。

最後に、それを取り分けるための大皿と小皿、それから、ワインが満たされたグラスが席に着いたリク達の前に配置された。

「じゃ、乾杯は…… エイスはん、お願いできまつか？」と、ジッタークが各人にグラスが渡つたことを確認し、エイスに視線を送る。この中で地位が高く、年長なのはエイスなので、彼が乾杯の音頭をとるのは当然の流れだろう。

エイスはひとつ頷いてすつと立ち上がると、全員の視線が彼に集まり、場がしん、と静まった。

「昨日、魔導研究所は一つの転機を向かえた」と、エイスは静かに切り出した。「言うまでも無く昨日のクーデターの事だ。昨夜の内にそのクーデターに加担した者達の簡単な取り調べが行われたのだが、皆が揃つて口にしたのは、魔導文明の衰えおとろの事だった」

これ以上の技術の発達がなかなか見込めない状態、そして、研究所は隠してきたのだが、相次ぐ魔石鉱山の閉鎖、それらが重なった現在の状況にクーデターに加担した者達は一様に不安を覚えずにいられなかったらしい。

特に魔石資源の枯渇が、一番の不安だった。魔石が無くなれば、自分達が生み出してきた数々の魔導器は全て無用の長物と化してしまふ。そして、魔石が無くなれば古代より受け継がれてきた魔導文明が終わり、エンペルファータはその最先端を行く街としての意義

を失うのだ。

やってきたことが全て無駄になり、自分達の存在意義を無くしかねないこの問題は黙ってみているわけには行かなかった、と彼等は語った。

「今まで故・アルムス前所長と私はそれを民衆からは隠し、少数の者だけで解決法を模索していた訳だが、それは大きな間違いだった。このような大きな事件があった以上、その原因となったこの問題は公表しないわけにはいくまい。

公表すれば今まで魔導文明の繁栄が永久のものとして信じていた者達には大きな不安を抱えることになるが、目を背けてもこの問題はどこにも逃げて行きはしない。それならば世界をあげて、この問題に立ち向かうべきだろう」

いままでエイスとアルムスが、このことに関して公表しなかったのは、不安に陥った民衆が騒ぎ出しはしないかということをおそれての事だった。

しかし、公表すれば魔力を節約するように呼び掛け、解決策を探す時間を伸ばすことができるし、魔導研究所では無い、どこかの片田舎からひょっこり解決法を見つける者が出て来るかもしれない。

「無論、そうして方向転換をする切っ掛けを与えられたのも、クーデターにより取り返しのつかない事態になる前に諸君らをはじめとする者達の尽力により、クーデターを鎮圧できたからだ。その点、エンペルファータを代表し、広く深く感謝の意を表したい」

そう言つて、エイスはテーブルに着いた面々を見渡し、軽く頭を下げた。

「明日からは、辛く厳しい道のりが待っている。だから、せめて今

夜はゆっくりと楽しみ、それを乗り越えてゆける意思と英気を養おう」と、エイスは手に持っていたグラスを目の高さに挙げてみせる。

「乾杯」

「乾杯っ！」

「しかし見事に魚尽くしだなあ」と、生の貝にソースを掛けたものをぺろりと口の中に入れながらリクは言った。

数日前にカーエスがオワナ・サカは海に囲まれている国であるため、オワナ・サカの料理は海の幸が基本だと言っていたが、今テーブルに並んでいる料理がそれを証明している。

前回カーエスが作ったのとよく似た海鮮パスタ数種類を筆頭に、オーソドックスに塩焼きにした大魚、生の切り身を塩と酢でしめたもの、丸のまま衣をつけて揚げた小魚、すり身を生地包んで蒸したもの等々、魚介類に材料を絞っていないながらその種類は豊富である。

「それでいて飽きがこないってのが凄いところだね」と、ティタが満足そうに次の料理を自分の皿に移しながらリクの言葉を次いで言った。

「うむ、見事だ」と、エイスも頷きながら同意する。

「かつかつか、せやろ。まだまだ一杯あるでえ。カーエスごときの未熟な海鮮パスタだけが西方料理やと思われたら困るからのう、出し惜しみは一切せなんだ」

精一杯料理人としての腕を振るえて満足したのか、腕を組んでジッタークは高笑いをする。

「まだまだおっちゃんには適わんなあ、さすが歳を食ってる分、経

「験積んどるだけあるわ」

カーエスは本格的な故郷の料理を嬉しそうに舌鼓を打ちながらも、軽口を返すのを忘れない。タコと海老という歯ごたえのよいもの同士で組み合わせたマリネに手を出そうとすると、向かい側に座っていたシュー八と目が合った。

「魔導学校の方はどないです？ シュー八先輩」

先のクーデターで魔導学校は生徒達を教えていた教師達の大半を失っている。そんな状況で魔導学校を纏めていたのがシュー八を中心としたファルガール派と呼ばれ、ディオスカスに排斥されていたグループだ。

魔導学校は実のところ無くても研究所は機能するが、クーデターに加担した教師達がいなくなってしまい、自分達を教えるものがいなくなったこの状況に不安を感じているらしい。

魔導士として育てられている生徒達は、教える者達がいなくなることによつて、自分達の成長が中途半端に止まってしまうのでは無いかと、将来を憂えているのだ。

「その気持ちは分からんでもないからな。精々ケツを引つ叩いていつてやるさ」

シュー八自身、ファルガールに突然去られ、それからは独力で修行してきた経験がある。そんなシュー八はこれから生徒達のいい導き手として最適な人材だろう。

不意に、シュー八の視線が自分から逸れ、カーエスの隣に座っている者に移動する。カーエスが振り向くと、そこに座っているのは時々ここに食べに来ていたらしいフィラレスにお薦めの料理を選んでもらったというリクだった。

カーエスとシュー八の視線が、自分に集まっているのに気が付くと、リクは食べる手を一旦止めてシュー八に視線を返した。

「そっぴやあんたシュー八って言ったな。ひよっとして昔ファル…
…ファルガール」カーンに魔法を教わったことがあるんじゃないのか？」

いきなりリクの口を付いて出たかつての師の名前に、シュー八がびくりと反応した。

「あれ？ 教えとらんかったっけ？」と、隣のカーエスが意外な顔をする。もう何度もリクの前でシュー八の名前の口にした記憶があるので、もうファルガール派のことを教えていたのかと思っていたらしい。

「じゃあ、本当なんだな！」と、リクがパツと顔を明るくした。「あのな、ファルに会ったら伝えといてくれって言付かったことがあるんだ」

「先生……が？」

まるで話についていけないかのように、シュー八はほとんど呆然とリクが話すのを聞いている。

「仕方ねエ事情があつたにしろ、あの時は本当に済まねエ事をした。あれが原因で人生が狂ってなきやいいんだが」ってさ。あんまり誠意こもってねえようだけど、ファルの場合……」

「謝ること自体が減多にないから、謝る時は本当に悪いと思ってるんだろ」

次がれた言葉に、リクは少し驚いたような顔をしてから、にやり

と笑う。シューハも釣られるようにして笑った。

「てっきり俺達の事なんか忘れられてるか……」

「ファルは魔導学校で残したことのなかで一番の気掛かりだった言
つてた」

魔導学校で教師をしていたこと自体、ごく最近聞いたことなんだ
けどな、とリクは付け足しながら、ファルガールから聞いたことを
色々語った。

「……先生は元気か？」

「むしろ病気になってるところを見てみたいんだけど」

リクが答えると、シューハがプツと笑い、魔導学校でもいろいろ
無茶をしていたファルガールのことを話して聞かせると、リクも旅
の間でファルガールにされた仕打ちを話す、といった具合に、共通
の話題であるファルガールで二人は大いに盛り上がった。

宴もたけなわとなり、リクが用を足して戻ってくる途中で、同じ
く用を足すためか、こちらにやってくるティタとすれ違った。

「リク」

すれ違い様に呼ばれた名前に、リクは反射的に振り返った。目が
合った時、ティタは微笑んで言った。

「明日、あたしの研究室において」

意味を図りかねたように、自分を見返すリクに、ティタは付け足

す。

「約束通り、“大いなる魔法”について、あたしが知っていることを教えるから」

46 『目指す場所は』

旅は目的地あつてこそ成り立つもの。

宛てなき旅という言葉はあるが、それは旅の末がないだけの旅。必ず旅立つ時には次の目的地は決めていく。

目指す場所を決めた時、旅人の気持ちはそこに一足先に飛んで行く。

今いる場所がどれだけ居心地のいいところでも

目指す場所がどれだけ過酷なところでも

旅人は留まらなくなる。

旅人は旅立たざるを得なくなる。

目指す場所にある自らの気持ちに引かれて。

宴も明けた翌日、リクはカーエス達と共にテイタの研究室を訪れた。ノックをすると、テイタ本人が中から顔をだし、五人を招き入れた。

中に入った五人は一樣に感嘆の吐息を漏らした。初めて来た時はあちこちに本や紙がうずたかく積もるほど散らかっていた部屋が今日は見違えるように綺麗に片付けられている。

「あはは、驚いた？ クーデターのドサクサが落ち着くまでのしばらくはろくに研究が出来なさそうだからね、いい機会だと思って資料を片付けていたのさ」

テイタは笑って、綺麗になった部屋を誇らし気に見せると、前回

と同じように応接用のソファにリク達を座らせる。まだ片付け作業を継続している研究員に声を掛け、飲み物を持って来るようにいうと、改めてリクの向かいの席に座った。

「さてと、まずはどうしようかな。そつちから話してもらおうか、それともこつちから話そうか、どつちがいい？」

「こつちから話すことって？」

思ってもみなかった言葉にきよとんとした目でリクが問い返すと、テイタは困ったように眉根を寄せた。

「何言つてんだい、元々ファトルエルの大災厄の事を話す代わりに“大いなる魔法”の事を聞かせてやるうって言つてたんじゃないか」「あ、そうか」

テイタと初めて会った時は、それこそが目的だったのだ。今後の対策の為、ファトルエルの大災厄を肌で体験したリク達の話聞かせるためだった。ところが、リクが大災厄を滅ぼすにはどうすればいいかを代わりに聞き出そうとして、テイタがそれを断つてから、本来の目的もうやむやになってしまっていた。

「聞けば、アンタがファトルエルの大災厄に止めを刺したのはアンタだっていうじゃないか。さぞ貴重な話が聞けそうだね」と、テイタは嬉しそうに言う。

「じゃあ、先にそつちの話をしてよう」

そう言つて、リクはテイタにファトルエルの大災厄において、自分が見たことを話した。もっとも、リクは大災厄が始まってしばらくはジルヴァルトとの死闘で周りの様子に気を配る余裕はなかったため、前半部分のほとんどはカーエスが語った。

時折質問を挟みながら、ティタは重要と思われる部分は傍らかたわに用意していたノートに書き留め、一言一句漏らさないくらいの集中力を持って話を聞いた。特に、リクとカーエス、そしてフィラレスが“白鳳”《アトラ》と共にグランクリーチャーと対峙した場面になると、リク達には見たことのない、“研究者の目”とも呼べる探究心に輝く目で食い付くようにして聞いていた。

「なるほど、“転生”か……」と、リクの話聞いたティタは唸った。「道理でどんな強力な兵器を持ち出しても無駄なはずだよ。みんな一撃必殺を狙ってたからねえ」

いつも大災厄の中で見られるグランクリーチャーの姿は鎧兜を身に付けた甲冑騎士と同じだ。ある程度以上の威力を持つ攻撃を仕掛けられると、グランクリーチャーは鎧を脱いで真の姿を現す。

これを“転生”という。

真の姿となったグランクリーチャーは大抵それまでと比べ物にならないくらい強くなるが、この真の姿の時でないトドメはさせない。

普段の姿だとどれだけ大きな威力を持つ攻撃を仕掛けようと、“転生”して真の姿に変わるだけで、倒す事は出来ない。つまりグランクリーチャーを倒す為には最低二撃を加えなければならない。

“二撃必殺”。それが、リク達がファトルエルの大災厄に対して行った作戦の名前であった。

「《アトラ》はほとんどのグランクリーチャーが“転生”の能力を持っていてって言った。つまり全部のグランクリーチャーが“転生”の能力を持つてるわけじゃないらしい」

食い付くように耳を傾けるかたむティタにリクは諭すさとように付け加えた。リクがティタに話した事には何ら隠された事はなかった。幼少の

頃、故郷で大災厄に遭い、その中で“白鳳”《アトラ》と出会って、魔導士としての数々の資質を与えてもらい、また、自分が神獣である《アトラ》を召喚できるという事さえ話した。

「一番興味あるのはやっぱり“白鳳”《アトラ》だね。話を聞く限り、《アトラ》はおそらく人類も知り得ない事も知っているみたいだし……今召喚しているいろいろ聞きたいんだけどやっぱり駄目かい？」

ティタは何かを期待するような目をリクに向けたが、リクは困ったように眉をしかめ、申し訳なさそうに答えた。

「悪いけど、ダメだ。《アトラ》は必要がない限り喚よび出すことは出来ないんだ」

普通召喚魔法で造り出される召喚獣は一個の存在ではない。召喚主の意のままに動くだけで意思はないからだ。

ところがリクの召喚できる“白鳳”《アトラ》は意思を持つ独立した一個の存在である。

十年前にリクの故郷が大災厄に襲われた際、命を救われた上、大災厄を根絶する為に彼に魔導士としての能力を与えてくれた《アトラ》はリクにとって「喚ぶ」というより「来て頂く」存在なのだ。

初めて召喚に成功したジルヴァルト戦、そして今回危ういところを助けてもらったダクレー戦のように、必要性がなければ《アトラ》の召喚は出来ない。

ファトルエルを出てから、エンペルファータに来るまで何度か試してみたが、必要でない時には召喚には応えてくれなかった。できたところで、やはり答える必要がない質問には答えないだろう。《アトラ》の言動からして、どうやら主であるリクには出来るかぎり彼の力は頼らず、自分の力だけで事を切り抜けて欲しいと思ってい

る節がある。

「なるほどね」と、ティタはパタンとノートを閉じ、話の間に研究員に運んでもらった茶を一口飲んで言った。「じゃあ、次はアタシが話す番、“大いなる魔法”についてだね」

その言葉に、リクがごくりと喉を鳴らした。ティタは傍に立て掛けてあつた筒を手にとると、中から巻かれた紙を取り出す。

「始めに断っておくけど、これは“大いなる魔法”への手がかりの情報であつて、“大いなる魔法”自体の場所を示すものじゃない。それから、これは飽^あく迄^{まで}も推測であつて、確証はないからね」
「十分だ」

“大いなる魔法”ほどの大きな謎は分からないことばかりで、手ごかりの有無さえも掴めないという状態でも当たり前の話だ。それでも情報が手に入れられるというのは、リクにとって夢への大きな前進に他ならない。

ティタは頷いて、答えるとその紙、世界地図を開き、ファイルのページをめくりながら話しはじめた。

「“大いなる魔法”っていえば、大災厄とかクリーチャーみたいなイメージがあるけどさ、本来自然の雨とか、風とかなんかも“大いなる魔法”の所行だつてというのが定説だよな」

「ああ、そういえば。何か別モンみたいに感じられるけどな」

“大いなる魔法”の伝説は昔から語られてきており、諸説あるのだが、もつとも広まっているのは、自然現象の全ては“大いなる魔法”からのものであるという説だ。

「自然現象は土地のいろいろなところに影響を及ぼす。そこで、アタシはいけるところは全部回って生物や土地、気候の事なんかを調べてみたんだ」

鎖国状態に近い大国ウオンリルグは入れなかったが、テイタと、その研究班の研究者達はエンペルリスとカンファータの各地を隅々まで回り、土を採取し、動物の傾向を調べ、天候の特徴を観測した。

その後テイタは、各地で採取、観測されたデータを調べて行く内に、その土地の特色に関して興味深い法則を発見した。

「土地の特色は、ある一点から遠くに行けば行くほど濃かったんだ」と、テイタは世界地図の一点である左端、つまり西端の真ん中を指差した。

そこから離れた土地、特に顕著だったのが東の地だが、そこにいる動物や土などの成分は、他では見られない特徴を持っていた。ところがある一点に近付くにつれ、その特色は消えて行き、色で言うと混ざりあつたような状態になって行くのだ。

そこでテイタは東の地にいる動物たちが進化、派生していった道を逆に辿っていくことを試みた。この土地に馴染み、特化した動物達はどこからやってきて、どのように進化していったのか。

無論、生物学とは縁遠い分野にいるテイタには、その作業は困難だったが、ここは魔導研究所、あらゆる分野の研究者や資料が揃っているのです、その力を借りることで、テイタはある事実を突き止めることが出来た。

「世界中の動物達、特色の始まりは同じところからやってきているのね」

「その、世界の真西からか？」

リクが世界地図の端に置かれたままのティタの指に目をやって尋ねると、彼女はこくりと頷いて答えた。

「その通りさ。世界の全ての起源はこの一点にある。と言っても厳密に言つと、もっともつと西にあるんだけどね」

そう付け足しながら、ティタは世界地図から西方向に指を飛び出させ、その外側を指し示す。

「アンタは“ 始まりの聖地 ” の伝説を知っているかい？」

リクは首を振つたが、代わりにコーダが答える。

「世界の西の果て、遠く海を越えたところにある島の話でやしよう？ そこが世界の創造者の住まいだとかいう話スよね」

「よく知ってるじゃないか、随分マイナーな話なのに」

知る者が少ないと思っていいたらしいティタが少しばかり驚いたように片眉をあげる。

そして、ティタはファイルの中から一枚の紙を取り出してリク達に見せた。それは、古ぼけた古文書を模写したものらしく、古代語らしき見なれない文字の文章と共に、ある島の鳥瞰図ちようかんずのような絵が添付されている。

「これが、その『 始まりの聖地 』 シャン・ヴィトーラ』の伝説の根源となった古文書さ。ここには伝説にしちゃ割と具体的な位置が書かれてるんだけど、その位置は見事に一致しているのさ」

そこでティタは一旦言葉を区切り、口元になやりと笑みを浮かべ

て続けた。

「アタシが割り出した“世界の起源”の位置とね」

“世界の起源”の位置と、“始まりの聖地”の一致。その事実、その場にいた全員がしばし言葉を失った。

確証はない。そして、“始まりの聖地”の伝説には根拠もない。どちらの話にも間違っていないと言う保証すらない。しかし偶然の一致にしては、出来過ぎている話だ。

「テイタ殿、疑うようで申し訳ないのだが、その位置に島の存在は確認されているのでしょうか？」

「いい質問だが、答えは否だね。ああ、勘違いしないでくれよ？確認されていないのはその島が存在している事だけじゃない。その島が存在していないことも確認されていないんだ」

テイタの答えに、一同が揃って首をかしげる。

魔導文明の進歩に従い、造船技術も発達し、魔導器の助けを借りて推進する魔導船はたとえ大きな嵐が来たとして沈まない頑丈さを備えている。地図からはみ出すほど遠い島とはいえ、魔導船なら楽に渡りきれはるはずだ。そうでなくても近くに寄って確認するくらいできてもおかしくない。

そんな一同の疑問を予想していたのか、テイタは小さく笑って答えた。

「この位置の近海は“不思議の地”なのさ」

“不思議の地”、大いなる魔法に影響され超自然的な現象が起こる地を指す言葉だ。

例として挙げるとすれば地面が突然隆起し、その上にいるものを

空高く放り投げる『アップカート高原』、永遠に渦巻き続ける湖『スクル湖』、木々が放電している森『シャンドの森林』などが有名である。

“不思議の地”には大抵クリーチャーが徘徊していること、何がどんなタイミングで起こるか分からないことで危険な場所として恐れられている。そしてそれらの土地を調査する仕事をしているのが冒険者であり、その大半が腕の立つ魔導士なのだ。

「この位置を囲むようにして、その先が全く見えないような濃霧が発生してるんだ。たまにそこに入り込む勇者もいないじゃないけど、半分は帰ってこないし、帰ってきてても巨大な海生クリーチャーに襲われて命からがら逃げ出してくるもんだから島の影を確認する余裕はない。それにあの濃霧じゃ方向が分からなくなるらしくてね、霧に突っ込んで、運良くクリーチャーに出会わなくてもいつの間にか別の場所から出てきてしまつらしいのさ」

ティタの説明にリクは納得し、自分の行く先にどれほどの困難が待ち受けているのか、その一端を見たような気がした。

しかし、それと同時に思ったことがある。

「でも、信憑性は高い」

「そうだね」と、ティタも頷いた。

ティタの割り出した“世界の起源”と伝説の語る“始まりの聖地”の位置の一致。

そしてその位置を“護っているかのように”発生している不思議の濃霧。

これらの事実は、ティタの話が真実だと主張しているかのように見える。

「呆れたね……そうと決まったわけじゃないって念を押してるのに、行くっきゃないって顔してるよ」と、テイタが苦笑する。

「今のところ、そこしか手がかりがねえんだろ？」

明らかに興奮していた。“大いなる魔法”に繋がる唯一の道。今まで誰も踏み込んだことのない“始まりの聖地”。世界の大きな謎が自分の目の前にあると思うと、心が落ち着かなくなる。

そんなリクの様子を見て、テイタは何もかも吐き出し切ったような、安堵の表情を浮かべてファイルを閉じた。

「リク、はつきり言っておくけど、アタシはまだアンタを信用しきったわけじゃない」

「え？」

リクは意外そうな反応を示す。信用しきったわけではないのなら、何故“大いなる魔法”の情報を明かしたのだろう。

「誤解しないでくれよ。やり遂げられないって思ってるわけじゃないんだ。逆に何があってもまた立ち上がれるとは思っ」そこでテイタは言葉を区切りリクから目を離し、その周りに視線を配ってから付け足した。「仲間がいればね」

今回の騒動の中で、リクは一度ダクレーに盛られた毒に倒れ、“死出の道”を彷徨^{ウロウロ}う羽目になった。彼に仲間がいなかったら、そこから生の世界に戻ることはなかっただろう。しかしジェシカやカーエスが禁術破りをし、フィラレスがその想いをもって彼の命を繋ぎ止めてリクは“死出の道”から生還した。

そして、ディオスカスを倒し、研究所内のクーデター勢を片付けたところで現れた新たな敵、“ラ・ガン”の一人グレン＝ヴァンタ

「ウオンリルグに守り通したはずのものをもって行かれそうになった時、今度はリクが助けに来た。」

仲間がリクを助け、リクが仲間を助ける。その実例を見せられた時、ティタはリクに“大いなる魔法”の情報を明かすことを決心したのだ。

「アタシが信用に足ると思ったのは、アンタだけじゃない、アンタの周りの仲間も含めての事なんだ」

ティタの言葉に、彼女の前に並ぶ五人は、同時に顔を見合わせた。

「行く時は必ず仲間をつれて行きな。これは“大いなる魔法”に挑戦するための条件だよ」

その言葉に、リクはもう一度密かにカーエスとフィラレスの姿を盗み見た。

「百八十九……！ 百九十……！ 百九十一……！」

昨日一杯休め、筋肉が固まりつつある身体を少しほぐしておこうと、魔導学校の訓練場にやってきたジェシカの耳に、聞き慣れた声が入ってきた。

（カーエス……？）

少し興味を覚えて、その声を追い、聞こえてくる基礎訓練室の中を除いてみると、カーエスがたった一人、片手での腕立て伏せをしていた。それだけではなく、彼の周りには魔力で構成したのである。光玉がいくつか宙を泳いでいる。

それら一つ一つの光玉は火に包まれていたり、水滴の中で光っていたり、つまり別々の属性を持っているのだが、どうも不安定で光玉の動きもどこかふらふらとしたものになっている。

それを行っているカーエス自身は、顔中玉の汗をびっしりと浮かせて、必死の形相をしていた。

「百九十七……！ 百九十八……！ 百九十九……！ 二百！」

途端にカーエスはばたつと床に倒れ伏せ、しばらくその体勢のまま荒い息を続ける。ジェシカは、そんなカーエスに歩み寄り、元々自分用に持ってきた汗を吹くためのタオルをカーエスの上に被せてやった。

いきなり天から降ってきたタオルに、カーエスは目を丸くして顔をあげると、そこにあつたジェシカの顔を見て、更に目を見開く。

「……今日は午後の外出は控えとこーか」

「第一声がそれか。しかも何だその微妙に遠回しな表現は」

少し身体をほぐすだけのはずなのに、何故か持ってきていたスパアをカーエスの喉元に突き付けると、彼は慌ててうつ伏せの状態から飛び起きて座る。

「いやいや、嘘、嘘！ おーきにありがと大感謝」と、カーエスは慌てて礼を言つて顔を覆っている汗を拭き取る。

その様子をじっと見ていたジェシカはふと尋ねた。

「随分熱心だな、いつもやっていたのか？」

「いや、昨日からやな、始めたんは」

肯定されればそれなりに見直しただろうが、その答えはそれよりも驚きを大きくする。

「昨日から、だと？」

あれから一日はさんだ今日でさえ、このようなハードな訓練をしていることに驚いたのに、翌日である昨日もこれをやっていたというのか。

次にジェシカの胸に沸き上がった感情は呆れだった。

「馬鹿か、お前は。疲れている身体で訓練をしようと思える気力は買うが、あれほど魔力と体力を酷使した翌日にそんな厳しい訓練をしていたら、能力を鍛えるどころか身体を壊しかねないだろう。力の回復も遅くなる」

「でも今しかないんや」

言い訳する子供のような返事に、ジェシカは眉をしかめた。

「何がだ？」

「リクが訓練せえへん日。今だけがちょっとだけ追い付くチャンスなんや」

カーエスの答えに、ジェシカは意外そうに目を少し見開く。そんなジェシカの態度を知ってか知らずか、カーエスは少し遠くを見るような目で続ける。

「……数日前まではもうちょっと互角に闘えるくらいの差アやと思つてたんやけどなあ。一昨日のリク見たら、随分差ア付けられた思つたよ」

ファトルエルの大会で、リクは“魔導眼”をもつカーエスにとても苦しめられたと聞いているが、大会中のリクと、大会後のリクでは全く強さが違っている。レベル4以上の魔法が使うようになってるのだ。しかも軽々と。

いくら“魔導眼”持ちで魔法の先読みが出来るからといって、対グレン戦のリクのように威力の高い攻撃で攻め続けられれば、その対応に振り回され、あつという間に決着が付いてしまう。はつきり言つて、もう勝てる気がしないのだ。

今まで、適わないと思つた人間などいなかった。師事したカルクでさえ、いつかは超えられると思つている。

だから、憤りを覚えた。

一昨日のリクの戦闘力を見た時、あそこまでは強くなれないと思つてしまったから。素質の不平等に、そして、闘わずも負けを認めてしまった自分自身に。

「だから、せめて努力してちょっとでも強うなって差ア詰めたろうと思つたんや。ほしたら、また逆転できるような気がして来るかもしれへんよって」

夢、とまではいかないかもしれない。しかし目標を定め、しかと己の道を見据えたカーエスの顔つきは、ジェシカの目に好ましく写つた。そして、先ほどから気になっていた事を尋ねた。

「これから、どうするのだ？」

余りにも具体性を欠いた質問であるが、カーエスにはそれで通じ

るはずだ。つまりリクに付いて行くか、それとも魔導研究所に残るのか。

ファトルエルの大会が終わってから十日、彼等五人は一つのグループのように行動していたが、カーエスとフィラレスは元々魔導研究所に帰るための道程であり、リク達と偶然方向が同じだっただけなのだ。

固唾^{かたす}を飲むような緊張をもったジェシカの視線の先で、カーエスはあっさりと答えた。

「何言ってるの、付いて行くに決まってるやん」

「……何のためにだ？死ぬかもしれない旅なんだぞ？」

ジェシカとコーダは元々リクにどこまでも付いて行くことを決めていた。しかし、カーエスやフィラレスはそうではない。何の目的もなく、半数は戻らないような危険な地に踏み込むことが出来るのだろうか。

「今言っただけじゃあ、少しでもリクに近付く。ここに留まって訓練したから、どれだけ強くなれるかなんてたかが知れとる。

死ぬかも知れへんギリギリのところこそ、一番実力が伸びるんやし。それに……」

「……それに？」

意味深長に途切れた言葉を促すようにジェシカが問うと、カーエスは彼女にタオルを返して立ち上がった。

「それに、俺もお前と同じ、アイツの夢の行く末を見届けたいんや」
「……そうか」

返したのは一言だけだったがジェシカは、引き締めていたはずの

自分の口元がわずかに弛ゆるんだことに気付かなかった。

その夜、荷造りを済ませたジェシカはフィラレスの寝室の扉の前にいた。ノックをするために裏返した拳を胸元まで上げているが、それで扉を叩くまではしていない。

ジェシカは考えていたのだ。フィラレスをどう説得するか。

リクの行く先が危険な場所だからといってフィラレスが尻込みする、と考えているわけではない。フィラレスは口を全く聞かないが、その反応は素直で何を考えているかは分からないが、どんな感情を抱いているかは、口で話されるよりもよく分かる。そして、彼女は割と自虐的な考えを抱いていることも。

力のある方ではないし、かといって料理が出来るわけでもない。はつきり言ってしまうえば、役に立つ要素がほとんどなく、そして人一倍人に気を配る性格のフィラレスはそれを自覚し、気にしている。いつも迷惑を掛けているのではないか、世話になりっぱなしでいいのだろうか、そう考え、遂には自分がない方ではいいのではないかと考えるだろう。

それでもジェシカはカーエスまで揃った今、フィラレスはなおさら欠かせない存在だと思っていた。

(リク様に頼めれば簡単だったのだろうか)

フィラレスが想いを抱く彼が誘えば、迷いもなくついてくるであろうが、リクは危険な地に誘うのに気が引けるのか、今回は積極的

に誘うことをしていない。

(……………ええい、行つてしまえ)

更に数秒躊躇ためらつた後、ジェシカは扉をノックする。しかし声が帰ってくるわけではない、口の利けないフィラレスは、返事を返せないので入ってもいい時は自分で開けに来る。

しばらくした後、少し慌てた様子で扉が開いた。立て込んでいたのか、ジェシカをこれ以上待たせれば申し訳ないといった風情だ。

「少し、話があるんだ。中に入ってもいいだろうか」

何の用だろうか、と首を傾げるフィラレスに、ジェシカは何故か緊張を感じながらそう切り出した。

すると、フィラレスはこくりと頷いてジェシカを中に入れる。

導かれるままにフィラレスの寝室に入ると、ジェシカは強い違和感を覚えた。彼女の私室に入るのは初めてだったが、彼女のイメージにそぐわないものがあつたからだ。

その部屋は散らかつていた。普段からにしては散らかり方がおかしく、整理の為に一度棚やタンスに入っているもの全てを出して、片付け直している途中、といったほうが当てはまるだろうか。

部屋を見回す途中で、ふとフィラレスの寝台に目をやり、そこにあるものを見て、ジェシカは全てを理解した。

旅に使うための大きな鞆かばんである。

「あはははは、なるほどなっ!」

フィラレスは部屋を整理していたわけではない。旅に出るために

荷造りをしていたのだ。

自分の心配が、全くの杞憂きゆうであったことに気が付き、唐突に笑い出したジェシカを、フィラレスが驚いた顔で見つめている。

そんなフィラレスの視線に、ジェシカは心に沸き上がる嬉しさのままフィラレスを抱き締めた。

いきなり抱き締められたフィラレスはさらに驚きに目を丸くするが、すぐに彼女も嬉しそうに微笑むと、ジェシカの背に腕を回した。

翌日黄の刻（午前九時）、ようやく運行を再開する魔導列車の駅にはリクと、その仲間達四人の姿があった。リク達の背には“自由都市”フォートアリントン行きの魔導列車が魔導器の運転を開始している。

リク達が向かうのは西のはずだが、彼等が今から乗り込もうとしている魔導列車の行き先であるフォートアリントンはエンペルファータの真北にあたる。しかしコーダ曰く、西に真直ぐ向かうよりも一度北上してフォートアリントンから西に延びている街道を通った方が、食料等の補給の面からも格段に楽な旅になるらしい。

移動手段に魔導列車を使うことを提案したのも、意外にもコーダだった。三度の飯よりサソリを乗り回している方が好きな男のその提案にはみんなで驚いたものであるが、たまには楽をしたいのだとコーダは答えた。

そうして、今目的を果たしてエンペルファータを離れようとしている五人の前には、ティタやミルドを始めとした、魔導研究所で知

り合った者達が見送りに来ていた。

「これ、弁当や。ちゅうても昨日の残りもんの詰め合わせみたいなモンやけどな。今日の昼飯にで食ったってや」

そう言っつてジッタークがカーエスに差し出したのは布に包まれた大きな長方形の入れ物である。どうやら弁当箱を何重にも重ねたものらしい。

「おーきに。これからはしばらくおっちゃんの西方料理も食われへんようになるから有り難いわ」と、カーエスは嬉しそうに礼を言いながら、それを受け取る。

残り物とはいえ、昨日の料理は豪勢なものだったので、いろいろ美味しいものが入っているはずだ。

カーエスも自分で西方料理が作れないわけでは無いが、道中ではろくに道具も材料も手に入らないし、やはり年季が入っているだけにジッタークの作ったものの方が本物の西方料理という感じがするのだ。

「危ない場所に行くんだ、死ぬなどは言わないけど、最後まで生きることが諦めちゃ駄目だよ。手足の一本や二本無くなっても、帰ってくれば後はアタシが面倒見たげるから」

「また縁起の悪いことを……」

テイタの言葉に、リクが苦笑する。

次にその隣に立っていたミルドが、フィラレスの肩に手を掛けて言った。

「フィリー、僕の研究の事は気にしなくてもいいよ。君は自分で“

滅びの魔力”を制御することに決めたのなら、僕の出る幕は無いんだから」

魔導制御を専門に研究する彼が、その一環として“滅びの魔力”の研究を始めたのは制御しきれない強大な魔力をその身に宿してしまったフィラレスが、人々を傷つけることを恐れ、その魔力を消してしまふことを願っていたからだ。

だからミルドは、自分の研究の全てをこの研究に注ぎ込み、滅びと名付けられた魔力を封じ、フィラレスがそれ以上悲しみを重ねないようにしてやりたかった。

だが、今は事情が違う。彼女は“滅びの魔力”を制御し、その力を使って人を助けることに目覚めた。そして、忌^{いま}わしかったはずの魔力で、人々を救いながら共に生きていくことを決心したのだ。

それならば、ミルドの研究はもはや続ける意義がない。

フィラレスはこくと頷くと、ミルドに微笑みかけてふわりと抱き着いた。

少し驚いたものの、ミルドも軽く抱き締め返す。

「何も気にせず好きなように生きなさい。君を縛るものはもう何も無い。君は自由なんだ」

答えるかわりに、フィラレスはミルドの背に回した腕に強く力を込める。

ミルドもそれに一度応えようと、二人はどちらからともなく離れ、ミルドはフィラレスの顔を覗き込むように言った。

「行ってらっしゃい」

フィラレスはこくりと頷いた。

「そろそろ時間でやスね」

魔導列車に搭載された魔導器が発する音が一際大きくなり、コーダが時計を確認して言う。それと同時に伝声器が、まもなく列車が発車することを知らせた。

五人が名残惜しく見送りに来た面々から目を離さずに列車に乗り込むと、列車の発進を伝えるブザーが鳴ると共に扉が閉まる。

ついに魔導列車が動き出しても、リク達は入り口の傍に留まったまま、ティタ達と頷き合い、手を振って別れを告げた。

ティタ達の姿が完全に視界から消え、列車がエンペルファータを出る頃、リク達はようやく座席に着いた。色々あっただけに、エンペルファータを離れることに感慨を覚えているのか、座席に着いても誰一人口を開こうとしない。

特に、カーエスとフィラレスにとっては長い年月をここで過ごし、育ってきただけあって、その思いもひとしおだろう。

他の一同が黙って窓の外に流れる景色を眺める中、リクは一人改めて自分の旅に付き合うことになった仲間達の面々を見つめていた。

「……なんやねん？ 人の顔を嬉し気に眺めよって」

リクの視線に気付いたらしき、カーエスが振り返って怪訝けげんそうな

表情で尋ねる。その言葉に、フィラレス、ジェシカ、コーダも視線を窓の外からリクに移す。

全員から注視され、照れたように顔を赤くしながらリクは口を開いた。

「その……みんな、ありがとな」

突然礼を言われ、四人は訳が分からない様子で顔を見合わせる。それを察したリクは、慌てて説明をする。

「ほら、これは俺の旅だからさ、俺の我が侘で危険に付き合わせるわけには行かなかったんだ。……でも本当は、俺はこの五人で行きたかった。テイタは“大いなる魔法”に挑戦する時は仲間と行けって言ったけど、俺は仲間と言えばこの五人以外は思い付かない。だから、付いてきてくれるって聞いた時、嬉しかったんだよ、本当に」

彼等と出会ってからまだ二週間経ったばかりだが、共に経験したことは数年分にも余る。ファトルエルやエンペルファータでの騒動、そしてエンペルファータまでの旅を通して培った関係は、今やリクにとってかけがえのないものとなっていたのだ。

今ここで彼等と別れても新しい出会いはあるかもしれない。しかし、リクは半ば確信していた。自分が信頼できるのは、命を預けられるのは、この四人しかいない、と。

「だから、ありがとう」

改めて礼をいうリクに、真っ先に応えたのが、彼の隣に座っていたフィラレスだった。少しリクの袖を引っ張り、自分に注意を向けさせると、首を横に振ってみせる。

「フリー……」

「礼なんぞ必要無い言うことやな」

フィラレスの逆隣に座っていたカーエスが訳すと、向かいの座席に座っているジェシカが付け足して言った。

「私達も同じなんです。私も、もっとこの五人で旅していたい」

「俺らは好きで付いて行くんすから、兄さんは気にしなくていいんすよ」

それぞれ返す言葉と共に投げかけられた四人分の微笑みに、リクも満面の笑顔で応えた。

「そっか」

言いたいことを言えて、ほっとしたのだろうか照れくさそうな笑顔に安堵の色が混ざったリクに、カーエスが意地の悪い笑みを口元に浮かべる。

「それでも感謝したいって言うなら、感謝されたってもええんやで？　こんなしおらしいリクも珍し……」

言葉が途切れたカーエスの首元には案の定、ジェシカの槍が突き付けられていた。

「貴様もたまには茶化さず済ませられんのか」

「む、無理やな。“どんな時も笑いと共に”がオワナ・サカ人のモットー……」

カーエスが、無謀にも槍を突き付けられている状況で反論に出る

と、ジェシカは突き付けた槍に更に力を込めはじめた。

「ちょ、これシャレになってへんと思うんやけど!？」

「“どんな時も笑いと共に”、だろう？ さあ、笑え。遠慮なく。痛快に」

「ここっ、ここ車内っ！ 他の人の迷惑っ！」

今にも喉を貫き通さんとするが如く、力を加えられて行く槍に、カーエスが抵抗を試みるが、「行けえ、姉ちゃん、やっちまえー」「面白えぞー、もつと続けるー」と、他の乗客はジェシカを止めるどころか、面白がって煽り^{あお}はじめる。

「んな無責任なこと言わんといてー!」

「いい余興だな」

「車内はとかく暇つぶしに事欠きやスからねー」

いつもは二人の喧嘩を止めるリク達も、今回は高みの見物を決め込み、駅で買ってきた菓子を開きはじめた。

その騒ぎは、さすがにいたたまれなくなったフィラレスが止めるまで続き、その後は周りの乗客と意気投合した五人は笑い声と共にフォートアリントンに進み続ける。

リクはふと窓の向こうに見える景色を見遣った。

この列車は現在北上している最中、よって左側のこの窓は西向きだ。

窓から見えるのは地平線までずっと広がる草原、そのさらに向こ

うにはリクの目指す“始まりの聖地”シャン・ヴィトーラがある。
まだ誰も見たことも無いその地が自分の視線の先にあるのかと思つ
と、リクの心が自然と高鳴る。

そこに待っているのは想像を絶する困難かもしれない。

もしかしたら存在さえしないのかもしれない。

それでも、リクはそれらを乗り越えて行けると思った。

みんなと一緒になら、いつかきつと全ての向こうにある自分の夢に
辿り着けると。

魔法使い達の夢 第二部 ーエンペルファー

夕の魔導研究所 ー 完

46 『目指す場所は』（後書き）

これで第二部は終了です。ご愛読ありがとうございました！

アルファポリスのファンタジー小説大賞も本日で終了です。ご協力くださった方々には深く御礼申し上げます。

（まだ今日一日投票やっているの、もしよろしければ清き一票を！）

現金な話で申し訳ありませんが、この作品は本日より更新停止とします。

第一部のような週間連載より太く短く毎日更新のほうが喜ばれるようです。第三部は区切りがたくさんある内容なので、年末などの機会があることに連続更新、という形で連載しようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0483r/>

魔法使い達の夢

2011年9月30日10時29分発行